
夢見頃に星を眺めながら ~ had a dream a star look at. ~

飛雅 弓耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見頃に星を眺めながら
I had a dream a st
ar look at ;

【Nコード】

N9024L

【作者名】

飛雅 弓耶

【あらすじ】

ここは俺、K'ら芸能人と一般の人達が暮らすコロニー0010。俺と彼氏(?)である京は、マスコミにバレないように付き合っている。京と付き合う最初の頃は、幼馴染で芸人のマキシマに告白されて困っていたしそれにレオナちゃんが妻子持ちのキムさんにレイプされて大変だった。神楽さんから、自分が『姫』の転生した姿だって知った時はちょっと驚いたし京自身が力の覚醒と一緒に女の子の体：珠洲になってしまったりしたりしたけど、それでも結局京

の事が大好きなのは変わらなくて…。そんな中事務所の同期の八神さんカップルとの不条理なHやテリーさんやソワレさんにレイプされて、京自身のトラウマは酷くなっちゃってフラッシュバックまで起こしてしまった。ある日八神さんが、神楽 ちづるさんの双子の姉であるマキさん殺害容疑の参考人として警察に連行された。俺や京・八神さんの彼女である紫苑さんは、八神さんが人殺しなんて絶対にしないと信じているんだけど警察の人達は信じてもらえずに八神さんが怪しいと思ったままで…。しかも、そこには京の父親で警視庁・警視の紫舟さんと会う事になってしまった。八神さんにはちゃんとしたアリバイがあるのに、警察の人達は疑っている状態のまま俺らで犯人を見つけ出さなきゃならなくなって八神さんは、全面的に無罪って言うか冤罪なのに…。そんな中、京のトラウマが原因ですれ違いが起こってしまった…。何とか説得して笑顔は取り戻せたけど、今度は俺自身がモヤモヤしてしまった。京の相方の亮さんからこれまでの事件ともやもやの原因である前世の記憶が関係があると、知らされてまた驚いた。前世の記憶で、悲しい事ばかりの記憶がぐるぐるるとリプレイして来て京も辛かったんだなあとと思った。正月を迎えて多忙だった時、ビリーさんが何者かに殺害された。急な出来事でビックリして、ちよつとてんばってしまった。八神さんが、警察署から帰ってきた。紫苑さんは喜んで、これで一応幸せになったのかなあって思った矢先クリス・拳崇の妊娠騒動やパオが強姦された事・ラッキーさんが殺害された事が次々と起こってしまった…。

連載始まりました。

ちよつとやらしくてなんですが、誰でも楽しめる内容になっています。(3)ノ

よろしく願います。

ざつくりとしたストーリー

主人公は京で、ヒロインはK'。マキシマとの恋の決着や京と付き合い始めた頃などの事。

京の方から、「付き合ってくれ。」って言われた時は正直ビックリした。もちろん嬉しかったけど、いきなりの事だし京の事大好きだよ。大好きだけど、大好きだけど…何か複雑だよ。

「本当に、俺：なんかで良いの？」

学校帰りに京きょうに告白され急に驚いた俺：K'（ケイダッシュ）は、
問いを問いで返しちゃった。

「そりゃ、お前がユキの体も…人格として持つて持っているって神楽から
聞いた時はさすがに大声出しそうになったんだ。でも、ユキも大好
きだしK'（お前）だって好きだから…。」

俺の体とユキちゃんの体が同じになってしまったのは、敵が攻めて
きた時だ。あれからマキシマには、無理矢理体の関係を結ばれて…。
しかも矢吹（真吾）がアマテラス（プリンス）で俺が櫛名田姫フリンセスの転
生した姿だつて神楽かくらさんから聞いてこつちだつて驚いたんだから。
記憶の覚醒も力の方も、まだ覚醒してなかった時期だったから。

「俺が京の事、嫌いになる訳ないじゃん。俺がマキシマに犯されそ
うになった時に助けてくれた事感謝しているから…ありがとうね。」
俺がそう言つと、京が理性を保とうとしているのがすぐに分かった。

「K'…お前、無自覚すぎるぞ。ただでさえ、可愛いのに…。」
仕方ないじゃん。京が俺を照れさせるような事言つんだもん。

「思わず、襲いそうになつちまつたじゃねえか。」

「京にだったら、襲つても良いし最後までHして良いよ。」

京が俺に抱きついて来たのを確認して、俺も抱きつき返した。

「俺：京にだったら、初めてロストバージンもあげても良い。だつ
て俺がこんな気持ちになつたのは、京が初めてだから。」

俺もつられて、照れて京の体に顔をうずめる。

「だから、京だつて俺の事：めっちゃめっちゃにして良いんだよ。京の
だったら、最後まで受け止めたいから…。」

京だったら、最後までされたいって思ったしマキシマにされるより
も京にされた方が良いと思つたしこれ以上誰かとHなんてしたくな
い…。

「俺は、京の事：珠洲すずの事：大好きだよ。」

そう言つて、俺は京にもたれかかってHして目が覚めたのは午後
2時半をまわつていた。

部屋の一番奥にいる拳崇ケンスウに「にやり顔」をされるのが分かつていたし、多分拳崇自身もアテナちゃんと一緒にいると思つたから。

「あれ？K'くん、草薙さんと何か話していたの？」

アテナちゃんが一人で買い物から帰つて来たのを見た俺は、拳崇が
どんな状況なのか知りたかつたし今拳崇がどこにいるか…。

まさか男ver.（元の姿）じゃなくて、女の子の姿ver.でロバ
ートさんの所へ行つてたりして…。

まあそうなつていたら、返つてニヤリしてやるけど…。

「ちよつとね。それより、拳崇は？今から寮に戻るから、聞きたか
つたんだ。」

何で俺もそこで、可愛くなるんだよ。アテナちゃんだつて女の子
なんだよ。肝心な京はまた理性を崩壊させようとしているし…。

「拳崇なら2・3分前に女の子ver.なつて、ロバートさんの所
に行きましたけど。」

「（にやり）アテナちゃんは拳崇が女の子ver.のままロバート
さんのものになつたつて良いの？」

アテナちゃん自身も、拳崇の女の子ver.には反対らしい。そり
やそうだよな、俺自身が女の子ver.だから京が告白するのに時
間がかかつたと思つたし…。

「だつて拳崇自身が言つていたけど、『女の子ver.も元の姿の
俺とは別や』つて言つてくれたし…。」

アテナちゃんは、拳崇の事を信じているんだ。

なのに拳崇は今ロバートさんと関係を持つていると思つと、ちよつ
とむかついて来て…。

「アテナちゃんが信じているのに、肝心な拳崇が誰かと関係を持っ
ている事に腹立つているんだよね。」

別に拳崇が悪い訳じゃない。それは分かっているのに、ムカムカとした感情はなんだろう・・・。

相手が、ロバートさんだから!?

何で俺も、ロバートさんに敵対心燃やしているんだか。^{ライバル}

「それに拳崇つたら、夜になると凄く激しくて朝まで何回もHして来て私が完全に気絶するまで中出ししてくれないしキスや胸はちやんとしてくれたりもまれたり…。こないだなんて、イッたのは良いんだけど前見せの状態で中に出すんだもん…。私、嫌でも壊れちゃつて…。」

まだ京に比べたら、ましな方だつて。

だつて京の場合は、前見せでHするのは日常茶飯事だし俺を上に乗せてHして声が出せない状態までHするんだもん。

「俺も人の事、言えないけどよ。拳崇つて、そんなに激しくするんだ…。」

何、京までにんまりしちゃってんの？京だつて、人の事言えないのに…。しかも、俺が次の日歌番組の仕事だつて言う時に限つて朝までHするから声出せなくなっちゃうんだから。

テリーさんには、心配かけらせちゃうし…。

そう言えばこないだ、番組のプロデューサーの男の人とバイスさんが『さし入れ（おみあげをスタッフなどにあげる事）』用のテーブルの上で（まあ、このテーブルは使つてなかったけど…。）Hしていたのを見ちゃつて…。俺一人でバイスさんが、中出しされる所まで見ちゃつたから後で気まずかつた…。新しい衣装に着替えるまで、バイスさんの服は乱れていて…。

正確に言つたら、レイプ同然で俺自身も止められなかった。

バイスさん達と所属している事務所が違つし、マスコミにも言えなかつたから寮に帰ると同時にショートしちゃつた。

拳崇がいたから部屋まで運んでくれたつて、京に聞いた時は驚いちゃつた。これで男ver.（元の姿）だったら、もうちょっと見た

かつただけどなあ。

でも、バイスさんの胸の動きと感じている声&イキ声・イキ顔を見ただけでも良いか。

まるで、AVを見てるみたいでさ。

「京だつて、俺がユキちゃんになつていいる時にさ服もやぶつちやつし散々胸だつてもんでいいるから胸大きくなつちやつただよよ?」

俺が少しむつとなつていいるのを見た京が苦笑しちやつた。

「だから、ごめんつて。それにしては、K…お前だつてすごく感じてたじゃねえか。」

確かにそうなんだけど、ここで言う事ないじゃん。

「K…くん?」

俺が少し落ち込みかけていたから、アテナちゃんも苦笑して…。

「アテナちゃんの前でそんな事、言わないでよ。」

まじで恥ずかしくて、今にも憤死しそうになるのに…。

「K…くん、耳赤くなつちやつたよ?」

京の後ろで顔をうずめているから、それに気付いた京。

「もしかして、Hする気になつた?」

もうっ。だから、アテナちゃんの前で言わないでよ。

「京のHっ!!」

俺が頬をふくらませているのを見て、京が俺を押し倒している。

「アテナちゃんがいるのに、何でここでHしようとしてるんだよ。」

場違いだと思つたのか、その場から離れるアテナちゃん。

本当、京つて性欲強すぎる。すぐに、抵抗出来なくなつたじゃん。

結局、京に良い様にされて京のを飲み込んだままイッてしまった。

「もう…京のバカあ。何も、最後までする事ないじゃん…。俺…何か恥ずかしいし、初めてなんだから…責任…取つてよ…。俺のイキ声、ロビー中に響いちやつたよ…。」

最後のイキ声を出す時に、危なくショートしそうになつて目がトロロンとなつていつの間にか京を求めちやつて…。

これじゃ、マキシマとやっている事…一緒だよ。

まさか京がこんな事するなんて思わなかったし、正直ショックが大きくて涙が止まらなくなる。

「しかもアテナちゃんまで、どっか行っちゃったから…。」

涙が止まらなくなっている俺に、京が分かったのか俺に抱きつく。

「ごめん…。あんな事、しっちゃって…。」

俺が泣き出しちゃって、京も苦笑しちゃっているのは分かっているけど京が悪いのは事実だから何と少しでも謝ってもらわなくちゃ。

「これが、八神さん達に見られたら、京のせいだからね。」

京と八神さんが仲が悪いのは知っているし、八神さんは紫苑さんと付き合っているのを知っているから…。

それに俺、八神さんと紫苑しおんさんが楽屋でHしちゃっているのを見ちゃったし…。毎回中に出されちゃってるから、よく妊娠しないよなあ…。人の事、どうでも良いけど。

「ごめんって…。」

京が謝ってるのを見て俺も安心したけど、帰って八神さんカップルに見られた。

「草薙さんも、尻に敷かれるタチなんですね。」

紫苑さんは俺より一つ下で、今や売れっ子アイドルの一人だ。多分アテナちゃんと人気を二分するんじゃないかなあって思ってる。八神さんだって、京と同じ俳優ですごく人気があって…。

もちろん、2人が付き合っているのを知っているのは俺達だけ。

ファンの子とかマスコミの人にばれたら、ヤバイって分かっているしストーリーみたいについてこられても困る。

「K、くんだから言うけど、草薙さんって普段どうなの？何か噂で聞いたんだけど、結構ギャップあるって言ってたし。俺は、どっちも草薙さんだからどっちでも良いんだけどよ。」

八神さんに寄り添っている状態で、男言葉使わないで下さい。

でも、普段の京ってすごくエロくて寮の部屋に着いた途端にHして

来るからいくら好きでも体が持たないよ。

「俺なんて、普段もこんな所でもHしてくるしすごく恥ずかしい思いしてるんだよ。こないだなんて、マネージャーさんにHの最中を見られたし楽屋のドア開けた瞬間にイキ声出しちゃったんだから。」
だって、紫苑さんのイキ声とかHしてる顔とか見るとすごく可愛いくてまるでAVみたいになってる時に限って買い物に行くのに通るからにやり顔で通り過ぎる。紫苑さんは、口調が男だけど体は女の子なんだなあって思う事がある。

「それに、Kくんが買い物に行く度にHしてる光景見ちゃってるんだよ。恥ずかしくて、今でも隠れなくなっちゃうし...。」
しかも恥ずかしがっている時は、やっぱり女の子なんだなあって思うけどその紫苑さんはそれを否定してる。

「そう言うの、手当たり次第って言うんだよ！俺が妊娠したら、俺は責任取ってくれるの？まさか、そのままポイってするって無いよね。それだったら、マジで最低だよ。」

紫苑さんが少し不機嫌になっているのを見て、八神さんも苦笑しちやってる。

ざまあみろ。

「責任は、取るよ。無責任で言ったら、俺がシエルミーに殺されるよ。」

シエルミーさんのオロチモード（裏の顔）は怒らせるとすごく怖くて、俺も京もさからえない。しかも、紅丸さんとグルだから...。
それはもちろん、八神さんにしても同じで...。

「お前だって、シエルミーが怖いじゃねえかよ。」
京がすこしブルブルと身震いをしているのは分かったんだけど、何で八神さんをムツとさせる事言うのかなあ。でも、俺も紫苑さんもびびってしまったって紫苑さんなんか大泣きしちやっただから...。

「てめーには、言われたくねえなあ。」

「2人とも止めてよっ！」

大泣きしている紫苑さんを見て、八神さんは慌てて紫苑さんを抱きしめた。

はたから見て、すぐくラブラブなんだなあって思ったんだけど今はそんな事も言っつてられなくて…。

「俺…争う事とか大嫌いなのに、俺と草薙さんが喧嘩してたら意味ないよ。それに、他の奴らにも迷惑かけちゃうしさ…。」

紫苑さんの言っている事は、俺にも分かる。

「ごめん…。」

京と八神さんが謝ったすぐ後にどこからかあえぎ声が聞こえちゃってる。

声の主がアテナちゃんだった事が分かったし、ファンの子は立入禁止の紙をはがして入って来た。しかも、性欲のたしに犯かされているアテナちゃんを発見してしまった。

こんな状況を拳崇には、絶対に見せられない。しかも、2人の男の子のファンの子にいろいろされてマネージャーさんが呼びに来てもまだ止めなかった…。

その光景を見て一番怒っているのは、紫苑さんの方で俺だってその光景を見ちゃっているから同じ事を思っている。

「最低！」

京だって、俺が怒っているから心配している顔をしているし京だって八神さんにいちゃもんをつけるのは好きなのにこういつた事って大嫌いだもんなあ。

まあ、そんな所を俺は好きになってしまったし今だって大好きだよ。もちろん、八神さんだって同じ事を思っていると思っっている。

「最低なファンも、いるもんだなあ。」

さっきまで心配そうな顔をしていた京が少し怒った顔になっていて、八神さんは八神さんで紫苑さんを慰めている。

「こんなの拳崇が見たら、アテナちゃんが立ち直れないよ。」

溜息と怒りで怖がっている紫苑さんを見てびびってしまっているし…。溜息をしたいのは、分かっているけど…。俺だって、マキシマに無理矢理関係を持たされた時俺は立ち直れるのに時間がかかったし京だって知っちゃってシヨックが大きかったんだから…。

それに、アテナちゃんは拳崇一筋だって事知っているし俺だって京が何かあったら絶対に相手を殴ほこっているもん。

.....

夜空に光る月

↳

the night sky

moonlight

glows

夜空に光る月って、何だか凄くきれいで好きなんです。だから、何なんだって言っちゃえばそれまでですけど。^^:

.....

次回予告

マキシマ「本当に、京きょうと付き合う気でののかよ。」

K'「当たり前じゃん。俺、京の事大好きだもん。今更、何聞いてるんだよ。」

マキシマ「飽き性のお前が、良く人と付き合っつて事になったよなあ。しかも相手は自分の先輩だしさ。」

K'「飽き性なのと...京と付き合っつて事、全然関係ないよ。」

マキシマ「あーもう。何で、俺じゃなかったんだろっ。」

K'「えっ?」

次回、第二話

夕空ゆふぞらに染まる朝日あさひ

何で、京きやうと付き合あったって？

最初は、俺の所属しゆじゆしている事務所きんじよと京きやうの所属しゆじゆしている事務所きんじよが別べつだし今もだけど当時の京きやうの人気にんきが凄すごかったからライバルらいばるって言うか羨うらやまましかったんだよね。俺は、当時たうじそんなに売うれてなかつたし違う事務所きんじよだからそんなに敵意てきいが無なかつたし…。だけど、ある番組ばんぐみで一緒いっしょになる事が多おほくなって話わしていくうちに仲良なつかくなって一緒に遊あそんだりして気付きづいたら好きすきになっていったんだよね。

アテナちゃんが、フアンの子にレイプされてから1日が経った。

無事に拳崇とデートしているってユリさんから聞いてほっとした反面、あの事がバレないのかなあって思ってた部屋に戻ってもそわそわして落ち着かない。

京がそんな俺を見て、後ろから抱きしめて慰めようとしてる。そう言えば昨日あの後…。玄関でHして、風呂場やベットの上でもHしてしまっただっけ。京ったら、あんな事があつた直後だし普通やんないって思っていたのに油断してたもんなあ。しかも最後までして来るから、玄関なんてベトベトしちゃったんだから…。しかも、中に出して来るし…。

「K…アテナがあんな事になっっているのに、Hしてごめんな。」

「まったくさ。京だって昨日、一緒にいたはずなのに何で忘れているんだよ。おかげでこっちは、腰が痛いんだから。」

しかも、こんな所テリーさんに見られたりしたら何か…恥ずかしいよ…。

声の方は、やっぱり恥ずかしいって言うか壁が薄いからもろに聞こえていると思うしビストン音も聞こえていると思うとまた布団の中に隠れなくなる。俺自身も、本当に自爆してしまうし…。

「京、何で昨日Hしたの？今日、排卵期（Hダメ）だって言ったのに…。」

相手が京でも、何かショックとビックリで涙が止まらなくなる。

「K…?」

「京の事、好きだよ…。だけど、アテナちゃんがあんな事になっ…て…。京とHするのは嫌じゃないけど、何か複雑で…。」

何回もHして中出しして来て、感じさせたから大声でイツちゃったし…。だからって、何回もHする事なんてないし壊れるまでする事

ないじゃん。どっちにしても、京が中出しする事には変わらないけど。

今回の事もあるから一回だけでガマンって言うか嫌だって言ったんだ。

そりゃ京とHするのは大好きだし、3日続けてHしても良いって思っただけで俺自身、あんな激しく京から受けて中出しもされて感じちゃって…。

「ごめん…。一人にさせて…。」
京を1人部屋に残して、外に出た俺。

俺が部屋から出て、広場で休んでいたら事情を知っている紫苑さんと一緒にいたマキシマが俺に話し掛けて来た。

「K…じゃなかった、ユキちゃん。どうしたんだ？こんな時間に一人で…。」

紫苑さんが事情を話して少し驚いたマキシマだったけど、返って『にんまり』された。

まあ、こうなる事はうすうす分かっていただけ。
ん？紫苑さんが、制服着てる。

「紫苑さん。今日学校、行っただんですか？」

俺も何、すつとんきよみたいな事言ってるんだよ。紫苑さんは俺より年下だし今、中学3年で来年卒業を控えててこの時間にいつも帰って来る事は知っているから。こないだで、部活引退だから…。

「今日、仕事オフだったから。それよりも、草薙くさなぎさんと喧嘩ドンパチでもしたの？」

「喧嘩してないよ。ちょっと空気に当たりたいって思っていたし。」
紫苑しおんさんに、嘘を言ったってすぐにはれると思っただけでマキシマだっただけで『にやり』するって分かっているから。

マキシマは、本当にそういう奴だ。

八神さんが2時間ドラマの仕事が決まって、遠くへ行っているからってマキシマに頼んだから悪いだなんて言えないし…。

「もしかして、アテナちゃんが誰かにレイプされた事で草薙さんとHするのが怖くなったって訳じゃねえよな？」

少しむっとしている紫苑さんに俺は何も言えなくて、すぐに凶星だつて分かつちゃった。

「だったら、間違ってるぞ。草薙さんは、もしK？くんがアテナちゃんと同じ状況になったらどうするんだろうつて思ってると思うよ。」

「京が？」

俺が驚いた顔をしたのを見てさらに口を開く紫苑さん。

「おう。まあ、草薙さんの場合はいつものHが激しいから、そんな心配は無いと思うけど。」

そりゃそうだよ。散々指で攻めてきて、イキそうになると同時に入れてくるから壊れそうになってしかも中出しされるから気絶しちやっただよなね。

あれほど、生は止めてって言っているのに…。

「（にやり）そう言えば、昨日。あんた、草薙さんとHしてたでしょ？」

テリーさんじゃなくて、紫苑さんに聞かれてた…。

「そん時のあんた、凄く色っぽくて可愛いかったよ。イキ顔は見れなかったけど…。」

耳まで真っ赤になってしまった俺に紫苑さんが苦笑している。

「まあ、俺も人の事言えないし俺は草薙いおつさんと違ってイキそうになつても激しくしてくるし気絶しても激しくして来るんだもん。もちろん中出しもしてくるし…って、何言わせるんだよ！」

俺に八つ当たりして、怒らないですよ。

自分で、Hの事言っただじゃん。

自爆しとして八つ当たりしないですよ。

「（ぜーはー）こんな所にいたのかよ。俺、心配で心配で探していたんだぞ。」

京が、息を荒くして俺の所へ来た。

「悪いのは、俺の方だつて分かつてる。真近であんな光景を見ちゃつてるから、Hしたくないつて言うのも分かつてるから。なのに俺は、お前の気持ちも分からないで無理矢理Hちゃつたし…。これじゃ、マキシマがやつた事と変わらないよ。」

京の気持ちも言いたい事も、俺には良く分かるよ。

「けど、少し言い訳に聞こえて来ちゃつてまだシヨックが大きい俺は京の顔をまともに見られない。」

「お前、少しは自分に素直になつた方が良いんじゃないの？」

紫苑さんに言われ、少しは素直になつてみようつて思っているんだけど…。

「年下でこんな事言つたら生意気かも知れないけど、K、くんにとつて草薙さんの事はどう思っている訳？」

「俺は、京の事…大好きだよ。信じてもいるし…でも、自分自身に自信がなくて…。」

俺が泣く声に、紫苑さんが慰めながら口を開く。

「本当は、K、くん…草薙さんに言うの嫌だつたんじゃないの？」

凶星です。

「草薙さんだつて、K、くんにかかがあつたら嫌だからつて考えたんじゃないかなあ。」

京だつたら、ありえる事だと思つているし俺だつてその事は知つてる。

やつぱ紫苑さんには、嘘なんて言えないなあつて思つた。

「まあ、俺の場合は半分本気でもう半分は嘘だからね。あれほど嘘つかないでつて言っているんだけど、なかなか聞いてくれないからねえ。」

紫苑さんが少し困つた顔で言っているのを見て、京が口を開いた。

「八神は、女を『もの』としてしか見てねえ気がする。」

京の一言で紫苑さんがおどおどしたのは当たり前で涙目になつ

てしまっている。

「草薙さん。今のは酷くない？確かに、俺の場合3日連チャンでHされて何度も中に出されたしイキ声だって大きくなっちゃったんだから…。もしかして、他の人に聞かれたんじゃないかなあってちょっと不安になっちゃったじゃん。」

あーあ、紫苑さんを泣かせちゃったじゃん。

「気にするって言ったんだけど、そんなに不安なるなよ。八神だって、行動は遊び人みたいになっているけど本当は紫苑の事誰よりも大好きなんだからよ。」

ちよっと…フォローになってないよ…。

それでもまだ、紫苑さんの不安は治まらなくて…。今度は本格的に泣き出してしまった。

「おいおい。八神の奴がいないのに、泣かせてどうするんだよ。」

マキシマも急に紫苑さんが号泣してしまってオロオロしちゃっているし、本当にどうするんだよ。俺だって京の尻ぬぐいだけは嫌だよ。

(着メロ：粉雪 by：レミオロメン)

着メロの音で、誰だか分かったのか紫苑さんの顔が笑顔になる。

「(にやり)八神さんからでしょ？」

俺がにやりとして、紫苑さんに聞いたら耳まで真っ赤になった。

「今仕事、どうしたの？」

『今ちようどシーンの中休みで、電話してみたんだ。』

心配性の紫苑さんの事だから、首を傾げてしまっているだろうと思っただ。

まあ、内容は聞こえろとは思わないけど。

『不安になってる？』

八神さんが紫苑さんの気持ちを知っているからあつちでも首をかきあげていると俺は思っている。

「不安になってないよ。」

紫苑さんも心配かけらせないために、笑顔になる。でも、返ってそ

れが八神さんを心配させる羽目に。

『京。お前、紫苑を泣かせてないよなあ？』

少しギクつとなった京が、声を裏返させながら話す。

「なんとも、無いって。」

紫苑さんも八神さんが京と仲が悪いって言う事を知っているから苦笑しちゃっている状況で話す。

「俺。草薙さんとは、なんとも無いよ。」

何かあったって言っちゃったら、その代償は京との大喧嘩 + 紫苑さんを一日学校を休ませてHするのが分かっているから2人ともさつきから苦笑で話している。

紫苑さんだって、今が一番大事な時だし八神さんだってその事は分かっている俺は思っているし。

これでもし、本当に八神さんが紫苑さんの事を性欲の為の『もの』だっと思つたらマジで最悪だよ。

俺だって京や八神さんの事、信じているんだから。

「俺に何かあったら、すぐに俺が殴りこみに行くって思っているしこれ以上俺だつてボロボロになるのだけはごめんだから。」

そう言った紫苑さんも電話に出ている八神さん自身も2人して苦笑してしまつたらしい。

「俺は、俺の事どう思っている訳？」

半泣きの理由は、アテナちゃんが強姦事件だつて分かつてはいるけど八神さんの言葉の詰まり様をみると『もの』としか見てないと思つちやつたらしい。

「やっぱ、俺の事…『もの』としか見てないんだ…。」

これに慌てたのは、八神さんの方。

『そんなんじゃないよ。』

慌てたのか、また声が裏返ってしまった八神さん。だから声が裏返ってしまったら紫苑さんに誤解されますってばっ。

まあ、元を正せば京が原因を作ったんだろうけど。

「じゃ何で、今日の仕事が終わったとか連絡無い訳？俺一人で、あの部屋にいて凄く寂しいんだよ。」

大泣きしてしまった紫苑さんを慰めるマキシマだったけど、返って逆効果になっちゃった。

「もしかして、俺は俺が誰かにアテナちゃんと同じ事になれば良いって思っているじゃないでしょうね。」

完全に疑ってしまっている紫苑さんに、電話先の八神さんはただ苦笑しているしかなくて…。

まあある意味、『ざまあみろ』なんだろうけど。

『だから、そんなんじゃないよ。』

八神さんが、今度は声を裏がえらかったのを気付いた紫苑さん。すぐに、安心するのは分かっているから良いんだけど…。

「本当に、そう思ってる？」

紫苑さんの首をかしげる姿に、理性を爆発させそうになったマキシマ。

ド変態スケベつ。

第一、マキシマだって知っているはずだよ？

紫苑さんには、八神さんって言う彼氏がいるんだよ。

今更紫苑さんだって、浮気はしたくないって思っているんだし…。

それに八神さんと紫苑さんは契約しているカッパルの一組だから、他の人とHなんてしたらどっちかが壊れてしまうから…。

第一、紅丸べにまるさんがシエンさんに強姦されて紅丸べにまるさんの彼氏(?)である真吾まごが壊れたってデュオロンさんから聞いて初めて2人が付き合っているって事や契約しているって事に気付いた。

「ユキちゃん。」

ボーっとしていた俺に、紫苑さんが話し掛けてきた。

俺の体は、さつき京とHしてから30分が経っていてもうそろそろ元に戻っても良い時刻だと思うんだけど…。

「やっぱり、神楽さんに言われた事…気にしてる？」

気にしていないって言ったら嘘になるけど、今も昔も俺は京の事大好きだもん。

「俺は京の事、大好きだよ。」

それを聞いた京がさつきから、真っ赤になっちゃった。

もちろん俺だって人の事、言えないし。マキシマだって、にやりしちゃった。

「マキシマさん、にやりちやまずいよ。でも、俺は草薙くさなぎさんとKくんが…じゃなかったユキちゃんが契約を結んだ事に嬉しいと思っているよ。」

紫苑さんの笑顔に俺まで理性が飛びそうになって、紫苑さんが首を傾げてしまった。

当然俺自身も一瞬ほけつとしてしまったのは事実だし、京だって本心は分かっているはず。

「正直の事、草薙さんがKくんと逆だったら良かったのに…。」
何で。

「何で？」

俺が首をかしげて、紫苑さんに問い掛けたのは良いんだけど帰って紫苑さんにこう言われた。

「草薙さんってB型なのに、凄くキレイ好きでB型特有の性格してないんだもん。」

確かに紫苑さんの言う通りなんだけど、京ってそんなにキレイ好きじゃないよ？ちよつとぐらい俺が、だらしない所もあるけど…。

「確か、Kくんと付き合う前に俺にロストバージンを奪われたって聞いたんだけど…。」

嘘っ。

信じられないって言う顔をした俺に、京は口を開く。

「お前、八神から聞いてたのか？」

本当は紫苑さんだって、八神さんを許せないのは俺には良く分かつ

た。

だって、紫苑さんは八神さんの彼女なんだから。京のロストバージョンを奪ったとしたら、俺は八神さんの事を殴っているかも知れないし紫苑さん自身この話を聞いた時にシヨックが大きくて泣いちゃったんだろうつて思った。

「紫苑さんは、京とHした訳じゃないよね？」

完全に疑いの目をしている俺に、京も苦笑して話す。

「紫苑とは、何ともねえよ。確かに、八神に犯されたって知った時に泣いちゃったのは紫苑が自分で言っただからよ。」

京の口から、八神さんに次の朝まで何度も犯され続けたって聞いて彼女である紫苑さん以上に俺が八神さんに対して怒りを込めてしまっただって、悪いのは京自身じゃなくて八神さんなんだからさ。

「本当に？」

今度は少し驚いた顔で、京の顔を見た俺。

京自身も俺の顔を見て、苦笑しちゃった。

「本当は、俺の方が草薙さんに謝らなくちゃならないって思っているんだけど現に今仕事でいないから俺が謝らなくちゃならなくなっちゃうしさ。草薙さん、ほんとうにごめんなさい。」

紫苑さんに謝られてちよつと京も鼻の下を伸ばしちゃってる。

本当、シエルミーさんじゃないけど男ってスケベで変態なんだなあ。

「京・・・^{スケベ}変態。」

俺が横目で睨んでいると、何の事なのか分かったのか苦笑しちゃってる。

「だから、八神さんに狙われるんだよ。」

俺がそう言った途端、京の顔が暗くなっちゃって・・・。やっぱ、京自身は八神さんに強姦された事で凄くシヨックが大きくて今にも泣きそう。

ライバルって言ったって、京にとって八神さんは友達だったんだし強姦が原因で本当に仲が悪くなってしまったのは事実だし・・・。
「京・・・言い過ぎた・・・ごめん。まさか本当に、気にしていたなんて思ってもいなかったから。」

現に俺は紫苑さんと仲が良いし、2人が大喧嘩しても止める事が出来るけどまさか京が本当に八神さんにロストバーจินを奪われていたなんて思ってもいなかったし今だって驚いちゃってる。

京が俺を泣かせたくないって思うように、俺だって同じ事思っているのが分かっているから。

自分でも分かっているから絶対に浮気なんてしたくないし俺がそう言う事になったら京の場合殴っているか泣き出してしまふのが分かっているから。

京って、案外キレる方じゃないのは俺だって分かってる。

現に俺が、紫苑さんや自分の彼氏である京に嘘がつけないのは泣き出す心配じゃなくて自分がもしキレたりしたら自分での感情が抑えきれないって分かっているから。

「八神の奴、俺があれ程嫌だって拒絶しているのにやって来て関係持っちゃったんだ。それに俺はK・・・いや、ユキの事しか考えられないし好きだよ。」

いくら俺と京が、付き合っているからって誰かに強姦されたって知って黙っていられないよ。

今俺の体に戻ったばかりで言うのはなんだけど、紫苑さんやマキシマがいなかったら間違いなくキレていたし大変な事になっていたかも知れない。

「K・・・俺が八神としちゃった事・・・怒ってる？」

「怒っては、いないよ。ただ、ちよつとびっくりしただけ。」

俺が京に、そう言うと京も安心しちゃってほつと肩を落とす。

京って外見が女の子の顔だしデートしていても間違って、男の人が京の事をナンパしてくるぐらいだから。

まあ、皮肉言っただって自分の彼氏だから何にもならないって事分かってるんだけど。

「言い訳かも知れないけど、紫苑とマキシマが助けに来なかったら間違いなく八神の中に入れたまま腹上死してたぞっ。」

こわばっている京の顔を見ると、本当に八神さんに良いようにされただんなあって思った。

「俺が、「やめろ」って言ってもやって来るし色々な体型でやってくるからその度にイツちゃっただから……。」

泣きながら言っている自分の彼氏を見ると、こっちまで辛くなっちゃうし京がめつたに人に涙を見せない方だから凄イシヨックが大きいんだって思った。

「俺が気絶寸前でも、まだやって来るし……。」

俺はただ、泣いている京を見ているだけ戸惑ってしまっ。

京の事を女の子として見ちゃったのは、八神さんの自由かも知れないけど何も犯す事ないと思う。

正直、八神さんにはいらついているし紫苑さんだって俺の事を考えて泣かないんだから……。

「俺は、八神がそんな事するなんて思わなかったし信じていたのに何か裏切られた気分が辛いよ。」

京の目に涙が溜められているのを見て、マキシマと俺はおどおどしちゃった。

俺自身、泣きそうになっっている京の顔を見た事が無くて辛いって言うのは分かっているんだけどどうしてもあたふたしちゃう。

単なる自分が、『チキン（臆病）』なだけだけど……。

「草薙さんだってあーゆう状況になっちゃって辛いのは、俺だって分かっているはずなのに何を考えているんだか。」

紫苑さんだって本当は、電話じゃなくて会って話したいって思っ

いるけどそれが出来ないと分かってイラついているのは知っていたし京が悪い訳じゃないけど自分の彼氏が浮気しちゃったのは許せないって言うのは顔を見ればすぐに分かった。

俺だって、八神さんに対しては怒ってはいるけど正直驚いてもいるしそれが俺と京が付き合う1年前で京が高校の卒業式が終わってから八神さんに『ロスト・バージン』を奪われたって……。制服だって、ボロボロにされたって聞いて更に八神さんに対してちよつとイラついてもいる。

「浮気したら許せないって、言っていたのに何で守らないんだろう？」

怒りとショックで紫苑さんが呆れているのを黙って見ていると、マキシマが口を開いた。

「八神が帰ってきたら、マジで説教だな。」

マキシマが説教魔だって知ってはいるけど、何で怒っているの？
本当は、マキシマだって人の事言えないんだよ。

学校の音楽室で散々ヤツてきたのに、それじゃまるで人事じゃん。いくら、同じ年^{タメ}で幼馴染だからって酷い事してきたんだし……。

今は八神さんの事なのに、何で俺がマキシマに怒り出そうとしてい
るんだか。

「大学は私服だから良いんだけど、これが卒業式前だったら新しい
のを買うしかないし……。」

京が泣きそうなのは、紫苑さんや俺の方から見えていて……。

「俺：人間不信になっちゃいそうで、もう辛いのは嫌だよ。」

京が大泣きしちゃって困る暇も無くて、思わず抱きついちゃった。

この状況で抱きついて、マキシマや紫苑さんに『にやり』されても
仕方ないって思ってはいるけど俺としては何か凄く複雑で……。

京自身も、八神さんにあんな事をされてトラウマになっちゃったの

は状況を見てわかっていた事。

だけど、なぜか体がセクハラまがいな事をしようとするのはさすがに性分で…。

案の定、紫苑さんには止められたって言うか横目で見られたんだけど…。

「京…。」

京の泣いた姿を黙って見ていられないので、京の方を振り向いて抱き返した。

そうすると京は、耳まで真っ赤になって俺にキスした。当然、俺自身も真っ赤になってしまった…。

第一俺がキレたって、何にも得なんてしないし自分でも分かっているんだけどこのまま京が泣き出したままのとマキシマに『にやり』されたままじゃ嫌だったから。

「多分…。八神の奴が…。」

涙が止まらなくなってしまったって京の声も段々と聞き取れなくなるまで小さくなってしまった声を黙って聞いている俺には、京の気持ち嫌って言う程分かっている事だし…。京自身が『トラウマ』になっちゃったのは八神さんのせいだし、京が辛い気持ちになっちゃったのも八神さんが悪いんだから…。

「身売りだって思われたって、仕方ないよお…。」

よっぽどシヨックが大きくて、涙が止まらなくなってしまっているのも分かっている。

「援助交際^{エンコウ}まで発展したら、どうしてくれるんだよ。」

体がガクガクと震えている事は、こっちに來てから変わっていないかったし京が怒り出すのも分かっていた事だったから。

マキシマだって、無責任な事なんて言えないし八神さんはマキシマの二の前しちゃったんだから…。

京が手から炎を出して、八神さんにぶつけたのは分かっている。どっちかと言うと、俺も京も自分の属性が炎属性だから冷たいのと

寒いだけは属性的に苦手で・・・。

マキシマと付き合う事になったクーラさんは自分達と真逆の氷・水属性だけど契約したのと同時に炎属性に抵抗が出てきた。つて言うか、元々抵抗はあったみたいだったけど・・・。

そんな事より今は京の方が先決だつて思っているし、まだ誰かに京が強姦されてしまったら今度は俺にまで一緒になってイツちゃう。そんなのは嫌だし、京だつて可哀相だから。

「何か、まだ：身震いがとまんない。」

俺の気持ちは分かっているから、京が苦笑しちゃった。

京がまだ身震いしている理由には、さつきまで目の前にいた紫苑さんの事があつたからだつて思ったからで・・・。

「俺：八神の『愛人』になりたくないよ。」

『にやり』されたつて良いつて思った時に、誰もいなくて良かったつて思ったけど何か寂しい。

マキシマは自分の部屋に戻っても暇だつて言つて読書し始めたから俺が京に抱きついた所を見ていないのが分かっていたから。

別に、マキシマが居たからつて何にもしないけどさ。

八神さんが出演している仕事の現場が近くだから紫苑さんはそつちの方へ行つてしまったし、近くだから見回りの時間までには帰ってくるつて分かつているから。

不思議な力のせいで、深夜の12時になつても魂だけにはならず動ける様になつてしまったから・・・。

それは、俺と京以外にも言える事だつて思っている。

「八神だつて、自分が紫苑と契約して『運命共同体』だつて知つて何で俺に手を出しちゃったんだか。」

京が凄い疑問に思っているのは分かるんだけど、俺自身は絶対に聞きたくないしどう答えても八神さんが京と一夜を共にした事は変わ

らないんだから。

「紫苑の奴、今日も見回りに行くって言うてんのに戻ってくるのかなあ。」

マキシマ…。俺とそんなに年が変わらないのに「親父化^{オヤジ}」してどうするんだよ。それに紫苑さんの場合、電話料を切り詰めているのを何度か見ていたから今回の事だつて仕方ないんじゃないの？

「紫苑が戻つて来なかったら、マキシマと八神と俺だけだぞっ？嫌だよ、この2人で行つたら100%で犯される…。」

京の顔がまた暗くなって、俺の背中に顔をうずめる事に。

言っている事は分かっているんだけど、マキシマは絶対にしないよ。だって、俺を犯した時に…正確にはその後だけど京とドンパチした時にちゃんと約束したもん。今回の八神さんの事は、知らないけど…。

京の性格で、見回りをちゃんとしたいって言うか好きって言うのはいつもの事だから今更言いたくないし…。

それに八神さんの事だから、見回りだけしてさっさと終わらせて帰つて寝たいって思ってる思うしもしかして朝まで八神さんが紫苑さんにHしてくるって可能性だつてあるだろうし紫苑さんがイツちゃつた後でもやってくるに違いないって分かっているし…。

紫苑さんの話では、紫苑さんの仕事にホテルに拉致されて次の朝のチエックアウトの時間までHされていたつて言つてたし…。それに、食事抜きトイレ休憩無しだつてさ。

それもそれで、酷すぎるって思っているのにそれが毎日だから余計に許せなくて。

紫苑さんは、『女の子』なんだよ。

「こいつ(K)だつて怒っているのに、分からないのかなあ。」

怒りがこみ上げてしまっている京を尻目に、俺は何も言えなくなつてしまつて…。

「あれ？こんな所で、何しとん？」
どこかの大阪のおばさんかっ！

「『何しとん？』じゃねえよ。そう言うお前こそ、何してたんだよ。」
拳崇のノー天気ぶりにはいつもの事だっけ分かってはいたけど、こんな時に言われたら調子狂うだろうがっ。

「ちょっと、ユリちゃんとロバートの3人で時計塔に行っとったや。」
ユリちゃんだっけ本当は、ロバートさんがこれ以上拳崇と関係を持たれるといやだっけ思っているんだし。

「拳崇ったら、時計の音でピクついちゃって…。」
忘れてた…。ユリちゃんが、俺以上に楽道家だっけ事。

「あの〜、ユリちゃん？」
俺が苦笑しながら、ユリちゃんに聞いてみる。

「なあに？」
「拳崇と一緒に行って、本当は邪魔だっけ思いませんでした？」
俺が、拳崇に聞こえないようにヒソヒソ話をしている。だっけ、『拳崇がロバートさんの愛人です。』だとか分かったらどんな顔しちゃうんだらう。それに、拳崇に聞こえてしまったら思いつきり不機嫌になってしまうのが分かっていたから…。」

「別に。」
ロバートさんが何でユリちゃんとちゃんとした契約を結ばないのは、多分ロバートさんの気持ち的にはユリちゃんを愛しているって言うより拳崇の方が好きだっけ言う事。

拳崇自身はもアテナちゃんと仮契約をしている状況だし、立場上『龍神』と『女神』というけして恋なんて出来ない状況になっちゃったんだから。

一応は、カップルとはなっているけど…。
ロバートさんだって、ユリちゃんって言う彼女がいるのに拳崇とばつかしHしていたら何かあった時にリヨウさんに説教以上の事されるよ？

リヨウさんは、妹であるユリちゃんとの交際を許してくれているんだから。

まあ、俺が考えていたって何もならないんだけど…。

「なら、良いんだけど…。」

リヨウさんには、バレないようにしなくちゃ。人の恋沙汰とかにリヨウさん自身は鋭いから…。

彼女であるキングさんは、そんなリヨウさんの気持ちとか理由とかも知っているから何にも言えないし俺だってキングさんには逆らえないし。

「どうしたの？」

ユリちゃんが首をかしげて、こっちを見ている。

本当に、ユリちゃんはロバートさんと拳崇が愛人関係になっている事知らないって思うとちょっと胸がチクチクしだしてくる。

「そう言えば、ロバートさん。今日ちょっと仕事入っちゃったんで、先に帰ってくれませんか？」

ユリちゃんがそう言うのと、『にやり』しだしたのは拳崇の方。

あまり、『にやり』しているとユリちゃんにバレて大変な事になるよ？

「んじゃ、一人じゃ寂しいから拳崇と一緒にいるわ。」

一緒にいるって事は…もしかしてまた、拳崇とHするの？

やーめた…。あまり考えていたら、こっちがパニックになっちゃう。京だって、俺がそういう状況だって分かっているよね。

これで分かってくれなかったら、一人で空回りじゃん。

「K…、大丈夫か!？」

京もどつちかと言うと、俺と同じ心配性だから気持ち的に分かって

くれるし悲しい時は一緒になつて悲しんでくれる。

だからシエルミーさんに、『似た者同士』って言われるんだよ。こんな京でも、俺にとつては大好きな人で京も俺の事を大事にしてくれる。のろけてどうするって話には、なっちゃんだけだ…。

「大丈夫だよ。ちよつと、ショートしそうになつちやつたけど…。」
本当の事を言わないと、京も心配しちやうし…。でも、ロバートさんとラルフさんには俺がコンピューターから生まれた人間だつて知られちゃつた。

まあ、知られるのは時間の問題だつたから今の時点でバレたつて別に良いつて思つているし言い訳なんて出来ないもん。

でも、紫苑さんが俺と同じでコンピューターから生まれたなんて知らなかつたしマザーシステムの型まで同じだつて思わなかつた。

ロバートさんは、ラルフさんやシエルミーさんとか社やさんと同じコンピューター系に詳しいいつて言うかそういう系統の会社の御曹司ボンボンだから大体の事は分かつているはずだし…。

まさか、マスターシステムにコンピューターウイルスなんて入れ込まないよなあ。

そうなつてしまつたら、マスターシステムを通じてマザーシステムに感染して俺はもちろん紫苑さんまで壊れちやう。

「大丈夫なら、俺は良いんだけど…。」

京の顔が笑顔になつてているのを見ているだけでもちよつとは安心できる。

気を紛らわせないとフラッシュバックが起こつてまた京が、大泣きしてしまうから思つただけで心配要素で…。

当の俺も京の笑顔を見てつられてるあたり、『なんだかなあ』つて思つちやうんだけだ…。

だつて今は、少しでも京と一緒にいたいって思つたしこんなに落ち込んでいる京を見た事は無いから黙つていられないし俺も辛くて泣

きそうになる。

京だって俺が泣き出してしまったら、あわててしまうが分かってい
たから…。

「俺：K' がショートしたら、困っちゃうしどうするか分かんない
よ。」

でも実際にショートしちゃうって言ったなら、京に激しいHをされた
時とかメンテナンスの日だって言っているのに京自身が忘れちゃう
ぐらいされちゃうから後で同じマザーシステム型の紫苑さんに説教
を食らったり八神さんには『にやり』されちゃうのが分かっている
のにさあ。

「だって京が…あんな事してくるから…。」

思い出しちゃったから真っ赤になってしまった俺に、京が後ろから
抱きつく。

「もし、K' や紫苑に何かあった時は俺と八神が守ってやる。八神
の場合は、どうか分からないけど…。」

何かあったらって、言ったら遅いんだって。
でも、それを言っている京自身が照れているから良いけどさ。

「ところで、草薙さん。」

紫苑さんに聞かれ、振り向いた俺と京。

「最近、本部に行ってます？」

俺をシカトしたからちよつと凹んでしまった。

紫苑さんが俺を凹ませるのは、いつもの事で俺もそんなには落ち込
まないけど改めてそれを言われるとちよつと落ち込んでくる。

本部というのは俺らがいつも行っている場所で、正式名称ジャパ
ンコーニー本部なんだけど俺らは本部と呼んでいる。

それに紫苑さんがいつもだから、いちいち気にしてももられないし
それよりも今は京の事だ。

「行ってるよ。」

京の可愛い顔を見ると何か、八神さんの事を言ってられなくて自分

の性格が京と同じだったらって考えたらちよつとどころかよだれが出て来るし理性だつて保てるかどうか分からないしもし理性を爆発させても逆に人を強姦したくないって思っているから。

だつて、そんな事したら最低だつて自分でも思っているしこれ以上京の体が傷つくのも嫌だ。

キザくさくなるし、自分が赤面してしまうからこれ以上の事は言えないんだけど…。

「いやあ、社が『最近、京の奴こつちに姿見せないけどどうしたの？』って聞いて来たんだけど…。」

社さんも京と同期なんだけど、紫苑さんと同じ年タメで唯一紫苑さんが呼び捨てで呼べる相手で…。

「あいつは、心配性だからなあ…。」

京以上に心配性じゃないかも知れないけど、社さんだつて一般的な心配はすると思うよ？

まあ、社さんカップルを見た途端こつちはにやりしてやるけど。

「京だつて、社さんの事言えないよ。」

俺がそう言つと京が苦笑して今にも泣きそうになっている。やべつ、言い過ぎたかなあつて思つたけど、本当に京の方が心配性すぎるから…。

それに、泣き出すつて言うか涙目になっているつて言つた方が早くて俺自身もいつもの事だから別に驚きはしないけど放置だけはしたくないし本格的に京が泣き出してしまったら何かやばいので肯定しようかなあつて思う。

「そっか？」

ここで、こつくりとうなずいていたら間違いなく京が泣き出すと思つたし肯定するつて言つたけど黙つてた方が良いつて思つたんだ。

別に京に気を使つて諷じゃないけど、これがシエルミーさんにバシてでもしたら説教どころかブラック降臨（＝オロチモード）で一

発電撃を食らうかどっちかだっただって俺も分かっているから考えただけでもちよつと身震いがしちゃうしさあ。

「行っているんだったら、良いや。」

ほら、紫苑さんだっただって苦笑しちゃうってるじゃん。

「てつきり、古本屋に行っているだけかと思っただけだ…。」

確かに、京の趣味が古本集めだけどさあ…。

「俺だっただって、そこまで古本屋にたむろっている訳じゃねえよ。」
「どうだか。」

古本屋さんに行かなくてもアクセサリー屋さんに行っただって、自分の物はやっぱり買うくせに。

「草薙さんが言っているんだから、俺は信用しないと。」

俺が少しイラついていたら、紫苑さんが気を使ってくれたみたい。

「K」が機嫌悪くなっちゃ、こつちもしゃれにならないからさ。」

最悪な場合、俺が逆に京を強姦するんじゃないかって思っているみたいらしいんだけど俺はそんな事なんてしたくないし返って京の体が壊れちゃうのが分かっていたし俺も同時にイツちゃうって思ってしまったらしい。

まあ、夜中でも京の場合は大きな声出させるからなあ、こないだだっただって、外で散々Hして移動中も部屋に帰った時も玄関や風呂場でHしてベットでは中出しされたし…。

今日だっただって、京が散々Hして来たからそうじするのに大変な事になったんだから。

「まあ、機嫌悪くなる原因って言ったたら草薙さん関連の事しかムシヤクシヤするしかねえもんな。」

紫苑さんは元々、言葉が悪いのは分かっていたって言うか知っていたし俺だっただって人の事言えないから…。

「ところで、草薙さんは新しく出来た店に言った事あるの？」

苦笑したままの紫苑さんが、京と話しているのを聞いてちよつと嫉妬してしまっただけで紫苑さん相手じゃ嫉妬したって何にも変わ

らないって事ぐらい自分が良く知っている。

知ってはいるけど、体は全然言う事を聞いてくれなくて。

さっきの八神さんの事を考えてたら、また無償にイラついてくるし京の事を傷つけてしまう可能性だってあるから。

今だって、言葉で京を凹ませちゃっているからこれ以上の事は言えないしせつかく紫苑さんが気を使ってくれたんだものそれに答えないとマジで最低だって自分でも思っているから。

とは言うものの、正直心の中では人を泣かせたいとか独り占めしたいって思っている自分がいて今は理性がそれを抑えているから絶対にしないって言うか出来ないしここでして紫苑さんに説教を食らうのだけは嫌だ。

「言った事、あるよ。K'が途中で暇だったから…。」

本当は仕事じゃない時に、俺も行きたかったんだけど…。」

シエルミーさんが、「あんた、途中で抜けるからだめ。」って言われたのと同時に耳を引っ張られて…。」

京だって、その光景を見て苦笑していたのは事実だし…。」

だってだって、俺の場合は最近仕事が増えたから京と一緒に過ごすって事無かったし俺だってちゃんと時と場所と場合ぐらい分かっているから…。」

シエルミーさんってちゃんとマネージャー業頑張ってくれるのは嬉しいんだけど、根が真面目だから休ませてくれないんだよなあ。しかも、怒らせたらもろにオロチモード（裏の顔）状態になるから怒らせないようにこつちだつて気を使っている状況で…。」

しかも、シエルミーさんは超がつく程の「ドS」だから…。」
「こいつが、頬を膨らませちゃったから後で一緒に行ったんだ。後で、シエルミーにはトゲさされたけどね。」

京に言われて、「えっ」って驚いたのもつかの間ロビーにアンデイさんと舞さんカップルがイチャイチャしながらこつちに来た。

当然今の状況で、にやついてなんかいられないしこの2人が俺ら以

上に『バカップル』だつて言うのを知っているから。

返つて変な事を言つて、紫苑さんに泣かされるのも嫌だし黙っていた方がましだつて思ったから。

話をややっこしくするのなんて、後がめんどくさいからね。

「草薙さんつて結構、ベタベタ派なんですね。」

舞さんには言われたくないです。

車の中でもラブホだろうがどこでもHするつて噂が立っているし、実際に車の中でのHを見た事があるから横目で見るしかないんだね。

さすがに。車の中でHしている光景を見たなんて本人の前じゃ言えないんだけどね。

「ほつとけ。」

京が照れている所悪いんだけど、すぐ横目でくだらない『親父ギャグ』を思いついちゃったんだけど……。

「ほつとけーき？（ホットケーキ？）」

ごめん。本当にくだらない。

「K'くん……若いのに、今から親父ギャグ使わないの。」

自分でも、寒い親父ギャグだつて事……自覚してます。

「は〜い。」

本当に苦笑するしかなくて、紫苑さんや舞さんも呆れてしまった。

「もう、アンデイったら体がポロポロになるまでHして来るんだもん。散々、中に出されても散々してくるから……。」

だからつて、あんなに大声でイキ声しなくたつて良いんじゃないですか？

俺だつて姿は見てないけど、声だけで分かつたんだから。

「生々しいなあ。」

京がそう言つと、俺も同じ事を思っていたからうなずいてしまった。本当に生々しいつて思ったのもあるし、自分達が同じ状況になつたら恥ずかしいなあつて思つてなんか照れて来たんだけど……。

まあ、そこがアンディさんらしいと言えばアンディさんらしいけど。もし、舞さんとの間に子供が生まれたらアンディさんがちゃんと育てる事が出来るのかなあって思ってたきちゃって……。

まあ、俺が心配したって何にもならないって分かっている事だけど……。

「ごめんねえ。」

舞さんが自分で言った事に苦笑しちゃって、俺に謝る。

ノー天気って言うのか、楽道家だと言って話は同じチームのキングさんから聞いていたから別に驚きもしなかったんだけど……。

「別に、良いんですけどね。」

だって、そんな事言わなくちゃ京がほけつとしたままだし舞さんだって苦笑したままになってしまっから嫌だし……。

「K'！?どーした？」

京って、本当に心配性だよなあ。

顔を見たら、神楽さんが言ってた事を思い出した。

思い出したら、ちょっとブルーになってきちゃって……。

俺や真吾が、神の生まれ変わりだって言う事は分かっているのになんで京達がどの神様の転生した姿だって事を分らないんだろう。

でも、もしそれが分かった時俺は京にどんな顔をしちゃうんだろう。

「さつきから、ずっとポーとしてるけど何か考え事でもしてたのか？」

何を、考えてたって……。

そんなの、京に言えないよ。言ったって笑われるかも知れないし、もしかして思いつきり引かれるかも知れないもん。

「何でも、無いよ。」

嘘ついたらすぐにはれるかも知れないけど、今は言わない方がいいと思っただしこの事で京と大喧嘩したくないって思ったりしたから。

「K'が辛そうだったら、言わなくて良いけど。」

京が心配性なのも、俺が心配させているんだし本当は謝らなくちゃならないのも分かってる。

「無理に言わせて、お前がショートでも起こされて倒れたら俺がマキシマに説教されるしさあ。」

マキシマの説教は、怖いからなあ。

まあ、俺がマキシマに説教される確率と言ったらほぼ50%を切っちゃう程高いから・・・。

「それにお前だって、マキシマに泣かされるなんて嫌だろ？」

それは確かに、嫌だけど倒れるよりは凄くましで・・・。

「草薙さんは本当に、優しいんですね。」

紫苑さんが、京を見て笑顔になっている。

そう言えば紫苑さんって、俺の前世・・・いやクシナダ姫の姿を知っているんだっけ。

「・・・・・・・・。」

黙ってしまった京に、もう一度、視線を送るとそこには一瞬誰かのシルエットがあっただけど消えてしまった。

気のせいなのかなあ。(3:)

「K・・・今の影って・・・。」

2人して同じ影を見てしまったから、身震いどころか恐怖心に変わっちゃって顔を引き合わせる事に・・・。

京も俺もビビリって言うか超怖がり体質だから、ちよつとした音でもビククリしてしまうしお化け屋敷なんて行くのはとんでもないし絶対2人で泣いちゃうのが分かっていから嫌だし行かないけどねでも、京の怖がっている所はあまり見た事がなくてもちろん泣いている所だって見た事がないから最初京が初めて泣いた時にはビククリして慌てちゃったんだ。

「も・・・もしかして・・・幽霊?!」

声が裏返ってしまった京に、俺も影が現れた所からもう一度見直しても何か違和感があり過ぎて・・・。

と……言つ事は……。

「ぎゃあ〜〜。」

俺と京が叫んだのを聞いて、紫苑さんやマキシマもビックリしてる。いつの間にか、アンディさん舞さんカップルはどこかに行ってしまうていないし俺だつてさっきから身震いが止まらない。

「お前らの叫び声の方がビックリだよ。」マキシマが、苦笑したまま俺の顔を見てる。

だって、怖いものは怖いしマキシマだつて怖いのは嫌いだろうが。

「そう言つお前こそ、怖くないのかよ。」

京がマキシマに話す所を見るとさっきのは怖くて本当に泣きそうだったんだなあつて分かる。

とか言う俺も泣くまでは行かないけど涙目になっているのは事実だし、何とも言えないけど怖かつたんだから。

「全然。」

そんなはつきり言わなくたって……つて思ったけど、相手がマキシマだつたから何にも言えなくて……。

つて言うか、行ったら最後の気がしていらし返つてさっきの京みたいに泣くのが分かつていたから余計な事言えなくて……。

「全然つて……。」

京まで呆れて、苦笑しちゃつたのは当たり前つて言つたら当たり前……。

「だって、俺お前らみたいに超がつく程怖がりじゃねえし俺だつて怖がつてたら何にもならないだろうが。それに第一、京……お前は女かつ。」

京の怖がりに、マキシマも苦笑しちゃつていたみたいで更にこう付け足した。

「でも、正直お前ら2人の怖がつている所を見てみたいって思っているんだけどな。」

変態。何考えてるんだよ。

「変態親父。」

俺が言う前に、紫苑さんがトドメ。

マキシマって、俺と同じ年なんだよ？

確かに、ちよっと年上に見える顔だけど……。

「おい。マキシマが立ち直れないくらい、凹ませてどうするんだよ。」

京もマキシマが何を思っているか分かったから苦笑しながら話しちやったし、京自身も否定は出来なかったみたい。

「京……。本当は、俺が生放送中のアテナちゃんみたいになれば良かったって思ってるんじゃないの？」

疑いはしていないけど、一応はカマをかけてみる。

「そんなの、思っている訳ないだろう。」

カマかけたけど、京が嘘を言っている訳じゃない。

「なら、良いんだけど。京だって誰かのリハ中、裏で散々俺を犯したくせに。裏だったし恥ずかしくて、声出せなかったんだから。しかも、それを見たマキシマに付き合っている事バレちゃって後で楽屋で『言わないでくれ』って言うの大変だったんだから……。俺、凄く恥ずかしくて本番が始まって耳まで真っ赤になっていたんだから。」

その光景を思い出したのか、京まで真っ赤になってしまった。

「あの時はマジで、ごめん。」

困り顔の俺が、京の顔を見て来たから素直に京の方が謝っちゃった。

「そういえばHで思い出したけど、昨日一般の生徒同士のHを生放送で流れてたんだってよ。」

「うわあ、最低だ……。」

「俺の場合テレビは別の見てたから、見てないけどマジで最低だなあ。」

俺だけじゃなくて、見ていた人達はそれを思っていたはず。

何が悲しくて、人のHを見なくちゃならないんだか。

「草薙さんはそんな事思わないかもしれないし、『にぶい』って言ったら失礼かも知れないけどマキシマだったら絶対にあのテレビを見て誰かを犯したいって思ったんじゃないの？」

紫苑さんに疑いの目を向けられたマキシマだったが、素直に否定して話してみたい。

「ただ、マキシマって巨乳好きだからなあ。」

「見たからって、誰かを犯すなんて事しないってばっ。」

そう言ったマキシマだったが、冷や汗をかいているから余計に紫苑さんに横目で見られたらしい。

「とか何とか言ってる、クーラさん以外の人を手当たり次第に犯して関係持たせるんじゃないの？」

紫苑さんに睨まれると、マキシマが何も言えなくなってしまう。

俺だって、紫苑さんに睨まれたりしたら何も言えないけど今回のマキシマの件とはまったく別の事だもん。

今は、流石に『ざまあみろ』だけだ。

マキシマの考えている事は、幼馴染だから分かっているしマキシマ自身がH大好き強姦魔だって言う噂は全部本当の事で。

俺だって、マキシマに初めて取られたし現にバイスさんの妹さんなんかあの初めてのHで妊娠しちゃってシングルマザーになっちゃったんだから。マキシマ自身は、自分の子供だって『認知』してはいらるんだけど・・・。

しかも、声が出なくなるまでビストンをして中に出した事。

結局、傷ついたのはバイスさんの妹さんなんだから。

「K、？」

京が、俺の顔をジーっと見ているのを見てはっと気付く。

時間を見たら、30分以上経って後10分で当番の見回りの時間だから驚いてしまった。

「随分、長く考えていたじゃねえか。」

「お前、すごくボーとしてたからてつきり眠たいのかと思ってただけど…。」

京みたいに、樹の陰で寝ている人と一緒にしないでよ。

武器や力を制御できる為のブレスレットを使用って言うか左腕にはめた。

機械好き（マニア）のレオナさんから、『K'くんはまだ力の方もちゃんとコントロール出来てないからブレスレットはめないと大変な事になるよ。』って言われたから守るんだし…。

「俺だって、自分の中に眠っていた力がなんなのか分からないしなんの為にこの力だけが残ったのかも知りたいから…。」

京と八神さん…神楽さんには『三種の神器』と言う力を持っているのはラルフさん達から聞いていて、オロチを封印してもまだその力が残っている現実が嘘のようにある。俺だって京と一緒に今まで普通の学生だった俺が一瞬で『不思議な力を持つ』って言われてほけ顔になっちゃったぐらいだから。

「お前だったら、この事分かって思ってたさ。」

マキシマが、そういう術系統に詳しいのは知っていたしもしかしたら京はマキシマに聞いて知りたいのだろう。

まあ、俺も京の気持ちは痛い程良く分かってるしこのままだったらまた京が泣いちゃうのが分かっているから。

「俺が頼れるのは、マキシマだけだから…。」

京の行動に、理性が飛びそうになっている俺とマキシマ。

「泣かれたら、俺が困るからちゃんと説明しとかないと。多分、草薙と八神もこれ以上の事起きるんじゃないかと。」

身震いしながら、マキシマも答える。

「もしかしたらK'を…ユキちゃんを守れないんじゃないかって思ってるのか？」

ズバリの事を言われて、ちょっとドキッとしてしまった京の気持ちはマキシマ自身にも分かっている。

分かっているからこそ、京はマキシマに聞きたいって思っていたんだと思う。

「別にそんな事思っていないけど、K'は俺の事どう思ってくれてるか時々分からなくなるんだよね。本当は俺の事なんて愛してなくて、他の奴らと関係を持つたりしてるんじゃないかなあって思っちゃうんだよね。」

何、言ってるんだよ。

俺には、京しかないのに…。

京以外の人と、Hなんてしたくないし考えられない。

「京も、何言ってるんだよ。俺には京しかないし、京以外の人とHなんてしたくないもん。」

これも、本当。

だって、京や紫苑さんに嘘を言ったって何にもならないしすぐばれるから…。

それに、俺は本当に京以外とHなんてしたくないから。

「お前が、本当に自分をさらけ出したって思っているのは草薙さんだけだしお前が素直になったのって草薙さんと付き合ってからだもんね。」

紫苑さんに言われ真っ赤になってしまった俺につられて京まで真っ赤になってしまった。

「その何だ…。こつちもお前と同じファーストマザーシステムだから考えている事は一緒だし、大好きな人以外とHしてショート（完全崩壊）するのなんてとてもじゃないけどごめんだからな。」

月一回のメンテで俺は紫苑さんと一緒にラルフさんとシエルミーさんの所に行ってるのを京も驚かないで聞いている。

まあ、京にヤキモチされるのも嫌だしなあ。

京って、一旦やきもちを焼くとなかなか機嫌を直してくれないしちよっと困ったものだけど紫苑さんに横目で見られている限り俺だっ

て人の事言えないんだなあって思ったんだし自分でも直したいって
思っではいるけどかなりの末期だからなあ。

第2話です。

まーた、やらしい局面でごめんなさい。^^：

前回は京がK'と付き合った訳だけど何だか【バカップル】みたいになっっちゃったなあ…

書いている自分自身が、軽く砂吐いてます。

.....

次回予告 じかい よやく

K 「アテナちゃんが、可哀想だよ…。」

拳崇「そやね。俺も番組違ってたって言うか、スタジオが違ったから助けにも行けへんかったし。」

K' (ケイダツシュ) 「楽屋で、ずっと拳崇の名前を呼んで泣いていたんだから。」

拳崇「ほんまに、アテナには悪い事してもうたなあ…。」

今回は、第3話 太陽と月 たいよう つき。

本当は、今でもK'の事が好きだ。

だけど今のあいつには、ちゃんと好きな人がいる。

あいつ自身も、凄く好きだって言ってた。

幼馴染として喜んだ方が良いとは思っているけど、何だか複雑。

何で、『好きな人がいる』って言った時点で止めなかったんだろう。

最初から分かっていたら、こんなに苦しくなる事なんて無かったの
に……。

紫苑さんとマキシマと別れて、京と2人で見回りをして部屋に戻って来た途端電話のベルが鳴った。

またくだらないオヤジギャグが出て来そうになったけど、思いつきり説教されるか引かれるか分かっているから言いたくないしこんなベルが長く鳴っているから何かあった証拠だと思ったから。

電話の主はアテナちゃんで、『日付が変わっているから今日なんだけど、一緒に行きたいって言った拳崇は？』って俺が聞いたらその後ロバートさんの所へ行くって言ったのを知っていたから行ったらあの2人がHしそうな状況で拳崇自身が『今日は、下着やばいし女の子の体なんだよ？』って抵抗しているからお取り込み中だっと思って京と2人でしたって事を伝えたんだけど…。無理矢理されたって拳崇から聞いた時は流石にロバートさんを殴りそうになって我慢したら、壁に八つ当たりしてて…。

ロバートさんにはユリちゃんって言う彼女がいるのに何で拳崇と関係を結んでいるんだよと思ったら腹が立って来てこの状況だったらマキシマの二の舞になるって事ぐらいロバートさんだって知らないとは言わせないよ。

拳崇の体だって今、『両性具有』の体になっている時期なんだから妊娠しやすいのは知っているはずなんだけど…。

もし、ロバートさんがその事を知っていてまだHしてくるんだったらマジで最低だし年上・年下の関係どころの問題じゃなくなるし…。現にロバートさんと拳崇は、5歳も違うし今ロバートさんにとって大事な職員免許を控えている状況で問題なんて起こしたら洒落にならないし拳崇だってHばかりしていたら学校の授業単位だってやばいし…。

それに、このままじゃ拳崇だってアテナちゃんだって可哀相だよ。

拳崇が女の子の姿で妊娠なんてしたら、間違いなくアテナちゃんは泣き出すと思うしユリちゃんだってロバートさんと別れるっていう修羅場トシバチだって考えられるんだから。

まあ、そうならこっちはざまあみろって思うしロバートさん自身が自分でまいた種だから何とかしないと駄目だって事ぐらい分かっているのかなあって思ってきたりして。

俺だって、ロバートさんの事で尻拭いだけは嫌だから。

「ロバートさんは、ちゃんと責任取れるかわから無いし…。もし妊娠なんてしたら拳崇だって可哀相だし、一番可哀相なのはアテナちゃんなんだよ。それに、拳崇ばかりに責任を押し付けてばかりだったら俺はロバートさんを許さないから。」

ロバートさんはそんな事しないって分かってはいるけど、怒りの方が先に来てしまつて八つ当たりはしたくないって思っているのに…。

『K'くんの気持ちは、わたしだって分かるよ。拳崇だって修羅場トシバチが嫌いだし妊娠なんてしたらユリちゃんだって可哀相だよ。』

アテナちゃんの言葉に泣き出した俺に京が肩を抱き閉める。

アテナちゃんと話し終わって、携帯の電源を切った俺に京が聞いて来た。

多分、急に俺が泣き出したから疑問に思っただろう。

もちろん、俺が話したのはロバートさんと拳崇の事を除いてだけど。結局、今日はアテナちゃんと俺・京の3人で見回りという事になって京が見回りの地図を広げた。

八神さんは仕事終わりにこっちに向かうって言ってたから、あとで5人になるって思うんだけど。

しかも、今日は満月の日で敵が一番強くなっている日だから油断は出来ないし俺自身が寮に入る時に京とテリーさんが軽い怪我をしちゃった時に力の方だけでも覚醒しちゃったんだから…。

別に、京とテリーさんのせいじゃないって言うのは分かっている事だし。

「K'？」

俺が軽い妄想って言うか、回想に入っている間に行く準備を終えて外に出ようとすると今日に俺も少し慌てたの危なく階段から落ちそうになった。

「どうしたんだ？さっきから。ボーっとしたままで…。」

後ろを抑える形になっちゃってしまったけど、内心ちょっと嬉しくて今日に抱きつきそうになったけど近くに一緒に行くアテナちゃんがいいたから止めた。

「ごめんね。ちょっと考え事してたんだ。」

大嘘。本当は、京と屋内の温水プールでHした時の事思い出してちょっと恥ずかしかったんだよね。

「もしかして、草薙さんとプールでHした事思い出しちゃった？」

ぎくっ、バレてた…。

「な…何で…知ってたの？」

図星でちよっと驚いたけど、アテナちゃんがにやっとして話を続ける。

「知ってるも何も、私がエスパーだって忘れてない？」

忘れてはいないけど、また思い出しちゃって赤面しちゃった。だって、アテナちゃんが見てたって聞いて恥ずかしくなって来ちゃったんだもん。

「もう、K'くんのイキ顔…もうすごく可愛いくてさ。こりゃ、草薙さんも自分の理性を爆発させてボロボロにするんだろうなあって思ってた見てたんだよね。」

何で、こんな静かになっている所ですか。

「草薙さんとK'くんって普段外でHする事なんて無いし、しかも屋内温水プールの第1コースでしたからもまともに見ちゃっているんだよね。」

見てたんだったら、止めてよ。

マジで恥ずかしいし照れた顔の状態のままで見回りなんて出来ないよ。

「もう、その辺で止めとけよ。今にも爆死しそうになるから。」
「っていうかもう、爆死しちゃってるよ。」

アテナちゃんに愚痴ったって何もならないけど、自分が言い出した事だから自分で責任取らなくちゃならないって分かっているから。それに、レオナちゃんからもらったブレスレットの中には23個の『寶石』が入っていて今の段階で制御が出来るのは12個だけ。

俺自身がまだまだ未熟者だって事になるって分かっているし・・・。
「今日、どこから見回りするんですか？」

アテナちゃんが、話題を変えようとしているのは俺にも分かった事だったしアテナちゃんに聞くのなんていけない事だって分かっていたから。

「今はとりあわず、街中を見回りするんだけど、後で八神と紫苑が合流するってさ。」

まあ、あの2人の場合は合流時間までイイコトしているって思っているし2人の力は強いから期待はしているんだよね。

「もしかしたら、八神さん…紫苑さんの代わりに社さんを連れて来るんじゃないのかなあ。」

京が今現在、社さんに会いたくない理由は京がしている身震いで分かったし八神さん以上に仲が悪いって言うのも知っていたから。

「でも、俺やアテナちゃんがいるから大丈夫だよ。」
大丈夫…でもないか。

前に美術室で、俺と京・・・それに八神さんが社さんに犯された経験でこうなってしまったのは分かっていたし京があんなに大泣きしてしばらく部屋から出て来てくれなかった事から考えて酷い事をされたのを知っちゃったから。

「そう言えば、草薙さん…七枷さんの事凄く嫌ってましたもんね。」

嫌っているって言うのか、完全に拒否しちゃってるって言った方が正解だっと思って思ってたし俺だっつてそれを知っちゃった時は流石にキレて殴っちゃったぐらいだから。

俺は、京の気持ちは分かっているから。

「俺、七枷と見回りするんだっつたら帰るぞっ。」

本当に社さんの事、嫌がっているなあっと思って思ってたし後で何で殴っちゃったんだろっつて後悔しているから…。

「嫌がらないの。」

年下のアテナちゃんに言われて、ちょっと凹んでしまった京に俺は黙って見てしまった。

「K、…またボーっとしているだろう。」

「京…ごめんね。京が悪い訳じゃないのは分かっているのは、社さんを殴ってしまった…。」

本当に京が悪い訳じゃないし、俺はあの時たまたま男ver.だったから…。たまたまで片付けられる内容じゃないし義理じゃないけど…。

「京に恥ずかしい思いをさせたのは俺だし、今だっつて腰と腹が痛いんでしょ？」

苦笑している俺を見れば、京も事情を知ってくれるはず。

「K、くんが沈んでいる所悪いんだけど、時間が過ぎてますよ？」

アテナちゃんが、俺の顔を見て苦笑してしまっつたのは分かっていたし俺も何でここで言わなくちゃならない訳？

これじゃ、自分で自爆しているようなもんじゃん。

せっかく、見回りしてんのにこれじゃただのろけてるだけだよ。

「今、敵が1匹のいない状況ですけどこのまま見回りつづけますか？」

アテナちゃんが分析をやってくれているからまだ救われるけど、これが男3人だけだったらマジでムサ苦しいし回りは敵じゃなくてHで倒れている人の山になってしまうから。

京だって、そういうのは嫌だろうし…。

「後30分しかねえけど、見回り必要だろうが。それに今日は、紫苑もいるから大丈夫だしさ。」

まあ、紫苑さんはストッパーって言うかそういうのにはうるさいからなあ。

「あつ、やっぱりここにいた。社とはぐれちゃって、正直怖かったんだよね。」

怖がりって、自分で言うってどうするって思ったけど紫苑さんの手前そんな事も言つてられないし…。

「でもまあ、出る前に敵がいたけど倒して来たし…。」

紫苑さんも、何か機嫌が良いんだなあって思ったんだけど事情を知っちゃっているから何にも言えなくなっちゃった。

本当は、紫苑さんって俺以上に楽道家だって事も知っていたし…。

「時間があるんで、見回りしませんか？」

紫苑さんも今日だけの見回りって言うか、明日から仕事に入っちゃうから仕方ないって言うっちゃえばその通りなんだけど…。

それに時間が余っているからって言ったって、後25分しかないじゃん。

まあ、後25分もあればある程度の見回りは出来るだろうけど…。

「良いですよ。」

正直ここにいたって、何にもならないって事ぐらい分かっているしちよつとの時間でも見回りした方が良いよね。

どっちにしたって、家に帰っても寝るだけなんだから。

「京：あのさ、夜中にHしないでね。俺、明日も学校なんだからHしたら体がもたないし学校休んじゃう事になるんだから。」

一応京に伝えておかないと、間違いなくHすると思ってるし…。

しかも、こんな日に限って京は激しくして来る可能性だってあるんだから…。

「もう、国語なんて単位的に少しやばいんだよ。何とかテストでこまかしてるし、ノートだつて出しているんだから。そのせいでマキシマには、思いつきり横目で見られるんだし…。」

これを言えば、現役の大学生である京も分かってくれるはず。

「京のせいで、高校卒業できなくなつたらどうするの!？」

俺が少しむっとしてしていると、京が苦笑してしまった。

正直この場合は、ざまあみろって思ったけど京に泣かれると困るので黙っている。

「そんなの…俺が、責任持つてやる。」

責任持つつて…俺にしてみれば、死活問題なんだけど。

「2人共、敵の探知出来たよ?」

アテナちゃんが、俺達の方を見て青筋を立ててしまったのは暗がりでも分かつちやつたし、今にもサイコボールを一発出しそうな状況になつちやつてる状況だつて事も…。

まあ、機嫌を損なわせちゃったのは俺らだから何にも言えないんだけど…。

「まあまあ。アテナちゃんも、ココで仲間割れしてどうするの?」

紫苑さんが苦笑しながら、俺とアテナちゃんの間に入ってきた。

「お前もお前だぞ。敵が攻めてこないから良いけどこれで囲まれたら終わりだぞ。」

確かに紫苑さんの言う通りで、京も慌てて俺を引き離れた。

「何も草薙さんが、引き離す事も無いじゃん。」

だつて、紫苑さんが思いつきりからかつたせいじゃん。

京も、耳まで真っ赤になつちやつたし…。

「…。」

しかも、黙つちやつて…。

「紫苑…あのさ。」

しばらく黙っていた京が、紫苑さんに話する。

「何？」

京が真剣な顔をして、更に話を進める。

「お前は八神にとつて、大事な人だつて思つてくれているんだろ？」
そんな当たり前な事を、紫苑さんに聞かないでよ。

八神さんは普段心の通つている人だつて思われているけど、結構「ヘタレ」なんだよ。

そりゃ、八神さんだつていけない事かも知れないけどさ…。それに八神さんは末期の、浮気性で…。

だけどさ、紫苑さんつて言う大事な人を忘れる事なんてないつて思つているしどんな女の人八神さんと一緒にいたつて八神さんが自分で大事な人だつて思つてないんだから。

「そりゃ、俺には時々困つた時があるよ。だけど、あたしは俺の事大好きだよ。」

それを聞いて、京がにやりしたのは俺には分かった。
分かったから、俺は何も言えなかつた訳で…。

「俺だつて、現にあたしの事大事にしてくれているし…。たださ、一つだけ言いたいのはHする時すごく激しくてさあ。何回もこつちは壊れかけて泣いているのに、まだHして来るんだから…。」

「へえ、八神がねえ。」

京：それじゃ、オヤジくさいよ。

「てつきり、やるだけやってポイつて捨てんのかつて思った。」

まあ、京が人を信じれなくなつたのは社さんのせいだつて知つてはいるけど何も紫苑さんに八つ当たりする事無いと思うよ。

悪いのは、八神さんなんだから。

「あたしもそう思つていたけど、俺自身はあたしの事そんな風に思つてないつて言つてくれたから安心しているんだよね。」

紫苑さんがムつとなつてないから良かったんだけど、今度は京の様子が変わつた。

「俺って…七枷にとって、セフレ（セックス・フレンド）なのかなあ…。」
様子が変わって言うか正確に言ったら、気分が落ち込んでしまったから俺も紫苑さんも何も言えなくなってきた。
でも、これ以上社さんの事で京自身がトラウマを悪化させて壊れるのなんて嫌だ。

「そんなはず、無いじゃん。」

俺が慌てて否定したのは良いんだけど、今にも京が泣きそうな顔になっっている。

その気持ちは、痛い程良く分かっている。

分かっているからこそ、今は今日の近くにいたいって思っている。
あれほど、京が嫌な気分になったのは始めて見たし社さん自身が京の事を自分の性欲の為に関係を結んでいるとしか俺には思えなくなっってしまった…。

「K…。」

俺だって、京をこれ以上辛い思いにはさせたくない。

って…俺も、京が言った言葉の受け売りしちゃっているけど…。

「俺だって京と関係を持った時に、セフレなのかなあって思ったけど京自身は俺の事大事にしてくれるって言ってくれたし正直嬉しかったんだ。でも、肝心の京がトラウマに苦しんでいるのを黙って見るのなんて俺には凄く辛くて…。」

俺の言葉を受けて、アテナちゃんも紫苑さんも黙ってしまった。

もしかして、社さんとの一夜が良かったのかなあ…。

そう考えると何か、すごくイラついてきちゃって…。

京にイラついたって、何にも意味が無いって言うのは分かっているけど…。

「今日の敵は、4匹…と。」

紫苑さんが敵の数とみんなの無事を確認しているのを見て、俺は京をまた押し倒そうとした。

案の定、俺は思いっきり拒否されて京は涙目になってしまった。本当に嫌だったんだなあって思ったんだけど、体が言う事を利かない。

結局、京を犯すとまでは行かなかったから良かったんだけどあんなに京が泣いちゃったのは凄く驚いちゃったし…。

一旦、作戦本部に戻っても泣きながらIDナンバーとパスワードを入れていてさっきの事が凄くショックの大きかった事だったって俺も冷静になって考えた。

あの後、げんこつ付きで紫苑さんに説教をされて自分が改めて京に対して悪い事をしちゃったんだなあって思ったら凹んできちゃって…。

京に謝ったら、許してくれるかなあ。

『トラウマが酷くなっているのに、あんな事しちゃって悪いのは俺の方だし京が泣いちゃったのも分かっているから。でも、俺には京しか考えられないよ。』って…。

第3話です。

第1話・第2話と違って、やらしさが無い見回り編です。

自分も、脳内がやらしい通り越して【変態】なんでどうしたもんかなあつて思つてちよつとデジャブになつてしまいました。^^:

.....

次回予告 じかいよやく

拳崇「俺、単位取れへんかつたらどうしてくれんですか？」

ロバート「大丈夫やないの？テストの点数、そんなに悪くないし学校の授業だつてサボつてないんやろ？」

拳崇「(また無責任な事を...)俺が勉強をしようとする、誰かが身体を触ってくるやないですか。俺にだって、大学進みたいって言う事聞いたはずやのにロバートさんはHしたがるやないですか。」

ロバート「うっ(汗)」

今回は第4話。秋の暮れ頃。

学校行事が全部、嫌いって訳じゃない。

むしろ楽しみにしているんだけど、テストとこの行事だけは嫌い。

自分の頭の悪さが露呈^{ろてい}するし、何が悲しくて人の営みを見なくちゃならないんだ。

何だか可哀想って言うか、自分がむなしくなってくるし凄く複雑だから。

それにテストの点数で、人に馬鹿にされるのも嫌だからさ。

京を泣かせてしまつてから、部屋に着くまでの間京が納得するまで歩きながら話した。

正直、未遂とはいえどあんな事をしてしまった後だったから寝れる状況ではなく丁度明日が休みだったからっていう言い訳で話そうと思った。言い訳を使うんじゃない、本当にちゃんと謝らなきゃならないって思っていたし俺だって、紫苑さんに説教されるのなんて嫌だったから…。

自業自得だつて、自分でも思っているし紫苑さんには散々20分以上も説教をされてしまったからもう勘弁なだけだね。

「京…。さつきは、ごめんね。」

俺が、さつきまで泣いていた京の涙をぬぐっている。

結局、京を泣かせたのは俺の責任って言うかトラウマを引き起こしちゃったから悪いんだけど…。

今にして見れば、何であんな自分の理性が止められなかったんだろうつて後悔はしている。後悔したつて、京が現に泣いちゃつて俺が紫苑さんから説教をくらつて…。

「俺は別に、K'が悪い訳じゃないって思っているし元はといえば七枷が悪いんだからさ。」

口では明るい事を言う京を見ると、何だか淒く心配で…。

ななかせ
七枷さんだつて悪いって知ってはいるけど、今回の件は俺が悪いんだから。

「でも…。」

人間として一人の男として最低だつて自分でも思っているのに、何で素直にあの時「ごめん」って言えなかったんだろ…。

「お前は、俺の事を心配してくれているのは正直嬉しいよ。だけど、お前にも辛い思いをさせてしまったんだからさ…。」

京が俺にそう言う事を言ってくれたのは良いんだけど、何だか凄く複雑で…。

いつもは元気いっぱい京が、七枷さんに犯されてから一気に元気を無くしちゃって今回俺がバカみたいに傷を広げる行為をしてしまったから泣いちゃって…。

結局は、また京に気を使わせてしまったし…。

「K、？」

京が笑顔で、首を傾げてきた。

思わず、理性が爆発しそうになったけど…。

ココに紫苑さん達が来たら、にやりされるしからかわれて最悪なんだけど京の状況でこうも言ったられないって言うのが分かっているから…。

情報メールを確認しても京が泣いてしまった事は気になったし、自分の理性がまた爆発するか分からないから今日の顔を見てられない。

「だけど、京の事襲おうとしたんだよ！？」

嘘は言えないから、正直に言わなくちゃ京だつて納得出来ないはず。トラウマの事を気にしていたのは、京にも分かったらしく黙ってしまったけどHなんてココ2週間ぐらいしていない。

それに、今の俺の姿は元の女の子としての体じゃなくて男としての体になっているからまたあの時みたいに理性が爆発するか分からない状況になっているのは変わらなくて…。

京の仕草一つ一つ取っても自分の中では可愛い動作しか捕らえなくて、今度は未遂程度じゃ収まらなくなってしまう事だつて考えなきゃ。

「最近、俺とHしてないけど俺の事嫌いになっちゃったの？」

何で自分がココでマジな顔になるって思っただけ、京の顔を見ていたら収まらなくなっちゃった。

「そんなんじゃないよ。」

京が照れ顔になっているのを見て、俺は京に抱きついた。抱きつく程度なら、自分の性欲を抑える事が出来ると思ったし身長的に京がちょっと高めだから俺が抱きつかれているって思うと思う。だから…。

自分勝手な事だつて、思っているけどね…。

京と男の子ver.でHしちゃいそうになって、凄く罪悪感を覚えているし京がイツちゃった時だつて思わず俺も強制ログアウトしそうになってしまったのは事実だから…。

「後で、紫苑に『草薙さんも、本当はあの時大きな声でイキたかったんじゃないんですか？』って言われたんだぞ。」

まあ、紫苑さんの事だからマジで真顔で言いそう。

図星で、何も言えなかつた京も京だけど…。

「紫苑さんらしいですね。」

「俺、本気で泣いたのに紫苑つたら放置してくるからすごく嫌な思いましたんだし…。」

実際のところ、紫苑さんはそういう事にうるさいって言うか根が腐女子だから『ふーん』って返せるけど改めてそれを言われるとちょっとむっとしてくる。

それに前に、B・ジェニーさんが音響室で男子生徒に強姦されているシーンを見た事があるし…。しかも、授業中でいくら防音な造りの教室でも見事にイキ声が聞こえてしまったしさ。

「確か、明日つて一日中Hの授業でしたっけ？」

学園には、普通の授業の他に戦闘で使う武器の授業や防具の使い方・呪文魔法の授業などがある。

Hの授業もあるのだけど、明日はその祭の日らしい。

俺等と一般生徒2343人がほぼ強制参加で朝5時から3日後の夜11:30までずっとHしている大会の事。

体育館が一瞬でラブホテル状態になってしまうのは分かっているし、

イキ声も大きく出さなくちゃならないって言う決まりや中出しもされなきゃならないって言うてたから…。

このH祭りで、全員仮契約から本契約に替わるって言う話しもある。アラーム代わりに毎年選ばれているのはアンディさんと舞さんカッブル。

去年子供が、4人も生まれてもまだまだ健全らしいし…。

去年なんか、前みせとか駅弁って言う体位とかでイカせて舞さんが気絶して動けなくなってもまだしてきたんだから。あまり、大きな声で言えないけど俺はテストとこの行事が嫌いだ。

去年のご奉仕組だった桃子ちゃんなんて、一般の男子生徒に何回も中出しされて一旦は心臓が止まってたんだから。

今年は、ご奉仕組としてレオナちゃんが出るらしいし絶対に手淫だけでも10分は過ぎてしまうから…。

「京は、今年参加するの？」

一応は、聞いておかないと…。参加するって言った場合、H大会開始のアラームが鳴った途端俺のイキ声が体育館に響きだすと思うし…。

俺も京も過敏症だから、逆効果になるって事ぐらい分かっているし。

「しないよ。だって、まだ完全にそう言う状況じゃないからな。」

「まあね。」

本当にホッとなったんだけどどっちにしたって、紫苑さんがHされている反動で俺は一緒になって感じてしまうのがオチだって分かっているしそう言う状況でも京が触ったと同時にイツちゃうよ。

八神さんが俺と紫苑さんが同じファーストマザーシステムなのを知っているのに、何で参加したのさって思うと少しムツとしてくる。

イライラしたって何にもならないって分かっているのに、京の事をまだ狙っているからちよつと嫉妬みたいのがあって…。

『京は俺のものだ』って分からせたいって思っていて、しつこいのかまだ狙ってくるし…。

肝心な京が、その行動を俺がすると真っ赤になって隠れちゃうって言うそぶりを見せてくるからこれはこれで良いと思っっているんだけど八神さんまで鼻の下を伸ばして京を見ているんだよね。

自分が、こんなに嫉妬深かったんだなあってちよつと凹むけど京の事大好きなのは変わらないもん。

シエルミーさん曰く、『どつちも、女々しい』って言われているのはこのせいもあるけど仕方ないって思っているしシエルミーさんには関係ないじゃん。

俺が、そういう顔をしてしまったから京も苦笑しちゃって…。

俺がどうして怒り出したか、京には分かっちゃったのかなあ。

「K、？」

何で俺も、きよとんとした顔になっちゃってるんだよ。原因を作ったのは俺なのに肝心な俺がこう言う表情かおでどうするんだよ。

まあ大会が終わって謝られても、絶対に許すもんか。

俺が京の上に乗っかって見ていても、八神さんが紫苑さんと一緒に出場するとなったら京に乗っかったままイツちゃうのがオチだし一緒になってショートしてしまうのが必然だったから。

「ごめん…ボーっとしてた。」

京が完全に心配した顔になって、俺の顔を見た。

京自身も俺と紫苑さんが同じファーストマザーシステムだって事を知ってるし、俺が感じやすい体をしているって事も良く知ってる。

だからこそ、この大会には出たくないんだ。

それに、京は長男だから次期皇帝になるのが決まっ…。

「俺ね、京が帝になっても京の事好きでいようと思う。」

例え、後で大問題になったとしても…。

京を好きなのは嘘じゃないし、俺が始めてをあげた人だから。

今更、Hした事まで忘れるなんて嫌だし京は俺にとって憧れの人だから…。

まあ、京はちよつと「残念」の人だから最初は自覚しなかつたみたいだったけどあんだだけ俺が『好き』って言つていつてたんだから気付いているのかなあつて思つてたのに…。

京と初めてHしちやつた日には学校も仕事にも行けなくてアテナちゃんにバレて思いつき「にやり」されたからさあ。

京は、少し天然なんだよつ。

まあ、そこがファンの子が好きだつて言うところらしいけど…。

「俺も、お前の事…忘れたくないから…」

京も俺と同じ事を考えていたらしくて2人して笑つてしまった。

今日は見回りが休みだからゆつくり出来るんだけど、京の事だから『ゆつくり話そう』って言うのが分かつているし俺も京も家から出ない「インドア」派だから話しても良いんだけどせっかくの休みだから京と2人で「デート」したいんだよね。

仕事が入つちやうと、なかなか会えないしファンの子は俺らが付き合っている事を知らないから集まつて来ちやつて大変な事になるのが分かつているから…。

京のマネージャーさんと俺のマネージャーさんが仲が良いからお互いに内密と言う形で認知してくれているし、それだけでも救いなんだけどたまに京と一緒にバラエティーの仕事が来るとちよつと困るんだ。

だつて、俺は事務所の方針で「男」つて事になつているし京と事務所が違うから相手の事務所の社長さんにも迷惑がかつちやうし。

「俺もだよ。」

京には安心させないと駄目だつて、同じ事務所であるビリーさんに言われているから…。言われなくても、そうしたいつて思っているし。

「京。明日さあ、デートしない？ちよつと、行きたい所あるんだよね。」

笑顔になつて、京の顔を見てたら京が耳まで赤面しちやつて…。

何を考えているのか分かつちゃったんだけど、京の赤面を黙って見ていても何か安心する。

京って女顔でも、体がちょっとむつきりしているから「うーん」って思っっちゃったんだけど仕草が俺以上に「女の子」っぽいからたまらないんだよね。

まあ、俺が「男勝り」なだけだね。

第4話目です。

K' が通っている学校の事をUPしとります。

こうしてUPしていると、やっぱり学生時代が一番良かったのかなあ
て思ってたよとデジャブになったりあうあうになったり...

.....

次回予告 じかいよぐ

K' 「絶対に、紫苑さんに説教(怒ら)されるなあ。」

京「どうした?(きよとん)」

K' 「あのさ、こないだテストあったじゃん。」

京「おう。それで?」

K' 「それでテストの点数で、化学の点数だけ悪かったんだよね。

しかも、赤点でさ。」

京「ありや。」

K' 「それで、そのテストを紙飛行機にして遊んでたら紫苑さんの
頭にクリーンヒットしちゃってさ。(汗)紫苑さん、風紀委員長だ
からそういうのにはうるさいしさ...。」

京「そんなの、K' が悪いじゃん。自業自得だよ...。(汗)」

次回、第5話。 あ 出会いと別れ わか

あの時から、何だか変だと思っていたんだ。

誰かが、後ろから付けて行くみたいで凄く怖くて。

早歩きとかで帰ったり、先輩から飲みに誘われても断ってしまっていた。

誰にも、恐怖になっている事を言えずにいたんだ。

もしかしたら、俺が狙われているんじゃないのかって思っていたし怖かったんだ。

大嫌いな行事のH祭りから2時間が経って、俺と京は外の空気を吸いにちよつと散歩してた。

正確に言ったら、気分が悪くなったからあの場所から早く出たくてたまらなかつたんだけど『強制参加』だったから嫌でもあの場所にいなくちゃならなかつたし。

レオナちゃんが、ラルフさん以外の人とあんな事になってしまっているのをすぐにラルフさん自身の耳に届いてしまっているからラルフさんだって辛いと思ってる。

俺だって、レオナちゃんを怒れる事は出来ないしもしかしたら泣いてしまうのが分かっていて何にも出来なくなっちゃう。一年も前から、レオナちゃんが次の【ご奉仕組】だって言う事は決まっていたから。

それに、怒れるはず無いよ。ラルフさんだって今の彼女であるレオナちゃんと付き合う前にウィップさんと関係を持っていた事はアテナちゃんも俺も良く知っている。知っているから、レオナちゃんにはもちろん言えなかつたし…。ラルフさんは、俺の学校の直接の先輩だしメンテナンスもしてくれる人だから…。

あんなにレオナちゃんが、唯一妻子持ち（家族がいる）であるキムさんのを受け止めて何度も中に出されて気絶しちゃって…。

俺と紫苑さんはその光景を、まともに見てしまった。

今、レオナちゃんはヴォネツサさんの所へ行ってるし…。もし目が覚めてキムさんの事で思い出したりでもしたらまた泣いちゃうのが分かっている。それだけ、レオナちゃんにとってシヨツクな事だったから。

それでもまた、キムさんが自分の体を密着させて一滴も残さずレオナちゃんの中に出したのは事実だしレオナちゃん自身が人よりも妊

娠しやすい体だから妊娠が分かったらラルフさんがキムさんを殴るのが分かってるから…。

「K' ?」

俺がずっと考え事をしていたから、京に首を傾げられてしまった。

「レオナの事？」

京自身も、レオナちゃんが犯された場面を見ちゃったから俺がムツとなってる事も分かっているんだろうつて思う。

30分ぐらい前から考え事をしていたから、頭がぐるぐる回ってくるし辛くもなってくる。やっぱり、前世の記憶を覚醒しているせいでもあるのかなあ。

だったら、紅丸さんへにまるだつてついで覚醒したっておかしくないよ？

真吾しんごがあんだけ自分の記憶を覚醒する速度を早めているから、いつ本格的に覚醒するか分からない。

と言ってる俺自身も、いつ覚醒しちゃうのが分からないし今は覚醒するのが正直怖い。

もしかしたら、京の事も忘れて何もかも無の状態になってしまったら…。

それを考えてしまうから、京とのデートの時にずっと明後日の方向を見てしまうんだ。

「京は、俺が完全に覚醒した時…ちゃんと俺の事見てくれる？」

俺が聞いたかったのは、本当はそんなんじゃない。

本当は力の覚醒するのが怖くて、京に言えなかったんだ。

「全部覚醒しても、お前はお前だろ。」

京の言ってる事は、すぐに分かった。

もう一度言葉を聞き直そうとしても、耳が真っ赤になっているから聞き直せない。遠回しで考えても、これはプロポーズみたいになっちゃうよね。

正直に喜びたいって言うのは俺の心にあるけど、いざ行動に移す事が出来ない自分がある。

「京…。」
「やばい、やばい。」

ここでHなんてしてたら、京のマネージャーのシエルミーさんにニヤリされるのが目に見える。

京だって、ここでHする気なんて無いだろうし…。

「K…、あのさ…。」

京が少し照れて俺の顔を見て話しているのを見て、俺は首を傾げてしまった。

「K'の性欲が強過ぎて辛いんだったら、その性欲…俺に全部ぶつけて良いから。」

京のその言葉を聞いて、理性が保てなくなってしまいそうだったけど何とかごまかせた。

京の方から時間関係なく誘ってくれるなんて思ってもいなかったから正直驚いてもいたしさ。

「本当に、しちゃって良いの？俺みたいの後で、『嫌だ』って言わない？」

一応は信じているけど、俺自身もなんか不安で…。

もしかしたら、京を傷つけてしまうんじゃないかなど思ってから来てやって…。いつつもさ京は俺に対して、こんな感じなんだなあって思った。

でも正直に言っちゃえば、京の感じている姿とか京を泣かせたいって思ったのはあるんだけどね。

「このまま…七枷さんのものになるなんて…俺、嫌だよお…。」

京が泣き出してしまったのは、俺にも一理あるけどもとわと言えば全部七枷さんのせいじゃないか。

京の言っている事も分かるし、社さんが行く所は京は拒絶しちゃって体が震えちゃっている光景は俺には分かっていた事だったし。

京自身は、俺に言えなかった事ですつと悩んでいたんだなあって思

つたけど今の俺には何も言えなくて。

「K'の言いたい事は、俺にも分かるよ。自分で七枷さんの事を避けて通っていたら俺が辛くなる事ぐらいは。だけど、俺が七枷さんに犯されたのは事実だし今だって七枷さんに会うと体がすくむって言うかフラツシユバツクが起きちゃって…。」

泣き止まない京に、ただ黙ってしまった俺。

玄関のベルが何回か鳴っているのを気付かないで、俺は慌てて玄関の方を向かった。

玄関のドアを開けて覗いたら、そこには八神さん・紫苑さんカップルとテリーさん・マリーさんカップルが立っていた。

八神さん自身も京が社さんに犯された事は知っていて、詳しくつかまないうちでいたのは分かった。さっきまで京が泣いていたのがばれているし余計に泣かせたくないと思っただらう。

俺だって、本当はそう思っている。

でも、これで京とH出来なくなっちゃったよな…。

「どした？K'まで暗いぞー。」

テリーさんのノー天気には負けますよ。

そのノー天気はチーム1だって弟のアンディさんから聞いた事がある。

まあ、多分脳内ノー天気のアツシユさんと対を張れるんじゃないかなあって思えるようなノー天気だって俺は思っているしこんな状況だから俺には唯一の救いになっているんだ。

「本当、お前って何にも考えてなさそうだなあ。」

京が苦笑してテリーさんに毒を吐いたら、頬を膨らませてしまった。

「何だよ。それー。」

いじけてしまったテリーさんを慰める事しか俺には出来なくて…。

「どうせ、K'が京を犯そうとしてたんだろ？」

な…何、言ってるんだよ。でも…待てよ。

そう言えば、テリーさんって俺とユキちゃんが体を共有している事

知らなかったんだっけ。

「真っ赤になつていゝ所を見れば、凶星だつて事なんだよな？」
紫苑さんにも言葉のトドメで、何にも言えなくなつた。

もちろん、紫苑さん達が来なかつたら間違ひなく京を相手に自分の性欲を暴走させていたと思つしいつもの京みたいに朝までHしちゃう可能性だつてあるから。

今考えたら、おいおいつて思つちやうけど…。

「俺が紫苑達と途中で会わなかつたら、お前等のHに参加したかつたんだけどよ。」

スケベ
変態っ。

まったく、何考えているんだよ。

「テリー…。あんた、あたしの事忘れてないか？」

テリーさんだつて、俺がユキちゃんと体を共有している事を知らなくても俺と紫苑さんが同じマザーシステムだつて言う事知つていゝから何も言えなくなつて黙つていゝ。

当然凶星だつてすぐに分かつた紫苑さんは、テリーさんに向けて鼻で笑つ。

「わ…忘れなんか無いよ。俺だつて、自分の性欲を京にぶついたら駄目だつて思つていゝしマリーがしばらく来ないからつて彼女以外の人とHなんて出来ないしマリーはいつ帰つてくるか分からないから…。」

「言い訳なんて、してるんじゃないの。どつちにしたつて、K'を通して草薙さんとHするつて素直に言つちやえば良いじゃないか。」
横目で見ているのは、俺自身がすぐ近くにいたからテリーさんだつて分かつたけど結局はマキシマ達と一緒にゃん。やるだけやつて、そのままだなんてマジで酷すぎるし京だつてそんなのは望んでいゝと思つし俺だつて嫌だ。

「本当は、どう思つていゝんだよ。」

八神さんも何の事だか分かったらしく、テリーさんに横目をしちやっっている。

「でも、俺も京が相手ならシヨック死寸前までHしていると思う。こつちもこつちで、ドスケベな事言ってるし…。」

「八神…。お前、何か変な事…考えてるだろ…。」
京も苦笑しちやっと思って思いつきりにらんでいるし、八神さんの彼女である紫苑さんも少しむっとしちやってる。

まあ、俺にしてみれば『ざまあみる』なんだけど。

「K…。お前って、結構…腹黒いな。」

紫苑さんが何かに気付いて、俺に話し掛ける。

そういえば、紫苑さんってテレパシストでしたっけ。

アテナちゃんから、『しーちゃん（紫苑さんの事）もここに来る前に校長先生と能力の事で話してたのを聞いてて…。本当は、こんな事しーちゃんに言ったら怒られるかなあ。』って言ってたけど肝心の紫苑さんが自分で『テレパシスト』だって事言ったから…。

俺には、紫苑さんの気持ちが分かるから何も言えないんだけどね。

まあ、さすがに『腹黒い』って言われたのはムカつくけど。

「K…。お前、何凹んでるんだよ。だせえなあ。」

誰のせいだと思っっているんですか。

まあ、紫苑さん相手に怒っても仕方ないって思っってはいるけど改めてそれを言われるとちよっと凹む所か涙が出そうになる。

当然その光景を見た京と八神さんは、苦笑するしかなくて…。

「こらこら、紫苑。」

八神さんって、苦笑していると急におばさんくさくなるんですね。にやりしたって、俺には関係ないけど。

当の紫苑さんだって、俺の顔を見て苦笑しちやっただけど…。

「ごめん…。言い過ぎた。」

でも、このまま紫苑さんを落ち込ませてられないな。

「気にしないで下さい。」

俺がそう言つと、紫苑さんは笑顔になるし返つてテリーさんが俺と京の肩を抱きだした。

急な事だったし当然の事、その手を払いたかつたけどテリーさんの力の方が強い。

しかも京は、すでに目をトローンとさせちゃつてる。

京つて、俺以上に過敏症過ぎるのかなあ。

つて、感心している場合じゃない。

テリーさんは、今の彼女であるマリーさんと付き合う前は八神さん以上に女付き合いが凄かつたつて聞いていたし噂通りだったら女の子系の顔をしている京なんて狙われやすいつて事ぐらい俺が良く分かつてる。

分かつているからこそ、京を辛い目には遭わせたくないつて思つているし俺だつて京がこのまま自分の殻に閉じこもつてしまつのを黙つて見ている訳にはいかないつて事ぐらい自覚はしている。

自覚していても、何にもならないつて事ぐらい自分の中にあるから葛藤はしているんだけど。

「テリーさん。京を、どうするんですか？」

ちよつと怒つた感情を、俺が見せていてもテリーさんの手の動きは止まらない。

京自身も、テリーさんがこつこつという行為をして来るから抵抗できない。京の目には、大粒の涙が流れて来てしまつているのを見ててテリーさんは何とも思わないのかなあ。

俺だつたら、後味が悪くなつて絶対にしないけど。

でも、俺とテリーさんはタイプが全然違うから。

「やだ…あ。」

大泣きしてしまつている京を見て、初めて正気に戻つたテリーさん。

「こんなの…嫌なのにい…。何で…関係…持とうと…してんの…お？」

「京？」

俺がちよつとほけ顔をしたまま、京の肩を抱こうとした途端京の声が大きくなる。

京が、大声を出している時は大抵キレちゃった時と思いつきり拒絶しちゃっている時の2つだけ。

今回の場合は、七枷さんに犯された事でトラウマが原因だから思いつきり拒絶しちゃうのは分かっていたし俺もテリーさんの腕を払いよけようとしているんだけど何分力が強いのでこっちも困っている。

結局は京を、完全に犯してしまい気付いたら京が思いつきり泣いてしまつて…。

第五話です。

すいません…：またやらしかしました。^^：

だって、本音を言いますけど自分の脳内って本当に【変態】だから
こんな事も考えてしまう訳です。

言い訳したって、何にもなりませんけど…：^^：

.....
.....
.....

次回予告
じかい よやく

紅丸「良く、妻子がいるのに他の子とH出来るよなあ。(汗)俺だ
ったら考えられないよ。」

真吾「バシたら、裁判沙汰になるのにどうして堂々としちゃうんで
しようかね。確か、キムさんの所って【恐妻家】のほすですよ?」

紅丸「そだね。それに、奥さん武道してるから力強いし…：。」

真吾「(汗)紅丸さんだって、本当は浮気したいって思っているん
じゃないでしょうね?」

紅丸「(あわてる)そんな事…：思っている訳、ないじゃん。」

真吾「(じいー)」

次回、第6話。夜桜よさくらと月つきの明あかり

.....夜桜と月の明かり　　cherry blossoms by ni

京^{きょう}が、凄^{しみ}く辛い思いをしたのに俺は何をしてたんだろう。

守^{まも}りたいって自分で言ったのに、最低だと思った。

今も凄^{しみ}く罪悪感に陥^{おと}っていて、ちよつと辛いけど京^{きょう}をちゃんと元氣

な元の明^あるい京^{きょう}に戻^{かえ}せるのは俺^{おれ}しかいないって思^{おも}っているから…。

珠洲^{しゅう}を喜^{よろこ}ばせるのも、悲^{かな}しませるのも俺^{おれ}だって分かっているのにこ

れじゃウイップ（お姉ちゃん）に怒^{いか}られちゃうよ。

京がテリーさんに良いようにされたから、丸一日が経った。

京がああの後、目を覚ましてからずっと夜中まで2人で泣いてて京が落ち着いたのが朝の5時半だった。

シヨックが大きかったから、仕方ないって思っていたけど何でテリーさんもあんな事をしちゃったんだろって思っていたらイラついてきているし俺だって体がだるいから学校を休まなくちゃならなくなってしまうって…。

本当だったら、テリーさんを今にも殴りたいって思っているのは事実で行きたいって思っていたけど京がまた泣き出すのが分かっていたからこのまま放置なんて出来なかったしそんな事したら京と契約した『聖杯の紋章^{ハート}』が壊れて今度こそ紫苑さんにも迷惑がかかってしまうから。

だって、俺と紫苑さんは1つのマザーシステムでつながっているもんだし今度シヨートなんてしたら一生起き上がれなくなってしまう可能性だってある。

そう考えてしまったら、背筋が凍って思考が停止しちゃうのだって自分にも分かっている。

まあ、学校に行こうとして途中で紫苑さんに会っても、『体力がない状態で、学校に行くなっ。』って言われるのがオチだし…。

「京…座れる？」

心配した顔をしている俺に気付いたのか、京も苦笑しながら話した。「少しだけだったら…。」
痛い腰をゆっくりと起こしてベットに腰掛けた京。

さっきまでテリーさんに散々されてしまった後だったから、起き上がるのも大変そうな姿を見るのが嫌だったから。

それに、京の右肩にあった痣が変化しちゃっているのを俺以外の人

に見られたらどうなるんだろう。

考えただけで、頭が痛くなってしまうからどうする事も出来ない。京もそんな考えの俺の顔を、心配そうに見ていると思うとちよっと気を使っちゃう。

「K…俺のせいで、こんな事になって…ごめんね。」
でも、京がそのまま辛くて発作を起こすのを見るのなんてまっぴらごめんだし泣かせるのなんてもっと嫌だ。

「K'以外の人と関係持つちゃったし、お前の前でテリーに言いようにされた所を見られて…。」
結果的に、また京を泣かせてしまったんだけど。

「本当は…俺だって…テリーの事…殴りたいよ…。だけど…だけど…そんな事したら、テリーが俺とのHを公表する（バラす）って…。」

「は？…何…考えているんだかつ。」
俺が少しキレ気味になっているのを見て、京の涙は更に止まらなくなっちゃった。

「俺とのHは激しかったとか、気持ち良かったとか…。」
泣きじゃくってしまっている京を見て、俺は怒れなくなってしまった。

だって京が、悪い訳じゃない。
悪いのは、京にトラウマがあるのを知ってて良いようにしてなおかつそれを話すって言い出したテリーさんだ。

今、体が震えてしまっている状況であの時の事をテリーさんの口から言われたらトラウマが酷くなって京は表に出られないで引きこもっちゃう。

しかも、京の中にはまだテリーさんに散々出された跡が残っている。俺だって反動で、体が動けなくて…。

「俺…テリーに…中に出されちゃったんだ…。」

タオルケットで、涙を拭いた京が俺の顔を見る。

「K'は、俺が他の奴らと一夜を共にするのどう思う?」

「どう…思うって…。そんなの、考えたって分かる事だよ。」

「俺、京じゃないと嫌だ。」

これは本当。だってこのままだったら、一番辛いのは京だと思ったしテリーさんに対して少しの呆れと大きな怒りがあるから。

でも本当に、テリーさんが全部話して京の事をそう見ている奴らがいたらどうしよう。

多分って所か絶対に、京が大泣きして今度こそ立ち直れなくなってしまうのが分かっていたから。

誰だって、そんな京を見たくないし俺まで辛くなる。

「一人でいるの…寂しくて嫌だよ。」

テリーさんが悪いのは分かっているけど、俺自身がキレたって京が泣き出してしまったら何にもならないって事ぐらい分かっている。

分かっているんだけど、京があんなに泣き出してしまっているのを黙ってみているのなんて嫌だし黙って後でシエルミーさんに説教されるのが嫌だから…。

考えただけでテリーさんに対する怒りと殺意を覚えてしまうから、無理に考えないでおこう。

京がまた泣いてしまったら今度こそ、俺のせいだって思われる。

俺が京から体を引き離すと、同時に玄関のベルが鳴った。

「京…いるか?」

この声の主が、八神さんと分かった京が慌てて服を着替える。

八神さんと紫苑さんがコンビニへ行ってる間に京はテリーさんに強姦されてしまったんだから。

しかも、京の中にはテリーさんのがまだ残っている。

女の子顔だからって良いようにしても良いって言っている訳じゃないんだし京だってテリーさんに対して恐怖感を覚えてしまったのは

事実なんだから。

まあ、八神さんもそっちの系があるからあまり安心できないんだよね。

そんな京の変化に気付いたのもあるしテリーさんがいない事に気付いた紫苑さん。

「草薙さん……。もしかして、テリーに何かされたの？」

八神さんにしたって紫苑さんにしたって、そういうのには鋭いからすぐに分かったんだらう。

「ちえつ、京の味見：先に取られたか。」

また、^{スケベ}変態な事言ってる。

「何、俺もさりげなく草薙さんを襲おうとしてんの？」

紫苑さんもムスツとしちゃったし、せつかく京が身震いから解放したって言ったのに八神さんが余計な事を言ったからまた身震いしだしてしまった。

「ほら、草薙さんも身震いし始めたじゃん。俺が身震いさせたんだから責任取りなよ？」

紫苑さんが本気で怒ると、本当に怖くて……。

「草薙さんだって、辛いんだよ？なのに何で俺が、そんな事言っつ訳？」

一旦、紫苑さんが嫉妬してしまったらなかなか機嫌を直してくれないのは八神さんでも分かるはず。

「ほら、紫苑さんも怒り出しちゃったじゃないですか。」

京の身震いも段々酷くなってきているから、俺もなんか心配になって来た。

「一番苦しいのは、身震いしちゃっている草薙さんなんだから。」
当然、俺も一緒になって苦しくなっている状況を紫苑さんは考えてくれているんだらう。

それだけでも、感謝しているんだけど……。

返って、紫苑さんに気を使わせちゃったのかなあ。

「俺が、草薙さんを犯したりしたら、こいつ（K'）まで一緒に苦しみだすって事…認識してる？」

紫苑さんが、八神さんに顔を近くまですると凶星だったのか言葉に出ないのを確認した紫苑さんが更にトドメ。

「こいつ（K'）まで苦しがつっていると、こっちが共鳴して大変なんだからね。」

…ざまあみる。」

「認識はしているよ。たださ、テリーに味見されたからちよつとズルかったって言うかさあ俺だって、京の事を狙っていたんだから。」
そう言くと、俺や京・自分の彼女である紫苑さんを押し倒した。

「い…俺っ！！い…一体、何する気!？」

京が身震いを止まらなくなってしまうたから、涙が出ちゃった。

「何するって、ヤルに決まっているじゃん。」

八神さんの言葉に耳まで真っ赤になってしまったのはも俺と紫苑さん。
ん。

「京の感じている顔、見たいしさ。」

うつわつ。変態街道^{スケベ}、まっしぐらじゃん。

「…という事は、俺が一番苦しい思いをする事になるんじゃない。」

紫苑さんの顔が、青ざめてしまっているのを見て八神さんが更に言葉続ける。

「2人共、俺なしではいられなくさせてやる。」

八神さんって、本当に何考えているんだか…。

そんな事したら、京の体が持たないって言うかトラウマが酷くなるし立ち直れなくなっちゃう。

って言っている俺自身、バックを京に攻められているし自分のものを紫苑さんの大事な所に入れたり出したりビストンしてて2人して感じている声を出しちゃっている。

本当、八神さんはさだなぁって思ったのと自分が紫苑さんを泣かせてしまっている後悔がきている。

し…紫苑さん…そんなに、動いたら…。

俺のが、一気にはじけそうになっただけで紫苑さんも俺も息を荒くしてる。

で…出る…。

京がそう言ったのと同時に、俺の中に流れ込んできた。

くう…あああつ！！

俺も、京に中出しされた反動で紫苑さんの中に出しちゃった。

俺の体は元の体に戻ってしまっただけで自分の気を張っていなかったら気を失ってしまっていたかも知れない。

紫苑さんのFカップもある胸は、八神さんに揉まれたりされていて何度もイッってしまった。

俺も京から引き離されて八神さんに、入れられて京と同じ状態でイッってしまった。

第6話です。

さらに言い訳やじまじ大全開。

すいません、すいません。^^：

.....

次回予告じかいよやく

庵「結局、最後までしてごめんな。」

紫苑「草薙さんにあんな事しといて、草薙さんにとつても俺にとつてもすごくシヨツクなんだよ。もちろん、あいつにもさ。」

K「京が泣いてたのに、何で最後までしたんですか？俺だって京とあんな事して、京が八神さんに強姦されるのを黙って見ているのだから辛かったんですから。」

庵「(汗)本当に、ごめんな。」

次回、第7話。.....魂の言葉よ 届け.....

ざっくりとしたストーリー

主人公は京で、ヒロインはK、は固定であとは紫苑と八神カップルが絡んでくる。

.....
最初は八神やがみさんの事を、許せないって思った。

.....
だけど、俺以上に八神やがみさんの事を許せないって思ったのは紫苑しおんさん
で。

.....
殺意なんて最初からないけど、京きやうが凹へこんでいる時に何で自分まで性
欲じやうよくを爆発させなきゃならなかつたんですか？

.....
京きやうだって泣ないていたし俺おれだって、京きやうのあんな姿を見るのはちょっと
どころかかなり複雑ふくざだったから。

.....
.....
.....
.....

あの後、声が出なくなるまで八神さんに良い様にされて気絶してから丸一日が経った。

八神さんが、性欲がありすぎて京があんな可愛い声を出していたのは事実だし俺自身も何度も八神さんのを受け止めてしまったから何にも言えないし…。

あの後、俺の前に気がついた紫苑さんが泣きながら「妊娠したらどうすんの?!」って言っていたのも聞こえてた。

「い…痛っ!」

俺がキッチンに向かおうとした時、京が激痛と同時に起き上がった。京だって、八神さんに中に出されたんだぞっ。

それに、京が白目を向いてもまだしてきて何度も2人して意識が遠のく姿を八神さんは見ているはず。

今日、俺はOffだから良いけど京は仕事が入っているんだよ。仕事入っている人を、こんなにしちゃってどうするんだよって思う。

そりゃ、京だって顔は女の子系の顔しているよ?でもさ、体はどっちかと言ったらマッチョ系なんだから。身体は、男としてはちょっと細いけどさ。

京が泣いちゃっている所を俺は、黙って見てしまったんだから。

自分で、「俺はHがうまい」って言いたくて京をあんな風にして京の心の傷は広がってしまったのは事実だし俺だって自分の理性と戦う事になっちゃったんだから。

「京…大丈夫?」

何で俺が、慌てなくちゃならないんだよ。

俺だって京や紫苑さんだって、被害者なんだから。

まあ、八神さんのを受け止めすぎて俺自身…人の事を言ってもらえないけど…。

「ん…何とか…大丈夫だよ。」

まだ京にとつて、八神さんにされた後だから体は思いつきりだるいと思うし目には大粒の涙が溜められているからそれだけでも理性が飛びそうになる。

「まだ…八神にされた感触が…憶えちゃってるよ…。俺の体…女の子みたいになっちゃって…。」

京は泣きながら、俺に話す事は俺にも一番分かっている…。

「嫌…だったのに…あんな事…されて…。」

京の涙が止まらなくなってしまった原因は、八神さんにあるって思っているし結局は『ヤリ逃げ』みたいにされて一番傷ついているのは京の方だ。

正直の所、八神さんを殴りたいって思ったけど俺も体がだるくてたまらない。

「今だつて…八神のせいだ…ちょっと、動いただけでも…イキそうになっちゃってるのに…。」

京が言いたい事は、俺だつて分かっている。

だけど、俺だつて京を犯してしまつたつて言つたつて同じ事になつちやうんだから。

これじゃ、京との交際がバレちやうし関係だつて持っている事だつてバレちゃつたらそれこそマスコミの人の格好の材料になつちやうよ。

それだけでも嫌だつて分かっているはずなのに、八神さんは京と関係を結んだ。

もちろん、俺や紫苑さんともだ。

俺は、今日Offだけと学科があるから学校に行かなくちゃならぬいし腰が痛い状況で行つたら社さんやラルフさんにかかわれるのが分かっているから…。

「俺…本番中に、泣いちゃうかも…。」

今日は生放送だから、泣いたりしたら取り返しのつかない事になってしまうのに八神さんは知ってて…。

そう思うと、無性に腹が立って来た。

しかも、今日って八神さんも一緒に曜日じゃないですか？

「最低ですね。」

京が、女の子の姿だったら間違いなく妊娠しちゃうのが分かっているのに…。

お互いのマネージャーは交際の事を知っているから良いんだけど、京のマネージャーさんは京が八神さんに犯されたのを知らないから知った時に驚くって言うか八神さんが所属している事務所に殴り込むかも知れない。

女性だけど、そういう所って俺のマネージャーであるねえちゃん…
ウィップさん以上に凄いなあ。

「八神も一緒に曜日だから、一緒に居ると辛いんだよね。」

京が泣きそうになっている時に、不運って言うか残念な事は続くもので…。

京のマネージャーであるシエルミーさんが、玄関のドアを開けて驚いちゃってる。

怒りはしていないから、まだマシな方なんだけど…。

「なあに、泣かそうとしてんの？」

コワッ。

「別に、泣かせてませんよ。」

俺は、素直に状況を話した。

もちろん、京が八神さんに犯された事だけを除いて…。

「そっか。だったら良いんだけど、もうそろそろ行かないと生本番なんだから遅刻しちゃうよ。」

シエルミーさんも、八神さんが大人気俳優だっていうのを知っているから待たせたらまずいと思ったんだろうけど実際シエルミーさんとそんなに年が変わらないんだよ。

俺も、自分の部屋にいたら何だか悪い方に考えてしまうから京と一緒に生放送があるスタジオに向かった。

曜日が一緒に、京がレギュラーに決まったのは今年の4月。リヨウさんは、元々曜日が違うパターンのレギュラーだったからネタ合わせの時しか会う事が出来ないらしい。

まあ、リヨウさんが先にレギュラーが決まった時は京が思いつきり愚痴^{グチ}ってたけどリヨウさんだってレギュラーが決まってからと同時に司会の仕事だって増えたから。

それに京だって、八神さんの事を信じていたのにあんな事されて許せないよ。

確かに、京は親友である以上に「ライバル」だよ。

ただどさ、それだけで八神さんは京のトラウマを広げる事ないと思いますよ。

俺がシエルミーさんの車で、スタジオへ向かうまでの車中でずっとイラついていたら京も少し不思議そうな顔で俺を見ちゃってる。京を不安にさせるのなんて嫌だし思うし、また泣いたりしたら今度こそ車中で説教突入される。

俺だって、女の子だって事を事務所になんて行ってないし知らない人だって多いのに素直に『関係持ちました』なんて言ったら大変な事になるって判っているから。

「何で、ケイ（俺の事）ちゃん機嫌悪いん？」

「言える訳、無いじゃないですか。」

八神さんと関係持っている、事なんて…。

空手1段を、持っているこの人に…。

「何でも、無いですよ。」

ごまかしでは無いけど、これ以上京を不安させるのはダメだと思ったから笑顔になった。

スタジオの楽屋に着いて、一緒に楽屋だったから少し落ち着いた。

いつもは、京の相方であるリョウウさんがいるから楽屋は違うけど今日は一緒に「ピン」の仕事だからって事で一緒に楽屋にしたらしい。

まあ、こんな事言ったら怒られるけどうちの事務所ってある意味ケチだからなあ。

俺のマネージャーであるねえちゃん（ウィップ）から今日の生本番の事を聞いてスタジオに入った途端に、京と俺と同じ曜日のレギュラーであるビリーさんが駆け寄ってきた。

「お前、ヘマだけはすんなよ。生（放送）なんだから洒落にならな
いぞ。」

ビリーさんは、京の事務所の1つ先輩で実はテリーさんの相方さん。京がテリーさんに犯されちゃった時に、ビリーさんは自分の相方であるテリーさんを楽屋で殴ってしまっただけらしい。

京も「わかってるよ」って言う顔で、ビリーさんを見る。

生本番中、京と八神さんは一回も話さなかった。

って言うか、お客さんの黄色い声援でかき消されたんだ。

生本番の1コーナーが終わって、一旦楽屋に戻った俺と京。

すぐに、お茶を飲み始めた京を俺は後ろから抱きしめた。

京は、黙って前を見て俺に話した。

「K、俺の事どう思ってるの？俺の事、同情とかで付き合っている訳じゃないよね。」

俺が前に京に聞いた言葉を改めて言われてちよつと言葉に詰まっちゃったけど、素直に話した。

「俺は、京の事大好きだよ。俺以外の誰にも渡したくないって思っているし、ずっと側にいて欲しいって思っているよ。嫌いだったり、同情で付き合っていたりしたら男として最低だよ。」

俺がそう言つと、京が耳まで真っ赤になっているのが分かった。って言うかこの言葉、京の受け売りだけさ。

「俺がこう言っているんだから京自身は、どう思ってるの？俺の事、

嫌い？」

「（ふるふる）嫌い…じゃない。」

京が振り向いて、キスした。

当然、楽屋のドアは開けっぱなしだったから誰が来たっておかしくない。

「あんたら、ドアしめなよ。いちやつくのは、自由だけど…。」

案の定、ネエちゃんからの呆れにも取られる説教をされたけど。

まあ説教って言うか、思いつきりにやりされたって言った方が正しいけど。

ネエちゃんから説教を受けてから、数分が経ってちよつとのんびりしていたら八神さんが楽屋に入ってきた。

当然、京はトラウマが来ちゃって俺が触ろうとした途端…京が泣き出してしまった。

「京…？」

大泣きしているから俺は落ち着かせようとしたんだけど、京の身震いの方が大きかったみたいで俺を払いのけた。

拒絶されたって一瞬思ったけど、それどころじゃない。

「嫌だ…助けて…誰か…っ！！怖い、嫌だ…痛い…嫌だ…」

嫌だ…っ！！」

京が辛いのは、俺には分かっている。分かっているから、余計に辛いし…。

「草薙さんっ！落ち着いてください！！」

泣き叫んでいる京を見たのか、それとも叫んでいるのを聞いたのか隣の楽屋から紫苑さんが来て京を落ち着かせた。

別の仕事で、楽屋を使っていたからどうしてこうなったのかは知らないし京が何が原因でフラッシュバックを起こしてしまっているかは知っていないはずで…。

第7話です。

H終了}仕事の場面です。

気付いたら、K' って芸人って言うかタレントだったんだあって思
ったら自分の年齢を感じて凹んでみたり。

- - - - -

次回予告 しかいよく

京「八神のバカっ。俺、紫苑やK' に何て言えば良いかわからない
よ。」

庵「だから、ごめんって言うてるだろ？紫苑やK' にも散々説教さ
れたよ。」

京「だったら何で、そんな軽はずみな事しか言えねえんだよっ！」
庵「(汗)……………」

次回、第8話。 .. . 春の輝きの木樹 .. .

.....春の輝きの木樹　　＼ a n e c h o ｝（前書き）

京がショックで、泣き出す一歩手前だった事を知っててなんで自分の欲をぶつけるんだって説教した事がある。

本当は、八神やがみさんが先輩だけと彼氏として当然だっと思ったし後輩でも関係ないって思ったから。

彼女の紫苑しおんさんだって、あの場で泣き出してしまったしどうしてくれるんですか？

先輩に「責任とれっ」だなんて後輩の俺が言える義理じゃないけど彼氏としては当然だっと思ったし八神やがみさん自身も自分の彼女に対してどんな風に謝るか知りたかったから。

京とあの後一緒に車で帰って来た。

車の中で、京がまた泣いちゃったから俺とネエちゃんの2人して落ち着かせていた。

楽屋で、八神さんが急に上がりこんできて京に触った途端大声で叫びだした状態で泣き出してしまったから慌てて京を車の中に押し込む形で動き出しちゃった。

何で、八神さんのせいなのにこっちが慌てなくちゃならない訳？

考えただけで、ちよつとイラついてしまった俺の顔を見てキツチンから声をかける京。

「K'。今日、何食べたいの？」

車の中と違って、少し落ち着いている京が元気を取り戻している。

京のノー天気さはいつもの事だから、別に気にはしないけど京だつて八神さんにされてまだそんなに時間が経っていないから辛いんじゃないかって思う。

京に、気を使わせちゃったのかなあ。

「京は、もう体の方は大丈夫なの？」

ある程度、ストレートじゃないって自分でも思っているけど京の顔はまともに見れない。

「何とか、大丈夫だよ。」

京の声を聞いていて、泣いていないって分かったから何とか大丈夫だって思ったから良いんだけど。

俺も人の事言えないけど、京だつて顔に出やすい人なんだから。

嘘言つたつて、バレバレだよ。

「野菜室に残っている野菜、あるでしょ？それで、何か作つてよ。

明日、俺ネエちゃんと買い物に行くてくるから。」

これはシエルミーさんじゃないけど、『いちゃいちゃしてんじやな

い。』って言われるんだな。

まあ、あの人は妬みもあるけど。

それに俺以上に京は料理がうまいし、難易度が高い料理だって作れる事だって知ってる。

俺の味の好みは、分かっているから俺も安心して京に任せられる。

これ以上、京を苦しませたくないよ。

「K、どうした？…ぼーっとして。」

料理を作っている最中の京が、俺の方を振り向いた。

「何でも、ないよ。」

上手くごまかしたと思ったけど、京が不思議そうな顔でこっちを見ている。

すぐに嘘がつかないって思った俺は、素直に話す事にした。

「あのね。前に神楽さんと2人で話した事あるって言ったよね。」

神楽さんは、誰よりも前世の記憶が鮮明で少し覚醒しかかっている俺の話聞いてくれる一人だ。

「んで。俺に神楽さんが、こんな事言っていたんだよね。『京って、

自分がマザーフロツピーを持っている事忘れてないかなあ』って。

京は前に、そのフロツピーを『もらった』って言ったじゃん。それって、誰から貰ったの？」

趣味的には、社さんとかシエルミーさんって訳じゃないとなると誰から『もらった』んだらう。

「いつの間にか、あつたんだよな。」

肝心の京が、これだもん。

自覚してないって言うか、天然って言うか…。

それは、京自身が自分の覚醒を拒んでいるから。

拒んでいる訳を知っているのは、俺とシエルミーさんの2人だけ。

「それより、野菜炒め出来たぞー。」

京と向かい合わせて食事を取っている俺は、本当に何で前世の記憶の覚醒を拒んでいるか知りたくて聞きたいんだけど…。

「何で京は、前世の記憶を覚醒させたくないの？トラウマとか俺の事とか関係あるの？」

俺がそう言つと、京は言葉を詰まらせたように黙ってしまった。

「その…何だ。俺…前世の記憶を覚醒するのつて、ちょっと怖いんだよね。またお前を、失うんじゃないかって思っちゃつて…。」

京の言いたい事は、俺にも分かつた。

「大丈夫だよ。俺は京から、離れないから…。」

本当は京の方から、言わせたかつたんだよね。

でも今は、京が凄くシヨックが大きいから仕方ないつて思ったけどこれじゃ立場が逆だよ。

京だつて、時々苦しがつて起き上がる事が多くなつてきたからよっぽど覚醒したくないつて思っているはず。

俺だつて、もうあんなに苦しんでいる京を見るのは嫌だ。

「K、？野菜炒め、食べないの？」

また京が、不思議な顔をして俺の顔を見ている。

別に、野菜嫌いつて訳じゃないけど…。

「食べるよ。それより京は、自分が前世の時神様だつた時の記憶を思い出したくないのは『俺を悲しませない為だ』つて言つてたけど俺なら大丈夫だよ。」

今は前世の記憶以上に、トラウマを何とかしなくちゃ。

「今はゆつくりと体を休めてから、徐々に思い出してこ。一気に全部思い出しちゃつたら、京がパンクしちゃうし俺だつて後味悪いからね。」

俺がそう言つと、京が少しずつ笑顔を見せ始めた。

安心したのは良かったけど、まだまだ本調子じゃない。

でも、京が覚醒を本格的にしてしまつたらどうなるか分からないし…。

もしかしたら、覚醒したら女の子姿になる可能性だつてある。

「（もぐもぐ）これ、うまいね。」

京が不思議顔を一旦してしまつと完全に疑いの目を向けるって言う状況になつてしまつし、京がこんな疑い深くなつてしまつたのは社さんに犯された時からだ。

「ありがとう。」

京を泣かせるのも、笑顔にさせるのも俺の心がけ1つだつてシエルミーさんは言つていたけど今はまったくその通りだつて思つている。京が自分1人でトラウマと戦つているのに、俺は何をしているんだろつて思う時だつてある。

それこそ、シエルミーさんには『気にするな』つて言われたんだけど…。

「ん？どうしたの？」

京が首を傾げて、俺の方を見ている。

こりゃ、完全に疑いの目になつてゐるなあ。

「京の笑顔つて、本当に可愛いなあつて…。」

そつ言つた俺に耳まで真っ赤になつてしまつた京を見て、キスした。

「ば…か…つ。こんな所で、言わないでよ。」

俺も自分で言つた手前真っ赤になつちやつて、何も言えなくなつちやつたけど。

「ごめん…。だけど、俺は本当にそう思つてゐるから。」

京が去年の学校祭の時、俺の手をずっと握つてくれた事は絶対に忘れたくないから。

本当は、京の口から言わせるつてマキシマから言われていたけどこついう場合は仕方ないつて思つてるし怒られるのは俺だから素直に怒られるか。

京がテレビを見ている姿を俺は見て、あの時の事を思い出した。

まあ、あの場には俺と京だけが最初いたのだからかいでシエルミーさんがやつてきた。

『京…ねえ。』

思いつきり妬まれているのは分かっていたし、俺自身も京があんな可愛い顔をしていたから返って妬まれても仕方ないって分かっているんだし。

俺もあそこで『キスしたい』とか『触りたい』とか言っていたから耳まで真っ赤になってたしさ。

その頃は、まだ八神さんや社さんに犯される前で。

俺と京が、向かい合わせに座ってて途中からシエルミーさんも入ってきて…。

何分か話したのか分からなくて、気付いたら京の顔を見てにやけていた。

当然、京には笑顔で言われ理性を崩壊しそうになっちゃった。

確かあの時、京が学校の日誌を書いている時で…。

思えば、あの時初めて京からちよっと吸血行為しちゃって吸血鬼化バンパイアしそうになっちゃったつけ。

京と始めて手を握った日、俺は耳まで真っ赤になってしまったって京の顔をまともに見られなかった。

って言うか、急な告白って言った方が正しかったから驚きが来ちゃってそれどころじゃなかった。

キスされた時の京の顔は、マジで可愛かったし照れてしまったから俺もつられて真っ赤に。

キスの時に俺が泣いちゃったから京に初めて気を使わせてしまったのは事実だし自分でも何であそこで泣いちゃったんだろう。

まさかあの後、京とK9999（フォーナイン）さんと屋上で話したって聞いた時は驚いた。

だって、K9999（フォーナイン）さんと俺は年は違うけどほとんど同期だから。

『だって、あいつが草薙さんの事好きなんだって俺に言うんだもん。』

俺もつ、どうにも出来ないじゃん。俺はただの幼馴染とかそんなのになりたかった訳じゃなかったし優しくして欲しいのも好きだって言っただけだし、俺じゃなくて…俺じゃだめで…。だから…優しくしてあげてね。大事にしてあげてね…約束して…。』って…。

正直悔しがっている、K9999（フォーナイン）さんの顔が目に見えなくて…。

『あーもう、くやしい！！すげーくやしい！！ホントにくやしい！！』

俺も屋上にいる京も、驚いちゃっている。

『でも…良かった。草薙さんがあいつの事好きになったのなんて、すぐに分かったから…。だから、こうなって本当に良かった。』って言ってたっけ…。

そう言えば、拳崇にもこう言われた事がある。

「なあ、何で京さんなんだ？まさか、見た目を選んでるんじゃないよね？確かに見た目は良いけど、少しか性格が悪いだろ？意外にわがままだし、何で？」

俺は一瞬黙ってしまったけど、すぐに言葉を返した。

『まあ、最初はそう思っていたけど。』

俺が京を始めてみた時は、凄くわがままな人だと思ってしまったけど今は全然思っていない。

慣れって…怖いなあ。

『お前には悪いけど、京さんについていろいろ面倒だろ？』

凶星だったけど、京の事を考えたらこんな事も言ってもらえない。

『あーそうだね。でも、京を好きになったのは俺の方だし結構京だつて可愛いんだよ。』

その言葉に、拳崇も呆れて来て…。

『え？…可愛い…？』

俺もすぐに呆れ顔を否定するように話す。

『うん、可愛い…。一緒にいて、一緒に話して笑って可愛いって思った。本当は京の方が上だけど、可愛いって思ったから。そう思ったらどんどん、好きになっていった。そしたら、もうだめだった。すぐに、夢中になってた。』

『…よく分かんね けど、ふーん。』

拳崇がその場に腰掛けて、なにやら不思議そうな顔をする。

俺が横目で拳崇の顔を見ると、口を開いた拳崇。

『別に、ちよっと心配だったから。』

俺もなんで、そこでとぼけるのかなあ。

『え？俺？』

『アホか。京さんが。』

案の定、大阪風のつつこみをされたけど言っている事は間違っていないから少しくすつと笑った。

『そっか。京って、良い友達持ったなあ。』

拳崇自身、否定はしてないらしくそっぽ向かれたけど同意したらしい。

『ただの、腐れ縁（幼馴染）だよ。』

拳崇はそう言っているけど、本当はそう思っていない事ぐらい俺には分かった。

本当は、俺と京の事を認めているって事も…。

俺にしてみれば、腐れ縁だって言っても本当は誰よりも京の事を信じているに違いないって思うし拳崇は少し京に憧れている所があるからさ…。

「K、？」

京が、ボーっとしていた俺の顔を見ている。

楽屋での1コマです。

って言うか、第8話です。

天然ボケ&漫才ボケの京に、ツッコミを入れるK'

.....

次回予告

K 「俺らつて、芸人なんだもんなあ。」

作者「そだよ。しかも、あたしの好きな芸人さんにしてるし。」

パオ「めんくいなだけかと思ってたけど、結構真面目にお笑い好き
なんですね。」

作者「どういう意味さ。(汗)」

次回、第9話。 自由の灯火

自分もある意味、説教したんだけど八神さんや七枷さんとたいした
変わらない状況まで理性がやばくなってる事がある。

京が可愛いのは、俺が1番分かっているけど肝心の京がその事に「
無自覚」だから困っているんだよね。

だけど、京が好きなのは嘘じゃないし京が泣き出した時はちょっと
驚いたけど慰めたいって思ったんだから。

だって彼氏として、彼女として当然な事だっと思ってているし最低な
事だけはしたくないって思ったから。

京と夕食を取った後、茶碗洗いをしていた俺は京が黙ってテレビを見ているかっただけでも自分の理性が保てるか分からなかった。

無自覚で可愛い仕草とかするから、女である俺でも自分が男みたいな衝動にかられる。

本当は、『俺』って言う言葉使ったまずいんだけど事務所の社長命令で今に至っている。

自分でも、別に気にしてないから良いんだけどね。

俺が最後の茶碗を洗っている時に、ドコからか悲鳴みたいな声が聞こえた。

すぐに声の主が、ちづるさんだっけ分かったんだけどこっちはびっくりして危なく自分の足をめがけて皿を落としそうになった。

「あぶねっ。」

京もこの声に気付いたのか、俺と一緒に玄関の外に出ていた。

ちづるさんの泣いている顔をまともに見て、ちよっと辛くなってしまった俺にシヨツクな事は続くもので警察の人が近くに住んでいる

八神やがみさんに職務質問キキコミしちゃってる。

警察の人は、八神さんが何か言っても信じようとはせず押し込む形でパトカーに乗らされた。

それを見た紫苑さんは泣き出すわ、拳崇達は慌ててしまっわ。

「俺は、そんな事する人じゃない。」

俺も紫苑さんの言いたい事は分かるよ。

だけど、警察の人に何を言っただけで信じてもらえない。

「俺は、俺の事信じているもんっ!!」

俺だって同じ事、思っています。

だけど、現時点で犯人は変わらないし完全に警察の人は八神さんを疑っている状況になっっているのは変わらなくて…。

京だつて警察の監視で自分の父親である紫舟さんに、会わなくちゃならなくなっちゃつて。紫舟さんは、京のとても苦手にしている人で…。

「親父は、本当に八神がマキさんを殺したつて疑っているのか？」
京もさっきの紫苑さんみたいに泣いちゃっているから、俺もなんか辛くて…。

確かに、京から見たら八神さんつて強姦魔だつて事になつちゃうんだけど八神さんが人を殺すまでしないと思っているし八神さん自身にはちゃんとしたアリバイがあるつて紫苑さんが言っていた。

だけど、証拠不十分として取り合つてくれない。

一番、悲しいのは八神さんの彼女である紫苑さんだつて言う事。

俺だつて、京に何かあつたら、今の紫苑さんみたいになつてしまふに違いない。

「俺は絶対に俺が犯人じゃないつて信じているし、警察の人は無理矢理俺のアリバイを崩そうとしていると思うんだ。だけど、俺は昨日一日OFFでずっと俺と居たんだよ！！これでもまだ、信じてくれないの？」

また泣き出してしまつた紫苑さんを慰めるようにアテナちゃんとユリさんが側にいる。

この状況で、学校なんて行けないし行つたとしても事件の事で頭がいつぱいなつて勉強どころの問題じゃない。

これ以上、警察の人には任せてられない。

何としても、八神さんの容疑を晴らさなきゃ。

これ以上、紫苑さんの涙を見たくないし犠牲者をまた増やさないとめにも俺等で犯人を捕まえなきゃ。

とは言うものの、何から手をつければ良いか分からなくなつてくる。聞き込みをしてもちようどマキさんが殺されたと思う午後6時半から7時にかけての30分には八神さん以外外に出ていないつて言う

のを聞いて更に考え込んでしまった俺に京も心配そうな顔で俺の顔を見ている。

「京。どうしたの？」

八神さんじゃないけど、本当に京って可愛いなあって思った。

「K' がボーっとしちやってるから、考え事してるんだなあって。」
京を見ているだけで、今にも理性が失いそうだと思う抱きつきそうになる。

だけど肝心の京が、その行為自体を拒絶している。

仕方ないと思うんだけど、ちよつと凹んでくる。

「何で、すぐ拒絶するの？」

俺がそう話したから、京は少し考えて話した。

「あのね。前に『自分の父親が苦手だ』って、話したの憶えてる？」
京の顔は少し困った顔になっていて、今にも泣きそうになっている。

本当は、京自身も言いたくないのは分かっているけど辛さを押し殺して俺に話す所を見ればよっぽどの事だろう。

「俺：本当の子じゃないんだ。」

ショックで手が震えたのか、コップを落としてしまった俺。

割れはしなかったけど、俺が驚いたのは京にも通じたらしい。

「いきなり、こんな事言つて驚いたよね。」

涙を溜めながら、俺の顔を見ている京。

辛そうな顔をしている京を見ると何かこっちも辛くなるし、この光景をシエルミールさんに見られたら何て言われるか分からない。

からかわれるか説教されるか判らないけど、どっちにしたって京が少し困り顔になってしまふのが分かってる。分かっているけど、何か複雑だよ。

「でも、K' には俺の全部を知って欲しいって思ったから。」

そう言った京の顔は、無理に笑顔を作っているかのように俺には感じた。

「京：無理してない？」

俺がそう言つと、また京の目には涙が溜まってしまっている。
『やばい、泣かせた』って思ってしまった俺は京の顔を見て、慌ててしまった。

この状況で、シエルミーさんに見られたら間違いなく説教されるんだろうなあ。

説教されるって言うか、にんまりされるのがオチだもん。

『そうやって、何で年上の人をいじめてるのさ。自分がそう言う時になったらどうするのさ。』って言われるのが分かっているんだよね。

「京…泣かないで…。俺まで泣いちゃうし辛いのは俺だって分かっているよ。」

本当の事を言つて、俺も真っ赤になっているし京だって真っ赤になつちやつた。

全然説得力無いけど、京を思っている事は嘘じゃない。

「でも俺は、親父の後を継ぎたいとは思っているけど警察関係者にはなりたくないって思っている。でもさ、俺にはK'と一緒にこの世界を守りたいって思っているんだよ。矛盾しているかも知れないけど、自分が前世の記憶を持つ関係者だつて言う事は、聞いていたし知りたいって思っている。もちろん八神の事だつて、全然手がかりが無い状況から始めなきゃならないって分かっているから…。」

八神さんの事は自分でも人事とは言えなくて、ユリさんからの連絡でまだ紫苑さんが涙を流しているって聞いた時は俺も同じ状況になつてしまふんだなあって思ってしまった。

「K'は、どう思う？」

また少しのトラップをしてしまった俺に、京が困惑した顔でこつちを見ている。

「京が、帝になったって良いよ。俺にとっては、京は京なんだし…。俺は、京の事好きだもん。」

これは本当の事で、今更京に京に嘘を言ったって何にもならないって事ぐらい俺でも分かる。俺だって大好きな人以外の人とHなんてしたくないし、京が俺の事を大事にしてくれるから…。照れくさいけど、全部事実だから何とも言えないけど。

「K…。」

俺と京がキスしそうになった時、タイミングが悪かったみたいでドアの所でシエルミーさんがにやり顔でこっちを見てる。

慌てても仕方ないし、シエルミーさんが鼻を抑えている。

「どっちがどっちなのか分からないけど、2人共…可愛いんだけど。」

「

シエルミーさんには言えないけど、正直言ったら『小姑』だもんな。

「可愛いって言うな、可愛いって。」

京が少しむっとして顔で、シエルミーさんに話す。

当然、シエルミーさんもその一言じゃ言葉に詰まらなくて…。良い意味で言ったら『世話好き』だって思っているみたいだけど、はたから見たら『おせっかい』って見られているのを知ってるのかなあ。

「だって、本当の事でしょ？」

どっちにしたって、シエルミーさんがからかっている事は変わらないじゃないですか。

「それに、どっちも受けになったって一緒だもんね。」

この、腐女子（痴女）っ！！

「からかうなよ。」

京が機嫌を悪くさせてしまったから、俺でも止める事が出来なくなるんだからからかわないほしいんだけど。

「ごめんって。まさか本当に京が、むすっとなるとは思わなかったから。」

俺はシエルミーさんの性格を知っているから、あまり言いたくないんだけどこの場合は仕方ないよね。

「だからって、からかって良いって訳じゃないだろ。こいつだって耳まで真っ赤になっちゃっているんだから、責任取れよ。」

むすつとなっている京も可愛いけど、今はそんな事も言ってもらえなくて俺自身もおろおろしちゃっている。

「ごめんね。」

まあ、シエルミーさんが謝っていても今更遅くて京の機嫌は何としても取らなきゃならないって思った。

どっちにしたって、俺にとってはざまあみろって思ったけど。

「本当は、K'くんと京の事祝っているんだよ？そりゃ、少しは羨ましいって思ってはいるけど。」

シエルミーさんがそう言うのと、さっきまでムツとしていた京の顔が笑顔になった。

京自身は、シエルミーさんの気持ちが分かったと思っただし聞いて良かったって思っているみたい。

一旦、京の機嫌を損ねてしまったらなかなか直らないって事をシエルミーさんは知っていたからかかってくるから余計にたちが悪い。

「あ。そうそう、2人に言わなくちゃならない事あったんだっけ。自分で、忘れるところしたわ。」

シエルミーさんが苦笑した顔を見て俺はすぐにレオナちゃん関連の事だと気付いた俺に、京の顔は思いつきり疑問の顔になってしまっている。

まあ、俺も一瞬驚いた顔をしたけど。

「レオナの事なんだけど、今日、病院に行つて来て診てもらって来た」って電話が来て「妊娠してて今、2週目だっ」って言うのを聞いてあたしも驚いたしちょうどその時にラルフも居てさレオナに「俺との子じゃなくても、俺はレオナとお腹の子を大事にするから」って言ってたし……。」

これは本当らしく、シエルミーさんも笑顔に。

正直言っちゃえば俺も嬉しいんだけど、でもラルフさん自身はキムさんの所へ行つて今すぐにも殴りたいと思つているに違いない。

良く考えると、あの後俺と京は八神さんカップルと不条理なHをしちやつたんだっけ。

京以外の人とHしちやつて…今更言い訳なんか出来ないよ。

「K'くん…？」

シエルミーさんは俺が突然泣き出してしまったから、少し驚いた顔をしちやつている。

京の方から見えていないからまだ良いんだけど、シエルミーさんが気付くのが分かっていたし隠す気なんて無かつたから。

「もしかして、京とHしたの?!」

凶星だつたし、言葉も出なかつたから『にやり』されたつてこの場合は仕方ないんだけどね。

「そつか…本契約しちやつたんだ…。」

本契約の意味を知っているシエルミーさんが、気付いた。

「K'くんを…大事にしてあげなよ？」

京も何の事だか分かつたのか、首を縦に振る。

「これで、京にしてもK'くんにしても誰も手出しできなくなつたなあ。」

俺自身は京の事が好きつて告白した時点で、本契約しているのかつて思つてた。

京の真剣な顔を見たのは良いんだけど、何か複雑だよ。

紫苑さんと八神さんが本契約してると考えると、もしかしたら妊娠の時期が重なつてしまふんじゃないかなあつて思った。

それに今も八神さんは、警察署にいる。

紫苑さんの涙が止まらないのも、俺の不安が収まらないのもこれが原因なつているのは必然的で。

不安そうな顔を見たのか、京が後ろから俺に抱きついた。

「K'を守るのは、当たり前だろ？」

京が真剣な顔をしたから、シエルミーさんも何も言えなくなってしまったらしい。

「俺は、K'を八神と一緒にの感情で見ている訳じゃねえ。これ以上、K'を傷つけるのはごめんだからな。それに、俺だってK'の事を離したくないって思っているし紫苑みたいに悲しい思いだって嫌だから。」

その言葉を聞いて嬉しい反面、耳まで真っ赤になって来た。

京はこう言う事を、平気で言っちゃうからなあ。しかもそれが、素で言ってるから、ますます真っ赤になるんだよ！

「K'？」

京が真剣な顔で、赤面している俺の顔を見ている。

当然俺は、耳まで真っ赤になってしまっているからちよつとすねるしか出来なくて。

「もう…京のバカあ…。」

京もスマイルになって、俺の顔をなでる。

「ちよつと、ちよつと。目の前で、イチャラブしないでよ。」

苦笑と一緒に妬み出したシエルミーさんを見なくても、口調ですぐに分かった。

「だって、京がいきなり抱きつくから…。」

京が少し可愛い顔をしているけど、声は男性の声で…。

そのギャップが激しいから好きになったんじゃないやなくて、結局は俺の一目ぼれだったんだけど。

京は…そんな俺の告白を、OKしてくれて…。

「でも、京って結構って言うか凄く怖がりなんだよね。(にやり)「ギクツとなった京の表情に、すぐ気付いたのは俺で…。」

「な…何で…そんな事、知っているんだよ。」

声が裏返っちゃったら、凶星だって思われるよ。

「知っているも何も、矢吹くんから事情は聞いてるし矢吹くん思いつきり、呆れてたよ。『普段は良いんだけど、いたずらで怖がつてるんです。』って。」

「……真吾、らしい。でもこれじゃ、俺のマナージャーであるねえちゃんことウィップさんと一緒だよ。」

あの人は、自分で『末期のつくほどの腐女子』だって自虐してたからなあ。

「何、にやついているんだよ。」

京が少しムツとしているのを見て、シエルミーさんも苦笑しだした。

まあ、俺もそういう京をプライベートで見ているから同時ににやついて来るんだけど……。

「見ろっ！K'だつて、変な妄想しちゃったじゃねえか。」

京が俺には怒らないのは余計な事を言つて、泣かれるのが分かっていたから。

「少しぐらい、妄想したって良いじゃんっ。」

ふくれてしまった俺に、京が慌て出すのは時間の問題で……。

その光景を見たシエルミーさんも、くすつと笑った。

まあ、今回の事はからかいじゃなくて今の事でくすつて笑ったから京も言える状況じゃないしね。

「京だつて……Hの時……すごく変態な事、言つたくせにい……。」

ふくれたまま、京の顔を見ていると京は耳まで真っ赤に。

「あれは、ただ……。」

真っ赤になつてて言い訳していたら、説得力ないよ。

「お……お前だつて、乗り気だったじゃねえか。」

それは……そうだけど。第一、京があんな事したからじゃん。

「人に、八つ当たりしないの。」

シエルミーさんも俺と京が軽い口喧嘩しちゃったから、苦笑して止

めてくれた。

「自分の事言われてんのに、何で人に責任転換するかなあ。」

京は、少し言葉を曇らせて話す。

「だって、Hの時のK'はすごく可愛いから…。」

誰のせいだと思ってるんだか。

くすぐったいって言うてるのに、なぜか止めてくれなくて結局流れに任せた形でHしちゃったじゃんっ！

俺：流れに任せるHは嫌いだって言うてるのに、何回もその方法でHしちゃったし…。

おかげでこっちは、腰痛いのを我慢して仕事に行ってきたんだから…。

京のせいにしたって、流された俺も言えないんだけど…。

「だからって、最後までする事無いでしょ？」

俺が少しムツとした口調で言ったけど、京はそれに答えてくれないむしろ、答えるどころかここにシエルミーさんがいるのに俺を押し倒してきた。

「ち…ちよっと…京ってばっ…！」

俺が思いつき拒否したのは良いけど、京はその言葉に耳を傾けてくれない。

「ごめん…。」

謝るんだったら、何で最初からHしようとしているんだよ。

俺は、京に胸をもまれ感じている声を出してしまった。

人がいるのに、すごく恥ずかしいよお。

「K'って、ココ弱いんだな。」

しばらくして、京とHしてしまって息が荒くなっている俺に京が近くまで来た。

絶対に明日体がだるいのは、当たり前だったしシエルミーさんだっ
ていつの間にかいない。

紫苑さんにも迷惑がかかってしまうのが京は分かっているのに、何でこんな事したんだろうつて自分で罪悪感が来ちゃったじゃん。どっちにしたつて、ねえちゃんに『にやり』されるのは分かっているし明日は仕事休むつて言わなくちゃ。でも、ねえちゃんの事だから『生本番で、あんたレギュラーなんだから行きなさい。』つて言われるのがオチだつて分かっているし…。ねえちゃんは、俺と京が付き合っている事を知っている一人だからこつう状況になつちやつても横目で見られる可能性だつてあるんだけどなあ。

「京：ちゃんと責任、取れるの？」

布団の中から、もぞもぞと向きを変えるだけで体がだるくてちよつとイラついてくる。

京の事だから、責任は取れると思つているし逆に責任を取れないつて言つたら自分が八神さんにされた時と同じ状況になつて泣き出すと思つたんだろつ。

「K'を泣かせたくないからな。それに、俺が責任を取れないつて言つたら八神と同じになるし皆に総スカンくらわれるからな。」

京が毛布を羽織つてゐる俺の髪の毛を、ゆつくりなでているのを見てちよつと安心できた。

俺：京を好きで、良かったと思つてゐる。

「京の事：俺は、大好きだよ。」

俺も耳まで真っ赤になつちやつたし、京までつられて照れちゃつた。「俺もだよ。」

京の顔を見て今度は俺が何を思つたのか、逆に京を押し倒しちゃつた。

その途端、京が思いつきり拒絶しだしてきた。

ついで2時間前まで、俺と散々したのに…。

「いや…嫌だつて…。」

京が拒絶する理由は分かるけど、俺はっかりされるのだけは嫌だ。

「何で、嫌なの？散々、俺を壊すまでしてたのに。」

京が泣きそうだって言うのは分かっていたし、体がセーブをかけられないでいる。

「それとこれとは、話が別じゃん。」

一瞬俺は、京の目の色が黒から薄い赤色に変わってのが分かった。もしかして…覚醒したのかなあ。

「だったら何で俺がいやだって言ったのに、あんな事したの!？」
ちよつと怒り口調になってしまった俺に、京はぼそつと口を開く。

「K'が…どこかに行っちゃうのが嫌だったし、俺自身このままお前とHしないのもつと嫌だったから…。」

京が暗い顔になってしまったのは分かっていたし、あんなに拒絶しちやつた京を見たのは初めてだったから。

八神さんにしたって、社さんにしたって京にした事はそれ程酷い事したんだから。

「大丈夫だよ。俺はどこにも行かないし、俺だって京から離れたくないもん。」

襲う気も無くなった俺に、少し安心した京。

まあ、正確に言っちゃえばまだ腰が痛かったしこのまま京を犯したとしたら嫌われるのが分かっているから。

「京が嫌だったら、Hしないよ？それに、俺だってまだ腰が痛いしね。」

先に笑顔になった京につられて、俺も笑顔になってしまった。

この顔の京って、なんだか可愛いくて…。

はたから見てのろけみたいに、なっちゃったけど。

「K'…。」

せつかく笑顔になっちゃってたのに、急に心配そうな顔になってしまった京の顔を俺は黙って見ている。

「京…。もしかして、覚醒したの?!」

俺がそう言つと、少し困った顔になってしまった京。

「分かんない…だけど、これだけは言える。」

本当、京って表情コロコロ変わりすぎ。

あつ。俺も人の事言えないか。

「俺には、K'が大事で好きだから…。」

困った顔の京も、何だか可愛いなあ。

「K'…今日、仕事行ける?」

車のキーを持っていく京を、少し涙目で睨む。

今だって、毛布の中から出られない状況なのに。

「(もぞっ)行けないよ。」

そっかと言つて、キッチンの所に行く京。

電話の子機を俺が置いたまま、放置してたから京が話しているのが分かっていたし電話の相手が京のマナージャーさんだって事が分かったから。

京とマナージャーさんが仲が良いし同世代だから、俺も少し安心はしている。

京は今日、ピンの仕事があるから寮には京の相方であるリョウさんがいるはず。

京って、ボケに見えてつつこみなんだよなあ。

オールマイティーだって言っちゃえば、それまでだけど。

気分が落ち込み気味の京の顔を俺のいる角度から見えているから、京を犯そうとしたから何も言えなくなっちゃつて。

「マナージャーさんに、何て言われたの?」

電話の内容が知りたくて、ベットのの中から顔を出す。

「『K'くんの事が心配なのは、分かっているんだけど仕事しないでどうすんの?』って…。」

マナージャーさんも、言いたい事言つからなあ。

付き合っている事を知っている一人として、心配してくれるのは嬉しいんだけど何で『にやり』するかなあ。

まあ、いつもの事だから仕方ないって分かっているんだけど何か凄く恥ずかしいよ。

まだ体が、だるくてちょっと動いただけでも激痛に近い痛みになってしまったて…。

「『K』くんが、傷つくのが分かっているのに何で夜の営みをすんの？』って。」

マネージャーさんが言いたい事は俺には分かってたし、タイプのにはねえちゃんとそんなに変わらないって思っているから。

京が、言葉に詰まってしまうたのは俺の事を考えてくれているって思っていたからって言うのもあつたし言つたとして俺が泣き出してしまうかも知れないって言う心配があつたから。

八神さんの事だつてあるし、大人の人には任せられないって思つたのは事実だけど一気に考え込むと頭が痛くなってしまうって自分でも分かっている。

分かっているけど、そんな事も言っていられなくて…。

八神さんは、どんな事件にも関わっていると考えているらしいけどちゃんとアリバイがあつて証人だっている。

証人がいるって言うのに、警察はそれを認めてくれない。

何で俺がこんなに、ナーバスになっているんだらう。

「K…。何か、考え事してただらう。」

京がちよっと起き上がった俺を後ろから抱きしめた。

「うん…。ちよっと、紫苑さんの事で…。」

心配性な事は、京が良く知っている事だし自分自身も心配性だからだと思つ。

「俺…こんな事してて良いのかなあつて、思つちやつて…。八神さんの事だつてまだ解決してないのに。」

そう言った俺に、少し困った京が口を開く。

「K' がそういう風に思っても、仕方ないよ。紫苑の気持ちも分かっているから、尚更の事だし人事とは思えないもんな。」

京自身もあんなに泣いていた紫苑さんを見ている訳だし、俺が同じ状況になってしまったら自分が何としてでも守ると思っっているはず。

「困っているK' を見ていると、何か俺も辛くて苦しいよ。」

京は人が良いから、困っている人を見るとほっておけないもの知っ
ているし俺以上に心配性だっと言うのもあるみたい。

「八神の事で、俺だっ
て紫苑を泣かせたくないって思っ
ているのは事実だしお前だっ
て俺が守るって言ったのに守れな
かったら俺自身も嫌だからな。」

同じ事を京は、思っていたなんて思わなかったし京の気持ちも痛いほど良く分かっている。

「もちろん、お前が泣いている時は助けたいって思っている。俺は、K' に悲しい思いをさせたくないんだよ。」

京が大事な事を言いたいの
は分かっていたんだけど耳が真っ赤になっ
てたら説得になってないしこっ
ちだっ
て赤面してくる。

京ってシエルミーさんじゃ
ないけど、男にしとくのがもっ
たいない。』って言われるぐ
らい女顔だからなあ。

「前に八神から、『俺もお前と同じで、惚れた者の弱さだなあ』って言われたんだ。まあ、八神さんの良い事は分かっていたし今に始まった事じゃないから。」

まあ、八神さんに言いたい事は分かっていたし今に始まった事じゃない。

俺だっ
て、人の事は言えなくて。

もちろん、京自身だっ
て八神さん相手に怒れる訳でも
なく
てもしかしたらそのまま放置する
かも知れない。

だから、京の相方さんであるリョウさんがボケ倒して放置されるっ

て言ってたんだ。

「京の事だから、ムツとしてたんでしょ？」

ありうる事を言っただって、バチあたらないよね。

って言っても京の場合は、【平和主義】だから喧嘩なんて嫌いなんだし。

「少しはな。だってあそこで、喧嘩なんてしたら今頃反省文行きだぞ。」

確かにね。シエルミーさんだったら考える事だし、それ以上な事を要求してくるに違いない。

また仮釈放状態になっている八神さんにもからかってしまうのが分かってるのにさ。

京だって、最初から喧嘩なんてしないだろうし。

京は、どう思っているのかなあ。

『あのさ…。』

京と俺が同時に声をかけたものだから、2人共驚いちゃった。

「京の方から、話してよ…。」

照れながら話す俺に、京もつられてまた耳まで真っ赤になっちゃった。

「K、は俺と一緒にいて、どう思っているの？」

どう思っているって言っただって、京が嬉しがらない訳ないじゃん。

「俺は、京と一緒にいてとても幸せだって思っているし京以外の人にはこんな素の自分を出していないしね。」

ちよつと重過ぎたかなあ。

「俺さ、歌番組に出ている時にたまにウイंकするじゃん。」

椅子に座って京の作ってくれた朝ご飯を、京の顔を見る。

「あれって、京のためにしたんだよ。」

気付く人ってあまりいないだろうって思ったけど、京は何の事だか分かったのかさらに耳まで真っ赤に。

「俺、京の事…誰にも言わないよ。」

京も俺もお互いにファンの子がいるから、そのファンの子をびつくりさせたくない。

京は大人気タレントの1人だし、マネージャーであるねえちゃんから俺自身も結構人気があるらしい。自分では、全然自覚がないけどね。

「マスコミの人に報道されるのが、少し怖くて…。」

京も、自分の利き手に牛乳を持ちながら話を聞いている。

「大丈夫だよ。」

京のスマイルをみて、ほんの少しは安心したけど京自身はどう思ったんだろう。

「京は、もし報道されたらどうするの？」

俺が不安な顔をしたら、京の顔がマジになる。

「週刊誌の所に行つて、抗議する。」

その事を聞いて、俺が思ったのは前に社さんとクリスさんの熱愛報道とデートの様子を週刊誌に撮られた事。

今思えば、京も社さんと同じ事を思ったんだ。

「俺とK'の事なのに、周りの人に『あーだ、こーだ』言われるのが嫌だしお前を泣かす事なんて絶対に嫌だからな。」

「京…。」

京と喧嘩したい訳じゃないのに、何で俺がイラついているんだろう。

「じゃ、何でHの時何度も俺を泣かせようとしたんだよ。」

京が悪い訳じゃないのに、何で自分がイライラしなきゃならないのか分からなくて…。

まずは、ねえちゃんにコテンバンに怒られた事が原因だっと思うけど。

「ごないだの事は、マジでごめんな。」

京の顔が、不安な顔になっちゃっている。

不安にさせたのは、俺だって分かっているのに何で京に八つ当たり

をしちゃったんだろう。

「俺：お前が、あんなに嫌がっていたのに無理矢理しちゃって…。悪いのは、俺のせいだって知っているのに…。これじゃ、お前の事…『もの』としか思えないって言われても仕方ないんだ…。」
不安の思いが、俺にも伝わってきた。

「だけど、俺はK'の事を大事に思っているし酷い事をしちゃったのは俺の方だから…。」
このまま、京を不安顔にさせておくのも嫌だったから何としてても笑顔にしなくちゃ。

「京のせいじゃないって思っているし、俺も誘った所もあるからね。」
本当の事を言わないと、京だって安心できないはず。

俺だって、京が意外と頑固だって言うのは知っていて。

「そっか。」
ものを食べる時に、キスしないでよ。
危なく、喉に詰まりそうになったじゃん。

「本当に京って、自分勝手だよね。」
俺が少し、横目で京を見ると言葉に詰まったのか声が出なくなつた。
「自分勝手って、言うなよ。確かにさ食べている時にキスしたのは謝るよ。」

京がほほをぶくつとふくらませてしまったのを見て、思わず鼻を押さえそうになつちゃった。

シエルミールさんじゃないけど、本当に『男にしとくのがもつたいない』って思った。

「何、鼻押さえてるんだよ。」
ちよっとむつとした京が京の顔も可愛いなあ。

「だって京が、いきなり可愛い顔をしたから…。」
何、俺も照れくさい事言っているんだか。

「可愛いつて言うな。」

案の定京が、耳まで真っ赤になっちゃって…。

俺もつられて、真っ赤になってしまったから人の事は言えないし…。これじゃシエルミーさんにかかわられる事と変わらないじゃん。

まあ、シエルミーさんの場合は本当に皮肉がつているから夕チが悪
いし俺だつてそんなキツイ事は言わないよ。

「ただ違うのは、シエルミーの場合は『小さいおばさん』だからな。」

京も、はっきり言うよなあ。

シエルミーさんの前だったら、絶対に言えないのは分かっているの
に。

朝食を食べ終えて、京を見送ってから俺が腰痛いのを我慢してゴミ
を投げに行こうとした時向こうの方からルイーゼさんとナガセさん
が2人で話しながらやってきた。

この2人は京と俺が付き合っている事を知らないし、バレたら何か
と厄介なんだよなあ。

「キヤー。」

案の定、騒ぎ出したナガセさんに困惑気味になった俺。

そんな顔をしている俺を守るように車のドアに鍵を入れっぱなしの
京が前に立つ。

まだ行かないのかなあつて思っていたけど、この場合は仕方ない事
だよな。

「絶対に、報道するなよ。」

ナガセさんがアナウンサーをしている事は、俺も京も分かっていた
事だし…。

京自身、少しビビリながらもナガセさんに言う所が分かったから同
意してくれたのだろう。

「分かったよ。」

ホツと肩を撫で下ろすと、いきなりキスしそうになる京。
当然ルーゼさん達がいるのに、ここでキスなんてしたら絶対に報道されちゃうよ。

それに、何か…恥ずかしいし…。

「草薙くん。その辺で、止めといた方が良いよ。今にもK'くんが真っ赤になっちゃうから。」

ナガセさんに気付かれたのは時間の問題だって分かっただけで、何で赤面したところまで分かっちゃったんだろう。

「K'…苦しい？」

京が心配そうな顔になって、俺の顔を見ている。

たった2cmしか変わらないけど、京の声や顔は見えていて…。

「大丈夫だよ。」

京自身は、俺が苦しげらないようにそつと抱きしめてくれるし…。

少しでも京の事を安心させたいって思ったのも事実だし、またあの時みたいに泣く結果にさせるのも何か嫌だ。

あの2人みたいに、からかってくるのは分かっているし今だってナガセさんに『にやり』されるのが分かっているから。

まあ、京自身が見える角度でキスしちゃったから仕方ないって分かっているんだけどキスしてる時間が長すぎる。

「京…いつまで、キスしてんの!？」

俺が少しムツとしていると、京が慌てて俺から引き離れた。

「…ごめんっ!」

京の顔が少しビククリした顔で、俺を見てきたから俺も困り顔で見えてしまった。

何も、謝らなくたって良いのに返って謝れたらこっちが何か気を使っちゃう。

「お前が、ムスツとなっているから俺は悪い事でもしちゃったかなあつて。」

別にそんな事じゃないけど、京の困った顔は見たくない。

「別に何でもないよ。」

笑顔で京の顔を見ると、京の顔は少し目に溜まっている状況になってしまっている。

正直驚いて、あたふたしてしまっただのは事実で…。

いつの間にか、ルイーゼさんとナガセさんがどっかに行ってしまったから少しほっとした顔になってしまった。

抱きついている状態でまだナガセさんが居たら、キヤーキヤーどころの問題じゃなくなっちゃうし…。

「京は、もてるもんね。」

ちよつと不安顔になってしまった俺を、京は後ろから抱きしめた。

京が、後ろから抱きしめている姿で俺はちよつと嬉しくなってしまった。

「もてるって言ったって、テレビの都合上とかドラマの設定とかでだけで本当はお前だけなんだから。」

京は俺が、さみしい思いをしている事を自分の相方であるリョウさんから聞いていたから一緒にあって悲しんだり喜んだりしてくれているんだと思っていたけど本当は全然違っていたんだなあ。

現に、京と付き合ってから今まで起こっていた『過呼吸』が起きなくなっていたし人間関係だって良くなって来た。

「その度に、お前が寂しくなっているのはリョウウから聞いていたし別番組で泣いたってウイップから聞いてたからな。」

本当は束縛したくないんだけど、体が言う事を聞いてくれない事が多くなってしまう事だってあった。

感謝はしているよ、と言いたいけど言葉が続かない。

「正直：嬉しいと思ってるよ。」

これは本当の事、だって嘘をついたって何にもならない事ぐらい俺だって分かっている事だし京を泣かせたくないって思ったから。

「K…何か、考え事でもしてんのか？」

八神さんの事があるって京も思ったらしくて、京自身も早く犯人を見つけたいって思っているらしい。

現に信じてくれない警察の人達に何を言っても、取り合ってくれないし門前払いみたいになってしまふのがいつもの事。

アリバイが成立しているのに、今度はそのアリバイこそが嘘だと言いだめた。

本当に犯人が捕まらないと、八神さんが犯人にされてしまふ。

そんな事になってしまったら、紫苑さんが泣き出してしまふし俺だって何か嫌だし返って厄介な事になってしまふ。

八神さんは、大人気タレントだから警察に連れて行く時に周りにマスコミの人が囲んでいたっけ。

京が心配そうな顔になっているのは見なくてもわかっていた事だし…。

分かっているからこそ、こっちだって京が辛い顔をされるのは困ってしまう。

いくら、八神さんや社さんに強姦まがりみたいな事をされたとは言っても親友のままでは変わらないし紫苑さんとの仲も『同じ事務所の後輩』でいる事には変わらないんだから。

もちろん俺だって、紫苑さんとそんなに年は離れてないけど優しくしてもらえる状況だって変わらない。

まあ、たまに機嫌が悪くなっていわゆる『ツンデレ』状態になるのだけは勘弁なんだけど。

放っておくって言う事が俺は嫌いだから、自分の事を指し押ししても助けになりたいって思っているんだけど…。

かと言って、自分の彼氏である京の事を辛くさせるのなんてもっと嫌だしとりあはず今は京の話の聞こう。

八神さんの事は京の事が済んでから、改めてマリーさんにも聞こう。

紫苑さんの事だつてあるし帰つて自分が泣かせたりでもしたら、後味が悪くなつてしまう。京だつて、今の状況だけを考えたら紫苑さんとそんなに変わらない。

もしかしたら、最悪なパターンにだつてなるかも知れないからだ。

「心の中だつたらそりゃ憎いとまで思つているけど、八神が…あいつが人殺しなんてするとは思わないしアリバイが成立しているのに誰も信じてくれない。多分、いくら俺が警察の警視の息子だからって何を言つても軽くあしらわれるだけで何か自分が辛いんだ。」

京が泣き出しそうになっているのを黙つて見ていられないから、ハシカチを京に渡した。

京だつて、こんなに辛いんだと思つたら俺だつて張り切るつて言うかそれに没頭するしかないつて分かつているけど何か複雑で…。

気付いたら、後ろから京を抱きしめていた。

普段は京の方から抱きついてくるんだけど、今の京は何か元気がない。

今何も出来ないのなんて、俺には耐えられない。

「K…」

赤面して、俺の顔を黙ってしまった京に俺が口を開く。

「京が辛いのは、俺だつて分かるよ。だけど、自分に自信を持たないでどうするの？第一、京は京だし俺にとつて大事な人だよ。／／

今の京に元氣つかせる事が出来るのは、俺だけだつて思つたし笑顔になつて少しでも普段の元氣な京になつて欲しいから。

ただ俺の顔を見ているだけでどう思っているのか分からないけど、京の気持ちは段々と元氣になつて行くのだけは確認できた。

もしまたここで、京が泣いたりしたら今度こそ駐車場内でマネージャーのシエルミーさんに説教されるのが分かつていたし時間があまりない状況で説教なんてしたら今度こそヤバイ。

だって今日は、京が通常出ているレギュラー番組の収録日だから。

「俺は京が、どんな状況でも京と付き合いたいって思っているし俺が京以外の誰かと付き合うなんて考えられないよ。俺には、京じゃないとだめだって思っているし今も京の事大好きだよ。」

久しぶりにマジな顔をしてしまったから、京は驚いてしまったけど俺の言いたい事は京にも分かったはず。

「それに…俺は、京の【もの】だし…。／／／」

照れてしまった俺を見て、京がオロオロしてしまったのは分かっていたし京の答えが1つしかないって言うのも分かっているから仕方ないって思った。

京自身も、安心しきった顔で俺の顔を見てきた。

肝心な俺は、その京の顔を見て驚いているのと自分の理性が爆発しそうな状況になってしまった。

でも、正直言ったら京の安心な顔を見てこっちも安心しちゃったんだけどまさかあの後悲しい事が起こってしまうなんて…。

第9話です。

ここから、サスペンスもちよつと絡んで来ます。

しかも、レオナの妊娠がバレてしまいます。

.....

次回予告

K「やっぱり、バレた。」

京「だって、時間の問題だったし自動的にウイップさん経由でバレるんだし……。」

K「でも、お姉ちゃんは【腐女子(変態女)】だからバレた時ガツポーズしてたけど……。」

京「ウイップさん、らしい……。 (汗)」

ウイップ「誰が、^{スケベ}変態女さっ！腐女子なのは、認めるけどさ。」

K「ひゃあつ。(汗)」

今回は、記念する10話。 ^{へんかく}変革の時

..... 変革の時 } revolutionize time }

祝・10話目!!

京にプロポーズされるなんて思わなかった。

本当は、俺の方からちゃんとプロポーズしたかったんだけど何だか順序が逆になっちゃったなあ。

だけど、京を…珠洲を幸せにするのは当然だっと思ってしているし幸せにできるのは俺しかいないって自分でも理解できたから。

京の仕事が終わったのと同時に、京から携帯に電話がかかってきた。
『今日、どっかで買い物しないか？』

正直嬉しかったのは半分だったし、車に乗り込む前の京はちよつと落ち込みかけていたから心配だったんだよね。

エレベーターに乗っている時だって、俺の脳裏には生本番で京が泣いてしまったあのシーン。

色々ありすぎて、頭が大混乱パニックを起こしてしまったのは分かっていたけど何もあそこでリヨウさんも泣かす事ないんじゃないんですか。

リヨウさんにちよつとムスつとしてても自分では仕方ないって思っているけど客席のお客さんに散々ブーリングされたくせに。

京が楽屋で落ち込んでいるのを考えちゃうと、こっちだって凹んじやうし心配になってくる。

「京、俺だけどき。リヨウさんになんて言われたの？」
たぶん電話先での京は、ちよつと声のトーンが低くなっているはず。

それだけリヨウさんから食らった、シヨックは大きいはず。

『お前って、結構女の子顔なのにやる事はやるんだな。』って...。
正直シヨックが大きくてさ、さっきまで大喧嘩ガチしてたんだよ。』

京とリヨウさんは仲が悪い訳じゃないけど、俺絡みの事になるとプチキレるらしい。

嬉しい反面、何か複雑で...

「んで、怪我させてないでしょうね。」
肝心な事を聞かなくちゃ。

前に大喧嘩ガチドンパチしちゃった時に、京とリヨウさんがかすり傷した事をシエルミーさんから聞いてたし今回だつて言う不安があったから。

『大丈夫だよ。そんな事したら、今ごろシエルミーに説教されているから。』

俺はその話を聞いて、少し落ち着いたんだけど…。
ちよつと甘すぎたのかなあ。

『早く、楽屋に来て。俺一人だったら、余計な事考えちゃうから…。』
そう言った京の顔は、泣きそうな顔をしているんだなあってすぐに思った。

「分かったよ。その代わりに、10分だけまってね。」
そう言つて、携帯の電源を切つた俺は京がいるスタジオに向けて車を動かした。

10分後…。

スタジオに着いて、京がいる楽屋の場所をフロントの掲示板で確認してから急いで京の楽屋へ向かつた。

京の顔は、泣いてしまつていて…。

「……………K……………。俺…俺…。」
京がこんなに泣く事は、初めてだったしちよつと驚いてしまつたけどすぐに俺の方から京に抱きついた。

京が、泣きやんでから5分。

「俺…前に、K’が言つていた前世の記憶を思い出したかも…。」
京が覚醒した場合、俺だつて関わりを持つているから俺自身の記憶の覚醒も進行しつつあつて引き金に京の記憶の覚醒も引き起こしてしまつたとしたら…。

「え?」

一応は驚いて京の顔を見たけど、京は黙つて話を続ける。

「俺…自分が前世の記憶を持つている事知らなくて、前世の記憶でもK’に迷惑をかけているって知らなくて…。」

京の目には大粒の涙がまた溜められていて、いきなりの覚醒をってしまったからまたフラッシュバックらしいのが起こつてしまった。京も俺のせいで、巻き込んで辛くさせてしまったのは事実だと分か

っているけど自分なりに責任を感じながら京の顔を見てしまったから返って気を使わせてしまったのかも知れない。

「もしかして、覚醒した責任を持っているんだったら間違っているぞ。」

京に言われ、凶星だったから何も言えなくなってしまうのが嫌だから話してみる。

話さないと京だって、納得出来ないと思う。

「でも…前世の記憶は、俺とっても京にとっても辛い記憶なんだよ？」

複雑な気持ちになるのは、俺の前世の名前が誰だったのかとかが分からないし京だって自分の前世が誰だったのか分からない状況になっってしまったている。

京だって、俺がこんな状況だから心配してしまった。

溜められていた涙は、すでに乾いてしまっていて。

落ち込んだ顔になっていたから、京が俺の顔を見てきた。

京の顔が、女の子顔だから自分の理性が飛びそうになっているのを見た京がはにかんできた。

京の記憶を覚醒させてしまったのは、俺にも一理あるんだから。

「そんな、落ち込むなよ。俺はさお前と関係を持った事は、後悔していないし俺だってお前をめちゃくちゃにしてみましたからさ…。」

京が俺と同じ状況で、落ち込んでしまったのを黙って見てもいられなかったから俺も笑顔になる。

一気に前世の記憶を覚醒させて、フラッシュバックを起こしてしまつたらそれこそ神楽さんやシエルミーさんに『にやり』されたり説教されるのは嫌だ。

「京のせいじゃないよ。あの時は、俺が誘ったようなもんだもん。」
だって最近の京はHの時に、凄く激しくしてくるから何度もイッチやう事が多くなってきた…。

辛い思いのまま、本当はして欲しくないんだけど…。

体が持たないし、仕事に行く時に腰を抑えてスタジオに入ったら間違いないにやり』されるんだから…。

京自身も少し苦笑しちゃっているし、このまま放置しとくのも嫌だから…。

俺がちゃんと、自分の前世の事話さなきゃ…。

京だってうつすらとしか前世の記憶を覚醒していないから、少しぐらい安心させないと納得しないと思っっているから…。

「俺…自分の前世の名前を言いたいんだけど、京がまだ前世の記憶が鮮明じゃないから言えないけどこれだけは言える。俺は京と今でも前世の時でも、契約を結んでたんだよ。」

これは俺が、『本契約』を前世の時にも結んでいたって言う最大の理由で少しぐらいだったら京だって知っっているはず。

「本当は、京と『本契約』した時に言えば良かったんだけどその時は俺自身も覚醒していなくて…。」

これは本当。

神楽さんに『クシナダヒメの転生した姿』だっって言われた後に、何度か前世の夢を見ているうちに覚醒しちゃったんだから。

「でも…お前と付き合っただけ良かったと思っっているし、本当は俺の方から言わなくちゃならないって分かっているんだけど…。」

京の言葉に、反応して耳まで真っ赤になってしまった俺。

「K…いや、ユキ…俺と結婚してくれっ！確かに色んな奴を一線を超える事をしちゃったし、言い訳に聞こえるかも知れないけど俺にはお前が必要で一番大事に思っっているから…。」

そんな事言ったら、断れないじゃん。

「お前になんかあったら、俺が側にいるから…。泣きたい時は、我慢しないで泣けよ。俺が、涙を拭いてやる。」

真剣な顔で、俺の顔を見て来てキスをした。

「K」は、どうなの？」

答えなきや最低だって分かっているけど、耳まで真っ赤になってしまつてモゴモゴしちゃつた。

「い…いきなり…プロポーズ、するんだもん…。断れないの…分かっているのに…。」

「こんな時に、プロポーズするの嫌だつた？」

京がそう言うと、俺は首を縦に振つて照れた。

「嫌じゃないよ。ただ、俺らだけ幸せになつても良いのかなあつて思つちやつて…。」

本当は、ちよつと不安になつているんだ。

八神さんの事もあるし、何かずるいと思つてたから…。

「K…。」

俺が少しブルーになつているのを見た京が、俺の髪の毛を軽く触つた。

「お前が、八神や紫苑の事で心配になつているのは分かる。分かるけど、何でも1人で解決しようするな。」

キスされる所まで顔を近づけて来たけど、俺としてはやっぱ気がかりで…。

「だつて、八神さんの事もあるし…確かに京にプロポーズされて嬉しいと思うよ…?」だけ…。」

またモゴモゴしてしまつた俺に、京が抱きつく。

「けど…?」

わざわざ、聞き返さないでよ。

何で、モゴモゴしているか意味が分からなくなつちやつたじゃん。

「俺…何がずるいつて思つてきちやつて、今こうしている状況なのに結婚話なんてして良いのかなあつて思つてきちやつて…。」

本当に不安になつているのは、俺だけじゃないつて思つたら安心して思わずはにかんじやつた。

「K…。」お前…無自覚、過ぎるぞ…。」

京がすぐ鼻を抑えたから、理性が少し崩壊しかかっているんだなあって思ったけど苦笑してたら悪いかなあって思ったしはにかんだままとぼけてしまった方が正解だって思ったから…。

「だって、京だって無自覚な所あるじゃん。」

頬をぷくつとふくらませて、京の顔を黙って見ていたから京も確認出来たらしい。

「お前、俺と八神が一緒の番組に出たの見てたの？」
素直に、こっくりとうなずいた。

だって、そんな事をしないと京だって納得出来ないって思ったし返って泣いてしまうのが分かってしまうから。

泣かれたりしたら、俺が何て言われるか分からなかったし俺自身嫌な事だったから…。

「だけど、京からのプロポーズは…嫌じゃないよ。」
これだけは、言える。

時間をどれだけ巻き戻っても、俺には京がいる。

ただそれだけで、俺は救われていると思っっているし今も京の側から離れたくない。

のろけかも知れないけど、今本当に俺が思っている事でたとえ京自身も覚醒しても絶対に離れない様にしようって思っている。

京を泣かせるのも、笑顔にさせるのも俺自身だから…。

「あの時は、近くにいた社が『キスすれっ』ってあおってきたから…。それにお前だって、番組中に隣の奴とキスしたじゃんか。」
言い訳は、出来ないって分かっている。

それに京のプロポーズを受けたばかりなのに、今から喧嘩してどうするって思ったけど俺だって京だって悲しい思いをするのだけは嫌だよ。

「あれはたまたま、話の内容がそう言う内容になったから。」
案の定、京の瞳には大粒の涙が…。

「だからって…本当にする事じゃ…ないよ…。」

俺以上に京が一旦泣き出すとなかなか止まらなくなってしまうのは知っていたし、それにここで泣き出されたら俺が何て言われるか…。絶対に京のマナージャーさんであるシエルミーさんとバイスさんが結託して何かするのかが分かっていて、それが元で俺が泣かされるのが分かってるから。

「俺…すごいショックで、泣いちゃったんだよ。おかげで一緒に出てたビリーが慌てたんだから…。しかもそれが本番中だったから、お客さんはきゃーきゃー言っているしスタジオ中は大騒ぎだったんだから。」

泣きながら俺の顔を見ている京に、少したじろいながらも俺も京の顔を見て安心な言葉をかける。

だって、少しでも京を安心させないと嫌だって思ったしこのまま放置って言うのもなんか可愛そうだ。

泣かせてしまったのは、俺なんだから…。

「確かに大騒ぎになっちゃったけど、俺自身もギャグって言うか笑いを取るうとしたただけで本当はしてないんだよ？ちよっときわどかつたけど…。」

俺が、少し苦笑気味の笑顔を京に見せたら泣いていた京が涙を拭う。安心したんだろうなあって思ったのは良いんだけど、また無自覚に可愛い京の姿を見る事に。

ただでさえ、今自分の理性が壊れそうになっているのに…。

「このまま、遠くに行かないで…。俺の近くにいて…ちよっとで良いから…。」

心配性の割に寂しがり屋の京の性格は俺が嫌と言う程良く分かっている。分かっているから、今更嫌だとは言えないし京が泣き出すのなんて嫌だったから…。

俺の方が男っぽい性格過ぎるって言うのもあるんだけど、京ってこ

んなに女々しいとは思えなかったし…。返って、そっちの方が可愛いらしいけど…。

「京：人に見られちゃうって…。」
急に後ろから抱きしめられて、嬉しい反面恥ずかしい思いが出てしまった。

そんな俺に京も気付いてか、すぐに抱きしめるのを止めた。

「俺：京と一緒にいるの、嫌じゃないよ。俺が一番素直になれたのは、京にだけだよ。何か紫苑さんの受け売りみたいになったけど…。」

俺が赤面しているのに、京はその顔を見ようとす。

京のプロポーズを受けてからずっと、耳まで真っ赤になっているのに京自身は平気だもんなあ。

こっちは、爆死しそうになっているのに…。

「八神さんの事は良いの！？俺は、紫苑さんにも幸せになって欲しいもん。」

照れながら真剣な事を言ったから、京にも伝わって…。

「きれいな事じゃなくて、人事とは思えないし京がそんな風になるのは嫌だもん。紫苑さんも俺も、酷く疲れて帰ってくる事があるんだから。」

八神さんの容疑は、まだ完全に晴れていない。

八神さん自身がいつ警察署の中で覚醒するか分からないしもし覚醒しても出させてもらえないって言う可能性だってあるんだし…。

でも、俺は幸せだよ。

俺は、一旦考え込むとフリーズしちゃう体質だから考えないようにしているけど今はそんな事も言ってもらえないしこれ以上悲しむ人を作りたくないって言う思いもある。

「これ以上、紫苑さんに辛い思いをさせたくないよ。」

それに、八神さんが警察に参考人として行った日から紫苑さんがず

つと俺と京の部屋に泊まっていたのは事実だし本当は俺が元気を上げなきゃならないって分かってはいるんだけど自分の体が異変に気付くのは分かっていたから…。

「だけど、放置なんて出来なかったし俺だって一緒になって泣いてしまったから京だってそんな俺達を見て心配したんだろう。」

「紫苑さん、凄くショックが大きくて何度も倒れちゃって…。八神さんの事で、辛い思いをしてしまったんだと思っっているんだ。気持ちには俺にだって分かってるし、あんなに2人して号泣したのって初めてだから。」

社さんから、『今度ショックで倒れたりしたら、紫苑が死ぬぞっ。』って言っていたのを聞いてたからショックで…。

自分にもその代償が来るかも知れないと考えたら少し驚きと涙が出てくる。

これじゃ何のために、紫苑さんを連れて組織を抜けて来たのか分からないしこれ以上あそこにいたら今こうしていなかったから…。

「もう、人が泣く所なんて観たくないし俺だって泣きたくないから…。」

京がさつき言ってた言葉をもう一度言うのは本当にそう思っていたんだな。

俺は、そんな京の顔を見て自分の理性と戦ってしまったけど…。

「京って…可愛い…。」

自分は思いつきり否定しちゃったのに、人にしてどうするんだよ。自分でも矛盾しちゃっているのは分かっていたし、京だって拒絶しない。

紫苑さんの事を考えたら矛盾なんて、くそくらえだって思ったけどそうも言ってられなくて。

俺だっってここ2ヶ月間京とHなんてしてないし、今更『Hしてっ。』なんて言えないよ。

何か、恥ずかしくなっちゃったし今にも憤死しそうになっているのに

…。
「K…?!」

俺がボーっとしているから、京が首を傾げしてしまっただけを見ている。

「…ごめん…。」

思わず謝ってしまった俺に、京が笑顔で返した。

笑顔の京を見たら、また耳まで真っ赤になってくるんだよ。

「俺…。京の事…ずっと大好きだからね。」

自分で照れてしまったから、説得力ないって分かっているけどこういう時は仕方ないって思っているし京だって俺の状況は分かっているはず。

「そっか。」

返って俺の理性が崩壊しちゃって京を押し倒したりしちゃったら、京は泣いてしまうしシエルミーさんに説教されるのが分かっているから…。

現に京にはトラウマがあって、抱きつかれるだけでもフラッシュバックが起こってしまうのが今の京の状況だって分かっている。

京の辛さを知ってしまったって俺にしてみれば、社さんに犯されてしまった時点で気付けば良かったんだって後悔だってある。

社さんには怒りと『何でこんな事したの?!』って言う感情があるけど今更遅いって分かっている。

現に京は、今でもそのトラウマに苦しまされているから…。

殴るなんてそんな取り返しつかない事なんてしたくないし、京をまた泣かせたくないから。

「京…あのね。」

男の姿の状態で京を犯してしまっただけで俺だって人の事言えなくなってしまうのに、京を大泣きさせてしまった。

自分でも、すごい罪悪感だって思っているけど…。

「俺が、京にあんな事したのって…まだ怒ってる?!」

これだけは、はっきり聞かないと…。

悪いのは俺だって分かっている事だけど、京をあんなにしてしまったんだから。

後悔しても遅いって分かっているんだけど、今更遅いって言うのも分かっている。

しょんぼりとなってしまった俺に、京が俺の顔を見ている。

「確かに、お前が怒ったのは分かったよ。」

京の目には、大粒の涙が流れてしまった。

京が嫌がっていたのに、無理矢理関係を結んじゃって自分に残ってしまったのは罪悪感だけ。

社さんに怒ったって始まらないって分かっているんだけど、そんな事してしまったらまた京を泣かせてしまうのが分かっているから…。酷い事をしてしまったのは、俺だって同じなのに…。

「俺だって、七枷と関係持った事は…自分なりに…後悔しているのに…。」

京の涙が止まらなくなってしまうているのは事実なのに何で俺は自分の怒りが出てしまったんだろう。

京に八つ当たりという形で、京の始めてを奪ってしまっ…。

自分だって酷い事したのに黙って見てしまうなんて、何か複雑だよ。俺だって、やってしまった事は社さんや八神さんと代わらないんだから。

「後悔しすぎて…俺…何か…止まらなくなっちゃって…。」

京が、泣きたい気持ちも分かっている。

分かっているけど、京だって俺と一緒に何でも一人で抱え込む体質だからなあ。

「後悔は誰だって、あるよ。俺だって、後悔したいぐらいあるから…。」

そう言うと、京の顔が明るくなった。

「辛いのは…京だけじゃないんだよ。でも…俺は、京を信じているから…。」
京に抱きついてマジ顔になっている所に、シエルミーさんとパオさんがこっちに向かってくる。

「あーらら。(にんまり)ラブラブじゃん。」
シエルミーさんの言いたい事は、分かっています。

どっちにしたって、こっちがからかわれるのが分かっています。

「からかうんじゃないよ。毎回毎回…。」

京が思いつき呆れてしまっているのを見て、またにやついてきた。
「だって普通、目の前でいちゃつかれていたらからかわれるの分かっているのにしてくるからかなり自信があるって考えるしかないよ？」

もっともらしい事を言われ、黙ってしまふ京。
でも泣いていない所を見てないから、良かったと思っているんだけど…。

「落ち込んでいる所を見ちゃったから、てつきりK'さんが落ち込ませたのかなあって。」

「何だよ。」

本当は、社さんが京を犯したからこうなっちゃったんだって言いainんだけど言えない自分がいたし返ってそれで大変な修羅場になってしまったら困るから…。

クリスマスさんが泣き出すのが、分かっていたし俺も最悪な事を考えちゃったから今は何にも言えない。

クリスマスさんが悪い訳でも、京が悪い訳でもないのは分かっているから…。

京が現にトラウマを抱えてしまって、大変なのにクリスマスさんにはれたりして京が女の子・verで妊娠なんてしたら俺は絶対に社さんを殴っていると思うし許さない。

クリスさんには絶対に言えない事だっと思っていて、京がまた泣き出してしまうのが分かっていたから…。

今だってイライラとした自分の感情と京を思う優しい感情が心の中で葛藤している状態で、京を見ている。

「だって、はたから見たらそう思うよ？『K』さんが落ち込ませた」
「…。」

図星で言葉が出なくなってしまった京に、シエルミーさんが俺に話し掛けてきた。

「もしかして、Hしたかったんじゃないの？」
違います。

「本当は、京自身が泣き出してしまったから慰めていたんです。」
これは、本当。

でも実際に、京とHするのは嫌じゃないよ。
シエルミーさんも安心したって言うか、にやりをしなかったんでこっちもホッとしている。

安心した途端、ビクンと体をはねらせてしまった。

すぐに紫苑さんに何かあったんじゃないかって思ったし、一体誰が？！って思って体が先に動いていた。

京を、たった一人置いて…。

「京は、先に帰ってて。俺ちよつと胸騒ぎって言うか、嫌な予感しちゃったからちよつと行って来るね。あまり遅くならないうちに帰ってくるから、テレビでもつけて待ってて…。」

京には胸騒ぎの事は言えないし、もし言ったとしてまた京が泣き出してしまうのが分かっていたしせつかく泣き止んだのに本格的に泣いてしまったら今度こそシエルミーさんに説教される。

「分かった。」

京が納得してくれたのは、分かっていたから良かったんだけど自分なりに胸騒ぎの原因が知りたかったしこのまま放置なんて出来ない。

紫苑さんになんかあったら、すぐに影響が俺にも来るし八神さんがいない今紫苑さんの事を任されているって言うか頼まれてる俺らからしてみれば紫苑さんになんか悪い事があつたら何て言われるか分からないし俺だって嫌だ。

走るのだけは自信があるから、走っていかないで紫苑さんが危ないと思つた俺は走ろうとしたんだけどシエルミーさんに止められる。

京の事だつて心配だよ。

自分の事を、犠牲にしたつて良いって思つたんだけど…。

紫苑さんが大丈夫だったら、それで良いんだけど何か心配だよ。

「K、…あんた、無理しているんだつたら止めときなよ?」

凶星だったから、黙ってしまった俺に更に口を開くシエルミーさん。

「どうしてあんたは、すぐ無理しようとするの?京が心配するの分かつているのに…」

多分シエルミーさんも京に対しては、心配しているのは分かつていたしマネージャーとして気を使っているんだと思う。

口では、『自分は、腐女子だ』って事を言っているけど…。

「何?…あたしに、何か言いたいのか?」

完全に裏の顔であるオロチモードになっているシエルミーさんは、マジで怖い。

「別に。それに、京の気持ちは俺が一番分かっているよ。」

分かっているけど、何か複雑で…。人事とは言えないし、この事がクリスさんにバレてもしたら修羅場になるのだから分かつてる。

自分達だつて巻き込まれて、厄介な事になってしまふのが分かっていたし。

俺は、修羅場が大嫌いだし話さない方がクリスさんや京に対しても良い事だつて思っていたから。

そういう光景が大嫌いだし、自分だつて辛くなってしまうから…。

それに、男女のバトル程泥沼になる事なんて無いと思つているし京

やシエルミーさんだってそういう状況は知っているはず。

それに俺は『怖がりのヘタレ』だから、ちょっとした事でもびびるって言うか驚いてしまう。

京以上じゃないけど、お化け関係には耳を塞いでしまったんだ。

俺とシエルミーさんが行つた時は、案の定紫苑さんは犯された後でシヨックが大きいのは俺だって同じだけど一番の被害者である紫苑さんだって辛いんだよ。

これが、八神さんになればもしたら紫苑さんが悪いって事になっちゃって体が持たなくなっちゃうぐらい分かっている事だし返って紫苑さんの心の傷が広がってしまう事だってあるんだから。

どっちにしたって、大変な事になるぐらい分かっているんだけど…。

「K'？」

シエルミーさんが俺の顔を見て来たから、すぐに俺も気付く。

「もしかして、しいちゃん（紫苑さん）が誰かに犯された事でびびり半分の怒り半分なの？」

凶星です。

シエルミーさんには嘘が付けないって分かっているし、俺は何も言えなくなってしまった。

そんな俺の顔を見て、もう一度口を開くシエルミーさん。

「やっぱりね。あんたと京は分かりやすいもん。」

凶星の状況は、俺には分かっていた。

分かっていたからこそ苦笑するしかなくて…。

「怒りたい気持ちは、あたしにもあるよ。人事とは言えないしさ。傷ついているのは、しいちゃんなんだから。現に発見されてからずっと泣いてばっかだったから…。」

八神さんとシエルミーさんは、年は少し違っけど幼馴染だから八神さん自身の事も分かっているんだろ。

まあ、9割ぐらいは『やれっやれっ』って言うあおりだとは思っているから本当は俺の方が2倍怒られなきゃならないんだけど…。

「八神は、嫉妬深いからなあ。前に番組で京としいちゃんの話しているだけで嫉妬しちゃったんだから。」
だから、京の楽屋で大騒ぎになっていたんだと思った俺は少し苦笑気味になった。

だから、八神さんと京は大喧嘩をしていたんだ。
それを社さんだつて知っているのに、京にあんな事をしてしまったんだから…。

それだけでも許せないのに、俺以外の人と『本契約』を結んでしまったんだから…。

悪いのは、京じゃないのに…。

もちろんこっちに、責任が来るって思ってもいる。

だからこそ、絶対に紫苑さんと八神さんを別れさせる訳にはいかな
いし悲しんでしまふ紫苑さんを見るのはもう嫌だ。

「俺、絶対紫苑さんにこんな事した奴を突き止める。だつてこのま
まじゃ、同じマザーシステムのフロツピーである俺だつて影響が出
てきちゃうから。それに、こんな京には言えないしさ。」

俺が死んでしまつたら、京はどうなっちゃうんだろう。

考えただけで、俺の方が涙出てきそうになっちゃうけど今から何か
不安だよ。

「あんた、本当に京の事好きなんやねえ。」

シエルミーさんは、ハーフで関西出身者だからこう言う口調がたま
に出るって言うのを京から聞いている。

感心している場合じゃないって思った俺は、すぐに口を開いた。

「からかっているんだつたら、怒りますよ?」

少し青筋を立てながら見たものだから、シエルミーさんが苦笑しち
やつて黙ってしまった。

正直、からかい始めたのはそつちなんだからざまあみろつて思った
けどどうも言つてられなくなつてきちゃつて…。

「からかう訳ないじゃん。でも、実際にそうなんじゃないのかなあ

って思っちゃってさあ。」

耳まで真っ赤になってしまった俺に、シエルミーさんが顔を見てきた。

自分で認めたくないのに、改めて言われると何にも言葉が出てこない。

「やっぱりね。」

自分で、ドツボにはまっているのは分かっていたし現に京の事で耳まで真っ赤になっているのは本当の事だから…。

紫苑さんの事が先決だと思つた俺は、シエルミーさんの言葉から逃げ出す形でシエルミーさんに話す。

「それより、紫苑さんを安全な所に…。」

紫苑さんの方が軽いから、俺がお姫様抱っこをする形で安全な所まで運ぶ。

当然俺が言つた事は、シエルミーさんだって同じ事だつて思っているし俺が苦笑しちやつているから分かつてしまったんだろう。

「そうだよな。いつK'くんに影響が来るか、分からないもんね。」

同じ苦しみだけは嫌だつて思っているけど、シンク口率が元々100%に近い俺と紫苑さんはいつ影響が来る河からない状況になつてしまっている。

「それに京だつて、ショックを受けて倒れたりしたらそれこそ厄介事だからさ。」

京の事を気遣つてくれているのは、マネージャーと契約タレントとしてじゃなくて八神さんの事で共通しているみたいらしいって言う事は分かっている。

俺だつて京の事、心配しているしさ。

まあ、お互いのマネージャーさんが仲が良いからなあ。

はたからみたら、最強コンビとしてしか見えないけど…。

「京は、今でもトラウマが起こつて俺とHする事があまりなくなつたんです。京が辛い思いをしてしまったのは、事実だしあんなに泣いてしまった京を見るのは初めてで…。それに、プロポーズをされたんですけどその時に嬉しかったんですけど何か複雑で…。京の事は、大好きなのは変わらないのに…。」

胸のもやもや感、本当に自分で良いのかなあって思ったのがあつたし今更マリツジブルーになつたって仕方ないって思っているんだけど八神さんが心配になつているのはシエルミーさんだつて分かっているはず。

「K'ってかわいいんだなあって。」

何で、ですか。

「何で。」

「だって、京一筋だつて言う事だつて知っているし本当に八神の事を心配しているんだなあって思つてさ。」

「そこが、K'の良い所だと思ふなあ。だけどさ、あまり一人で抱え込むのだけはやめなよ。」

それは、京にも言われています。

「あんたも、クリスもすぐ抱え込む方だから。クリスなんて歌番組の時に具合悪くなつたつて、クリスのマネージャーさんから聞いた事があるから…。」

クリスさんが具合悪くなつてしまったのは生放送の番組で、京と一緒にみていたから誰でも知っているんじゃないのかなあ。

「確かに、『違う事務所ですから、関係ないです。』って言うちゃえばそれで終わりかも知れないけどマスコミがうるさすぎて社さんと別れちゃつたから…。」

だから、急に京の所に来て前で泣いていたんだ…。

「しかも、あの後セスさんに強姦されて…妊娠しちゃっているんだ…。3週目だつて…。」

それを聞いた途端、驚いてしまった俺だっただけどまさか社さんと別れた後にクリスマスさんとセスさんがそんな関係になっっていたなんて思ってもいなかったし何でセスさんは年下のクリスマスさんを妊娠させるような事をしちやっただらう。

「それにクリスマスさんって、まだ19歳だよ。」

本当は、年下に『さん』付けするのは変だっと思ってはいるけどこの場合は仕方ない事だっと思ってているし…。

「そうなんだよね。あたしだっけクリスマスから聞いた時に『嘘でしょ？！』って思っちゃって…。」

シエルミーさん自身も驚いていたんだなあっと思うと、本当だったんだなあっと思った。

俺とクリスマスさんでも、事務所が違うから本当に言われるまで知らなかったしこれこそマスコミの人にバレたりされないのかなあっけよっとな不安になりながらも黙ってしまった。

今は紫苑さんの事が心配だと思っただし、紫苑さんが気絶から目覚めて大泣きされてもこっちで困るからだ。

京には、この事はもちろん言えないし厄介な事になっちゃうのが分かっていたから。

一人で背負い込むなって言われたって京にばれてこっちが説教を食られるのなんて嫌だし、こっちだっけである意味被害者なんだよ。

「そうしたら、クリスマスが泣き出しちゃってさ。」

泣き出すのなんて、当たり前ですよ。

どっちにしたってシエルミーさんが、からかったんじゃないんですか？！

現に、大声でも言いそうになっけ周りにはそれそんな行為でもしたとしか考えられないですよ。

「……………」

「んで、すぐ後で何とか謝ったよ？案の定社にも思いつきり疑いの

目をされちゃったけど…。」
紫苑さんを寝かせてから、数分が経っていないから大きな声で話せない。

もし話したとして、状況が京と同じになってしまったら嫌だし八神さんに合わせる顔なんてないよ。

「クリスを、このまま泣かせっぱなしって言うのは嫌だからねえ。」
シエルミーさん自身も、クリスさんに気を使っているって分かっているけど本当は社さんに対して気を使っているんじゃないのかなあ。いくら元彼だからって、付き合っていた期間は4年だったんだから長かったのは事実だし喧嘩別れじゃないって言うのも分かっていた。

思えば、俺が2人の仲を取り持ってそんなに長い期間だったんだなあって思ったんだけどとにかくいろんな事があったなああって。

思い出したくない事だったけど、まあ良かったんじゃないかなあ。たのかなあ。

「ですね。」

俺が窓のある所へ行くこうとした時、紫苑さんが俺の服を掴んで離さない。

「紫苑さん?!」

いきなりの事だったんで一瞬、『グン』となってしまうた。

「ここにいて…一人だったら、苦しくて…死んじゃうよあ…。」

紫苑さんの体は思いつきり震えていて、俺はすぐに京と同じ状況になっちゃったって思った。

「俺…怖かったんだ…。知らない人に…強姦されて…俺の事で…頭が一杯になっていたのに…。」

座った状態だったから、そのまま紫苑さんの顔を見る。

「このままだったら…俺…不安で、一杯だよ…。」
それは、俺だって分かっているよ。だけど…。

止めた…。これ以上言ったら、また紫苑さんが泣き出してしまおうし地獄耳のシエルミーさんがこっちに来て説教沙汰になってしまおうか

「俺…辛いのは…もう…嫌だよ…。」

紫苑さんが下を向いてしまい、完全に落ち込んでしまったんだなあって苦笑してしまった俺。

京と同じ状況に紫苑さんもなってしまうって辛いし、強姦されて数時間も経っていない所で俺が出来るって言うか話せるのは京の時と少し違う所。

京に比べたらって言うか比べたくないし、シエルミーさんに説教されるのだけは嫌だっと思ったし説教されている場面を紫苑さんが見ちゃって泣き出してしまったら何にもならないから…。

「俺に、あわせる顔ないよ…。」

また泣き出してしまったのはショックが大きかったって言うのもあったし、辛いのも泣き出したいのも分かっていたから俺は黙っているだけだった。

第10話目です。

10話目突入したのに、まだ仕事の場面が終わってないです。

しかもこの時、ちょっとした季節外れ事件が起こってしまいました。

^^ :

- - - - -

次回予告

作者「^{ゆみや}けっ。」

K「あっ。(汗)砂、吐いてる。」

作者「^{ゆみや}自分で、書いといてなんだけどやっぱりプロポーズの時は緊張するって知っているのにいざ成就すると砂吐きたくなるもん。」

京「^{ゆみや}要するに、羨ましいと。」

作者「^{ゆみや}うっ。」

今回は、11話.....^{カクヘン}確定変化.....

八神^{やがみ}さんが、警察署に参考人として連行されてからの紫苑^{しおん}さんはちよつと寂しそうな顔だった。

だからって、油断してあんな事になった訳じゃないけど可愛そうだつて思ったのは事実だし1番傷ついたのは紫苑^{しおん}さんなんだから。

その場で、紫苑^{しおん}さんが泣き出してしまったのも分かっていたし黙つて見ているだけで何もしくちや最低だと思つたのは俺だけじゃなかつたはずだったから。

紫苑さんが誰かにレイプされてから、約2時間。

八神さんの所に面会したいって言っていたけど、あんな事があつた後だったし八神さんには言えないって思っていたから行けなかった。もちろん、京にだって紫苑さんがレイプされたって言えないし余計にトラウマが広がったりでもしたらマジでしゃれにならない。

それに、クリスさんがセスさんとの子を妊娠しちゃったって知ってしまったている俺は京にだけでもこの事だけは伝えなくちゃって思っていたけど体のたるさで言えないかも知れない。

京の目の前では絶対に倒れたくないって思っているのに、自分の体がそこまで間に合うのかなあって思っている。

だけど、京一人で部屋に置いてきて寂しい思いをしているのは分かっている事だし早く帰らないと京は部屋で大泣きしてしまうかも知れない。

京は、俺以上に心配性で泣き虫だつて事…。

心配性だつて分かっているのに、紫苑さんの事を話してしまつたら余計な心配を京はしてしまうと思つたし話さなくても俺の体の不調で分かつてしまうと思つたから。

京にプロポーズを受けて2日が経っているんだけど、いろんな事がありすぎて頭が大混乱になりかかっているって一気に具合が悪くなつてしまいそうだつて紫苑さんに起こつた事で自分が同調シンクロしちゃっているんだから。

八神さんには、この事は絶対に言えないのに…。

気付いたら、俺は京の待つている部屋の前までたどり着いていた。

たどり着いた途端に、体が急に重たくなつてしまつたのかその場に倒れこんでしまつた俺に京が『お姫様抱っこ』をしてベットまで運ばれた。

すぐに気が付いたから、耳まで真っ赤になって京も気付いたらしい。
「俺…気を失っていたんだ…。」

言いたい事が多すぎてオーバーヒートしちゃったって分かっていたけど、ちゃんとクリスの事は京に伝えなきゃ。

「あのね…聞いてね…。クリスが、セスさんとの子…妊娠しちゃったんだって。」

シエルミーさんに言われた通りに、俺は京に話す。

紫苑さんの事を隠すつもりは無かったんだけど、もし話したとして京がまたフラッシュバックを起こしてしまうんじゃないかって思ったから。だから話せないし、京に泣かれるのだけは嫌だ。

京に気を使わせてしまっつて言うのは、自分でも思っているしさっきの言葉で京が驚いているのは事実だったから。

「K、?!」

しばらく黙り込んでしまった俺に、京が心配そうな顔で話す。

京に聞かなくちゃならない事があったんだ。

「あのね…もしかして、セスさんの所に行って殴りに行くの?!」
不安があったから、すごく気になっちゃったんだ。

これが紫苑さんでもこうなる事は分かっていたし、京の怒った顔は黙って見ていられるのだけは嫌だったから。

俺は喧嘩が大嫌いだから、京が傷つけられるのだけはもっと嫌だ。

「殴りには行かないよ?だって俺は、K'が心配そうな顔を見るのだけは嫌だったから。」

「京…。」

京が笑顔になるのは、俺を心配させないためだっつてすぐに分かったけど何より俺にはもっと心配になる事があつて…。

京とセスさんが、同期で異常に仲が悪いつて事…。

前にリヨウさんから、京とセスさんが大喧嘩した事を聞いた事がある。

楽屋でだったんだけどリヨウさんが止めなきゃ、大変な事になつて

たつて…。

俺は別な仕事があったから京に会えなかったし、まさかそんな事になっっているなんて思っていなかったから…。

思わなかったから、最初に聞いた時に大泣きしてしまっただ。

「だって、京とセスさんって仲悪いじゃん。」

半泣き状態になってしまった俺に、京はただ慌てるだけで…。

「別に、仲が悪い訳じゃないよ。」

「じゃ…何で、セスさんと大喧嘩したんですか!？」

リョウさんは嘘をつけないって、キングさんから聞いた事がある。

「気になる事言ったから、むかついたんだよ。」

そう言った京の顔は、赤面しちゃっている。

気になる事って言ったって、俺関連の事だっただけ知っているから俺としてはすごく不安で何か複雑だよ。

「不安になっちゃったら、ごめん…。」

キスしそうになった京を、俺は拒絶してしまった。

「こんな気持ちで俺が居るのに、キスしないでよ。」

クリスさんの妊娠の件や紫苑さんのレイプの事で頭がぐるぐると回っているのは俺の方なのに、京に八つ当たりしてしまった。

「ごめん…。京が悪い訳じゃないって知っているのに…。」

気付いた時には、俺は涙が止まらなくなってしまった。

「俺…仕事で自分が、『女の子』として見てもらえないって言うのは辛いけど京との関係も壊したくないし…。俺だって、正直言っただけ辛いんだから。」

涙で京の顔が見れなくなってしまった俺を、京が抱きついた。

「本当は、今日は一人になりたくなかったんだけど関係を知られなくなかったし…。俺だって、K'を守りたいって思っていたから…。」

「
京がドラマで3ヶ月居なかった時、俺が一人で留守番してて寂しさのピークが来ちゃった時に泣いてしまったんだ。」

「京と別れるのは、嫌だっと思ってているよ。だけど他の人とベッドシーンをするのを見てみると自分の胸が苦しくてさ。」
自分が嫉妬してしまっただけに分かったけど、京が抱きしめたままだっただけ何も言えなくなってしまうんだ。

「ごめんね…京を…珠洲を、一人にしちゃって…」

俺が気を使ったのは、京の所属している事務所の事とか俺の所属している事務所の事も考えているから京も俺がブルーになってしまっているのは自分のせいだっと思ってしまっただけだ。

本当は、ブルーになっただけ理由は違うんだけど…。

紫苑さんの事は、言えないと思っただけかもしれない。八神さんとの間に更に亀裂が走るのだけは嫌だ。

仲良くなっただけだと思っただけなのに、仲が悪いしあまり仲が良くても嫉妬しちゃったら何にもならないって思っただけから。

「京とセスさんが殴り合いの大喧嘩になるのだけは、嫌だよ。」

喧嘩している所がテレビに映ったりしたら、それこそ最悪だっと思っただけでああする人だっただけだ。

どっちにしたって、最悪じゃんかよ。

あおつて来たなら、俺が絶対に泣き出すと思っただけ京の顔だっただけに見られない。

『どこまで、進んでるの』とか『どっちから、告白したの』とか言われるのが分かっていて、事だしせつかく京と同じ番組に出られるのに嫌な思いはしたくないしさせたくない。

前にシエルミーさんから、『京とフィオさんが仲良く話しているよ』って聞いた時は京に思いつき嫉妬しちゃって。

リョウさんには、『お前の気持ちは分かるけど、フィオは京に対して恋愛感情持っていないぞ』って言われたんだけどなあ。

「K、?!」

京の顔が不思議そうな顔で、こっちを見ているのを確認した俺は京

の顔を見直す。

「ごめん…少しボーっとしてた。」

考え事してたつて言った方が早いって思ったけど、現にボーっとしてたのは事実だからなあ。

「まだ本調子じゃなかったら、無理しないでゆっくり休めた方が良いよ。」

心配してくれるのは嬉しいけど、何か複雑だよ。

京とセスさんは、本当に仲が悪いって言うのは有名な話だから。

「大丈夫だよ。京が心配してくれるのは、嬉しいけどさ。」

今、精一杯の笑顔を京にした。

本当に気を使わせてしまったのは、この後の事で…。

京が心配性なのは、俺でも良く分かっている。

俺以上に心配性で、ちよつと俺が居ないと泣き出すからなあ。

束縛とかそういうのじゃなくて、そういう京を見れるのは相方であるリョウさんと彼女である俺だけの特権。

分かっているけど、本当に心配させたくなかったんだ。

「だけど…。」

この言葉で京が泣き出しそうになってしまったのは分かっていたし、京も俺の体がこんな状況だから心配しちゃったのは事実だし…。

「だけど…K'が、シヨートしちゃったら…。」

さっきの俺と同じ状況に近い京の表情を、俺は黙って見てしまった。

「俺…ちよつと…心配になっちゃったよ…。」

やばっ…泣くと思つてたら、泣いちゃって困つたけど自分の理性との戦いになっちゃった。

「K'の事…傷つけないから…。」

現にもう…傷ついているよ…。

死にそうにはならないけど、辛いのは事実で…。

京にとつては、それが一番の方法だつて思つたらしいけど…。

「K'が、傷ついてしまったらごめんな。」

京がまた気を使ってしまったから、俺だって苦笑するしか無くなっちゃったし…。

ここで素直じゃない所を見せてしまって、京が余計に泣いてしまったら説教になる事だってありえる。

京のフラッシュバックが起こるとも限らない今の状況で、起こってしまったたらさつきみたいには止められないかも知れない。

「別に、気にしないでね。俺…全然傷ついてないから…。」

今は本当の事を言わなくちゃだめだって思ったし、俺だって辛くなるのだけは嫌だ。

「京が苦しんでいる顔をするのは、もう嫌だよ。」

本当の気持ちを話さないと通じないって思っているし俺だって本当は泣きたいって思っているんだけど、体が言う事を聞かない。

いや、むしろ泣かない方が良いと思ったんだ。

京を心配させないためだって思っているし、はたから見たら京が俺を泣かせた風に思われるのだけはマジで心外だ。

嫌だって言っても、泣いてしまったら元もこうもないけど。

「俺は笑顔になってる京の顔が、一番好きなんだから。」

俺の方から笑顔にならないと、京も安心できないって思ったし笑顔の京の顔はすごく可愛いくて自分の理性が飛びそうになるけど京は女の子じゃなくて男なんだと自分に言い聞かせている。

京は、極端に女の子扱いされるのが嫌いだって言うのも知っている。知っているのに、社さんやクラークさんは『女扱い』を時々するから京がキレちゃうんだ。

京がどれだけ女の子系の顔をしているのだからって、本人にとってはコンプレックスなんだから。

しかも、拳崇の相方であるパオ以上に『華奢』わさげなんだから。

「そっか…。」

真っ赤になっている京の顔はマジで可愛いくて、抱きしめたくなる。

だけど今の京にとっては、それが一番の苦痛になってトラウマがいつまた襲ってくるのか分からない。テリーさんにあんな事をされて、辛い思いをしているのに社さんや八神さんはそれまでも倍増させた。

そりゃ、あの時にプロポーズを受けてからいろんな事がありすぎて全然京にかまっていられなかった俺だって悪いよ？

だけどさ、本元もとをたどれば社さんとか八神さんだって悪い事をしてって自覚しちゃっているのかなあ。

京にあんな事をしといて、もちろん知らん振りなんて出来ないし2人のせいで京が大泣きしてしまったのは事実なんだから。

2人共、説教をされたから京にとっては本当は嬉しい事なのにただトラウマだけが残ってしまった。

今は京がほとんどフラッシュバックを起こさないし少しは安心していたんだけど、やっぱり京が元氣じゃないと辛いし苦しいよ…。

「K、？」

俺が少し考え事をしていると、京が少し寂しい顔で見てきた。

「何でもないよ。それにしても、寂しい顔をしている京も可愛いなあって思ってたさ。」

俺が京の顔を見直してそう言うと、京は顔を赤面させて見直してきた。

だって本当に可愛いって思ったし、俺が一番大好きな顔だから。

「可愛いって、言わないですよ。」

だって、本当に可愛いんだもん。

赤面している京はとても素直で、女である俺だって少しドキッとする事がある。

事務所の関係でこっちは男言葉を使っているうちに、抜けなくなってしまうんだけど…。

「ごめんごめん。だって京が、『女の子っばい』からつい…。」

せつかく可愛い顔をしているんだから、怒らせたらまずいつて分かっているんだけど…。

ただでさえ京は、『女の子扱い』されるのが嫌いなんだから…。ベルが鳴って、誰かが大声を出している。

すぐに相手が拳崇だと分かった俺は、ダルイ体を起こして玄関へ向かった。

「大丈夫か？ ドアの音、変な音になったから。」

あそこで大声なんて出したから、取り立てと間違われるじゃん。

「お前、ドアの前で叫ぶな。るっさいし、近所迷惑なんだよ。」

拳崇と俺は本当に同期だから、こんな愚痴をこぼす事がある。…こぼされる事も、あるけど。

でも、俺と京が付き合っているのを知っている1人で拳崇自身も『前世の記憶』と『龍の力』を持っている。

「しゃあないやろ？ お前も草薙さんも呼んだって、来なかつたんやから。」

ムスツとなっている拳崇を見て、少し凶星で言葉を失ってしまった俺。

相変わらず京は、キョトンしてこっちを見ている。

「お前の声は、取り立てみたいで怖いわ。」

俺がそう言つと、少しスネた顔でイスに腰掛けた。

「そんな事言うなや。自分でも、凹んでいるんやから。」

そんなの、お前の勝手じゃんか。

自分でも思っているんだから、自虐しているんだろつなあ。

「んなもん、凹んどけば良いじゃん。実際にこっちは、取り立てみたいで怖かつたんだから…。」

京は俺と拳崇のやり取りを聞いて、くすつと笑った。

「本当に、『仲良し』なんだな。」

『「仲良し…じゃないっ！！」』

声を合わせて、京につっこんでしまった。

この時、京が『ぼけ』だつて聞いていた俺は本当にリョウさんの事

が本当だったんだなあって思った。

「冗談じゃない！ただ…拳崇とは、同期なだけ。」
別に腐れ縁だとかそう言うんじゃない、特別に仲が良いって訳でもないし…。

思いっきり否定しとかないとだめだって思った俺に、京が抱きついてきた。

「そんなに思いっきり否定しなくて、良いのにさ…。」
拳崇の声のトーンや標準語で京が泣くなって感じた俺に、京当人が不思議な顔をしている。

京のそんな顔をしているのを見て、俺は自分の理性が飛びそうになっている。

肝心な京は俺がそんな状況になっているのを知らないで、また普通な顔になっている。

本当に京も、無自覚なんだから…。
こっちは自分の理性を抑えるのに、鼻を抑えるしかなくなってしまったじゃん。

こりゃ、俺も…相当なもんだな。
否定すんなって言ったって、事実…京とセスさん程仲が悪い訳じゃないのにさ。

「京…泣いてんの？」
すすり泣いていると思った俺は、京の顔をまともに見られない状況になってしまった…。

今の状況だって、見れないよ。
自分の理性が爆発しそうなのに、このままじゃ社さんや八神さんと同じで京を犯してしまう可能性だってある。

現に俺の体は、元の姿とは違って男ver.の姿になってしまったんだから…。

「泣いてなんか…無いよ。それより、K…体熱くなっちゃってるよ？」

京も俺の異変に気付いて、照れ出した。

「俺…京と、Hしたい…。」

肝心な京も照れているから何も言えなくて思っている事だけを言った。

このままだったら、ムンムンした状態で仕事に行かなくちゃならぬいし男の姿だから余計にやばいし。

姉ちゃんにも、『にやり』されるのが分かっているから…。

それに、無理矢理京とHするなんて事はしたくないし俺自身は京を傷つけたくないから…。

「京が嫌だったら、しないよ？俺は、京を傷つけたくないから…。」
でも前に一度だけ、京を犯してしまった事がある。さすがにその時は京は泣き出しちゃったし、俺は散々京の中に出してしまっただから…。

だってあの時、京が『もつと、もつと…』って言うから…。
今にして見れば、言い訳しか聞こえないんだけどね。最低な事をしたって言うのは、分かっているんだけど…。

「嫌じゃない…。傷ついたって…別に、良いから。」

耳元で、言わないでよ。

思わず、ゾクッてなっちゃったじゃん。

「俺…K」とHした時は、ビックリして泣いちゃったし俺だってお前の始めてを奪っちゃったから…人の事言えないんだけどね。」

そう言った京は、俺の顔を見て照れて来た。

「でも、K'が俺とHするのが嫌じゃないって言うてくれたみたい
に俺だつてK'とHするの嫌じゃないよ。」

照れている京も何か可愛いくて、俺の下半身が熱くなって来た。
やべつ、とすぐ思ったけどなかなか収まらなくて…。

気付いたら、京を押し倒していた。

「京が、誘ったんだよ…。ヤッてる途中で、嫌だつて言うのなしだよ。」

真剣な顔で素直に『Hする』と宣言した俺に、京は驚きを隠せない。京を傷つける事になっちゃうけど、京自身も『嫌じゃない』って言うているし…。

少しは京の体に跡を残したいんだけど、跡を残すとなっちゃ俺の中に流れている吸血鬼ヴァンパイアの血までもうずいてくるのが分かっているし…。
んっ…あ、はあ…ケ、ケイ…ダッ…シュ…う。

京が俺の事を好きだって言うてくれるみたいに、俺だって京の事大好きだよ。

京の大事な所を指で愛撫してくると、京の体は元の体の状態の俺が感じているみたいに跳ね上がる。

んあっ…だめ…え。何か…くすぐりたい…。
凄く艶っぽいって言うか、何か声が可愛いくてたまらない。

俺は京のズボンや下着を、一気に脱がして抵抗が出来なくさせる。
んっ…デカ過ぎて…。もう…。

京の感じている声やイキ声は、凄く女の子っぽいって何か可愛い。男として…彼氏として、何だか幸せって言うか最高の贅沢ぜいたくだっと思ってる。

でも、『女の子っぽい』って言う言葉を嫌っている京の前では言えなくて…。

ん…、…出る…。

俺も、一回目の絶頂を迎えてしまった。

ケ…ケイ…ダッ…シュ…。

京の顔を見ると、もうそろそろイキそうになっているんだなあ。

出しちゃって、良いよ。俺が指で、受け止めてやるから…。辛かったら、支えてやるし…。

俺がそう言った途端にいれんした様に、京の体は縦に震えている。

ふ…うう…んっっ…！！

すぐに『イッた』事を確認した俺は、後ろの壁に京を座らせる形に

した。

この時はすでに、拳崇は別の部屋に行つて玄関にいなくて再び京と俺の2人きりになっていた。

今日は、最後まで…して良いよね!?

本当に自分がドSだと自覚した訳じゃないけど、もつと京をいじめたいと思つていた。

後で罪悪感が来るつて分かつていても、京と1つになりたいつて言うのもあつたし…。

彼女で彼氏である京とこうして、一緒にいられる日を作りたかつたから。

う…うん…。でも…中に、出さないでね…。

一回目に『イツた』時に京の目には涙が溜められていて、俺はその顔を見て下半身が京の中に入れる前から大きくなる。

『中に出さないで』つて言つたつて、無理だよ。

そんな可愛い顔をして、こっちを見ているんだから…。

京の顔は、俺が口に出したのを苦しそうな顔になっている。

凄く…苦い…。

だから、上目使いでそんな顔されたらますます京を苛めたくなくなつちゃうじゃん。

俺がせっかく我に返つているのに、京の顔が可愛いからまた頭が真っ白になつちやうじゃんか。

京の中に自分のものを入れて、激しいビストンをする。

ひ…っ!?

京の中は、ビストンの動きに答えるように縦に動いている。

しかもビツクリしちゃっているから、涙が一気に流れてしまつてい

る。何度もイキ声を出してもイカせないつて言うか、俺自身元々京の中に出そうと考へていたからビストンを止めないつもりでいたし。

い…痛あ…。K'の…お…大きく…なつてる…うう…。

京の声は、荒くなっている…谷間に感じている声が出ている。その声はすごく色っぽくて、すごく可愛い…。

あつ、や…！すご…深いっ…。
気絶しかかっている俺は体を起こして、更に激しいビストンをする。

しだいに京は感じている声も出なくて、息だけが俺に聞こえてきた。俺も感じすぎて言うのもあるけど、汗ばんでいる京の体を抱きしめる。

き…京…イクよ…。

そう言っただ俺は、京の中に出した。

あううっ…アアアアアッ！！ん…くううっ。

京もそれに答えるように、体をガクガクさせた。

俺が京の中に出して、すぐに京が俺に抱きついて泣いてしまった。

はふう…。も…もう…K’のお…ば…かあ…。

一回俺は京の中でイッて、また大きくなった。

その異変って言うか、京自身の快楽を迎えようとしたのかイク寸前の声を出している俺のを受け止めている。

現に体を一度だけ、震えてしまった。

や…また、俺の…中で…大きくなってる…。

何度もHをしないと元の体に戻れなくなってしまうって言うか、仕事の都合上戻れない俺の体をHする前の京は良く知ってる。

こりゃ、明日…2人共仕事オフらないとだめだなあ。

一度中に出しているから、京の中は濡れている…。

俺…京の…珠洲の感じている声…もう一度、聞きたいなあ。

あんなに京をイカせたのに、まだ足りないのかと自分で少し思いながらもゆっくりとビストンをする。

ひあっ！ア、あつ、んんっ！！もう…やめ…っ。

本当…俺って、DSだなあ。

手淫の時に、何度も京と濃厚なキスをしたりHしていない時でも…。

…つく…も、氣い…済んだでしょ…？

人前で京の方から抱きついたりしたり、正直恥ずかしい事をしたんだろうなあって思った。

そう思うと京に対して、イラつきを憶えてしまう。

本当は京に当たっても何にもならないって思っているんだけど、傷つけてしまったのは俺なんだしはたから見たら俺の今のカツコで最低な男だって言われるのが分かっていているのに何で俺は酷い事をしちゃったんだろうって言う罪悪感が来てしまう。

珠洲の顔も声もすごく可愛いくて、俺は大好きだよ。

ゆっくりとビストンをしているから、俺的には全然息が荒くなるって言うか声が出てしまう事はないけどさっきから俺のを受け止めている京はすごく苦しそう。

はあうっ…。凄く…激しいんだもん…。

傷つけて泣かしてしまったのは、俺だと今の京を見てそう思う。さっきだって俺が先にイッてしまったから、京はただ受け止める事しか出来なかったしイク時の顔も俺以上に美人って言うか可愛いかったから…。

何度も、イッて良いんだよ。俺は、京のイキ顔見たかったから…。

これは、今の俺にとって本当の事。

さっき俺は京の可愛いイキ顔を見ないで、先にイッてしまったから…。

な、っ…ちよ、待っ…。

京の体は、汗をかいていてどこでも俺が触ると一瞬でイキそうな状態になってしまっている。

俺は、その京の体をゆっくりと触った。

ふ…うん…。

そうすると、俺のものを締め付ける様に京の体は敏感になる。

危なくその締め付けで、イキそうになった俺は京の中が自分ので一杯にさせるように何度も何度も激しいビストンをした。

…ああ…。

京は、俺のを受け止めながら苦しそうになって俺の顔を見ている。この時の京の顔が一番大好きで、改めて俺の『もの』なんだなあって自覚させられる。

京…、珠洲…。大好きだよ…。

京の体は、敏感になっていて今にもイキそうな顔になっている。

あ…っ…はあ、はあ…。あっ、やあ…も…だ…め…え…あ、っあ…。

『ごめん』と耳元でささやきながら、京のイキそうな顔を見て俺は京の中に思いのたけを出した。

くう…。あ…っ…あ…っ、あ…ケ…ケイ…ダッ…シユ…うう。

く…う…。

俺が、京の中に全てを出した途端京の体がびくんつと跳ね上がる。

京は、何度も俺の締め付けながら感じてしまっている。

っ、ううっ、っく…。

苦しそうになっている京の顔を見ると、こっちもまたイキそうになってくる。

はっ、あ…んっ、…っ、ケ…ケイ…ダッ、シユ…っあ…。

京の言葉を聞いて、本当はまだイカせたくなかったんだけど絶頂が近かったからこのままでも良いのかなあって思った。

あっ、ケイ…ダッ…シユ…。

我慢しているのが分かったから、京の顔を真顔で見る。

…んっ、は…っ。

京の感じている声は本当に可愛いつて思ったし、声だけでもこっちもイッてしまいそうになる。

あんっ、いく…あんんっ…くうんっ…。

俺のを受け止めているから、辛いのは分かっているけど…。

俺だって、元の姿でされている時…すごく辛いんだよ？

あぁっ…あんっ、自分じゃ…なくなっちゃうよぉ…イク…イツちやうう…感じ過ぎちゃって…え。イク…う、も…うだ…め…え。

女の子の絶叫みたいに、京が絶頂を迎えようとしているけどまだイカせない。

俺がイクのを全部、受け止めなきゃ…。

大…大好きだよぉ…あぁっ、んっあ…う…っ。す…ご…く…気持ち、良いよぉ…。イク…イク、よぉ…んっ。

京…一緒に、イこう…。

俺がそう言っつて、俺が京の中にもう一度出した。京は、息を荒くさせて小さくこくっとうなずいた。

…あああああぁっ…っ…っ…！！

京も、俺のを受け止めて体が縦に上がってしまった。

最後には、京が俺に抱きついて気を失ってしまった。

京の気絶している顔も、何かすごく可愛いくてそれだけでもまた京を傷つけたいって思った。

だけど、これ以上しちゃって京が大泣きしてしまうのが分かっていたし俺だって京のマネージャーさんであるシエルミーさんに説教だけは嫌だ。

俺は、そんな京の髪の毛を優しく撫でて抱きつきながら寝た。

第11話目です。

この場面で、クリスがセスの子供を身籠る。妊娠している事が発覚します。

しかもその反動って言うか、何というかHしてしまった京とK'...

^^ :

.....

次回予告

クリス「ごめんね。今まで、黙っていて...。本当は、もっと早く言えば良かったんだけど。」

K'「クリスが、悪い訳じゃねえよ。んで、セスさんは子供認知してくれるのか？」

クリス「認知は、してくれるって。『俺が、悪いのはわかっているから』って言うてくれて...。」

K'「ロバートさんと、大違い。」

今回は、12話。..... 太陽たいようの光ひかり.....

.....太陽の光　　s u n b e a m s　　.....
（前書き）

反動で、Hしちゃったけど京きょうの体が1番辛いって言うのは分かって
いたし放置したら可愛そうだって酷いって思ったから京きょうの為に今日
1日仕事をOFFたんだ。

大好きな人と一緒にいたいと思うだけで、ちょっと贅沢なのかなあ。

（汗）

だって、当然の事だっと思ってているし自分の彼女（彼氏）を寂しい
思いをさせたくないって思ったから。俺は、京の彼女で珠洲すずの彼氏
なんだから。

俺と京が気が付いたのは、次の日の午前6時。

「……ん……。」

京が起きたのを確認してから、すぐにお互いのマネージャーさんに連絡を取った。

まあ、2人共俺らがイチャイチャしていたから全部知っていた訳で思いつきり皮肉を言われたんだけどね。

そりゃ、そうだよな。

カップルが空き時間にする事と言ったら、ナニするしかないもん。俺が、エロすぎるだけなんだけど……。

散々京をあんな風にさせて、放置するなんて出来なかったしもし京だけを一人にさせたりしたら俺は一生恨まれるかも知れないって思ったからだ。

「あ……起きた？」

京のあの時の顔を見ているとまた、下半身が熱くなってしまう。

「K……おはよう……。」

京も、昨日の事を思い出して真っ赤になっちゃった。

やっぱ、あれから何時間が経っても可愛いのは変わらないなあ。

京には謝らなくちゃならないし、傷つけてしまったのは俺なんだから……。

「と、とりあえず、抜いて？」

いつまでも、京の中に入れっぱなしだったら京だって動けない。

「う、うん」

ずる、と自身を引き抜くと、続いて白く濁った夢の塊が溢れ出す。

その感覚に、京がピクリと身震いをする。

「は、あう……。」

勢い良く抜いてしまったら、京がまた気絶するって思ったしゆっく

り抜いてもこの状況だから…。

京の髪の毛をゆっくりと撫でて、一瞬跳ね上がってしまった京の体を抑えながら2人で照れてしまった。

「俺…あんなに感じちゃって…すごく恥ずかしかった…。」

京が普段の女の子みたいにふくよかな胸を持つてないのは、分かっているけど感度的の良さは女の子とそんなに変わらない。

まあ、俺はこのまま男ver.での仕事だったから別に良いとは思ったけど京の体の事を考えたら人事とは思えないし俺も休もつって思っただから…。

つて言っても、そこら中にいる女の子と京を比べても京の方が可愛いんじゃないかなあって思う。

女の子でも、可愛い子はいるんだけどね。

「でも…俺は、K.の事…大好きだよ。」

抱きついた京が、俺の顔を見ているとこっちが謝れなくなってしまっただけじゃ。

「もしかして…罪悪感とか、出てきちゃってる?」

とぼけた京に首を傾げられたら、こっちだって何にも言えないじゃん。

理性と戦うか、京に抱き返すとか…。

「そうなんじゃないんだけど、現に俺は京を傷つけたんだから…。」

責任って訳じゃないけど、酷い事をしちゃったんだから…。」

「責任?何で?!」

京が更にとぼけた顔で、俺の顔を見てきた。

「俺の方から誘ったのに、自分で何でも背負い込むなよ。俺だって気絶ぎりぎりの時、『もつと…もつと…して…』ってDM的発言しちゃってたんだから…。」

本当は、DMじゃないんだって否定したかった京だったけど耳まで真っ赤になっっているから説得もあつたもんじゃない。まあ、否定

している割りに照れている京の顔も何か可愛いくてたまらなくなってしまう。

元の姿に戻っても同じ想いなのは変わらないし、セスさんの相方さんであるロックさんとの仲も良好だって京は言っていたけど何でセスさんと仲が悪いんだろう…。

「ねえ、京？」

着替えてから、京のそばに座る形で京の顔を見る。

「何で、セスさんと仲が悪いの？」

ズバリの事を聞いたから、京が黙っちゃってタオルケットを上からはおってしまった。

「あいつが、お前の事からかかって来たから…。それにしつこいからブチギレちゃったんだ。『京とKは夜にHしている。』って…。」

京ってしつこいの言う行為が嫌いだから、キレたって仕方ないって思うけど相方のリョウさんからしてみれば京がキレた所は見た事がない。京は、温厚で通しているから…。

セスさんと京って同期だからって事もあるけど、大喧嘩の原因の一つに俺が関わっていると知って正直驚いてしまっている。しかも今回は、セスさんがクリスマスさんを妊娠させてしまったから…。

「K…怒ってる？」

俺が、セスさんの事でイラついているのを見て京が冷や汗をかいている。

「クリスマスの事?!」

京の言っている事は事実で凶星だったから、何も言えなくなってしまう…。

「う…うん…」

俺が元気を無くしたのかと思ってしまった京は、不安そうな顔になっってしまった。

京もそういう経験を持っているから、今もトラウマとして残っちゃっている。

「京は、俺とHしている時…嫌じゃなかった？」

本当は、H中にトラウマが襲って来たら困ると思ったから不安だったんだ。

トラウマが来ているのに、Hなんてしたら京が余計に苦しむと思っただから。

これは仕草が、女の子っぽいからだなんて言えないぞ。

「嫌じゃないよ。俺…言っただよ。『嫌だったら、しないよ？』って…。んで俺…嫌じゃないよって…。」

京の顔が耳まで真っ赤になってくるのは、俺にも分かった。

『嫌だったら、しないよ？』って言ったの、俺なんだけどなあ。

まあ、京が笑顔になっているから良いか。

「セスさんの事で、不安になった？」

不安にもなるよ。

京とセスさんは、本当に仲が悪いんだから…。

「ちよつとね。」

本当はすごく、不安なんだよ。

殴り合いの喧嘩ドンパチになるんじゃないかなあって…。

そうなったら俺は、大泣きしてしまうんじゃないかって思う。

「無理しなくて良いよ。」

京に言われ、ちよつと言葉が出なくなってしまった。

無理するなって言っただって、そっちが誰かと喧嘩するところちが辛いんだって。

胸のあたりが苦しくなって、泣きたくなくなるし…。

京もそれを分かっているし、オロオロしてしまうかも知れない。

「K、は何でも一人で考え込んだり背負い込むから、無理してほしくないんだよね。」

京は、起き上がって後ろから俺に抱きついてきた。

「俺だつて人の事言えないけど、やっぱ大事な人に無理してほしくないもん。」

今の京の体が女の子だから、俺以上に大きな胸が背中に当たる。うらやましいって言うか、何度かの俺とのHの反動で大きくなったと考えたらまた赤面してくる。

流石に理性が壊れるって訳じゃないけど、さっきまで京とHしてたんだよなあ。

俺は散々、京の中に出したり思いつきり京をいじめちゃったけど…自分なりにすごく罪悪感があつて、何で俺はあんな事をしてしまったんだろうつて。

後悔したつて何にもならないって分かっているのに、罪悪感だけは妙に残る。

京の方から誘つたつて言つたつて、最後までしちゃつたのは事実だし…。

「京…体…だるくない？」

京も起き上がつて時間が経っているけど、まだ体がだるいのは自分のせいだつて思っているから京の体の赤くなっている所を見ると顔全体が赤面してしまう。

急に立ち上がったから、京の腰に激痛が走つたのは事実で何度も京の中でイッてしまったんだつて改めて思った。

京の中は、俺ので一杯になつていゝし仕草だつて可愛くなくなつていゝる京の顔を見るとまた下半身が熱くなつて来る。

本当、俺つて変態スケベだなあ。

「大丈夫だよ…。それより…俺…後処理、した方が良いよね。今…俺…女の子の体に、なつちやつていゝんだから…。」

俺…今の京の顔を見れないつて言っているのに、何でそんな可愛い顔するんだよ。

余計に、やばくなつちやうんだけど…。

「俺…でも…この姿で…K…の子…妊娠しても…後悔してないよ…」
「うわっ、うわっ…。」

理性が飛びそうになっているのも知らないで、何でそんな事言うの
かなあって思ったんだけど京の顔を見ていたらそんな事も言っ
てられなくなっちゃって…。

まあ、俺は男の姿で仕事しなくちゃならないし京だっ
ていつまでも女の子の体にはな
ってられないから…。

どっちにしたって、マネージャーには『にやり』されたけど『仕事
だけはしなよ』ってねえちゃんには言われたからしなくちゃなら
ないさ。

京を一人で置いておくなんて本当はしたくなかったんだけど、京が
『仕事してきて良いよ。俺、一人でこの部屋にいるから。』って言
ってくれたから不安があるけど行くこうって思った。

「俺の方から…誘ってきたんだから…。」

京の耳が真っ赤になってしまったのは分かったし、俺までつられて
真っ赤になってしまった。

「K…と…Hしたって…後悔は、してないよ。」

自分の理性は何か保てたけど、こんなに耳まで真っ赤になってい
る京の顔は初めてでこっちだって真っ赤になってきてしまう。

後悔してないって言うってくれたから俺にしてみればうれしい事だ
し安心したんだけど…。

笑顔の京を見ると、これ以上傷つけないって思ったし京は
今も自分のトラウマと戦っているから酷くなるのなんて考えたくな
いし何か嫌だ。

今の京は、確かに声も顔も女の子っぽいし元から女の子系の顔の京
が生まれて来てくれた事に感謝している。

完全に、のろけだなあ…。

「京…。」

俺が京の顔にキスする距離まで、顔を寄せると京の言葉から衝撃発言。

「もっと…壊して良いのに…。」

理性の枷抜けるのを我慢して、京の顔を見ている。

「この体は…K’のものだよ…。」

そう言った京も、何か可愛いくて…。

俺も、京の事…大好きだよ。

俺が世界中でたった一人の大事な人だから…。

大事な人だからこそ、傷つけたくないって思ったし悲しませるのなんてもっと嫌だ。

何か、京の受け売りみたくなっちゃっているけど…。

照れたって、何にもならないって分かっているのに…。

「京…何か…すごく可愛い…。」

また、鼻を抑える事しか出来なくて…。

だって本当に、京が可愛いくてたまらないんだもん。

「K’…?!」

抑えている鼻を解放するしかない俺は、やり場のない腕で京を抱きしめる。

今、手を離したら京が戻って来ないと思ったから…。

そんなのは嫌だって思ったし、考えられない事だし京が悲しい思いをさせてしまったのは自分だからもう2度とさせたくないって誓ったから…。

「こうやって…抱きついたって良い？」

京も俺も服を着終わった後だったから、そうするしかなくて…。

安心させないとだめだって感じたから、今はこっちの方が良いって思ったんだ。

京がもう一度大好きな笑顔に戻ってほしいって思ったし、もう一度

京のイキ声を聞きたいって言うのもあったから…。

Hしてからますます京が可愛いくなっちゃって、俺は理性が飛びそうになってくるんだけど…。

だけど今は、我慢しなくちゃ…。

「K、?!」

京が不思議そうな顔で、こっちを見ている。

「もう一度、したくなってきた？」

ちゅど〜ん。

俺の理性が飛びかかって、京に抱きついた。

これには京が分かってしまつて、耳まで真っ赤になっちゃつた。

こうなつてしまうと俺の中に残っている理性は欠片つて言った方が早くて、押し倒しそうになる。

でも、京を泣かせたくないから京の耳の前でささやく。

その言葉を聞いて、京が俺に体を預ける形になつた。

「もう、K、つたら耳元でそんな事言わないでよ。」

元の体に戻ってしまった京に、ちよつと残念がる。

いつまでも京の体に抱きつけないのが俺の心の中にあつて、京を苦しい思いや悲しませるのだけは嫌だつて思ったから。

「ごめんね。」

「K、の言葉はどう捉えても、すごくセクシーで可愛い声なんだから。」

セクシーって訳じゃないし、京の女の子姿の方がすごく可愛いんだけど…。

自分でも京の顔を見て、またのろけちゃっているのは分かっているんだ。

京の事が好きだし、京以外の人だつたら自分をこんなにも出せなかったから…。

ドンドンと、玄関のドアを誰かがたたいている。

また拳崇じゃないかなあつて思っている俺は、京から離れて玄関に

向かった。

よく遊びに来るといったら、相方であるリョウさんと拳崇しかいないから…。

誰だろうつて思ったんだけど、すぐにドアの音が静かになったので違うんだなあってすぐに思った。

「誰？」

京も少し驚いているし、俺だって誰だか知りたいから…。

「お…俺…。」

直感で口調が拳崇じゃないなあって思った俺がドアを開けた。

拳崇だったら、『取り立て』みたいに大声で言うから…。

「ロックさん…。」

すぐに相手のセスさんの事だなあって思った俺は、玄関先で泣かれたら困るから部屋に入れた。

ロックさんは京と同じで、一旦泣き出すと止まらないって言うのを知っているから…。

「俺…デイクさんと別れた。」

少し驚いた顔を見ると、ロックさんがさらに話を進めた。

ロックさんとデイクさんが…別れるような事はなかったのに、そこまでセスさんの件は最悪な事になっているとは思わなかった。

「喧嘩別れとか、そう言う訳じゃないんだよね…？」

「もしも喧嘩別れだったら、元のサヤに戻るのとは不可能だ。」

「うん…。」

涙が溜められている状況で、『今更元さやに戻れ』だなんて言ったら絶対に泣き出すと思うしロックさんにとっては自分の相方であるセスさんがどうこう言う訳でもなく今が潮時だつて思ったんだろう。ロックさんは、一旦こうだって言ったら意地でも通すって自分でも言っていたから本当はロックさん自身が一番辛いんじゃないかなあつて思つて俺も言えなかつたんだ。

「俺：セスさんが問題起こしたからとか、そういうのが原因で別れるとか決めた訳じゃないから…。」
確か、ロックさんとデイークさんは婚約発表まで行っただってロックさんのマネージャーさんから聞いていた俺から見たら本当に驚いたし事情が事情だから仕方ないって思っている。

「だけど仕方ないって思っているけど、何とかしないとだめだと思って思っている自分もいる。」

京にしてみてもロックさんがそういう状況じゃなく別な事で別れたって言うのは分かっていたし、俺が言ってる事は分かっているはず。

「潮時ヒキキウって言うか、最近すれ違いが多いからなかなか会えなかったんだ。別に嫌いになっただから別れる訳でもないし、デイークさんが浮気したって言って別れる訳でもないから…。」

「ロックさん自身は、気を強くしようって自分でも思っているみたいだけど俺から見たらちよつとどろこかかなり無理しているように見える。」

「無理するぐらい我慢する事、じゃないと思いますよ？」

「無理をして、倒れるぐらいだったらまだましなのかも知れないけどロックさんの場合はブチギレるからなあ。」

「ブチギレたロックさんは手に負えないのは分かっているけど、しまいいにはテリーさんとリョウさんが2人がかりで止める羽目になってしまったらしい。」

「流石に怪我はしなかったけど、しばらくはいつまた爆発したらと思っただら『超危険人物扱い（ブラックリスト）』になってしまうから。」「でも、前とは違って結構丸くなったよな。」

「俺は、ロックさんが荒れていた時の事を知っているから最初は怖かったんだけど…。」

「まあね。」

苦笑して、俺の顔を見ているロックさん。

泣き止んでいるって事は分かっていたし俺にしてみれば、こんなにロックさんが泣き出している所は久しぶりだから。

それだけ今の彼氏である、デイクさんと別れる事はとっても辛い事だったんだろう…。

確かに10年以上も付き合っていたから特別な思い出もあつたんだろうって思うし、本当に結婚まじかで祝いモードになっていただけに別れたのは俺もすごくショックで…。

ロックさんにしてみれば初恋に近い恋で誰よりもデイクさんの事を、愛していたからショックなのは当然の事で…。

まあ、ロックさんをこのままにして置けないし紫苑さんの事もあるからなあ。

紫苑さんはまだ、強姦事件から抜け出さずにいる今男の人を会わせる訳には行かないし京と同じでトラウマになってしまつから…。

「パオにも、迷惑かかってしまつて困らせたのは事実だからなあ。」

パオさんは俺以上に温厚で。まったくつて言つて良いほどキレる回数が少ない。

「実際にパオさんが心配してくれるのは良いんだけど、『本当にロックが良いんだつたらそれだけで良いんだよ。』つて言つていたし…。」

これは、本当。

パオさんとロックさんはほとんど同期だから、仲だつて良いし友人的には結果的に残念な事になつてしまつたけど状況的に仕方ないと思つているらしい。

「俺も流石にビックリしたけど前に楽屋で、ロックとデイクさんがHしてたのを見ちゃつてたしさ…。」

いきなり、ロックさんの顔が赤くなつた。

「見てるんだつたら、止めてよ。」

止める事なんて、出来ないよ。

だって、楽屋のドアが全開に開いていたしこっちはロツクさんのイキ顔をまともに見ちゃったんだから…。

しかも、隣だったからそこを通らなかつたら荷物取れなかつたって。あいつも性欲、強いからなあ…。」

京…そんな事、ロツクさんの前で言わないですよ。

ただでさえ、鋭いんだから間違いなくHしたってバレちゃうじゃん。しかも今の京の体は、女の子になっているから俺が性欲を爆発させて京とシタって事になっちゃうじゃん。

「草薙さん。もしかして、女の子の姿になっていませんか？」
だから、気付かれた。

ロツクさんは、俺と一緒にでおねえちゃんがいるんだから…。

「妊娠したって良いって…思ってますか？」

ロツクさんに聞かれて、赤面してしまった京が首を縦に振る。

「うん…。」

まあ、うちのねえちゃんやシエルミーさんみたいに『にやり』なんてしないからちよつと安心なんだよね。

京だって、からかわれたら泣いてしまっつて可能性だってあるし…。

「K、この子じゃなかったらどうするんですか?!」

おいおい、京にそんな話言わないでよ。

せつかくトラウマが起きない形で、Hしたんだから…。

「俺、K、この子じゃないと嫌だっ!」

あーあ、泣き出しちゃった。

何で、泣かすかなあ。

泣いたらなかなか、止まらないのに…。

「京を泣かせて、どーするんだよ?!」

「まさか、本当に草薙さんが泣くなんて思わなかつたし…。」

2人でおろおろしてしまっているから、京も泣くのを止めてしまっつ。

「俺が泣かしたんだから、ちゃんと謝らなくちゃ…。ごめんなさい。」

・草薙さんがK、の事を本当に好きだったんだって知らなくて…。

「言い訳なんて、聞きたくないっ!!」

また泣き出してしまった京の体を、抱きしめて耳元で囁く。

その言葉を聞いて、涙が溜められている状態で泣きそうな京の顔を見たロックさんが何かに気付く。

「草薙さん…もしかして、覚醒しました？」

言い訳と言われて、苦笑してしまったロックさんが京の顔を見る。

「K、から草薙さんがトラウマを抱えているって聞いたから、辛い思いをしたんだろうなあ。俺も、八神さんに犯されている身だから草薙さんの気持ちも分かるし八神さん自身も自分の彼女である紫苑に言えないって思っているんだろうなあ。」

言える訳が、ないじゃないか。

こんな事、今の状況の紫苑さんに話したらショックでまた気を失っちゃうよ。

俺は、そう言うのは嫌だ修羅場になるのなんてもっと嫌だ。

「俺も、最後まで八神さんにされて大声でイカされちゃったし…。」「デイークさんにその光景をちょうど見られてしまって、八神さんを殴ってしまったって聞いてちよつとどころか驚いてしまった。考えただけで、八神さんは何人の人とヤツているんだろう。」

男女問わずで言ったら、100人ぐらいと関係を持っているんだらうって思うしこんな事は絶対に紫苑さんには言えないって思ったから。

「俺…一回流産しているんだよね…。その時ちょうどデイークさんとの子を妊娠していたんだけど八神さんのせいで流産しちゃって…。」

ロックさんが、泣き出した。

「俺…最初八神さんが、警察に連行された時に『やっとな俺も、八神

さんの性欲かの犠牲にならなくてすむ。』って思っていたけど紫苑の事を考えたらそうも言ってもらえなくなっちゃって…。」

涙がとめどなく流れてしまっているロックさんに、俺が口を開く。

「一緒に、犯人探しをしてくれませんか？」

ロックさんも、こっくりとうなずいている。

ロックさんにちゃんとした事情を話して、八神さんにはちゃんとアリバイがあるんだって事も話した。

「紫苑さんも京にも、迷惑なんてかけれないって思ったし、俺…京にプロポーズされたから…。」

俺が、プロポーズを受けたのをロックさんは知らない。

今はじめての顔をして、驚いている。

そりゃそうだよね…。

俺は、自分の過去の記憶とか前世の記憶とかがって限られた人にしか話していないから…。

ロックさんにとって、知らなかったって事は失礼になるって思っているらしいんだけど…。

まあ、これでにやりされるのは分かっているし京とHしていたのは事実だから今更変に言い訳したって何にもならないって思ったから。

「本当は、ちゃんと話せば良かったんだけど…。」

こんな状況で、本当に話せるかと思っただけけど今話さないときっかけが無くなってしまうから…。

紫苑さんには幸せになっただけでほしいんだけど、自分等が先に幸せになっても良いのかなあって言う不安だっている。

「おめでとう。俺らの分まで幸せになっただけね。」

ロックさんだって、本当は幸せを祝う問題じゃないって思っていると自分で思い込んでしまう時がある。

「俺…うまくこの後、仕事できるかなあ。」

凹んでいるロックさんの顔を黙って見ている俺に、京が口を開く。

「俺だつて、凹んでいる時に仕事があつたりするんだけど俺の場合はフアンの子とかの声援で救われたりK'がいてくれたから…。ロツクの前で、こんなノロケ話しちゃって悪いんだと思っっているけど…。」

京が気を使っているのは、俺にだつて分かった。

分かったからこそ、京はロツクさんの顔を見て苦笑してしまった。

「気を使うんだつたら、別に構いませんよ。俺はただ、そんな事で自分でキレたりしないんで…。」

おいおいおい、自分で凹んじゃだめだつて。

「でも、今のはちよつと凹んじゃったなあ。」

ちよつと笑顔になつているロツクさんが、ちよつと困っちゃった。

すぐに俺は、ロツクさんの笑顔が苦笑だなあつて思つたからロツクさんの顔を見たらロツクさんの方から口を開いた。

「でも俺：草薙さんや、K'に相談出来て良かった…。」

後悔していないと言うかのように、ロツクさんの決意は固くて…。

決意が固い人に、『後悔すれ』なんて言えないし俺だつて嫌だ。

身分では、考えられないぐらい大事な事で重大な事。

俺とロツクさんは京の実家みたいに最上階級の家じゃないけどそこハイパークラスそこ階級は上の方で。

学校の学費等の支払い等は、国でやってくれると思つていた俺に説教してくれたのは今はロツクさんの元彼になつてしまつたデュークさん。デュークさんも階級がそこそただけど『贅沢はするなつ』つて言つてたつて。

昔の俺は、贅沢が全てだつて思つていたから説教をされた時は自分にとって新鮮味があつた。

もちろん今は、『贅沢が全てじゃなくて人を思いやる事が大事』つて思っているからそんな事はしなくなつたけど…。

「そっか…。」

京もロツクさんの決意に、苦笑した意味も分かつたらしい。

しかしまさか、ロックさんも八神さんに犯されたって言うのにはびっくりしたし俺は驚きと怒りとショックで利き手をぎゅっと握っていた。

「K…。」

京が俺の顔を見て、不思議そうな顔って言うかちよつと不安な顔になっちゃっている。

あんな酷い事を八神さんはしたのは事実だし、それを知らん振りするなんてマジで最低だ。

それに、京が泣き出すのが嫌だったからキレたくないって思っていたし俺だって自分で修羅場を作るなんて嫌だって思ったから…。

「何でもないよ。」

Hをした直後って言うかした後だったし、怒りに任せて京ともう一回するなんて最低だって思ったから。

それに京には、『怒っている時にHしないでね。』って言われているから京を傷つけたくないって思っているし俺だって八神さんにされた一人だから苛立ちだって覚えている。

それにまだ、許した訳じゃないけどね。

とりあいず今は、京を落ち着かせるって言うか安心させるのが先だっと思って泣かせたとして説教をされるのだけは嫌だ。

「良かった…。紫苑関連の事で、機嫌が悪くなったかと思っただじゃん。」

京がほっとしてくれたのは嬉しいけど凶星だったから言葉も出なくなっちゃったし京には紫苑さんが『強姦された』って言えないよ。

京のトラウマがひどくなってまた、泣き出してしまったら困っちゃうし…。

「K、はすぐに顔に出やすいから、分かりやすいんだよね。」
京には、言われたくなかったなあ…。

俺以上に、顔に出やすいんだから番組とかに出てもすぐに嘘がばれ

ちやうしそのせいでからかわれたりしちゃっているんだから…。

Hの時の京の顔は、すごく可愛いのは分かっているって言うか俺以上に色っぽいのかも知れないけど…。

「Hの時のK'は、すごく可愛いんだよね。」

それは、俺のが京の中に入っている状況で京自身が苦しがつているから…俺だって京の中に思いのたけをぶちかましちゃったし…。

京はそれに気付かないけど、今すごく後悔はして…。気が付かないって言うか京は、ロツクさんと話をして…。

本当は、京の方が可愛いんだと言いたいけどロツクさんの手前言いだよ。

京の事を尊敬しているロツクさんは、女の子の姿になった京の事知らないんだよ？

「もう…。」

不完全な照れを残したから、ロツクさんが感付いてしまった。

「俺…草薙さんがK'とHしている所見えましたよ？」

窓とかドアを閉めていたはずなのに、何で見えちゃうんだろう…。

まあ、ロツクさんは身長が高いから小さい窓から見えるんだっけ…。

「草薙さんのイキ顔…すごく、可愛かったなあ。」

ロツクさんがからかうから、京が今でも爆死しそうになっちゃったじゃん。

ただでさえ、京にしても俺にしてもHを見られるのは嫌いなのに…。

「は…恥ずかしいよ…。」

京が耳まで真っ赤になっちゃって、俺の後ろに隠れてしまった。

「もう…人のH覗かないでよ…。」

泣きそうまでいけないけど、すねちゃった京。

その顔はそこら中にいる女の子以上に、可愛いくて危なく理性が飛びそうになるんだけど男の人に可愛いって言って良いのかちょっと

困ったんだけどそう思ってしまうのは事実で…。
って、俺ものろけてどうするんだよ。

「草薙さんって、Hしていると一気に可愛くなるんだねえ。」
ロツクさんがからかって来るのは分かっているけど、Hしてから数時間しか経っていないから京の体はまだぎこちない。

それだけ京の中に俺は、自分の思いのたけをぶつけてしまったんだなあって思ったらまた罪悪感が襲ってくる。

京自身は、『罪悪感なんてKが起こさなくて良いんだよ。』って言うてくれたけどあんな事をしてしまったのは俺なんだし途中で京が泣いてたのに何度も京の中を刺激しちゃったんだから…。

俺は…最低な男です…。

京を傷つけたくないのに、俺はそれを守れなくなるまで自分の理性が壊れてしまった。

説教されたって仕方ないって思ったし、京と会えなくなる機会が余り無くなっても仕方ないって思ったから…。

でも、京は俺を愛してくれると言ってくれたし俺だって京を愛しているんだから…。

何か…キザくさいかなあ。

「お前に、可愛いって言われたくないよ。」

ロツクさんに言われたら怒るのに、何で俺だと怒らない訳？

まあ、良いか。

これ以上の事を言ったら、自分がのろけているって言われるし余計にロツクさんに『にんまり』されると思ったけどしなかったから良かったんだけど…。

「そうですか？」

ロツクさんは京が耳まで真っ赤になっているから、俺関連の事なんだなあって思ったらしくだまって見ていた。

「だって本当に草薙さんは、K」と付き合ってから可愛くなった

から…。」

前に、バイスさんに同じ事を言われた事がある。

その時の京も耳まで真っ赤になってしまっ、俺もからかわれてしまっただけね。」

「でも、そう言う草薙さんも可愛いし好きですけどね。」

笑顔で、京の顔を見たロックさんに軽くだけど嫉妬してしまった俺に京が口を開く。

本当は嫉妬したって、何にもならないんだけど…。

京もロックさんもどっちかと言ったら、もてる方で『カツコイ系のランキング』でいつもトップを競っているのは知っていたし…。

「K…嫉妬しちゃっているの？」

うわっ、涙目だ。

「別に京に対して、嫉妬した訳じゃないよ。」

本当は、京にナンパしたから嫉妬したなんて言えないよ。

自分が子供くさいのは分かっていたし、余計にばかにされるのだけは嫌だ。

「本当に？」

疑いの目じゃないから、良かったと思っただけどこのままだったら京が泣き出すと思っただから慌ててしまった。

本当はキスした方が良かったと思っただけど、ロックさんがいたし人前でキスなんて出来ないってロックさんも分かっていたしごく恥ずかしいんだから。

「本当だって、京に嫉妬をぶつけちゃって泣いたりでもしたら俺が説教されるのが分かっているし実際にキスしたいけどなんか恥ずかしいよ。」

大好きだから、仕方ないって思っているし京だって照れてしまうんだけど…。

今だって京は、俺以上に心配性なのに俺が嫉妬したりしたら余計に心配しちゃうのが分かっているから…。

泣かせたいって言うのがあるんだけど、これだって後で説教をされるのが嫌だから。

「K' ってDSじゃないか？」

ロックさんに言われちよつと凶星だった俺は、ムスツとなったんだけど京が俺の顔を見たから機嫌を取り戻した。

自分って、機嫌かわりすぎだぞっ。

不機嫌な俺の顔を見たら京が、心配そうな顔をするし京を相手にめちゃくちゃ激しいHをしてしまったのは事実なんだから。

京だって自分の体がだるいと思ってしまうたロックさんに、ちよつと嫉妬しながら京自身も真っ赤になってしまっている。ロックさん自身は京の事を狙っていないって言うてたけどそれだけ京が可愛いって事になるんだけど…。

「いつまで、京に抱きついてるんだよ。」

俺がイライラしている時は、先輩後輩関係なく口調が悪くなるってリョウさんから言うていた。

まあ、自分でも自覚している事だしまだ完全にキレた訳じゃない。

京がこれ以上、誰かに強姦されるなんて考えられない。

「俺：京が他の人と、一夜をとにもするなんて許せないし何か京だつて可愛そうだよ。」

ロックさんから京を引き離して、睨む。

「これ以上誰かが悲しむなんて、俺は耐え切れないよ。」

シエルミィさんに、散々言われた事。

『京を泣かさない』って言われたつて言うか約束があったから。

結局京も、色々巻き込んだりしたし…。

俺だって、京を大事にしたいって思っているから…。

「京がトラウマを抱えているのは、ロックさんだつて分かっているのに何で京に抱きついたりしてるんですか。」

怒った口調で、ロックさんに話した俺に京はオロオロしている。

多分京が心配に思っている事は、俺が怒り口調になった事でロックさんがキレるって思ったんだろう。

「ロックさんだって普段は、優しい人だって言うのは俺だって知ってます。俺だって、京のトラウマは治したいって思っていますし修羅場だって大嫌いですから。」

京が泣いてしまったら俺は、今の京みたいにオロオロしてしまうって自分でも思っている。

「K'は、頑固だもんな。」

売り言葉に買い言葉…。

ロックさんに対して、怒りが込みあがってきた俺はロックさんの胸倉を掴んでしまった。

ブチギレた訳じゃないけど。ちょっとむかつく事があったからこうなっちゃった訳で…。

案の定、京が涙目になってしまったのは俺が抱きついていたらさぐに分かったけど泣いてしまったら厄介だって思ったし今は京の機嫌を取らなくちゃって思っていたから。

「京がいるんで争い事はしたくないんですけど、ちょっとムカつてなっただんですけど…。」

ロックさんに言ったら、クスって笑われた。

「本当に草薙さんの事を、愛しているんだなあ。」
当たり前だよ。

俺には京しかいないし、俺が京以外の人とHするなんて考えられない。

それに俺は、浮気性じゃないしね。

第一、『にやり』顔しないでください。

俺は、からかわれているって思ってしまうから。

「京を、俺から横取りしないでね。」

「大丈夫ですよ。」

自分は別れたばかりで、傷ついている時だし他の人と一緒になるなんて考えられないとロックさんは言ったけど前にねえちゃんから京の事が好きだって聞いた事がある。

その言葉が本当なら、ロックさんは京に告白すると考える方が正解なのかも知れない。

別にロックさんの事信じられないって訳じゃないけど、嫉妬してしまっただのは事実で気付いた時には京をきつく抱きしめていた。

急な出来事だったから、京は耳まで赤面してしまった。

「大丈夫だよ。ロックだって、他の人にも乗り換えるなんて事しないから…。それに、そうなった時にお前とロックの中を悪くさせるのも嫌だし俺だってお前と一緒に修羅場が嫌いだからさ。」

笑顔になった京の顔は、本当は辛いんだなあって思った。俺と別れる事で、京が俺自身が生きられるのかなあって思っている事もあるらしい。

大丈夫だよ。

俺は京から離れたくないし、そんな事って考えられないから…。だから、安心して…。

俺は京の泣いている顔を見たくないから、辛いのは俺だって一緒なんだよ。

確かに、Hしていて感じている顔の京を見ているのは嫌いじゃないしね。

「そういう顔をするって事は、まだ信用していないんだな。」

ロックさんも、少しムスツとなっていて。信用していない訳じゃないけど、もしかしたら京に告白するんじゃないかなあって思ってたきちゃって不安になっちゃったんだ。

京がらみの事になったらいくら普段が優しいロックさんでも、胸が張り裂けそうになって苦しくなっちゃうんだ。

「草薙さんの所に行くって思っているみたいだけど、大丈夫だよ。」

最初から失恋するって分かっている人の所に言っただって、自殺行為も良い所だからな。」

そう言ったロツクさんの顔は、笑顔になった。

ロツクさんは、別れたとはいえデュークさんに対しての思いは俺らより強いし泣きそうになっているロツクさんの顔はデュークさん一筋で幸せだったんじゃないかなあ。

自分もロツクさんも、思い込みすぎの所があるから…。

.....太陽の光（sunbeams）.....（後書き）

第12話目です。

タイトルの太陽の光は、実は京の事を言ってます。

太陽「京だと思っているので。」

.....

次回予告

京「誤魔化した。」

作者「だって、まーたHシーンを書いたんかって言われるのが分かってるから。だったら書かない方が良いかなあって。」

京「だからって、誤魔化して良いって訳でもないんだからな。」

作者「へーい。」

今回は、13話.....気持ちの帰納.....

ざっくりとしたストーリー

主人公は京で、ヒロインはK'で固定。当然のことに八神紫苑カッブルなども絡んでくるが、第一の殺人事件が起こってしまったりクリスの妊娠騒動が起こってしまう。

.....

クリスは、俺にとって所属している事務所の直接の後輩。

後輩だから、妊娠が分かった時はちよつとつて言うかかなり怒りの方が先にきていて……。だけど俺自身『おろせ』だなんて言いたくないし、そうなつてしまったらマジで最低だから。

悲しい思いをするのはクリスだと思っっているし、腹を痛めて産むのもクリスなんだから。

「俺、セスさんの所へ行って殴りに行ってきます。」
怒りが最大値まで達しているのが京に分かったから、涙目で俺の顔を見ている。

「止めなよ。俺、修羅場が大嫌いなのに何で殴りに行こうとするんだよ。あいつは、空手の有段者なんだから勝ち目はないのに……。」
大きなソファで隣り合わせになっている京と俺は、Hの行為後ロックさんが来て30分経過まで一緒に話していた。
セスさんや、デュークさんの事もあって……。

ロックさんはセスさんのせいで別れたじゃないって言うけど、少しぐらいは影響があるんじゃないかなあって思っている。
結局は、ロックさんだけが犠牲になってしまった形で……。

「京……心配した？」
俺が不安そうな京の顔を見て、キスをした。
キスされた京の顔は、赤面してきている。

「K、恥ずかしいよ……。」
耳まで真っ赤になっている京も、なんだか可愛くてまた下半身がやばくなる。

のろけてどうすると自分で自虐しても何にもならないって分かっているけど、本当に京は可愛い。

京に気を使わないとならないのは、京とさっきまで行為をしていたから体だってだるいつて分かっている。

第一、この場合京ともう一度しちゃったら京に泣かれてしまうのが分かっていたから何もしないでおこうって思った。

京だって、キスだけで恥ずかしがっているのは事実だし俺に抱きついていてだけでも憤死しそうになってしまっているんだから。

「俺……京ともう一度、キスしたい。」

俺も京の赤面でつられて赤くなっているから、説得力はないけど京の事が大好きなのは今でも変わらない。独占力強いのかなあ…俺。

「ん…。」

京の体が崩れそうになっているのを後ろから支えるように抱きつく。

「K'のキスつて…何だかすごく、エロイんだけど…。」

京だって、そんなのは一緒だよ。

初めてのキスで、【ベロチュー】までして来たんだから。

「京の唇も…何かエロいんだけど…。」

唇の事を言ったら、京は更に赤面しちゃった。

でも、こうしてキスしたのって初めてなんだけど…。

いつもは、俺の方がキスをされていたりキスしようとするときエルミーさんやねえちゃんにからかわれるのがオチだったし…。

「京の赤面している顔も…何か、可愛いんだけど…。」

俺が笑顔になると、京もつられて笑顔に…。

「もう…K'だったら…。」

俺が京を守りたいって思ったのは事実で、守られるだけはもう嫌だ。京の笑顔を見ていたいし、京より先に死んでたまるか。

「でも、本当だよ。」

京が抱きついて、真顔になった俺。

京もそれに気付いたのか、また赤面した。

「もう、こんな時に真顔にならないですよ。」

京の顔は可愛いし、仕草だって俺以上に【女の子】っぽいから大好きなんだけどちょっと羨ましい。

京の胸の高鳴りで、ドキドキしているんだなあって思った。

何だか、俺だってドキドキしてきちゃって今でも憤死しそうだよ。

「だけど、これだけは言える。京の事が好きだし大事にしたいって思っている…でも、京は俺の事本当にどう思っているかなんて京し

か分からないよ。」

さらに俺が、真顔になる。

「俺だって、一緒に戦ったりしたい。」

俺が、京の耳元で言ったから京はちよつと引いてしまった。

「大声で言わないでよ。決意するのは良いんだけど、凄く耳が痛いんだけど…。」

「ごめん…。」

でも、京はHの時も普段の時も凄く可愛いくて本当に京と付き合っているんだなあと思って思った。

今現在は、性別が逆になっているけどそれでも変わらなくて俺以上に『女の子っぽい』んじゃないかなあ。

だけど、俺は京と付き合っただけだと思っただけだ。

「俺…。K'がそんな気持ちを持っていたなんて、知らなかったからちよつと驚いたんだ。」

笑顔になる京を見て、俺も黙って見ていた。

ロツクさんの事や八神さんにかかっている容疑だってまだ晴れていないから、俺は黙っていられないしこれ以上誰かが悲しむのなんて嫌だから。

「俺だって、最初はロツクと同じ事思っていたけど八神だって自分がしていないって言うていてまだ容疑が晴れていないから…。」

確かに京の言う通りだって、思っているんだけど俺だって紫苑さんの事を考えたら本当に解決しなくちゃって思っただけで何でも背負い込むなって言われたりしているけど今はそんな事も言っただけでもない。

八神さんの事で、紫苑さんが泣き出してしまっただけで分かっていたし辛いのは俺だって一緒だ。

でも、ちよつといらついている自分だと思っているんだと思っただけでちよつと京に対して罪悪感が襲っている。

さつきだつて、京に対して自分の欲をぶつけたばかりだしまたする
つて言つたら最低な行為だつて思う。

京だつて、壊れたくないだろうし…。

マジな顔を見てて、京の顔が赤くなつてしまつているのは確認でき
たけど自分の理性が爆発しそうになる。

「俺…京の事大好きだし、大事にしたい。」

しばらくして京とまたしてしまつた俺は、自分の罪悪感を忘れるよ
うに近くにあるテーブルにコーヒーとクッキーを持つてきた。
ちよつと、やりすぎたかなあ。

これじゃ、自分が性欲をまた爆発させたようなものじゃん。

実際に、爆発させたのは事実だけど。

コーヒーを飲みながらベットの中で寝ている京を黙つて見ている。

「…ん…。」

体をだるくさせたのは事実だし、今謝らなくちゃ京に悪いもん。

結局は、京をあんなにさせたのは俺なんだから。

「K…おはよう…。つたあつ。」

朝じゃなくてももう昼になるつて言うのに、ボケてしまつたらたちが
悪い。

もともとがボケだから仕方ない事だと思つているんだけど、俺のを
受け止めた後だったから腰が痛いつて言うのはすぐに分かつた。

「そつか…俺…また、K’とHしちゃつたんだ…。」

腰を抑え、痛がつている京を見て俺はただ抱きつくだけ。

「京…ごめんね。」

ぎゅつと抱きしめている京の体は、女の子以上に細いつて言うのを
知つていて改めて俺はこんな細い体の京を壊してしまつたんだなあ
つて罪悪感が来る。

「K’が悪い訳じゃないよ。そりゃ俺は、痛いのは嫌だつたけど別
にK’とHするのは嫌じゃないしK’がH中に散々『好きだ』つて
言つてくれたのは俺だつて嬉しい事だつたから。」

ベッドの中で、笑顔になっっている京の姿を黙って見たままの俺。
京が苦しむまで、抱きしめちゃったから慌てた俺は苦笑したまま離した。

京の事は好きだっと思ってているし、大事にしたいって思ってもいる。

本当は、キスしたかったんだけど今の状況でしたら京が嫌な顔をするのが分かっていたからしないし泣いたりしたら余計に厄介だから京の顔を黙って見ていた俺に、携帯の着メロが流れていたのを気付いてビツクリした。

京が、俺の携帯を見て電話してる相手は京のマネージャーさんであるシエルミーさん。

リヨウさん経由で電話したのに出ないから、心配になって電話していたらしい。

まあ、心配するのは分かっていたし多分『にやり』しているんだろ
うなあって思った。

【腐女子組合】って言う組合に入っているねえちゃんにしても、シエルミーさんにしても大体の事は分かっていたから何も言えなくてそれに、言っただとしても余計にからかってくるのが分かっていたから言えないんだよね。

警察の人も頼りにならない今、本当に俺らで何とかしないと。

「俺：どんな京の顔も、好きだよ。笑顔になっっている顔も、Hの時の顔も…。」

それを言ったら、京の顔が耳まで真っ赤になって怒っちゃった。

「この、変態^{スケベ}K、！！」

本当は照れている顔も好きなんだよと、言いたい俺に京がムスツとなっちゃった。

「ごめんって…。」

俺の方向を見ないで外を見た京に、俺は少し苦笑しながら抱きついた。

余計な事を言ってしまったと思ってしまった俺は、ただ京を抱きしめる事しか出来なくて今度は京が苦しまないようにゆっくりと抱きしめる。

まだ京の体は、Hの後だから女の子の体になっっていてふくよかな胸が俺の体に当たる。

それだけでも、下半身は熱くなって来てヤバくなる。

押し倒せば良い事なんだけど、そうなってしまったら京が泣き出すと思ったし嫌われると思ったから。

散々京を傷つけたのに、今更になって傷つけたくないって言ったらそれこそ嘘になるって自分でも思っているし説教のネタにもなってしまうから。

「K、どうしたの？」

京が俺の顔を下から見て、キョトンとしている。

「な…なんでもないよ。」

思わず声が裏返ってしまった俺に、笑顔になる京。

だから、その笑顔に弱いんだよ。

「俺…頭…痛い…」

京が頭を抑えて、痛がっているのは俺が変な状態のまま京をイカせたから。

それだけでも、罪悪感が襲ってきて何で俺は京に酷い事をしたんだろって思ってきてきちゃう。

京自身がトラウマを起こしていないって言うか、フラッシュバックを起こしていないから良い事だろうけど泣いてしまったらそれこそ最悪だっと思ってたのは事実で…。

「ごめん…。京に辛い思いをさせたのは俺なんだし、体だって今辛いんだろっ?」

「だから、俺言ったじゃん。イライラしている時にHしないでよっ

て…。」
頭を抑えている京は、少し泣きそう。

「俺、体がもたないって言ったのにHなんてしたから腰とか痛くなつたんだよ。」

元々腰痛持ちじゃないのに、俺のせいで腰が痛くなつたって言われたらマジで凹むし苦笑だつてしちゃう。

「でも、K'のせいじゃないよ。俺だつて、誘っちゃったもんだし。」

笑顔になつた京の顔を、俺はまともに見られない。

嬉しい事なんだけど京が少しでも怒ってしまったのは事実だし、罪悪感が更に俺にのしかかつて来る。

そんな俺の姿を知っている京だから、俺だつて安心できるんだ。

「でも、俺が京を傷つけたのは事実だし謝らなくちゃならないのは俺なんだから…。」

罪悪感の塊になつてしまった俺に、京の方からキスをした。

京の方からされるなんて、何ヶ月ぶりだろう？

「俺の方こそ、ごめんね。」

てへへと笑う京の顔を黙つて見ていると、俺に気付いたのか耳まで真っ赤になつてしまった。

笑っている京の顔も、大好きだよ。

俺も、つられて笑顔になる。

前世の記憶を持っていても持っていなくても、いつまでも俺は京の事大好きだよ。

もう一度俺がキスしようとしたら、ドアが勢い良く開く。

拳崇か誰かだと思った俺は、ゆっくりとドアを開けた。

案の定相手は拳崇だったんだけど、何やら様子がおかしい。

「どうした。」

ドアを開けたまま、俺が拳崇に聞いてみる。

大泣きされたら、俺が泣かしたって思われちゃう。

「俺…ロバートさんに酷い事されたあ。」

酷い事という言葉に、俺はすぐに気付いた。

拳崇の話によると、勉強を教えてもらいにロバートさんの所へ行ってたらしいんだけど勉強そっちのけで3日間もずっとHされていたらしい。

ユリちゃんは、長期の仕事って言うかドラマの撮影に行ってる居なかったのに何も拳崇を【強姦】する事ないじゃん。

傷つくのは、ロバートさんじゃなくて拳崇なんだよ？

「ずっと、Hされてて…中に出してきちゃって…。」

それは、拳崇がレギュラー番組中にも影響してきて気絶寸前までいってしまったのは一緒にいた社さんから聞いている。

だからこそ、紫苑さんの事を思い出してしまっただけでいらついてくる。

いくら、拳崇が体力に自信があるからって何でそんな事したんですかって言いたいけどロバートさんはその場所にはいない。

「俺…誰も信じれなくなっちゃうよあ。」

泣き出してしまったから、俺も京も慌ててしまった。

このままだったら、ただロバートさんのせいでこっちが説教されるから家の中に入れた。

玄関に入った途端、大泣きしてしまった拳崇。

「声が出なくなるまで、激しくされて…。確かに俺は、自分で愛人になるって言ったけど付き合っている事なんてユリちゃんに言えなかったし関係を持っていてる事だと言えなかったんだ。あれほど、中は止めてって言ったのに…。」

中に出されたら、立てなくなるって言う体質の拳崇にしてみれば辛い事になる訳で…。

「俺…Hするのに終わった後、後処理しているのにロバートさんだったら『後処理するな』って言ってさせてくれなかったし…俺の体女の子だって自分でも理解していて女の子だって事が知られたくな

いから男の子系の服とか着ているのに妊娠したら女の子だってばれちゃうよ…。」

シヨックが、大きいと関西弁が出なくなるのは同期の俺が良く分かっている。

「隠し通せるか分からないけど、ロバートさんが子供を認知してくれなかったら俺…死んじゃうよあ…。子供は好きだし、俺一人でも育てたいって思っているよ。だけど、ロバートさんとの子供だから認知はしてくれないと子供だってかわいそうだよ。」

「拳崇…。」

京が、泣いている拳崇の髪の毛をなでている。

俺だって、嫉妬している訳じゃないしロバートさんが悪いって分かっているから…。」

「それでも…俺は、やっぱり…ロバートさんの事…好きだったんだって気づいて…。」

いつの間にか、隣の部屋にいるロックさんもベランダ伝いでこっちには来ている。

俺のせいで泣かしているって思われたら横目で見られるのは分かっていたから何とも言えないしロックさんだって事情は分かっているはず。

「どうしたんだよ。拳崇が、大泣きしていたから気になっちゃってさ。」

あの後、俺とロックさん…そして京は拳崇が泣いているのを慰めた。ロックさんにしても、京にしても泣くとなかなか収まらなくなるって言うのを知っている。

知っているからこそ、泣かせたくないって思ったし説教だってされるのだけは嫌だから…。」

「草薙さんは、Hの時苦しくなった事って無いですか？」

図星で、言葉を失ってしまったのは俺だって分かっていたし俺だっ

て同じ事を思っていたから。

「ちよつとね。だけど、K'の事拒んでないからね。」

ロツクさんがいる手前、仕草が可愛いくなくなった京を抱きしめる事しか出来なくて自分の理性が爆発できない。

「確か、前世の時もこうじゃなかったですか。」

ロツクさんも拳崇も前世の記憶を持っていて鮮明だから俺は、首を傾げてしまった。

しかも今は、拳崇が泣いているから余計なのかも知れない。

「俺は、前世の記憶が鮮明だから思い出しちゃって…。」

少し笑顔になったロツクさんの顔を、俺や拳崇が黙って見ている。

「八神さんの前世の人とセスさんの前世の人が大喧嘩して…。」

本当はその後の事を思い出している俺だけど、京だって前世の記憶を思い出してそんなに記憶が鮮明じゃないのに言わない方が良くかなあって思ってたんだけどロツクさんが更に話を進める。

「その反動で、俺はめっちゃめっちゃに壊されるまで犯されて…。ただ

俺は、2人を止めようと思って止めたのに…。」

案の定、泣き出してしまったロツクさんに同情したのか一緒に泣き出してしまったのは拳崇。

俺だって、その内容を知らなかったからちよつと驚いてしまったのは事実で現にイラついているのは俺だけじゃないはず。

前世の時、ロツクさんの方が位が上だったからって現世でロツクさんを犯すなんて事無いんじゃないですか？デュークさんも前世の記憶を持っていてロツクさんと付き合っているって言うてないけど、まさかロツクさんがそんな事になっていると思っていなかったし多分聞いた時にはビックリするんだろうなあ。

もしかしたら、俺以上にイラついてきて八神さんを殴るかもしれないし元彼・元カノになってしまったけどまだロツクさんの事は好きだって言うてたからなあ。

未練とかそういうのじゃなくて、ロツクさんを守れなかったって言うデュークさん自身の罪悪感が出てしまった結果だって俺は思うんだけど。

俺だって、デュークさんからその言葉を聞いてやっぱり『別れても自分の中で心から安心できる人』って存在なんだなあって思ったのとロツクさんがデュークさんと一緒に居た時だってロツクさんの笑顔が見れるから本当にそうなんだなあって思った。

現に、今だって拳崇を慰めている状況でもそう思ったのは事実だし京だって俺がうなずいているから安心したんだろう。

「ロバートだって、一緒だよ。ユリちゃんが居ないのに、毎日俺を呼び出して体の関係を結んでから『帰ってええよ。』って言うんやから…。」

自分は、体の関係だけが目的でロバートさんの愛人になった訳じゃないって涙ながら話した拳崇。

本当は体の関係だけ結んだままだと、体が辛くて何度も壊れそうになるって言うのは俺だって経験している事だし拳崇の気持ちも分かっているから言ってしまったら拳崇が泣き出してしまっのが分かってしまっし俺だって言うのが嫌だったから言わなかったんだ。

「俺だって、結構大変なんだよ？」

俺がどういう状況だったのか知っているロツクさん達にしてみれば、苦笑するしかなくて。

自分が京と関係を持っている事で、『女』なんだなあって言う自覚が出てしまっってちょっと照れてしまった。

だけど、関係を持った事は後悔なんてしていないし…。でも事務所には自分が女だって言えないのは社長だって分かっている事。

「京を泣かせる事になったら嫌だから、言いたくなかったんだけど俺…京が始めての人じゃないんだよね。」

急に俺が、話題を変えたから驚いているロツクさんときよとな

っている拳崇。

ちゃんと、訳を話さないとロックさんだっ
て納得出来ないって分か
っているし俺だっ
て今だっ
たら話せると思っ
たんだ。

京が泣くか泣かないかは分からないけど、言
う機会はここしかない
のは俺だっ
て分かって
いたから…。

帰納：意味は特に無いんですが、気持ちがぐらぐらしていると捉えています。

いわゆるカップルの分岐点、なのかなあって思ったりもしています
が。。。 ^ - ^ :

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次回予告

作者「よっ、そのバカップルっ。」

K「（キスを見られて）いきなり、声出さないで下さい。」

作者「だって、ラブラブの所を見たら誰だってからかいたくなるっ

て。（にやり）「

京「（真っ赤）何で、そんなに思考回路おっさんなんだよ。」

今回は、14話。 時間の流れの逆流

京きょうに、俺おれが患かかっている病びょう気きを知られるのは正直まことちよつとためろつたんだよね。だつて、京きょうに余計あまな心配しんぱいをかけさせたくなかつたし泣ないてしまつてお姉あねちゃん（ウィップ）やシエルミミーさんに説教せきぎょうされるのも嫌きらだつたから。

でも、京きょうにもいずれはバレばるんだから言いえただけでも良よかつたのかなあ。

知らなくて、泣なき出すのも何か嫌きらだつたしそれが原因げんいんでシエルミミーさんやお姉あねちゃん（ウィップ）に説教せきぎょうされるのも何なにだか嫌きらだつたら。

あの後、ロックさんと拳崇にちゃんと訳を話した。

「んで、相手は誰なんだよ。」

さつきまで、困り顔になってしまっていたロックさんがマジな顔になってしまっている。

「嘘言ったら、俺だって納得しないぞ。」

そんな京と、同じコバルトブルーの瞳で見ないでよ。

話そうって自分で思っていたのに、話せなくなるじゃん。

「マキシマに…はじめて取られて…京にも、言えなかったんだけど…京にバレちゃって…思いつきり…泣いちゃったんだ…。」

この2ヶ月に起きた事を、全部話した。

「お前、前に病院で一回会ったよなあ。まさか妊娠、したんじゃないよなあ…?。」

実はその通りなんだけど、京には言えなかったんだよね。

言葉が出なくなってしまうた俺の姿を見て、ロックさんの顔が怒り始めてきた。

「うん…。俺…一回、中絶して…無理矢理堕されて…。こんな事、子供好きの京に言ったら泣き出すと思っただしロックさんに言ったら怒り出すって思ったから。」

同期だつて聞いてたから、言いたくなかったんだけど辛いのはもう嫌だったし京だつて俺がこう言う状態でまたフラッシュバックを起こしてしまうかも知れないって思ってしまったから。

俺が少しブルーになったのを見て、苦笑してきたロックさん。

「俺…京とセスさんが仲が悪いつて言うのを知っているし結構ファンの子とかにも知られているから不安になって俺のせいでロックさんとマキシマが仲悪くなって欲しくないから…。」

京に抱きついている形で、涙目になっている俺をロックさんは黙っ

で見ている。

八神さんの事や紫苑さんが誰かにレイプされた事とかあってクリスが妊娠している事を知っているからちよっとビックリしたって言うのもあったんだ。

あの後リヨウさんから、京がセスさんを殴りに行って大変な事になったって聞いた時だって俺は驚いちゃって生放送で『放送事故』を起こしてしまっただくらいだったから。

「俺、誰かが傷つくの黙ってみるのだけは嫌で…凄く辛くて苦しくて…。」

京と付き合う時、『俺とマキシマが付き合っているんじゃないか』って噂になった事があった。

正直、マキシマとは幼馴染だし俺だってマキシマにレイプされたんだ。

なのに、マキシマは『俺とK』は、体の関係を持った』とか言うから京が誤解してすねちゃったんだ。

俺にとっては、たった一回の性行為で妊娠して中絶までしてしまっただ。

一緒にいたねえちゃんだって、猛反対したのは事実だったし俺だってショックで泣いてばかりいたんだ。

「もしかして、フラッシュバック？」

さっきまで黙っていた拳崇が、首を傾げて俺の顔を見た。

別にフラッシュバックって訳じゃないのに、そう思われているって言う事は俺の顔が不安顔になったから？

「一番犠牲になったのは、K'のお腹に居た子供だったしK'だってそれで一旦は男性恐怖症になったのは事実だからなあ。」

ロックさんが拳崇の言葉をさえぎるように、口を開く。

「俺、マキシマを殴りに行って良いか？」

さっきからイラついていて、怒りが頂点まで達してしまっただらしいロックさんに京が慌てて止めた。

「止めるって。お前が行ったって何にもならないし、返って仲が悪くなるだけだぞ。」

京よりロックさんの方が力は強いから、京はざるずると引っ張られる形になる。

「放つとけよ！」

京に怒鳴ってしまったロックさんが、急に冷静になる。

「すみません。急に、怒鳴ったりしてしまって…。だけど、俺…許せないんです。」

京と向かい合わせになって話すロックさんの顔は、真剣と言った方が早くていつものおちゃらけた状態のロックさんとは別人みたい。

「同期とかそういう訳じゃないけど、お前を傷つけたのがマキシマだって言うのは事実だしあんな事までさせて妊娠させて『ポイツ』と捨てるなんて許せないし最低な事だつて分かっていますから。」

ロックさんが本当はこんなに真面目な人だつて言うのは、あまり知らなくてちよつと驚いているけど京にとっては後輩の性格とかはちやんと分かっているんだと思う。

マキシマに対して、怒っているのは分かっているし京の事とか俺自身の事とかも分かってくれているんだらう。

「俺は、本当に可哀想なのはK」と流産した子供だと思つた。」

声を張り上げてしまった後悔と俺が泣き出してしまつたという不安が重なっているロックさんに見れば、気を使わせてしまったと俺が思つても仕方ない事。

ロックさんはそう割り切っているけど、マキシマに対しては本当に許せなかったのかムシヤクシヤしてしまっている。

「傷ついているのは、分かっているし本当に殴りに行きたいって思つたから。」

完全にキれているロックさんに、俺は何も言えなくて…。

「大騒動（大惨事）にだけはならないでね。俺、フラッシュユバック

起こしちゃうかも知れないしマキシマさんと一緒に仕事する事が多くなっているんだから。」

きよとんとした拳崇が口を開いたのは良いけど、少し困り顔になっちゃった。

それは自分の事で、ロバートさんだけじゃなくマキシマまでロックさんの怒りの対象になってしまった事。

「もちろん俺は、ロバートさんの事も許した覚えは無いし拳崇が一番の被害者だつて知っているサカザキさんにも言えないつて言うのも知っていたから…。俺は、人が苦しんでいるのを黙って見ているのも嫌だし知らん振りするのだつて嫌だからそういう光景を見たらイラつくんだよね。」

ロックさんが、拳崇に問い掛けるように話した。

それは、俺にも刺さる言葉で…。

怒っているから、言葉を返せなくなったけどロックさん自身俺や拳崇の気持ちは分かっているから笑顔になったんだけどどっちにしたつてセスさんを殴りに行くつもりだったからロックさんの言葉を聞いて少し気が楽になった。

あのままだつたら、俺はセスさんを殴りに行って大変な事になっていただろうし…。

俺もロックさんも今キレているから、止めようがないと京と拳崇はそう思ったんだろう。

「でも、2人共…怪我するのなんて…俺は嫌だからね。」

あーもうっ、何でこんなに可愛い事言うんだろう。

自覚していなくてこれだから、後味が悪いって思ったけど理性を爆発させる訳にはいかないから…。

まあ、京も俺もエロイのがあるから…。

「前に、マキシマと大喧嘩ドクバチした時だつて顔…傷だらけになってたじやん。」

京の目から大粒の涙が出そうになっているのを見て、俺は苦笑してしまった。

「俺、八神の事があつたしあいつが警察に連行された時に決心したんだ。俺が、この事件を解決させて八神の無実を晴らすつて…。だけど、全然証拠とかアリバイの事とか分からないし凶器が鈍包丁だつていう事が分かつているんだけど犯人が分からないから警察はまだ八神を疑っているし…。入手経路まで分からないから実際、ちょっと困っているんだよね。」

それは、俺だつて一緒だよ。
現に頭の中がグルグルと回ってしまつて少し自分でパニックを起こしてしまいそうになる。

俺と京がそういう状態だから、ロックさんも拳崇も苦笑している。

「まさか、お前：それが原因でパニック起こしかけているんじゃないよなあ？」

ロックさんが、俺の顔を見上げる。

そんなに身長は変わらないのに、見上げられたら嘘が言えなくなつちやうじゃん。

「まあ、八神さんの事もあるしマキシマやロバートさんの事だつて許せないつて思っているから自分がパニックを起こしかけても少しは仕方ないつて思っているんだけどね。だけど、草薙さんはまだ辛い思いをしているのを黙つて見ていられなくて…。」

確かにそうなんだけど、京のトラウマの事と俺が抱えているものは別物だもん。

自分でもイラついたつて、何にもならないつて事ぐらい分かっています。

「そうだけども…。」

京を不安にさせるなつてロックさんは言っているみたいだけど、俺だつて京と一緒に心配なんだよ。

いつ京がまた、トラウマを抱える事になったら嫌だもん。

俺がそういう状況だから、京も不思議な顔でこっちを見てくる。

「？」

不思議そうな顔って言うか少し不安顔って言った方が早いのか分からないけど、京が首をかしげているのは事実で。

その顔をした京の顔も、何だか凄く可愛いくて理性が壊れそうになって来る。

何とか自分で押し殺して京の顔を見直した俺に、ロツクさんが口を開いた。

「草薙さんが不思議そうな顔をしているのに、何理性を爆発しそうにしているんだよ。」

凶星だったから、何も言えなくなって俺は黙ってしまったけどロツクさんにはそれが分かったのか横目で睨んできた。

「本当、変態^{スケベ}だな。」

流石に俺だって、『変態』って言われてちょっと凹んじやったし涙を浮かべてしまった。

京だって、オロオロして俺の顔を見ているんだし…。

「ロツク…何、泣かせてるんだよ。」

本当は泣く寸前だったから、良いんだけど何で京までキレなきゃならない訳？

「京…ロツクさんと、喧嘩しないで？」

京とロツクさんは仲が悪い訳じゃないのに、喧嘩されたら嫌なのに…。

「喧嘩なんてしないよ。第一そんな事したら、お前が泣き出すだろうが。」

確かにそうなんだけど、京が少しでもブルーになっっているから俺の事も考えてくれたって思っているけど何か複雑だよ。

「草薙さんが泣き出すと止まらないって言うのを知っているし、お

前だって泣いたら洒落にならないって事ぐらい俺だって分かっているからな。だけど、Kの場合には泣きたい時に泣いた方が良さぞ。意地ばっかりとか、気を使いすぎても自分が壊れるだけだからな。」
ロックさんが、俺の隣りに来て慰めている。

「それに、お前には草薙さんしかいないって分かっているし辛いのは何もお前だけじゃなくて俺だって八神さんの事とかセスの事とかで辛くなっているんだから。」

京だって、嫉妬しないで黙って見ている所を考えてその通りだって思ったのは俺でも分かった。

「俺、デイークと別れて『契約の儀式』はそのままだけどカードの色が変わってきちゃって……。」

それは自分達で、契約の解除をしたって事になっていて……。

「本契約しているもん、今更解除なんて出来ないもんな。」

ロックさんが照れるのを覚悟で、俺も話してみる。

案の定、ロックさんが赤面してしまったのは事実で……。だって、事実の事を言ったんだもん今更逆ギレされたって何にもならないし返って自分が認めているって事になっちゃうもんね。

「しかも、ロックさんってば可愛いなのって。」

いつもねえちゃんが言っている言葉を、ロックさんに話す。

俺がロックさんを照れさせる事を言うから今にも憤死しそうになっってしまうし。

「その辺で、止めといた方がええんとちゃう？俺が泣くんじゃなくて、この人が泣いてまうで。」

泣きそうだった拳崇が、ロックさんの顔を見て苦笑しちゃっている。

「だって本当の事だから、全部話さないと気が済まないんだよ。」

俺の言葉に呆れてしまったのか、頭を傾げてしまふ拳崇。

「あのなあ……。」

「人をからかうのは好きだけど、自分だったらむかつくんだけども、ロックさんの場合はすぐに顔に出るから分かりやすいんだ

よね。」

「だからって…。」

「それに楽屋でロックさんとデュークさんがHしていたのを見たのは事実だし、それにロックさんのイキ顔はすごく可愛いかったなあ。」

変態って言われたって良いって思ったし、真っ赤になって否定したって何にもならないって事ぐらいロックさんだって分かっているはず。

「^{スケベ}変態っ！！」

ロックさんに言われるのが分かっていたから凹む事はないけど可愛いって思ったのは事実だし、照れたって説得力ないよ。

「まあ、耳まで真っ赤になっているロックさんも可愛いって思っちゃえば可愛いしさ。」

俺の言葉にまた照れたロックさんが、今度はモゴモゴしだした。

これは完全に、憤死したなあって思った。

「からかつちゃ、まずいつてば。」

半泣きになったロックさんの目には大粒の涙が溜められていて、凶星だったんだなあって思った。

「だって、デュークさんがいきなり楽屋に来て押し倒したんだよ？

！あいつ（セス）がいなかったから、良かったけど一緒にいたら間違はなく大喧嘩起きてたからねえ。あいつは、目の前でいちやつかれるのが大嫌いだし俺とデュークさんが付き合っている事に反対していたからね。んで、デュークさんってば激しく攻めるから何度もイツちゃって…。」

そう言ったロックさんの顔は、半泣きの状態で耳まで真っ赤になってしまった。

自分で言っただから、自分で責任とって欲しいしこっちに八つ当たりしないですよ。

「俺は、前世の時次々死んじゃって自分の最期の時は一人だったから凄く辛くて寂しくて…。だけど、今は違うよ。だって、自分と関わってきた前世の記憶を持っている人ところろして出会う事が出来たから…。」

ロックさんが笑顔になったから、俺もつられて笑顔になった。

この人が大の寂しがり屋だって事は、前世の時から知っている事。だからこそ、デュークさんと付き合っつて言う事をロックさんの口から聞いた時には俺も喜んだんだ。

そりゃ、デュークさんには前世の記憶がないけどロックさんと付き合っつていて後悔しないっつて言ってくれたし自分が変わったっつて言っただけだからなあ。

だから、楽屋でもあんなにロックさんとHしていたんだろっし。

「今でも俺は、デュークさんの事大好きだよ。だけど…何か不安で複雑なんだよね。」

拳崇も俺も、きよとんとした顔でロックさんの顔を見ている。

「この体は、デュークさんのものだしデュークさん以外の人とHなんて考えられないよお。」

言葉を濁らせたロックさんに俺がからかってても、耳まで真っ赤になるだけだし隠しても最初からバレていたからね。

でも、ロックさんが自分の元彼になってしまったデュークさんに『次期リーダー』として一任されたのは事実で俺も近くにいたけど最初は『何で』っつて思っていたんだけど今にとっては大正解だっつて思っている。

そりゃ、ロックさんは俺と違って無許可で魔法が使える。(3級の)守護天使』だもん。

「K、？」

涙目になっているロックさんが、俺の顔を見た。

「なんですか。」

はつとなつた俺の顔を、もう一度見ているロツクさん。

「また、トリップしてただろ!？」

凶星だったから言葉も出なくて、ロツクさんに『にやり』されてしまった。

「でも俺は、進級試験を受ける気もないし草薙さんとK'を守ればそれだけで良いんだ。」

ロツクさんの楽道家は、いつもの事だから別に驚きはしないけど。

「でも何で、さっきから草薙さんがベッドに寝てんの?しかも、少しどころか全裸やないか。」

拳崇が今だに全裸になっている京の姿を見て、驚いているって言うか『にやり』している。

「暑かつたんだよつ。」

本当は、30分つて言うか2時間ぐらい前までHしてましたなんて言えないよ。

京だって、耳まで真つ赤になつちやつたじゃん。

ロツクさんは隣の部屋だから嘘なんてつけないし、京だって耳まで真つ赤になつたままだし…。

拳崇だって、俺と京が付き合っている事ぐらい知っているから…。でも何か、すごく恥ずかしいしこつちが憤死しそうになつちやう。

「草薙さん、本当はHしてたんじゃないんですか?こつちは、草薙さんのイキ声聞こえたんで嘘だって言つたつて説得力なんてないですよ?まあ、耳まで真つ赤になつているんでありがち嘘じゃないつて事ぐらいこつちだつて分かつていますが。」

にこにこ笑顔になつているロツクさんに、俺も京も言葉を失つてつて言うか何も言い返さなかつた。

凶星だつて言う事が分かつていたから表情だつてロツクさんは変えなかつたんだしロツクさん自身もすねた訳じゃないつて事ぐらい俺だつてわかっているから…。

分かっているんだけど、何か複雑で…。

少なくとも怒っていないって事を確認できるからそれはそれで不幸中の幸いなのかなあ。

「お前が照れたって、何にも意味が無いって言ったら悪いけど…。」
そう言ったロツクさんが突然黙ってしまったのは、ずっと黙っていた拳崇とロツクさんが泣き出してしまったから。

「俺…別れた事に、後悔しちゃっているのかなあ。」

俺自身がちょっとむっとしてしまっただけど、ロツクさんと拳崇が本格的に泣いたら困ると思ったから何も言えなくなっちゃったじゃん。
「拳崇の気持ちも分かるし、俺だって辛いよ…。今でも俺は、デュークの事が好きだよ。辛いのは分かっていたけど、デュークを巻き込むなんて事は絶対に嫌だったし綺麗事じゃないけど忘れられないのは俺にとつてデュークだけだったから…。」

俺にも、気持ちは分かるよ。

だけど元を正せば、全部セスさんが悪いじゃん。

セスさんがクリスさんを妊娠させてしまったのは、事実なんだしクリスさんってまだ10代なんだから…。

クリスさんがショツクが大きくなっているのは、クリスさんのマネージャーさんから聞いていたし肝心のセスさんが『自分の子供』と認知してくれていないんだからマジで殴りたいって思っているんだ。そりゃ、事務所は違うけど大変な事をしてくれたのはセスさん自身なんだから。

「2人には、幸せになって欲しいし俺らみたいに不幸になるのなんて嫌だから…。」

泣きながらもロツクさんが言っている事は俺にも分かっている事で、ロツクさんは俺にとつて信頼できる人だから…。

「俺、草薙さんに話さなくちゃならない事があるんです。本当は、K'に告知するのはためどつたんですけどいざれ話さなきゃならな

「いつて思っただんです。こいつは、隠し事とかが大嫌いなんです……。」
拳崇の気持ちを落ち着かせるために俺がオセロをやっているのを見て、京と真剣な話をしている。

ロックさんが医師免許を持っている事は俺も知っている事だし、病院で白衣姿のロックさんに会った事が何回もある。

本当は、病院に行っている事を京にはばれたくないんだけど後でもめるのも嫌だから俺の代わりにロックさんが言っている。

もちろん、俺が病院に言った時は京に『健康診断で行った』って言ったけど……。

「K'の病気は『急性骨髄白血病』です。不幸中の幸いって言うたら草薙さんにもK'にも悪いんですけど、病状の進行は遅い方で病気も完治しているんですけど問題はもう一つあったんです。それは、右の肺が『転移性のガン』になっていて今度どこかに転移したらK'の命は無いんです。俺は、前世の関わりがあるって言う訳じゃないんですが主治医としてK'を救いたいです。こいつは、自分の事になると鋭いし『自分の病気の事を隠さずに話して欲しい』って言うてたんです。草薙さんと幸せになって欲しいし、悲しむのを見たくないですから。」

ロックさんの話を聞いて、京の顔が暗くなってしまったのは事実です。すねはしなかったけど俺だって身震いしだしてしまった。

拳崇だって、オセロを片付けた後椅子に黙って腰掛けたままこっちを見ている。

京の気持ちは分かるし、今の京みたいに俺だってロックさんに言われた時はビックリしてしまっただから。

「京に話さなかったのは、俺の事で心配させたくないから……。」
それは、京に対しての気使いじゃなくて俺自身が心からそう思った事。

「心配だなんて、そんなのクソ食らえだよ。俺は、K'の側にいた
いつて思っているのは事実だし病気のせいで離れる事なんて無いか

ら。」

何で、そんな照れくさい事を平気で言うのかなあ。

「俺だって、この病気に負けたくない。京が居てくれるから、俺だって救われているんだから…。」

ちよつと俺が涙ぐんでしまったけど、ロックさんも拳崇も分かっらしい。

「今は、拳崇の方が先決だと思っっているし犯人だってまだ見つかっていないんだから…。」

自分の事を、犠牲にしたって良いと思っただ。

「K、お前…気使いすぎたぞつ。」

ロックさんに言われ、ちよつと言葉に詰まってしまったのは事実で、自分の事だけを考えていたら、話も何も進まないと思っただから。

「だって本当の事を言っっているし、拳崇だって身体は傷だらけなんだから…。」

いつの間にか、俺のせいになっているから話を元に戻さなきゃ。

「まあ、それはそれなんだけど…。んじゃ、Kはロバートを殴りに行くのかよ。」

正直言っちゃえば、殴りに行きたいって思っっているよ。

だけど、殴りに行ったら京が泣き出すと思っし俺だって嫌だよ。

「悪いのは、ロバートさんだって分かってるし拳崇の気持ちも分かるよ。だけど、京が嫌だって思っっているから泣き出すと思っし俺だって泣いている京を無視して殴るなんて嫌だからね。」

俺が京の顔を見て、すこし照れてしまったけど京だって分かってくれたと思っっている。

別に京に対して、気を使っって訳じゃないけど後で反省文行きだなんて事は嫌だから…。

「本当に、そう思ってるの?」

京の目には、大粒の涙が溜められているのが分かったからちよつと

理性が飛びそうになったけど京の顔を見た。

「うん。」

そう思ったのは事実だし、このまま目に涙を溜められている京の顔を見たら理性が爆発しちゃって思いっきりロックさんにつっこまれる。

「K' がそう思っているなら、良いけど…。」

京も楽天家だなあって思ったけど、俺自身が落ち込ませてしまったから言葉に出なくなってしまった。

「でも、ロックがマキシマやロバートを殴り行くって言った気持ち俺は分かったよ。俺だって、セスを殴りに行きたいって思っていた所だし。だけど、俺だってさっきのK' みたいに思っているから…。」

照れている京の顔を見て、ロックさんが苦笑する。

「草薙さんでも、のろける事だつてあるんですね。」
からかわれたつて思った京が、耳まで真っ赤になってしまう。

真っ赤になってしまった京の顔も可愛いなあって思いながらも、ゲームを拳崇と一緒にやる。

俺だって人の事を言ってもいられなくて、行動でごまかしているけど京にもロックさんにも分かってくれたから少しは良かったのかな。ロックさんに嘘をつけないって言うのは、俺だって分かっているし今更京につられて照れたなんて言えないよ。

てへへって笑う京の顔も、また一段と可愛い。

「まさか、草薙さんのしぐさを見て理性爆発しようつて思ったんだろっ。」

「図星だったから、何も言えなくなってしまったんだけど。」にやり
されたから凹みはしなかったんだけど…。」

「やっぱりな。この、変態っ。」

ロックさんに言われて少しぐっとなっている俺に、京が涙目のまま

口を開く。

だって、京がHの時可愛いから俺だってつられてイツちゃうんだし。「K'は、変態じゃないもん。」

京を見ている今の俺の顔は、本当に変態心で見ている嘘なんてつけない本当はここで押し倒したいって思ってしまったのは事実だし京だって拒絶しないって思ったんだ。

でも、京が泣き出すと思ったしもしかして拒絶されたりしたら俺が凹むから。

「草薙さんがこう言っているのに、お前が変態顔になってどうするんだよ。」

ロックさんにもばれてしまったから、横目でにらまれてしまったって何も言えなくなってしまった。

予想はしていたから、別に凹みはしなかったけど京の涙目をまともに見る事に。

「K'…Hしようとしてるの？」

このまま理性が爆発するのが嫌だったから、俺が京に抱きついた。

「ケ…ケイ…ダッシュ…？」

抱きついただけでも俺の胸の高鳴りは、京に届いていて京も俺も照れてしまった。

怒られるのが分かっている、Hするなんて事したくないし京を傷つける事なんてしたくないから…。

「今は、このままで…良い？」

後ろから抱きしめている形だったから、京の照れている顔はまともに見れない。

「だめだって…言える義理って言うか、言える訳ないじゃん。」

「俺…京の事好きだし、大事にしたいって思っているから…。」
俺が京の方に笑顔を向けると、京の耳が真っ赤になった。

「お…俺も…。」

赤くなってしまうた京の顔も、また可愛いくて理性がまた壊れそう

になる。

「おい。戻って来ーい。」

ロックさんに言われて、はっとする。

「抱きつくのは良いけど、理性が爆発しかけてどうするんだよ。」

俺は、言葉を出せなくなってしまった。

「やっぱりな。」

京がちよつとどころか、かなり照れているからロックさんが更に口を開く。

「また、草薙さんを泣かそうとするんじゃないやねえよ。」

また京に抱きついてしまった俺は、黙ってロックさんの顔を見ている。

「お前は、本当に変態だからな。」

京が頬をふくらませて、ロックさんの顔を見た。

「じゃロックは、どうなのさ。人に変態って言っているのに、自分ではどう思っているんだよ。」

ロックさんも京の仕草を見て言葉が出なくなってしまったのか、凶星だったのか分からないけどごまかし始めた。

俺はその光景を見て、後者の方なんだって思ったから黙ってみていたし余計な事を言ってロックさんをふくれさせる訳にはいかないから…。

「って言う事は、草薙さんはK'の思い通りにされたって事になりますよねえ。(にやり)」

京が赤面しているのが俺には分かっていたし、からかわれたって言ったのに俺が何でぼーっとしてしまったんだろう。

まあ、京が泣かなかったのが不幸中の幸いだっただけ…。

「凶星だったみたいですね。」

ふくれてすねてしまった京を、また後ろから抱きしめる俺の顔を見ないでロックさんの顔を見た。

嫉妬はしなかつたけど、何か凄く複雑になっちゃったじゃん。

「ロックには、関係ないじゃん。」

苦笑しているロックさんに京が、涙目になったままで。

ここは、ロックさんが折れるしかないって思ったのは俺だってロックさん自身だって分かってはいるはず。

「（ぶくう）だいたい、K'もK'だよ。俺、自分の声大嫌いだって言ってるのにHの時『声出して』とか言っただもん。」

京から、とぼつちりを受けちゃったけど実際に京が可愛いのは事実だから仕方ない事じゃん。

「だって、京が可愛いから。」

あっさりと即答で答えてしまった俺に、京が照れながらも頬をふくらませてしまった。

でも…すねている顔をした、京も可愛いなあ。

「この歳で、『可愛い』って言われたくないんだけど…。」

拳崇も何の事を言っているのか分からないから、首をかしげたまま話を戻す事に。

「んで、マキシマに何されたんや？」

本当は言いたくないのに、拳崇の真剣な顔を見たら嫌だなんて言えなくなっちゃったじゃん。

それだけ俺がマキシマにされた事は、『酷すぎる』とか『辛い』とかを通り越して何も感情を出せなくなってしまった過去を持っているから話したくないんだけど…。

何度もマキシマに『レイプ』され妊娠して、中絶までしちゃって結果的に京と付き合うまでの俺は人を信じれなかったし自分だって信じれる事が出来なかったから。

京と付き合って2ヶ月以上経っているけど、今は全然後悔なんてしていないし感情って言ったら大げさかも知れないけど今はとても幸せだよ。

「俺…正直言うとき、K'がそんな事になっっているなんて思っても
いなかったし知らなかったんや。やけどさ、草薙さんと付き合っ
てからのK'は変わってきたし良かったって思っおもているよ。俺だっ
てね、人が辛いのを黙って見ているのなんて嫌やし例え記憶があっ
ても無かったってK'はK'なんやから…。」

はい。また無意味タイトルです。^^:

自分って、タイトルをつける時その場の自分の思った事がそのまま
タイトルに現れているみたいです。

ちよっと、反省してます。^^:

- - - - -

次回予告

舞「反省したって、やっちゃったもんは仕方ないじゃん。」

作者「ありがとうね。」

キング「しかし、Kくんも大変だったんだね。今は、幸せでもさ。

作者「でもこっちは砂、吐くけどね。」

今回は、15話。..... 長い沈黙.....

- - - 長い沈黙 (a long distance silence)

拳崇^{けんすう}から、ロバートさんとの関係で自分の彼女のアテナちゃんと別れた事を聞いてびっくりした。

ベストカップルだと思ったし、まだ続くと思っていたから…。

ロバートさんが、自分でいけない事をしているって言うのを自覚していれば何とかなったんだけど肝心の本人が全然自覚してなかったみたいで…。

正直、ユリちゃんにバレて修羅場になれば良いのって思ってた俺だけなのかなあ。

拳崇と俺がブルーになっていると思って京とロックさんは慌てて慰めた。

困った顔になっているのは俺にも分かっていたし、こっちもブルーになってしまったからビックリしたんだと思う。

「俺は、今でもマキシマの事許した覚えなんてないから……。」
長い沈黙を破ったのは、京の一言。

「お前をあんな風にしたのは、あいつのせいだしそのせいでK'が俺みたいにならうマを起す事なんて嫌だったから……。」
京の言いたい事は、俺にも分かった。

分かっているからこそ、京に心配をかけさせたくないって思ったのは事実だし誘導するようになって京だってフラッシュバックを起こさせてしまったら俺だって嫌だ。

「K'には、俺のようになってほしくないから苦しむ姿を見たくないし……。」

京の顔が、2分前の俺や拳崇と同じブルーになってしまったのはすぐに分かった。

「京……。」

俺の気持ち京にも分かったみたいで、今の俺には京を慰める事も出来ないなんて……。

「俺だって京の気持ちも拳崇の気持ちも分かるよ。人を信じれなくなってしまうたのも経験しているし、京みたいにフラッシュバックを起こすのも分かるよ。けどさ、俺は悲しい思いをするのは絶対に嫌だし……。」

俺が力いっぱい答えたものだから、京もロックさんも苦笑したみたいで何も言えなくなってしまった。

「そう……そうだよな……。」

ロックさんが、笑顔になった途端ドアが勢い良く開いた。ビクリして、俺が振り向いたらそこに立っていたのは息を切らしているマキシマ。

何て、運の悪い男なんだよ。

せつかくロックさんが、機嫌を良くしたのに…。

「お前、何考えてるんだよっ!!」

ロックさんがマキシマを見た途端、機嫌が悪くなって笑顔になっていた顔が怒りへと変わってきた。

マキシマの胸倉を掴んで、今にも殴りかかろうとした所で京が止めた。

京自身だって、セスさんがクリスを妊娠させた事を知っていたし俺がらみになるとキレやすいつて事もリョウさんから聞いていたけど何か複雑で辛いよ。

「こいつを強姦して妊娠させて、中絶させた事は俺は絶対に許さないからな。」

「ロック!?!」

「良いかつ?!これ以上こいつと関係なんか結ぼうなんて思うんじやねえよ。お前のせいで、こいつは男性恐怖症とかになったんだからお前だって無責任な事言えないんだからな。」

まだまだ、ロックさんの切れているのは収まらない。

「こいつは、お前の子供を妊娠してたんだよ。」

「……。」

驚いたのか、苦笑しているのか分からないマキシマは挙動不審になっている。

「お前自身はKの事をどう思っているか分からないけど、こいつは幼馴染であるお前の事を信じていたんだからな。」

凄惨な剣幕でキレているのは、近くにいた俺も拳銃にも分かった。

「それを裏切って、お前って言うやつは…こいつに対しても草薙さんに対しても酷い事したんだぞ。少しは、責任って言うのをもちやがれつ。」

俺が止めようとしても止めないで、ロックさんはマキシマを殴った。これじゃ修羅場を通り越して、暴力事だよ。

俺は凄くショックで自分のせいだって思えて来ちゃった罪悪感で、泣き出してしまった。

「2人共…止めてよっ！！そんな事したって、俺は気が収まらないのに…。」

殴られたマキシマと殴ったロックさんが、驚いてこっちを向いた。

ロックさんの怒りが収まらないのは、俺だって分かっていた事だけど…。」

「俺…辛い…嫌だよ…。」

俺が大泣きしているのを見て、京が俺に抱きついた。

いきなりだったから耳まで真っ赤になって、目には涙が溜まっている。

「本当は俺だってお前がした事を許した訳じゃないし、K'がこんなに辛いのは見たくないから…。」

京の言葉からはつととなったのはロックさんで、すぐにマキシマの胸倉から手を離れた。

「何で、K'と関係なんか結んだの？」

京の口から出たのは、疑問の思い。

そりゃ、そうだよなあ。

京が疑問に思っているのは、当然だし俺だって本当の理由を知りたいからさ。

「こんなに辛いK'を見たのは、初めてだしここまでショックを大きくさせたのはマキシマなんだから責任とってほしいと思っているしK'だって嫌だって分かっているはずなのに妊娠までさせたのは聞いてたから…。子供は嫌いじゃないけど、ロックがマキシマを殴

る気持ちだつて分かっているし俺だつてセスがクリスを妊娠させた
つて知った時は凄くイラついて殴ろうとしたよ。だけどさ、そんな
事したつて何にもならないつて分かっているし余計にK'が泣き出
すつて分かっているから我慢していたんだ。もしかして、マキシマ
がセスと一緒に『可愛いから。』つて言つたら俺は絶対に許さない
からな。」

凶星だったのか無言になつてしまったマキシマを見て、ちょっとイ
ラツとしてきた京とロツクさん。

ロツクさんがもう一度、マキシマの胸倉を掴んで殴ろうとしたら京
が俺を抱きかかえるように引き離れた。

俺は、今でもマキシマを許せないのに…。

「俺は、本当にK'の事が好きだつたんだ。K'には京さんつて言
う人がいるつて言うのも知つていたしなんか複雑で自分の気持ち
先に来ちゃつて、こいつには悪い事をしたつて思っているし罪悪感
だつてあるし…。言い訳が嫌いだつて言うのも知っているけど、妊
娠させたのも中絶させたのも俺だし認めたら説教されると思つて言
えなかつたんだ。」

悪い事で片付けるなんて…本当に許せない。

傷ついたのは俺なのに、マキシマはそれさえも『認めない』つて言
い出した。

ロツクさんに殴られたつて、仕方ない事だつて分かっているはずな
のに『何で!?!』つて言う顔を今でもしている。

どっちにしたつて悪いのは、マキシマだつて事は分かっているのに
…。

「マキシマ…酷いよお…。やっぱり俺の事…『ヤつて捨てるだけの
女』だつて…思つてたんだ…。」

俺が泣き出しそうになつて見ているのを見て、京がマキシマの方を睨み
ながら髪の毛をなでて慰めている。

「俺…マキシマの事、信じていたのに…何か…裏切られたみたいでさ…。京と付き合う前まで誰も信じられなくなっちゃって、誰にも話せなかつたんだから…。」
これは本当。

京と付き合っていないかったら、俺は今頃何をしていたんだろう…。考えただけで少し背筋が凍るけど、京が後ろから抱きしめてくれたから安心が出来たんだ。

「俺、マキシマと付き合う事出来ないから…。」
涙ながらに俺は、マキシマに言った。

「うん…分かった…。」

殴られるのを覚悟で、マキシマはロツクさんの所へ行く。

俺も普段温厚のロツクさんがキレているのを見るのはあまり好きじゃないから、ちょっとビツクリしてしまったのは事実で…。

「俺が…こんな体になっちゃったのは…マキシマのせいだよ…。」
京に抱きついたら、泣いてしまった俺に京がゆっくりと抱きつく。

「あんな風にされて、何度も…中に出してきて…。」

大粒の涙を流して、マキシマの顔を見た俺にちょっとキレ気味のロツクさんが口を開く。

「こいつが傷ついたのは、お前なんだからな。第一中絶した子供だって、可哀想じゃねえか。こいつはずっと、辛い思いをしてきたしお前が無責任な事を言っているからこいつだって人を信じられなくなっちゃったんだからな。それに妊娠している事だって中絶した事だって結局、言わせなかつたじゃねえか。」

睨んでいるロツクさんを俺が止めなかつたりしたら、またマキシマを殴っていると思ったし俺だってそれを考えたら背筋が凍りついてしまった。

「俺は、先輩後輩としてじゃなくお前の事を絶対に許さないから。」

事情は分かっていたし、ロツクさんも八神さんに強姦された過去を

持っているからこの件に対して凄くイラついているんだと思う。俺だって、絶対にマキシマを許した覚えはないから…。

「俺…京の側にいたい…」

今の俺にしてみれば、京の側に居たいって言うのは事実だし不満を解放って言うか言えて少しは良かったって思う。

八神さんがロツクさんを犯したなんてマキシマに言ったら、マキシマだって何をするか分からない。

だから、言わないでいようって思ったんだ。

その方が、ロツクさんの為だと思ったから。

ロツクさんだって俺の事を分かっているから、安心してあるんだけど問題はマキシマの方。

だって今の状況だったら、間違いなく説教行きだって思っているんだけど本当はマキシマだって辛かったんじゃないかなあ。

けど、無理矢理俺と関係を結ぶ事しなくなって相談すれば良かったのに。

マキシマが一回でも相談をしてくれれば、俺だってこんなに辛くなかったんだし説教されなくて良かったのに。

「とにかくだ。お前は、自分のやってしまった事に少しは責任持った方が良くぞ。いつまでも無責任でもいられないしK'だって番組中に急に話せなくなるのはお前だって嫌だろうがっ。」

そりゃ、そうだ。

俺自身も黙るのなんて嫌だから、話して欲しいと思ったのは事実だし。

許す許さないのは、別としてさ。

悪いのはマキシマだって分かっているんだから、話してくれたら少しは変わったのかも知れないし…。

「まあな。」

俺自身は一瞬他人事だって思ったけど、マキシマだって罪悪感ぐらいはあったと思っているしもし本当に罪悪感じゃなくて他人事だっ

たら俺は本当にマキシマを許せない。

「京にも迷惑かけてしまったし、こいつのトラウマの原因を作ったのは俺だからさ。第一俺自身が、人の事を考えていないって言ったら最低だっと思って思っているしロツクに殴られたって仕方ないって俺だっと思って思っているから。」

「本当かなあ。マキシマは結構って言うかマジで【変態】^{スケベ}だからなあ。」

【変態】って言う言葉に言葉を詰まらせたのは事実だったから、俺は更に横目でマキシマを見た。

「俺の事、あんなに酷くしたのに酷くしたのに変態じゃないって言ったら嘘になるよあ？」

俺が涙目で言っている事にマキシマだっつて分かっているのかなあ。

「俺…マキシマにあんな事をされて、京とHするのだっつて拒絶しちやっただ事だっつてあるんだから…。」

だけど京は、そんな俺でも愛してくれると言ってくれた。

俺も京の事、好きだよ。

「お前が京の事を好きだっつて言うのは、分かっただ。」
分かっていたんだっつたら、何であんな事したんだよっつ。

一日中Hされて、パオさんから電話がかかってくるまで気絶していたのは事実で慌ててしまったのは俺なんだから。

体も傷が出来ちゃっつて、衣装の上着脱げなかつたし…。

京に買ってもらったシーツだっつて急いで洗う事になっつちやつたんだし…。

当時の俺は、相談を誰にも出来なくてマキシマにされた事なんて言えなかつたしマキシマの子供を身ごもった時に自分が始めて分かつたぐらいだったから。

だから、ねえちゃんに『墜ろせ』って言われる事は自覚していたけ

ど子供が可哀想で…。

俺…人殺ししたのと…一緒だよ…。

「（ぐすっ）ふええええ…。」

京に怒られるのは嫌だったし、嫌われるのなんてもっと嫌だったから言えなかつたんだ。

俺が泣いているのを見て、京がすぐにオロオロしだしたのも分かっていたし慌てだしたのも分かった。

だけど、俺自身の心の中は辛くて涙が止まらなかった。

京に心配をかけたって言うのもあつたし、さっきのロックさんみたいにマキシマを殴るなんて事だつてありえるから…。

だから俺が不安になつている所を悟られるのなんて、嫌なんだ。

「京に、迷惑…かけちゃつたよお…。」

自分が辛くなる事だつて分かっていたし、京だつて巻き込ませてしまった。

「ところで、拳崇つて『サイコメトリー』出来るんだよなあ？」

京に慰めながら、抱きついている俺を尻目にマキシマが拳崇に話す。

「確かに出来るけど、力を使つたら体熱くなるんだよねえ。」

まさか、拳崇を犯そうつて思っているんじゃないだろうか。

「お前…まさか、拳崇を犯そうつて思っているんじゃないのか？」

ロックさんがマキシマの顔を見ているつて言うか睨んでいるのを見て、俺は冷や汗をかいてしまった。

「する訳ないだろ？そんな事したら、K'は泣き出すし草薙さんに凄いい剣幕でキレられますよ？」

だったら何で、俺を強姦したんだよ。

シヨックで俺は、一週間も寝込んだんだから…。

「本当ですか？俺、マキシマさんに対して信用できないんだけど。」

俺が涙目になつているから、拳崇も気付いてマキシマを睨んだ。

「こんな事言いたくないんやけど、マキシマさんがそう思つたつて

K'の事は事実なんやから。俺に『信用してくれ』つて言う方がお

かしいんやから。」

拳崇に言われ、言葉が出なくなってしまったマキシマに京がトドメ。

「^{スケス}変態っ！ー！」

ざまあみろ。

京だって、マキシマの事許した訳じゃないんだよ？

「確かにK'を犯したのは、悪いと思っっているんだけどさ。」
それは、何度も聞いた。

本当は悪いなんて、思っていないんじゃないの？

「マキシマ…本当は、悪いって思っっていないでしょ。」

ぎぐっとなったマキシマが、オロオロとし出した。

ぎぐっとなった時点で、俺の怒りはMAX（限界）にまで達してしまっ
まいそうで右手にこぶしを強く握ってしまった。

殴りたいのは、俺だって思っっているよ？

ただどさ、京にも迷惑がかかってしまうのが嫌だったし拳崇まで巻き
き込ませるのなんて嫌だったから…。

肝心の京は、どう思っっているのかなあ。

「お前が無理して倒れるなんて事、俺は嫌だからな。」

マキシマに対して、怒っっているのを確認出来たけどちょっと怖いん
だよなあ。

いつもなく、真剣な顔になっているから…。

でも、本当に俺の事心配してくれているんだろうなあって思ったら
安心したのは事実だし同じ事を思っただなあって改めて思っただ。

「京だって、マキシマの事許せないでしょ？だったら、俺に構わ
ず殴れば良いじゃん。」

本当は、ロックさんがマキシマを殴った時点で身震いが止まらなくなっ
ているんだけど…。

「俺だって、マキシマがした事は許さないから。」

俺は、京に隠れてマキシマとした事は…浮気にもなるし不倫にもなってしまうから…。

本当は自分に対しての怒りと、京に対しての罪悪感でやりきれない。俺が好きで愛しているのは、京だけなのに…。

「K'を泣かせる事は、したくないからさ。」

笑顔になった京の顔を見て、俺もぎこちない笑顔に…。

俺は、浮気したんだよ？

「K'が俺に対して、凄く罪悪感を持っていた事は分かっていた。

だけど、俺にはお前を責める事なんて出来ないし…。」

京に、気を使わせてしまったのは俺にも分かっていた。

「俺には、K'しかいないって分かっているから…。」

京が俺の事で泣いてしまったのは分かっていた事だけど何だか凄く辛くてすぐに京を慰めた。

「京が泣きたいのは、俺だって分かっていた。何で、俺となんかしたんだろうとか思ってたきちゃって。俺には…京しかないのに…。罪悪感とかあって…。」

「罪悪感？なんで？」

京が、真剣な顔をしてから少し苦笑したから俺もちよつとは気を使つて話を続けた。

「俺、本当は不倫してマキシマとHしちゃったのに京の側に居れないよお。」

泣きそうになっている俺の顔を京は、黙って見ている。

マキシマは、苦笑しながら拳動不審になってしまっているけど…。

「京と別れるなんて嫌だし、考えられないよ。」

京と抱きついた状態だったから、軽くキスした京。

いきなりだったし、俺が泣いてしまったから照れもあったしショックだってあったから。

京の気持ちだって、俺には分かっているよ。

「大丈夫だよ。俺は、K'から離れないしずっと側に居るから…。」

少しは安心したけど、俺の中ではまだすごく不安が溜まっていて…。
「俺、京がセスさんの所に行つて怪我をしたら困るから…。…。だけど、殴りたいのは俺にも分かるしクリスさんは年下だから…。」
「でも…。」

本当は心配だつて言いたいけど、京の笑顔を見たら何も言えないじやん。

俺がそう思ったのは、事実だしまだ紫苑さんの事だつて八神さんの事だつてまだ解決していないんだから…。

京が笑顔のまま、涙目になっているのは抱きついたらままの俺がすぐに分かつただけだ…。

「俺…K'が俺の側から消えたりしたらどうしようとか、自分は生きていられるのかなあとか思つてきちゃつて変な事思つちやつて…。」

「そう言つた京は、俺よりちょっと細い体を震わせて俺に寄り添つてきた。」

困っている京の顔を見て、可愛いつて思つたのと自分の理性が保てるのかなあつて言うちよつと不安になつて来たけどロツクさんに横目で見られたから戸惑つてしまった。

正確に言つたら【にやり】されたつて言つたら良いんだろうけど…。

「俺だつて、京の側から離れたくないよ。だつて、京は京だもん。俺にとつてたつた一人の、大事な人だから。」

俺が照れて京に抱きつき返したのは良いんだけど、人の事言えない事を俺は京にしちやつたんだなあつて思つた。

「草薙さんを泣かす事するなよ。俺だつて、お前の気持ちは分かっているんだし…。」

ロツクさんが居るから、Hなんてしないし今はマキシマが居るから説教をしなくちゃ。

「俺…ロバートの所に行つてきます。」

拳崇が決意をしたみたいで、部屋から出ようとする。

「ちゃんと話し合っつてこようと思うんです。『俺にとってはロバートさんが始めての人で、体の関係をロバートさんは結びたいと思っ
ているみたいですけどこの体はロバートさんので忘れられなくなっ
てしまっつて…』っつて…。」

普段関西弁を使う拳崇が使わない所を見ると、その決意は本物なん
だなあっつて思っつた。

拳崇は俺以上に、『平和主義者』だから人を怪我させる事なんて嫌
だろっつし。

「そっつか…。」

「俺…行っつて来ます。」

そう言っつと、拳崇はロバートさんの所に向かっつた。

さて、問題はマキシマの事だ。

「何で、あの時俺と関係持っつと思っつた訳？」

肝心なマキシマはまだ、拳動不審のままだ。

「人の話し聞いてよっつ。」

俺は、涙を一粒出っつしまっつた状態でマキシマをにらんだ。

俺が泣いてしまっつたから、ロックさんまでキレっつしまっつた。

「ちゃんとK'の話、聞けよ。」

京が止めたから、ロックさんは殴るっつとした手を解いた。マキシマ
のせいで、こっつなっつているのに話すら聞いてくれれない。

俺の顔の近くまで、マキシマが迫っつてきた。

「こっつして顔だけ見るのは、良いんだろっつ？本当は、もう一度お前
とHしたいんだっつけどなあ。」

「…いやあ…。」

俺の体は、マキシマに触られて身震いを起こっつしまっつた。

必死で俺から引き離っつそっつとしてる京やロックさんが居るのにマキ
シマは離っつてくれない。

「…は…離っつてよお…。」

俺が、大声で叫んでしまったのは京やロックさんに分かってしまっ
て言うか部屋中に響いてしまった。

俺は、気を失わなかったけど大泣きしてしまって京が抱きついて俺
を落ち着かせた。

「K、落ち着いて…。」

俺が大泣きしてしまっただから、マキシマだって困っている。

「マキシマのせいで、トラウマになっちゃったじゃん。」

涙をこらえていたのに気付いた時には、涙が出てしまった俺に京は
黙って抱きしめた。

トラウマにだけは絶対に嫌だったし、京が落ち着かないのは分かっ
ていたから…。

「俺が京とHしていても、マキシマの顔が脳裏に焼きついていて…。
京に対して、凄く罪悪感起こしちゃったし今だって辛いんだから…。」

涙ながらマキシマの顔を見ていると、苦笑しているマキシマの顔を
見る事に。

ロックさんは、その光景を見て半分だけドキレかかっているのは俺
にも分かった。

「こいつがこんなに、辛い思いをさせたのはお前の責任なんだから
ちゃんと責任だけは取れよ。無責任な事言ったら、俺：お前を殴る
からな。こいつだって、言っただじゃねえか。お前のせいで、トラ
ウマになっちゃったって。」

説教している声は、俺が京に抱きつかれている状況でもすぐに分か
った。

でも、肝心のマキシマは俺の目の前でロックさんを押し倒した。

「でも、よく見たら…ロックだって可愛いじゃねえか。」

当然の事ながら、ロックさんは思いつき拒絶している。

「おいっ…!」

結局、ロックさんはマキシマに最後までされて気絶してしまった。
シヨックなのは、俺だつて分かっている事だしロックさんだつて
八神さんに犯されてからトラウマにはならなかったけどシヨックが
大きくて1週間も寝込んでたんだから。

マキシマだつて、ロックさんが八神さんに『強姦』された事知つて
いるはずなのに【可愛い】だけで何も最後までする事ないじゃん。

.....長い沈黙 (a long distance silence)

今までの無意味タイトルと違って、こっちはちょっとした意味があります。

この時自分は、ちょっとしたスランプになっていて【やろうかやめるかどっちか】で悩んでいた時期でした。
で、結局続ける事を決めた回でもあります。

.....

次回予告

ロック「本当に、社さんって運が良いのか悪いのか分からないんだけど。」

K「でも、芸人サイドから言ったらめっちゃおいしいじゃないのか？」

ロック「そうかもね。(汗)」

今回は、16話 白い雪化粧スノーパウダー

ロツクさんにとって、マキシマが初めての人なのに肝心のマキシマはどこかに行ってしまった。ロツクさんの事を、ただの【性欲の為】だなんて思っていないかららしい。正直、ロツクさんの所において謝ってくればこんな事にならなくても良かったのに。

結局は、全部俺らの方にこの事が来るから正直嫌だったんだよね。だけど、後輩が困っているのに黙って放って置くんなんてしたくないよ。

事をやり終えてから、その場から立ち去ったマキシマを追いかけて行く為に外に出た京を尻目に泣きながら肩で息をしているロツクさん。

シヨックなのは俺にも分かったし、今でもロツクさんは立てる状況じゃない。

このままだったら、ロツクさんが自殺を考えるかも知れないと思った俺はロツクさんをベットまで運んだ。

だけど、一番シヨックなのは俺じゃなくてロツクさんの方。

自分の事務所（俺の事務所でもあるけど）の後輩であるマキシマにあんな事をされて、拒絶したのに最後までされて…。

結果的に、散々な事になったのは場所を見たらすぐに分かる事。

俺は、押入れから毛布を出してベットにいるロツクさんに引いてあげてから周りの物を片付けた。

京が、部屋から出る時に自分の相方であるリヨウさんに電話していたから一緒になって説教しているのは事実だしリヨウさんはキングゲさんって言う奥さんがいる妻帯者だから余計に説教をするんだと思う。

リヨウさん自身、こういういざごきは大嫌いだからなあ。

俺だって、大泣きしちゃったし京にも気を使わせてしまったし…。

それに、マキシマには怒られる原因って言うか自分がした事だから何とかしてもらわないと嫌だしね。

「俺：マキシマに…レイプされたんだっけ…。」

ロツクさんが、毛布で身体を隠して泣き出した。

今の俺には、ロツクさんを慰めるしかなくて自分が止めればこういう事にはならなかったのにと罪悪感が襲ってきてまともにロツクさんの顔を見られない。

「処理しなくちゃ…。」

そう言つて、ベッドから起き上がるうとしたロツクさんの腰に激痛が。

マキシマにレイプされてから、そんなに時間が経っていないのに激痛が来るのは当然の事で腰の痛さで気を失いそうになる。

「これじゃ…処理、出来ないよお…。」

元々腰が丈夫じゃないのは、俺だつて分かつていた事だつたのにマキシマは何で強姦なんてしたんだろう。

「俺…何で、マキシマとなんか…。」

ロツクさんがシヨックを大きくしているのは、自分より若い後輩にあんな事をされて理由も無く最後までされた事。

まだ八神さんの事で、気持ちの整理が出来てないのにされた事に対してのシヨックは大きい。

「あんな姿…誰にも、見せたくなかつたのに…。」
涙を流してしまったロツクさんに、俺は何も出来なくなつちやつて…。

…。
「ただ俺だつて、人の事を言えないのは分かっている。

俺だつてマキシマに、最後までされた一人なんだよ？」

「俺…生きてて、良いのかなあ。」

泣いたままのロツクさんを放つておく訳にもいかないのは、分かっている事だし慰める事が出来るのは今の時点で俺しか居ないって事。

「生きてて悪い人なんて、最初から居ないよ。それにロツクさんはロツクさんだしさ。」

俺が笑顔になつたらロツクさんが申し訳なさそうな顔で、笑顔になる。

「K'ってマキシマに犯された事、あつたんだよなあ？」

ロツクさんが無理な笑顔を作っていたから俺もつられて苦笑してしまつた。

「俺…すごく、嫌で…辛くて…。」
マキシマのせいで、ロツクさんまで苦痛をあたえる事させてどうするんだよ。

「まだ八神さんに強姦された事でショックとかあるのに、思い出しちゃったじゃん。」

毛布越しで、俺に抱きついた形で泣いてしまったロツクさんを俺は少し固まりながら黙って見ていた。

こんな時に誰かが来たら、なんて言われるんだろう。

京だったら事情が分かっているから、嫉妬はしないだろうって思っているんだけどいっただうしてこーいう事が起ったか分からないから首を傾げるんじゃないかなあ。

「身体が、すごくダルイよお…。」

マキシマにされた事で、着替えたいって思っけていても着替えられないからロツクさんの身体は今も汗ばんだままだ。

「着替えられないし、後処理できないし本当に最悪なんだけど…。」
やっと、息が整ったのか落ち着いて話すロツクさん。

「俺って、どんだけ『女の子顔』なんだろう。」

京に比べたら、まだまだだと言いたいけど何も言えない。

ロツクさんの気持ちも分かるから、泣かせたくないって思っているし…。

「ロツクさん…。」

ロツクさんに見れば、マキシマに犯された事でまた八神さんに始めてを取られた事を思い出したのは事実でショックが更に大きくなっているのも分かっていた。

肝心な俺は、ロツクさんがマキシマにレイプされているのを黙って見ているしかなくて結局は助ける事も出来なかった。

「俺が助けられなかった事…怒ってる？」

ロツクさんは、俺の方を見ながらマキシマに最後までされて中に出

されながらイッてしまった。

「怒っている訳ないよ。本当に悪いのは、マキシマなんだしお前に八つ当たりなんてダメだからさ。」

耳まで真っ赤になってしまったロックさんが、もぞもぞしだした。

「あのさ、一つ聞きたい事あったんだけど…。」

毛布にくるまっっているロックさんが、顔だけを出してこっちを見ている。

「な…何ですか？」

俺もビツクリして、声が裏返ってしまった。

「前にもこんな事って、無かったか？」

さっきまで照れていたのに、真剣な顔をしたロックさんに俺はすつとんきよな事を言い出した。

ボケているつもりはなかったんだけどなあ。

「何がですか？」

とぼけたのがすぐに分かってしまったから、ロックさんが少し不機嫌になってしまった。

「とぼけるんじゃないよ。だから、前世の時にもこんな事なかったかって。」

無いつて言ったら嘘になると思ったし実際にロックさんの前世は女性の人だったから。

「確かにありましたけど…俺の記憶がまだ鮮明じゃないんで…。」

自分でも、無理な気遣いをしたのは分かっていた。

「俺の前世って…女性だって聞きましたけど…。」

ロックさんが他人行儀になるのは、よっぽどの事があるって事が分かったし俺なりにちゃんと答えを出さなくちゃ。

「はい…。それも、『絶世の美女』だったんです。」

俺だって前世の記憶の中でトラウマになっている部分があるけど話

せる所は話さなきゃ。

ロックさんだって、納得できなかつたら俺だって嫌だし…。

「でも、マキシマは確か前世の記憶を持っていなかったって思いますけど。」

ロックさんの心の中を呼んでしまった俺は、一瞬はつとなったけどロックさん自身が不機嫌になっていなかったから少しほっとした。

「俺、マキシマが前世の記憶を持っていたら…殴り殺して良いか？それ程ロックさんがシヨックに思っているって言うか、殴り殺したって言うのは俺にも分かった。」

だけど、本当に殴り殺しそうだったから一応止めなくちゃ。

「本当は、ロックさんが俺にそう言う前から殴り殺そうって思っていたんじゃないんですか。」

ギクつとなったロックさんの顔を観て、俺がさらに話した。

「やっぱり。」

でも、俺だってそうは思っているよ。

だけどさすがに、殴り殺そうとしたら大変な事だけどね。

「マキシマは俺の事、『床上手』だって思われているかも。」

ロックさんが不安になっっているのも分かっていたし、本当にマキシマがロックさんの事をそう思っているのだったら絶対に許せない。

俺も不安そうな顔をしながら、キッチンへ向った時京がすっきりした顔で帰って来た。

どうやら殴らないで、ちゃんと話をして来たと思って俺は安心した。

セスさんの事もあったから、ちゃんと話をしたかったって言ったしさ。

ちよつと苦笑気味で、京がこつちを見た。

「クリスが居たから、あまり詳しく話出来なかった。」

それは京の運が悪いつて言うか、ちよつど歌番組の収録でクリスさんのバンドが出るって言うてたのに行こうとしたから。

結局、歌番組のMCをしているセスさんだけを呼んで話したって言うのが真実なんだけどクリスさんの事も考えて京だって気を使ったと思うし同じバンドに社さんがいたから自分なりに冷や汗をかいていたと思う。

ロックさんの事を知った社さんが、暴力沙汰気味になったって言うのも京から聞いてビックリしちゃったけど。

「クリスさんは、どうだったの？」

俺だってあの子のクリスさんが心配だったから、聞いたって良いって思ったし…。

「割と元気だったけど、まだショックは隠せなかったみたいだったけど…。」

さっきから、毛布にくるまっているロックさんが首をかしげているのが分かった俺は、ちよつと苦笑してしまった。

ロックさん自身は、クリスさんがセスさんの子供を身籠ったって言うのを知らないしもしバレたとして倒れてしまったらそれこそ厄介だから…。俺らだって、知った時はさすがに驚いたけどさ。

「何、隠しているんですか。」

ロックさんだって気付いたって言うか、いきなり立ったから腰に激痛がきてしまつて…。

京が、俺の姿を見ているのが分かったんだけどロックさんの事があるから放つて置くのも嫌だったし。

「ん？」

少しとぼけて京の顔をもう一度見直したら、くすつと笑い出した。

「K、も人の世話するの、好きだよなあ。」

京だって、人の事…言えないじゃん。

「まあ、そう言う所も好きだけど。」

「なっ…。」

思わず真つ赤になったのを見て、京が話を続ける。

「K、は何をするのも可愛いなあって思つてて…。でも、男らしい

所も持つてて世話好きで。」

真剣な顔で、そう言わないでよ。

まだ、耳まで真っ赤だしロックさんに『にやり』されるの分かっているのかなあ。

「草薙さん、もしかして俺とKの事心配してましたか？」

布団の毛布の中で、にやり顔をしているロックさんが今度は京の顔を見ている。

「少しはな。ロックはマキシマに犯された事で、精神的にきついんじゃないかなあって思ってたさ。」

京が戻ってくるまで、誰も来なかった事とかロックさんと話していたって事も全部話した。

だけど、俺はマキシマと違ってロックさんを犯すなんて事しないよ。だって、もし犯してしまったらマキシマと同じだって思ったし最低な事だと思ったからそれだけは避けたかったから。

「体がだるいの…まだ、治らないんだけど。」

それは散々マキシマに中出しされて、一気に抜かれたからだと思った俺は少しイライラしてきた。

いくら、マキシマと幼馴染だからって言う訳じゃないけどあんな事をされたら誰だってイラついてくるのは当たり前だって思っているんだから。

「俺、マキシマの子供…妊娠したらどうしよう…。中絶しちゃったら、お腹の子が可哀想だって思うし…だけどマキシマの事は絶対に許せない。」

毛布にくるまって泣いてしまっているロックさんに、俺は何も出来なくて。

「失神するまでされて…。俺は、Kみたいな性別の変化がうまく制御できないのにあんな事されて…。男としての元の体に戻れなくなっちゃったじゃねえか。」

マキシマのせいで、ショックが大きくなっているのは分かっていた事だしマキシマだってその事を知らないって言うのは出来ないって思う。

だって、俺だって説教したいけど今俺が行ったら間違ひなくマキシマに犯される事になっちゃうし…。

「こんな状況だったら…処理だつて、出来ないよお。」

でも、こんな事言ったら不謹慎かも知れないけどロックさんが俺やクリスさんと同じ【性別変化】が出来るなんて知らなかったし制御不安定だつて言うのも知らなかった。

俺にも経験つて言うか、思い出さなくもない出来事だから…。

「体がだるくて、苦しくて…。辛くて…、何度も死のうつつで思ったけどK'が居たから思いとどまったんだ。本当はK'だつて、苦しかったんだつて思ったらむしゃくしゃするけど俺は感謝しているから。」

「ロックさん…。」

涙目になったままで、俺の顔を黙って見ているロックさん。

「八神さんにあんな事されて、紫苑にも言えなかったし誰にも言えなくて何度も自分の体を傷つけていたんだ。」

よく見ていたら、ロックさんの手首には鋭い刃物で傷つけたと思う跡が…。

「ロックさん…その傷…。」

驚いてしまった俺や京は、詳しくは言えないでいた。

俺が驚いた表情をしてしまったから、ロックさんも続けて口を開く。「本当はこうなる前に、K'に話せば良かったって思ったんだけどマキシマにあんな事された麦価で言えなくなっちゃって…。」

自分の後輩だから、言えなかったつて言うかもし自分から言ったらまたマキシマに犯されるのが分かってたから言えずにいたんだなあ。嫌な事が原因で、前世の記憶が覚醒しちゃったつて言うのはちょっと所かかなり後味も悪い。

「俺：そう言うのなんて…絶対に嫌だったのに、何でこうなっちゃったんだろ。」

俺にも気持ちは分かるし、大号泣したい事だつて分かるよ。

俺だつて八神さんに犯された時、誰にも相談だつて出来なかったんだから。

京の時だつて、トラウマって言うかフラッシュバックが起こってしまったのは事実だしロックさんのはトラウマが前世の記憶の覚醒につながっちゃったんだから。

『辛いかも知れない』じゃなくて、ロックさんにしてみれば本当に辛い事だつて思ったし俺だつて今も嫌な思いはしているんだから。あの状況で、俺がロックさんを放つて置いて京と一緒に行ってマキシマを殴つたら俺だつて泣き出していると思うし泥沼とか修羅場つて言うのが嫌いだから行くのなんて嫌だったんだ。

「八神さんやマキシマにあんな事をされて、告白したかった人がいたのに出来なくなっちゃつて…。やっぱ、信頼していた先輩にあんな事されるのは辛かったよお。」

俺だつて、セスさんを殴りたいって思った事はあつたけど今のロックさんやクリスさんを見ていたら何も出来なくなっちゃつてただ黙つて見ているしかなかった。

「俺、誰を信じれば…良いの？」

毛布にくるまって、号泣しそうになっているロックさんに京が口を開く。

それも、ロックさんに抱きついたままで…。

分かっているし事情も知っているけど、何か複雑で…。

「凄く辛かったのは、マキシマの声がぐるぐると耳元で言ってきて…。俺が、嫌だつて拒絶しているのにめっちゃくちゃにされて…何度モイカされて…。これじゃ俺、告白する前に壊れちゃうよお。」

俺にも、その気持ちは分かるよ。

マキシマがやった事は、絶対に許せないって言う感情も変わらないし…。

クリスさんの事も、マキシマに犯されてから2時間しか経っていない状態でいるロツクさんの事も気になっているのは事実だし号泣したい気持ちだつて分かるから…。

「この身体…マキシマの【もの】になつちやっただよあ。」
多分複雑なのは、ロツクさんも一緒なんだろうなあ。

「シヨツクなのは、俺だつて一緒だよ。」

また泣き出してしまったロツクさんの肩を、京に替わつて俺は軽く抱きつく。

いろんな体型をされて、何度も中に出されたロツクさんを引き離す事が出来たのは一回だけ。

「俺…これ以上…好きな人とHしないと…壊れちゃうよあ。」
軽く触れているロツクさんの身体は、熱を帯びていて…。

トラウマが起つている状態で、好きな人（誰かは分からないけど）と会えないのはロツクさんだつて分かっているはず。

俺だつて、ロツクさんが誰を好きか知りたいたいしからかいたいつて思っているけど説教されるのは嫌だしロツクさんが泣き出している状態で更に泣かせてしまつたらそれこそ最低な事だから。

「体が、好きな人ものじゃないと…やっぱ辛くてそんなのは嫌だったのに…。」

「ロツクさん…。」
俺が、心配になってロツクさんの方を振り向いた。

京だつて、心配しているのは事実だし俺の事を考えているのは嬉しいけど何か複雑で…。

本当は嫉妬する相手が違うけど、自分が許せなくて…。

「俺…好きな人に告白しとけば良かったって、後悔しているよ。マキシマとこんな関係になつてしまつたら、最初から…。」

泣いてしまったロックさんが、体を震わせてしまっているのを見て俺はただ見ているだけになってしまった。

2時間前、マキシマがロックさんを犯している姿を俺は思い出した。散々犯しといて、まだ攻め足りないって思っているマキシマの性欲はすぐくて気絶しそうになっているロックさんを尻目にまだ止まらない。

息が苦しくなっているのに、何度も気絶ギリギリまでさせて結局はロックさんもトラウマになってしまふ出来事になってしまった。

それだけでも許せないのに、『俺のものになれ』って言い出した。

「ちゃんと好きって…言いたかったのに…。」

トラウマ全開のロックさんの体は、震えているままだ。

「草薙さん…。」

いきなりロックさんに、名前を呼ばれ振り向く形になってしまった京。

「な…何だよ。」

「もし…俺に何かがあった時は…その時は…俺を殺して…。」

涙を流しながら話したロックさんに、俺と京は何も出来なくて…。

「何を…言い出すんだよ。」

動揺してしまっている京が、冷や汗をかいている。

「俺…前に、『悪の心を持っている』って言ってたじゃないですか。」

泣いていても京の事は、事務所は違うけど自分より先輩だから敬語で話すのは事実でって言うか当然の事で。

俺は、京に『敬語で言わないで良い』って言われてはいるけど本当だったら俺だって京の事敬語で話さなきゃならないんだから。

八神さんが警察へ連れて行かれる時に、最初は『ざまあみる』って思ったらしいんだけど自分の同期の紫苑さんが泣いてしまったから言えなかったらしいって言うのも本人から聞いた事がある。

まあ、ロツクさんの場合はキレさせなければ良いって思っている事
なんだけど…。

「いつまた、目覚めるか分からないし俺の中には本当の父親の血だ
って流れているんです…。」

テリーさんの養子になったって言うか、預かったって聞いていたか
らロツクさんにしてみれば思い出さたくない事だろうと思った。

「何か…俺…怖いんです。」

普段のロツクさんは、同性から見ても凄く可愛いし番組で一緒にな
った時は俺だって抱きついてしまったから。

「（だきっ）」

俺が、そういう動作をしたからロツクさんが頬をふくらませしまっ
た。

京もいきなりだったから、耳まで真っ赤になってしまった。

「けっ。お前は、良いよ。目の前に、草薙さんがいるんだから。」
ひにくがっている訳じゃないのは分かっていたけど、ロツクさんの
身体がまた震えていたからトラウマが来た事は俺にも分かった。

シヨックが大きいのは分かっている事だったし、自分の後輩だった
から隠れたいって思った。

「憧れている人に…草薙さんに…初H…見られちゃった…」

号泣してしまったロツクさんが、毛布にくるまってしまった。

「やっぱ、大好きな人じゃないのはちょっとシヨックで恥ずかしい
よお。」

京がロツクさんにとって憧れの人だって言うのは知っていたけど…。

だからこそ、見られたときにはすごくシヨックが大きくて…。

俺だってロツクさんの気持ちは、痛いほど良く分かっているよ。

マキシマに犯されて、4度の妊娠と中絶。

京と付き合っていないかったら、俺はまだ人なんて信じれなかった。

「自分なんて」って思ったのなんて、何回だってあったしただけど今

は京に会って幸せだっと思ってるし京と付き合っただけ損はしていないよ。

「俺…好きな人に会いたい…」

一瞬決意かどうかはわからなかった俺は、もう一度聞き直そうかって思ったけど泣き出したら厄介だっと思ってたしこのままロックさんが壊れるのだけは絶対に嫌だったから黙って見てもいられない。

現にロックさんは、大泣き一歩手前で…。

「前に、マキシマに『めっちゃめっちゃにして、ボロボロにして泣かせてやる』とか言われて…殴る事だっただけ抵抗する事だっただけ出来なかったんだ。」

未だに、処理が出来ないでいるロックさんは涙が止まらない。

事情を知っているから、本当は怒りたいんだけど何故だかこの時の俺は『にやり』としてしまった。

「やっぱり、好きな人とHしたかった？」

不謹慎だっただけ分かってはいるけどロックさんが耳まで真っ赤になっているからますます俺はにやりしてくるんだけど…。

「あ…当たり前だよ…」

否定しなかったから、凶星だっただけ事になるのは分かっていたけど真っ赤になっているロックさんも何だか可愛いなあ。

「とりあえず、社さんには言わないで…」

意外な人の名前が出てきたから、俺もビクビクしてる。

まさか、社さんの名前が出てくるとは思わなかったし…。

だって、社さんは2ヶ月前にクリスさんと別れたはず。

でも、クリスさんの事は確かに別れたけど今でも大事な友達だっただけで言っていたしバンド仲間だよって言ったのは嘘じゃない。

浮気するって言うか、一度だけ京を抱いてしまったのは社さんだっただけで罪悪感になっているはず。

だけど、喧嘩別れする程度で別れないって言っていたのは別番組で

会ってロビーで話していたから知っている事だしロックさんが社さんの事を好きだって言うのは仕方ないって言うか何と言うか…。

「え！？え！？」

今だに京だって驚いているのは分かったし、ロックさんが好きな人の事を教えてくれなかったから。

まあ、言ったおかげで俺だって社さんが好きだって事を知ったんだから良いか。

「一つだけ、聞いて良いですか？」

気になっていた事を、俺がロックさんに話すけどロックさんは耳まで真っ赤になつたまま。

「うん。」

真っ赤になつたロックさんを見ると、抱きつきたくなる衝動になつちやうけど京が居るから黙って聞く。

「社さんを好きになつたのって、まだ社さんがクリスマスさんと付き合いっていた時なんですか？」

俺がそう言つと、首を縦に振るロックさん。

「俺が好きになつたのは、クリスマスの事じゃないんだ。」

ど…どういう事？

そう思つた時には、ロックさんの目には涙が溜まつていて…。

「別にクリスマスと付き合っているからって、クリスマスから奪おうなんて思っていないし…。」

涙目のまま、真剣な顔になつたロックさんに俺は何も言えなくなつてしまった。

「それでも、今は社さんの事大好きだよ。」

「ロック…。」

京が利き手である右手がロックさんに触れようとした途端、ロックさんが軽く身震いをしてしまう。

「草薙さん…。同調^{シンクロ}しちゃうから…触らないで…。」

体が熱くなつてしまったロックさんに、俺や京はただオドオドする

だけで…。

ただ、これだけは言える。

ロックさんがこんな事になってしまったのは、マキシマのせいだ。その事だけしか、考えられない。

もちろん八神さんの事だつてまだ解決していないのにこんな事になつちやつてますます分からなくなつたつて言うか、ややっこしくなつてしまつたじゃん。

俺は、まだマキシマの事を許した訳じゃないし怒りだつてまだ収まらない。

京だつて、俺がこういう状態だつて分かっているはず。

「だ…だめえ…。こわ…壊れちゃうよお…。」
体をガクガクさせながら苦しそうになっているし、泣いてしまつているロックさんが俺の顔を見ている。

本当の理由を知らない俺は、首を傾げたい所なんだけど大泣き状態までなつてしまつたらそれこそ最悪な状況にまでなつてしまつから…。

説教行きだと確信した俺は、冷や汗をかきながらロックさんを見直した。

多分、マキシマに犯された事でトラウマが出てきてしまつたのは事実だと確信した俺はあの時の事を思い出してみた。

本当は、自分でもフラッシュバックになるんじゃないかなあつて言う不安があつたからちよつと怖かつたんだけどそれも言つてられない状況になつてしまつたから…。

マキシマにあんな激しいキスをされたり、立てなくなるまでHをして来たりして。

『……それ、は……んんっ……。』

重なつた唇で、ロックさん自身をとことんまで味わっているマキシマをこの時に止めれば良かった今更になつて後悔している。

『んっ……ふぁ、マキシマ……シマぁ……。』
マキシマは、声が良いから低音でロックさんの眼を見る。

『本当に、可愛いなぁ……。』
ロックさんに見れば、マキシマが初めての人で番組以外でキスされる事なんて始めてだったらしく身を委ねる形になってしまった。

『ん……、あ……。』
マキシマが唇を離すと、ぼんやり顔になってしまったロックさんがマキシマに告白しようとするが涙で隠した。

自分の後輩だから、言いたくないしこんな感じてしまっている自分が何より許せないって言うのが分かった。

『……マキシマ……?』

本当は絶対に嫌なのに、抵抗出来ないで自分の眼はトローンとなっている。

脳裏ですつと社さんの事を言っていたとなったら、俺は絶対に許せない。

気付いているはずなのに、知らない振りをしているのはすぐに分かったしマキシマ自身ロックさんを犯したかったって事だつてあるから……。

「K、?」

俺がまたボーっとしていたから、京が首を傾げてしまった。

俺がイラついていたのは分かっていたから京だつて分かってしまったしもしこの事を京やロックさんに言ってしまったら泣き出すかまた京が殴りに行くかも知れないと思うとちょっと背筋が凍る。

まあ、話さなきゃ良い事だつたら話さないけど。

「また、考え事? K、つて、考える時つて眉間にしわが出来るからなぁ。」

凶星だつたから、何も言えなくなってしまうけどロックさんが毛布にくるまったままこっちを見て口を開いた。

「考え込んだままだったら、お前が辛くなるだけだし俺だって嫌だからなあ。」

本当は、このままの状態が良いんじゃないかなあって思ったけどロツクさんの事を考えたらそうも言ってられなくなってしまったから…。

「本当は、このままの状態が良いんじゃないかなあって思ったんじゃないののか？」

ますます凶星だったから、黙ってしまった俺にロツクさんがトドメの一言。

「やっぱりなっ。」

怒りって言うか、呆れ顔になってしまったロツクさんを見てちょっと恐怖心が出てきてしまったのは事実で…。

「何か、お前に怒る気もうせた。お前に怒ったって何にもならないや。」

そう言ったロツクさんが、更に口を開く。

「俺だって誘っていないのに、何度もやってきて社さんの名前を呼んだままイツちゃって…。」

多分、この状況をうちのねえちゃんやクーラ達に聞こえていたら叫ぶだろうなあ。

クーラも結構な、腐女子だからなあ。

「変なスイッチが入ったみたいに体が反応しちゃって、いつの間にかマキシマの事を求めて俺の体…マキシマじゃなきゃ反応しなくなっちゃった…。」

泣きながら訴えたロツクさんの顔を、黙って見ていた俺に京が口を開く。

「今、マキシマの事…殺したい程憎いか？」

京がそう言うと、こっくりとうなずくロツクさん。

「だけど八神さんの事は本当に思い出さなくなかったのに、マキシ

マのせいで全部思い出しちゃって…。俺：何度も拒絶したのに、何回もしてきて中に出されて…。体傷つけられちゃって…。こんな会社さんが見たら、何て言われるか分からないよ…。」

社さんも京を強姦した立場だって事、本当にロックさんも知らないんだなあつと少し冷や汗になりながらも更に話を続けようとするロックさんの顔を見た。

「社さんは、こういう事に鋭いから…。」

確かに、鋭いには鋭いけど…。

「処理しようとする、体が反応しちゃって…。」

風呂場でもされていたから、置いてあった道具があつちこつちに飛んでいたんだなあ。

「こんな姿、社さんに見せられないよ…。告白する前に。破れそうな感じになってるんじゃないかなあつて…。」

ロックさんが、毛布で体をくるまっているると玄関のチャイムが鳴った。

誰かと確認する前に、相手が社さんだと分かった。

ロックさんはその場で大泣きしてしまったから、俺は慌てて社さんと一緒にロックさんがいる部屋に向かった。

「ロック…!!」

社さんが、ロックさんの体に触れようとした時泣いてしまった顔を見せるロックさん。

一瞬、とまどつてしまった社さんがロックさんの近くに腰掛けた。

「事情は、草薙から聞いた。お前がマキシマに強姦されたって聞いた時は正直驚いたし、殴ろうとなんて思っていた。」

ロックさんは社さんがそう言うと、ますます毛布にくるまってしまうた。

「社さんは、クリスの事…今でも好きなんじゃないんですか？」

泣きながら、ロックさんが社さんの顔を見た。

「クリスとは、別れたよ。今では、バンドのボーカルとプロデュー

サーの関係だけ。」

「瞬きよんとしてしまったロックさんが、口を開く。

「本当なんですか？」

こつくりとうなずく社さんに安心したのか、ロックさんは涙目になつてしまった。

「あれ…？安心したはずなのに、何で…涙が…出てきちゃうんだろ…？」

ロックさんの肩を、抱きしめる社さん。

「お前が、俺に行為を持っていたなんて知らなかったって言うか鈍いからさ。だけど、クリスの事やお前の事を考えられるようになったから俺の事が好きだって言う気持ちに俺も答えなきゃいけないがあつて思っていたから。」

社さんの言葉で、首を傾げてしまったのは俺だけじゃないはず。

「お前の事…大好きな事に気づいたのはクリスに分かつて、だけどお前が当時デュークさんと付き合っていたのを知っていたから別れたって言った時は俺だつて驚いたぞつ。だけど、お前だつて俺だつて別れたからつてすぐつて言う訳じゃないから…。」

元力ノのクリスさんからしてみたら、自分の事でロックさんが告白出来ないと思つていたみたいだったけど実際は違つて思つたのもあつたんだなあ。

「泣くなよ…ロック…。」

「だつて…社さんは、まだ…クリスさんの事…今も好きだつて…。」
涙ながら、話したロックさんの側に行く社さんがロックさんの体を抱えるように近くにあるソファに座らせた。

当のロックさんは、ビックリしてしまつて目をきよんとしてしまつているんだけど…。

「クリスと別れたからつて、すぐに嫌いになんてなれないよ。」

「だったら何で、クリスさんと別れたの？」
号泣しているロッククさんを見ながら、社さんが話を続ける。

「同じバンドのメンバーで、これからメジャーデビューするし俺は作詞活動で忙しくなるから恋愛とか出来なくなるしクリスだってせつかくここまで人気が出てきたのに俺のせいで一気に人気が去ったって言うのは嫌だからな。」

社さんが、クリスさんに気を使ったのは俺だって分かっていた事だったけどロッククさんが社さんの顔を苦笑した顔で見ている。

当の社さんは、それに気付かない。

「俺ね、デュークさんに『社の事、頼むなっ。』って言われて…でも実際に、頼られているのは俺の方だって気付いて…。」
涙目になったまま、笑顔になったロッククさんに少し理性の枷が抜けそうになったけど俺も社さんも何とか理性を保てた。

それだけロッククさんは可愛いし、自分の理性がいつ爆発するか分からないから…。

まあ、脱衣所でもしていたからこそちはロッククさんを連れてくるのに大変だったけどマキシマがこういう事をしたからいけないんだよと思っただらまたイラついてきた。

とにかくだ、ロッククさんから告白しようとしたら社さんが告白する気だっけ言う事にちょっと驚いた。

「今は、お前が大好きだ。これだけは言えるし、嘘じゃないから。」
そう言った途端、感動して大号泣してしまったロッククさん。

この場合のロッククさんの大号泣は、本当に嬉しい事だって分かっていたし良かったと思っただ。

俺にだってロッククさんのこんな嬉しい顔をした気持ちには分かったし、マキシマにされた事でちょっとショックが大きかったさつきとは違って幸せになった今はロッククさんだって同じ事だって思っている。

だからこそ、ロッククさんには幸せになつて欲しいって心からそう思

つたんだ。

「俺も、社さんの事…大好きです。」

告白出来て良かったねと俺も笑顔になって、涙目で社さんを見ているロックさんを見ている。

「K、?」

京だって、俺の顔を見ていて笑顔になっている所を見ると同じなんだなあって思った。

「良かったね…ロック。」

京もロックさんの事を祝福しているようだったから一安心した。

まあ、そういう京の顔は『にやり』顔だったから社さんの事でトラウマが来なくなっただって確認して更に安心した。

「(こっくり)俺…告白するの、止めなくて良かった。」

涙目になっているロックさんの顔を見て、社さんが口を開く。

「泣くなよ…。」

社さんがすべて話し終わらないうちに、ロックさんの方からキスをした。

いきなりの事だったから、俺や社さんも驚いてしまった。

「俺…社さんに告白して…良かった。」

泣いてしまったロックさんを今度は、抱きついてキスをした社さん。当のロックさんは、耳まで真っ赤になってしまっただって頬をふくらませてしまった。

元々俺以上に可愛い顔をしているロックさんに何も言えなくなってしまうのは事実で、俺だって京がいなかったら今の社さんの状況になってしまっただって自分で分かっていたから。

「何、お前まで真っ赤になっているんだよ。」

気付いた時には、耳まで真っ赤になっているロックさんに横目で見られた。

本当は、抱きつきたいって言う事…言える訳ないじゃないですか。

「社さんの前だし、返って草薙さんに説教されるから嫌だしお前だつてオドオドするだろうがっ。」

涙目は基本的に、効果的で。

「ただ、俺にしてもロツクさんにしてもそつという事には使わないけど…。」

「ロツク…あのさ。」

「いちゃつきだしたつて言うか、話をしだした2人を見て京が照れてしまった。」

「目の前でいちゃつかれたら、結構照れるもんだなあ。」

「本当は、京だつて嬉しいのは分かっているんだけど京の事だからあの時の事を思い出しちゃったのかも。」

「草薙さんだつて、良くいちゃついているじゃないですか。マスコミの人が、来ないから良いんですけど。」

その言葉に俺も真つ赤になってしまつて、照れながら京を見た。

「まあ、ロツクさんの特殊能力である【透視】のせいでもれ状態だけださあ。」

「まあ、Hの時に素直になるK、や草薙さんも可愛いんですけど。」

京が照れながら、怒つたつて言うかモゴモゴしてしまつた。

「からかうんじゃないよ。」

「す…すいません。だけどまさか、草薙さんがあんなに素直になるなんて思つてもいなかつた事だし…。」

更に京の顔が真つ赤になつたのは、事実で。

「多分ロツクさんが言いたい事は、Hの時に京が乱れた姿になっている事だと思つたら俺まで憤死しそうになる。」

「だから、あんな所でしたくなかつたんだよ。」

涙目になつてしまつた京を、俺はキスしそうになつた。

正直あんな京の姿を見たのは初めてだつて思つたし、H中の京の顔は凄く可愛い。

あんなに可愛くて、上目使いされたら京じゃなくたって襲いたくなるって。

まあ、京の前では言わないけど。

襲おうだなんて、間違ったって思いませんけど。

京が可哀想だっと思って思うし、俺のせいでまたトラウマが来たりしたら厄介だから…。

「大丈夫だよ。俺だっつて、そこんトコ分かっているから。」

俺がそう言つと、京は横目でロツクさんを見る。

京の状況で、見れたロツクさんが逆ににやりと見る。

「つまりはヤったつて言えば、良いんですねえ。」

社さんに言われて、真っ赤になってしまった京の体を俺はぎゅっと抱きしめた。

今更嘘とは言えないし、ロツクさんには横目で見られてしまつし…。
だったら京に抱きついたまま何とかしてごまかさないと、社さんだつてからかえない。

最近、俺が京を犯しているって言うか俺が男の体の状態で京としているから…。

「（こくんっ）だ…だっつて、け…K' があんなトコでHしようとするから…。」

照れながら、話す京に俺が更に照れるような言葉を言う。

「だっつてそれは、京自身が『もつと…もつと…』って誘ってくるから…。」

案の定、京の顔が真っ赤になったのを確認した俺は京の顔に近づいてキスをした。

京の照れている顔を見て、つられて照れてしまったけどこの顔も可愛いなあ。

「もつっ。」

社さんやロツクさんがいなかったから自分の理性が爆発しそうにな

ったのは事実だけど京が泣き出すのだけは嫌だ。

「K'は今男の子の体だから良いけど、俺なんか明日まで女の子の体なんだから。」

男の子の姿になっていて理由は仕事があるからって言うのがあるんだけど、京の場合は仕事の内容って言うかその量がたくさんありすぎてヒートダウンを自分で引き起こしてしまったじゃんって口で言いたいけど肝心の京の仕草が可愛いから頭が真っ白になってしまう。このまま京を涙目にしたいって思ったけど、睨みだしたロツクさんの顔を見てしまったからなくさめる事になってしまった。

まあ、当然京が照れるのが分かっていたし自分の理性が保っている間に京の顔を見なくちゃ。

「可愛いって、言うなよ。ロツクや七枷さんにかかわれたらどうするんだよ。」

「良いじゃん。本当に京は、可愛いんだから。」

真っ赤になっている顔の京も可愛いって思ったけど、案の定社さんにかかわれた。

「（にやり）のろけだな。」
鼻で笑われるのが分かっていたけど改めてその事をされると、ちょっと凹むなあ。

のろけたのは事実だけど、社さんには関係無い事じゃん。

俺が京の事大好きだって言う事、知っているくせに。

「そう言う社さんだって、ロツクさんの事を見て鼻抑えているんじゃないんですかあ。」

俺がそう言う社さんじゃなくて、ロツクさんが照れてしまった。

「社さんは、そんな変態じゃないもん。」

社さんは京を強姦して2ヶ月ぐらい前までトラウマになっていたって言いたかったけど、ロツクさんが泣き出すと厄介だったので言わなかった。

「むしろ、八神さんの方が変態だっと思ってているし俺になんて全然謝るって事なんてしなかったんだから。」

八神さんより、社さんの事が信頼しているんだなあって思ってたけどロツクさん自身紫苑さんの事があるから言えないでいるっていうのが今の状況だっけ分かってる。

「本当に八神さんが俺と関係を持つたびに、『紫苑と別れなくたってお前との関係は終わりにしたくないし、毎日お前を壊したいからさ。』って言われて体が動けなくなるまで何度もされて…。学校の出席日数が仕事とかでもやばいって言うのに何回も八神さんは関係を持ってくるから…。一旦は俺、人に体とか触られるの嫌になっちゃって時期だっけあって…。八神さんが警察に『参考人』として行った時、正直ほっとしたけど八神さんだっけ俺だっけマキさんを殺すなんていう動機なんてもちろん無いし紫苑さんを哀しませるのなんて嫌だからな。確かに、これでもう八神さんと関係を持たなくて良いつて思ったら嬉しいけどさ。」

また泣き出してしまったロツクさんが、社さんに抱きついた。

「俺だっけお前が、八神に犯されたっけ事知った時は殴ろうっけ思っただけお前がまた泣き出すのが分かっていたし俺だっけ嫌だったから…。」

そう言っただ社さんの顔には、冷や汗が。

社さん自身にも京を犯した事で、罪悪感が出て来ていたのは知っていた事だしロツクさんに全部話してしまっけ『別れるっ！』っけ事になっけたらそれこそ修羅場っけ言うか大事故だっけ思っけいる。

でも、大丈夫だよ。

社さんに不利になる事は言わないし、ロツクさんには隠し通すから。だっけそれがばれたりして、ロツクさんと京の信頼関係がズタズタになるのは嫌だからね。

社さんだっけせっけかく京と和解したのに、修羅場になっけしまっけた

ら間違いないくあおる人だっているはず。

まあ、社さんは『エロ』だから仕方ないって言ってしまえばそれまでなんだけど。

ロバートさんと体をはる程だつて、聞いた事だつてあるから。

「だけど、八神が無罪だつて言う事は誰がマキさんを殺したんだろう。」

それが分かったら、最初から苦勞なんてしてないよ。

「でも、俺達で八神の無実を晴らさないと紫苑だつて今のままだつたらやばいぞ。」

社さんの事も一理あると思った俺は、ロツクさんの顔を見た。

紫苑さんの事だつて狙っていたって聞いた事があるから、もし犯してしまつたらロツクさんはそれを絶対に許せないと思う。

ロツクさんだつて、俺と一緒に平和主義者だから殴るって行為は嫌だつて思っているしね。

最低だつて思うのも、事実だしね。

「社さん：もしかして、紫苑さんを犯そうなんて思っているんじゃないですか？」

ちよつとふくれ顔になつてしまつたロツクさんを見て、言葉に詰まつてしまつた社さんにロツクさんが更に口を開いた。

「大好きで告白したのに、そう思っていたらまじで最低ですよ。」
涙目になつているロツクさんの顔を見た社さんが、抱きついた。

いきなりの事だつたから、ロツクさんの体はびくんとつた。

こうして見てみると、ロツクさんも『女の子』だなあつて思ったけどまた頬をふくらませてしまつのが分かつたから黙つていた。

「大丈夫だよ。こんなに好きなのは、お前だけなんだから……。」
社さんの声は、低音でしかも良い声だからロツクさんは当然ドキツとしてしまつたし近くにいた俺だつて少し照れてしまつた。

「いきなり、良い声出さないですよ。ビックリして、照れちゃつたじ

「やん。」

聞き覚えがある声だつて言うのは知っていたけど、改めてそれを知つてて聞くと俺まで耳まで真っ赤になつてしまう。

本当にロツクさんじゃないけど、この声のおかげで女の子の人に困らなかつたんじゃないかなあつてちよつと思つてしまつたけどロツクさんににらまれるのが嫌だつたから黙つて聞く。

ナンパされる可能性だつてあるぐらい、ロツクさんだつて可愛いんだよ。

男の人に、可愛いつて言つたらちよつとどころかかなり凹むけど…。あつ、今のロツクさんの姿は京と同じで女の子の体だもんなあ。

ロツクさん以上に社さんはもてるつて言うのをロツクさん自身は知らないんだなあ。

真っ赤になつたままのロツクさんを見て、社さんだつて自分の理性と戦つている。

まあ、ロツクさんは自覚なんて無いかも知れないけど仕草が可愛いいつて事になつちゃえばそれまでなんだけど。

「草薙さんも呆れないで下さい。」

照れたままですねてしまったロツクさんを見て、京が更に口を開く。「だつてよお、お前の仕草つて可愛いから俺だつて七枷さんだつて理性爆発させないように我慢しているんだからな。」

京がそう言つと、モゴモゴしてしまつたロツクさん。

「…そ…それは…確かに…そうですけど…。」

俺自身も自分の理性と戦いながら、社さんに視線を移す。

肝心の社さんは、それすら気付かないで2人の行動を黙つて見ている。

俺の方で、ちよつと慌ててしまつたのは社さんが抱きついてロツクさんとここでHするかも知れないつて言う可能性だつてあると思つたから。

ロツクさんだつて拒絶すると思つし、社さんだつてここではしない

と思う。

まあ、そんな簡単に理性を爆発させないって社さんは言っていたけど…。

「だけど、実際はそうなんだろう？」

京に言われ凶星だったのか、耳まで真っ赤になってしまったロックさんが首を縦に振った。

本当に…可愛いなあ。

「（にたあ）」

俺がにたにたとしている顔を見て、京は頬をふくらませた。

「何、にたにたしてんの？」

本当に頬をふくらませている京も、ロックさんもなんだか可愛いくて理性が飛びそうになるんだけど爆発させたら厄介なので黙っているし社さんに思いつきりからかわれたり説教されるのなんて嫌だから…。

「いやあ、ロックさんも京も可愛いなあって。」

「だからって、にたにたする事無いじゃん。」

嫉妬に近い怒り方で、京が俺を睨んだ。

こんな事言う訳じゃないけど、嫉妬心全開の京を見るのも可愛いって思ってたきちゃった自分がいるんだけど放って置く訳にもいかない。

「俺の事、嫌いになったの？」

涙目になっている京の顔は、さつきとはまた違ってすごくエロっぽくてそれだけでも理性が爆発しそうになる。

だけど、ロックさんのいる手前爆発させる訳にはいかないから黙っている。

このまま京の機嫌が悪いのは嫌だっと思ったし、嫉妬心全開のままでいられるのも困るから。

「嫌いになる訳ないじゃん。」

「本当？」

京が涙目のままきょんとしてしまっただのを見て、俺は首を縦に振った。

「うん。俺、言ったじゃん。京から、離れないって。もし嫌いになつてたら、今頃こうして一緒になつてないし京のプロポーズなんて受けてないから。」

そう言った俺は、いつの間にか京を押し倒して濃厚なキスをした。

案の定、ロックさんには横目で睨まれるし社さんにはからかわれた。

「おいおい。自分でHしないって言ったのに、自分が守れなくてどうするんだよ。」

だって京が、可愛い仕草をしたから…。

京のせいにするなつて言つたら、それまでなんですけど…。

京も、耳まで真っ赤になつているのに今更止まらないよ。

「ふぁ…。」

とろけてしまった京の体を、支えるように抱きつく俺。

「大丈夫ですつて。それに、ロックさんが寝ている時に別の部屋でHしちゃったんで。」

また耳まで真っ赤になつてしまった京が、モゴモゴするしロックさんが呆れてしまった。

「ロックが大変な状況になつているのに、K…たら奥の部屋でHするんだもん。」

まあ、最後までしてしまつた俺のせいでこうなつちやつたのも事実だしね。

京の頭の中では、その事がよぎつて来るといふか思い出しても耳まで真っ赤になつてしまふのが分かつていたし事実京の感じている声や顔は凄く可愛いくて俺だって何回も理性が飛びそうになつてしまひそうになつて…。

もちろん今の京の体は女の子の体になつているから、俺はこれでもかつて言う程に京の中に出してしまつたし…。

この2人からかわれるのが分かっていたけど、さすがに凹むなあ。それに社さんだって、本当はからかえないんだよ？

「何で、俺が苦しんでいたのにお前って言うやつは理性を爆発させて草薙さんとHしてたんだよ。こっちは、精神的に辛いつて言ってるのを知っているくせに……。」

泣きそうになっているロツクさんの顔を、俺と社さんは冷や汗をかきながら見ていた。

俺自身凶星だったから、何にも言えなかったしロツクさんは京の喘ぎ声を聞いてしまったから。

「本当に、信じられねえ。」

ムスつとなつてしまったロツクさんが毛布にくるまっっている姿を見て俺はぼかんと口を開けてしまった。

社さんも、このままじゃまずいと思ったのだろう。

慌てて、京の方を見て話をし出した。

「ロツクがこのままムスツとしたままだったら話が進まらねえだろうが。」

俺の肩を持つのかなあって思ったけど、社さん自身も八神さんの事や自分の理性の崩壊を抑える為にこう言ったとすぐに思った。

まあ、社さんに聞かなくてもすぐに後者の方なんだって思うのは態度で分かったし鼻の下を伸ばしていたから。

「鼻の下を伸ばしていたら、説得力無いですよ。どうせ、ロツクさんの顔を見て、鼻の下を伸ばしていたんじゃないんですか？」

俺がそう言つと凶星だったのか、言葉に詰まってしまった社さん。

「うっ。」

案の定、ロツクさんは頬を膨らませてしまったのは事実だし京だつて冷や汗をかいてしまったから。

何とか、すぐに落ち着かせたけど……。

だけど、八神さんのアライバイはあるのに警察の人達はまだ疑いを持っている状況で警察署からまだ出られない。

もちろん、紫苑さんの精神的苦痛も段々と増えて来てしまっし…。

「なあ。」

社さんが俺の顔を見て、話を続ける。

顔はマジな顔になったけど、冷や汗だけは残ってしまっている。

「紫苑って誰かに、犯されたんだろ？」

社さんの言葉でロックさんも俺も、ハツとなってしまう。

正直、社さんには紫苑さんが誰かに犯された事なんて知らないはずなのにいきなりそれを言ったもんだから疑いはしなかったけど驚きが隠せなかった。

「言つとくけど、俺は紫苑を犯していないからな。第一そんな事をしたら今頃、修羅場になるだけだろうが。せつかくロックが泣き止んだのにまた泣き出してみろ、お前にかかわれるのは嫌だからな。」

「てつきり、社さんが紫苑さんを犯したんじゃないかなあつて思ったりしたけど違つて言う事を強調したかビックリした。だって本当の事を言えば、嫉妬しているロックさんを見てみたから…。」

「本当に、社さんは紫苑さんを強姦する気なんて無かつたんですか？」

毛布の中から顔だけを出した、ロックさんが口を開いた。

社さんも少しビックリして、ロックさんを見直した。

その光景を見て、少しほっとしたのは俺だけじゃないはず。

近くに居た、社さんや京も安心したのも確認できた。

「俺、京に謝らなくちゃいけなかったんだ。」

低音の良い声で、京に話そうとする社さん。

当の京も何を言うか分からないから、きょとんとした顔になっっちゃった。

「俺…前世の記憶が、覚醒しちゃったんだ…。」

前世の時に、京と社さんが仲が悪かったから俺は気まずくてその場

からどっかに行きたかったけどロックさんの事があるから放って置くっていうのも嫌だったし余計に社さんに説教されるが嫌だったから…。

京自身も、それを聞いてちよつとむすつとしてしまったのは事実だったけど俺の事があつたから黙つてしまった。

「前世の記憶がないって言ったのって、嘘だったのかよ。」

冷や汗になった社さんが、何とか京に話し掛けようとしたけど肝心の京はその話を聞いていない。

まあ、怒りが収まらないって言うのも分かっているけど前世の時の事だつて言つたらそれまでだけ…。

「俺…あの時、前世の時の七枷さんにあんな事をされなかったからこんなに気まづくも無かつたのに…。」

京の目に涙が流れてしまったのは、俺にも確認できたからショックがあつたんだなあつて思った。

前世の時、夜から朝までずっとHされていて何度も中に出されて毎日だったから体も動けなくなってしまったのはいつもの事で…。

「俺…何度も、止めてつて言ったのに…。」

京が、泣き出してしまったから毛布の中にいるロックさんもビクビクしてしまっている。

「社さんが、草薙さんを犯したの？」

前世の事とはいえ、社さんが京を犯したのは事実だと知つたロックさんは大号泣しだしてしまった。

俺だつて社さんの気持ちは分かっているし、前世でも今でも社さんに犯されたつて知つたからショックが大きかつたのは事実だから。

それに、社さん自身も自分達と関係のある人物だつて言う事も知つたから余計だと思う。

社さんは、ロックさんに前世の事や京との関係の事ですぐに謝っているし…。

「今はもう、ロック一筋だし京を犯したりしたらそれこそ説教だし

間違はなくナガセ達【腐女子軍団】の話のネタになっちゃうだろうが。俺が悪かったと思っっているけどさ。」
その言葉を聞いたロックさんが、耳まで真っ赤になったのを見た社さんがさらに言葉を続ける。

「それに、俺が抱くのはお前しかいないよ。」
確かに、社さんが京を犯した時はビックリしたよ。

今だって、京はトラウマこそ来ていないけどさっきまで泣いていたから目の所に涙が溜まっているし少し社さんに感謝しながら自分の理性と戦っている。

京だって、今の状況でロックさんが泣き出してしまったら困ってしまうのが分かっていたから何も言えないでいる。

「本当に、そう思っているの？」

ロックさんがうるつとした顔で、社さんを見た瞬間俺も社さん自身も理性が吹っ飛びそうになる。

「本当だよ。嘘だったら、お前の感じやすいトコ触らないだろ？」
社さんが、良い声でロックさんを触って来たから体を震わせてしまった。

「あつ。」

その光景がまた、凄く可愛いくて…。
でも、ここでHされるとなっちゃロックさんトラウマを起こしてしまっくんじゃないかなあって少し思いながらも黙って見ているだけだしもしかしたら大声で叫ぶかも知れない。
そうなったら何かと厄介だっと思っだし、変な風に捉えるかも知れないって言う人だっと思うと思っ筋が凍ってくる。

第一ロックさんが、マキシマに『強姦』されてからそんなに時間が経っていないしこれで朝までHされたらロックさんだって壊れると思っっているし俺だって何か嫌だ。

だってここで、ロックさんがマキシマに『強姦』されたんだから。

「だめ…だつて…。社さん…っ。」
思いつき拒絶し出したロックさんが、社さんを蹴る。
「い…嫌だあ。」

社さんを蹴ったロックさんは、もう一度毛布にくるまって泣き出してしまった。

その光景を黙って見てしまった俺も京も、ロックさんに蹴られた社さんもきよとんとしてしまった。

「何で…何で…こんな時に、Hしようとするの？俺…社さんとHするのは嫌じゃないよ。嫌じゃないけど…嫌じゃないけど、マキシマにあんな事をされた後だから辛くて…社さんに触られるだけで…思い出しちゃって…。」

「ロックさん…。」

俺が、ロックさんの顔を見た時もろんロックさんは泣いていたし俺も無理に毛布を引いてしまったから伸びちゃったしロックさん自身の複雑な気持ちは俺にも分かっていたから…。

「社さんの事は、大好きだよ。大好きだよ…だけど、Hの事になると何か胸が苦しくて…息が出来なくなっちゃって…。」

それだけ、マキシマがした事は許せないと思っっているし京だつてこの事に関したら俺と同意見かも知れないと思っっているから。

息が苦しそうになっているロックさんを見ると、こっちまで辛くなるしシヨックが襲ってきているのも分かったからもう一発殴らないと俺の気も収まらない。

「俺…このまま、死んじゃうのかなあ。」

さつきから息がたえだえになっているロックさんが、困った顔で俺と社さんを見た。

「せつかく社さんに告白したのに、このまま死ぬのなんて嫌だよお。」

「やばい…ロックさんが泣いている事情を知っているはずなのに、俺」

自身が理性を爆発しそうになってる。

だけど、良く見たらロックさんの瞳は大きいって前から思っていたし社さんに告白した内容だって何だか女の子っぽい。

社さんだって、いきなりの事だったから冷や汗をかいてしまったのは事実だったしすぐに解決方法が1つしかないって思ってた社さん自身も行動に移したと俺は思った。

まあ、正義感半分にエロさ半分があるって思ってもいたから何とも言えないけど。

.....白い雪化粧　↳ white were all covered

この時、ちょっと地元では雪が降っていました。

地元では、雪が降ると道路が本当に雪化粧みたいになるためにこのタイトルをつけたんです。

.....

次回予告

社「でたよ。地元愛。」
ジモデー

作者「別に、良いじゃん。事実言っている、だけなんだし。」
ゆみや

社「どっちにしたって、俺は寒いのが苦手だから関係無い事だけど。」

次回、17話。.....冬の神秘なる光.....
ふゆ しんぴ ひかり

.....冬の神秘なる光　W i n t r y m y s t e r i o u s.....

あの後、社^{しゃ}さんとロックさんが付き合う事になって正直ほっとしている。

だってあのままマキシマと関係が続けていたら、ロックさんだって辛いと思うし俺だって嫌だ。

とぼっちり食らうのは、全部俺の方なんだから。

いちやついてて、まりんさんに【キャッシャーで引くよ】って言われるのも何だかしゃくだしや。

京が真つ赤になっちゃって、キッチンに隠れてから10分。

社さんはこりもせずまだ京をからかっているし、ロツクさんはそれを見て嫉妬じゃなくて冷や汗をかいている。

「そう言えば、今日って大晦日だっけ。」

ボケて、俺とロツクさんの顔を見てにやりしている社さん。

「K'も、ロツクも女装すれば良いのに……。」

要するに、女物の浴衣を着れって事だよなあ。

「嫌だよっ!!」

俺はすぐ否定はしたけど、ロツクさん自身は乗り気らしい。

「俺は、社が居てくれるなら着ても良いよ?」

サラダを食べながら、社さんの顔を照れながら見ているロツクさん。

言いたい事は分かっていたし、前に『女装男性好き』だっけ言うのを聞いた事があるから呆れる事しか出来なかったけどまさか一番そう言う事は嫌だっけ思っていたロツクさんが乗り気になっているなんて思わなかったからそっちの方で驚いてしまった。

「あーもう。また、ノロケかよ。」

京も俺のサラダを盛りながら、ロツクさんの方を見て呆れちゃっている。

「そんな事言っただって、草薙さんだっけ人の事言えるんですか?」

また京の顔が耳まで真つ赤になってしまったのを見て、俺は京に抱きついた。

もちろん、京が俺のサラダを盛り終わってからだったけど。

確かに、ロツクさんの言う通りだよな。

ロツクさんは俺の女の子の姿でも京の女の子の姿でも見た事があるからそう言われたって全然驚かなかったけど……しかも隣り同士だし元の姿の俺も見た事があるから……。

「確かに、そうだけど…。だけど、そんな事…ここで言う事無いじやん。」

俺に抱きついたので、ロックさんにかかわれたのが一緒になってもごもごしてしまった京。

こつこつ仕草が、一番可愛いんだよなあ。

「真っ赤になつている草薙さんって…凄く、可愛いですね…。」

ロックさんが言った言葉で更に真っ赤になつてしまった京にキスしそうになつた俺。

ピュアだなあとか思ったのは、俺だけじゃないって分かっているし俺がこんな事を言つたらまた社さんにかかわれるのが分かっていたから。

「俺、社さんの前だつたら女装したって良いもん。」

ロックさんも真っ赤になつてしまったのは俺の方から分かっていたし何か萌えた。

さつき京に、『ノロケ』と言われてからの言葉だつたから当然の事だつて思つていたし…。

「俺は、社さんの彼女だもん。社さんがそれで良いんだつたら、俺は後悔なんてしないよお？そりゃHの時は、今でも嫌だよ。相手が社さんでもマキシマにあんな事されて凄くトラウマになつていいるから…。」

また泣きそうになつているロックさんの顔を、なでる社さん。

ロックさん自身は、いきなりの事だつたからビックリしたのか耳まで真っ赤になつてしまつてる。

京と同じでロックさんも、ピュアだなあ。

まあ、そこが可愛いんだけど京には負けるよ。

京はめちやくちゃ、可愛いから。

「また、別の世界に行つてたなあ。」

京が、ロックさんと社さんの食べ終わった食器を片付けて洗い物をしていいる。

「別世界って…。」

「だって、K' っていう食べ物の下に落ちてるのに全然気付かないんだもん。」

京の顔は、少し寂しそうな顔になっていて…。

本当はまたすぐにも抱きつきたかったけど、さっきの事があるからそれも出来ないし京だって嫌だって拒絶するしね。

「ほら見る。京のやつ、しょんぼりしてるじゃねえか。」

社さんも冷や汗をかいてしまっている状況で、俺を見ているけど俺だってそれは一緒だよ。

「外に出たら、K' といちゃつけないしマスコミの人が来たら何も言えなくなっちゃうもん。」

事務所の関係上、否定しなくちゃならないのはお互い知っている事だしもしかしたら社さん以外の先輩にからかわれるかも知れない。

先輩にからかわれるなんて、社さんでなれているからそんなに気にしていないけどマスコミの人にばれたらファンの子がショックを受けるからそれだけは阻止しないと。

俺だって、嫌だしね。

「K' の事だから、別の番組でもいじられてるんじゃないかなあとか思っちゃって…。」

エプロンを外して、またイスに座った京が俺の顔を見た。

「大丈夫だよ。俺はそんなヘマしないし、京を泣かせる訳にはいかないからさ。第一、そんな事したらお姉ちゃんに何されるか分からないからさ。」

俺がそう言うと、京が笑顔になった。

笑顔になった京の顔も可愛いけど、困っている時の京の顔もなんか可愛い…。

「また、理性が飛んでるなあ？お前も社さんと同じで、変態じゃないのかあ？」

冗談じゃないっ！！

社さんはドスケベだけど、俺は別にそういうのじゃないもん。確かに京の顔を見て、理性が飛びかかったのは事実だけど…。

「（ムス）社さんと、一緒にしないで下さい。」

俺が少しむっとした顔になったものだから、目の前にいる京はビクつとなつてしまったしロツクさんは冷や汗をかいてしまった。

京は良いとして、ロツクさんに対してはざまあみる。

「でも、お前がそう言う時は本当に草薙さんの事を好きなんだなあって。見ててこっちが耳まで真っ赤になるぐらい、いちゃついてるじゃん。」

確かに、そうですけど…。

でも、でも…俺は京とは『理性が大崩壊』して関係を結んだって言うか結ばれた訳じゃないもん。

「（むうつ）だって本当に、社さんはスケベですし…。」

俺のコロコロ変わる表情に、京は少し理性が壊れつつ何とか保っているみたいで…。

「ロツクも、その辺で止めとけよ？K' だって、困ってるしさ。」

京が後ろから抱きしめているのを確認した俺は、思わず食べようとしたサラダを落としそうになった。

ロツクさんは、知らないんだ…。

京も俺とロツクさんみたいに、『女の子の姿』になれるって事…。

しかも、俺が男の姿になつている時に京を抱いてしまった事も…。

「お前、草薙さんを抱いただろ…。」

ぎくつ。

ロツクさんって、こういう事に鋭いんだっけ…。嘘を言ったって、すぐにバレるからどうせ怒られるのなら今言った方がマシだって思ったから。

「お前なあ、何事務所の先輩を犯しているんだよ。道理で番組が一緒の時、草薙さんの様子がおかしいと思っただよ。」

京の驚いた顔を見て、ロツクさんがまた冷や汗をかいてしまった。「どうせ、お前の事だから草薙さんの大事な所でもガンガンと攻めてたんじゃねえのか？」地雷を踏んだと思っただけでロツクさんが、やべっと思っただけ。「だから、俺：壁沿いでHするの嫌だっけ言ったのに。K' ったら、そんなの関係なしでやるんだもん。凄く：恥ずかしいよお。」目には大粒の涙が溜められていて、何か可愛いなあって思ったけどこのまま泣かせる訳にはいかないだろうなあ。

「京：泣かないで。恥ずかしい思いをさせたのは、俺だからさ。本当に：ごめんな。」俺がそう言っていると、京の顔は真っ赤になって頬をふくらませてしまった。

「本当に、そう思っているの？その割りには、Hの時いつも激しくしてくるじゃん。まあ、俺も今の姿だったら意味が無いんだけど。」
京の頭によぎったのは、多分元の姿である今の姿で俺を散々にした事だっけ思った。

現にそれを知った俺は、耳まで真っ赤になってしまったのが京にも分かってしまったし。：。「K' と、喧嘩する訳じゃないよ。だけど、俺はK' の事大好きだっけ言うの知っているのに。」
「ごによごによと話してしまっている京の体を後ろから抱きしめた。別に理性を爆発した訳じゃないし、このまま京と喧嘩したって何にもならない事ぐらい俺が良く分かっているから。それに、ロツクさんにかかわれるのなんて何か嫌だしさ。しかも、真顔のまま横目で見られたら何にも言えないじゃん。」

「人の家においてこんな事を言うのはなんだけど、目の前でいちゃつかないで下さい。思わずコーヒー、吹きこぼしそうになったじゃない

いですか。」

食べ終わって京の入れたコーヒーを飲んでいるロツクさんが、俺らの方を見て呆れてしまったのが分かったけど京に抱きついていいるのは何が何でも止めてたまるか。

「そう言えば、来年って言うか後何分かで今年になっちゃうけど春から首輪を着ける事になるって言われてて義務って言うか強制だつてさ。」

国の方から配布されたプリントを読みながら、コーヒーを飲む社さん。

「え？」

当然ロツクさんを寝かせてから今まで一度もプリント類を見ていないから俺はそういうのは知らなかったし、強制的に着けなくちゃならないって聞いて正直驚いている。

「なにになに？」この首輪は、死ぬまで解除出来ない。ただし、自殺・他殺は解除の対象にならない。』だよ。つまりこの2つ以外の死亡方法で解除になるんだとき。それに、『一人100体以上のゾンビと戦う事。もしくは、強姦犯を捕まえる事。』って書いてあるぞ。」

これには、ロツクさんも驚く。

「『警察が頼りにならなくなった』って書いてあったんだけど…。」京も一瞬驚いて、そのプリントを見る。さらにそのプリントにはこう書き記されていた。

「『国から無断で出たり逃走した者や、無理に解除をすると首輪の中にある超小型爆弾が作動し爆発する。後ゾンビに強姦された者も同様とする。』だつてさ。」

じゃ、出られないって事？

「要するに、八神さんのアライバイを成立させながらゾンビを倒せて事になるみたいですね。」

勘が良くなっている俺が、真相を暴くって言っているけど実際の所

は…頭がぐるぐるしてしまっている。だって、アリバイがあったって警察の人達は八神さんを犯人だって言っている訳だし紫苑さんだって今だに自分の心の闇から出られなくなっている状態だから…。ロックさんだって、社さんの腕をぎゅっと握って体をガクガクさせているしさ。まあ、社さんから言わせれば『ラッキーッ。』だと思っただけだね。

「何をしてでも、お前だけは守るからな。」

真顔の良い声で言ったものだから、真っ赤になってしまったロックさん。

「俺だけじゃなくて、Kも守らなくちゃならないんじゃないですか？」

一瞬、うっとなってしまった社さんがロックさんの顔の近くまで顔を近づけて話す。

「確かにそうなんだけど、俺にはお前しかいないからな。」

何て、くどき文句。

見ているこっちがマジで、真っ赤になってくるし結局の所ロックさん達だって人の事言えないじゃないですか。

「ここで、くどかないですよ…。草薙さんだって、呆れてこっちを見ちゃってるじゃないですか。」

耳まで真っ赤になってしまっているロックさんを、俺は何か可愛いくて抱きつきそうになってしまったけど京が泣き出してしまうのが分かっていたし社さんにかかわれるのが分かっているからなあ。

「良いじゃねえか。それに正直言ったらお前だって、嫌じゃねえだろ?」

社さんがロックさんのお尻を触ろうとした時、ロックさんの体がビクッとなった。

まあ、いきなりの事だったからビクリしたのは事実だし軽くだったもんなあ。

「(びくん)ひゃあっ!?!」

この顔のロツクさんも可愛いなあと思いつつ、このままだったらHに突入すると思った俺は引き離す。

「社さん…いきなりお尻…触らないで下さいっ!!」
真っ赤になっちゃってしまっているロツクさんが、涙目のまま社さんを見る。

京はというと、自分の車にエンジンをかけて戻ってきたから分らないのは分かっていたし社さんの場合は低音で言うからどれもエロいんだよなあ。

まあ惚れた者の弱みって言うのもあるらしいけど、分かりやすく何か見ているとからかいたくなっちゃうんだよね。

俺って、社さんと考えは似ていると思ったけど真近くでそれをやられたら誰だってからかいたくなるよ。

しかもどつちとも、女装が似合うしさ。

それに、京ほどじゃないけど2人共もてるからなあ。

「ごめん。」

低音で社さんが謝れば、ぼふっとなってしまったロツクさんが口を開く。

「あつ…あうう。そんな良い声で、言わないでよ…。」
本当…可愛いなあ。

って、言っている場合じゃない。

後4時間で、日付が変わるって言うか年が変わるじゃん。

急いで、浴衣に着替えて神社に向かった。

神社に着いて、京と一緒に駐車場へ行つて少し歩いた。

はぐれないように京の腕をぎゅっと握って、屋台をキョロキョロしていたら一人の男の人にぶつかってしまった。

「あつ…すみません。どこか、痛めてないですか？」

自分の方からぶつかったから、謝らなくちゃならないって思ったし後で訴えられるのもなんか嫌だったから…。

見た感じ、怪我はしていなかったから少し安心だったけど多分俺と同じぐらいの年かなあ。

「大丈夫です…。」

耳まで真っ赤になっている所を見ると、この姿を見て惚れたんだなあって思った。

まあ、ほとんど人込みの中だったからぶつかってたって仕方ない事だけれど…。

俺が、ちよつと凹んでいる時に男の人の声が聞こえた。

『秦裕！！何で、ここでこけてるんだよっ！！』

もう一度京に抱きついて、りんご飴を買おうとした時にはその男の人の姿が無かった。

まあこの時の俺は、まさかあんな写真がマスコミの人以外の人に知れ渡っているとは思わなかった。

神社から早めに帰って着替えてから、仕事に出るため寮から出て車でスタジオへ向かう途中女の子が出待ちしていた。

本当は出待ちなんて禁止している事なのに、出待ちしている子を見ると俺のファンの子じゃないのは確かだ。

『何で…京様が恋だなんて…』

京のファンの子達が、俺の顔を見てにらんでいるように見えた。

前に京が『ファンの子の中に熱狂的と言うかそういう子達がいる。』って言うってたけど、こういう事だったんだ。

京も俺と一緒に人気があるのはシエルミーさんから聞いていたけどまさかここまで人気があるとは思わなかった。

『京様から、離れなさいよ。』

その言葉を聞いてすこしむっとなってしまったけど、ファンの子に手を上げる訳にもいかずマネージャーのおねえちゃんと一緒に急ぎ足でスタジオに入った。

どっちにしたって、カウントダウンは仕事の現場でする事になってるし京も一緒に仕事だからキスなんてしないしさ。

スタジオの中にいる9割のファンの子は、全員『京様LOVE』の子達だから俺を黙って見ている。
ちよっとその光景を見て、怖いと思ったのは事実で…。

男にも人気がある京は、俺以上にすごく売れていてレギュラーも10本以上の番組を持っている。

最初の頃は、羨ましいって思っていたけど現に京は相方のリョウさんと違って喋りだけは得意だって自分で言ってた。

ルックスも良くてスタイルも良いし、『次世代のファッションリーダー』って言うのも嘘じゃないんだって改めて思った。

『それじゃ、本番始めます。』

ADさんのカウントダウンが始まって、生本番が始まった。

相変わらず、ファンの子達の視線は怖いしちよっとびびるけど京と一緒に番組に出るなんて久しぶりだからなあ。

さすがに、『あんたじゃなくて、何であたし達が選ばれなかったの？』って言った時はイライラしたけど。

今は、番組の事だけ考えてよう。

番組が、中盤のCMに差し掛かる時にファンの女の子から大声で野次が飛んできた。

『死んでしまえば、良いんだ。』

誰もいなかったら、ぶつつんしていたけど番組をめちゃくちゃにしくなくかつたしなおかつ京を泣かす訳にはいかなかったから…。

90秒のCM中に、京を連れて楽屋に戻った俺。

楽屋は、ファンの子は立ち入り禁止だから来れないしイライラのまま後半のコーナーに行きたくなかったから…。

「K、どうしたの？さっきから、黙ってばかりで…。」

後半はずっと私服でのコーナーで、衣装から私服に着替える京を鏡越しに見ていた俺は後ろから抱きしめた。

「ちよ…ちよっと…。こんな…所で…だめだって。」

俺は、京の嫌がっている姿を無視して京の身体を触りながら話す。

「この身体は…俺のもんなのに…。」

ぎゅっと抱きしめている俺に、京も気付いたのか恐怖で体が震えている。

京の大きな瞳が、涙であふれているのは鏡越しで分かった。

「京…最後まで…しようか…?」

そう言う俺は、京の体を裸にして体中にキスをした。

「嫌だ…!!嫌…!!」

「その割には、京だって本当はしたかったんじゃないのか?」

これ以上に良い声で、京の中を攻めた。

さすがに、社さんほどじゃないけど…。

「っ!!」

気付いた時には、京の身体はキズだらけになっていて自分で自己嫌悪になってしまった。

京が嫌がっていたのに、最後までしてしまってもしかしたら俺は京に嫌われたのかも知れないと思っただら凹んできた。

気を失って、大きな瞳に涙が溜められていて細い身体は汗ばんでいるし大事な所は俺ので溢れてしまっていた。

俺が酷い事をしたのは事実だし、京がフラッシュバックを起こしてしまっただけ拒絶されたって仕方ないって思っているしマネージャーのシエルミーさんにビンタをされたって全部悪いのは俺なんだから…。

「K…?」

俺が京の顔を見ていた時、京が目を覚ましてこっちを見ていた。

しかも目には、まだ涙が溜められている状態。

「ごめん…。京が『嫌だ』って言ったのに、最後までしてしまっ…。」

最低な事をしたんだから、謝らなきゃならないって言うのは俺の中であつた。

「K、がフアンの子に何て言われたって言うのは知らなかったけど

イラついていたのは分かっていたしリヨウだつてオロオロしていたから…。それに…俺…中に出されたんだ…。」

「ちゃんと、処理…しないと…リヨウに疑われるなあ。」

腰痛の痛みを押しつつ、ティッシュで身体を拭いている。

身体って言うか、大事な所って言うちゃえば俺まで真っ赤になつてしまっけど。

リヨウさんにしたつて社さんと一緒に、そう言う事には鋭いから…。

「リヨウは本当に変態だから、そう言うのを知つたらにやにやすると思うしK' がイライラで俺を抱いたつて言う事が分かつたら殴られると思うんだ。俺だつてそう言うのは嫌だし、K' がキレた時何するか分からないからさ。」

京が不安そうな顔になつていているのを見た俺は、後ろから抱きしめた。

「大丈夫だよ。絶対に京の前でキレたりしないし、京は俺にとつて大事な人だからさ。」

俺が後ろから抱きしめているのを見て、京は俺の腕を軽くポンポと叩いた。

「K'…あのさ…。」

京が照れながらうつむいている姿も何だか、すごく可愛いくて俺も真っ赤になつてしまった。

「俺と付き合つている事…言えないのって…やっぱ、辛い？」

キスしたくなる衝動になつてしまっけど、ここは黙つて京の話の聞く。

「少しは苦しいつて思っているけど、俺は京を愛しているからね。」

笑顔になつて京に抱きついたのは良いけど、まだ罪悪感だけは残っている。

「でも…俺は、京に酷い事をしてしまつたんだから…。」

「気にしないで…。俺、K' が苦しんでいるのを黙つて見ているの

って嫌だよ。それに俺は、K'が愛してるって言うてくれただけで
すごく嬉しいよ。番組とかで、言えないって言うのも知っていたし
隠さなきゃならないって言うのも分かっていたから。」

「京…。」

京とリヨウさんは、大人気のマルチのタレント。俺はと言うと、し
がない2流のタレント。

それだけでも、ファンの子達は落差をつけてくるしもし付き合っ
ている事が分かったらカミソリレターは来ると思っているから…。

「大丈夫だよ。お互いの事務所の社長には交際を認めてもらっ
たし、公認してもらったけどやっぱり複雑だよ。俺だって、女の子の姿でK
'と関係持つちゃったから。」

もごもごした京が、更に口を開く。

「でも、後悔だなんてしたくないし大好きだから…。」
俺だって、京の事大好きだよ。

理性は飛ばなかったけど、本当に京は可愛いなあって思ったし大好
きなのは嘘じゃないから…。

確かに、俺だってHの時拒絶してないよ。

相手が京だって事があるんだけど、何だか安心出来るんだ。

『本当にあいつら、何しているんだか。』

京の事務所の先輩であるソワレさんが、楽屋の外で叫んでる。

聞いた感じ怒っていい事は、確かなんだけど本当に怒った時のソ
ワレさんは誰よりも怖いのは知っていたから…。

「K'のが大きくて、制御する気が無いのは分かった。分かって
いたけど、答えられなかったから…。マスコミの人のせいで、K'
とこんな事になったって仕方ない事だから…。」

現に楽屋の外には、ソワレさんもいるし…。

「だけど、一つだけ…聞いてくれる？」

京の顔をまともに見られない状況なのに、京は俺の顔を見て話を続
ける。

「何？」

俺が、首をかしげていると京は少し困った顔で見る。

「K' がイライラするのは分かっているし、仕方ない事だっと思ってる。だけどさ、イラついている時にHして中に出されたら俺…体が…持たないよ…。確かにK' とHするのは、嫌じゃないよ…だけど…何か苦しいよ。」

処理したはずの京の体は、今もなお感触が残ってしまっていて京自身もショックが大きいらしい。

マキシマと八神さんにあんな事をされた恐怖と俺がした事は違うって分かっているらしいけど、何か自分が複雑になっているのは事実だから…。

今だって、罪悪感に責められて来ているしさ。

自分は、京の体を傷つけたんだって…。

「ごめんね…京…。」

俺が京に抱きついた途端、楽屋のドアが勢い良く開いた。

ソワレさんと確認した俺は、ビックリして京を後ろに隠す形でソワレさんを見た。

「もうすぐ後半が始まるって言うのに、いつまで楽屋にいるんだよ。(にやり)…何してたんだよ。」

京が裸だった事と俺がいちゃついてたから耳まで真っ赤になってしまったソワレさんだったが、何の事だが分かったのかにやにやしだした。

「ほーほー。お前ら、そんな仲だったんだ。」

ソワレさんに裸を見られて京は、耳までまっかになってしまった。

「こいつがいつもと違うから、やっぱりなあって思ったんだ。」
「からかっているソワレさんがそう言つと、俺はまた不安そうになつてしまう。」

お互いの事務所の社長には、付き合っているって言う事を言っているけどタレント同士のソワレさんは知らないんだな。

俺の方がいじめられるんじゃないかなあとか、京が強姦されてしま
うんじゃないかなあとか思ったのも事実なんだけど…。
ソワレさんは、司会業が上手い人だから…。

「お前、こいつをあまり無理させるなよ？」

どうやら、ソワレさんは俺と京がHしている所を聞いてたらしく俺
は耳まで真っ赤になってしまった。

「安心しろよ。俺はお前らの仲を引き裂く訳じゃないし、わざわざ
修羅場にするつもりは無いからな。」

そう言っソワレさんは、俺の方を見てにこつと笑った。

「まあ、こいつのセクシーな声が聞けたからそれだけでも良いかな
あって。」

また耳まで真っ赤になってしまっている京は、私服に着替えてこっ
ちを見た。

思っている事は一緒だったのは分かったし、京の場合はこれに恥ず
かしいって言う感情まであるからなあ。

「あーあ。これでこいつも、K'のもんかあ。事務所一可愛いから、
俺：狙っていたのに。」

ソワレさんがそう言っつと、頬をふくらませて京がいじけだした。

「俺：絶対に、ソワレのもんにならないもん。」

でも真っ赤になったままだったら、説得力ないよ？と思っつても京は
可愛いって言うのは変わりないけど…。

「はいはい。ごちそうさま。」

感触が残っているから少し歩いただけでも、真っ赤になってしまっ
たのは事実で案の定京はソワレさんからかわれる事になってしま
った。

「もしかして、中に出されたのか？」

ソワレさんにそう言われると、耳まで真っ赤になったままの京が首
を縦に振る。

そのやり取りを見て、俺まで真っ赤になってしまった。

つられたって訳じゃないけど、全くその通りだったから言葉にならなくて照れるしかなくて…。

言葉にストレートに言ってくるから、真っ赤になってしまったのは当たり前だって思っているし俺が京とHしていたのは事実なんだから。

「ちゃんと、処理したのかよ。」

からかい半分にマジな話半分になっているのは、すぐに分かった。

別に俺が、サイコメトラーだからじゃなくてソワレさん自身がすぐに顔に出してしまう人だから。

俺も、人の事言えないんだけど…。

「俺…K’の事、大好きだもん。」

テレながら俺の顔を見ているのを確認した俺は、京の顔を見てキスをした。

また、ソワレさんに「にやり」されたけどこのままだったら京は真っ赤になったまま泣き出すと思ったから…。

まあ…キスしたって、照れるだけなんだけど…。

正直言っちゃえば、泣いている京の顔を見ていたって言うのもあったし…。

俺って、変態なのかなあ。

「K’…ここで、キスしたらダメだって言っただじやん。」

真っ赤になって、頬をふくらませている京も可愛いなあ。

「俺…。京を離したくないから…。」

俺がそう言つと、また「にやり」されたし京だって真っ赤になっちゃった。

「俺だから良いけど、流星にバレてみる。キヤーキヤーって言われて大変な事になるぞ。」

流星って、ナガセさんの事だよな。

「大丈夫ですよ。ナガセさんの腐女子は、いつもの事なんで…。」

つい2時間前に、京は後ろの席でナガセさん達にいじられてた。生本番が始まって10分も経っていないのに、いじられた京は半べそをかいてしまつて前半を終わった。

んで、中ぐらいまで来てファンの子からの野次でイライラして京を犯してしまつて今に至る。

考えただけで、凄くブルーになるんだけど…。

「今の状態って言うか、H中の時に流星に見られたら今頃面白くなつていたのに…」

そこまで俺だつて、馬鹿じゃないです。

京が泣いてしまつのが分かっていたし、絶対に見せられないと思つていたから。

それに、京が拒絶したら何にもならないけど。

「後は、ロックと社の所だな。」

どうやら、ソワレさんはロックさんと社さんが付き合っている事を知っているって言うか感じていらしくて首を傾げてしまったらしい。

「止めてくださいよ？そんな事したら、社さんに説教されますから。」

社さんは一旦怒ると、先輩後輩関係なく説教してしまうから…。

実際には、ソワレさんが先輩なんだけど…。

「ソワレ…さん？この事言う気じゃないですよね。」

不安そうな顔で京が、ソワレさんの顔を見ている。

「生本番だつて言うのに、言ったら大変な事になるし言ったら最低だよ。俺だつて、嫌なのに…」

京が不安になっているのは、俺には分かっていた。だけど、俺自身だつて結構不安になっている事だつてあるのは事実だしさ。

「京…。」

「俺はさ、ソワレさんと七枷さんが仲が悪いつて言うのは知ってい

るけど目の前でバチバチ状態になるの黙って見ていられないよ。苦しい思いをするのは、俺達だけじゃないんだからさ。」

京の言っている事は、知っていたし分かるよ。さっきの本番中の時だって危なく殴り合いになりそうだったし、俺自身だって京のファンの子達に野次を飛ばされてイライラしていたからキレそうになったし…。

まあ、その反動でって言ったら京が泣き出すかも知れないんだけど犯して最後までしてしまったのも事実で本当なら探しに来てくれたソワレさんに説教されなきゃならないんだよなあ。

でも俺のを入れて感じちゃってイッた京の顔も可愛いなあって思ったのは事実で、あんな顔をさせれるのは俺しか居ないんだなあって改めて思った。

気付いた時には、また俺の下半身は大きく変化しそうになっていて京は真つ赤になって俺の顔を黙って見ている。

「ソワレさんが居るのに、ここでまたHする気？」

不安がっている京を尻目に、にやりとしたソワレさんが乗り気だったらしく自分のズボンを脱ぎだした。

「い…いやあ…。こんな、不条理すぎるの…嫌だあ…。」

当然泣き出した京に、俺は苦し紛れに口を開いた。

「確かにまたしようとしてたのは、謝るよ。だけど、まさかソワレさんがそういう人だっと思っていなかっただから止めたんだ。拒絶する事だっけ分かってたし、社さんからの説教を聞くのなんてごめんだからね。」

「何でだよ。俺にだって京の体を触る事、良いと思ったのにさ。お前だけ、ずるいぞ。」

ソワレさんが泣いている京の体を自分の方へ引こうとした途端、体が震えてしまった京。

「触らないで…嫌だあ…。」

それでもまだ止めようとしなないソワレさんに、俺も止めただけそれ

より先に京の絶叫。

「俺…K'じゃないと、嫌だあ!!」

一瞬京の髪の毛は、金色に光りだしたけどまたすぐに黒い髪に戻った。

「拒絶するなよっ!!」

京が泣いているのをこのままにして置けないし、ここは京とリヨウさんの楽屋なんだぞ。

まあ、ここでHしてしまったから説得力もあつたもんじゃないけど…。

「嫌だあ…K'う…助けてえ…。」

ゴン。

このままだったらちが着かないと思つたし、京が泣き出してしまつているから近くにあつた生本番の台本のカドで頭を叩いた。

「いてえ。」

この場合、ソワレさんの方が先輩だけど仕方ないって思つたし何で後輩が嫌がつているのに止めないって言うか自分でセーブかけれないんですか。

文句言つたつて人の事言えないんだけど、俺も…。

「自業自得です。」

京が完全に怯えているのに、このまま俺が止めなかつたら最後までしていたんじゃないのかなあつて思つたらちよつとイラついて来たけど京だつてトラウマが起こつてしまつたら何かと厄介事だつて分からなかつたとは思えなかつたし。

「いつまで、京に抱きついてるんですか。」

色っぽいのは、Hの時だつてそうだつて思つていたけど理性の枷取れるの速すぎです…ソワレさん。

「俺じゃ、ダメなのかなあ…。」

京には『イライラしている時には、Hしないで』って言われていたけどソワレさんの行動を見ていたら自分の理性が壊れそうになった。

「K' が相手だったら、俺に勝ち目無いわ。」
まあ、確かに10分前に俺は京と最後までしちゃったばっかしたっ
たし嫉妬してる場合でもないって思ったのも事実だったから。
ソワレさんの相方であり弟さんのアルバさんの耳に入ったら最悪だ
ぞお。

そう言うて去ろうとしたソワレさんに少しホツとしたのもつかの間、
京の腕をぎゅっと握って楽屋の外に連れて行こうとする。
当然京は泣き出すし、俺は止めようとした。

だけど京の腕を握っているソワレさんの力が強すぎるから、なかな
か引き戻せない。

「トイレ、行こうか。」

楽屋の近くにあるトイレに京を押し込めて、中からガタガタと音が
する。

多分って言うか絶対に、ソワレさんが京を犯しているんだと思うと
飛び降りしたくなってくる。

大声で、俺の名前を叫びたいって言うのも事実で…。

「ふえ…え…。ケ…K'…う…。」

京の意識は、段々と無くなりかけているのはすぐに感じた。

「京っ！！」

俺がトイレのドアを開けた途端、そこには全裸のままソワレさんの
を受け止めている京の姿があつて…。

「ケ…K'…う…。K' にい…こんな姿…見られたくないよ…お。」

ソワレさんのを飲み込んだまま、京の体がビクンビクンとけいれん
した様になってしまう。

その光景を俺はただ黙って見ているだけで、何も出来なかった。

「ふ…う…。ん…んんっ…！！」

「ち…ちよっと…きついじゃねえか…。中に…出すぞ…。」

ソワレさんに中出しされた途端、京の体は上下に動いた。

「嫌…嫌だあ…。あふつうっ…!!」

複雑な思いになっているのは、さっきまで俺のを飲み込んでいた京のソコは今はソワレさんのものを飲み込んでしまっている。

本当は殴りたいって思っていたんだけど、そんな事したら京だって泣き出すと思っていたし俺と京がHをしたってバレてしまっから…。

立て続けに京は2回もH…最後はレイプだったけど、とにかく2回もしちゃっているから立てなくなるのは当然だって思ったし今だって体がガクガクとしているんだから…。

「いっぱい出たなあ…。お前のココ、凄く出てるぞ…。」
中に出した途端すぐに抜いたのが、京の大事なトコから溢れ出してきた。

「や…あ…もう…う。」
大きな瞳から大粒の涙が流れたのを見て、俺はすぐ近くにあった京が持つて来た私服の服だけを着せて後の服とかを持って俺の楽屋に連れて行った。

誰が来たって構わないって思ったし、京がこう言う状態でスタジオに入ったならそれこそリョウさんやファンの子達に何て言われるやら。
「K…もしかして…怒ってる?」

京を抱えている腕が、精液でベタベタになっているのを構わず歩いている俺に京が心配そうな顔になって見ていた。

「怒れないよ…。第一、俺だって京とHしちやっただから…。」
冷や汗が流れている今の状況の俺に、京は笑顔になる。

「俺…K」と一つになれたのは嬉しいし本当だよ。だけどすぐに、ソワレさんとあんな事になっちゃってゴメンって謝らなくちゃならないのは俺の方だし自分で『浮気しちゃ、嫌だ』って言ったのに破っちゃっただから…。」

また大きな瞳には、大粒の涙が流れて来たのを確認した俺はこのま

ま放置するなんて嫌だったから京に対してのスマイルをする。
だって、京が悪い訳じゃない。

悪いのは、拒絶したのに無理矢理ヤツてきたソワレさんの方だから……。

「京…なんか食べる？」

辛いと思ったのは俺だって分かっていたし、このまま説教されるのなんて真っ平ゴメンだ。

俺は、手と腕を洗って近くにある俺のカバンを取って中からガムと軽いお菓子を出した。

いつもお姉ちゃんが持っている方のカバンだったし今日はたまたま、俺の方に放置されていたからそのまま京に中のものを選ばせた。

京の体は、俺としたHの感触よりつい12分前の感触がプラスされて体がだるいみたいだった。

男としてはすごく腹が立つ事で複雑な気分だけど、人の事言えない立場って言うか状況だし京の体がボロボロになっているから残り一時間半で回復するかなあって不安にもなる。

回復しないでスタジオに入った場合、社さんには『にやり』されるしリョウさんには思いつきりキレられるかも知れないって言う事だけ頭に残しとこう。

「K'？」

お菓子を出してから、ずっとぼけーっとしていた俺に京は首をかしげて俺の方を見た。

「どうしたの？もしかして、俺とHした事…後悔してんの？それとも、ソワレさんと目の前で強姦された事にイライラしてたの？」

イライラしていた訳じゃないし俺は、後悔なんてしてないよ。ただ、ちよつとだけ罪悪感になっていたのは事実だけど…。

「イライラしてないよ。…選んで。」

京がカバンの中からチョコを出して、食べ始めた。

「（もぐもぐ）K'って、俺の好み知っているよねえ。」

それだけでも理性が飛びそうになっているのに、さっきの事もあるから黙っていた。

「俺の体：後一時間で、回復するかなあ…。」
不安そうになっっている京の顔を黙って見ている俺は、もう一度軽くキスをした。

京は、着替えを終えて真っ赤になりながらチョコを食べている。

「俺：回復しなかったら、何て言われるんだろう…。」
体を震わせてしまった京の体を抱きしめて、一緒に座った。

京が落ち着いて10分後、ADの人に呼び出されて歩きながら訳を話した。

勿論、『ソワレさんが京を強姦した本当の理由』をリョウさん達には言わない事を約束に。

スタジオについてまず俺達がしたのは『椅子取りゲーム』。

腰が痛い事を隠している京を少し心配して、ゲームを見ていた俺に拳崇が近くに来て話し掛けてきた。

「どないしたん？何か、いつものお前らしくないやん。」

ここで『別に』なんて言ったら疑われると思ったし、こいつもどっちかと言ったら鋭いからな。

まあ、社さんみたいにすぐ『ニヤリ』する訳じゃないから良いんだろうけど…。

京だって、ほとんど回復したって言えば本当なんだし俺だってさっきまでちよつたるかつたんだから。

「京って、運が無いって言うか悪いからさ…。」

自分のチームの応援もしないで、俺はずっと拳崇と話していた。

まあ、同じチームの人に思いっきり横目で見られましたけど。

『お前も何で他の人と話してて、応援しないんだよ』って…。

仕方ないだろう？こっちは京の事で、頭がいっぱいだったんだから…。

「まあ、京の事で心配になっているのは分かっていたけどさ。」
社さんには、思いつき『にやり』されたんだけどね。

「京!?!」

京が倒れたのを確認した俺は、京を抱きしめた。

スタジオ内はざわついていてスタッフも司会者の人も、てんばって
いたし…。

まあ、このざわつきは5分もかからなかったんだけど…。

「気失っている。」

京をお姫様抱っこで持った途端、ファンの女の子達から悲鳴が…。

そんな事に構ってられない状況なのは、周りにいたスタッフにも
分かったらしい。

「すぐに休めさせないと、立てない状況になるぞ。」

そう言われて、俺は京とリョウさんそしてロバートさんを連れてス
タジオから出た。

京の部屋で、料理しています。

ここで、社の【女装男子大好き】って言う性癖が出てしまいます。

正直、自分の性格とダブっちゃってます。^^:

.....

次回予告

作者「大晦日早々、らぶらぶじゃん。」

K「また、からかう。」

京「(あうあう)」

作者「だって事実、じゃん。」

次回、18話。.....夕刻.....

京きやうが倒たふれて、ちよちつと亮あきらさんにももにらまれた。

スタジオにいた女性陣に、「ききゃゃーきゃゃー」って大騒おほさわぎで楽屋がくやに行いくまで時間じかんが掛かかってしままった事ことと俺おれがついてて何なにしてんだんだって説せつ教きやうされた。しかも、スタジオにいた女性おんなのお客きやくさんにも「ききゃゃーきゃゃーきゃゃー」って言いつていたし...。^^:

だけだけど、ここっちは芸人げいじんだから【おおいいしい】って思おもっちゃええば良よいんだけだけど肝心かんじんの京きやうがちよちつと凹へこんでいるんだよなあ。

スタジオから出て俺が京をソファに寝かしつけてから、京の相方さんであるリヨウさんに話し掛けられた。

リヨウさんとそんなに言ったら悪いかも知れないけど、そんなに話した事もないし事務所が違っても先輩だから俺の方が気を使ってしまうのが事実で。

「これ、どういう状況だよ。」

言動からそんなに怒っていなくて普通の表情だったのか、少し安心した俺にロバートさんが余計な事を…。

「Hしたんやね。」

案の定、リヨウさんの顔が少し険しくなったけどすぐに普段のリヨウさんの顔になる。

自分の相方である京が今の状況だし気絶する所を見ているから大きな声を出せないでいるのは分かっていたし黙って京の顔を見た。

「リヨウだって、知っとるはずやで。京ちゃんとK' が付き合っている事ぐらい…。お前だって少なくともたつて相方やもんね、どういう状況かって事ぐらい分かってはるはずやもんね。」

ロバートさんが京と俺の顔を見て、苦笑しだしたのも分かっていたしロバートさんとは事務所が一緒に先輩だから余計に気を使わなくちゃならない状況なのは変わらない。

「ただ、ロバートさん自身は『気を使わなくて、ええよ。』って言うてくれたからちょっとは崩しているんだよね。」

「相方やから、今更『知りませんでした』って言うのは無しやで。お前がK' 以上に京ちゃんと一緒にいる事が多いんやから、このまま放つて置くんなんてお前だって本当は嫌なんやろ?」

ロバートさんは、リヨウさんと幼馴染だからリヨウさん自身の気持ちも俺らが今陥っている状況だって分かっている。

はつきり言ったら、マネージャーであるお姉ちゃんやシエルミーさん以上に詳しいんじゃないだろうか。

まあ、俺は少しほっとしているのは事実なんだけど。

さすがに『Hしたのか』って言われた時は、ちよつとドキツとしたけど…。

凶星だったし、肝心の京が耳まで真つ赤だったからロバートさんもそれ以上は聞かなかつたしさ。

「俺だつてそれは、分かつているよ。今更、本名の『浜崎 亮』に戻したくないからな。相方である俺が、京を信じなくてどうするんだよ。」

リヨウさんやロバートさんに、あんな辛い京の顔を見せてしまったから俺はちゃんと事情を話そうつて思った。

京が泣き出すかと思つたのは少しはあるけど、覚悟を決めたのは事実だつたし俺と京がHしていたのを除いて話した。

「実は…京、ソワレさんにレイプされたんです。」

俺がそう言い切ると、リヨウさんの顔はさっきの顔から怒りの顔になつた。

「事務所が違つても、ソワレさんの方が先輩だつて言うのは分かつていたけど何で後輩を強姦する事があるんですか？」

リヨウさんは、感情をすぐ出す人でその光景を見てしまった俺らはちよつとびびつてしまつけど呆れと怒りが来るのだつて分かる気がする。

今はもう慣れたけど、最初の頃は怖かつたのは事実で…。

普段のリヨウさんは敬語で話すけど、キレた場合は乱暴な言葉を使つて言うのは京から聞いていたけどマジで怖い。

リヨウさん自身は、相方とか仲間の事を考えての事らしいけど…。

「俺…ソワレさんを殴ってくる。」

そう言つて怒りに任せて、ソワレさんをスタジオの外へ呼び出した

リヨウさんがいきなり殴った。

突然の事だったから、俺もビックリしたしロバートさんだってビックリしちゃっている。

「止めや。京の事で、お前がキレたって何にもならんやんか。」

ロバートさんがリヨウさんを抑えると、じたばたしだした。

「相方だからキレるのだって、当たり前だろうが。こいつだって、本当はキレたいって思っているんじゃないのか。」

「だからって、殴って良いっていう事なんてないやろ。」

ロバートさんがそう言つと、じたばたしていたリヨウさんの足は何とか納まった。

「相方が事務所の先輩に強姦されて、黙って見ていられる訳なんてないし苦しんでいるこいつの顔なんて見られないよ。」

やんわりと少し低音気味に語ったロバートさんの言葉とリヨウさんの言いたい事の理解に俺は、身震いを覚えた。

「けどよ、本当は…気持ち良かったんじゃないの？」

京が泣き出すって分かっているのに、何でそんな事言うんですか。

リヨウさんだって、自分の怒りが収まらなくなってしまっているのは俺だって分かっていた。

「それじゃなかったら、あんなに俺のを受け止めなかった訳だしイツた顔も感じている顔も凄く色っぽかったしさ。」

俺がキレる一步前まで来た時、リヨウさんがキレた。

「お前…良い加減にしるよっ!!」

リヨウさん自身、普段は優しい人なのにキレると先輩後輩関係なく呼び捨てになる事は京から聞いていたし例えお偉いさんでも構わないからちよつと怖くなってしまう。

「人様のものに手え付けといて、自分のものにしてるんじゃないやねえよ。こいつが一番辛い思いをしているし苦しい思いをしている事ぐ

らい、お前だつて分かっているはずだよ。」

この口調に、先輩であるソワレさんも段々キレだした。

「だつてよ。京のあんな声、生で聞けるんだぞつ。第一『お前』ってなんだよ。俺の方が、先輩なんだぞつ。」

殴りそうになったリヨウさんが、口を開く。

「先輩後輩関係ないじゃねえか！後輩だからって、犯しても良いって事ねえよ！！」

スタジオまでは響かなかつたけど、楽屋は大騒ぎになった。それでも京は俺に寄り添いながら、身震いをしてたしロバートさんがすぐに止めて人が増える事なんて無かつたから…。

「その割には、敏感だつたじゃないかよ。」

京が大泣きするって分かっているのに、何でそんな事を言うんだろ。

「だつて、止めてって言っているのにソワレが最後までするからっ！！」

京の目には、大粒の涙が…。

「京だつて、俺のを受け止めて『もつとお…』って言つてたじゃねえか。」

また京に抱きつこうとした時、リヨウさんがソワレさんの頭をめぐけてとび蹴りをした。

「あだっ！」

「まだ言うか。京の状況でも、見る。最後までされて中に出されて…。今だつて処理できなくて、今だつて凄く辛いんだぞつ！！」

京の叫びが一瞬響いたけど、この騒動には誰も気付かなくて…。

「ソワレに強姦されて…感触、覚えちゃって…責任とってよっ！！」
激痛に襲われている京の腰を、俺はゆっくりと抑えた。

「今だつてK'におさえて貰えなきゃ立ってなくなっているのに、こんな風にさせたの…ソワレのせいだよっ！！」

ソワレさんも俺も、黙って京の顔を見ているしかなくて…。

「俺…浮気しちゃったよお…。」

また余計な事をソワレさんが、話してしまう。

「それって、K'より俺の方がHがうまいって事じゃん。」

リヨウさんも、もう一度頭を叩く。

「いてっ。だけど、誘ってきたのは草薙…お前の方だぞっ。」

「だからって、京のせいにしないで下さい。」

俺も我慢が出来なくなっって、リヨウさんの替わりに頭を叩いた。

「お…お前だっって、可愛い京の顔を見たら理性が飛ぶだろうが。」

京が傷ついているのは分かったけど、正直に言ったらそう思っっちゃったんだよなあ。

だけど、今はそんな事も言ってもらえない。

「今はそんな事、どうだっって良いんじゃないんですか？」

京が、体をガクガクしているから俺だっって怒りたいと思っっているのも京だっって分かってはいるはず。

これも全部、ソワレさんが京をレイプしたせいだ。

「K'…あのさ。」

京が、上目使いで俺の顔を見てきた。

理性は爆発しなくて良かったっって思っっていたけど、京が真剣な顔をしているのが分かった。

それも、元の姿である男としての体じゃなくて女の子としての体のままで…。

「ん？何？」

「カウントダウンが終わったら、キスして…。」

京のこの言葉に俺は、耳まで真っ赤になっってしまった。

断る気だっって無かったし、どっちにしてもちよっつと暗くなるから観客席からは薄暗いし…。

京が可愛いのは、多分生まれつきなのかなあっって少し思っった。

元の姿の状態だったら、男っぽくてかつこ良いのに女の子の状態だったら何でこんなに可愛いんだろう。

そんな思いのまま、京をつれてスタジオに入る。

もちろん、こてんばんに説教されたソワレさん達も一緒に…。

スタジオに戻って席に座った俺達に、司会の人はい心配してちょっと話し掛けられたけどさすが芸人。

そこは、笑いで切り替えた。

素直に『ソワレさんに犯されて、大変な事になってました』だなんて、絶対に言えないし…。

司会の人モニターを見たとき、俺はとぼけた顔で京の手を軽く握った。

ファンの子達にも見えなかったし、周りだってある程度暗かったからちょっと分からなかったらしい。

肝心の京は、俺の顔を黙って見て真っ赤になっている。

何か困っている顔の京も、なんだか可愛いなあ。

「これ以上、他の奴等に京の体を触らせてたまるかよ。」

俺も京も真っ赤になってしまったけど、言っている事は嘘じゃない。

「京の体は…俺だけの、モノだ。」

本当は真っ赤になってない方が説得力があるんだけど、そうも言っられないしキスしちゃえばこっちのものだけどリョウさんに睨まれるのだけは絶対に嫌だ。

しかも、俺の真後ろに京を強姦したソワレさんがいる。

だからこそからかわれるから、キスも出来ない。

八神さんも警察署からまだ出られないし、八神さんの所属している事務所ではまだ何とも言っていないのが現状で…。

八神さんのファンの子達は八神さんの休養が本当の意味を知っているから署名運動もはじめているし…。

あれから、紫苑さんの精神状態も少しは落ち着いてきた。

一時は『自殺する』『しない』って言う状況まで言ってしまったって、大変だったしこのまま八神さんが出てこなかったら性欲の方はどうなっちゃうんだろう。

でも、紫苑さんは八神さん一筋だって言っていたのは嘘じゃないはず。

「そう言えば、昨日から今日の朝まで紫苑と一緒にいてずっと犯してたなあ。」

生本番でやり直しが聞かないのに、何で今その事を話さなくちゃならないんですか。

道理で、生本番が始まる時から紫苑さんの様子がおかしいと思ったらそう言う事だったんだなあ。

元々、腰痛持ちだったって聞いてたのにソワレさんは何をしでかしたんだか。

「ソワレさんも、懲りない人ですよ。あれほど京の事で説教されたのに紫苑さんを強姦したんですか？八神さんって言う彼氏がいるって言う事ぐらい、事務所が違ってたって知っているはずじゃないんですか？」

司会の人の所に集中している音声のおかげで、少しぐらいの声をさせるからひそひそ話みたいになっちゃうけどちゃんと言わなくちゃ。

「だってよ。紫苑の胸、凄く大きかったし胸のはだけた巫女服なんて着られたら誰だって理性爆発するだろうが。第一、ハーフだし可愛いし……。」

京が身震いしだしたのを確認して、俺はさらに話す。

「だからって、他の人の彼女を『ただく』って無いんじゃないんですか？」

リヨウさんじゃないけど、ちょっとイラついてきた。

「八神としばらく、Hしてないって言ってたしあんなに可愛い顔

が俺のでみだれているのを見てさ止めれなくなっちゃったんだよ。それに感じている時の顔だってイク顔にしたって泣き声みたくなくて可愛らし…。」

八神さんが聞いたら、殴られるの分かってて言っているのかなあ。八神さんだって、紫苑さんの彼氏なんだから。

「大きい胸ってば、縦に動いたりしてたしさあ。」
暗がりの中とはいえ、握り拳を作ってしまった俺。

カウントダウンの映像がモニターに映っていくのを見て、今年も終わりだなあって思いながら俺は隣りにいた京の左手を黙って握った。

京は、その光景を見て耳まで真っ赤になってしまった。

さっき、京は『カウントダウンが終わったら、キスして』って言うていたけど俺だって耳まで真っ赤になってしまっしフアンの子だってまた『キヤーキヤー』と騒ぐのだったって分かっていたから…。

それに先輩だっているし、スタッフだっているから出来ないよ。京の調子だってもまだ本調子じゃないし、現に俺の右側には京を犯したソワレさんがいるんだから。

「紫苑さんが、泣き出したらどうするんですか。ちゃんと責任、取れるんですか？」

ヒソヒソ話で少し俺が怒ると、冷や汗をかき始めたソワレさん。

「責任は、取るけど…。」

俺の方を見れないソワレさんを軽く無視した俺は、モニターを確認した。

『残り、一分ですっ！』

ADさんがカンペで、残り時間：秒数を示した。

「言い訳だけど、あんなに感じているし紫苑を可愛いつて改めて思ったし何度も攻めてイカせたんだ。大事な所を何度も攻めたら自然と紫苑だって、答えたしさ。」

殴りたいと思っただのは事実だったけどなおも、ソワレさんが話を続

ける。

「最初は嫌がっていたけど、何回も中出ししたし紫苑だつて泣いていたしさ。」

「ただ、生本番だし京がいるから取り返しの着かない事になっちゃうから黙っていた。」

「紫苑の奥までずっと入れていたし、入れる前に口と指で思いつきり味わったけどな。」

我慢できない状況になっているのは、京だつて分かっているはず。

正直に言えば京だつて、殴りたいと思つているのは俺だつて分かっていたから。

「ただ、京自身の調子が本調子じゃないのは京本人も知っていた事だし…。」

「紫苑さんに、聞いてみますよ?」

俺がそう言うと、黙ってしまったソワレさん。

カンペを見た俺が残り30秒を確認して、京の左手を握り返した。

京の顔は、また真っ赤になってきてうつつむいてしまった。

暗がりだったから、ファンの子達には見えないし叫ぶ事がない事を確認して少しほっとした。

さっきの騒動で、20分は騒がしかったのは事実だし京が真っ赤になつているのはマジで可愛い。

さすがに、ソワレさんみたいに理性の爆発はしませんけど。

カウントダウン中、京に寄り添って抱きついた。

さすがにファンの子達は驚いてはいたけど、さっきの事じゃないからすぐおさまった。

本当は、キスしたかつただけだね。

当然の事になつてしまふけど、ファンの子達だつて俺と京が付き合つている事ぐらい知つていて欲しいと思つたしまたさっきみたいにイライラするのだつて嫌だから。

敏感だから、すぐに凹むんだし…。

まあ、はたから見て『のろけ』だって言っちゃえばそれまでだけ…。

「元旦早々、美味しい所持っていくなよ。」

カウントダウン終わりで席に戻ろうとした時、デュオロンさんが俺と京に話し掛けた。

デュオロンさんは京の同期の芸人さんで、もちろん事務所の先輩。声優の仕事もしていて声には、自信があるって聞いた事がある。

京ほどじゃないけど、人気もあるらしい。

まあ、普段のデュオロンさんの姿を知っているけど、『ドジで能天気おばかちゃん』なのは知らない人は多いみたい。

それ以前に、デュオロンさんは『超ドS』だという認識が先に来ちゃっただけだね。

自覚していないから、認めていないらしいけどそこがデュオロンさんらしいって言っちゃえばその通りだけだ。

「紫苑。ソワレと、Hしたんだってな…。」

何でこんな時に、場違いな事を言うんですか。

シヨックを受けて紫苑さん、泣き出してしまったじゃないですか。

司会の人はおろおろしだしたし、ガッツポーズをする人だっていた。

まあ、正月早々また盛り上がったのは言うまでもなかったんだけど…。

「どうせ、胸を見まれながらイツたんだろう。」

泣きながら真っ赤になった紫苑さんの顔は凶星だって思ってしまったけど、京の事を考えてちよつとむつとまった。

ソワレさんが強姦されたのは紫苑さんだけじゃなくて、京だってそうなんだから。

京の場合は、ソワレさんに女の子みたい（じゃなくて今のかっこだけど）に激しくされて始めてを奪われた形になってしまったけど…。

俺が京の姿を見た時、京の姿は白目を向いた瞳に体は汗ばんで大事な所はソワレさんの精液が流れ込んでいた。

その光景を見た俺と、話を聞いたリョウウさんが説教したのは40分前。

俺以上に京だつてイラついているのは、分かつていた。

リョウウさんがキレそうになった時だつて結局は、俺とロバートさんの2人で止めたんだから。

どっちにしても傷つくのが分かっていたし、黙っていたけどもう限界だ。

相手が違うから、八つ当たりだけけどこの話をしだしたのはデュオロンさんだし何とかしても紫苑さんに謝ってもらわないとダメだからそれから、ソワレさんにはちゃんと謝ってもらわなくちゃ。

「デュオロンさん？正月早々人を泣かすの、止めてくれませんか？」俺がちよつと大きな声でデュオロンさんを怒ると、黙ってしまった。

「悪い。」

「本当に悪いと思ったなら、紫苑さんに謝ってください。」

音声さんが来ていないのがちよつと良かったけど、紫苑さんも京も身震いをしだした。

京は、2時間前に紫苑さんは20分前にソワレさんに強姦された。

しかも、中に出されたし…。

現にデュオロンさんが、そう言う事を言ったせいでまた泣き出してしまった紫苑さん。

まあ、ざまあみろって思うんだけど。

「K、？」

京が涙目で、俺の顔を見ているから俺は京の顔に手をかざしてキスしそうになった。

急な事だったし、京はきょとんとしていたからまたキスしようかなあって思っていたけど一気ににぎやかになったので京の顔から手を

離れた。

「どさぐさにまぎれて、何キスしようとしてるんだよ。俺、『キョトン』ってなっちゃったじゃん。」

京がまた耳まで真っ赤になって、俺の顔を見た。

リヨウさんが一瞬きよとんとなってしまうけど、何をするか分かったのか思いつきり睨まれた。

いちやつくなつて言いたいのは分かっていたけど、何にも言えなかったから黙って見ていたらしくて…。

まあ、耳まで真っ赤になっている京の顔も可愛いなあって思うと理性が爆発しそうになるけど我慢した。

「京…凄く、可愛いかも…。」
つつこもつとしたボケのリヨウさんが、鼻を抑えている。

どうやら、理性が飛びそうになっているのは俺だけじゃないみたい。「リヨウさんだって、人の事言えないじゃないですか。」
にやにやししながら、リヨウさんの腕を軽くつついて顔を見る。

当然自分の相方のリヨウさんが、そう思っていたなんて知らなかったからまた真っ赤になってしまった。

「まあな。だけど、俺は京を犯すなんてしないからな。」
それは、俺だって分かっています。

リヨウさんの性格で強姦魔だったら、しゃれにならないもんなあ。俺だってリヨウさんの事を、尊敬しているんだから…。

「確かに、パオとか可愛い過ぎて襲いそうになったけど…。」
そうになったって事は、理性が爆発しちゃったって事ですよね。パオさんは男性だけど、仕草は女の子だからなあ。

「結構、変態なんですね。」

俺がそう言つと、凶星だったのか言葉に詰まるリヨウさん。

「ヴっ。」

やっぱり。だけど、リョウさんの言いたい事：俺にも分かっていたしすぐにリョウさんが言い訳に近い事を話す。

「だって、クリスとかパオって可愛い方に入るだろうが。」

可愛いって言うのは否定出来ないけど、自分より年下はそう思っていたんだなあ。

「でも、ユリは別だからな。あいつはどっちかと言うと、おばさんだから。」

お兄さんだから許せる言葉でも、俺が言ったらめっちゃめっちゃ失礼なんだけど…。

そりゃ、仕事する事もあるけど赤の他人だもんな。

「おばさんって…俺と、そんなに変わらないんじゃないですか？」

実際ユリさんとは、1歳しか離れていない。

変わらない年なのに、おばさんだって言われたらユリさんだって凹みますよ。

まあ、言うか言わないかはリョウさん自身だけど。

「ユリちゃんに、失礼だよお。」

うわっ、可愛い。

姿が女の子の姿でも、普段の京には変わらないし可愛いんだけど正直に言ったら前世の記憶を持っている俺とリョウさんからしたら京の記憶を覚醒させたいって思ったのは事実だと思った。

だけど、本当の事を言ったら京自身は自分の記憶を覚醒させるのを拒んでいるみたいで…。

もしかしたら、俺が京から離れると思っっているんだと思っただけ絶対にそんな事は考えられないし離れるなんてしないから。

京の記憶の覚醒の条件を、俺自身が知ってしまったから。

「俺ね、何で前世の記憶を覚醒させないか知ってる？」

自分の理性と戦いながら、京の顔を黙って見ていると京の顔は真っ赤になった。

「俺ね：自分が、女の子だって事に気付いてたんだ。」
それは前世の反動で、京の体は女の子になってしまったせいで…。
ソワレさんに気付かれて、レイプされたのもまだ記憶にあるから。
「あと、K' が誰かに殺されるって言う事だっと思ひ出しちゃったし…。」

京の言った言葉に、近くにいたりヨウさんも俺もびっくりした。

番組が進んで、大声で言っ飛ばせばそれこそ『スベル』とか『場違い』だと思っ飛ばしもしかして司会の人に思いつきりつつこみを食らうかも知れない。

お笑いのには、それが一番『美味しい』らしいんだけど俺は芸人さんじゃないしちょっと凹んでしまうかも知れない。

まあ、『タレント』とくれば一緒だけど。

「俺：一人になるの、嫌だよ。」

京が突然泣き出したものだから、後ろの方がガヤガヤしだした。ストップしなかったから、そのままの状況に。

生本番だから、やり直しは効かないし…。

俺は、慌てて京を慰めた。

まあ、騒ぎがおさまった時思いつきりヨウさんに睨まれましたけど…。

だけど、自分の病気が進んでいるのは京にもリヨウさん達にも言えないしいずれ俺が京から離れてしまう事だっって100%は無いかも知れないけど、京を置いて先に死んでしまう事だっってありえてしまうんだから。

でも京が好きなのは、変わらないよ。

これからもずっと京だけを、愛し続けると決めたから。

例えそれが永遠じゃなくても、大好きだっって言う気持ちは嘘じゃないです。

だからもう少しだけ、俺に時間を下さい。

.....夕刻 (the evening sky).....(後書き)

夕暮れ大好きな作者のためタイトルが2文字になっちゃってます。だって、何だかきれいじゃないですか…。

.....

次回予告

リヨウ「このタイトルの夕刻って何時ごろだ？」

作者「4時ぐらいだよ。」

リヨウ「ふーん。」

作者「自分から、聞いといて放置して何さ。」

次回、19話。.....悠然の運命.....

ざっくりとしたストーリー

主人公・ヒロインについては固定。京が、色んな人にイタズラされて修羅場を迎えたり拳崇とロボットの愛人関係が終焉する。

.....

トラウマが酷くなっているのに、何であんな事するんだよっ！

俺だつて凄く辛くてK'にも言えなくて、自分で背負い込む事になつちやつて亮うろにも心配かけちゃつたから。だから、亮うろやK'にはれた時は説教つて言うかすごくショックが大きかつたんだと思う。

俺のせいで、泥沼になるのも嫌だつたから……。^^：

でも、K'の事信じているし大好きだよ……。

生本番が終わり、楽屋に戻った俺が周りにあるゴミとかを片付けているとドアの方から声がした。

もちろん、声の主は京で相方のリョウさんから『片付けて来い』って言われたんだらう。

「京…！？どうしたの？」

俺が京を楽屋の中に入れると、京がいきなり抱きついた。

「俺…K'の事、好きだよ。」

そう言っている京からの言葉は、いつも通りだって思ったけど顔を見ると大きい瞳には涙が…。さっきので不安になったんだらうって言うのもあつたんだらうし、ソワレさんが紫苑さんを犯した事で俺にも被害が来るって思ったんだらう。

「俺…本当に、ソワレの事…殴りそうだった…。」

それは、さっきの生本番中の事で紫苑さんをめっちゃめっちゃしたとソワレさんが言った話の事。

当然生本番中だったから、殴る事だつて出来なくて今に至っている。紫苑さんが、八神さんの彼女だつて知っているはずなのに何でソワレさんはあんな事をしたんだらうって考えると俺もちょっと殴りたくなってくるけど現に八神さんはまだ警察署にいる状態だから…。だけど、電話で会話できる状態になつたし紫苑さんも精神が安定してきたのは事実だから…。

それなのに、ソワレさんつたら紫苑さんを犯して中出しまでした。

紫苑さんが精神破綻する場面を見ているのに…。

本当に、腹立ってきた。

紫苑さんを犯したせいで、20分前から体の調子が不安定になつているのは俺が一番良く分かっている事。

だって、俺と紫苑さんは『マザーシステム』でつながっているから

…。

「自分自身がすごくイラついてて、K'に『ごめん』って思ってた

…。」

「何で？」

俺が少し首をかしげると、京が俺の顔を見だした。

「だって、K'が『浮気は最大の悪い事だ』って言ってたから…。

それに俺は、ソワレや八神達とHしちゃったんだよ？」

京の中でもすごく罪悪感が来ているみたいで、笑顔になりながらも冷や汗をかいてしまったのは俺の方から見てもすぐに分かった。

まあ、そう言う所が京の可愛い所で抱きつきそうになったけど今の京を見ているとそれも出来なくなってきたて黙って見ている事にした。

「大丈夫だよ。俺だって、京の事しか考えられないし大好きだから…。」

その言葉に嘘は無く、京はそれを聞いて笑顔に。

京の笑顔は、俺のものだ。

ちよっと、独占欲強かったのかなあ。

「(ぎゅっ)」

いきなり抱きついてきたから、京も耳まで真っ赤に。

男としての理性が保てなくなったって言えば言い訳かも知れないけど、ソワレさんに犯された時のあの泣いた顔をした京を見たくなくなっただけだから…。

「ど…どうしたの？」

「ソワレさんに犯された時に、助けなくてごめんね。」

京は俺が抱きついて腕に、黙って手を添えた。

前世の時みたいに、大事な人を守れないのは最低な事だ。

俺は、前世の時…京を目の前で失う時にこう誓ったはずだ。

『生まれ変わっても、自分の命と引き換えに守る』って…。

「K'…。く…苦しいって…。」

京が苦しそうな顔をしたから、俺は少し力を弱めた。

「ゴ…ごめんね。だけど、一つだけ俺の事聞いて。」

いきなり真剣な顔をしたから、京はまた耳まで真っ赤に。

「K…。」

「俺は、自分の命と引き換えに京の事を守るから。京の事を、誰よりも一番愛しています。」

京が俺の言葉を聞いて、泣いてしまったのを確認した俺ははっとした。

だけど、京の言葉はまだ終わっていないかった。

「俺だって、K'以外とHしたくないからね。」

京の顔が笑顔になってるのを見て安心したけど、京の右腕を見て『龍』の姿をした紋章が出ていた。

京が第一の龍『青龍』だと言う事を、京自身にも俺にも分かっていた。

涙目になっている京の顔も可愛いと思ったけど、理性を爆発なんて出来ない。

「俺…前世の記憶…ちょっとだけ、覚醒しちゃった…。」

その時、京の目が一瞬だったけど変わった。

すぐに元に戻ったけど、やっぱり京が『青龍』だったんだ。

「(ぎゅっ)」

今度は京の方だったから、俺は耳まで真っ赤になってしまった。

「K'が…好きだよ。『俺の運命の人は、京だよ。』って言うてくれた事すごく嬉しかったよ。」

まだ、犯人は分からないし八神さんだって出て来れない状況が続いているから…。

俺と京が、笑顔になって顔を見合わせているとすごい勢いで誰かが走ってきた。

「と…と…。」

アテナちゃんが、慌てた状態で楽屋に入ってきた。

「藤堂さんがどうしたの？」

俺がアテナちゃんを落ち着かせてから、改めて聞いた。

「藤堂さんがどうしたの？」

落ち着いたアテナちゃんが、今度は泣き出した。

「車に乗ってて…事故だったって。」

驚いた顔になった俺と京に、アテナちゃんは更に口を開く。

「マネージャーさんが運転していたんだけど、正面衝突だったって…。」
軽く状況を想像してしまった俺は、身震いをした。

「嘘…。」

俺が京に抱き合った途端、アテナちゃんの持っていた携帯が震えだした。

状況で泣いていると確認した俺は、アテナちゃんを慰めた。

「アテナちゃん？」

泣き出してしまっているのとその場から動けなくなってしまった状態を見て、はっとなる。

「凄い怪我らしくて、病院に運ばれて生死を彷徨っているって…。」

藤堂さんとアテナちゃんは同期で仲が良いのは知っていたから、シヨックも大きくなっていると思うしどっちにしても『打ち上げ』に出るつもりなんてなかったから病院に向かう事にした。

『打ち上げ』に行っただって、ソワレさんがいたら京が怯えてしまうし今は藤堂さんの事が気がかりだ。

「あたし…香澄ちゃんに、何かがあったら…。」

その場に座り込んでしまったアテナちゃんを、黙って見ている京。

「と…とりあえず、病院に行こう？ここにいたら藤堂さんの状態なんて分からないよ。」

帰る準備を終えた京が、俺とアテナちゃんの方を振り返って真剣な顔をしている。

「そうだね。俺、リヨウさんの所に行ってくる。どっちにしても、

『打ち上げ』行く気なんて無かったから…。」

本当は京の体の事も考えて、のんびり休もうって思っただけ…。さすがに、事故の事は知らなかったしびっくりした。

リヨウさん自身も京の事を分かっているから『無理すんな。』って言うと思うんだけど…。

「でも、本当に良いの？香澄ちゃんの事はさておき、『打ち上げ』に行かなくて…。」

アテナちゃんは、京がソワレさんに犯された事…知らないんだ…。

アテナちゃんに京が、強姦されたって知ったらどんな顔をするだろう。

間違いない京が泣き出すと思うし、俺だって気を使うのだけは嫌だ。

「良いの、良いの。俺は酒飲めないから、それに京だって仕事続きで疲れているんだから。」

嘘じゃないし、そんなのついたって何も得はしない。

本当は、ソワレさんに会わせたくなかったからって言う理由なんだけど。

まあ、社さんに『今度、おごるわ。』って言っていたけど…。

それに、ビリーさんから『せつかく2人きりなんだから…。』ってからかわれたけど…。

「そっか。じゃ、行こう？」

アテナちゃんの車で、俺と京は藤堂さんが運ばれた病院へ向った。

受付の人から、病室を聞いて走るように病室へ向った。

俺等が向った時、そこにはさつき息を引き取ったと思われる藤堂さんの遺体がベッドに横たわっていた。

「香澄…？ねえ…。目…覚ましてよお…。」

そう言ったアテナちゃんが、泣き叫んだ。

俺は、京と泣き叫んでいるアテナちゃんを、病室の外へ連れて行った。

ショックが大きいのは、俺だって一緒だよ。
本当は、泣きたいのを我慢しているんだから。

お医者さんに訳を聞いても話してくれないし、俺はイライラした状態になる。

そんな俺の顔を京は見て、話し掛けた。

「K……。」

京が心配する顔も、何だか可愛いなあ。

「亡くなったの……誰にも、伝えられないよお。」

それは、俺だって思っているよ。

京も同時に泣き出したのを見て、俺は京を抱きしめた。

「俺……。誰も死んでほしくなかったのに……。」

辛くて苦しい思いをしているのは、俺だって分かっていた事だし京は前世の記憶を覚醒しちゃった後で藤堂さんが死んだ今の状況を知ってしまったから……。

こんな時こそ俺の出番だと思ったけど、俺だって結構辛いものがあったから。

一緒にの思いをしているのも、事実だしね。

「俺……嫌だよお……。」

京が泣いているのを見ると、周りの人達が騒ぎ出した。

多分俺が、京達を泣かしたんだって思ったんだろう。

冗談じゃないですよ。

俺だって人を泣かせる訳じゃないし時と場所ぐらいは、分かっています。

ただ俺自身も凄くショックで、泣き出しそうになっているのを我慢しているのは事実ですけど。

だから、京が泣き叫んでしまうのも同期のアテナちゃんが泣き叫ぶのだって分かっています。

まあ慌てて、シエルミーさん呼び出したから説得力はないんだけど

ど…。

「京くんもいろんな事がありすぎて、大変だったねえ。」
なぜかにやりしているのは、多分リョウさんから話を聞いたんだろ
う。

言っちゃ悪いけど、シエルミーさんも結構【腐女子】だからなあ。

「ところで、ソワレくんにごまでされたの？」

俺に抱きついたままの京が、真っ赤に。

ちよつと嫉妬した俺が、シエルミーさんを軽く睨んでトドメをさす。
「からかってないで素直にレイプされたの？つて、言えば良いじゃ
ないですか？」

苦笑してしまつたシエルミーさんが、口を開く。

「ごめん、ごめん。ただ本当に、可愛いなあつて。」

「俺：淒く嫌だったのに、あんな事されてK'じゃないと嫌だつて
言つたのに何度も名前を呼んでいたのに…。」

まだ怒っているつて言うか嫉妬していたのかシエルミーさんが、苦
笑しながら俺の顔を見た。

「嫉妬するなら間違つてるよ？嫉妬するのなんて、あたしじゃない
でしょう。」

それは、分かつてます。

今は、京を2日間オールでHしたい。

「ソワレさんに、ですよね。そんなの、分かつてます。俺だつて殴
りたいと思つていますけど、京が泣き出すのを見ているのが嫌なん
で…。」

俺の変化を見た京が、目をうるうるし出した。

「もしかして、Hしたいつて思つてる？」

図星で言葉にならなかつたから、苦笑してしまつた。

「俺、言つたよね？イライラしている時にHしないでつて。」

ちよつと凹んでしまつた俺に京が、笑顔になる。

「今日は特別だし、K」とHしたい。」

京が、ちよつと可愛い仕草をする。

「もやもやしたままだったら、俺が壊れちゃうから……。」
「うおっ。たまらないんですけど……。」

「するんだったら、この中じゃ嫌だからね。」
分かってるよ。

「腐女子的には、ここでどうぞしてくださいなんだけど一応恥じらいを持ちなさいよ？」

だから、帰る途中にしようと思っっているんです。

病院の中でしたら場違いにも程がある事ぐらい、俺だって分かっています。

「しませんよ。俺だってそこまで、『おばか』じゃないんで。」

京だつて、そんな『羞恥プレイ』は嫌いだろうし……。

まあパオさん並じゃないけど、京だつて結構可愛いくて……。
可愛いって言ったら、思いつきり真っ赤になるんだけど……。

「はいはい。分かってますって、KくんはTPOをまきわめているのをウィップから聞いていたし。まさか本当に、京くんとHしようとしているなんて思っっていなかったからさ。」

からかいに近いシェルミーさんの言葉に、俺は耳まで真っ赤になった。

「照れてる、照れてる。(にやにや)」

からかったから、耳まで真っ赤になっちゃったじゃないですか。

「どっちにしたって、京くんをめちゃくちやにするつもりなんですよ……。」

まあ、『するつもり』じゃなくでするんですけど……。

「(じつくり)」

俺がうなずくと、京も何か分かったのか真っ赤になる。

「だけど明日仕事だから、あまりきつくしないでね。あたしが、リ

ヨウちゃんに何て言われるか分からないんだから。それに、Kくんだってリヨウちゃんに睨まれるのなんて嫌なんですよ？」
笑顔だったから少しほっとしたけど、俺自身は京を本当にめっちゃくちゃにしたいって思ったし何度も京を味わいたいと思っているから…。

やっている事はソワレさんと変わらないし、酷い事かも知れないけど同意しているのと同じくとは大きく違う。

正直言ったら、俺より京の方が体重は軽いんだから。

「それにシエルミーさんだって、この事知っているし今はアテナを無事に送り返さなくちゃ。それから、ゆっくりHしよ？」
どかーん。

本当、今のはまずいだらう。

涙目だし、上目使いだし可愛いし…。

「シエルミーさん。ここで言うのは場違いかも知れないんですけど、アテナちゃんを家まで送って行ってくれませんか？」

一応気を使って、話してみた。

「場違いじゃないと思うけど、分かったよ。行こう、アテナちゃん。」

「にやにやしなながら、アテナちゃんとシエルミーさんと別れた俺と京は車のある方へ向かった。」

本当はもう待てない状況で、京に抱きつきたいって思っていたけど一応病院の敷地内だしナーステーションから丸見えだったから…。

「車の中で、京…珠洲の事めっちゃくちゃにするから…。」
俺がそう言くと、京の耳が真っ赤に。

「もう、こんな所で言わないですよ。誰かがいたらどうするの？」
真っ赤になった京がほっぺたを膨らませる。

「大丈夫だよ。ここはマスコミの人、NGの病院だから。」
そう言つて、俺は京の…珠洲の肩に腕を回す。

「でも…。」

京が不安そうな顔で俺の顔を見てきたのを確認して、車の中に京を軽く押し込んだように乗せて病院から出た。

不安そうになっっているのは、俺だって分かってたよ。

だけど今は、京と…珠洲とHをしたい。

めっちゃめっちゃにして、京が俺のもんだって証拠をつけたいから。

まあ、京自身はキスした時点で俺のもんだって言っているんだけど…。

京だって、外でHするのは嫌いだろうし…。

「外が嫌だったなら、どっか隠れる所でも行ってHしよう？」

真っ赤になった京が、こっくりとうなずく。

「どっちにしたって、京の声は響かせるけど…。」

やっている事はソワレさんと変わらないのは、自分でも分かっている事だけだった。一つ違うのは俺は京の事…珠洲の事を大好きで愛している事。

「何か、もう…恥ずかしいよ…。」

うつむきそうになっている京の顔を、見るようにして話す。

一瞬キスしそうになったけど、運転手だからちゃんと前を見なくちゃならなかったし病院であれだけ悲しい事があつたばかりなのにその帰りに事故ったりしたらマジで最低だ。

「京の感じている声も、イク顔も声も全部俺のものだから。」

ここでは京が真っ赤になっっている顔を、見れるだけでも良いかなあ。

贅沢だけは、言わないでおこう。

「隠れる場所についたら、いっぱい出させるから。」

Hしている時の京は凄く、いやらしくてマジでエロい。

中に出されている時の顔は、すごく幸せそうな顔をしてくれるし…。

胸だって、舞さん達に負けないくらい大きいしさ。

やばい、やばい。

考えたら、理性が飛びそうになってきた。

「もうっ！K'のすけべー！」

真っ赤になって怒ってしまった京が、また一段と可愛いくて。だけど、京のこの一言で俺の理性が段々と崩れてきた。

「でも、俺：K'とHするのは嫌じゃないよ。」

もう、凄く可愛いくて今にでもここでHしようと思ったけどありったけの理性で何とかおさまった。

正直言っ限定の場所以外でHするの何て初めてだけど、理性が最後まで保てるのが分らないし…。

「見られている所で、しようか。」

俺が低音で、言ったのを聞いたのか京が耳まで更に真っ赤になってしまった。

「俺、K'とHするのは嫌じゃないけどこんな所でされるのなんて嫌だからね。」

本当に羞恥プレイをするつもりだったから、思いつきり冷や汗がかいてしまったのは事実で京だって読んでしまったからつられて真っ赤になってしまった。

「恥ずかしいし…さっきも言ったけど、マスコミの人が来たらどう説明すれば良いの？今の俺は、【草薙くさなぎ 京きょう】じゃなくて【相川あいがわ 珠す洲す】なんだから。」

京の顔を見ながら信号が赤になったのを確認して、京が俺に寄り添ってきた。

正直こんな状況は俺にとつてたまらないって言うか、びっくりする事で理性が爆発しかかっている今の状況だったらマジでヤバイ。

まあ、外でHしようが隠れた場所だろうが京の感じている声を聞きたいのは事実だし…。

「じゃ、車の中だったらシテ良いの？」

寄り添っていた京の顔が一瞬で真っ赤になって、ちゃんと座りだした。

「（こつくり）」
何とか車高が高いから、何とかなるんだけど京の身長が高いから広げないとせまくなっちゃうし京だって頭をぶつけてしまう事だってありえるから。

まあ、京の感じている声を聞けるのは嬉しいんだけど…。

「京って何だか、凄くセクシーなんだもん。」

俺自身も前を向いたまま、真っ赤になってしまったんだけど…。
もうすぐで隠れるポイントまで着くのを確認して、左折した。

「京…いや、珠洲。最後まで、するからね。」

藤堂 香澄…交通事故死。

ごめんねえ。活躍ちやんとさせなくて…。^^：

運命は、さだめと読みます。

.....

次回予告

K'「まったくさ。」

作者「だから、ごめんって。」

K'「何か、可哀想だって事…自覚してんのかな？」

今回は、20話。.....ひぐらしの蘭^{ラン}.....

祝・20話目!!

藤堂^{とうどう}さんが亡くなって、ショックが大きかったのは仲の良かったアテナちゃんだった。霊安室に行った時だって、気絶しそうになっていたし俺以上にアテナちゃんの方が年が近かったからだと思う。

俺だって、すごく辛いのは分かっているし俺がその立場^{たてま}だったら京^{きやう}だって凄くショックが大きいから。

だから、京^{きやう}を置いて先に死ねないと思ったし可哀^{あはれ}な事をさせたくないから…。

京：珠洲とHして、2時間後。

お姫様抱っこをして、部屋がある場所まで連れて行ってベッドの上に寝かせた時京が俺の服の袖を掴んだ。

「そうか…俺。車の中で…K」と、Hしちゃったんだ…。」

俺が振り向くとますます京の顔は、真っ赤になった。

「何か…すごく恥ずかしくて…Kの顔、まともに見れないよ…。」
そう言つて起き上がろうとした時、腰に激痛が走つて苦しがる京。

「ごめんね…。あんな事、しちゃつて…。だけど、あんな顔をした京もなんだかすごく可愛いくてさ…。」

俺が、京の寝ているベッドの上に軽く腰掛けてちよつと低音系の声で話したら京がまた真っ赤になつちやつた。

「あんな顔にさせたのだから…Kの、せいだからね。」
すねた京の顔に、俺は軽くキスをした。

一番京の気持ちは分かつていたし、京だつてつらい思いをしているのは事実なんだから…。

「でも、俺…K、以外の人とHするの嫌だよ。」

そう京が言つた言葉で、俺はさっきの京みたいに真っ赤になつてしまった。

正直そう言つ事を言われると、男として嬉しいんですけど…。

「京…あのさ。」

京の今の姿が女の子…すず珠洲ちゃんでも、言つ事はちゃんと一言なくちゃ。

「なあに？」

うわっ。すんげえ…可愛い…。

「俺は、珠洲ちゃんの体になつていている京でも元の京としての体でも大好きなのは変わらないから。」

また京の顔が真っ赤になったのを確認して、更に甘い言葉を言う。
「番組に出てはじけている京も、歌を歌っている珠洲ちゃんも俺は大好きだよ。」
完全に照れたのか、布団の中にもぐってしまふ京。

「もうっ！」

だけでもしも、もしもだよ？

京と闘う事に、なってしまったどうしよう…。

俺は、京と戦うなんて出来ないよ。

幸せにするって誓ったのは嘘じゃないし、泣かせる事なんて嫌だから。

「K'？」

俺がボーっとなっているのを見た京が、不安そうな顔で見ている。さつきより腰が痛くなくなったのか、ちゃんとベットの上に腰掛けた。

「大丈夫だよ？ちょっと一つだけ聞きたい事があるんだけど、話して良いかなあ。」

「うん。」

俺が京の顔を黙ってじっと見てみると、京がはにかんだ。はにかんだ京も何だか可愛いと思ったのはいつもの事だったし、自分の理性が保てなくなるのだから自分で押さえ込んだ。

「京は、『京』としての姿と『珠洲』ちゃんとしての姿とどっちが好きなの？」

京がはにかんだまま、キスしそうな距離まで近づいた。

「元の姿も自分だし、『珠洲』としての体も俺自身だよ。だって、K'の近くにいられる事だけで俺は幸せだもん。」

「やばい、やばい。」

思いっきり、キスしそうになった。

何だか俺の顔が、にやけてきたのを見た京がちょっとムスツとなっ

てしまった。

だって、本当に嬉しい事だったから…。

人気があつて、歌も上手いしかっこ良い京も好きだけど可愛い京だつて大好きだよ。

「何、にやついてるんだよっ！変態っ！」

京の顔が真っ赤になつて、腕で顔を隠した。

「京の顔が、可愛いなあつて。それに、俺が本当はエロイの知ってるじゃん。」

俺が笑顔になつているのを見て、京の顔は更に真っ赤に。

「もうっ！」

案の定、京に軽く叩かれて冷や汗をかいてしまったのは事実で…。

「ご…ごめんつて。それより、何か食べる？」

俺が苦笑気味になつて言うと、京が袋をアサつて笑顔になる。

正月だから、開いている所はコンビニしかなくて京を寝かしつけてからちよつとの時間で行つて来て買った物ばかり。

店員さんに、怪しそうに見られたかなあつて少しは思ったけど…。

「じゃ、プリン食べて良い？2個あるから、K'も食べようよ。」

まじで、やばい。

理性を保てなくなつてしまふのが、近くなつてきた。

京がくれたプリンを食べないと、すねてしまふのが分かつていたから素直にもらつた。

「う…うん。」

「それより今日、K'の顔真っ赤だよ？熱、あるんじゃないの？」

理性が保とうとした俺の顔を見て、不安になつたのか京が俺のおでこに自分のおでこをくつつけた。

俺の顔はますます真っ赤になつて、京の顔をまともに見れなくなつていた。

「熱なんて、ないよ？ただ、京が可愛いなあつて、思つてさ。」

これもかという低音ボイスで、京に言うと真っ赤になる京。

「もうっ。こんな時に、低い声出さないでよ。七枷さんほどじゃないけど、どっちかと言ったらK' だって低音ボイスなんだから。」

本当は全然低音じゃないけど、京が真っ赤になったから良いか。

「京の真っ赤になった顔は、俺のものだよ。」

俺が低音ボイスのまま、京の顔が近くに来る位置で言ったら京は毛布で顔を隠した。

「もう、すごい殺し文句。」

耳まで真っ赤になった京の顔を見ながら、残りのプリンを食べた。

前世の記憶が覚醒する前から、京の仕草は可愛いと思っていたのは事実だしリョウさんが「女々しい」って言っていたけど全然そんな事は思わなかったから。

自分の自己管理なんだろうけど、何度も理性が落ちそうになったのだった事実。

京が見せてくれる笑顔や、Hの時の顔とかを見れるのは彼氏としての特権だから。

「(ぼむっ)」
自爆してなんだけど、凄く自分でもキザくさかったしカツコつけだなあって思った。

「K' ?」

「京のその姿…凄く、可愛いよ。」

立てるようになった京の顔が、また真っ赤になった。

自分の使ったスプーンを洗っている俺の後ろから、抱きしめた。

「どうしたの？何か、怖い事でもあったの？」

本当は京の照れている顔だって知っているのに、わざとごまかしている。

「うっん。K'の背中って、広くて良い匂いする。」
「うわっ、うわっ。」

心臓がドキドキして、今にも張り裂けそうになってる。

俺：何か、このまま時間が止まれば良いって思ったけどそれも言うていられなくて…。

「しばらく、こうしてて良い？」

京の体もろに俺の体に当たってきて、理性を飛ばすのを我慢するしかなくなってしまった俺。

せめて、服を着てください。

思いつきり、キスしそうになりますから。

「俺ね、めちゃくちやにされたけどこの体：K'のものだしあんなに乱れちゃったのはK'の事：大好きだからなんだよ？それに俺、K'とHした事：後悔なんてしてないから…。」

京の腕が俺の腰にぎゅっと抱きついているのを確認した俺が真っ赤になつて京にキスをしようとした時玄関のチャイムが鳴った。

一瞬、リヨウさんか拳崇だと思った俺は京の体を軽く引き離して玄関に向かった。

玄関の方を見て相手が、ソワレさんだと言う事に気付いて少しむっとなつてしまった。

だって、京と八神さんの彼女である紫苑さんを犯したのはソワレさんだって知っているから何の用事で来たのかも分かったから。

「何しに、来たんですか？言ったはずですよね、俺：絶対にソワレさんの事許さないって…。」

「本当にごめんっ！！京に酷い事したって、思ってる。八神にも、顔を見せれないって言う事だって知ってる。」

それでもまだ、土下座をしているソワレさんの事を信じれなくて横目になつて話だけでも聞く事にした。

「京が怯えているのに、良く来れましたね。」

近所迷惑になる事と、京が泣き出したらつて言う事もあつて殴れない状況になつただけど本当はすぐにでも殴りたいって思ったのも事実。

完全にキレていた2時間半前とは違って、今だったらちょっとは落ち着ける。

「俺、『いい加減にしてください』って言ったの憶えてないんですか？」

あれは、『打ち上げ』に向かうソワレさん達と藤堂さんの所へ向かう時の出来事。

『京の体が目的なんですか？』って…。

あれが、今の俺が先輩に言える唯一のタメ口で。

周りから見ても、タメ口には聞こえないけど俺にとっては精一杯だったから。

京の為にも、それが一番の方法だって分かっていたから。

「忘れてなんか、ないよ。だって現にこうして京に謝ってるし、紫苑にだって謝りに行くつもりだから。それに、第一お前がキレている事ぐらい坂崎から聞いてたしさ。」

リョウさんに聞いたんだったら、何でもうちちょっと遅く来てくれなかつたんですか。

京はまだ、シヨックから立ち直っていないのに。

「K…俺、奥の部屋で寝て来るね。まだ本調子じゃないし、正月疲れだつて残ってるから。」

そう言った京は、笑顔で俺の部屋がある奥の部屋に向かった。

本当は、俺の目の前にある部屋が京の部屋なんだけど京とHをってしまった後だから使えないし…。

「京…あの時の事は、本当どうかしてた。言い訳しか聞こえないかも知れないけど、俺が悪いのは分かっているから。ここに来たのだから、俺自身の意志だし。」

京とソワレさんの会話を黙って聞こうと思ったのは、俺が殴ったら大変な状況になるって分かったから。

『本当に悪いと思っっているんだったら、何であんな事したんだよ。』

ドアの向こうのベッドで、京が大声で怒ってる。

当然の事だって思ったし、ソワレさんだって自覚しているみたいで…。

「俺、K'以外の人とHするの嫌だったのにあんなに激しくされてさ。少しでも気持ち良いって思った、自分だって許せないんだから…。」

号泣している京の状況を、黙ってドアの外から見ているしかなくて。

『何度もK'の名前を呼んでいたのに、それさえもかき消す様に犯されて…。俺、あの時の事…思い出しちゃったじゃないか。』
前世の急激な記憶の覚醒とフラッシュバックが起こっている状況の京自身は、凄く苦しくて体が熱くなっているのだって分かった。

俺はこの時何をしたら良いのか分からなかったけど、これだけは言える。

『俺は、京の事が好きだ。』と言ったのは嘘じゃない。

「京？」

だけど、心配ならないのは間違っていると思った俺は京のいる部屋のドアの前に立った。

『凄く、恥ずかしかったんだから…。』

ドアノブを握って、少し開けた時京の絶叫が聞こえた。

『嫌あだっ!!』

少しでも京の側にいてなくさめたいと思ったけど、ドアの鍵がかかっているのと拒絶している京の顔が俺の目の前にあった。

「京…俺だけど、ちょっとでも良いから話したい。」

ドアを挟んで京と話そうと思った俺は、自分のおでこをドアにつけた。
た。

『いくらK'でも、嫌だっ。』

おっと、拒まれた。

京の拒絶でちよっと凹んだ俺は、ドアにおでこをつけた状態で話を

続けた。

「京が八神さんやソワレさん達に犯されたのは俺シヨックだし、殴りたいって思ったよ。だけど、京が哀しむのが分かっていたから殴るのを止めたんだ。俺は、京の事が好きだから一緒にいたいと思っただし一緒にの時間を作りたいと思ってる。京自身は俺との事、どう思っているの？」

俺が、少しドアを開けると京の顔は少し涙が溜められていた。

「俺：K」と、一緒にいたい。」

少し罪悪感に落ちてしまいそうになるけど、まだ京を泣かせたいって思ってしまうのも事実で。

ソワレさんには、何としてでも謝ってもらわなきゃ。

「ソワレさんが近くにいるんだけど、謝ってもらおうから。」

京の顔が一瞬だけ、キョトンとした。

その顔もまた、凄く可愛いくて。

「京：ごめんな。K'がいるって言うの知ってて、あんな事しちゃって。」

ソワレさんがそう言うと、京がドアの隙間から睨んでいるのが分かった。

「本当にそう思っているんだったら、紫苑にも俺にも何でこんな事したんだよ。ソワレには彼女さんがいないって言ったら悪いかも知れないけど、俺には彼氏や彼女がいてばれるのだって嫌だったんだから。第一、K'はそういう事に鋭くて一旦気になったら思い込むんだから。」

京の涙が、止まらない。

「俺：K'じゃなきゃ嫌だったのに……!!」

大声で叫んだ京に、ただ黙ってしまうソワレさん。

自分がした事だからざまあみろって思ったけど、京の絶叫は止まらない。

『中は嫌だつて言ったのに、中に出されて…。K'にもレイプされる所見られたし…。あんなにK'以外の人とHしている姿とか、見られたくなかったしいっぱいイキまくっちゃってボロボロになっちゃったし…。』

いきなり抱きついて来たから、真っ赤になった俺。

役得だつて思ったけど、そうとも言っていられなくて…。

『頭の中、真っ白になって…感触だつて覚えちゃったし…。』

京の大事な所からは、さっきまで俺とHした後が残っている。

『俺：誰でも寝る奴だつて、K'に思われるのなんて嫌だつたのにい！…！』

俺は大絶叫して今にも発狂しそうじゃないかなあって、思った京の体をぎゅっと抱きしめる事しか出来なくて…。

『傷になって、血だつて出てるのに許してくれって言つものなんて絶対に嫌だ。今だつて、痛いんだから。』

ソワレさんにつれられた傷は、今でも痛そうになっていて血だつて滲んでいる。

京が強姦されたのに、彼氏（彼女）として何にも出来なかったなんて…。

最低な事をしたんだつて自分で自己嫌悪にしたつていたんだけど、京がブルーになつて俺の顔を見た。

『K'？』

「ごめん。少し、考え事してた。」

俺が軽い低音ボイスで、京の顔を見たら真っ赤になったのを確認できた。

「おっと。誰が、帰って良いって言った。」

ソワレさんが逃げるように、忍び足で部屋から出ようとしていたから引き止めた。

『こんな事になったのは、ソワレのせいだからね。正月早々嫌な思

いになつちやっただじゃん。』

「責任は、取るよ。」

『本当？俺は後でも良いけど、紫苑にはちゃんと謝ってね。せつかく精神が安定してきているのに、あんな事したんだもん。俺、八神に合わせる顔なくなっちゃったらどうするんだよ。紫苑の事、頼まれたんだから。』

「京の言う通りだよ。それなのに酷い事をしてしまったのは、ソワレさんなんですから。」

精一杯のタメ口で、ソワレさんに説教をする俺に苦笑してしまつたらしく黙ってしまった。

ざまあみろって思ったけど、京だってちょっとキレているのも事実で。

俺がもう一つ言いたかった事、ソワレさんが来てそんな事言えなくなる前に話さなきゃ。

「京：あのね。今から、真剣な話するから…。俺に何かがあったら、延命処置とかしなくて良いからね。最期の日を迎える時も、K'と一緒にいたいから…。」

ソワレさんとは違って、俺の病名を知っている京は笑顔になつたまま涙を浮かべている。

『俺は、どんなK'でも大好きなのは変わらないよ。』

報われないと思つたのか、黙ってしまったソワレさん。

「京…。」

『俺が、ソワレとの子を身ごもつてもK'の子として認知してくれる？ソワレは俺の事、好きかも知れないけど…。俺はソワレの事同期の友人だつて思っているし、負けたくない時だつてあるぐらいだつて思ってる。だけどあんな事されて今更、同期の友人だけの関係じゃ終われなくなっちゃったよお…。亮にあんな事説教されたのに、まだ俺の事好きだつて思ってるの？』

「だって俺…珠洲の事、大好きだからさ。」
『絶叫に近いぐらいに、亮に説教されたのに…。』
京の涙が、肩に落ちてくるのを確認した俺は真っ赤になりながらも
京に抱きついた。

まーたこりもせず、Hシーンでございます。
本自分つて、変態のスケベだなあつて。
愚痴つたつて、仕方ない事だけど。

実は、作者。ひぐらしも蘭らんも好きな花でございます。
だから、なんなんだつて言つちやえはそれまでですけど。
しかも、花粉症だから花の匂い嗅げません…。^^：

.....

次回予告

京「自業自得じゃん。」
作者「だつて、嘘じゃないもん。」
ロバート「ふーん。」

今回は、21話。.....裏切りの信頼.....

謝りに来たって、許すもんか。

事務所の同期で京とは良く飲みに行くって言ったって、何も体の関係を持たなくなたって良いと思っただし俺だっけいまだに罪悪感になっているんだから。京とは飲み仲間だっけ言うのも知っているけど、何だか複雑で心配だったんだよね。

京の帰りが遅くなるのも知っていたし、最近仕事とかですれ違いが起こってばかりだったから。

だから、京が強姦された時は流石にショックだったしイラついたけどキレたって何にもならないって分かったから…。

あの後、一瞬俺はひやっとしたけど京自身が涙を浮かべていたし黙って抱きしめるしかなくて。

さっきみたいに部屋から出なくなってしまうのだけは避けたかったから、安心させないとダメだって思った。

でも、こんな状態になっている京を見たのは付き合ってた初めての事だ。

「そ…そんなの…分からないよ。」

ソワレさんの優柔不断な言葉に、一気に腹を立てたのは俺の方。

あれだけ、レイプした事は責任取るって言ったのにいざ妊娠したって言う事になったら関係ないってどういう事なんですかっ!?

やっぱ、ソワレさんってそういう人だ。

まあ、京のいる前で殴るって事はしないけど…。

「責任取れないって、どう言う事だよ!!」

俺が、ソワレさんにキレる前に京が泣きながら話した。

近くてほとんど絶叫に近かったから、耳がきーんとなったのは事実で。

『どうしたんですか?』

隣りに住んでいるロックさんが何かあったと思って、冷や汗をかいている状態で裏の窓から入ってきた。

ロックさんにとって、京もソワレさんも先輩だしちゃんと建前だけはしとかなくちゃと思ったんだろう。

まあ、今のソワレさんに対してはそういうのはしなくて良いって思っているから軽く睨んでしまっているけど。

「京が拒絶しているのに、またしようとしていたんです。」

ロックさん自身も、リョウウさんから事情は知っていたからすぐムス

ツとなったけど冷や汗に戻った。

「本当に、懲りない人ですね。あれほど、リヨウさんやロバートさんにも言われてたのにどんだけ性欲が強いんですか。」

ロツクさんが、そういう事を言っているとソワレさんが京をまた押し倒した。

今度は、俺が側にいたから引き離そうとしたけどソワレさんの腕の力が強い。

京が苦しんでしまうと思ったし、壊れてしまうと思ったから俺も力一杯に引き離す。

「嫌だっ！！離してよっ！！」

京も、大絶叫に近い状態の声を出している。

当然俺も、ロツクさんも引き離している。

誰とも会いたくないって言う状況は最悪だっと思ったし、耳がキーンとなっているのも事実だから。

「触らないでよっ！！嫌だっって、言ってるのに。」

「京……。」

俺もロツクさんも、京の絶叫に一瞬驚いてしまったけど俺が抱きついた途端落ち着いたみたい。

「ごめん……。また、迷惑かけちゃって……。」

理性が落ちそうになるけど、ロツクさんがいたしソワレさんの事がまだ残っていたから何とか抑えた。

「驚いた？本当に、ごめんね。」

だって、理性が爆発させたらロツクさんに説教されるのが分かっていたし自分でも何とかしなきゃって思っていたから……。

「ううん。大丈夫だよ。」

京の涙が溜められているのが分かっていたし、今の状況でソワレさんが余計な事を言わなきゃこのままでも良いかなあって思っていたのに京がさっきみたいに大絶叫で号泣されても困るしなあ……。

涙が止まらない状態で誰かに会ったら、俺が泣かしたって言われるのだから覚悟しとかないと。

「K」とHしてても、ソワレとのHを思い出しちゃって…。」
苦しい思いをしているのは、京だっ一緒なんだな。

「俺は、Kの事大好き…なんだよ…。」

ソワレさんにとって、報われなくても知れないけど仕方ない事で…。
「そんなの、分かってるよ。でも、俺は京の体だけが目的で一度で良いから抱きてえって思ったんだからな。」

「思っているだけだったら、良かったじゃん！！」大声出しても誰も助けない』とか、『K以上に気持ち良くさせてやる』って言うてたじゃん！！」

大声を出して泣き叫びそうになった京に、俺は何も出来なくなつて…。

「それでも言わないと、京は俺のものにならないからさ。」

「なる訳ないじゃん！！俺はKのものだし、今更『俺のもんだ』って言ったって嫌なの分かり切ってるじゃん！！」

京の絶叫が部屋中に響いている状況なのに、ソワレさんはまだ京の話をちゃんと聞いてくれない。それどころか、京の耳たぶに軽くキスする始末。

これ以上京を絶叫させておいたら、力が暴走すると思つたし前みたいにガラスが一斉に割れる事があつたらそれこそ最悪なパターンだ。

京の力は俺や拳崇の力とは違つて一旦暴走してしまつと、ショートするまで止まらないのをリョウウさんから聞いていたしヘタしたら人まで殺してしまうぐらいの力で…。

京のその力を制御できるのは、京自身と彼氏（彼女）である俺だけ。いっぱいいっぱいになりかかっている京の今の状態をソワレさんはどう思っているんだろう。

「本当は殴りたい思いでいるんだよ！？だけど俺が殴りに行ったら、

『暴力』って言われて訴えられるのが嫌だから我慢してるんだよ？」
大粒の涙が、京のほほを通って俺の肩に当たる。

「それなのにソワレは俺の気持ちなんて分からないで、めちゃくちゃにして…。」

京の瞳が普段の黒から青に変わった途端、ドアが急に開きソワレさんが外へ飛ばされた。

京の力が発動したと思った俺は、ちよつと冷や汗をかいてしまった。

だって、京の力は俺以上に強くて…。

「K、…あのね。」

瞳が青から黒に戻った京が真っ赤になって、つぶやき出した。

俺は、何の事だか分からなかったから首を傾げるしかなくて。

「ちゃんと…俺と、契約して…。」

京の口から『契約』言う言葉…本契約しているはずなのに、何で？

「何で？」

ますます首を傾げてしまった俺に、京が更に真っ赤になった。

「K、は、真面目な所もあるけど結構おちゃらけた所があるのは分かっている。分かっているけど、周りの人とかにさ真面目な顔とか良くしてるのに俺には何でしてくれないの？困るとかそんなんじゃないけど、凄く複雑で苦しんだから…。」

照れながら笑顔になっていく京も、何だか癒されるし可愛いなあ。

「歌を歌っている時は、凄くかつこ良くてさ…。」

京にそれを言われた途端、俺まで耳まで真っ赤になった。

正直同じ事を思っていたのだから…って思ったし、京だって歌上手いんだから…。

俺がそんな事を思っているのが分かったのか、京が話を続ける。

「Hしている時だって本当はK、だって、苦しそうな顔してんのに…。」

途中まで言おうとして、更に真っ赤になる京。

まあ、あんな京を見れるのなんて俺以外誰もいないって事なのかなあ。

「熱いなあ、まったく。」

仕方ないって思ったし、事情を知っているからなんだけだからってからかわないで下さい。

自分で言っただけで自爆しているくせに、人に言っただけでどうするんですか。

確かに、Hして京と関係を結んだって言う証拠だってあるのは事実ですけど…。

「K' がいやらしい事思っているなんて、そんなの分からないよ。」

俺は、K' 以外と寝ちゃったのは事実だし嘘ついたってバレるのだから、時間の問題だったから。それに、京と俺が付き合っている事はお互いの事務所と一部の先輩しか知らない事でそれが反動になってバレないかなあって言う不安だつてあるんだから…。だけど、このまま付き合っただけで良いのかなあ。K' は本当は女の子だって知っているし女の子と話したって仕方ないって思っただけで、一応彼氏だし何だか複雑で…。」

京の顔がまた暗くなって、俺の肩に寄り添った。

自分の理性が崩壊しそうになっただけで、そんな事考えている時点で俺も変態なのかなあ。

「何、言ってるの？俺には京しかいないし、元の姿でも珠洲ちゃんの前でもそれは変わらないよ。」

さつきみたいに笑顔になつて、京の顔を見直している。

「不安になつたら、俺の所に来て良いから。俺だつて草薙さんが何でも背負い込んで一人で何でもしようとして大変な事になったんだし、俺はそんなのは嫌だから…。」

ロククさんが、話を続けようとしていると京が俺に抱きついてきた。

「そう言えば、前に俺と仕事と一緒に草薙さんが半端なく落ち込んでいて良く見たらお前まで落ち込んでた。ちょっとてんば

つちやってさ、俺がなぐさめていたんだから…。」

ロックさんが心優しい人だって言うのは超がつくほど有名な話で…。それは、ロックさんの相方さんであるジョーさんから聞いていた話だったから別に驚かなかつたし俺だって知っていたから。

「もちろん、いやらしい事じゃないけどな。でも、草薙さんがあんな落ち込み方をしていて…苦しいのは、K'だけじゃないんだって…。」

一瞬ビククリしてしまっただけど、ロックさんの気持ちは分かるし良く考えると俺と一緒になんだなあって思った。

「俺も、社さんに拒絶したのに最後までされて…。そりゃ、社さんの事は大好きだよ。だけど、ちよつとぐらい準備させてよって…。中に出されたし、壊れるまでされて…。」
そう言つて、ロックさんの顔が今にも泣きそうになつて暗くなつちやつた。

「何か、複雑で…胸が痛いよ…。」

まさか、社さんがそんな事する人だつて思わなかつたから驚いてしまったのは事実だし大好きな人にあんな事されてロックさんにしてみれば複雑になつて頭がいつぱいになるのだつて分かつていたから…。

今の俺だつたら、2人を慰めるしか出来なくなつてしまつただけどいつも元気なロックさんがこんなに落ち込むなんて姿見るのはなかつたから。

「ごめん…。こんな、暗い話しちゃつて…。」
だからあの時、社さんの表情がちよつと暗かつたのはその為だったんだ…。

俺だつて、今のロックさんの状況だつたら間違ひなく落ち込むつて分かつているけど天然の所があるから気付かないかも知れないしさ…。

「気にしないで下さい。それに社さんだつてロックさんの事を『H

だけの道具』だと思ってないはずですよ？もし思っていたら、俺：社さんを殴りますから。」

こんな事、京には言いたくなかったけど俺にとって社さんも先輩だから…。

「それは、ダメっ！！」

ロックさんが、涙目になったまま俺の顔を見た。

正直、理性を保とうと我慢をして良かったと思った。

京が泣き出すのが分かっていたし、ロックさんに余計な事を言って怒られるのだけは嫌だったから。

ただでさえソワレさんの事で、泣いていたしそのソワレさんだって一回飛ばされているんだから。

「何で、です？」

「社さんとK'が、仲悪くなるなんて…俺：嫌だよ。俺の方が後で、辛くなるんだから…。」

泣くと思った時には、既に泣き出していてやばいなあって思ったのは事実だし京だってこっちを見てにらんでしまっている。

正直言ったらにらんでいるっていうより、心配しているって言った方が正解みたいだけど。

そんな事言ったられないって分かっているけど、そういう顔の京も何か可愛いなあって思ったのも事実で…。

「大丈夫ですよ。俺、社さんと仲悪くなる訳：ないじゃないですか。俺にとって社さんは尊敬している先輩の一人なんで…。」

社さんに殴られなくてすむって思ったのか、ちよっとほっとした。だけど、ロックさん自身は社さんに流れている噂を知っているらしくて…。

「でも、社さんが浮気性だって事知ってて…。」

それだけ、社さんの浮気疑惑の事は有名な話で…。

「俺と付き合う前だって、草薙さんの体で自分の性欲処理してたっ

て聞いてたし社さんと関係持った女の子だって何人も知っているんだから…。」

また号泣してしまったロックさんに、おどおどしてしまおう京。

正直、号泣しているロックさんを見て俺は改めて苦しい思いをしているんだと思った。

俺は、仕事帰りに社さんが別な女の人と一緒にラブホテルに入っていく所を見てしまっってこんな事はロックさんには言えないし言っただとして修羅場になるのだけはマジで勘弁だ。

それじゃなかったって、京の事でソワレさんと修羅場になっているのは事実だから。

話せないから変な顔をするしか残っていなくて、ロックさんにバレないかなあって不安になってくる。

だって、絶対に言えない事だから仕方ないじゃないですか。

「でも、俺は社さんの事…大好きだよ。」

泣きながら照れるロックさんの顔を今はただ、見ているだけになる。肝心な京は、きよんとした顔で俺に抱きついていて。

それだけでも、ちょっと理性が爆発しそうになるんだけど何とか落ち着かせた。

何か、複雑で嬉しいのだけは残っているんだけど…。

本来の俺は女の子で、京の彼女なんだから。

京より早く記憶の覚醒をして、男の体になる時間が段々と短くなって来ている状況で3ヶ月が経った。

また京に告白して、付き合っている。

現に京は、覚醒と同時に女の子の体 あいかわ 相川 すず 珠洲としての芸能生

活と普段の生活をスタートする事になってしまっって…。

「俺の事…好きじゃないのかなあ。」

俺も喜怒哀楽が激しいけど、ロックさんも結構激しくて不安になった時とかって結構きついらしい。

しかも、今のロツクさんの状況は不満と不安で頭がいつぱいらしくて社さんに対して殺意を覚えなきゃ良いなあって思ったんだけどロツクさんみたいな優しい性格の人に限ってそんな事なんてないだろうなあ。

ロツクさんは、社さんの事を信じているのは分かっていたしさ。

「K、？」

きよとんとしたままの京が、俺の顔を見て笑顔になった。

その笑顔が真近にあるから、自分の理性が飛びそうになる。

自分の理性を何とか落ち着かせながら、話を続けた。

「ごめん。ぼーっとしてた。でも、ロツクさんの事社さんは嫌いじゃないと思いますよ？違う番組で一緒になったんですけど、ロツクさんの事気にしていましたから。それだけ、社さんはロツクさんの事を好きで好きでたまらないんだと思いますよ？」

これは、嘘じゃないし社さんは俺の座っていた席の隣りだったから感情がこっちまで届いたんだけど。

まともに会って、マスコミの人が狙っていたら騒ぎになると思ったし社さんとロツクさんは同じ事務所なんだから。

まあ、この話をして笑顔になったロツクさんの顔を見てほっとしたのは事実なんだけど・・・。

「本当こっちにきて、良かった。まあ、その前に修羅場だったんだろうけど。」

ロツクさんが、ソワレさんの顔を見て笑顔で怒っている。

「ソワレさん：今度、草薙さんを犯したり泣かせたりしたら俺殴りますから。」

京に抱きついている俺の様子を見て、睨みだすロツクさん。

「わーた、わかったよ。K、が京を好きだって事ぐらい分かっていたしさ。」

知っているなら、何でって思ったんだけど京が泣き出したら騒ぎだ
って思ったのが最初でもしかしたらロックさんだって泣き出すんじ
やないかなあって…。

そうなたら社さんに怒られるのは分かっているし、ロックさんだ
って社さんに聞いてみたいって思っている事だつてあるはず。

『俺以外の人と、何で一緒にいたの?』って…。

多分社さんの事だから、『そんな事なんて無いよ。』って否定する
と思うんだけど何だか言つたつてロックさんは社さんの事が社さん
もロックさんの事が好きだつて言う事は嘘じゃないつて分かってい
るから。

「（にやにや）」

ソワレさんが冷や汗をかいている状況で、京を見ている。当のロッ
クさんも耳まで真っ赤になっていた。

「何、にやにやしてるんだよ。」

このまま、ロックさんを照れさせてテレ爆死させるのも良いと思っ
たけど京の事もあるし途中まで話してみる。

「言いたい事があるんだつたら、ちゃんと話して。社さんが、にや
にやしたつて何の事言いたいか分からないよ。」

本当は知っているはずなのに、俺自身も何でボケちゃうのかなあ。

普段は、ツッコミなのにさ。

ほとんど社さんとロックさんの事しか、言っていないのに…。

「K、?あまり、からかつたらまずいよ。どっちにしても七枷さん
が、ロックを好きだつて言う事には変わらないんだから。ロックも、
素直じゃないからこの際ちゃんと素直に話せば良いのに…。」

京には何か言いたそうな俺の感情とか、すぐに分かつたらしくて既
に真っ赤になつているロックさんにつられて真っ赤になつちやつて
いた。

「お前も、からかうんじゃないよ。何か複雑で、照れくさいよ。確

かに社には聞きたい事があつたけど、からかうから…。」

社さんが、低音全開でロックさんに話し掛ける。

「ロック…俺に聞きたい事って、何？」

顔をそらしたロックさんが、まともに見れなくなつてしまったのは事実で本当ツンデレだなあつて思つただけで本人の前だつたらそれも言えなくて。

「社が、俺以外の人と歩いてたつて聞いたから…。」

社さんの顔が一瞬、青ざめてきて冷や汗をかいてしまつている。

「マネージャーだよ。それに、ロケ中だつたし…。」

ついにはてんばつてしまつた社さんに、ロックさんがトドメの一言。嘘ばかり。確か、社のマネージャーさんつて俺の前のマネージャーだつたから知つているしロケ中だつたら何でラブホテルなんて入つたんだよ？」

図星だつたのか、言葉が出なくなつてしまつた社さんにロックさんが半泣き状態になつちやつた。

「やっぱり。俺、社さんが浮気性だつて言うの知つていたから。だけど、そこまで酷いとは思わなかつたし信じてたのに…。やっぱり、社は女の子だつたら誰だつて良かったんだ!!」

慌てだした社さんが、ロックさんを慰める。
自業自得、です。

「俺の事、やっぱり遊びだつたんだつ!!俺は社さんの事、大好きで仕方ないのに…。」

泣きながら怒つてしまつたロックさんの顔をまともに見れなくなつてしまつた社さん自身も、心当たりがあり過ぎたつて言うのもあるし浮気していたのも事実なんだから謝るなら早い方が良いと思うんですけど。

本当に浮気していたんだつたら、間違いなく最低なんだけど…。

「社さんは俺の事、どう思つてるの?」

ロックさんが、上目使いになっているのを見て言葉がまた詰まりそうになった社さんだったけどちゃんと話さなきゃロックさんだって納得しないと思いますよ？

現に今だって、泣きそうになっているのは事実でそれだけロックさんがシヨックだったって分かっていいるのかなあ。

俺だって、気がすまないって言うかロックさんが泣き出しちゃったら今のロックさんのマネージャーさんやおねえちゃんに何て言われるか分からないよ。

「遊びじゃねえよ。ロックの方から告白したのに、肝心の俺が浮気しちゃったら最悪だよ。」

そう言った社さんの声のトーンは、いつもの低音じゃなくて何かキーンが上がってる。

俺は凶星だつてすぐに思ったけど、京が横目で見ていたから黙ってしまった。

「せっかく、ロックが話しているのに邪魔しちゃまずいって。七枷さんの気持ちもちゃんと自分で話さないとロックだつて納得できないし…。」

「突然苦しみだしたから…。それに、近くに病院なんてなかったしさ。」

ラブホテルに行ったと言う事実がある状況で、浮気じゃないって言う理由にはならないと思っいたらしいロックさんが核心に迫る事を話す。

「もう、信じられないよ。普通だつたらそこで携帯で、救急車呼ぶはずだよ？なのにラブホテルに行ったって事は、Hしたって事だよね!？」

ざまあみろつて思ったけど、社さんがおろおろし出しちゃったしまた京が横目で見るのが分かっていたから黙ってた。

それより何より、ロックさんが大声で泣き出してしまったから俺もおろおろし出すしかなくて…。

「もう、良いよ…。俺…社と、別れるから…。」
ロックさんが泣きながら外に出てしまったのを追いかけるように、社さんも走って行った。

まあ、どうなったのかはロックさん自身から聞けば良いんだけどまだびっくりした状態の俺に外へ行く準備万全の京が俺の前へ来た。

「何か気になるし、本当はK' だって気になっているんでしょ？ だったら、一緒に行こう？ 後から聞くのなんて、正直面倒くさいですよ？」

京の言葉に、俺は少してんばりながらも京の顔を見た。

「まあな。」

「そう…だよな。もしもロックが泣いたりして、俺が余計な事言ったりしたらそれこそ最低だもんな。」

笑顔になった俺に、京が冷や汗になって話を続ける。

「いつももだったら心配で見に行くのに、見に行かないから面倒くさいのかなあって。」

確かに少しはあるけど、心配しているのも事実なんだよ？

だって、俺が社さんとロックさんをくつつけたから。

「面倒じゃないよ。俺は、京の事って言うか京の体の事を気にしたからさ。」

本当は、京がもしかしたら社さんの所に行くかと思っただから不安になっただんだ。

「七枷さんが、来たから？」

それもあるけど、社さんに一回犯されている京がもう一度社さんと出会ってソワレさんの時のようにフラッシュバックが起きるんじゃないかなあって心配していたしいくら京に謝ったからって京自身のトラウマの原因を作った人だったから。

「本当は、社さん…京の事好きだったんじゃないのかなってちょっと

と不安になっちゃったんだ。」

不安そうになった顔で、俺は京を見る。

「七枷さんが、俺に？そんな事、ありえないって。だって、七枷さんは俺の事務所の先輩だよ？それに俺には、K'しか考えられないし今こうしているのだって俺にとっては幸せな事なんだよ？確かに飲み仲間だし、尊敬している人だけど男として意識した事なんて無いよ。流石に楽屋で犯された時はショックで泣いちゃったし、仕事だって手につかなくてK'と付き合う前だったし亮に何度も怒られたんだから。だけど今は、落ち着いているしK'と一緒にいれて嬉しいんだから。それに、飲みに行ったって未成年だからお酒なんて飲めないしさ。」

京の笑顔に俺もつられて、笑顔になる。

俺だって、京と付き合っって本当に良かったよ。

「俺、K'の事…大好きだからね。」

京の改めて告白を聞いて俺は耳まで真っ赤になってしまったけど、あのリョウさんの方からあんな事言われたなんて知らなかったから「七枷さんにあんな事されて、正直ビツクリしてたしショックだっって大きかったんだよ。一日中ずっと、Hされてて体はポロポロになるし何度も妊娠して中絶しちゃったんだから。もしまだ、七枷さんと関係が続いていたらって考えたら身震いしちゃうよ。」

京がブルーになってきたから、俺が後ろから抱きしめた。

「言いたくなくなったら、無理に言わなくなっって良いんだよ。つらいのは、俺だって京だっって一緒だから。紫苑さんみたいに、破綻しかかるのもちよっと困るしさ。」

「大丈夫だよ。K'が、近くにいてくれたから。」

京が、俺に抱き返してきたのを見て俺は少しほっとした。

「京…。」

「だから、K'が不安になる事なんて無いんだよ？」

京が、営業スマイルじゃない本当のスマイルを見せただけで俺だっ

て救われているんだよ。

自分の理性が、飛び掛っているのは別だけど…。

「少なくとも、俺はK」とHした事…後悔してないよ。」

「ただ、ロツクさんの事だってあるしさつき散々京とHしたから何とか理性は納まったんだけど…。」

「K、は？」

「俺は、後悔なんて…してないよ。俺は、京が好きだもん。一番でいられるだけで、十分だよ。」

「ちよつと低音ボイスを意識して、京の顔に近づいた俺に真っ赤になつた京。」

「意識しすぎだよ…。それに、嬉しくて…何か泣きそうになったし…。」

「

京の顔を軽く触つて、そつとキスをした。

「さ…さあ…ロツクの所に行こうよ。」

顔を真っ赤にさせた京と手をつないで、俺はロツクさんと社さんを追いかけた。

一方、ロツクさんと言うと社さんと向かい合わせで話をしている。正直言つたら、すぐ近くの公園だったし話し声は聞こえたんだけどね。

「俺の事、飽きちゃつたの？」

涙目でロツクさんが社さんに訴えているのを聞いていると、100%社さんが悪いのは分かつていたし…。だけど社さん自身もロツクさんがどういう思いだったのか分かつてほしかつたつて言うのも知つているしだ。

「一番シヨックが大きいのは、ロツクさんの方なんだから。」

「飽きてなんか、いないよ。」

社さんの低音的な言葉に、絶叫に近い声で話すロツクさん。

「嫌…だつてっ！…！散々俺の事、好きだつて言つてHしてて忘れら

れなくさせて今更ポイっだなんて最低すぎるよ!!」

号泣したままで、話しているロックさんを階段から下りてきた俺と京が見て複雑な思いになったのは事実で…。

「捨てるなんて思ってないし、別れる為に付き合った訳じゃないよ。それにそんな事、考えてもいないし正直俺だってロックとのHが初めてだったから…。」

社さんの言葉を聞いて、前の彼女だったクリスさんの事を思い出した俺は黙って社さんを見た。

「始めてHした相手の事を、忘れられる事できねえよ。」
真っ赤になって、社さんがロックさんを抱きしめた。

「離してよ。言ったよね？浮気したら、別れるって。第一クリスさんとHしなかったのって、本当なの？」

涙目で怒りながらも真っ赤になったロックさんが、思いつきり睨んでる。

「クリスの事…音楽プロデューサーとしてしか見ていなかったから付き合っている事を言えなかったし寂しい思いをさせてしまったのは俺の方だったから…。でも、あいつがセスとの子供を身ごもったって言うか妊娠したからって別れたんじゃないかって自分から身を引いたんだ。」

ちよっと社さんが女々しいって思ってしまったけど、クリスさんの事は事情が事情だから仕方ないのかなあって思ってしまったのは関係者の俺だけじゃないはず。

ロックさんだって、仕事と一緒にいる時があるから知っているし…。

「浮気しといて、今更俺しかいないって言わないでよ。俺、知っているんだよ？社さんが俺と付き合う前に色んな女の人や年下の女の子と、Hしているって噂知っているんだよ？しかも、もててたって…。」

「真剣な顔になっているロックさんは。少し怖くて…。」

「遊びじゃないよ。第一、俺がロツクの事大好きだつて言うのは嘘じゃないしさ。浮気してたのは俺が悪いから、謝るよ?」

「俺の事、もしかして性欲の『道具』としてじゃないよね?」

横目で、ロツクさんが睨んでいるのを社さんは見て苦笑している。ざまあみる。

「その…なんだ…。本当にロツクが俺のもんだつて思ったら、とてもじゃないけど『道具』として思わないし自分の理性が保てなくなつてきちゃつてさ…。」

社さんが、そう言つとロツクさんが耳まで真つ赤になった。

「最近毎日、Hばかりしてんじゃん。社さんばつかし先にイツてさ、俺何回も気絶してるんだからね。でも、Hしてて嫌じゃないと思つたのは社さんだけだし俺だつて社さんが初めての人だから…。あんな恥ずかしい顔を見せちゃつたのだつて、俺が社さんを好きだつて言う事なんだし…。じゃ、本当に何もしてないんだね。」

念を押されてまた苦笑している社さんが、うなずいてロツクさんにキスをした。

真つ赤になつたのは、近くにいた俺もキスをされたロツクさんも一緒で…。

俺が真つ赤になつたのを見て京が、口を開く。

「ロツクと七枷さんの姿を見てまた、Hしたくなつた?」

首を傾げられて、はにかんだ京の顔を見て俺は自分の理性と戦いながら京に話し掛けた。

「大丈夫だよ?第一、立て続けにHなんてしたら京の体がボロボロになるかも知れないし俺は京を大事にしたいもん。」

低音全開で京の耳元で話した俺に、顔全体真つ赤にした京。

「俺だつて、京の事が大好きだからHしたんだから。好きじゃなかったら、京とこうしてないから。」

風邪を引かせたらまずいと思つた俺が、自分の着ていたジーンパンの上を京に着させた。

もしも風邪を引かせてシエルミーさんにオロチモードでどんちゃん状態にされるのも嫌だし、お姉ちゃんにも説教されるから…。

どっちにしても、最悪なオチになるのは事実で。

でも、Hの時京のあんな顔を見れるのは彼氏の特権なのかなあって。

凄い、真逆のタイトルです。

自分の場合、京達を大好きな【お笑い芸人】さん達にしているため
これを書いている時とかニヤニヤしています。

.....

次回予告

パオ「本当に、変態スケベだなあ。」

作者「何でさ。」

パオ「にたついていたじゃん。」

作者「うっ。」

今回は、22話。.....真紅しんくの黙示録もくしりく.....

気付いた時には、携帯の履歴はジョーさんで一杯になっていて...。悪い事したなあって思っているんだけど、電話に出れる状況じゃなかったし...。

何だか、俺言い訳ばかり言ってるなあ。

本当は、言い訳なんて言うなって怒られるけどただけそんな事言っ
てられなかった状況だったし自分でも罪悪感があったんだよね。

ジョーさんに悪い事したかなあって思ったり、自分でも後悔してしまったり...。

電話がきていたのを知らないで、気付いた時にはジョーさんに説教をされていた。

まあ、社さんの事もあったし何でって言ったけど『言い訳するな』って言われた時にはちよつと凹んでみたり。

確認取れたのだから、2時間後だから怒られたって仕方ないって思っているんだけど京が身震いをしだったので俺は京の体を黙って抱き寄せた。

ピリーさんが殺されたって聞いた時、俺はその場に呆然となったのは事実だし元旦だって大晦日の時だってあんなに元気そのものじゃなかったじゃないですか。

現に妹でたった一人の肉親だったリリイちゃんはショックで霊安室の前で泣いていたのも見てしまつて、俺だって京だってその場から動けなかった。

まだ、神楽さんのお姉さんであるマキさんの事だって解決していないのは事実だし八神さんだってまだ拘留所に居るのだから事実なんだから。容疑はもうなくなつたつて言うかアリバイが成立しているのに、警察の人はまだ八神さんが犯人だつて言っている状況だつて言うのも変わらない。

「大丈夫？辛くなつたんだつたら、無理しないでね。」

京が心配してくれるのは、正直嬉しいんだけど何だか複雑でまだ自分の中でもややも感がおさまらないのも事実だしリリイちゃんが号泣している状態だったから気になつていたんだよね。

「無理なんてしてないよ。心配かけて、ごめんなさい。」

素直に謝つた俺に、京は耳まで真っ赤になつちやつた。

「べ…別に、良いから…」

はにかんだ京も何だか、凄く可愛いくて抱きつきそうになるけど今

はそんな事も言ってもらえなくて本当は気になっていた事があつたらばーっとしていたんだ。

結果的に、京に心配かけてしまったのは俺なんだしここは素直に謝らないと京が泣き出してしまったら騒ぎって言うか説教されるから…。

「そう言えば、元旦の日ってビリーさんとリリイちゃんってHしてなかった？直接的には関係ないけど、気になってたんだよね。」

俺がそう言つと、凶星だったのかリリイちゃんが真っ赤になつちやうって苦笑しながら俺は話を続けた。

「実は響いてたつて言うか、聞こえてたんだよね。俺の楽屋近くだったし、京に話したら思いっきり横目で睨まれたけどね。」

それはビリーさんが、楽屋に行く2分前。俺と京と一緒に帰る時で楽屋のドアは開けっ放しだったのを覚えている。しかもビリーさんの相方であるテリーさんが、ジュースを一人で買いに行った事まで知っていたから。

でも、身内のしかも妹のリリイさんが自分の兄にかかわらず人を殺すなんて考えられないしそれは八神さんだつて同じ事。

兄妹同士でHしたつて構わないつて思っているし、事務所的には2人が兄妹だつて事を知らないから。絶対にリリイさんの感じ様だつたら、中に出されてるつて思つたし正直言つたら見てみたいつて思つたんだ。結局は京に、止められたけど…。

「K, ったら『見に行きたい』つて言つたから、失礼だし止めなつて言つたんだよ？結局は心、折れちゃつたけど。」

だつて行つたりしたら京が泣き出すつて思つたし、リリイさん達がビックリしてしまうつて思つたし周りがうるさくなつてしまつて思つたから。

俺は、京を守れるかちよつと不安になつていたし何回も放送でエリ

ア情報が流れるらしく気が気じゃない状態が段々と迫ってくる。しかも、今年の4月からだから後3ヶ月も無い。

それに『どこで誰と誰がHしてる。』って、言う情報だって流れると知った時はさすがにビックリしたと言うか京が泣きそうになってしまった事だったあつた。

考えただけで、気が変になりそうになっただけど京の事も考えてか黙って京の顔を見た。

「京…どうしたの？」

涙目で俺の顔を見た京に、俺は理性の爆発を抑えながら京の顔を見直した。でも、八神さんをまだ疑っている警察としたら八神さんが犯人じゃなかったらてんやわんや状態になって犯人を探すだろう。現に、八神さんにはちゃんとしたアリバイがあつて証明してくれる人だっている状態だし犯人じゃないのは分かっているのにそれでも警察は八神さんが犯人だつて言つて頑としてしている。

紫苑さんだつて、前みたいにパニックを起こさなくなつたし芸能関係の仕事だつてあの頃みたいに支障が無くなつて来たから。マスコミの人だつて紫苑さんに張り込む事なんて、無くなつたのだつて事実なんだから。

「K' がボーとしているから、どうしたのかなあつて。もしかしたら、ピリーさんの死体を見て具合悪くなつた？」

京が心配している顔を見て、俺は大丈夫だよと笑顔で返した。安心したのか、つられて京も笑顔になつて俺の顔を見た。

「良かったあ。俺…心配してたんだよね。K' に何かあつたらシエルミーさんやK' のお姉ちゃん…じゃなかったウイップさんにも何て言われるか分からないって言うかもしかしたら『にやり』されると思つたし、俺…寂しくなつちゃつて…」

涙目になつてしまつた京の顔に、俺は優しく軽くキスをした。

そして、京を連れてゆっくりと歩いた。あの場所にいつまでも居た

ら体が寒くなると思ったし、本格的に京が泣き出すと思ったから。それに、能力の方だっていつ暴走してもおかしくないって思ってたから。

まあ、キスした時の京の顔を見られたからそれだけでもまだ良いか正直悲しい思いをさせたのは、俺の方だし正月前…って言うか大晦日からずっと仕事が入っていたから正月を京と過ごせなかったって言っちゃえばそうなんだけど…。

「京…あのさ…」

俺が京の手を握って、話した。

握られた京は、耳まで真っ赤になってうつむいてしまったけど。

「正月の時…寂しい思いをさせて、ごめんな。」

はたから見たら、バカツプルの会話に聞こえるけど…。

って言っても、説得力ないし『にやり』されたって仕方ないって思っているけど…。

「ううん。俺…K'と一緒に居られて、本当に嬉しいって思っているんだよ。」

にこつと笑顔になる京が、俺の顔を見る。

笑顔でまた理性が暴走しそうになったけど何とか自分で落ち着かせてみた。

「そっか…」

Hの時を思い出すだけで、俺は男として凄く嬉しくていつもの京の顔も可愛いし…。

こんな事を言ったら、彼女自慢になってしまっけど京を守っていくって誓ったから。例えそれは、京が珠洲ちゃんになっていても変わらない事で好きなのはたった一人だって思えたから。

そう自覚してしまったら、俺まで真っ赤になってしまっ…。

「K'…?どうしたの?」

にやけ顔の俺の顔を、京は首をかしげて見ている。

「んー？ただ京の顔が、可愛いなあって。」
京が耳まで真っ赤になって、下を見てしまったのが分かっているから俺はただニコニコしているだけで。

「もう…K'の、ばかあ。」

「京が…珠洲が、可愛いからさ。可愛い京の顔も、Hの時の京の顔も可愛いしさ。」

にこにこしながら京の顔を黙って見てみると、京も俺の顔を見てまた首をかしげた。

「京は…俺の事、どう思っているの？」

俺もすぐに言葉を言おうとしてるけど、真っ赤になってしまった。

「俺も、京の事…大好きだよ？ロツクの受け売りだけど、『好きなのは』京だけだよ。」

京が真っ赤になってしまったのを見た俺は、京にキスをしようとしたけどこんな所でキスなんてしたら京にしても俺にしても憤死しそうになってしまふのが分かっていたから。

「K'が、キスしたいなら…しても…良いよ。」

京の言葉に、俺が理性を爆発させる所だったけど我慢した。

だって正直言つて、今の俺だったらキスだけじゃ納まらなくなるって思ったし京自身もそれは分かっていたみたいで。

「ベリーさんの事…気にしてんの？」

理性の爆発もあるのに、京自身がはにかんだものだから目をキョロキョロさせた。

でも、ベリーさんが殺害されてそんなに時間が経っていないけど疑問に思ったのは事実で。

京も、リリイちゃんの事が気になっていたからって事もあったらしい。

「うん…。ベリーさんの死因が、刺された事の失血死だって分かっ

ているんだけど全然血が流れてなくてさ。普通って言ったたらなんだけど、必ずって言って良い程血が流れているはずなのに…。でも、京の親父さん…じゃなかった紫舟さんは俺の話なんて聞かなかつたしその場にリリイちゃんがいだから言えなかつたんだよね。」

紫苑さんと同じように、リリイちゃんも倒れてしまふと思つたしもしかしたら精神が破綻しそうになつてしまふのも最悪考える事だつたから…。

すぐに疑われたのは、まだ警察で取り調べを受けている八神さんの方。

八神さんが警察にいる最中に起こつた事件だからもう完全にアリバイが成立しているのに警察はまだ八神さんを疑っているらしい。

紫苑さんがこんな事を知つてしまつたら、今回のリリイちゃんの事みたいに泣き出すのが分かつているから実際には言えなくなつてて…。

それにあの電話がかかつてから、八神さんと話していない紫苑さんからしてみれば凄く辛くて苦しい事だつて思つてる。俺だつたら、発狂するつて言つちやえちよつと大袈裟だけど間違いなく泣くのだつて無いとは言えないんだから。

「確かに、誰かに血を吸われてて血が一滴も無かつたつて言つのはちよつとおかしいなあつて思うけど傷だつて無かつたのだつて事実なんだしさあ。」

京も、ちよつとは気になつてしまつたらしく首をかしげて俺の顔を黙つてみていた。

「俺も正直、『血が無い』つて言うのは分からないんだよね。八神さんは吸血鬼じゃないしその場にもいなくて犯人じゃないつて分かつたのに何でまだ疑つているんだろつて思つてるんだよね。それにまだ、死因だつてハッキリしていないのに…。」

「どつちにしてもリリイが、凄く辛いのは分かつている事なのに何

で頭ごなしに説教に近い事を言っちゃうんだろって思ってもいるんだよね。」

「ただ、それでも我慢できたのは近くで京がいてくれたから。正直、京がいなかったら間違いないでキレていたし大変な事になっていたらかも知れない。」

その点では、京に感謝しているし今でも大好きだよ。

京に改めて聞いた事なんて無かったけど、俺の事本当はどう思っているのかなあって。

『俺が死んだら、哀しんでくれるだろうか。』とか時々でもそう思っちゃう事があったって考え方がネガティブ状態になっちゃうのはあまり思いたくないけど京の笑顔を見てみると、心が落ち着くって言うかネガティブも飛んでしまっつて言うのが事実なんだよね。

もし、話したとして、怒り出すか泣き出すか分からないけど…。

「俺…京に、あんな落ち込ませる事言っつてごめんな。」

そう話した俺に、京は首を横に振った。

「別に気にしなくていいよ。俺…K'の病気の事、亮から聞いているんだよね。今すぐじゃなくても、K'が俺の前からいなくなっちゃって事…。だけど、俺…今K'を失ったら…生きていられないよ。」

「京…。」

京を置いて、死ぬるかよ。

まだ、事件が解決していかないのに心残りが残ったらマジで洒落にならないしこれ以上哀しむ人を増やせるかよ。

それにあの時、自分の病名が分かった日から京の側にいるって思ったんだ。

俺が、本当はこんなに素直だったんだって思えるようになったのは京と付き合ってからだし前だったら人だって信じれなかったから…。

本当は、京にキスしようとしたけど我慢だし京自身がビックリしてドジこいたらこっちだって困っちゃうし泣かしたりでもしたら地獄耳のシエルミーさんにもばれて説教されるのがマジで勘弁だから自業自得だって分かっているし悪いのは俺だから、素直に電撃を食らうしかないのも分かっているから。

「K...?」

だから、自分の理性が爆発しそうになっているのに何でそんな事するのかなあ。

「どうしたの？まだ、気になっている事でもあるの？」

当然の事だけど、まだビリーさんを殺した犯人が持っていた凶器だつて見つかっていないし肝心な犯人だつてまだ見つかっていないつて言うか目星だつてまだ着いてる状況でもない。

リリーちゃんにとってビリーさんが死んだ事で、一人きりになつちやつたし本当に寂しい思いをしているんだから。

それに、警察の人からの思いっきり酷い罵声を浴び続けているし...。シヨックが大きくなっているのも分かっていたし、まるでこれじゃ紫苑さんの時と一緒だよ。

早くに両親が亡くなつていて、ビリーさんがリリーちゃんが大きくなるまで育てたのは誰から見ても分かっていたし葬式だつて本当は開きたいつて思っていたらしいけど警察がそれさえも止めたつて言う話を聞いてちよつと腹が立つたんだ。

「凶器だつて、まだ発見されてないんでしょ？」

俺が、ちよつとキレかかっているのを見て京もちよつとビックリしちやつている。

「されてないけど...。もしかして、キレてる？」

泣きそうな顔をしているのを見て、俺は、ちよつとはつとした。

「キレてないよ？京にキレるのなんて、凄く間違っている事だつて俺だつて分かっているしさ。」

ほっとした京が、時間を見て指をさした。

「今日、これから仕事があるんじゃないの？」

京が指差した方を見ていると、その時間は14時30分。

スタジオの入りが15時だから、後30分もない。

俺は、京のはにかんだ顔を見ながらスタジオのあるテレビ局へ向かった。

スタジオの収録帰りに、近くのコンビニへ行って京のほしい物やペットボトル3本を買って帰った。

バラエティーの収録は基本、1時間番組を3本取る事が多いけど最初は自分の気持ち的にも何とかゆとりがあったんだけど2本目3本目になってくるとちよつとどころかかなり疲れてきていて終わる頃になったら体力的にグロッキーになってしまるのが当たり前の所があった…。

まあ、こつちが芸人やっているからガヤっていれば何とか誤魔化せるから別に良いんだけどね。

京の事だつて、心配だし不安がっていたらちよつとこつちだつてんばつてしまっただけだね。

「た…ただいま。」

俺が、玄関を開けて入ってきた途端京がエプロン姿でキッチンから出てきた。

その姿を見て、一瞬理性が飛びそうになってしまっただけで京の体を考えて黙って見て近くのソファに座った。

「お帰り〜。どうしたの？俺の顔に何か付いてる？」

だから、そんな純粋な目で俺を見ないでくれ。

理性が爆発して、ここで京とHなんてしたくないよ。

「京は、あいかわらず可愛いなあって。」

その言葉に、俺も京も真っ赤になってしまった。

本当は照れないで、京を照れさせたかったんだけど現に照れてしまったから全然説得力も無くて…。

「K'…あのね…」

京が俺の近くに腰掛けて、話を続けた。

「K'と付き合っているんな事があつたけど、今は凄く幸せだし大好きな人とこうしていられるだけで自分が幸せだっと思えるんだよね。前だったら、こんな事だっと思わなかったし『自分なんて…』って思ってたんだよね。」

そう言った京の瞳からは、大粒の涙が流れていた。

いきなりの事だったから、俺もビクリして京の顔を見るしかなくて…。

「ごめんな…思い出させてしまつて…」

抱きしめて、京の顔を見た俺に京が更に口を開いた。

「俺には、K'しかないし大好きなのは…さ。」

真っ赤になって、はにかんでしまった京。

男だったら嬉しいっと思っっているけど、多分逆の状態だったらかまっつて欲しいっと思うかも。

まあ、ここは黙って笑顔になるしかなくて…。でも、嬉しいのは嘘じゃないよ。

嘘なんてついたら、最悪だっと思っっているし泣いたりしたら怒られるのは俺だから…。

京の反応が見たくて、ちょっと突き放したりしていたけど現に後になってこんな状態になるなんて思わなかったからちょっとビクリしたのもあるんだけどね。

まあ、京の可愛い顔も見れるのは俺の特権なのかなあ。

「本当だよ。」

俺が実際に何度も考え事をしていたのも事実だし、京の笑顔もまた見てみたいっと思っっていたからちようど良かったんだよね。

「俺の事…K」が、そう思ってくれているなんて思っていなかったから正直嬉しいんだよね。」

「珠洲ちゃんの事も、好きだからさ。」

京が真っ赤になっっているから、ちよつと俺はとぼけてしまったんだけど…。

「一緒に暮らしている時点で、気付いてよ…。」

俺が、ポケだつて事は京だつて知っていたからこんな時にでもポケないと芸人としてちよつと痛い事になつちやうかも知れなかったから。

だけど、京のあんな照れた顔を見れたからちよつとはラッキーなのかなあつて。

「ごめん…。」

俺が、意識していないけど低音ボイスで京に抱きついた。

本当は、京の服を脱がしてこのままHしたいって思っていたけど玄関のベルが鳴り始めていたからちよつとイライラして玄関に向かった。

『そのの、ラブラブカップル〜っ。』

しかも相手が、拳崇ででかい声を出したから…。

「大きな声で、言うんじゃねえよ。マスコミの人に聞こえたら、どうしてくれるんだよっ!!」

俺が、玄関先でキレかかっていると京が心配そうな顔で俺の背中に抱きついてきた。

「誰?」

「拳崇。あいつ、多分からかいに来たんだと思う。ド近所だし、俺と京と一緒に歩いているのを見ているから…。」

俺がそう言つと、京が真っ赤になってクッションがあるソファまで行って顔をうずめた。

『草薙さんの声…遠くから、丸聞こえやぞ〜。』

拳崇がからかったものだから、京の顔はますます真っ赤になっちゃって…。

「お前も、からかってくるんじゃないよ。第一、地声がでかいからもうちよつとポリウムだけでも下げろよ。」

拳崇を玄関に入れて、軽く説教をすると拳崇が更にからかってきた。実は、俺も真っ赤になっていて…。

「どうせ、草薙さんのあんな乱れた姿を見たくてしたんじゃないんですか？」

ギクつとなりながら、拳崇を軽く睨んでつつこんだ。

この時は、俺が芸人やってて本当に良かったって思ったしちよつと役得かなあって思ったりもしたけど凶星だから言葉に詰まっちゃったんだよね。

「何で、お前にそんな事言われなくちゃならないんだよ。」

京もクツションの中から、ひょこつと顔を出して真っ赤になっちゃってる。

「拳崇のバカっ!!」

拳崇に対して真っ赤になった京の顔もマジで可愛いくて、俺は少したまらないと思っただけど京が泣き出すって思ったし泣き出さないって言っただって俺自身の理性が爆発しそうになってしまつのも時間の問題だし。

どっちにしたって、シエルミーさんからかわれるか怒られるかのどっちかしかないんだけどね。

「人のHを聞いてたなんて、マジで最低なんだけどっ!!」

京が泣き出してしまったのを、俺や拳崇も見ってしまった。

「でも、感じている草薙さんの声も何か凄く可愛いくてセクシーでええなあって思っと思ったん。ほんまに、愛し合ってるんじゃないかって思ってた。」

拳崇の言い訳なんて、どうだって良い。

今は京の方が先だっと思ってたし、泣き出したまま仕事に行ってしまったら大騒ぎになると思うしシエルミーさんに怒られるのは俺だっ
て決まっているから。

まあ、シエルミーさんもどっちかと言ったら腐女子系統の人だから
半分の確率で怒られるかにんまりされるかのどっちかって思うんだ
けどね。

俺は、京の事は一番信じているんだけどさ。

「拳崇なんて、大嫌いっ！！」

京が、拳崇に何個かクツションを投げている。

まあ、からかったのは拳崇だし自業自得なんだけどさ。

「草薙さんに、嫌われてもうたなあ。」

拳崇が悪いから、ざまあみるって思ったけど当の拳崇は自分の頭を
軽くかきながら苦笑するしかないって言うのも分かっていたしこの
まま京を泣かせたままだったらって事も考えたらちよつと冷や汗が
出て来てしまったらしい。

京は、人に自分の髪の毛を触られるのが嫌いらしくそれでもスタイ
リストさんには自分の髪の毛をセットしてもらうらしい。

俺は、何で京がそういう事になったのかも知っているし原因は拳崇
じゃないけど敏感になってしまったのは事実だからさ。

「思いつきり、拒絶されたやん。」

拳崇は、事情を良く知らない。

知らなかったから、触ったって言うのもあるんだけど…。

でも、拳崇にしてみれば『拒絶』されたって思ってしまったんだろ
うな。

「拳崇が、俺の髪の毛を勝手に触ったからじゃん。」

怖がっている京が、俺の服の袖を少し引っ張って下を向いている。

「自業自得だよ。確かに『拒絶』みたいになっちゃってるけど、拳
崇が悪いんだから。それに、本当は下心あったんじゃないのか？」

凶星だったのか、とぼけてしまった拳崇が誤魔化しながら俺の方を見て来た。

本当は、俺だつて自分の理性が爆発しないかちよつと心配になったけど何とか持ちこたえたのは事実だし京のあんな可愛い顔を見てしまったからちよつと心の中で『よっしゃっ』って思ったのも事実なんだよね。

「そういう、K'…お前だつて本当は自分の理性が爆発する程下心あつたんじゃねえの？（にやにや）」
ギクッ。

俺の場合は、良いんだよ。

大事に思っているぐらい、拳崇だつて知っているはずなのに。

まあ、時々理性が爆発しそうになっているのは事実なんだけどね。

「お…お前に、関係ないだろう。」

真ッ赤になっているから、全然説得力にはならなくて…。

「関係無い訳、ないやん。だつて、真隣だから声だつて聞こえるし草薙さんのあんなやらしい声しててHしてないって言ったら誰だつて嘘だつてバレちゃうやんか。」

バレてた…。

京が一瞬泣きそうだったから、俺はドキッとして京の顔を見た。

慌てたつて言うのもあつたし、拳崇がからかったからこうなつたつて言いたいんだけど本格的に京が泣き出しても何か返つてやばいっと思えたから黙つて見ているしかなくなってしまった。

「あーあ。草薙さんが、K'のじゃなかったら俺が草薙さんに告白してたのにさ…。」

拳崇が、珠洲ちゃんを狙っていたつて言うか好きだつて知つたのは京の相方の亮さんから聞いていたから。

それに、番組で京と一緒にいる事が多いから結構ボディタッチが多

いんじゃないかねかって俺だつて思っていたし。

当時はイライラじゃなくてもややもやしていたし、京をこんなに好きになるなんて思ってもいなかったから…。

付き合うようになって京からは、『イラついている時とか、もやっとしていいる時にHするのは嫌だからね。』って言われたのも事実だしさ。

京だつて、俺の事が好きだつて言うてくれたから男としては凄く嬉しくて…。

「俺には、K' しかないって知ってるくせにつ!!」

京が大号泣して、叫んだ。

叫んだ途端、部屋にあった物が俺と拳崇の周りをグルグル回つて拳崇の所に飛んできた。

俺にはすぐに、京の持っている『サイコキネシス』の力だつて分かつて何とかして落ち着かせた。

拳崇の所に物が段々とぶつかつて来ているのを見て、ざまあみろつて思ったけど京の力はまだまだ力を増すばかりで。

「Hの声、拳崇も聞いていたなんてつ!!」

このままだったら、間違ひなくシエルミーさんにオロチモード（程度少な目）食らつて説教だなあ。

「いてっ、いてっ、いてっ。」

京が真っ赤になつて、怒っているのも分かつていたしこのままだったら部屋が壊れる。

「京…っ！落ち着いてっ!!」

京に抱きついて、何とか力が収まったのは事実で京ははつとして真っ赤になつて俺の顔を見た。

「やっと、落ち着いた。」

「K'…!!?ちよつと、苦しいよお…。」

はにかんだ顔をした京は何回も見た事があるけど、今回の事は話が別で。

さっきまで、力の暴走をして疲れ果てているって言うか精神的に変な事になっている状況なのに京は俺に抱きついたままの状態で…。

「ごめん…。」

まあ、俺がちよつと力を入れてるから苦しがつているのもあるんだけど…。

「だって、暴走したのって俺の方だから…謝らなくちゃって…。俺の方こそ、ごめんね。」

「京…。」

俺が京に黙って抱きついていてのを知った京が、更に真っ赤になつて話す。

「K'にしては、珍しく低音じゃないからビックリしてさ。」

俺だって、低音ボイスじゃないけど京にとっては俺は低音ボイスなのかなあ。

意識したつもりは無いけど、京には効果があつたみたいで今にも憤死しそうになつて…。

「この声…嫌い？」

俺なりに、意識した訳じゃないけど京には凄く効果があるみたいで…。

真っ赤になつて俺の顔を見てきたから、これはこれで良いのかなあ。

「嫌いじゃない。」

俺だって、顔を見れないけど京が真っ赤になつている事は知っていたし拳崇がからからつてきたのも分かっていたから。

当然、にやりしてきたのはちよつとムカついただけここは黙らないと。

「人がいるのに、目の前でラブラブや〜ん。」

お前だって、人の事言えなかったじゃないかよ。

詳しくは、俺だって知らないけど結構泥沼で結局はアテナちゃんと

別れたって…。

初めて聞いた時は、凄く驚いたけどロバートさんの件もあったからその事なんだろうなあって思ったのだったってあったんだし…。

「ラブラブって…お前も…。」

京が泣き出すと思ったし、さっきみたいにからかわれるのも嫌だったからあきれれるしなくて…。

「やっぱ、拳崇だってからかう気満々だったじゃんっ！！拳崇だって、ガヤだからいつ言うか、分からないし凄くドキドキするんだから…。」

京の言葉に、拳崇自身も俺も少しいつとなりながら言葉を続けた。「俺だって、ちゃんと時と場は考えてるし見切っている。番組で言ったりしたらK'に何言われるか分からないしさ。」

拳崇は、てんばり出すと口調が関西系じゃないのも知っていたし本当なんだなあって思った。まあ、てんばる原因を作ったのは拳崇なんだからざまあみろって思うのだったって事実だしさ。

こんな事言うのは、ちょっと不謹慎って言うか京に悪いけどこんな顔をした京も何か可愛いなあって。

でも、Hしている時の京の顔を見られているなんてビックリしたし正直もつと聞かせたいって思ってしまったんだよね。

でも、後でシエルミーさんに怒られるのが分かっていたし言えないなあって思ったんだよね…。

「そう言えば、K'？」

俺は、京に呼ばれて後ろを振り向いた。

京の顔は、涙が溜められていて…。

「なあに？」

「K'はさ、俺の事大事にしているって前にK'の事務所の先輩から…ジョーさんから聞いた事があるんだけど…それって嘘じゃない

んだよね？」

思わず、俺は京の身体を抱きしめた。

拳崇に、からかわれたって良いって思ったし京が疑問に思ってしまったのがあったから。

嘘な訳、あるかよ。

「俺が、京の事大好きだって言うのは変わらないし今でも大好きだからさ。」

でも、ジョーさんに言われたのはちょっとしゃくに障るけど…。

「本当？ 凄く…嬉しいんだけど…」

京の顔が、笑顔になって俺の顔を見た。

「でも…でもね。最初ジョーとジョンにからかわれて、真っ赤になっちゃってさ…。近くに、シェンロンがいたんだけど苦笑しちゃってさ。」

その光景にいたかったけど、俺は別の仕事だったし…。でも、ジョーさんの相方であるシェンロンさんがいただけでも良いか。

「で、ジョーさんが『K』の事、ばらせ。』って言ってきてさ…。

正直、黙っていたかったんだよね。」

ジョーさんだって、リリイちゃんと付き合っている事知っているのに何でそんな事言うのかなあ。

だって、ジョーさんがガヤだって事知っていたけど逆に言われたらどうなるんだろうって。

まあ、ジョーさん自身にもアリバイが成立していたのも知っていたしほっとしているんだけど八神さんが今もあーゆう状態だから複雑なんだけどね。

紫苑さんだって、今は落ち着いているけど前だったら破綻の一步手前だったからリリイちゃんだって自分の肉親であるビリーさんが殺されて不安定になっているのも知っているしオフでリリイちゃんが『どっかいきたい』って言って連れてってリリイちゃん的にも落ち着いたみたいだったし…。

「ジョーさんが、そんな事言ってたの？」

俺は、ちよつとあきれて京の顔を見た。

事務所の先輩だし、文句も言えないから黙っているほか無かったんだけど…。

「でも、俺…言わなかったよ。」

まあ、言おうとしてもジョーさんの前のマネージャーで今の俺のマネージャーのねえちゃんに『言うな』って言われたらしいけど本当はねえちゃんも知りたかつたんじゃないかな。

ああ見えて、結構ねえちゃんって腐女子だからこういう話って好きだしさ…。

自分は本当は全部、知っているんだぞ的な事もあるだろうし…。

「やっぱり、あの場所で言っただ方が良かったのかなあ…。」

京がキスしてきそうな状態だったから、俺は耳まで真っ赤になっちゃって…。

はい。やっと、正月シーンです。

長かったなあって思ったのと、自分がこんなに楽すぎるほど書いて
たんだなあって思いちよつとデジヤブになっちゃいました。

.....

次回予告

テリー「やっと、正月か……。」

作者「悪かったね。ルーズすぎて……。」

アンディ「まあまあ。2人共落ち着いてくださいっ。」

今回は、23話。..... 蠍の毒針

本当は、プロポーズを受けているんだけどまだロバートさん達には話していない。だって、何か照れくさいじゃん。

からかわれるのが分かっているし、妬まれても何か嫌だし。

リョウさんには、嬉しい思いをされるのは分かっているけどロバートさんだったら絶対にかからかわれると思ったから言いたくなかったんだよね。どっちにしたって、後でからかわれるのが分かっているのにさ。^^：

まあ、からかわれたってリョウさんの方が空手は強いから殴られる方が多いんだけど…。

「でもさ、正直なところどうなん？男としたら、自分でプロポーズしたいと思ってるんやろ？」

確かに、拳崇の言う通りだけど何でお前に言われなくちゃならないんだよつ！京だって、耳まで真っ赤になってこっち見てんじゃん。「からかうんだったら、やめてね。」

真っ赤になっている京の顔も何か癒されるけど、そんな事も言ってもらえないし正直理性が落ちそうになったけど本当に京が可愛いのは事実だし一緒にいられるだけで俺は幸せだって思っているのだって嘘じゃないから。

誰にも、京が好きだって言う思いは負けないから。

「別に、良いやろ？俺は、本当の事言っているだけやし。」

拳崇がそう言うのと、京の顔はますます真っ赤になってしまつて…。

「からかわれるの、嫌いなんだけど。」

京が半べそをかいているのを見た俺は、ちょっと拳崇をにらみながら内心では自分の理性と戦つてみたり。

「確かに、そうかも知れないけどからかうんじゃねえよ。真っ赤になつたんだから、少しは責任持てっ！！」

黙り込んで、あたふたしてしまつた拳崇を見てちよつとざまあみろつて思つたけど俺だつて人の事言つてられないのも分かつていたし京が泣き出してしまうつて思つたから黙るしかなかったんだ。

「まあ、なんと言うか本当に羨ましくてさ。ちよつとからかつたんだ…ごめん。でも、付き合っているから当たり前前つて言つたら当たり前前だけだ。」

ねえちゃんやシエルミーさんとほとんど考え方一緒だと思つたけど拳崇もいろいろあつたんだなあって。

「まあさ。俺は、草薙さんが幸せだつたらそれだけで良いんだけど

さ。」

前に拳崇が、京の事が好きだって言ってたのは知っていたしちょっと複雑なのもあるんだけど今は、俺の事好きだって言ってくれて正直嬉しいんだよね。

拳崇だって、本気じゃなかったらこんな事言わないだろうし。

京と知り合った頃は、ただの共演者だって言う認識しかなかったけどあれから俺の方が『付き合ってくれ』って告白して付き合うようになってHもするようになって…。

俺は、こんな日がいつまでも続けば良いなあって思ってた。

だけど現実には、そんな事が出来なくて八神さんが疑われているのだからまだ続いているしビリーさんやマキさんが殺されて犯人だって捕まっていないからこんな事って不謹慎かなあって思ったりもしているんだよね。

「K、？」

俺の顔を京は、心配そうに見てきた。

俺は、京の頬にキスをした。

「キスで、ごまかさないですよ。」

いろんな事があって、大変なのはわかるけどそう思えるのは誰の目から見ても無理してんじゃないのかって思ってるんじゃないかって…。

「拳崇の前でキスしないでって、言ってたじゃん。」

本当にかわいって思っていたんだもん。

「先からずっと、考えてばっかだよ。どしたの？」

せっかく、自分の理性を何とか落ち着かせようとしているのに肝心の京がこれだから…。

「拳崇がいるのに、妙にべたりだから…。驚いたし、恥ずかしくつたんだけど…。」

拳崇にからかわれるのが、分かっていたから京もびくびくしていたみたいで。

「ちょっと考え込んだら、俺が話そうとしても聞いてくれないんだよね。ビリーさんの事で、疑問に思うのは分かるけど…。」

「京…。」

つられて笑顔になる俺に、京も安心したらしい。

あーもう、何でこんなに可愛いんだろう。

ここでまた、Hしそうになったじゃん。

「さかるのはええけど、昼間から止めるよ。」

拳崇に案の定、からかわれてしまったんだけど今回はこっちが悪いんだから仕方ないか。

「さかったら駄目だって言ったのに、いきなりだったら最悪だよ。」
涙目で、俺の方を見た京を見て俺はビツクリした。

「俺…K」とHするのは嫌じゃないよ？確かに、K'が最近…テレビに出るようになって…俺の事言わないのかなあとかわれなのかなあとか思ってた。だけどK'は、芸人だしおいしい思いをしてんじゃないかなあって思っていたらちょっとデジャブになっちゃってたさ。」

京の言いたい事は、俺にはすぐに分かった。
複雑な思いをしているのも本当は知っていたけど、京があまり感情を表に出さないって言うのも知っていたから。

本当は、素直に出してほしいって思ったけどあんな事をしたばかりだったし拳崇がからかってきたからこうなっちゃったんだ。

拳崇のせいにしたって、何にもならないけど。

「別に…K'の事、嫌いになった訳じゃないからね。」
そんな事、分かっているよ。

嫌いだったら、京とこんな事しないもん。

京の事…珠洲ちゃんの事、大事にしたいって言うのは本当だし酷い事をしてシエルミーさんに怒られたくないから。

「だけど、K」と事務所が違ってからちよつと複雑なんだよね。事務所の社長さん達が否定してたらどうしようとか思ったら…。」
「言えないのは、俺だつて一緒だよ。」

だつて、ねえちゃんにしてもシエルミーさんにしても俺と京が深い仲になっているのは知っているけどお互いの社長は全然そういうのを知らないから…。」

それに改めて言うのなんて、凄く緊張してしまうんだけど…。」

「心配ないで。あの社長は、理解者だから…。」

拳崇と俺の事務所の社長とはどういう関係か分からないけど、理解者つて言ってくれたからちよつとは安心した。

京の事務所の社長さんは、知っている人だから説得すれば何とかかなるんだけど絶対に後輩の子達とかにからかわれるのが分かっているから憤死しかかってしまうのだつてあるらしいんだけど。

「草薙さんが、落ち込んでいるのを見るの…俺も辛いですからね。」

「拳崇…。」

「俺…この後、ロバートさんと会つて…ちゃんと話して来る。ロバートさんは、ユリちゃんと言う彼女がいるのに俺と愛人関係続けてもええのかなあつて思っているんだ…。でも、俺…ロバートさんにあんな事されて…今更忘れられる訳無いやんか…。」

別な事務所に移つても、拳崇にとつたら京は尊敬する先輩で。

まだ、ロバートさんとの関係が終わっていないのかと思つたけど泣き出すと思つたし一番辛いのは拳崇なんだつて思つたから。

「俺…パオや桃ちゃんに、ロバートさんとHしている所まともに見られて…。凄く恥ずかしくて『見るな…あ…。見ないでえ…。』つて、言つたのに…。ロバートさんが、全然聞いてくれなくてさ…。結局、最後までされたんだ…。」

隠していたのも知っていたし、もしユリちゃんにばれたりもしたら

間違いなく修羅場だって起こるって思っていたから言えなかったんだろうなあ。

「本当は、ロバートさんの幸せを考えて自分から身を引きたいって思っていたのに肝心のロバートさんがHで誤魔化してさ…。体格差があるから、辛くなるの分かっているのに聞いてくれないし…。でも、ロバートさんと一緒にいる中で段々と忘れられなくなってきて…。」

自暴自棄にならなくて、自分で話せただけでも拳崇にとって良い事なのかなあって思ったから俺もちょっとだけどほっとした。

「拳崇がそう思っただったら、俺は構わないし決めるのは拳崇だよ。ちよつと言い方に頼りにならないかも知れないけど最近の拳崇を見ていると辛そうだなあって思ったし生本番中に泣き出したって言うのを何度も見てるから…。」

誰からって言うのは言えないけどもし拳崇が、俺と同じで性別変化していたら間違いなく妊娠していると思っただし絶対にロバートさんは【認知】してくれないと思うから…。

「ロバートさんは、俺の事性の処理するだけだっと思っていても知れないけど俺にとって尊敬する人やし事務所も一緒だから凄く辛いんだよね。優しい人だっと思うのも、知っているから…。」

拳崇の目には、大粒の涙が…。

そう考えたら、ロバートさんがちよつとにくつたらしい。別に殺意とかそんなんじゃないけど、傷ついているのは拳崇だって分かっているのかなあ。

「俺：ここんところ、ユリちゃんの仕事が忙しくなってからロバートさんが俺の身体ばかり求めてきてん。立てなくなるまで、Hしてくるから自分で処理も出来なくてさ…。」

泣き出してしまった拳崇を見て、俺も京もオロオロしてしまったのは事実だったし慌てて冷蔵庫にあるジューズをグラスに注いで拳崇

に渡した。

「俺の体…ロバートさんの、ものになっちゃったやんか…。」
俺が、2ヶ月前にロバートさんと拳崇が拳崇の楽屋でHしている所を見てしまっているから複雑だったし無理矢理に近かったから…。
俺らも色々大変だったし（今もだけど）、何にも言えなかったのは悪かったって思っているけど本当に言えなかったんだ。
ロバートさんが、拳崇が男だって言うのを知ってるのかなあ。知っていたとしても、知らなかったとしても酷い事をしたって言うのが分かっているのに。

「K…あのさ…俺…どうすれば、良いの？」

涙を流して拳崇が、俺に寄り添ってきた。京も一瞬、嫉妬をしそうになりそうだって思ったけど事情を聞いていたから何だか複雑な顔になってしまっていて。

「放って置くんなんて、マジで最低だからさ。とりあはず俺も一緒に行くから3人でロバートさんと話しよ？」

ユリちゃんが長期のロケで居ないって言うのを事務所のマネージャーさんから聞いていたし、リョウさんが言っていたから知っていたんだ。

当然話をするのは、今しかないって思っていたし拳崇本人がちゃんと話をしたいって言うていたからって言うのもあったんだよね。

「うん…。」

まさかいくらロバートさんでも、俺らの目の前で拳崇を犯さないだろうって思っているけど…。

「でも、またHで誤魔化されそうで…。俺…何だか、怖いよお。」
そんだけ、Hの時のロバートさんは拳崇にとって【怖い存在】になっ
てしまっていて…。

「大丈夫だよ。ロバートさんの方が先輩だけども、もし目の前で犯したらブン殴ってやるから。第一、ロバートさんだってそんな事一

「番に分かっているはずだけどね。」
拳崇が不安になってしまっている事は、俺にも分かっていたし京がまたそんな状況になってしまったら絶対に許せないと思う。
ロバートさん自身が拳崇の事をどう思っているのかは本当は知らないけど、間違いなく言える事は関係を持った事で拳崇がどれだけ傷を負っているかって事。

ユリちゃんとの事もあるし、本当は拳崇自身が自分で身を引くって決意したって言うても現実にも男で同じ同性のしかも同じ事務所の先輩のロバートさんと何度も関係を持ってしまっている事の罪悪感だっと思う。

俺が、元の女の体の状態でこう言う事になってしまったら大変な事になると思うし京だって哀しむと思った。

京の事は大事にしたいって思っているのは事実だし、嘘なんてつきたくない。

「そうかなあ…。別にKの事を信じないって訳じゃないけど、前に一人で説得しに言ったんだけど結局はまたHで誤魔化されて…話をしたかったのに聞いてくれなかったん。ロバートさんの事は、信じてるんやけど、これ以上…体がボロボロになるのなんて嫌やから。」

泣きながら話した拳崇に、俺はまた黙ってしまったんだけど傷つくのは拳崇とロバートさんの彼女であるユリちゃんなんだから…。

拳崇としては、ロバートさんは本当に尊敬する人で事務所が一緒だから顔を見ないって事は無いらしいんだけどでもその事務所の会議室の中でも散々関係を持ってしまって聞いてから凄くイラ立ちが出てしまったのは事実で先輩が自分の直接の後輩に関係を迫って関係を持ってしまったのは本当に許せない。

良く、事務所の社長にバレなかったよなあって思ってたんだけどこのままだったらいずれバレると思うし拳崇は事務所の看板芸人だって

言うのを知っているからあたふたするって事もあるんだけど…。
拳崇だって、ロバートさんとこんな関係になる為に芸人になった訳じゃないのも知っていたからこのままだったら紫苑さんやりりイちゃんと理由は違うけどやばい状態になって自己嫌悪になってしまうのが分かっていたから。

「K'の言いたい事は、俺だって分かっているよ。けどでも、俺も凄く辛くてこんな事務所の先輩達には言えへんし社長にだって言えないんだから。でも、本当は言った方が一番良いつて言うのは自分でも理解してて…。でも、言えないでいるから余計に辛くなっちゃってどうしたら良いか分からへん事になってて…。」
俺が少しオロオロしてしまったのは、前に京がソワレさんに犯された事を覚えていたから。

あの時は、すぐに俺がキレてしまって殴りかかってしまったけど気付いたらソワレさんの方が先輩であとになってビビってしまった事になってしまったから。

「せつかく自分から、身を引いたって決意したのに体が覚えてしまつていて…気付いたら俺…ロバートさんの事を忘れられなくなつてしまったん…。」

複雑な思いと自分なりの決意の中で拳崇は揺れ動いているのも知っていたし一旦決意したら突き進むって知っていたから本当に今度のは当たり前つて言ったら拳崇には悪いけどマジでそう思っているんだろうなって…。

でも、肝心なロバートさんが拳崇との関係を終わらせたくないって思っていたら大変な事になるしロバートさんの彼女であるユリちゃんがかんな事を知ってしまったらどうなるかなんて考えたらちよつと背筋が凍るけど…。

ユリちゃんは浮気が嫌いで、この話を知ったら絶対に泣きだすと思つてもしかしたら拳崇とアテナちゃんみたいに別れてしまう事だつ

て無いって言えないから…。
まあ、どっちにしても修羅場になる事には変わらないけど…。
何より一番大事なのは、ロバートさん本人がどう思っているかって事なんだけど…。

もし、仮に拳崇の事を『性欲（H）の為』だつて言ったら俺はマジでキレて何するか分からないし男としてじゃなくて人間としてやっちやいけないって思っているから。

ロバートさんは、俺のこんな気持ちに気付いてくれないし『ユリちゃんにこんな事言うな』って言われていて…。」

本当に、何考えているんだっ！！あの人はず！！

それじゃまるで、拳崇の事を完全に『性欲の為』だつて思っていないって事じゃん。それに、拳崇だつてユリちゃんだつて可哀想だつて思わないのかなあ。

そう思ってきたら、ロバートさんの事を凄く憎たらしいって言うかイラだつてきちゃって殴りたいって思ったけど京が泣きだすって思ったし拳崇だつてまだ本当にロバートさんにどう話を切り出した方が良くって言う事で頭がぐるぐる回っているのが分かっていたから。

「酷いつ！！本当に、何考えてるの？」

京も拳崇の気持ちも分かっているし相手が違うけど京だつて被害を受けていたんだから。

「性別が違つたつて、傷つくのはされた方なんだよっ！！」

京も俺も、ここでキレたつて何にもならないし自分の部屋だからロバートさんの部屋に行って説教していれば本当は良いんだけど…。

「八神や七枷さんみたいに、ただヤルだけだつて思ってたんだ。最低っ！！」

マジでキレていると思ったのは、京が握りコブシを作っていたのが分かったしあんな京を見るのは京が男の体に戻っている時にしか見た事が無かつたから…。

「俺、本気でロバートを殴りたくなってきた。本当は俺だって、自分のフラッシュバックがまた起こりそうで嫌なのに何でロバートはそんな事するのかなあって思ってたさ。拳崇は俺にとってもロバートさんにとっても後輩だって分かってるのにさ。自分に彼女がユリちゃんが居るのに、わざわざ自分の後輩と関係を持って一番辛いのは拳崇だって事ロバートだって気付かないのかなあ。」

「キレるにもキレられない状況なのは俺にも分かっていたし、俺自身もロバートさんに対して殴りたいって思っていたのも事実で…。」

「けどもし仮にキレたとして殴りかかったとしたら事務所も大変な事になっちゃうし京だって泣きだすと思ったからどっちにしても後味が悪いって事ぐらい俺だって分かっていたから。」

「それに当の拳崇だって、それを望んでいないって言うのも知っているから余計に冷や汗が出てくる状況になってしまつて。」

「もし、俺がロバートを殴つてもK'は止めてくれる？」

「だから、そんな上目使いでこっちを見ないでくれ。」

拳崇が居るのに、京とH出来ないって思っているしからかわれるのが分かってるから京だって嫌だって思っているんだろうな。肝心の拳崇だつてもしかしたら京と同じ状態になつてしまつと思つたら絶対にできないし…。」

体力の問題があるから、出来るかどうかなんてわからないけど…。」

「自分の理性が飛ぶぐらいまで枷をグラグラさせる訳じゃなくてもし外れたりもしたら修羅場になる事だからって事もあるんだけど…。」

「おねえちゃんやシエルミーさんにも怒られると思つたし京の事が大事だつて思っているから浮気なんて絶対にできないって思っていたから。」

「大丈夫だよ。俺だって、警察の迷惑になる事なんてしたくないし。」

「そっか…。」

暗くなっていくのは分かっていたし、怒っている事だって分かっていたから…。

ロバートさんと京は同期だから、問題を起こしてもらいたくないって言うのだって思っている事も分かっていたし。

「本当だったら、ロバートと喧嘩なんてしたくないんだよ。だって、悪いのはロバートだって自分でも分かっているのかなあって思っ
て来ちゃってさ。」

京の言いたい事は、分かっているんだけど本当は俺だって話し合いで解決したいんだって思っただけだ。思っているんだから。

もし、ロバートさんが拳崇と別れる事が嫌だって言ったら自分から身を引くって言った拳崇の意思を無駄にするって思っただけだ。一番悪い方にいったとしてユリちゃんと拳崇がロバートさんをめぐっての修羅場になるって思ってしまった事。

そうなってしまったら、京と俺が喧嘩した以上に大変な事になってしまっただけだ。ユリちゃんもどっちかと言ったら頑固って言うた方が早いぐらいだから。

だからこそ、一度はロバートさんとちゃんと話をしたいって思っただけだ。拳崇の事だとしてどうなるかなんて分からないから…。

現に、ロバートさんに色々されて忘れられなくなってしまうってのが現実だ。言っただけじゃ現実だし…。

「もし思っただけじゃなかったら、マジで最低なんだけど…。」
「本当の事だからこそ、うなずくしかなくて…。」

「無責任な事だ。言えないって言うのはロバートさんだ。知っただけだ。京が怒るの当たり前だよ。」

別に、俺もロバートさんの言う事とかはちょっと疑問に思っただけだ。俺にとってもロバートさんは先輩だし事務所は違っただけだ。可哀な事だ。思っただけだ。あるから。

でも、拳崇の事になったら先輩後輩の中だけじゃなくて一人の男に

なるみたいでどうやらマジで拳崇の事を『性欲の足し』にしているとマジで思った。

それだけちよつと、イラついているのだってあるけど結局は一番の被害者って拳崇の方じゃなか。

確かに、ちよつと前だったら殴ろうって思ったけど事務所で大喧嘩起こしたくないし一番最悪な事だって自分でも思っているからなあ。

第一、拳崇だってロバートさんにあんな事をされて忘れられなくなつてしまっているのに今更ポイっだなんて男として最低だよ。

確かに俺も、本当の体は女の子だけどさ…。

だけど、拳崇が傷ついている事は誰から見ても分かっていたし一期ロバートさんに毎日され続けていて壊れる寸前までいったのを聞いていたしもし、拳崇が京と同じ状態になつてしまつて考えたらイラつきが治まらないって思っていたから。

どっちにしても、ユリちゃんにバレて最悪な事になるって事は分かっているから何にも言えないしそうなつても悪いのはロバートさんの方だから。

「んじゃ…。行くつか。」

そう言った俺は、拳崇と京を連れてロバートさんの居る場所まで向かった。

一番毒が強いのは、なんだろうって思って考えついたのがこのタイトルです。

実際には、蠍を見た事が無いんですが結構会ったら怖いと思ってます。

.....

次回予告

作者「^{ゆみや}本当に、京って...珠洲ちゃんって可愛いなあ。」

珠洲「^{スケベ}変態っ。」

作者「^{ゆみや}だって、男だったら抱きつきたいぐらいだもん。」

K「.....。」

今回は、24話。.....真っ白な星 ^{ホワイト・スター}

.....真っ白な星　　The sky is filled with

まだ、拳崇けんすうとの関係を終わらせてなかったみたいでユリちゃんにも
バレそうだって言っていた。

自業自得だっと思ってたし、拳崇けんすうだっ**て**泣いていたのは事実なんだか
ら。

だからって、ロバートさんの事を許した訳じゃないし自分の後輩な
んだから何とかするのはロバートさん自身けんすうなんだから。拳崇けんすうだっ**て**、
ちゃんとロバートさんの事を整理したいっ**て**思っていたのは俺も一
緒だったから。

あの後、ロバートさんが居るスタジオに向かって車を走らせた。

スタジオに着いて、ロバートさんがレギュラーをしている番組が終わるのを待っていた。

生放送で、曜日が違うけど俺や京もレギュラーで何だかいつものロバートさんと違って好青年に映っているから何だかちよつとムツとした。

俺らは、生本番が終わるまでロバートさんの楽屋で待っていてロバートさんが生が終わって楽屋に戻るまであと20分以上ある。

好感度を気にしているのか分からないけど、『俺は、大事な人以外愛せません。』って言うぐらいに余裕がありすぎる。

本当は、拳崇と言う愛人がいて二股をかけている事。

しかも、自分の彼女にはバレずに平気で浮気をしている事。

二つも嘘を言っているのに、まだ自分自身を嘘で固めてしまうのかって思ったら冷や汗どころかちよつと呆れてくる。

何せ一番傷ついているのは、拳崇で現に番組だつてまともに見れていない状況だから。

バレたら嫌な思いをするのは、拳崇だつてユリちゃんだつて同じ事だつて知っているはずなのにそれでも拳崇との関係を止めなかったのはロバートさんだし一番悪いのはロバートさんの方なんだから。

拳崇の気分が、段々と落ち込んでしまっているのを見ている俺もそして隣に居る京も何だかビビってしまったって何にも言えなくなっちゃったんだ。

ネタにされるか、からかわれるか分からないけど少し芸人としたら美味しいと思うのは事実で。

だけど、そんな事も言ってられなくて普段だつたら笑いに変えて何とかなるけど本当に今回は緊急事態だからそんな事だつて言えない

し暴動が起こってしまったっても対処できないし拳崇だつて辛い顔をしているか分からないのにこのまま置いておくのなんて最低だつて思っている。

何より、何もくわれない顔で拳崇の事をこれ以上言えないらしい。

「K……？ロバートさんの事、まだ殴りたいって思っているの？」

京が、楽屋にあったモニターを見て、俺に話しかけて来た。

「別に思っていないよ。スタジオに殴り込みに行つて暴力沙汰になったら、それこそ騒ぎじゃん。どうせ殴るんだつたら、事務所とかマンションに帰つた時にしてるし拳崇の事で来ているのに俺らが騒ぎを大きくしたつて何にもならないもん。」

俺がそう言つた途端、京が笑顔になる。

「第一、京を泣かせたくないって思っているしさ。」

これは、半分本当の事。

京が悲しみて暴走したつて大変だし、それが元でスタジオ出禁くふんになるのだけは絶対に嫌だから……。

「そっか。」

もう半分は、シエルミーさんやお姉ちゃんに怒られない為。

出禁になるより、こっちの方がマジで怖くて考えただけで冷や汗が出てくる。

まあ、その前ににやりしてくるのが分かっていたから何にも言えないし……。

番組が終わつて、ロバートさんとマネージャーさんが楽屋に入つてきた。

さっそくと言つてなんだけど、あの事を聞かないと俺なりに納得が出来ない。

「ユリちゃんの事……どう思っているの？」

本当は拳崇の事を聞きたかつたけど、彼女であるユリちゃんはこの事知っているのか気になつていたから。

拳崇とユリちゃんは仲が良いし、ほとんど同期だから。

ユリちゃんは彼女だし、知っていたとしても複雑な思いになってしまうのは事実だったし今更だけど拳崇との仲を悪くなるのだけは絶対に避けたいって思っているし…。

バレたとしても、何かの対処法になるって思っていたから。

「ユリちゃんは、大事な人やで。もちろん拳崇だって大事な人だっ
て思ってる。さすがに、リヨウにバレて殴られたけどユリちゃんも
拳崇は俺がHした相手やから。」

そんな事、良くぬけぬけと話すなあ。

拳崇は凄く傷ついて、自分から身を引きにわざわざスタジオまで来たのに。

お陰で、ロバートさんの楽屋に入って来る時に社さんに思いっきり首を傾げられたのに…。

まあ、俺が拳崇と京を先に楽屋に入れたんだけど…。

「俺は、どつちとも別れるつもりなんか無いで。」

贅沢だっと思っただけど、今後もロバートさんは二股を続ける気が無い。

拳崇が自分で決めた事、無駄になると思っただしこのままだったらユリちゃんにバレて修羅場になるって知っているのかなあって思った
ら何にも言えなくなるのあたりまえじゃないですか？

ただでさえ、拳崇が辛い思いをしているって言うのを知っているの
に何で無駄にするんですか。

ロバートさん自身の幸せを祈って自分で身を引くって思っていて楽
屋まで来ているのに…。

「てっきり、俺は拳崇が俺とHしたためにこっちに来たのかなあ
って思っちゃってんよ。」

だから、違いますって。

「俺…ロバートさんと、こんな関係続けたってユリちゃんには悪い
って思っているのに何でロバートさんは言う事聞いてくれないの？
俺は、ロバートさんと別れる為に今日楽屋に来たのに…」

一瞬何の事だか分からなかったのか、少し経ってロバートさんはビツクリしている。

「ほ…ほんま？」

ロバートさんがそう言つと、拳崇がこっくりとうなずいた。

「このままだったら、俺の体が壊れて仕事まで差し支えたらどうしようって思っちゃって。」

拳崇が涙を流して、ロバートさんに訴えたから少しは懲りたのかなあ。

いくらなんでも、泣いていて勝手に盛り上がってHまで言ったらそれこそ最低だつて思っているし、今度こそ拳崇が壊れちゃったら事務所経由で怒られるのが分かっているから…。

「ごめん…でも、Hしてもええ？」

本当に、節操なしだなあつて思ったけどここは拳崇から離さなくちゃ。

一番可哀想なのは拳崇だし、ユリちゃんだつて複雑な思いだよ。

「Hなんて、嫌だっ！！」

拳崇が楽屋中に響くように声をでかくしたから耳がキーンとして来たのは事実で…。

でも、拳崇自身はちゃんと話をしたいつて思っているのに…。

「せっかく、俺が自分で身を引くつて言ったのにロバートさんがHで結局はごまかそうとしてるから余計に辛くなるんだよ。」

また泣き出してしまった拳崇の顔を黙つて見ているしか出来なくて俺はオドオドしだした。

現にキレたつて何にもならないつて思ったし、拳崇の事も考えたら殴る気だつて起きなくなつてしまった。

「Hなんてしたら、ロバートさんの事本当に忘れられなくなつちゃうよあ。それじゃなくなつて、初めてを取られた時だつていつの間にかロバートさんの事忘れられなくなつちゃつて自分で腰振つていたんだから。それに、アテナにもバレて別れる事になつちゃつたし

…。」

これには、責任を感じてしまったロバートさんが驚いてしまつて…。「え？それやったら、今現在フリーでHしてもええって事やんか。」何で、また。

「ユリちゃんがしばらく帰つて来ないから、何か溜つて来ちゃつてさ…。」

だからって、拳崇とHしていたら何にもならないって事ぐらいロバートさんだつて分からないのかなあ。

分らないとしたら、マジで殴りたいんだけど。

「俺、ロバートさんの事好きになつてた。だけどロバートさんにはユリちゃんって言う彼女が居て…好きになつちゃだめだつて思つてた。思つたから、自分で身を引くつて思つたしこのまま一緒に居たらまずいつて思つたから…。」

ロバートさんも黙つて、拳崇の方を見ている。

「でも、ロバートさんは…俺の体だけが…関係を持つ為だけだつて知つてずつと悩んでたん。」

泣いている拳崇が何とか言葉をつないでいるのも分かつていたし、それだけでも凄く辛いんだつて分かつた。

「ロバートさんと関係を持つているなんて誰にも言えなかつたしパオにも言えなかつたん。あんな姿を、見せてしまつたから…。」

自分で背負いこんでいたなんて、まるで前の俺みたいで何か複雑な思いをしてしまったのは事実だしこのままふさぎ込んだままの拳崇を黙つて見ていられないつて思つたのも事実だから。おどおどするしかなくて、本当はもっと大事な事を言つてやろつて思つたけど黙つている方が多くなつちゃつて。

「俺…ロバートさんがそういう風に俺の事を見ていたなんて、凄くショックで…。」

嫌な思いをしているのは、拳崇自身だつて思つているし俺だつて本

当は殴りたいってさっきまで思ってたよ。

だけど、拳崇が泣いているのを見て殴れる状況じゃないのだって分かったし本当は拳崇が殴るのが正解だって思ったから。

尊敬している先輩だったから、関係を持ってしまった事で拳崇が凄くつらい事になってしまったのも知っていたから。

ユリちゃんの事も、最初は考えられる状況じゃなかったらしいし。頭がぐるぐると回ってしまっている状況でパオがうるさいのが嫌いって言うか騒動大嫌いだから余計に言えなかったんだと思う。

「ロバートさんの事：俺：これからどういう風に見ていけばええの？先輩後輩なのは分かっているけど、何か複雑で俺一人何か苦しくて…。」

「拳崇…。」

ロバートさんが苦笑しているのを見て、拳崇がさらに話を進めた。

「こんな思いにさせたの…ロバートさんのせいだからね。」

拳崇が泣きながら、ロバートさんに怒っている姿を見た京は拳崇の肩を抱きながら話す。

正直言ったらちよつと嫉妬したけど、キレたって何にもならないって思ったし事情が事情だったから。

「俺が何度も、注意したよなあ？何で、俺の話聞いてくれないの？」京が半分キレかかっているのを見た俺が、冷や汗をかいた。

「俺、楽屋とかで、Hとかするとマスコミの人達にバレるって何度も話したよなあ。」

「俺だって、K」とHはしたいよ？だけど、あそこでHしたいって言ったらK、だって困るだろうし場違いだって思っているから。」

京が何を思ったか、俺とHしたいって言い出した。

案の定、俺は耳まで真っ赤になってしまったけど京自身も自分で場違いだって事を分かっているみたいらしい。

最低だって、自分でも思っていたと思っただけで楽屋で前にソワレさんに強姦まがいな事をされたしテリーさんにもされたから余計にそう

思っちゃったのが分かってたから。

京自身のフラッシュバックもまだ納まっていけないのに拳崇の事だから余計に自分の事がぐるぐると回ってきてしまったと思った。

肝心な俺だって、少しぐらいはホツとしたけど今は京の事じゃなくて拳崇の事でスタジオに来ているんだから。

「『場違いだけど、ラブラブだねえ。』ってからかわれるの分かっているから自分でもセーブかけようって思ってたのに、ロバートがそんな事していたら拳崇だって可哀想だよ。『K』とHしたい。』って、言った時点で説得も何もないけど…。」

拳崇もロバートさんも苦笑して冷や汗をかいてしまったのは分かっていたし説教される事をしたのはロバートさん本人だからざまあみるって思っただって事実なんだよね。

だけど、もしまた京が誰かに強姦されたりでもしたら今度は俺自身何するか分からないしもしかしたら傷害事件まで発展してしまうかと思ったらちよつと冷や汗をかいてしまった。

「結局：俺は、拳崇に辛い思いをして来たんやろうなあ…。本当に、ごめん。」

ロバートさんが、拳崇に土下座をした。

本当はもっと早くにしてくれていれば、拳崇だってこんなに苦しまなくなっただって良いと思っただのに…。

「なのに俺は、拳崇の気持ちも分からないで関係を持ち続けてて…ほんまに俺は…最低な男や。」

自覚してくれたのは良いんだけど、今度は拳崇が困り出した。

「ユリちゃんとは、どうするの？ユリちゃんは俺とロバートさんがこんな関係になっっているって事：知らないんやないの？俺とロバートさんは、事務所が一緒だって言うのは知っているらしいけど…。」

「俺、てつきり拳崇がHを拒絶してなかったからさこのまましても良かったって思っと思ってさ。」

ロバートさんがそう言つと、拳崇が更に涙を浮かべてこつちを見ている。

「だけど、本当は凄く辛くて嫌だつたつて聞いて仕方ないつて言うかビツクリしているやけど。誤魔化したつて何にもならないつて事ぐらい俺だつて分かつているんだけどさ。」

やつと自分のした事を自覚したのか、申し訳なさそうに拳崇に謝つた。

理解した事で、ロバートさんが慌て出すのも分かっていたし自業自得だつて思つたのもあるんだけど。

でも、殴らなくて良かった。

殴つたとして、後で事務所の社長に呼ばれて説教されるのも分かっていたしこれが原因で京と別れる事になつちやつたらそれこそ修羅場だしシエルミーさんやお姉ちゃんにからかわれるのだつて必然だから。

ロバートさんだつて、今更謝つたつて後の祭りだつて分かっているのに拳崇と関係を持ち続けていたのは事実だしユリちゃんにバレたりしたらそれこそ修羅場だから。

まあ、どっちにしてもロバートさんが悪いんだから自業自得なんだけどね。

「だから、あの時…事務所に行かなくちゃ良かったんだ。行つたから自分で苦労して、こんな事になつちやつたんだから。」

後悔している拳崇を見て、京が口を開いた。

「ほら見る。ロバートがこんな事したから、拳崇だつて頭の中ぐるぐるしているんだぞ！！責任感じるなら、自分で何とかしろっ！！」
京が、半分キレてる…。

当たり前だつて思つたし、ロバートさんが悪いのは決まっているんだからつて思つていたけどこんなに早く京がキレている所を見てしまふなんて…。」

「『何とかしろっ！』って言われたって何したらええか分からんも
ん。」

開き直りに近いロバートさんの言葉に、拳崇が号泣した。

「何で、開き直っているの？ロバートさんが悪いの分かっているんだよ。俺、ロバートさんの事信じてたんだよ？何か、裏切られたみたいになっちゃっていったい誰を信じれば良いか分からないよ。ロバートさんと関係持っている事をアテナにバレて別れちゃったし桃ちゃんやパオにも見られちゃったし…本当に最悪だよ。このまま先輩と後輩の関係やったら、どれだけ気が楽かって自分だって分かってた分かってたけどそれ以上の関係になっちゃって俺ばかりが辛くて…。でも、結局はロバートさんの事忘れられなくなっちゃったユリちゃんにも辛い思いをさせたのも分かっている。分かっているけど考えれば考えるほど、悪い方に考えちゃうよ。俺、ロバートさんもアテナも大好きや。大好きやけど、俺はロバートさんと先輩と後輩の仲に戻りたいよ。」

拳崇の思いが強いのは、俺にも分かったしこれ以上ユリちゃんを泣かせたくないって拳崇は思ってたんだろう。

「あのさあ…。ユリちゃんが、俺とロバートさんの関係を知っているみたいなんや。」

えっ？

どう言う事なんですか？

「知っちゃって、修羅場って言うかユリちゃんが全然話してくれないんや…。」

それは、そうなるわな。

だって、ロバートさんが自分で引き起こした事だし自業自得なのだから分かっていのに何度も拳崇と関係を持ってしまったからだと思っ。

どっちにしたって、ざまあみるんだけど。

ユリちゃんだって、本当は凄く複雑で辛いのだって分かっているの

にロバートさんは拳崇の所へ通っていたって言われたって仕方ないんだよ。だけどユリちゃんは拳崇とほとんど同期だし自分の兄貴であるリョウさんの相方である京と友人関係だつて言うのも知っているからって言うていたんだよ？

なのにな、ロバートさんは自分の事務所の後輩と寝たつて言うか関係を持ってしまったんだから…。

最初の時は、ユリちゃんだつてシヨックでやりきれないって思っていたんだろうしユリちゃんはロバートさんの彼女なんだから。

信じれなくなつてしまったのは、ロバートさんが悪いんだから。

まあ、どっちにしてもリョウさんがなかなか交際を認めてもらえなかったのも事実だつて前にロバートさんから聞いていたけど今度は自分がせっかく信用してもらつたのに裏切つてどうするんですか。

「ほら見る！お前が浮気するから、こんな事になつていいるんだからさ。少しぐらい責任あるんだつたら何とかしろっ！今更、無責任な事言つたつて遅いつて言うかそんな事言つたらマジで殴るぞっ！」

京がキレている顔を見て、俺は少しビビつたけど複雑な思いになつた。

本当だつたら、京じゃなくて俺がロバートさんにキレれば良いんだけど先輩だし殴り合いの喧嘩になつてしまつたら、事務所間で大騒動になつてしまうのも分かつていたから黙つていたんだよね。

京を泣かせたくないつて言うのもあつたし、何せ拳崇も泣かす訳にはいかなかったから。

本当は、拳崇から「説教してくれへんか」つて言われていたのになれじゃ俺じゃなくて京が説教しているみたいだもん。

同期だから、仕方ないつて言つちやえばそれまでだけど京に迷惑をかけているんじゃないかなあつて思つちやつたのも事実だし自分で後味が悪いつて思つちやつたんだ。

「K」だって、拳崇だって冷や汗かいてしまっただけじゃん。」

別に、冷や汗なんてかいてないけど京に気を使わせたのかなあって思っちゃったんだ。

「それは、俺だって分かってるんよ。分かっているけど、やっぱり拳崇の事が心配やねん。」

オドオドし始めたロバートさんにはちょっと悪いけど俺は少しムツとした。

「だったら、後輩でも強姦しても良いって思っただったら間違いですよ。」

結果的に一番の犠牲って言う形になってしまったのは拳崇だし、その拳崇だって本当にロバートさんとこのまま続けて行けるのかどうかは本当に拳崇自身だから。

こんな事言ったら、何かちよつと無責任みたいだけでも最終的に判断しなくちゃならないのは拳崇だし俺らだってこのままだったらマジでしゃれにならない事になってしまったら後味どうこう言ってもらえなくなってしまうから。

「そりゃ、いけないと思っただけよ？ だけど、段々関係持っていつちゃったらそんな事も言ってもらえないし…。結局、拳崇をめちやくちゃにしちゃったのは俺だしユリちゃんにも申し訳ないって思っただけだよ。」

本当は、拳崇との関係はロバートさん自身が良い思いをしたい為にだって思っていたんじゃないかなあ？

だって、拳崇の家も京と同じ名家だって言うのを聞いていたから…。そうだとしたら、マジで最低だし拳崇だって可哀想だよ。

傷つくのは結局、拳崇だし今の拳崇の傷つけられた体はロバートさんのせいでこうなっただけだから。

「お前なあ…。」

京だって、怒っているって言うより呆れているって言った方が正解だって分かったし今にもまた拳崇が泣き出してしまるのが分かった

から。

俺だって、まだロバートさんの事を許した訳じゃないよ。ただパオにこの事がバレたら、横目で睨まれるよ？

パオだって年は違うけど、ロバートさんや京と同期だし拳崇の相方なんだから知らないじゃ通らないと思ってるんだし…。

事務所のライブで、拳崇が凹んで漫才が出来なくなってしまったらロバートさんはどうしてくれるんだろう。

肝心なロバートさんはその事を知っているのに、何で拳崇とあんな関係になっちゃったんだろう。

それだけでも十分許せないのに、ロバートさん自身はまだ諦めきれないらしい。

ちよつとは気持ちは分かるけど、ロバートさんにはユリちゃんと言う彼女が居るんだよ。

それなのに、何で拳崇の事を諦めきれないって言ってるからどうしたものか。

せつかく拳崇は、自分で身を引くって決めて行ったのにこれじゃ話にならない。

「パオになんて言えばええ？あいつ、そう言う事には鋭いっていうか感づくの早いから。」

鋭いって言うか、相方だもん感づいたって別に当たり前の事だしピョンとコンビの違いが出ちゃっているのはちよつと悔しいけど。

「それに、拳崇がアテナちゃんと別れたって事も知っていたし原因までは聞かないって言ってたしさ。」

「パオが！？」

拳崇がびっくりして、俺の顔を見て来た。

やっぱりパオ自身にも相当苦労していると思ったのは分かっていたけど、まさかそこまでだとは思っていなかったらしい。

「『それに、本当に辛いのは拳崇だ』って言ってたしさ。」

だけどさ、本当に俺だってパオだって辛かったんだと思うよ。だって、相手の拳崇があんな事になっているのは知らなかったしアテナちゃんだってパオの友人なんだから。

第一、くつつけたのはパオだって聞いていたしあれだけラブラブになったのだって知っていたからまさか別れるなんて知らなかっただろうし肝心な原因を作ったのは自分たちの先輩であるロバートさんだったんだから余計にびっくりしていると思うよ。

俺だったらびっくりしている反面腹を立てちゃって殴りたいと思ったのも事実だし京が泣き出すのだって分かっていたから黙った方が良いつて思っただ。

「あいつがあんな事を言うなんて思わなかったから驚いちゃったし結局の所凄く迷惑をかけていたのは俺やったんやなあって…。」

拳崇がへこんでいるのを見て、俺は黙ってしまった。

「相方やからつて、訳でも無いけどさ…。だけどさ、あいつの悲しんでいる所とかマジで見たくないって言うか年から言ったら俺の方が上だからさ。でも、その原因を作ったのはロバートさんのせいだからね。」

拳崇が改めてロバートさんの顔を睨んでいると、ロバートさんの顔が段々と苦笑し始めた。

「ざまあ見ろつて思っただけど拳崇が怒っているから何にも言えないし…。」

「困った顔を見るのは、あの時だけで充分だから。」

あの時つて、生放送の話？

そんな時は、俺も京も居たしいきなりパオが泣き出しそうだったからびっくりしたのを覚えているんだ。司会していたテリーさんも、びっくりしていたつて言うかオドオドしてたし。

まあ、テレビに映っていなかったから不幸中の幸いだけど。

「あの後、慰めるのに凄く大変で結局テリーさんと2人で何とかな

だめたけど…。辛かったんだなあって、思ったんだ。確かにパオの方が芸歴から言ったら先輩だけど凄く敏感な時だったから…。でも、色恋に巻き込んでしまったし…。」

拳崇が少し凹みかかっているのを見て、俺は口を開いた。

だってこのまま、凹ませたままだったら何だか俺もシヤクだし…。」

「ロバートさんが悪いのはもう決まっているんだから、お前が凹む事ねえよ。今はさとりあわず、パオともう一度話してみるよ。パオだってお前が今そういう状況だって言えば分かるはずだよ。俺みために、先輩後輩関係無く殴るって訳じゃないから…。」

拳崇が、本当は心優しいっていうのを知っていたし散々ロバートさんにあんな事をされてしまっているのにロバートさんの事を心配するなんてハツキリ言っちゃえば人が良すぎる。

拳崇に言っちゃえば、泣き出すかも知れないし相方のパオにだって同じこと言われていると思う。

「でも、そんだけ心配だって事はさパオは俺の事相方だし年は違うけど自分の方が先輩なんだからって思っているんじゃないかなあ。」

京が拳崇の方を見て、パオが思っている事を話した。自分にしても拳崇は同期だしパオは自分の相方だからこの事を知った時はめっちゃくちや心配したんだと思う。

「無理させたくないって思っているみたいだけど結果的に一番俺が辛い思いをさせたって自己嫌悪になっているみたいで。」

拳崇がへこんでいるのを見て今度は、俺が慰めた。

本当は京のいた位置より俺の方が近かったんだけど、先に京が慰めていたから黙っていたんだ。

それにせっかく元気な拳崇に戻そうって思っているんだけど落ち込んでいるのが半端じゃないしちょっと無理みたい。

このままだったら、京ほどじゃないけど拳崇だっけいつかは力が暴走するとしたら返ってゾっとする。

それに、俺自身も何かシヤクだし放置するなんて何か嫌だ。

「ほら、ロバートも謝れよ。お前が悪いんだし、原因作っただからな。」

比較的、近くにいたロバートさんが冷や汗をかいてしまった。

この事で、巻き込まれているのも事実だったし後味が悪いから。

「本当に悪いと思ってんよ。俺が一番悪いし、拳崇の顔をまともに見れる義理じゃ無いんやけど謝りたいって思っている事は本当だから。ほんまに、ごめん…。」

ロバートさんの言葉に拳崇が怒りだした。

「分かっているんやったら、なんでもっと早く言わなかったの!？」

怒るのも当然だっと思ってたし、ロバートさんが悪いのも自分で認めて謝るなんて…。

「俺、一人で何でも…抱え込んでしまったやんか!!」

.....真つ白な星　The sky is filled with

真つ白な星…作者が一番好きな星でございます。

正直、真つ白な星ではなく月の間違いだって気付いたのは、UP終了後…。^^：

本当に、自分っておつちよこちよいって言うかなんと言うか。^^：

次回予告

拳崇「やつぱりな。」

作者「その後、言わないでね。自分で気付いて、凹んでいるんだから。」

パオ「ありや。」

次回は、ちょっと休憩して…です。

番外編 - 1

ざっくりとしたストーリー

主人公・ヒロインは固定で、ビリーとラッキーが何者かに殺されて、
パオがヘビィとブライアンに強姦される。

- - - - -

俺がきてちよつとした間、京きょうが来るまで待っていた時。クリスが俺
と話したいって言うてきた。正直、クリスとこんなに話す事なんて
あまりなかったけどクリス自身も困っていたんだなあって。

普段、事務所が違うから話す事なんて無かったしいつの間にかファ
ンの子達に囲まれる事だってお互いにあつたから。

クリスは俺以上に、人気があるし最近歌を出したからそつちの方の
人気だつてあるんだし…。^^：

番外編 - 1 (back to)

パオ・K' サイド

「うーうーうーん。」

楽屋で、俺が考え事をしていると一緒に番組に出るクリスが楽屋に入ってきた。

「何考えてるんだよ。」

ちよつと気づかいは覚えてしまったのは、クリスがセスさんの子供を身ごもっているから。

その事で考えていたなんて、言えないよ。

だって、言ったとして泣いてしまったら楽屋に響いて大変な事になるって分かっているし説教なんてごめんだから…。

「別に。」

俺が隠し事ワッが嫌いだってクリスも知っているけど、この場合は仕方ないって思っているし俺はただ苦笑しているしかなくて…。

「隠すなって言ってるだろ？」

ばれてたけど、絶対に言えないしクリスの声は大きいって聞いた事があるから泣かせないって思ったんだ。

番組の時間まで時間があつたから、このままクリスと話そうと思っただけ…。

京が来て、話せなかったのは事実で正直気になっていたんだけどまさかあんな事になってしまふなんて思わなかったし俺だって困惑してしまった。

だから、クリスの事を考えたら人事だつて思えなかったし俺だつてセスさんの事をちよつとは憎いつて思っただけど事務所の先輩だし年も上だから逆らう事だつて出来ないのもあるんだよね。

京だつてシヨックが大きくて、本当は寝込みたいぐらいだつて言う

のも知っているし俺だって今の状態でセスさんに会ったら間違いなく俺もキレかかると思う。

クリスは超有名のバンドマンで、女の子だって隠しているけど歌はマジで上手い。

ボーカルをしているから尚更だけど、トークだって上手いから正直羨ましいんだ。

俺だって人気があるって言ったらちよっと自慢になっちゃうけど、クリスだって凄く人気があるんだから。

「お前、セスさんとの子…身籠っているだろ？」

俺がズバリ言ったもんだから、クリスもちよっとは驚いた。

俺の口から言うのはほとんど無かったから、ビックリというより真実に近かったんだろう。

「社から、聞いたの？」

「うん。俺だって、ビックリしてるよ…。年が近いから、尚更だっ
て思っているんだけど…。」

「……………」

京・リヨウサイド

「京…じゃなかった、珠洲ちゃん。ちよっとネタ、作ったんだけど…。」

俺が楽屋に入ってくると同時に、先に来ていたリヨウが手招きした。ネタはリヨウが書いているから、今更文句なんて言えないし文句なんて言った日には最高の愚痴が待っている。

「今まで通り、京って呼んだって良いんだよ。この姿になったって、リヨウの相方なんだから。」

俺が、笑顔でリヨウの顔を見たらリヨウが何だか急に照れだした。まったく、自分の相方に照れるんじゃないやねえよ。

「だってよお。今までだったら、どんなに理性が爆発しそうになっ

ても『自分の相方だから』って思っていたけど今の状態ではにかな
だら凄く可愛いんだけど。」
可愛いって、言うなっちゅーのっ。
ただでさえ、シエルミーさんに『男にしとくの、もったいない。』
って言われているのに…。

「俺が、『珠洲』の姿になった事…周りの奴等に言うなよ。リヨウ
の事は信じているけど、俺の身体を狙ってくる奴だっているかも知
れないんだから。」

「わーてるよ。」
俺が、リヨウからもらったネタのプリントを見ながらちゃんと釘刺
し。

お互いお笑い芸人だから、ネタとして『おもしろい』事になっていて
も正直シヨックを受けるのは俺の方だから。

K'にだって、俺が『珠洲』の姿になった時だって驚いてしまった
んだから…。

その反動で、Hしちゃったら説得力もあつたもんじゃないけど。

「ごめんね。でも、リヨウにはちゃんとやっておかなくちゃって思
っていたんだ。」

お互い心配性だって言うのもリヨウだって知っているし、リヨウだ
ってこんな事言ったってへこたれる事なんて無いんだから。

楽屋で、京を待っている間の出来事です。

この後、京がソワレに襲われる場面と突入します。^^：

ざっくりしてイキナリですが、次回は本編に戻ります。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次回予告

作者「初めての番外編だったけど、どうだった？」

K「今思えば、この後京がソワレさんに強姦されるんだよなあ。」

クリス「自分の事で一杯だったから、助けなくてごめんな。」

次回は、第25話です。 - - - - - 秋風の軌跡 - - - - -

ロバートさんが浮気したって事を、ユリちゃんは知らない。

でもユリちゃん自身は、そういう事に敏感だから気付いたって仕方ないって思っていたんだけど肝心の拳崇けんすうが『それだけは嫌だ』って言ったから何にも言えなくなってしまったんだ。だって本当に1番悪いのは、ロバートさんなんだから。酷い事をして、傷ついてしまったのは、拳崇けんすうもユリちゃんも一緒なんだから…。

あれから2時間、何とか拳崇をなだめてみたけどシヨックの方が大きくて泣いてしまっている状況になっていてなだめたら落ち着いたのか眠りが来ちゃって今はソファに横になって眠っている。

ロバートさんも凄くテンパっているんだけど、拳崇の気持ちを考えたら罪悪感が来ちゃって冷や汗が出てしまっている。

正直さまあみろって思ったし、自業自得だって思ったけどまたここで拳崇が泣き出したら厄介だと思っただし京まで泣き出してしまったらって事も考えたらそれこそ最悪だって思ったから。

これがシエルミーさんやお姉ちゃんにバレたりしたらからかわれるのが分かっているしもしかしたら【にやり】されるのが分かっているから。

どっちにしても、俺にとつたら最悪のパターンしかなくて。

「ロバートさんが、自分本位…自分勝手な人やって事…知らへんかった…。」

「確かに最初の頃は、拳崇の事は体目当てだっと思ってたよ。だけど、今は違うし…。」
 うわっ、認めたよ。

「何が、違うん？！やっぱ、結局は体目当てだったやんか。」

また拳崇が泣き出してしまって、京はロバートさんを睨んだ。

「俺が男なのは、ロバートさんだって知っているはずやで。ユリちゃんに合わせる顔がないし、俺がした事は浮気だから…。」

大泣きしてしまった拳崇が一番辛い想いをしているのも、事実だしこの事が原因で拳崇は泥沼を経験しているんだから。

「関係を持ってしている事を知っているし、この事が原因でユリちゃんと仲が悪くなったらどうしてくれるの？」

落ち込んでしまったままだったら後味が悪いのも知っているはずな

のに、俺は黙って見ているしかなくて…。

「今更、ロバートさんと『関係を結んでいる』だなんて言えないよ…。俺が話したら、ロバートさんとユリちゃんが喧嘩するって分かっているし…。だけど俺は凄く複雑でどうしたらええか、誰にも言えなくて一人で苦しくなっちゃって…。」

泣き出したままの拳崇の肩を黙って引き寄せた京を見て少し場違いだと思っただけで何だかイライラしてきた。

「ロバートさんのせいで俺、心も体もボロボロだよ。」

拳崇の声が叫び声に近い声で楽屋中に響き渡る。

「何度も楽屋で仕事前に、手首切ろうとした事だって何度もあるんだよ？パオに止められる事だってあって落ち着いたりした時だってあるけど余計に切りなくなっちゃった時だってあつたんだから。」
それだけ拳崇の気持ち揺れ動いているのを知って、びっくりしたし今の拳崇の左腕は傷がいつぱいできている。拳崇が、リストカット常習者だつて言うのは知っていたけどここまで凄いとは思わなかった。

その傷は鋭くて深くで、多分血がいつぱい出たんだろう。

まあ、俺が見たら殺人事件と間違つて騒ぐだろうし『おつちよこちよい』だつて散々お姉ちゃんに言われているからどうつて事無いけど。

「ほらな。…言わんこつちやない。自分で原因を作ったのは、自覚しやがったのか。だつたら、ユリちゃんにばれて泣かれる事くらいロバートだつて知っているはずだろうがっ。」

京が怒つたのを見た俺が、少しびっくりしてその光景を黙って見ていた。

「ユリちゃんにしても拳崇にしても辛い思いをさせたのは、お前なんだから。俺だつて本当は、怒りたくないよ？だけどお前が、ロバートがそんな気持ちだったから腹が立つたんだ。」

俺の事を考えて京が苦笑気味になつたのは分かっていたし、もしか

して俺が泣き出すと思っただつたら余計な心配をかけちゃったのかなあつて思っちゃって…。

「それに、K' だつて本当はロバートの事を殴りたいって思ってたんだよ!? まあ、拳崇が泣いていたから殴る気も出なかったんだろうけど。」

本当は殴りたいと思っただのが半分だけど、殴つても良いのかなあつて思っただのが半分なだけで拳崇が泣き出すなんて予想もしていなかったから。

俺にとつて拳崇は事務所は違うけど、後輩だつて思っているし可愛がりたいって思ったりしているよ。けどさ、ロバートさんみたいに可愛がりの意味はき違っている人になんて言われたくない。

せつかく俺もロバートさんの事を尊敬しようとしてい途中なのに、当の本人が自分の事務所の後輩と関係を持つてしまったから。

しかも俺自身、正直言つて拳崇とロバートさんが外でHしていたの掃除しながら見ちゃったんだよね。ちようど京が、仕事で良かったと思っただけど俺も止めなかったもんな。

お姉ちゃんだつて、放置型の人間だし修羅場だけは嫌いだもんな。最初から、『止めてくれ』だなんて言いたくないから。

どっちにしても、説教されるのは俺の方だから。

「俺は、拳崇の気持ち嫌だつて言う程分かつているよ。」

それは京が、ソワレさんや八神さん達に犯された事だと分かった俺は、そのままロバートさんをにらんだ。

怒りにまかせて話している京の表情が、段々と苦しさを増したのは言うまでも無くて心臓を押さえている。

俺とは違うけど、京も病弱だという話をシエルミーさんから前に聞いた事があつて京の場合は薬がいらないらしい。

いくら俺とは症状も程度も違うのに、体が悪いのは一緒じゃん。

「お前に大声出しっぱなしだったから、心臓痛くなっちゃったじゃ

ねえか。K' だって半ベそかいちゃったし…どうしてくれるんだよ！？」

半ベそつて言うか、少し心配だっただけ。なのに京は、ロバートさんを睨んでいる。

まあ、拳崇の事だけを言ったらロバートさんが悪いのは分かっていたし睨むのは当たり前だつて思っているんだけど…。

だけど本当に苦しがつている京を黙って見ているのだけは嫌だ。

俺は、京の彼女で彼氏なんだから心配するのは当然じゃないか。

「…っう。(ゼーはーゼーはー)」

京が苦しがつたのを見た俺は、一瞬慌ててしまったのも事実だったし黙って見ているのも辛かったから…。

第一、京が苦しがつているのに何もしないなんて彼氏として最低だから。

「京…苦しいの？」

心配していないって言ったら全くの嘘になっちゃうし俺は京に対して嘘をつきたくないから…。

それに、ロバートさんのせいで、こうなっちゃったのも事実だしさ。「大丈夫。ちよつと、怒鳴ったから…。K' に…心配かけちゃったし…。」

俺に対して笑顔になっているのは少し嬉しいけど、何か複雑で…。

「心配なんて…そんなの…思っただけよ。俺は京が怒るのも凄く、分かっているし…。」

それは、嘘じゃない。嘘じゃないけど…やっぱ、心配だよ。拳崇の事だつて言うのも知っただけ怒るのも当然だけど、それが原因で京が苦しみ出すのだけは絶対に嫌だよ。

京は俺にとって大事な人だし、好きだよ！？それは、珠洲ちゃんになつていても変わらないから…。

大事な人が苦しんで辛い思いをしているのに、本当に何もしないの

は最低だから。

「だけどあんまり、カツカツと怒らないでね。リョウさんから京が心臓病の持病持ちなのは聞いているから…。俺は、ムリさせたくないって思っているし…。」

だからこそ心配するのも当然の事だし、大好きだからこそ一緒にいたいと思っっているんだ。

「分かってるよ。俺…K'の事…信じているしさ。」

良かった…。でもさっきから、心臓を抑えてて苦しがつているのは嘘じゃないってすぐに分かったから…。

本当は俺の時みたいに早く言ってくればこんなにも俺一人で抱え込まなくても良かったのになって思ったら、涙が出てくるけど京は俺の『亜種』だから俺にも少しは落ち度があったのかなあ…。

「ロバートさんもちゃんと、ユリちゃんに謝って下さい。どっちにしても拳崇は『許さない』って言ってたんですから…。」

後輩だから、少しは優しい言葉にしたけど本当は今でも殴りたいと思っっている。でも実際はそんな事も考えられなくなるぐらいに修羅場状態になっていて、怒りよりも辛さが先に来ってしまったから…。

「ロバートさんがいつまでも優柔不断していると、ユリちゃんや拳崇がどれだけ傷つくと思うんですか!？」

俺が少し怒り口調でロバートさんに話すと、冷や汗をかいた状態で俺の顔を黙って見ていた。

多分ロバートさんには、俺が何でこんな事になっているかなんて分からないんだろうしそうになったらマジでイラつくんだけど…。

「ごめん…。だけど俺は拳崇の事『自分の性欲を満たす』しか考えてないから。普通愛人って、そんなもんやないの?」

俺に、聞かないで下さい。

第一…『自分の性欲を満たす』だなんてマジで最低で、何を考えてるんですか。

拳崇が聞いていたら間違いなく泣き出すと思うし、こんな人が人気投票の上位だなんて考えられない。

「お前なあ、いい加減にしとけよ。男として何最低な事言ってるんだよ。」

京が少しキレていると、拳崇が起きてきた。

正確に言ったら、端っこの方に寝ていたから起きるのに時間がかかってしまったけど…。

「何で、草薙さんがキレてるん？」

当然拳崇だつてビックリしてんのに、京の怒りはまだ収まらない。

収まらない理由を俺は知っているから、何とも言えなかったし拳崇にこの事を話せば絶対に泣き出すと思つたから…。

だから黙つて見ているしかなくて、京もその事に気付いたらしい。

「何でも、ないよ。」

本当は京も俺も嘘をつくのが嫌いだけど、この事は仕方ないよね。拳崇を泣かせない為にはこうするしか方法はなかったから。

「本当に？」

首をかしげて不思議そうに見ている拳崇にちよつと苦笑交じりの笑顔を見せる俺。そんな中、テレビの画面になにやら見慣れている風景が映し出されていた。

すぐに誰だか気付いた拳崇が、画面に出た写真を指差している。

「あれ…まさか…ラッキーさん!？」

俺も京もテレビの方を振り向いて、見覚えのある人の写真を見てただ驚いている。

段々と報道の人たちも騒ぎ出してきてロバートさんも驚いているし、ニュースではラッキーさんの殺害現場が超意外な場所で意外な殺され方をされていたと聞いて考えただけでも背筋が凍る程になつてしまった。

俺は、ラッキーさんがシートに包まれる前に遺体と目があってしまつて体が動けなくなつてしまつたしショックが何よりも大きかつたから。

ラッキーさんは昨日まで、元気に仕事とかしていたのにまさかこんな事になつてしまふなんて信じられなかつたし…。俺からしてみれば、憧れの先輩の一人だつたし事務所の直接的な先輩だつたから…。これじゃまた、拳崇の事がむやむやになつちゃうと思つたら涙が出てきた。

俺がテレビの画面を見て涙を流したのを見た京があわあわし出した。正直、あわあわしなくちゃならないのは俺の方なのにこれじゃ逆だよ。

でも俺も泣いているから当然だつて思つたけど、返つてこつちはすごく複雑で。

八神さんの罪が晴れたのは、正直嬉しいつて思つたけど真犯人が捕まつていない今の状況でまた被害者が出たのはショックだつたし今頃事務所がバタバタしていると思うと『うーん』つて首を傾げたくなる。

しかもまた、凶器が見つかつていないつて知つて冷や汗をかいてしまつたのも事実で。

「K、？」

京も俺が首を傾げているのを見て、疑問に思つたのか上目使いで見つて来た。

だから、上目使いで見られると理性が飛びそうだから止めて。

「どうしたの？さっきからボーっとして、何か変だよお。」

涙目になつて、こつち見ないですよ。

あたふたしちゃうし、こんな所シエルミィさんやお姉ちゃんに見られたら何て言われるか分からないしもしかしたら【にやり】するに決まつているから…。

俺と京が…珠洲が付き合っている事を知っている人達だから、言わ

ないにしても何かしらの情報は持っているから…。

「何でも、ないよ?」

「ごめん…嘘ついて…」

本当は、京の事もそうだけどラッキーさんの事も気になっていたんだよね。

だって京を泣かせたくないって思ったのは、嘘じゃないし彼氏として最低な事はしたくないから。

「そっか…。K'がボーっとしているから、心配していたんだよね。」

そんなにボーとしていない訳でもないけど、京にはそう見えていたんだなあって思ったんだけど上目でこっち見たら理性が崩壊しちゃうよ。

俺を気使って見てくれるのは正直嬉しいけど、何だか複雑なのは京も俺と同じで無理が出来ない身体だった事。

京の病状を聞いただけでも複雑なのに、ラッキーさんの事があったから。

どっちを最優先したら良いか分からなくなってしまっし、こっちだつて京に気を使っちゃっよ。

「ラッキーさんが殺されたのは俺だつてビックリしているけど、K'の事を考えたらもっと辛いのも分かってたから。K'にとってラッキーさんは、事務所の仲の良い先輩だったから…」

良くラッキーさんと飲みに行っていたのを知っている京は、俺の顔を見て苦笑しちゃっている。

「京…」

京もショックが大きいのは分かっていたけど、俺…ラッキーさんの仇を取るよ…。もちろん、マキさんやビリーさんの事も…。

「だけど、俺…K'が無理して倒れるのも何か嫌だよ。俺にとって、

K'は大事な人だもん。」

京が俺に寄り添ったのを見たロバートさんが、からかい出した。

「おーい。ここで、ラブるなやあ。」

ロバートさんが拳崇に酷い事をしたから楽屋に説教しに来たのに、これじゃ目的が変わっちゃうよ。

確かにロバートさんにはからかわれたのは、ちよつと本意だけど…。ただどさ、俺の事を京がはにかんで『大事な人』だなんて言われたらいくら何でも理性が崩壊しそうになるんだけど…。

「草薙さん…可愛すぎです。」

拳崇も京の方を見て、鼻を抑えている。

「K'に可愛いつて言われるのは嬉しいけど、ロバートには言われたくないなあ。」

呆れているのか怒っているのか分からないけど、俺の言葉を聞いて嬉しかったのは確か。

「でも実際、嬉しいんやろ？」

拳崇に言われて、耳まで真っ赤になってしまった京が俺の後ろに隠れた。

その光景を見て俺も赤面してしまって、危なく理性を崩壊させそうになった。

だって、京のあんな顔を見てたら可愛いの一言しか出てこないし嬉しがっているのだって本当の事なんだから…。

「うん!」

照れながら元気そうに答える京を見て、俺も嬉しかった。

さっきまで怒ってた京とは大違いで、元の元気で可愛い京を見れたんだから。

拳崇もにっこりとして、京の顔を見ている。

「それにしても本当にちゃんとしなくちゃならないのはロバートさんですからね。俺が辛い思いをしているのも、ユリちゃんが辛い思いをするのもどっちとも嫌だって言ったK'（こいつ）の気持ちも

分かってください。」

拳崇が俺の方を見ているのを見て俺は一瞬とぼけてしまったけど、拳崇が自分で決めた事だから仕方ないと思って黙って見ていた。

「分かってるよ。でも正直言ったら、拳崇の中が一番気持ち良いんだよなあ。」

まだ、言ってるんですか。

あれほど、『拳崇の事を諦める』って言ったばかりなのに何でそんな事言うんですか。

拳崇だって、自分の辛さを我慢して話してんの…。

「ユリちゃんとHする時は、絶対に中に出しちゃだめだって思ってたHしてて…。やけど、拳崇の時は手加減無しでガンガン攻めれるし拳崇の感じている声めっちゃ可愛ええねん。しかもH中ずっと、俺のを締め付けているしさ。ユリちゃんは声出してくれへんから、Hしても退屈やし…。」

なんかまた、殴りたくなっただけですけど…。

「それに、外で堂々とH出来るんのも拳崇だけやで。仕事やったら、パオとかに見られるしマスコミの人だっつてうるさいやろ？」

あーもう、我慢できないっ！！

「いい加減にしてよっ！！俺、今の身体は女の子なんだよ？それにロバートさんにあんな事されて感触覚えちゃったし…アテナとも別れたんよっ！！責任、取ってよっ！！」

俺より先に拳崇が泣きながら、怒り出した。

「俺、初めてで…ロバートさんにされてた時もずっと痛かったんやから。いつの間にか愛人にされていたし、ロバートさんとHしてる時もずっと俺の中では罪悪感がぐるぐる回ってたんやから。」

「だって、それは拳崇だって感じとったやん。あんなに可愛い拳崇の顔を見れるんは、俺だけだと思っと思ったん。」

ロバートさんの話を聞いて、拳崇が更に泣き出した。

「俺が、ロバートさんにHされている時にテリーさんやヘビィ・D！さんに見られてかなり凹んだんだよ。2人共ガヤだから、俺に聞いてくるし…。テリーさんには、『にやり』されたし、ヘビィ・D！さんには番組中に興味しんしんで聞いてくるし俺どうすれば良いか分からなくなっちゃったよ。」

俺だって、ヘビィ・D！さんにはちよつと困っていて京の事を知られた時は楽屋とか事務所が一緒だから良くからかわれて…。

「テリーさんとかパオに、中出しされた所見られたし…。パオには思いつきりにらまれて最近ネタ合わせしても全然聞いてくれなくないっちゃったし…。」

多分その時の拳崇は、目に涙が溜められている状態で相当苦しかったんだろう…。

「あいつも人のH見るの、好きやもんなあ。」
また、無責任な事を…。

「そんだけ、拳崇のイツた顔は可愛ええもんな。」

涙を溜めて怒っている拳崇の顔を黙って見ているしかなくて、ちよつとたじろいでしまった。

「あんな顔…誰にも…見られなくなかったのに…。」

複雑で辛い思いをしてんのも分かっていたし、このまま拳崇を怒らせたままだと本当に辛くなっていくのも分かっていたし…。

「テリーが、お前が俺のビストンの動きに感じているのを見てて白目になっていたんだとき。」

ロバートさんがそう言ったのと同時に、俺はロバートさんの顔を殴っていた。

このままドピンクの状態で、楽屋から出る訳にはいかなかったし京自身もフラッシュバックが起こってしまいそうな予感がしていたから…って事もあったけど俺自身黙って見ていられなくなつて。

本当は、後輩が先輩をコントとか仕事以外で殴っちゃダメだって言

うのも分かってているんだけど本当にロバートさんが無責任すぎていい加減な人だからイラついたんだ。

自分勝手な事言ってるし、拳崇だってユリちゃんだって辛いのに何でこんな事を言うのかなあって思っちゃったんだ。

「拳崇だって、本当は辛いんだよ？それに拳崇の腕が、これ以上傷ついて欲しくないんだよ。」

拳崇のマネージャーさんに、睨まれるのも何だかシヤクだったし拳崇もマネージャーもリアルに年下だから複雑な思いだったんだよね。

「K'!!」

拳崇も、何事かあったか分からないから、キョトンとして見ている。いきなりの事で京も俺に殴られたロバートさんも俺がぶち切れた姿を見て目が点になってしまっている。

「K'!?!何、してんの?!」

京が俺の腕を軽く引つ張つて、止めようとしている。

大丈夫だよ。殴った後で説得力ないけど、京の前ではキレた事なんてなかったし拳崇が本格的に泣き出すのが分かっていたから。だけど、先輩を殴っちゃったのは俺なんだから。

「ごめん…。あれ程殴らないでって言われてたのに、俺…ロバートさんを殴っちゃった。」

だって、殴ったのは事実だったし自分にもロバートさんの無責任さにも腹を立っていたから。

でも、そんなに強く殴った訳じゃないし傷が出来るまで殴らなかつたし。

「K'が謝る事、じゃないよ。悪いのはロバートさんだし、さっき自分で謝ったのに何でまた無責任な事を言っんですか？」

拳崇が涙をこらえて我慢しているのは、良く伝わってたし本当は大泣きしてしまいたいのも分かっていたから。

だけど、今そういう状況になったらロバートさんと拳崇の関係だってユリちゃんとの関係だって分かっちゃうし…。

「腰が痛いって言っても、ロバートさんはまだしてくるし力だつて暴走しそうになつてるのだつて事実なんだから。本気で、中に出すから体だつてだるいし…。」

泣きそうになつている拳崇の横顔を見て、殴つてしまった自分がバカらしくなつてしまったし事務所にはれたら説教されるのは俺なんだから…。自業自得だつて、分かつているけど。

結果泣き出してしまったから、驚きも半分だつたしショックもある。「俺：まだ力の制御、出来てへんのに…。」

それは拳崇が、『龍神』として完全に覚醒してないって事になるんだけど今の状態だつたら嫌に決まつている。俺だつたら間違いない、てんばつているから。

「拳崇だつて、凄くショックが大きくて本当にヤバイと思つているからこそ黙つて見守つていてほしいんです。」

それは愛人としてじゃなくて、先輩として見守つてほしいと思つた事。これ以上拳崇には辛い思いをしてほしくないし全部ロバートさんが悪いんだから。

信じていた先輩に裏切られたら、拳崇じゃないけどショックが大きいの当たり前だつて思つているから。

ショックが大きいかからこそ、拳崇の腕の傷は段々と深くなつていくし。

パオも前に楽屋で一緒になつた頃、その時に『拳崇の様子が変だ。』つて言つていた事がある。

相方だから、仕方ないつて思つているんだけど本当に心配しているんだなあつて思つたのも事実で。

でも、やっぱり『同じ姫同士』だからつて事かも知れない。

『龍神』も『姫』の一人だつて言う話をリョウさんから聞いた事がある。

拳崇自体は、自分が『姫』だという事を知つてほしくなくて黙つていたみたいだつたのにロバートさんにバレてしまった事にショック

になっているんだろう。

結果的に女の子の姿のまま、暮らして行かなくちゃいけなくなっちゃって…。アテナちゃんには、自分も『姫』の一人だって事を言えなかった罪悪感と浮気をしてしまった事を話して別れた事も聞いた。

結構拳宗なりに凄く辛かったと思っている。分かっているけど、何でロバートさんがそんな事をするんですか。

そのせいで、拳宗が辛い思いをしてしまったのは事実だしロバートさんだって自分がした事は一番の原因なんだから。

ちよつとした嘘でも、嘘が嫌いな拳宗にしてみれば凄く辛い事になっているのも分かっていたし一因が例えロバートさんにあるかも知れないけどほとんどは前世の事が原因だと思っているのも分かっているから。

「K、？」

俺が考え事をしていて、京が心配したのも分かるけど上目使いでこち見ないですよ。

いらだちよりも、理性が爆発するのが早いから。

「拳宗が『姫』の一人だって、気付いていたの？」

一瞬京に言われて、ハツとなったけど凶星だったから何にも言えなくなつて…。

「やっぱ、知ってたんだ。K、は知らないと思って、俺…気を使っちゃったのに…。」

そんな事、無いよ！？

京はてんばるぐらいに、俺の顔を見ている。

ただ俺は、パオからその話を聞いたばかりでこういう事になったから驚いているんだ。

第一京が気を使ったんじゃないかって思ったのは、俺がボーっとしていたせい。

本当なら。その理由もちゃんと話せば良かったんだけど今は少し隠

させて。

ちゃんと話せる時が来たら、俺の方から離すから。

感謝もしているし、大好きだよ。

それだけは、嘘じゃないから。

今は、ごめん…珠洲。

自分が秋生まれで、秋といったら秋風だとピーンときまして後は自分の好きな漢字をミックスさせました。

だからなんだって言ったら、何にもいえませんが。^^:

.....

次回予告

珠洲「何で、隠し通すの？」

K「（本当は、力の覚醒をして欲しくないから）何でもないよ。

珠洲だって、辛い思いをしてんじゃないかなあって思っちゃってさ。

作者「^{ゆみや}いちやついてるのか、修羅場一歩手前なのかわかんねえなあ。

次回、26話。.....^{サマースカイ}夏空の合言葉.....

ラッキーさんが死んだ時点で、京きょうの力の覚醒が進んでしまったのは俺だっけすぐに分かった事でこのままだったら京きょうが余計に辛い思いをしてしまうじゃないかなあって思ったから。だから、京きょうには拳崇けんすうが『姫ひめ』だっけ事を知らせなかったんだ。

嘘うそをついたって自覚はないけどって言うか、つきたくなかったけど京きょうが力を覚醒して暴走をってしまったたら何にもならないと思ったし後で、リヨウさん達に説教されるのだけは絶対に嫌だったから。

あの後、マスコミの人に見つかる事もなく自分達の車に乗って帰って来た。

車の中で京は俺が何で言わなかったのかとか言い出して頬を膨らませていたけど今は話せる状態じゃないのも分かっているし、俺だって罪悪感は凄くあるんだ。

まさか拳崇が、『姫』の一人だったなんて…。

正直いつ京も力の覚醒をするか自分分らないし、例えそうなたとしても京にとっては凄く辛い事になってしまるのが分かっているから。

「K、？」

家に帰って俺がソファに座ってボーっとしているのを見た京が、紅茶とジュースを持って俺の側に来た。

俺自身も京に言えないのが辛いけど、もしこれが言ったとして京自身が何かのきっかけで力の覚醒が起こってしまっフラッシュバックになってしまっのが嫌だったから。

それに、それが原因でシエルミーさんやお姉ちゃんに説教をされるのも嫌だしなんせ京が泣くのを見るのももっ嫌だから。

「どうしたの？ロバートさんの楽屋にいる時から、ずっとボーっとなつててさ。何か考え事でも、してんのかなあつて。」

近い近いと思つたのと、自分の理性が爆発しそうになつたのもあつたけど本当の理由なんて言えないよ。

どっちをとつても、京が傷つくのが分かっているから。

「何でも、ないよ。ちよつと昨日、眠りが浅かったから。」

確かに眠りが浅いって言うか、あまり寝ていなかったからボーっとなつていたのは事実で京のせいじゃないし嘘を言っている訳ないから…。

「でも…俺も、心配だよ。K'に…何かあつたら、俺は嫌だから…。」

涙目になった京の姿を見て、ちよつと胸が痛かったけど京には拳崇が『姫』だつて事は知らせていない。

だつて京は、『次期帝』の立場だし自分が『伝説の皇子』レジェンド・プリンスだつて言う事を覚醒してしまつている今の状況で力の覚醒をすれば誰よりも力の威力自体が強いから。それに、今の京が力の覚醒をして力の制御が出来ない状態で使つた場合返つて京の身体の負担が大きい。

でも、記憶の覚醒をしまつてから力の方も覚醒するのは時間の問題だろう。

だからこそ、俺も京も覚醒を拒んでいる。

「心配かけて、ごめんね。でも俺…京の側から…珠洲の側から離れないから。」

これは、本当。嘘を言つたつて何にもならないし、何があつても絶対離れるもんかつて思つていても出来なかつたら最低だつて思つているから。

だけど京が自分で、覚醒を拒んでいる状況でこの事を関係者（部内者）であるテリーさんや自分の相方である亮さんにはどう言つ事なのかは知つているみたいで…。

知つているからこそ、京自身にあまり追究をしないらしいし自分達が逆の事をされるのは嫌だつて言つのを聞いた事がある。

もちろん、俺だつて同じ事を思つていたよ。

だけど、京の事を考えたらいつまでも隠し通せるかなあつて不安になるけど今は絶対に隠したいつて思つているのは事実だから。

「もう…照れて来ちゃつたじゃん。」

耳まで真っ赤になつた京が、俺の腕に寄り添つて来た。

正直こんな事を言つたらノロケかも知れないけど、真っ赤になつている京を見れるのは俺だけだつて思つているし京の顔が可愛いから

いつまでも見ていたって思っているんだ。

だって、自分で自覚だけど京は…珠洲は俺の彼女だから。

「照れている京も、何だか可愛いなあって思ってたさ。」

自分でも真っ赤になっているから、説得もあつたもんじゃないけど京が真っ赤になっているから良いって思ったし自分でもキザくさい（ナルシスト）って思っているから。

「低音で自分で言つといてさ、真っ赤にならないでよ。」

京にも、俺が真っ赤になっているのもばれちゃったしさ。

「てへへ…。だけどさ、珠洲の姿は本当に可愛いよ。」

本当こんなバカツプル全開な所を、誰かに見られたらどうしよう。間違いないからかわれるし、京は頬を膨らませるか泣き出すだろうな。

ラッキーさんの件で、俺自身も怖くなっているのは京も俺も分かっている事で自覚しているけど改めてからかわれるのだけは絶対に嫌だ。

俺が、京の…珠洲^{すず}の顔を見ていると突然玄関のベルが鳴った。

本当に突然でビックリしているから、危なくテーブルの角に足をぶつける所だった。

「はい、はい…誰？」

俺が玄関のドアを開けた途端、飛びついて来たのはロックさん。

まあ、役得って言っちゃえば何だけど京も見えていたし黙って引き離れた。

何か変な感じになっちゃうし、喧嘩^{ドンパチ}したって何にもならないって分かっているから俺だって何か嫌だ。

どっちにしたって、京の負担になると思うし次の日に響くのは嫌だったから。

だけど、その反面そういう風に京を攻めてやりたいって言うのもあるんだけど…。

「K…？また、ぼーっとして…ロックに何かあったのか聞かないの？」

京とHしている姿を想像していると、にやにやしてきちゃうんだけど。

「あ、そうそう。何か、嫌な事でもあったの？」

ある意味ストレート過ぎるけど、ロックさんが泣き出さなかったから少しほっとした。

これで泣き出したりしたら、真隣りに居る拳崇が起き上がって即説教状態になる（何をしてんやって）のが分かっているから冷や汗をかくしかなくて…。

「社さんが、浮気した。」

え?!と思ったのもつかの間、社さんが浮気したと聞いて更に驚いた。

元々浮気性だって事を知っている俺からしてみれば、やっぱりなっと思ってたけどロックさんから見ればやっぱりショックだったみたいで…。

付き合い始めてまだ2ヶ月も経っていないのに、今から浮気の事でロックさんがこんなにも困っているのに肝心な社さんはそれを知らない。

ロックさんにとって社さんは始めて付き合い合った人だし。大事な人だっと思ってている。

キスしたのかHしたのかとかそんなの関係なくピュアで純真な人はロックさん以外考えられない。

「俺…社さんが他の人とHしてて、その人の所に行くんじゃないかなあって思ったら凄く不安で苦しくなるんだ。俺と付き合いってから一度もHしてくれないし、あの時の事はもしかしたら嘘になるんじゃないかなあって思っちゃってさ。」

ロックさんの不安がMAXなのは、見ていて分かる。

「俺は、ロックさんの気持ちは分かるよ。社さんは仕事だって言っ

て全然ロツクさんの所に来なかったから。」
「だけど、社さんにして見れば『仕事』だつて言う一言で片付けられないのは本人が一番分かっていると思う。
少しでもロツクさんの側にいれば、こんなにもロツクさんが困る事なんて無いのに…。」

「ありがとうね…。でも俺、社さんの事信じているし仕事が忙しかつたのだつてホワイトボードを見たらすぐに分かつたし…。」
苦笑に近い笑顔で俺の顔を見たロツクさんは、どこか元気が無くて…。

元気がないロツクさんを見るのは俺にとつても、ちよつと辛い事で。「社さんは俺よりも、人気があつてもてるのも分かつているんだ。分かつているけど、正直言つたら何か複雑だよ。」

ちよつとファンの子に嫉妬したのかなあつて思つたけど、ロツクさんの事を考えたらそんな事も言つてられなくなつて…。だけど最近、社さんはゲームにも全然ログインしていないしどうしたのかなあつてちよつと心配したんだ。

風邪を引いたとかPCの調子がおかしいなら【なんだあ】つて思うだけなんだけど、一週間以上もログインをしていないのはちよつと変だと思つていたから。

ロツクさんとPCの機種が一緒に、ほとんど同じ時間帯にログインしてくるからロツクさんが一人だとちよつと変に思つちやつたのも事実なんだ。

まさかゲームで、デリートされた訳じゃないとしたら本当にログインしなかつた理由はなんだろう？

もしロツクさんと別れる気でいて、捨てるんだつたらマジで最低だと思つしロツクさんが傷つくのだつて事実だ。

第一そんな事したら俺自身、ロバートさんと同じく殴つてしまつかも知れない。

「俺：社さんを好きでいて良いのかなあって思ってたきちゃって…。
こんな事になるんだったら、社さんと付き合わなければ良かったの
かなあって…。」
不安そうになっっているロツクさんを、俺が軽く肩を抱きしめた。
拳崇の時にも、そういう事をしたから京は嫉妬出来ないはずだし事
情も知っているから。

さっきまで不安がっていたロツクさんは本当に急な事だったのか、
ビックリしてしまっている。まさか自分の後輩である俺に先輩の自
分が抱き寄せられたなんて思っても見なかったし、一瞬目が点にな
ったっておかしくないって分かっているから。

「（あうあう）」
本当にロツクさんは可愛いなあって思ったけど、先輩だし年は近く
たって俺がちゃんとしなくちゃって思ってしまったのも事実だし素
直に可愛いってロツクさんに言ったら京が嫉妬して泣き出してしま
うのが分かっていたから。

どっちにしても、【にやり】か【説教】されるのが分かっているか
ら黙るしかないんだよね。

「社さんのHは、初めてだったし…それに番組中だったからずつ
とされ続けてたんだよね。」
しかもその番組は、毎週流れている生放送の番組でロバートさんも
この番組のレギュラーだけど曜日が違うこの日は俺と社さんがレギ
ュラーの日でちょうど2人がいる位置に、俺もいたから凄く恥ずか
しかったんだ。

あんなに感じているロツクさんを見た事がなかったのもあったけど、
目がトローンとしている所とか大事な所は社さんに攻められていた
し…。

多分、社さんのマネージャーさんもお姉ちゃんは【にやり】してい
たと思うしファンの子も何人かはロツクさんの感じている姿を見て
しまったんだろなあ。しかも、生放送だから取り直しなんて出来

ないし…。

「俺…社さんに、【性欲のオモチャ】として見られているのかなあ。」

「まあ、ロバートさんじゃないしその点は心配ないのかなあって思うんだけどやっぱり不安になっちゃうのかなあ。」

ロバートさんは、本当に両刀^{バイ}使いだから性欲ばかりに走るのは間違いないって思っているんだけどね。現に、拳崇がそうだったから…。もし、社さんがロバートさんと同じ思いでロックさんを見ていたらマジで最低だし殴るまではいかないけど別れさせると思う。

「そんな事…無いでっ!!」

隣で話を聞いていた拳崇が非常玄関からこっちに来て京のいるソファに座った。

「ロックは、社さんの事…信じてないん？」

「信じてるよ?!信じてるけど、不安になるのなんて当たり前じゃない!俺自身は社さん以外とHなんてしてないし浮気だって考えていないのに、あれ以来全然Hしてくれないんだもん。俺は、社さんの事忘れられなくなっちゃったのに…。」

ロックさんの悲しい顔は、何か見ていると辛くなってしまふ。例えそれが社さんとの関係でも、ロックさんにとっては初めてなんだなあって思えるし…。大好きなんだあって、見ていても分かったしさ。

「あんな顔を見せられるのは、社さんだけだし…。確かに最初は怖かったし抵抗もあつたけど、社さんが好きだから好きな人を信じようって思っていたから…。何か、惚気^{ノロケ}に聞こえたらごめんね。だけど、俺にとっては全部事実だし自分の感情に嘘は付きたくないって思ったから。付き合ってたそんなに経ってないけど、社さんに触れると何だか自分が自分じゃなくなっていくようになってきてやっぱり幸せなんだあって思っちゃったんだよね。」

本当に、惚気に聞こえたけど今のロックさんに言ったら余計にブル
ーになっちゃうと思っただしからかったりしたら俺だって同じ事にな
ったら嫌だからさ。

「番組中にあんな事されたら、抵抗なんて出来ないしこのままでも
良いかなあって思っただんだ…。だけどK'がプルーって言う
か引いていたから、後で謝ろうって思っていたんだよね。」

そんな事、知らないよ…。

って言うか、俺は番組が終わったら京が心配だったしすぐにでも帰
りたいって思っていたから。

ロックさんに言われるまで、その話全然知らなかったしさ。

「目の前で、営みが始まったら誰だってビックリするって言うか引
くだろうがっ。だけど一緒にいたお姉ちゃんは、『よっしゃっ』っ
て思いっきり喜んでいたけど。」

ロックさんは、お姉ちゃんが腐女子だって言う事を知っている人で
何度もからかわれているらしい。

もちろん、番組の合間に限ってなんだけど…。

「あの人は、そういう事に鋭いって言うか空気読み過ぎですもんね。
だけど、ド変態で…。この場にいたら、間違いない怒られそうです
けど…。」

人に言われると怒るくせに、自分でそういう事言ったら何とも思わ
ないって事はある程度自覚しているんだよなあ。

まあどっちにしても、余計な事を言わなければムツとしない温厚な
人間だから別に良いんだけどね。

俺は身内だからあまり気にしないし、自分のマネージャーだからど
こが怒るきっかけなのかも分かるけどあまり見ない人には怖く映る
はず。

普段は凄く優しく、頼りになる人なのに…。

「大丈夫じゃない？ああ見えて、結構遠くの声には聞こえないから。」

もしストレートに言ったら、『おばさん』って事になるんだろうけど。

「そんなもんかなあ。でも、『おばさん』ってストレートに言ったら殴られそうだけど…。」

番組中にはブチギレしないけど、車の中で散々説教されたのも事実だし悪いのは言った俺なんだから…。

「耳遠いから、あの人の場合は。」

聞こえていないかな会って思ったけどもし聞こえたらマジで、最悪だろうなあ。

「K'が…冷や汗、かいちゃった…。」

京があうあうしてしまっただのを見て、俺は一瞬で理性が爆発しそうになった。

だって凄く、可愛いんだもん。

思わず理性が崩壊しそうになったのも事実だし、このままだったらロックも拳崇もいるのにHしちゃうのが分かっていたから。

「ごめん。だけどさ、一度だけ京もお姉ちゃんの説教を受けた事があつただろう。」

京が涙目になつているのを見た俺は、黙って見ている。

「まあね。でもあれって、結局見間違いだつたじゃん。珠洲^{すず}ちゃんの前だつたらあまり言えないかも知れないし涙目になっているから泣かせるのも何か嫌だけどさ…。」

でも間違いでも見間違いでも、説教を食らつたのは事実で。

正直マジで凹んだ所を、ロックさんに見られたのもあつたからロックさんも心配になつたんだろう。

「んで、その反動かなんか知らないけどHしちゃつたんだから言い訳なんか出来ないよな。俺隣りだつたし、窓開けっ放しだつたから聞こえてたんだよね。（にやにや）まあ、草薙さんとお前が付き合っているのを知っているから別に良いんだけどさ。俺だって、お前

に社さんとしちゃった所を見られたから全然説得力もあつたもんじやないけどさ。」

凶星だったから少しはううっとなつてしまつたけど、ロックさんも苦笑してしまつたから一緒に黙つてしまつたのも事実で。

「俺さ、社さんと付き合つて後悔はしてないよ。そりゃ一度も、Hしてくれないって言うのもあるし話だけは聞いてくれるけどそう言う状態にならない時だつてあるし…。だけど、一回だけのHだつて別に良いって思つているし何か照れちゃうけど俺は社さんにどう思つているのかなあ。」

ブルーになつてしまつたロックさんが、しゅんとなつちやつた。

拳崇が、マジな顔で口を開いた。

「お前が、そんなんでどうするんだよ。ロックにとつて、社さんはどういう人や？」

自分は、ロバートさんに愛人関係を結ばれて今【泥沼状態】になつぐつちやめやかめつちやかているのにロックさんだけは絶対に違つたと信じたらしい。

俺だつて、その事は絶対にないって思つているよ。だつて、社さんはロバートさんと違つて真面目つて言うか恋愛についてはストリックタイプの人だつて知つているから。

拳崇だつて、ロックがどういふ状態だつて言うのも知つているから余計な事なんて言えないし。

もちろん質問されたロックさんだつて、いきなりの事でビックリしちゃつてちよつとだけあうあになつていふのに拳崇自身はロックさん自身社さんの事をどう思つているのか再確認したらしい。

「俺は、社さんの事大好きだし忘れられる訳ないじゃん。別れるから忘れて欲しいだなんて言われたら、俺：死んじゃうよ…。」
泣きそうだなあつて思つた俺は、すぐに慰めようと思つたけどロックさんがこつちを見ていふ顔を見て一瞬ハツとなつた。

最近様子が変だつたから、どうしたのかなあつて心配したのも事実

だし…。だけど社さんと喧嘩トシバチなんてしたくないし俺の方が後輩だから先輩の社さんに殴るなんか出来る訳ないじゃん。

でも、ロバートさんの場合は拳崇の事もあったしなんせユリちゃんが一番可哀想な思いをしているんじゃないかって思ったらイラついちゃって殴ってしまったから説得力もないのは当然で。

当然、この事は事務所が違っていても社さんの耳には入っているはず。

怒られても良いと思っていたし実際に殴ってしまったのは俺なんだから。

「な…何…こつち、見てんの？」

今の姿で彼女がいてもいなくても、仕草的にはどきどきしてしまっただし俺自身もあうあうとなっちゃったけど京に素直に言ったら頬を膨らませると思ったから黙って見直すしかないって思った。

「まあ、何と言うか『バカップル』みたいだね。俺らも、人の事言える義理じゃないけど…」

ロックさんも何の事か分かったのか、耳まで真っ赤になった。

俺も耳まで真っ赤になっちゃっているから、からかうにもからかえないし黙って見ているしかなかった。

「K、だつて、真っ赤になつているのにさ何でからかうのかなあ。

(ぶくう)

だつてまさか、そこで照れるなんて思わなかったなあ。

「むう…。でもさ、俺結構恥ずかしい事しているかも…」

また真っ赤になったロックさんは凄く可愛いくて、思わず抱きつこうとしたけど我慢するしかなかった。

「でも、社…じゃなかった七枷さんはそこんどこも大好きだと思っよ。俺はあまり会う事は出来ないけど今度番組で一緒になったら、話してみるよ。ロックもさ、電話で話してみたら？」

今は社さんの事が大事だと思つた京は、笑顔のままロックさんに話した。

俺も同じ事を思っていて一瞬驚いてみたけど、京の言う事も分かるし黙って見ているしかなかった。

もしかしたらロックさんが泣き出すと思ったし、結局ロックさん自身が自分で解決しなくちゃならないのも京も思っているはず。

「電話でロックが話さないと、社さんだって…七枷さんだって分からないよ。」

笑顔だったけど真面目になった京が、慰めるしかないのも分かっていたし。

「俺さ、ロックが前世の記憶を持っていても持っていなくても落ち込んでいるのを黙って見ていられないよ。前世の記憶を持っているんだったら前世の時みたいに元気いっぱいになってよ。俺だって、ロックの元気な姿を見て元気もらっているんだからさ…。」

京の顔が、段々と暗くなっていくのを感じた俺は慌てて京の顔を見た。

ロックさんも実は前世の記憶を持っているけど京はまだ気付いていなくて、自分が『真祖』だって言う事を俺は知っている。

ただ『亜種』である社さんの血を吸いたくないと、未だに拒否をしている。

自分が吸血鬼だって事を知られたくないって言うのもあるみたいだけど…。開き直ればって少しは思ったけど、ロックさんはロックさんなりに考えがあるんだからそんな無責任な事なんて言いたくないのもこっちもある。

「草薙さん…。」

俺だって、自分が吸血鬼の真祖だって知る前は京の血を欲しいとは思わなかったけど今はHの時だけ血が欲しくなって来てしまっただけ…。京も俺が血を吸う時は、拒否なんてしなかったけどやっぱり内心は心配していたんだと思う。

ただロックさんと違うのは、京がけして治る事の無い病気になって

しまった事と俺が骨髓移植しか助からない病気になってしまった事。ロックさんも後々でそういう病状が出てくると思ってしまうのも一理あると思つたし、その反動でHの回数が増えてくると思つてしまったんだろう。

社さんは自分でH関係だったら、自分の感情を節制出来ないって言うたからなあ。

それを受け止める立場であるロックさんは、多分って言うか相当辛いんだろうなあ。

自分が社さんに、吸血鬼だって言うのも言えずにいるから…。

それが元で別れるようだったら、社さんもそこまでの男だったんだって事だよな。俺も、人の事とやかく言えないけど…。

でもさ、社さん自身はロックさんと別れる気がないのも知っている。社さんは自分で告白したから。

「俺だって、K'が『真祖』だって知った時は無理させたくないって思つたんだ。でも、そんな事も言つてられなくなつたしさ。」

京が、俺の事そういう風に思っていたなんて…。俺に隠し事なんて無かつたのに、本当はそんな風に考えていたなんて…。

「俺はK'の『亜種』だし、K'の事は信じているよ。だってK'は俺にとって、大事な人だし大好きな人だから…。」

京の言葉に耳まで真っ赤になってしまった俺は、京の顔を黙って見ている。

だって無理に話して、『あうあう』になつても何かしゃくだし返つて認めているって思われても嫌だったから。

どっちにしてもからかわれる事になるのは、俺の方なんだけど…。「ロックが七枷さんの事が好きなように、七枷さんだってロックが大好きなんだからさ。でもロックが心配になつた気持ちも、俺には分かるよ。もちろん拳崇だって、似たような経験ぐらい持っているんだからさ。」

いきなり話を振られたのか、拳崇も少し驚いた。

「経験が無いっていうたら嘘になるんやけど、悲しい思いをさせた人がいたのも事実やしそういう風にさせたんは俺の責任やもん。今だって凄く罪悪感になってて、トラウマになってるんやから。」拳崇だって、辛い思いをして来たし例えロバートさんとの関係が終わっても残ったのは深く傷ついた拳崇の心なんだから。

ロバートさんとの愛人関係がバレて、それが元でアテナちゃんと別れた事になったのも事実だしロバートさんは拳崇の事を『性欲を満たす為』しか思っていなかったのもショックだし俺自身むかついてロバートさんを殴ってしまったから。

「だから俺、K' やロックには幸せになって欲しいんよ。俺のせいでK' だって、巻き込ませてしまったから…。本当に謝らなきゃならないのは、俺やから…。」

拳崇がロックと同じ様に凹んでしまったのを見た俺は『あうあう』ってなってしまうたけど、拳崇は本当に辛かったんだ。

京もそんな拳崇を見ているし、俺がロバートさんを殴ってしまったのも見てしまったのも事実だから…。

あんな辛い表情をした拳崇を黙って見てしまった罪悪感も京は思っ
てしまっているから…。

だからこそ拳崇が、ロバートさんのいた楽屋へ行くって言った時黙って行ってくれたんだ。白目を向いていてもロバートさんは、拳崇の大事な所を攻め続けていたらしいし何十回も拳崇をイカせたり中
に出しまくったり…。

しかも、自分の性欲が一段落して拳崇の体が動けなくなったらそのまま放置してるって聞いた時はマジでもう一発殴ろうかって思った
だつて、あんなに傷ついた拳崇を黙って放置なんかしたらマジで最低だし誰だつてビククリするよ。

拳崇は、体をガクガクさせてしまったのも事実だし泣いてしまった
から…。

『俺：ロバートさんに、最後までされて…忘れられなくなっちゃったよお』って大号泣しているのも事実だったし、『体が熱くなってる…このままじゃ死んじゃうよお…』って言っていたんだから。

「K、？どしたの？」

京が俺の顔を見てはよんとしているのを見て、一瞬理性が落ちそうになったけどそんな事も言ってもらえなくなって…。

「何でもないよ？それよりもさ、ラッキーさんの事で何か分かった事あったの？」

話をずらす訳じゃないけど、こうでもしないと自分の理性が落ちてしまうから。

それだけ京の仕草は凄く可愛いし、この笑顔をいつまでも守りたいと思ったのは嘘じゃないよ。

だって京は、俺の大好きな人だから…。

「一応検死の方に回されて、解剖されるって聞いた。結果はどうなるか、教えてくれないらしいんだ。」

本当は、京のコネを使って調べたいけどそう言ってもらえなくて…。

京自身、自分が警視庁の警視の息子だって事を認めたくないのも事実だからこうなったら裏ルートを使うしかない。

裏ルートって言ったって、知り合いが鑑識の所にいるって言うだけなんだけど紫舟さんがそう言うのにもうるさいつて分かっているから…。

しかもまだ、八神さんが容疑者のままだし…。

「あっ、そうそう。八神さんが出てくるって言うか、戻ってくるって。紫苑がその話を聞いてめっちゃ大喜びしていたけど…。」

そりゃ喜ぶのなんて、当たり前だよ。

今まで八神さんとあまり話が出来なかった紫苑さんにしてみれば、八神さん本人に会えるのは本当に久しぶりだから気分が良くなるのも分かる気がする。

紫苑さんが今まで、気分的にも不安定で大変な事になったのも事実だし番組中にも泣いてしまった事だってあったから…。
京がそういう事になったりしたら、俺も同じ事になると思う。
でも、これで紫苑さんが悲しむ事なんてなくなっていくんだから…。
俺だって悲しむ事なんて、しないって思ったのも事実なんだから。
八神さんが無罪だって知って正直ほっとしたんだけど、もしかしたらまた怖くなった。だって、後をつけられた事があったから…。

俺だっていつこの病気が、進行して自分の体が動けなくなるか分からなくなるし命だっていつ尽きるか分からないし…。

だけど、限られた時間の中で京を守りたいって思ったのも嘘じゃないし俺自身がそう思っているから。

「それで紫苑さんが、めっちゃ機嫌が良かったんだ。」

一応、ボケてみたけど何とか誤魔化せたかなあ。

俺の病気を知っているのはごく一部だけだし、悲しませるのは絶対に嫌だ。大好きな人を悲しませるのも、喜ばせるのも俺自身なんだから…。

「うん。」

俺も正直嬉しいけど、ロックさんも嬉しいと思うんだ。

まだ芸能活動を自粛しなくちゃならないのもちよつとは寂しいけど、やっぱ戻ってきてくれるのは嬉しい。

紫苑さんも、やっと笑顔になれると思ったらほっとしたのは事実で今までだったら楽屋で倒れるように眠っていた紫苑さんを何回も見ているからやっと楽になったんだなあって思ったし八神さんが警察に参考人として連れて行かれた時はショックを受けて泣いていたのも知っていたから…。

「待ち遠しいだろうなあ。最近は電話も八神さんの方から、全然かけてくれないってボヤいていたから。」

ロバートさんと違うタイプなのは、俺が良く分かっている。紫苑さ

んだって、八神さんの事を待ちつづけていたし、俺も京がそういう立場だったら同じく待ち続けていたから。

「ボヤいている時の紫苑の顔を、見てみたかったなあ。」
京がちよっとニヤっとなった顔を見て、俺は軽く嫉妬しまいそうだったけどいちいちしていたら京にも悪いと思うし紫苑さんがせつかく機嫌が悪くなったのに機嫌を損ねたら大変な事になる事は俺だつて分かっていたから。

「もう…京のいじわるっ。」

自分は、夏の空も大好きでちょっと暑いですが星がきれいで結構好きなんです。

地元では、あまり夏って言う感情って言うか時期が短いので何とも言えないんですけど……。^ - ^：

.....

次回予告

ロック「前だったら、俺とかに愚痴っていたのに八神さんが戻ってくるとすぐこれだもんな。」

紫苑「だって、仕方ないじゃん。確かに愚痴ったのはさ、悪いって思っているけどさ……。」

ロック「ふーん。愚痴が好きだと、思ったのにさ。」

紫苑「何さ、それ。」

作者「まあ、まあ。(汗)」

次回、第27話.....**勇気**の**覚醒**.....

- - - 勇気の覚醒 (courage of awaken) - - -

八神さんが、留置所から出てきた。

紫苑さんはめっちゃ嬉しくて機嫌を取り戻したけど、まだ解決していない事が山積みで頭がぐるぐるしているのも事実なんだよね。だけど、今度は一人じゃない。

京：珠洲がいるから一人で、考えすぎなくたって良いんだ。

あの後八神さんが帰ってきて、紫苑さんが大喜びしていた。当然俺らも嬉しかったけど、内心はまだ複雑だった。

ラッキーさんの事やビリーさん・マキさんの事だつて解決していない状況で、頭がいつぱいいつぱいになっていたから。

そんな俺の顔を見た京が、俺に話し掛けてきた。

「何か、不思議な顔をしてんなあ？何か、気になる事でもあるの？」京だつて知っているはずだけど、俺の事を気にしているからちよつととぼけちゃった。

本当はとぼけて欲しくなかったけど、京も俺もてんばっていたから少しでも気を紛らわせようと思っただろう。

正直不謹慎だけど、俺自身：理性が落ちそうになつてたのは事実で…。

「K' がビリーさんやマキさんの事で考えているのは俺だつて分かっているよ。分かっているけど、K' が一人で何でも背負い込むなんて事無いんだからね。俺は、K' の病状がどんなのか知っているし無理して倒れるなんて事になったら嫌だからね。辛い時とかあつたら、ちゃんと俺に言っつてね？俺だつて、力になりたいって思っているんだから。」

京が落ち込んだ顔をしているのを見て落ち込ませるつもりは無かつたんだけど、寂しい思いをさせてしまったのは俺だし京だつてあんなに自分で思っていたなんて知らなかったから。

俺自身自業自得だつて自分でも思っていて、京のあんな顔を見てしまったのは事実だから。

「大丈夫だよ。京に、心配させてしまったのは俺だから…本当にごめんね。」

京の肩を黙って抱きしめて、軽くキスをした。

京も耳まで真っ赤になって、俺の顔を見てはにかんだ。

ロックさんも拳崇も俺らを見て、『にやり』とはしなかったけど京の幸せな顔を見たらそんな事もなくなってしまうたらしい。

「気にしないで良いよ。俺はK'の事信じているし、大好きなのは嘘じゃないよ。」

はにかんでいる京の顔を見たら、マジで心が癒される。

思わず抱きしめようとしたけど、今度こそは『にやり』されると思ったから出来ない状況になって黙って京の顔を見た。

本当は理性が崩壊しそうになったけど、俺自身がてんばって来ているし京が泣いちゃったら困ると思ったから。

「K'は、俺の事…どう思ってるの？」

だからそんなはにかんだ顔で、こっちを見ないでくれ。

理性が壊れて、大変な事になっちゃうから…。

俺の方が悪いって、自分でも自覚しているのに京が無自覚でされたらロックさんや拳崇に『にやり』されたりからかわれるのが分かっているから。

「そんな事…決まってるじゃん。俺は京の事…珠洲すずの事、大好きだよ。嫌いだったら、こんな風に自分が素直にならなかったし信じる人がいるから俺も変わったんだ。」

お互いに顔を真っ赤にさせて、はにかんじやった。

当然『にやり』されちゃったけど、拳崇だってロックさんだって事情を知っているから仕方ないよね。

だって真っ赤になっちゃったのだって事実だし、自分の理性が崩壊しそうだったからにはかむしかなくて…。

だけど、ごまかしたって言っちゃえばそれまでだし本当はしたくないんだけどね。

「珠洲ちゃん、珠洲ちゃん。」

ロックさんが京の顔を見て、なにやら話そうとしている。

京も自分の今の姿の名前を言われて、何の事だか分からない状況で首をかしげちゃっている。

「なあに？」

「うわっ、可愛い…。」

「珠洲ちゃんも、俺の前世の時の姿を…知っているんですか？」

京が少し困った顔で、ロツクさんの顔を見た。

ロツクさんもそんな京の顔を見て、苦笑しちゃっている。

「知ってるよ。知ってるけど、名前は思い出せないんだよね。ロツクが前世の時も、俺らの仲間だって事は分かっているんだけど…。」
京がブルーになっちゃったし、下を向いちゃったけど…。

「俺ね、ロツクが前世の時に悲しい思いをしたのを黙って見ちゃってたんだ。本当は助けてあげたかった気持ちがいっぱいだったけど、その時は俺らも結構辛い思いをしてたからさ。ちょっと、言い訳みたいに聞こえちゃうけど…。」

多分京は、前世の俺らの最期を見てしまったから…。最後まで残ってしまつた京にしてみれば辛かったのは当然の事だし、目の前で俺が京をかばって死んでしまつたのを見てしまつたから…。

「俺…K'が…前世の時、俺をかばって死んじやつた時大泣きして凄く悲しくて寂しくて気付いたら周りに人が…。」

それは完全な力の暴走だと思つた俺は、京の話をも黙って聞いていた。だつて、俺にも一理あるから聞いた方が良いと思つたし俺だつてあんな京を見るのは嫌だつたから。

力の暴走をしている時の京の記憶を完全に封印していて、『記憶が無い』って一言で片付けてしまえばそれまでだけど本当は凄く惨事だつて良い程の状況だつた。

「俺…あの時みたいにな、K'を失いたくないよ…。」

泣き出してしまつたのは俺の顔を見て、自分が最期に見てしまつた風景を思い出したみたいで…。正直力の覚醒じゃなかったから、少しはほつとしたけど京にしてみれば凄く複雑で辛かつたんだろうな

あ。

敵側からしてみれば、俺にしてみても真吾にしてみても格好な生贄
だったらしいから…

「すいません…。俺のせいで、こんな事になってしまったて…。」
別に、ロツクさんのせいじゃないよ。泣かしてしまったのは俺の方
だし、責任も取らなきゃならないのも俺の方だから…。

京をこのまま泣かせた状態で、仕事に行ってしまったら怒られるの
は俺の方だし何だか気分的にもシヤクだから…。それに今の京の顔
は、真っ赤になっていいるのも事実だから。

「でもそれは、八神にしてもロツクにしても同じ事を思っているよ。
だけど俺が一番に思っているのは、嘘じゃないし辛いのはもう嫌だ
から。」

京の目に涙が溜まっているのは、俺側から見てもロツクさん側から
見ても分かった事だし俺自身なんか照れてきた。

「2ヶ月前にロケバスの中であんなに激しいHをしてから、珠洲の
事…忘れられなくなってさ…。正直に、今だってHしたいよ。でも
さ、京がそう思っていたなんて思わなかったから…。」

京の顔が、一気に真っ赤になった。
涙を溜めたままだったから、当然の如く理性が壊れそうになって…。
だけどロツクさんや拳崇に【にやり】顔をされたから、俺はすぐに
京の肩から手を離れた。

「でも俺は、Kの事大好きだよ。確かに、ロケバスが揺れたのは
ちょっとビックリしたけど…。だけどKとHするのは嫌いじゃない
しいっぱい中に出されたけど大好きなのは嘘じゃないよ。」

その後にシエルミーさんとお姉ちゃんに説教つて言うより、思いつ
きりにやりされたのは事実で4人で後処理つて言うか片付けをした
んだけど…。

「Kも、自分の性欲を抑えきれなくてどうするん？辛いんは、草

薙さんの方なんやで？」

そんなの俺も元の姿の時は、何度も思ったよ。でも今は完全に男の姿だし、京の体を考えたら拳崇の言う通りだって思ったけど改めてそんな事を言われたら凹むのは当然だし怒るにも怒れないじゃん。

「あれ？K'からの、予想外の反応。(にやり)」
誰のせいだよ、誰の。

俺だって思わず耳まで真っ赤になっちゃったし、京だって今にも憤死しそう。

「まさかK'の方が早く真っ赤になるのは、びっくりや。普通やったら草薙さんの方がすぐに真っ赤になるのに…。」

京も拳崇にからかわれているから、思いっきり不機嫌になっちゃった。

「そんなの拳崇に、関係ないじゃん。第一、K'だって何で反応しちゃうかなあ？もしかして、同じ事考えてたの？」

頬をふくらませてしまった京に俺は、何も言えず黙っていたけど…。その黙っている時も、京はイライラしていて…。

「やっぱり、そう思ってたんだ。K'って、変態だもん。」

ちよっとむっとなりながらも京をこのままいじけさせるのも何か可愛いくて良いと思ったけど、後でまた京が泣き出したら困っちゃうから。

「男は誰だって、変態だよ。」

俺がそう言つと、京の頬がまたふくらんでしまった。

「認めたよ。(ぶくう)だからHの時、俺が何度も『もう…やめてえ』って言うてもして来るんだもん。」

だってそれは、京が：珠洲が可愛い過ぎるからだもん。言い訳にしか、聞こえなくなっちゃうけど。

でも、俺は京の事を大事に思っているし大好きだから。

前の俺だったら、こういう事自体考えられなかったから。

「でもいくら変態でも、K'の事大好きだよ。」

京に言われて、耳まで真っ赤になってしまった。本当はこんな不意打ちされるのはあんまり得意じゃないから、ちよつと対応に困つちやっただけど京にこんな事言われるなんて思わなかったから…。さすがに、『変態』って言われたのはちよつと凹むけど…。

「むう。俺がせつかく、久々にキザくさい事言っているのに沈まないですよ。」

頬をふくらませてしまった京は、めっちゃ可愛い。でも、自分でキザくさいって言ったら意味ないよ。

「京は、可愛いなあって…。俺も、京の事好きだよ。」
「ロックさんや拳崇に『にやり』されたけど、仕方ないじゃん。このまま京を拗ねさせるものなんだっだし、泣かせるよりかはマシだっと思ってけど俺自身が理性を飛ばしそうになっているのも見ていたしいつまでも拳崇の思い通りに行くかよ。」

「拳崇だつて、ロックだつてからかかっているじゃん。（ぶくう）どうせ。ノロケだよ。だ。」
「うわっ、理性飛びそう。」

「まあまあ、草薙さんもそうふくれたらあかんでえ？K」（こいつ）は、馬鹿正直だから浮気とかそう言うのはありえへんですよ？」
拳崇がにっこりとなつて、京の方を振り向いたけど肝心の京はまだムスツとしている。

「それに、K'が草薙さん一筋なのは草薙さんだつて知っているはずですよ？」

ロックさんに言われて、また耳まで真っ赤になってしまった京は俺の顔を見て来た。

正直いきなりの事だったし、まさかロックさんに言われるなんて思わなかったから。

でも馬鹿正直って、どう言う事だよ。浮気しないのは確かにそうだと思っっているけど。

「K'は、草薙さんの事…どう思ってるん？」

俺自身自分の理性が、飛びそうになっていてのを我慢しているのが分かったのか誤魔化してはいけど京の顔を見た。

「大好きだよ。嫌だったら京とこうして、暮らしている訳無いじゃん。」

自分でも今のは、キザくさいって思っていたけど京には効果的だったみたい。

「もうっ。」

京が耳まで真っ赤になったのは俺から分かっていたけど、何で拳崇まで真っ赤になっているんだよ。

「京が真っ赤になっているのは分かっているけど、何でお前まで真っ赤になっているんだよ。」

拳崇が真っ赤になりながら、俺に話してきた。

「だってさ、いつもだったら絶対に言わないのに言うから不意打ちだったんだよ。」

「ふんだ。」

せっかく京の機嫌が戻ったのに、余計な事しやがって。

怒ったって仕方ないのは、俺だって分かっていたし元を言えば俺がその原因を作ってしまったから。

このままHに持ち込んだら、京は泣き出すと思ったし体だって持たないと思っただから。

散々Hして、泣かせて中に出して壊すまで行ってしまったら今度こそ京に嫌われる。

拳崇だって、不意打ちだったから標準語になってしまっているし…。

「でも、K'の気持ち聞けて良かった。お互いにキザくさい事言っちゃったけど、好きなのは違わなかったんだし…。」

笑顔になった京につられて、俺も笑顔になった。

今の状況でHなんてしたら、拳崇やロックさんに止められるのが分かっていたしきつと京だって嫌だと思っ。

俺が元の姿でも、間違いなく止めてほしいって思っているぐらいだから。

「どうしたん？泣いてへんで、ちゃんと話しい？」

拳崇の携帯が鳴ってびっくりしたせいもあるけど、こんなんで理性が落ちたら社さん状態になるって自分でも分かっているから。

ロックさんの前だったら、絶対に言えない事なんだけど。

電話の相手はパオで、どうやら楽屋で泣いているのが分かったから何事があったんだろうって思っていた。

京だって、楽屋でソワレさんにレイプされた経験を持っているのぐらい拳崇だってロックさんだって分かっている事だしまさかなあって思っていた。

「なんやって！？へビィ・D！さんと、ブライアンさんにレイプされたって！？それ、ほんまか！？」

拳崇はパオの相方で、バラって言うっちゃえば拳崇の方が下だけど凄く仲が良くてうらやましいって言うぐらいなのは知っていたから……。しかもさっきまで一緒に居たし、腹が立つのは当然の事だったから。

パオもさっきから楽屋で叫びにならない、苦しみだつてあるんだし。パオが嘘を言っているなんて思えないし京だって、スタジオは違うけど同じ楽屋だったから。

「K'じゃないけど、何だか凄くムカついているんだけど……。」

パオは拳崇がロバートさんの愛人だって知っていて別れた事も知っているから、驚くのは当然だったしロックさんだっていきなりの事だったからびっくりしている。

「本当に先輩だから、殴る事なんて出来ないけどむかついてるぐらいええやる。事務所が違つたって、後輩だし年も違つけど犯してどうするねん。人の相方に手を出したのも事実なんやで。」

キレたって当たり前だつて思ったけど、俺も人の事言えない状況だつて自分でも思っている。

京があんな悲しい顔をしてしまったのを見てしまったし、泣いてしまったのも事実だったから。

今だって、罪悪感がいっぱい来ていて落ち込んでいるのになんてまた起こったんだろう。

バオが泣いている顔を見たくないのは、拳崇に聞かなくなっただけで分かったし正直俺だって辛いよ。

俺だって逆の立場で、京に散々迷惑をかけてしまったのは事実だし京だって絶対に嫌だし泣き出しそうだったんだから。

「自分の後輩を犯すなんてマジで最低やし、凄くイライラしてくるんやけど…。そりゃ、バオの方が俺よりは少しぐらいは先輩やけどでも人を犯すなんて考えてないからな。相方やし、最低な行爲だって俺だって思っているから。」

さっきの俺みたいに拳崇もイラついているのは分かっていたし、辛いのはバオだって思っているからだと思う。

拳崇自体もロバートさんとの件が、そんなに時間が経っていない自体でこれだから。

「今からとりあわず、戻って来い。俺、K'の部屋にいるしロックや草薙さんもいるから来たらベル鳴らせよ?」

拳崇が携帯の電源を切ろうとした時、何やらバオからボソツと言われたらしい。

「お…おん。」

俺も絶対にバオが『話せて良かった』と拳崇に言ったのは、分かっていたし黙って見ているしかなくて…。

だけど、拳崇は俺と違って突進型の人間じゃないから少しは安心しているけどヘビィ・D!さんとブライアンさんに会ったら間違いない修羅場って言うか喧嘩ドクバチになるのだけは仕方ないよね。

だって、後輩を犯したのは先輩であるヘビィ・D!さんとブライアンさんなんだから。

「ふう。本当に、何を考えてるんですか…。あの2人は…。」

溜め息混じりの愚痴を言い放った拳崇は、自分の部屋から持つてきたペットボトルのジュースを飲み始めた。

「もしかして…殴る気でのいるの？だったら、止めてね。俺、K'がキレて拳崇までキレたら何して良いか分かんないよ。」

京が拳崇の前で苦笑していたのは事実で、俺がロバートさんを殴ってしまったのを見てしまったから。

「殴れる訳、ないやんか。確かに俺も殴りたいって思ったのは事実やけど、やっぱ体力差ははんばないやんか。」

身長的にも無理だと思ったのも知っていたし、俺にしても拳崇にしても10cm以上違つとやっぱ違つもんな。

拳崇自体、平和主義だしパオの事で殴りたいって気持ちがあるけど何だかんだ言つたつて喧嘩は嫌いらしい。

本場の事を言つたらロバートさんを俺が殴りに行った時、京が気を使つて拳崇の目を軽くふさいでいたからその現場を直接見ていないけど殴ってしまったのは事実だから。

「それに、パオが泣き出して大騒ぎになるのは何かシヤクやしマネーじゃに怒られるのなんでもつと嫌だからな。」

相方だから心配するつて言つちやえはそうかも知れないけど、ヘビイ・D!さんは社さん以上に自分の所属事務所の後輩の中で自分が気に入っている後輩だけを犯すつて言う変な性癖を持っているのは俺も噂で聞いているけどまさか本当に犯すなんて思わなかったから…。

そう考えたら、何かイラついてきた。

本当なら、そんな事考えない方が一番良いのかも知れないけど無責任だつて思われたくないし俺だつて後味が悪いつて思っているから彼女と相方つてちよつと立場は違つても、自分の大事な人だつて思つても良いのは事実で何の代わりだつて無いからなあ。

「ロバートさんの件で結局、K'達を巻き込ませてしまったのは俺

やからね。これ以上、巻き込ませたくないって思ったしあんな辛い状態の俺を見せてしまったから本当に謝りたいのは俺なんよ。」
拳崇がにこつと笑っているのを見て、少しホツとしたけど何でそんな風に思っているのかなあ。

「気にすんなよ。俺、ロバートさんと話をしたかったから…。あんな事になったのは、悪いと思ったんだけどさ…。」

京を泣かせる訳にもいなくて、少し落ち込んでしまったけど凹んだのは分かっていたから。

「でも、さっきのパオじゃないけど話せて良かったなあって…。あのままやったら、絶対に辛いままだったから…。」

「拳崇…。」

拳崇の笑顔が半分作り物もんだって言うのは、パオの事があるからかも知れないと思ったのは俺だけじゃないと思ったらしいの間にか拳崇を抱きしめていた。

突然の事だったし、拳崇もビックリしていたし京が首をかしげていた。

「いつまで、拳崇を抱きしめているんだよっ！（むうっ）そりゃ拳崇が不安になったのは分かっているし、パオの事だって気になっているって知っているけど何でK'が抱きついたままだよお。（むうっ）」

京がほほを膨らませてしまったのを見て、俺は一瞬ハツとした。

「（づるづる）俺…拳崇に、嫉妬しちゃいけないのに…分かってい
るのに…い。」

泣きそうになっている京に、俺やロックさんはオロオロするしかなく…。

「俺…拳崇の事が、心配だからさ…。」

「だったら、拳崇と付き合えば良かったじゃんっ!!」

完全に泣いてしまった京に、俺は黙って肩を抱きしめた。

「大事なのは、京…珠洲だけだよ。」

低音ボイスで京に話すと、京の耳が一気に真っ赤になった。意識した訳じゃないけど、まあいいか。

「もうっ、K' ったら…。」

ラブラブモード全開の俺らに、ロツクさん達は『にやり』したけど問題解決の一番の方法はこれしか無かったから。

不安がっていたのも分かっていたし、京がトラウマになっている一つの原因だったから。

「草薙さん。もしかして、また不安になっちゃいました？」

ロツクさんが、京の身震いを見て首を傾げている。

そっか、拳崇やロツクさんは京がソワレさんに強姦された事を知らなかったんだ…。

「不安なんかにならないけど、ちょっとだけ嫌な思いをしちゃってさ。」

京自身は何とか誤魔化したつもりだったけど、ロツクさんはまだ首を傾げている。

だけど、事情が事情だから黙って見ているしかないって思ったんだろっ。

「嫌な事が何なのか聞きませんが、草薙さんが辛い思いをしたのは事実なんですよね？」

ロツクさんに言われて、京は首を縦に振った。

「思い出したくも無いのも分かりますけど、何で今まで隠してたんですか？」

京の側にロツクさんが来るのを見て、本当は事情を知っている俺が話した方が良いのかなあって思ったけどさっき大泣きした事もあったから…。

ロツクさんだつて、そんな京を見ているから黙っちゃったけど…。

俺が、京の顔を見てみると突然玄関のベルが鳴った。

すぐにパオだと思っただ俺は、ドアを開けた。

すると泣きながら、パオが俺に抱きついてきた。

「俺…俺…。(ふえっ)」

本当は役得だつて思ったけど、ロックさんもいるし拳崇が相手として事情を聞きたいって呼んだんだからそんな事も言つてられなくて…。
それにそんな事を思つてて実行に移したら、俺まで同罪だつて思われる。

マジで、今の段階でそれだけは勘弁だ。

京だつていきなりの事だったし、事情だつて知っていたから驚くとかしか出来なくて…。

泣き出したパオを、怒る事なんて俺には出来ないよ。

悲しいのは、パオ本人なんだから…。

「事情は、拳崇から聞いた。着替えとご飯用意しているから、風呂入れ。俺近くで、話聞いてやるから…。」

そう言つて、俺がパオの肩をゆっくり抱きしめようとした時パオが急に泣き出した。

「嫌だ…嫌だあ…。離してよ…。」

京の時と同じだと思つた俺は、ちよつとあたふたしてしまつたけど肝心のパオは更に叫び出した。

「嫌だーっ!!!」

玄関先でパオが叫び出したのを聞いて、拳崇や京も玄関にやってきた。

京もすぐに自分と同じ状況になつたと思つたのか、何とかパオを落ち着かせようとしている。

京にしてみれば、パオが泣き出すのも分かっていたから少しは落ち着いていただけ拳崇はロックさんに体を支えてもらわないとまだ辛いらしい。

そりゃ、そうだよな。

ロバートさんの所に行つてそんなに時間が経っていない状況で、自分の相手にも同じ事になつちやつていたから…。

「（ふえっ…）す…すいません…。俺のために…俺の話を、聞く為に待っていてくれたのに…。自分から…（ふえっ…）思いつきり、拒絶してしまつて…。」

パオが泣きながら、ソファに座つたのを確認した俺はどんな事になつたか聞こうとしたら京が首を振つた。

「（ふるふる）」

何でつて一度は思ったけど、事情を知っているしもう一度パオが泣くのが見てられなかつたから…。

「草薙さん、良いんです…。俺、自分からいずれは話そうつて思つていましたし…。」

パオの顔が段々と暗くなつて来ていて、本当に自分の口から話したいんだろうけどトラウマが来ちゃっているのも分かつていたし結構大変なんだろうなあつて思つた。

パオ自身は今までこれまで恋愛話なんて無かつたつて言つたら、言い方悪いけどずっと一人身だつたのは事実だし今回の事で辛い思いをしちゃつたのは仕方ないつて思つちやつたんだけど…。

「K'にも、思いつきりワガママ言つちやつたし…。本当は、俺がしっかりしなくちゃならないのに迷惑ばかりかけちゃつてるしさ。」

今にも泣きそうなパオの顔を見て、ロツクさんが軽くキレ出した。

「ワガママなんて、誰も思つてないよっ！！パオが凹んでたつて、何の意味も無いだろうがっ。…ごめん、大きな声出しちゃつて。だけど本当に落ち込んだままだったら、何にもならないよ。」

ロツクさんにせよ、拳崇にせよ自分が嫌な思いをしているからパオの気持ちも分かつている訳で…。

「でも、いつものパオなら元気そのもので俺だつて救われている所だつてあるんだよ？」

そう言つて、パオを風呂場に軽く押し込んだロツクさんがドアに向

かって話した。

「事務所的には、俺の方が後輩だけどちゃんと離す時は話して？俺も、人の事言えないけど話さないとパオだって辛いよ？」

にこつとなるロックさんにつられて、俺も風呂場にいるパオもにこつとなった。

「余計な事かも知れないけど、一人で落ち込まないで何でも俺らに話してよ。拳崇だって本当は凄くむかついてキレそうだったけど、パオが落ち込んでいると怒るにも怒れなくなっただし拳崇自身も心配かけさせたって思っているんだから。」

確かに、ロックさんの言う通りで拳崇がパオを呼び出さなければ今頃キレていたんだろうし何より一番ショックなのはパオなんだから。まあそれは、パオが温厚すぎるって言っちゃえばそれまでだけど。今もパオの側にいるロックさんだって、同じ事を思っているだろうし。

それにしても、ヘビイさんも何をしているんだか。あれ程後輩を犯すなって、言っていたのにそれまでも破るなんて…。テレビ局の人とかに見られたら、気まずい空気になるの分かっている事なのに…あたふただっけすると思うしさ。

スタジオの外に入ったら、お客さんなんて知らない事だし当然マスコミの人のカツコウのネタになっちゃうんだから。

でも、生放送じゃないからそれはそれで何とかなっただけどパオにしてみたらどつちにしても辛い事に違いないと思ったから。

俺だって、人事だっけ思いたくないしまた京が誰かに犯されるのだけは絶対に嫌だから。

「ん？どうしたの？」

京が俺の方を見て首を傾げている。それだけでも理性が飛びそうでもやばいのに、肝心の京は無自覚で…。

俺の顔を見て、はにかんでいる京の顔を見ると何か癒されるなあって思ったんだけどそれも言ってられない状況で無責任の事を言った

ら何を言われるか。

言わせるつもりも無いけど、改めて言われると何か凹む。

「何でも、無いよ？それよりもパオ。一つだけ、聞いて良い？」

京が笑顔になってから、パオに話し掛けた。

俺が、一つだけ聞いたかった事…。

それは前に、事務所で先輩であるデュオロンさんに告白された事。

本当は、あの場所に俺もいてヤジを飛ばしたかったけど近くにお姉ちゃんがいたしそのまま放置していたんだよね。

結局凄く気になっちゃって、聞こうと思っちゃったのも事実なんだよね。

「デュオロンさんと、付き合ってるの？」

本当に核心につく事だったから、多分シャワーの音でほとんど聞こえないけどパオにとっては事実で真っ赤になっているんだらうなあ。しかも告白の内容も全部俺に聞こえてるとなっちゃ、隠し事なんて出来ないんだらうなあ。

「聞いてたのかよ。」

案の定真っ赤になって、俺がいる方向に振り向いた。

もちろん言う事も無いと思っっているし、今のパオはそれどころの問題でもないって言うのも知っっているから。

知っているからこそ、本当の事を聞きたかったし状況は間違っっているけどもハッキリしたかったから。

「本当は、こんな状況だし聞いてちゃまずいって思ってたんだけどあの時本当にビックリしたんだよね。目の前で、告白しているのを見ちゃったからさ。」

あたふたし出す京に、俺は話を続けた。

「大丈夫だよ。俺は口カタイし、俺らの事だつて隠してくれているんだから裏切ったら可哀相だからな。パオにとっては初めての恋だし、俺らは応援するよ。」

俺がそう言つと、動揺したのか風呂場であたふたしたパオに俺は笑

顔
にな
った
。

いよいよ、京の覚醒がまじかになってきました。

正直最初の方は、覚醒させようかなあどうしようかって迷っていた
んだけど物語上一つのプロセス的なものだったから結局思い切って
覚醒させちゃおうかって思っちゃったんです。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次回予告

京「結局は、覚醒しなかったじゃん。」

作者「ちよっと、忘れてたんだよね。だけど、次回はちゃんと覚醒
させるよ。」

K「フーン。」

次回、紅葉の紅色。

まさか、ヘビイさんがパオを犯すなんて…。

すごく驚いたし、信じられないって思った。ヘビイさんは、俺にとつても尊敬する先輩で仲良くしてもらっているけどそんな風にパオを見ていたなんて…。マジで最低だし、何考えてるんだらうって思ったらイラついてきたけど俺だって人の事言えないんだよなあ…。

（ 3 : ヴ

あの後、ちよつとのぼせてしまったのかソファに寝ころがってしまったパオ。

まあ、正確に言ったら俺が真つ赤にさせすぎてそれを見たロックさんのぼせたと間違ってしまったと言う話。

ソファに座らせて、水を飲ませて少し落ち着いたパオが自分から話し出した。

「久々のピンの仕事で昨日から楽しみにしてたのに、ヘビイさんにあんな事をされて凄いいショックで…。一人で落ち込んでいたら、拳崇から電話があつて…。」

パオの言葉を聞いたら、京がソワレさんに犯された事を思い出した。あの時も凄くイライラしてて、数日間：京と口も聞かなかつたんだっけ。

京が悪い訳じゃないけど、俺が京に対してキレかかってしまったのは事実だし何よりその前に京とHをしちゃっていたから罪悪感とかあつて心が折れて結局は俺から謝つたんだよね。

それにHで誤魔化するのなんて、最低だつて思っているから…。

拳崇やパオだつてロックさんだっているのに、ここでHなんてしたら怒られるのは当然だ。

にやりされるのが、ほとんどなんだろうけど…。

「俺、拳崇から電話が無かつたら…今頃何してたんだろつ。考えたくも無いけど、凄く辛くて…でも俺ずつと拳崇の名前を呼んでいたんだよね。」

泣きそうになっているパオの顔を黙って見ていると本当に泣きそうだったのを我慢して、パオが話を続けた。パオ自身も、拳崇がロバートさんの事で大変だつたつて言うのも知っているから…。

「でも、拳崇自身もロバートさんとの事があつたから大丈夫なのかなあつて思つちやつてて…。」

要するに、パオも拳崇も自分の相方を気を使っているんだなあ。

「大丈夫やで。俺はもう決着ついてるし、パオの事もあるし気になつていたから話そうかなあって思ってたんよ。いつも、ネタの時だけやったからちゃんと話したいって思ってたし。」

…嘘、言うな。

本当は、凄くイラついてるくせに。

「だから、気を使わなくなつてええで。パオは、俺の相方なんだから。」

にこつとなつている拳崇の顔をパオは見て、少しほつとしている。

「それにしても、ヘビィさんも何て事してくれたんですか？」

パオの事を考えたら、自分の事なんてどうだつて良いつて言つたら悪いけど一番辛いのはパオだもんな。

「あの子、パオ。」

拳崇が少しムツとなつているのを見た俺は、少し身震いをしてる。パオ自身も、自分のせいで拳崇がイライラしてるのが分かってたから苦笑しちやっているし俺と拳崇は同期だつて知つててこんなにな怒っているのを見た事が無いつて思ったからかも知れないけど…。

「なあに？」

パオも、拳崇があんな姿を見る事がなくてビックリしているのは事実だし…。

「ちよつと、お前の心の中つて言うか記憶を見てええか？嫌だつてお前が言つても俺は見る気だし、そうでもしないとヘビィさんとかに説教できないから。先輩だけど、ちゃんと秩序は持つて欲しいつて事務所でも言つているのに守れないんだつたら最低やからね。」

それは、相方として拳崇自身は当然だと思つたんだろう。

パオが嫌だつて言つても見るつて言つのを宣言しとけば、当のパオも言えなくなるつて思つたんだろう。

「うん…。でも…無理しないでね。」

パオがそう言うと、同時に体が拳崇にもたれかかった。

拳崇と同時に、俺もパオの記憶に飛び込んでしまったもんだから京はあたふたしてしまっただって事実で…。

『パオって…本当に、可愛いなあ。そんな無防備だったら、最後まででしたくなるじゃんかよ…。』

番組のロケでパオが、ヘビィさんに犯されるちよつと前だ。当然拳崇が、キレかかってヘビィさんに飛び掛ってくるのを止めた。

「せっかく、パオの記憶の中に入っているのに拳崇が余計な事をしたらパオがぐるぐるして混乱しちゃうんだから。パオが大パニツクで、京みたいにフラッシュバックが来たらどうするの？どっちにしても、後でヘビィさんを説教するんでしょ？」

「う…うん。（こっくり）お前、ちよつと怖いで。」

「【怖い】って、何だよ。だったら、ちよつとイラつくかも知れないけど我慢した方が良いよ。本当は、拳崇だってまだ回復してないんだからさ。」

そう言つて、何とか拳崇を落ち着かせたのは良いんだけど俺だって本当はイラついているんだよ。

嫌だっ…！何でっ！何で…。ヘビィさんの事…信じて、たのに…。大事な先輩だつて、思っていたのに。

パオが大きな声で、絶叫しだしたものだからヘビィさんがパオの口を抑えた。

大きな声出したら、バレるだろうが。それに、触っただけでびくついちゃって可愛いから理性を爆発させて良いか？

何で、こんなに可愛いんだよ。デュオロン（あいつ）が彼氏じゃなかったら、俺が替わりに彼氏になれたのに…。デュオロンだつてお前と一度だつてデートとかしてくれないんだろ？せっかく自分から、告白したつて言うのにさ。俺だったら、こんな可愛い子を放つて置く訳にはいかないのにさあ。

パオが拒絶しているのを無視して、ヘビィさんはパオの胸をもみ始めた。しかも、ブライアンさんは理性が崩壊しているのかよだれをたらしちやっっているし……。

嫌だ……っ！や……こんなの……、っあ！変に……変に……なっっちゃう……。誰か……誰か……助けてえ。

誰も助けになんて来ないし、防音だから声が聞こえねえよ。それに、デュオロンだって今日は地方の営業だから助けに来るのなんて遅いしさ。それに、お前の体見るとマジで細いし可愛いしさ……。パオの体が小刻みに段々と、動き出したのを見てパオの足を上げるブライアンさん。

ここも凄く、濡れて来たなあ……。さすが、一般の女子に『抱かれたい芸人No.1』に選ばれるだけあるなあ。本当は、お前が自分達と同じ女だつて言うのも知らないでさあ。指を入れられるだけで感じるなんて可愛いし……何かそそられるなあ。

パオの大事な所を、ヘビィさんはドアのノックをするように攻め出す。

同時にブライアンさんも、パオの大事な所を攻め出した。苦しがつて、よがっている姿を見て俺だつてキレ出す寸前まで自分の感情を押さえつけるのに必死だった。

あっ……う……。あっ……あ……。っ！変な……変な感じに……なっっちゃう……。凄く……。気持ち悪いよあ……。……う……。うぐ……。体が……熱い……よあ……。く、あっひいっ……。

顔も可愛いし、エロイし目もトロロンとしてるしさ……。

パオの目からは、大粒の涙が溜められている。この光景を黙って見ている拳崇はまた、イライラしだしている。どうやら、初めてだったらしく体をもじもじしながら絶頂に向かっているらしい。

イ、ヤ……。っ！ふ……。あっ……。！はあっ……。あ……。ん……。んあっ……。！あ、んあっ、はっ……。！嫌だ……嫌だ……。嫌あーっ！……。んっ……。っ……。っ……。

体をビクビクしたパオの大事な所から、体液

愛汁がとろりと

零れ落ちて息が荒くなってしまつて肩から息をしているように見えた。凄いショックで、今にも泣き出しそうなのは俺にも分かつていたし助けてやりたいけど拳崇が張った結界が邪魔で何も出来ない。

イツちやつたんだ……。イツた顔のパオも、可愛いなあ。

泣き出したパオに、くすつと笑いながらパオの大事な所を今度は自分達のものを入れパオの中を攻め出した。細い手首は、縄かロープで縛られている跡がくつきりと残つてしまつている。

そんな顔されたら、ますます酷い事……したくなるじゃんか。

パオの胸は大きく上から下へ、動かされているように……。多分、パオの頭の中は罪悪感と変な快樂に支配されてぐるぐると思考がまわつているんだろう。

い……たつ……痛い……つ……んううつ……！……んつ……！んうあつ……

！んつ……んあ、はつ……！んつ……んううつ……！体に……電気が……走つたみたい……ビリビリするう……。

お前の中……凄く……熱くなつてきたぞ……。

ふ……あつ……！はあつ……あ……ん……んあつ……！……やめ

……つ……や、めろ……そんな……！体が……熱くて……死にそうお……。

……ッ……あ……そんなとこ……ッ……やめ……あ……つ……！

すぐにブライアンさんとヘビィさんのが一気に固くなつていくのを、パオは体で答えだした。

背中をびくつかせながら、涙が一滴一滴と落ちながら全身で快樂を受け止めていた。

もちろん、先輩・後輩関係なくちよつとキレながら……。

はつ……ああつ……！……つう……あ……。はあ……あつ……！け、拳崇……

つ……拳崇う……。あつ……う……。あつ……あ……つ……！……ひああつ……

……！た……助けてえ……。

あんなチビの事や……彼氏の事……忘れちゃえよ……。

んううつ……！……んつ……！んうあつ……！んつ……んあ、はつ……

「！！んっ……んううっ……！んうあつ……！んっ……んあ、はっ……！！ふ……あつ……！はあつ……あ……ん……んあつ……！！」
パオが限界に近いのか、また体をびくつかせながら息が荒くなっている。拳崇はと言うと、今にも殴りそうな状況になっている。

相方の拳崇の名前を何度も、パオは呼んでいるのに。

「K……戻ったら、すぐにブライアンさんかヘビィさんのどっちかを殴るから絶対に止めたらあかんで。もう……我慢、出来へん。このままだったら、パオが一番可哀想やんか。」
そんなの邪魔する訳、無いじゃん。

キスして来るっちゆう事は、その気になっただって思ってた良いんだよなあ。まあ、ぶっちやけて言っちやえば俺らもその方が嬉しいんだけど。こんな姿を見たら、他の連中はどう思うのかなあ。

パオにとってH自体もキスされる事も初めてで、キスされただけでも目がトローンとしてきちゃっている。拳崇があんな事になっただけじゃなかったら正直俺だってイラついて来ない状況で見れるのに、あんなパオを見るのはあまりにも辛くて……。

これは、パオと相方である拳崇の問題なんだから。

パオのドキドキした心臓の音が、俺らの所まで聞こえてくる。何も出来ない拳崇は少しどころか凄くイラついていて俺が手を離すと、何をするか分からない。人事とは思えないし、拳崇だっただけで来るのに凄く辛い思いをしたんだから。

俺……パオの中で、出して良い？パオもブラ（こ）イ（い）ア（つ）ンも、もう限界だからさ。

「あいつが、主犯か……。すげー、許さへん……っ！」
拳崇がキれる時は、先輩後輩関係無いのを知っているから身震いしちゃったしこっゆう状態になったのは数えるぐらいしか無いから本当に怖いんだけど……。

ああっ！だめ……やっ！そこは……っ、だめ……っ！！中に……出しちゃ……だめえ……！！中に……出しちゃった……らあ……壊れちゃうよ

お……!!あひい……ひうう……!!し……死んじやう……よお……。んううつ……!!……んつ……!んうあつ……!んつ……んあ、はつ……!!んつ……んううつ……!あつ……う……。

壊れれば、良いじゃんか……。どうやら、俺らとHの相性は……良いんだからさ……。

あつ……あ……っ!変な……感じに……なっちやうう……。んううつ……!!……んつ……!んうあつ……!んつ……んあ、はつ……!!んつ……んううつ……!んうあつ……!んつ……んあ、はつ……!!ふ……あつ……!!はあつ……あ、ん……んあつ……!!

泣いてたつて……誰も、助けに……こねえよ……。

パオが拒絶全開で大泣きしているのを見た2人が、更にパオの大事な所を攻め出した。

中に……出しちゃ……出しちゃ……だめえ……!!け、拳崇……拳崇う……助けてえ。ふ……あつ……!はあつ……あ、ん……んあつ……!ふえつ……。嫌だあ……。気持ち良く……なっちやうう……よあ……。

彼氏だったら、こんな事も……させてもらえないだろう……。

んううつ……!!……んつ……!んうあつ……!んつ……んあ、はつ……!!んつ……んううつ……!んうあつ……!んつ……んあ、はつ……!!ふ……あつ……!はあつ……あ、ん……んあつ……!」

パオが何度も何度も、ヘビイさんやブライアンさんに犯され続けて目はほとんど白目に近くなってきたりしているし声だつてあんまりでなくなっちやううている。

パオの……イキ声も、感じてる声も……何か、凄く可愛いなあつ。

もう……ばかあ……。

息がたえだえになつているパオの姿を見て、拳崇の怒りがMAXにまあ、当然の事だと思つた俺は拳崇を放つて置いて黙つて見ていた。

中に……出すぞ……。

パオの中……すげーっ、気持ちいい……。たまんねえ……よ。

「キレルのは自由だけど、気持ちも分かるしだけど…人をてんばらせてどうするの?」

あまりにも拳崇がキレルって言うか、怒りの感情が先立っていたからロックさんが気になっていたらしい。

「草薙さんに、ソワレさんの事を思い出させる気なん!?!」

イライラモードの拳崇が、ロックさんに八つ当たりしだした。

「思い出させる気なんて無いよ!?!そんな事したって自分が損するって分かっているのに、俺だってK'に恨まれるのなんかまったくごめんだからな。」

俺だって、そんな事しませんよ。

京が…珠洲が、泣き出すって分かっているのに…。

「本当の目的が何なんかはヘビィさん達に、聞いてみなくちゃ分からへんけど少なくとも俺もアテナみたいな事だと思っんや。」

拳崇が、『姫』だって言うのは聞いていたしアテナちゃんは家が代々『姫』の家系だからって言うのも知っている。

京だっていつ、覚醒するか分からない今の状況でこう言う状態になっっちゃったから…。

「え?それって、どういう事?!」

京だってちょっとは驚いているけど、自分の記憶の片隅に『姫』との会話が残っているのも分かっていたから…。

俺だって、京の前世があんな騒ぎを起こさなかったら今頃生まれ変わっていないと思う。

悲しいのは、俺だって分かっているんだよ?

「俺もパオも、アテナも『姫』やからね。犯された事で、封印が解けかかっているしパオだって現にちゃんと告白する前にあんな事になっっちゃったから。」

まあ、パオの場合は自分からしたんじゃないやなくてデュオロンさんから告白【された】って言うっちゃう方が早いけど。

拳崇にとって自分が、ロバートさんとの不条理なHがあつて《愛人
ハトロン
関係》になつていたからパオがあんな事になつたのをショックにな
つちゃうのが分かつていたしイライラしちゃっているのだから仕方
ないのかなあ。自分のせいだつて、思っている事だつてあるんだし。
「パオ自身は隠し通したかつたらしいんやけど、ヘビイさんに犯さ
れた事でこれ以上いざずればれる事やつて思つてたんよ。もし話して
も、パオ自身はそんなにショックは起きないって思っているんやけ
ど…。でも、自分の先輩やし信じられないって思っているのも分か
つているから。だけどこれだけは、記憶が覚醒してもしなくても奴
等の目的は俺ら『姫』の封印解除と京達を殺すのは間違いないし現
に第一から第三までの封印が解除ギリギリまでなりそうやつたけど
K'達が助けてくれたから何とか納まつたんだから…。その点では
感謝しなくちゃつて、思つてたんよ。…ありがとうね。」

そこつとなる拳崇に、俺もつられてにこつとなつた。
そうになると、拳崇とアテナちゃんは付き合つてから一度のHしかし
てないつて事になるんだよなあ。

「感謝しているつて、恥かしい事…言うなよ。」
京だつてちよつと照れてはいるけど、俺が照れてたからムツとしち
やつていたし肝心のパオの事はどうするんだよ。

「俺もさ、K'の事を考えたら草薙さんが死ぬのは嫌なんだよ。も
ちろんK'だつて同期だから死んでもらつちや本当に困るし、あんな
事があつたばつかしたから…。」
「そう言えば、ラッキーさんもビリーさんも拳崇と仲が良かったんだ
つけ…。」

友人を立て続けに亡くしちゃとなつちや、身震いするのは当然の事
だし俺もマキさんが殺された時はさすがに凹んだもん。
マキシマと神楽さん姉妹はいとこ同士だったから、顔は知っていた
んだよね。

姉妹だつて言う事は知っていたけど、一卵性だつて事は知らなかつ

だから最初マキさんと神楽さんを間違っちゃった時があるんだよね。良く、「違うつつ！」って怒られたっけ。

「俺も手伝いたいけど、パオがこんな状況だし俺だって大事取らなくちゃ…。」

ん？パオは分かるけど、何で拳崇が？！

「俺…さつき、『妊娠検査薬』で調べたんやけど妊娠してたって…。」

良く見たら、拳崇の体は女の子になっていた。

何でもうちよつと早く、気付かなかつたんだらう。

気付いていたら、ロバートさんの所なんて行かせなかつたのに…。

「え？どういう事?!ちゃんと、病院行って診てもらった?」

「うん…。今…3ヶ月だつて…。」

京が驚いて、声が裏返つてしまったのを見て俺も口を開いた。

「相手は、ロバートさんだね。せつかく解決したのに、また振り出しかよ。」

俺が呆れていると、拳崇が自分で口を開いた。

「初めてのHをロバートさんにあげて、いっぱい中出しされて…。

まさか、妊娠するなんて思わなかつたから…。すごいショックで、

自分にイライラしてK'と一緒にロバートさんの所に行った時あつ

たじゃん。その時にはもう、女の子の体…今の身体になっちゃつて

て…。」

それじゃ、殴つたら…意味ないじゃん。

結局別れる事になつちゃったけど、拳崇のお腹の中には間違いなく

ロバートさんとの子がいるんだから…。第一子供に、罪なんて無い

よ…。

それに、俺には『おろせ』なんて言える立場じゃないよ。

一番傷つくのは、拳崇なんだから。

「あんなに激しくされて、何度も壊されたのに俺の体はロバートさんじゃなかつたら嫌になつてた。だからパオが、あんな事になつた

時凄くイラついて来てて殴ろうと思っていたんだ。」
自分の相方だし、自分もそういう事があったからシヨックの反面イラついていたのも事実だったんだ。

「今更、ロバートさんの所に行つて『認知してくれ』だなんて言えなへんしこの子は俺が一人で産むから…。あの時、K'がロバートさんを殴ってくれたおかげで気持ちが悪くスツキリして何か吹っ切ったんよ。結局ユリちゃんには、言えなくなっちゃったけど…。」
しゅんとなつてしまった拳崇に俺は、黙って見ているしかなくて…。
「辛いとは思っているし、パオの事があつたから言えなかつたんよ。俺…パオにも心配かけらせるの嫌だったし、これ以上迷惑なんてかけたくなかつたから…。」
にこつとなつてきているのは分かっているんだけど、辛い思いをしているのは拳崇もパオも同じなんだなあって思った。
「あの時、言つたよね。迷惑なんて、思った事も無いって。確かに子供には罪が無いし、拳崇が悪い訳じゃないから。」
ロックさんが拳崇にそう言つと、拳崇も真剣な顔になる。

「拳崇やお腹にいる赤ちゃんだって、ロバートさんは辛い思いをしているんだから。『認知』どうこの問題じゃなくて、これ以上不安になつてたら拳崇の体に悪いよ。」
ロックさんの言う通りだつて思ったし、ちょっとまわりくどいけど拳崇にとつてあまりストレスを与えないようにするにはこれしかないと思つたんだらう。

それはソファで寝込んでいるパオにも同じ事が言える訳で、悪いのはブライアンさんとヘビィさんなんだから。

「マスコミの人やナガセにばれたら、厄介な事になるのは分かっているし変な伝え方をされて余計にストレスになるのも何か嫌だからな。」

ロックさんがにこつとなりながら、拳崇の方を見る。

それを見て京が、ロックさんにくすつと笑った。

「何、ですか？」

「いやあ。ロックも、意外に優しいなあって。」

一瞬だけだったけど、ロックさんが耳まで真っ赤に。

俺はムツとはならなかったけど、京には分かかってほしかったなあって。

今、そういう状況じゃないのだって京だって…珠洲だって分かっている事なのに自分が嫉妬しちゃっているからちよつと腹が立つちゃったんだ。

「K、程じゃないけど、そう言うロックも大好きだよ。」

彼氏である社さんがいたらなんて言われるんだろう…。

絶対にその前に、『何で浮気なんかしたの？』とロックさんに言われそうだけど…。

まだ社さん関係も解決していないのに、こう言う状況になっちゃったし泥沼になったのはブライアンさんとヘビイさんなんだから。

「本当に言う人…間違ってますか?! K、がふくれて、不機嫌になりかかっているんだけど？」

ロックさんが真っ赤になつたまま、俺の方を見てきた。

別にふくれたつもりは無いんだけど、ロックさんから見れば俺が嫉妬したように見えただろう。

「ごめんね。だけど、一番好きなのはK、だけだからね。」

にこつとなつてはにかんだ京の顔を見て、理性が落ちそうになった。まあ嫉妬してようがしないだろうが、京とHする時は辛いほどしてやるけど。

「気にしないで。俺、全然大丈夫だしこういう事が起こったばかりだったから仕方ないって思っているから。気にしてたって何にもならないしさっきのロックさんの言葉じゃないけど、気にしてばかりだったから京が壊れちゃうから…。」

これは、嘘じゃない。

だって俺は京の彼女で、珠洲すずの彼氏なんだからちよつとした心配はするの。は事実だし京だって俺が元の姿の時同じ事思ったんじゃないかなあ？

「俺も、京の事：珠洲の事大好きだよ。ロツクさんや拳崇に、『にやり』されたってかまわないと思ってるし俺が言うのは嘘じゃないよ。」

俺がロツクさんや拳崇に、『にやり』されているのを知らないと思っただか？

2人共すぐに顔に出やすいから、分かりやすいんだよ。

まあ、俺も京に『喜怒哀楽が激しすぎ』だって言われる事があるけどそれ以上に分かりやすいもん。

惚気だつて言われたって自分自身でしている事だから、仕方ないって言っっちゃえばそれまでだけど…。

「俺、K'の事信じてるよ。嘘が誰よりも苦手だつて事知ってるし、彼女だから信じなきゃ最低だもん。」

にこつと笑顔になっている顔の京も、一番可愛いよと言ったら京はどんな顔をするんだろう。

自分の余命が後少しだつて知ったら、間違いなく京が哀しむのが分かっている。

分かってるからこそ、自分の口でなかなか言えないでいる自分が嫌いになる。

犯人も見つからない状況で、自分の人生が終わるのだけは嫌だから…。

仇打ちって訳じゃないけど、自分の気持ちが入まらないのは事実だしこれ以上犠牲者を増やす訳にもいかないから。

「はいはい。惚気ほげだ、惚気。」

拳崇が横で『にやり』になっているのを見て、俺はある程度苦笑し

た。

「良いじゃん、別に。(ぷくう)」

俺が頬をふくらませて見ているのを見て、京が口を開く。

「ぼやくな、ぼやくな。」

拳崇だって、ぼやくたくてぼやく訳じゃないんだよ？確かに妊娠してシヨックが少しは大きいだろうし、気持ちは分かるよ？

だけどさ、それが何でぼやくになるのさ。

「ぼやいてないですよ。俺がぼやいたら、本当にしやれになりませんから。」

そう言った拳崇が、苦笑してソファに寝ているパオの方を見る。

「それにぼやくんだったら、相手が違う事ぐらい俺だって分かっていますから。」

何か急に笑顔になっている拳崇も、凄く怖いなあ。

「番組中に、パオを犯した時点で絶対に許せる訳じゃないのに何もしなかったヘビィさん達が許せませんし悲しい思いをするのは結局パオの方やからね。」

だめだ：完全に、キレてる。

「パオ自身、多分感触を覚えちゃってて体がガクガクって震えていたと思う。あんなに激しくされて、覚えていない方がおかしいよ。」

拳崇は自分の能力で見て来たから、キレたっておかしくないけど俺自身も少しは辛いんだよ。

ほんの少しだけど、マキシマに犯されて妊娠して中絶した経験をもっている事が思い出しちゃったから京に寄り添っていたかったのに『にやり』するんだもん。

京と付き合って京自身も色々あったけど、トラウマが消えていったのも事実だしあの1件以来マキシマと話したくなかった時期があったんだけどちゃんと向き合って話をしたら分かってくれたのだから…。

さすがに京が珠洲になったのは、最初の頃はビックリしたけど…。
ビックリした反動で珠洲を犯したって言うかHしちやって本当に悪い事したなあって思った。

でも珠洲：京の方から、『好き』と告白された事は嬉しかったなあ。
告白された後も京は、社さんや八神さんに犯されてそのたびに軽い修羅場になった事もあったしビリーさんやマキさんが誰かに殺された事もあって大変だったけど…。

「また、ポーっとしてる。どうしたの？」

京や拳崇に、きよとんとされたのを見て俺は苦笑した。

「何でも、ないよ。俺、ちよっと考え事してただけだから。」

それでもまだ京が、凄く心配している。

「K、だってそんなに体丈夫の方じゃないから、心配していたんだよ？」

京の顔がだんだんと暗くなっていくのを見た俺は、京の肩を黙って抱きしめた。

あんな顔をされたら、俺も辛くて何か嫌だ。

「こないだだって、考え過ぎちやって具合悪くなったじゃん。」

「うっ。」

図星だったから、言葉にならなかったし当然の事ながら京もオロオロし出した。

「やっぱり…って言いたいけど俺にも一理あるから、本当なら謝らなくちゃならないんだよね…。」

苦笑に近い笑顔をしてしまった京の顔を黙って見ていると、拳崇が変わりに口を開いた。

「事情はどうであれ、草薙さんにしてもK、にしても幸せそうではないやね。羨ましいって言うかほほえましいって言うか、ちよっとわからへんけど…。だけどその前に、パオの事どうにかしないとらないのだってあるしあれからバオは寝てばかりだからちよっと心配やし草薙さんみたいになって言ったらちよっと言い方悪いけど無理させたくないしトラウマにもなっちゃったからフラッシュバック

だけが起きなければなあって思ってるんよ。」

もちろんそれは相方としてだと思うけど、俺も同じ事を思っているのは事実だし拳崇には京の事で色々と迷惑かけちゃったから…。

「さつき、ヘビィさんやブライアンさんを殴るって言った事…嘘じゃないから。」

また怒りが全開になっていている拳崇に俺は、軽く身震いをした。

「嘘じゃないのは、分かっているよ。パオが一番辛い思いをしているのは分かるし、パオが京…珠洲と同じフラツシュバツクを起こしたりしたらマジで最悪な状況だし…。だけどさ殺意を持って、殺すだけはやめてね。そんな事したら犯人と一緒に死なちゃうし、パオだってそんなの喜ぶ訳無いじゃん。俺だって、辛くなっている拳崇を見るのは嫌だからね…。」

俺以上に心配症で、正義感が誰よりも強いパオを見て拳崇には最悪な事をして欲しくないから一応釘は差しておくけど俺がロバートさんの所に行って速攻で殴ってしまったから人の事も言ってもらえなくて…。

「そんなの、分かっていますよ。バオが俺みたいになっただのには少し驚いたけど俺だって、K' がロバートさんを殴った所を見てしまったし草薙さんが…珠洲ちゃんはその光景を見なかったから良かったって言うか複雑なんだよね。」

パオが自分の名前を呼んでいたって言うのを知っている拳崇にしてみれば罪悪感が来るのも当然の事で自分自身もそう言う経験をしてしまうかも知れないと思ったらブルーになってしまったらしい。

それに、京が言ったと勘違いして敬語になってしまったっているのも分かっていたから拳崇自身かなりてんばってしまったのかなあ。

「俺や珠洲だって、拳崇やパオの気持ちは分かるよ？だけどさ殺意全開でヘビィさんの所へ行って、何にも意味が無いからね。」

俺だって、まさか自分がロバートさんを殴った事はビックリしてい

るし事務所の先輩だからてんばっているけどわざわざはつとする事無いじゃん。

「殺意だなんて思っている訳、無いやんか。確かにパオがあんな事になって許せないって思ったし、憎いって思ってるよ。だけど、パオだって辛いのをそのまま放って置く訳にはいかないやんか。俺はパオの相方やし、心配しないって言ったらそれこそ最低やんか。」
まあ、拳崇の時は俺の怒りが拳崇以上に大開していたしロバートさんのいる楽屋まで押しかけた形になってしまったから…。

「それにパオの事務所の先輩だからって、後輩を好き勝手にしても良いだなんてそんなの最低やし人間としてやっちゃんいけない事だから。」

ムシャクシャしているのも分かるし、殴りたいって言うのも分かっているよ。だけど拳崇がキレたら俺以上に怖いのが分かっているから、だからヘビィさん達は大変な事になるんだろうなあ。芸歴は確かにパオの方が上だけど年齢は拳崇の方が、上だからなあ。

「拳崇の、言う通りだよ。俺：今でも、変な感触しか残ってないもん。」

パオが起き上がったのを見た俺達は、はっとしてパオの方を振り向いた。

「俺、散々拳崇の名前呼んでいたんだよ。近くにおいて一番頼りになるのは、相方の拳崇とデュオロンさんだけだもん。確かに、K'さんに『デュオロンさんと付き合っているの？』って言われた時はさすがにビックリしたもん。凶星だったし、嘘ついたってどうせバレるんだから。」

認めるのは良いんだけど、パオ自身はどうしたいの？

デュオロンさんにせつかく告白したのに、こんな事になったんじゃ頭の中ぐちゃぐちゃしちゃって大変だろうしそれが原因で別れる事になったら嫌だし真つ平ごめんだから。それに第一、ディオロンさんはパオにとって大事な人だし『亜種』の一人なんだから。

京にはバレていると思うけど、俺だってデュオロンさんがパオの『亜種』だって事を知った時はつい最近の出来事でビックリしているんだよね。

まさか、デュオロンさん本人から『自分がパオの『亜種』だ』って言うなんて思わなかったから。

しかもバオが、『姫』だって言う事だって知っているって言ったから余計にビックリしたしそれでもバオを愛してるって言った言葉を聞いて俺は安心して事務所からバラエティーのロケ地に向かったんだ。

まあ、それが何だって言っちゃえばそれまでだしパオ自身悲しい事がこれ以上起こってしまったら今度は立ち直れないと思う。パオにとって、デュオロンさんが初恋の人だし憧れていた人だって言うのは俺にも分かっていた事だし…。

京にだって、辛い思いをさせて来た俺からしてみればちょっと罪悪感がするのは自業自得で…。

「デュオロンさんは俺の事本当はどう思っているか分からないけど、俺がヘビイさんやブライアンさんに犯されてショックを受けているのはデュオロンさんだって同じだって思っているし俺も本当だったら彼氏のデュオロンさんの名前を呼んでいればこんなもやもやする事なんて無かったし自業自得だって俺だって思っているよ。だって俺がずっと名前を呼んでいたのは、デュオロンさんじゃなくて拳崇の名前なんだから。」

パオが、涙を流して俺に話す。
正直ここまで自分で話すのは、相当辛いんだろう。そのせいで、体が震えだしちゃっている。

「デュオロンさんは俺にとって、大事な人だし大好きだよ。別れる気なんて無いし、これ以上俺ばっかりが悲しい想いをするのは嫌だ。」

俺が思っている事を全部見透されてたかのように、パオが話すから

黙るしかなくて…。

そこまでバオが、自分の事を考えていたなんて…。
普段のバオだったら、全然そんな風には感じられなくて『元気』だ
なあって思っていた。

でも今回の事で、ビックリしたしその事でバオにも重くのしかかっ
て来てたんだろう。

結果的にデュオロンさんにも迷惑がかかってしまったと思っ
つたのはあつたみたいで、自分で何でも抱え込んでしまっ
たんだろ
う。

「俺だつて、普段はこんな事ないんだよ？ だけどヘビィさんやブラ
イアンさんに、あんな事をされて頭がぐるぐるしちゃって嫌な事ば
っかり考えちゃって…。」

涙が、止まらなくなっちゃって俺の体に寄りかかった。

本当は、役得だつて思っていたけど俺だつてデュオロンさんみたい
に大人じゃないしバオみたいに本当はしっかりしていないから黙っ
てしまったのは事実で。

バオにとつて、ヘビィさんやブライアンさんに犯されて辛かつたん
だなあと思つた。

俺だつて、京だつて辛い思いをしてきた経験があつてバオにまでこ
う言う経験をしちゃつたからあたふたするのは当然だしデュオロン
さんには何て言えば良いんだろう。

パオが、ヘビイさんに犯された事実を知った拳崇と京・K'。しかも、拳崇の口から自分がロバートの子供を妊娠していると告げられる。

- - - - -

次回予告 じかい よやく

K' 「まさか、拳崇が…。」

京 「パオの事でも驚いているのに、こんな時に限って拳崇まで妊娠するなんて思わなかったからビックリしちゃってさ。」

K' 「ますます、ヘビイさんを殴りたくなっただけど多分殴るとしたら俺じゃなくて拳崇なんだろうなあ。」

京 「拳崇は、パオの相方だからなあ。」

次回、第28話　　.....浮雲うきぐものクリスマス　　.....。

祝・30話目（番外編抜きで、29話です。）！！

パオが犯されて、そんなに時間が経っていないのも分かっている事
だったし拳崇だってイライラが収まっていないのも分かっていたか
ら。

俺だって、京が…珠洲がそんな事になったら完全にキレているかも
知れないから…。

京を信じれるのは、俺しかいないって思っているから…。

だから、京が前世の覚醒をするのだけは避けたかったのにパオがあ
んな事になってからは京の前世の記憶が段々と鮮明になってしまっ
たのも事実だし…。

パオが目を覚ましてから、数分後。

食欲も元に戻って、元の元気な状態までに戻ったパオに俺はもう一度聞いてみた。

「言いたくないって思ったなら、言わなくたって良いよ。パオは、ヘビさんとブライアンさんを殴りたいって思ってる？」

拳崇が2時間後に言った言葉を、そのままパオに話した。

もちろん、拳崇がヘビさんの事を『主犯』と言った事を抜かして、拳崇がキレルのも、分かるよ。だけどこの事がマスコミの人達やマネージャーにバレて迷惑なんてかけれないよ……。」

それは俺にも、同様なのかなあ。パオには俺が『兄貴』として映ったんだろう。

パオは一人っ子だから、きつと実家においても寂しかったんだろうと思う。

自分で願書を出して、自分から今の事務所に入ったんだから。

でも、その事務所に入って拳崇と出会ってコンビ組んで色んな賞を取って人気も出てきた今になってヘビさんにあんな事をされて今更信頼してくれだなんて間違っていると思う。

パオだって、辛い思いをしているのにそれまでも誤魔化すなんて最低だって思っているし俺までまた殴りたいって思ったぐらいだからまあ、その前に相方である拳崇の方が先に殴ると思うんだろうけど……。

「デュオロンさんにバレたら、何て言われるんだろう……。何か不安なってきたやつだし、もし別れる事になったらどうしようって思ったら何にも言えないよ。」

パオがまた、目に涙を溜めている。

それだけショックが大きいのも知っているし、パオには別の悩みが

あるのだろう。

俺も、気持ちは分かるよ。京と…珠洲と別れそうになったのは何度もあったから。

だけどそれを乗り越えられたのは、京の事を…珠洲の事を信じていたから。ノロケじゃないけど、京の事を…珠洲の事を大好きだし気が楽になったのは事実だよ。

デュオロンさんだって、同じ事を思っているんだと思ってるよ。

嫌いだったら自分で、事務所で告白タイムなんてしないだろうし。

まあ、デュオロンさんからしてみれば人生最大の告白だったらしいけど本当はパオだって告白したかったんじゃないのかなあ。

真っ赤になって、OKしてもベタベタしてもこないしキスだってしなかったからどうしてなの？って聞いた矢先にこれだもん。シヨックじゃなかったら、何て言えばいいの？

当然この事実を知ったら、いくら温厚なデュオロンさんだって殴りたいって思っているだろうし当たり前だって思っているから。

「バオが泣いちゃうのも、辛いのも分かっていたし俺も無理に言うてくれて言っただけで本当に悪かったと思っただけよ。…ごめん。」

俺がブルーになってるのを見て、パオが苦笑しながら俺に話した。「気にしないで下さい。俺は、言いたいですけど…言葉が見つからなくて…。謝るのは、俺の方ですから…。」

でも、でも…。「本当はパオだって、ヘビィさんを殴りたいって思っているんじゃないの？」

俺がてんばりながら、パオの顔を見たらさっきまで泣いていたパオの目は涙が溜められていた。

「そりゃ…殴りたいって思っていますけど…。だけど、デュオロンさんにバれるのが怖くて…。踏ん切りがつかないって言うか、大喧嘩するのは嫌だから。それに、拳崇やK'さんに迷惑かけちゃったし拳崇にはただでさえネタを作ってもらっているのに俺が人間関係

でぐちやぐちやになって本当なら俺が拳崇に怒られなくちゃならぬいのに……。」

パオが拳崇の方を見て、涙が一滴流れた。

「俺：これ以上：拳崇やデュオロンさんの側にいても、良いのかなあつて思つてきちゃつて……。」

泣きながらもそう言ったパオに、拳崇は口を開いた。

「何、言つとんの？俺は、パオの相方やろ？それに自分からそんな弱気になつて、どないすん？『短気と弱気は損だ』つて言つたんは、パオやからね。俺、その言葉で何度も自分なりにイライラを抑えてきたけどもう勘弁ならへん。いくら先輩でも、自由にしてええだなんて何考えてんっ！！！」

声を張り上げてしまったとすぐに思った拳崇が、苦笑してしまったけどまたパオの目には大粒の涙が溜められていた。

「俺だつて、何度だつて思ったよっ！！！だけど頭がぐるぐると回つてばかりで、パンクしそうになつてくるんだもん。俺、やっぱりデュオロンさんに会う事なんて出来ないよ……。最低な事したのは、俺の方だもん。」

泣きじゃくつてしまったパオに、俺や拳崇……そして京はおどおどしてしまった。

泣かせないつて自分で言つていたのに、拳崇が怒鳴つたから泣いちゃつたじゃん。

「拳崇だつて辛い思いしているのに、俺ばかり勝手な事ばかり言つちやつてるし……。」

気を使つたまま、涙目になつて苦笑してしまったパオに拳崇が口を開いた。

「だから、俺の事は解決しているからええの。パオの事を考えたら、人事だつて思いたくないし俺だつて結構辛いんよ。」

拳崇の話を聞いて、パオが少しうるうるとなつた。パオにとって、

今までのイライラした顔の拳崇じゃなくていつもの笑顔で自分を見てくれたからだと思った。だからこそ、当のパオにとって嬉しいと思っただろう。

まあ、パオ自身があんな事になって自分自身が整理できないでいる状況でいろんな事が起こったら頭がぐるぐると混乱するのは当然だと思う。拳崇の時でさえ、ロバートさんがユリちゃんも拳崇もどっちとも選ぶって言い出したから俺はキレちゃって殴っちゃったし拳崇だって混乱しちゃったと思う。

当然俺は、頭がぐるぐるとまわっちゃって気付いたらロバートさんを殴ってしまっていたから。

「ふえ…。」

それは今のパオに対しても同じ事だし、拳崇だって相当ショックで泣いていたのは事実だから。

拳崇は自分の感情を完全って言うか立ち直るまで、相当時間がかかってしまったのも事実だし人事じゃないって思ったのも知っていたから。

「だから、今は辛いのかも知れないけど言える事があつたら何でも話して？何か、拳崇と同じ状況になっちゃったし…。」

拳崇の顔を見ながら、俺がそう話したからさっきまで涙目だった拳崇がキョトンとなってる。

当然の事だっと思つた俺は、少し冷や汗をかきながらキョトンとなつたままの拳崇に対してまた口を開いた。

「いつまで、きよとんとなってるんだよ。」

俺も少し凹み気味で、拳崇につっこむって言うかちよつと呆れ顔になつた。

「別にキョトンしとつたって、ええやんか。お前だつて自分が言つた事、忘れるなや。」

忘れてる訳じゃないよ。ただ、同じ事をパオに言っちゃつたからどうしようかなあつて思っちゃつただけ。

自分に呆れ顔しているだけなのに、何でお前がつっこんでるんだよ。本当は拳崇の方がボケで、パオがつっこみなのに…。

「俺だってボケなのにボケにボケを重ねたら、芸人的には事故すへったんじゃないかなあって思っちゃったし…。」

同じボケの京に言われ、ハットなつたのは事実だけどキョトンしたのは拳崇の方じゃん。

「俺は、K'の事同期でライバルだって思ってるの。お笑いの方で言ったら、草薙さんやリョウさんには負ける気なんてないやんか。」拳崇が京の近くにいたパオに同情を求めるように話そうとしたけど、見事にスルーって言うか放置されてしまったみたいで拳崇が頬を膨らませてしまった。

まあ、拳崇はまったくの同期で拳崇が芸歴で1つ上のパオとコンビを組んでから若手では賞を総なめしているのとは違って俺はお笑い好きのタレントだからって自覚しているのに何で俺の事ライバル視するんだらう。

ちよつと凹んじやったけど、拳崇が頬を膨らませたままだつたから京もパオもオロオロしだしちゃったし…。

「何、ライバル視しちゃっているんだよ。草薙さん達の方が、先輩なのに下克上するつもりなのか？」

すかさず、パオのつっこみが拳崇に炸裂。

いつも通りのパオのつっこみだったから、拳崇も少しだけほつとしてる。

「だって、先輩として慕っているのは嘘やないもん。」

これが落ち込んだままのつっこみだったら、『どうしたの?』とマネージャーに聞かれるのは拳崇だろうしパオだって何か嫌な思いをするのは事実なんだから。

どっちにしても、からかわれるのだって覚悟しとかなくちゃならないけど。

「確かにそうだけど、はたから見たら『下克上』に見えるから本当に止めるよ。」

パオにそう促されて冷や汗をかいてしまった拳崇に俺は何だかほのぼのしてしまった。

「さてと、ヘビィさんの所に行つて説教してくるかな。」

俺が自分が座っていた椅子から立ち上がつて、玄関へ向かおうとした時京に言われて振り向いた。

確かに少しとぼけてみるけど、京自身は俺が何をするかつて言うのが分かつてしまったみたいで返つて不安になつちやつたみたいらしい。

「ん？K'?!どこ、行くの？もしかして、ロバートさんの時みたいにヘビィさんを殴る気じゃないよね？」
「ずばつと言われ、俺は少しギクつとなつた。」

京は、こう言う事に鋭いから俺が何をするかなんてすぐに分かつてしまつたし今にも泣きそうだ。

「やっぱり。もし、殴る気にいるんだつたら止めてね。ただでさえ、ヘビィさんは有段者でK'が行つたら返つて返り討ちだよ。」

「そんなの、俺だつて分かっているよ。」

分かっているけど、本当に説教だしヘビィさんだつてすぐに実力行使する人じゃないつて言うのも知っているから。

それにいつまでも黙っていたら、パオだつて辛くなる一方なんだから。

「分かっているんだつたら、何で？パオの事が心配なのは、俺だつて分かるよ。デュオロンさんとも話せる状況じゃないのも知っているし。だけどさ、それとK'が怪我するのなんて関係ないよ。俺は、K'が傷だらけで帰つて来るの嫌だからね。」

京が言いたいのは、俺だつて分かっているけどそれでもしないとパオだつてもつと可哀相なんだからさ。

「俺、前にK'がロバートを殴つた所見ちゃつたんだよね。拳崇は、

俺に気を使って目を隠したんだろうけど…」

つまりは、見てたって事ね。

「だけど、K' を怒る事が出来なくて俺なりに『仕方ないな』って思ってたんだけど日にちが過ぎていくうちに何で怒れないんだろうって思っていたら自分にイラついてきたんだ。」

京が異様にイラついていたのは、このせいだったんだ。

それだったら一番悪いのは、俺の方だったんだ。

「俺：あれ程、言ったよね。キレるのは自由だけど、人を殴っちゃダメだって…。俺、あれからロバートの顔をまともに見られないよ…。」

言い訳がましいけど、そんなに怪我をする程殴ってないよ。ただ京にしてみれば、殴った事には変わりないから…。

京にあんなに、心配かけらせてしまったし不安にさせていたなんて…。

彼氏として最低だし、結局はパオと同じで泣きそうになっているんだから…。

「泣かないで。確かに泣かしたのは、俺が悪かったから。だけどロバートさんだって、京や拳崇の事を考えてたんだよね。」

俺がそう言つと、京がこっくりとうなずいていつもの笑顔になった。正直あのままだったら、京が泣き出すって思っていたし俺だって何か嫌だったから。それにどっちにしたって、パオや拳崇にからかわれると思つたからどっちにしても嫌だったんだ。

それに京に『大嫌い』って言われるのだって、俺が凹むだけだから絶対に避けたいし…。

「あの人だって、自分のせいで拳崇に嫌な思いをさせてしまったものあつたんだろう殴られて当然だって思つたんだと思う。」

でも実際に、俺はロバートさんを殴ってしまった。

それだけは、まぎれもない事実なんだから。

「でもそれが原因で、京が不安がったりキレる寸前になってしまっ

たのは俺のせいだから謝らなくちゃってずっと思ってた。本当に、ごめん…。」

拳崇やパオ達にからかわれたって別に良いって思っていたし、この場合だって仕方ないって思っているから。

京自身も耳まで真っ赤になって、俺の顔を見ている。

その顔をしているのを見ると俺は理性が壊れそうになるし、京はどんな顔をしてても可愛いから。

何か惚気ノロケみたいに思っちゃっているし、自分でも何キザくさい事を言っているんだって思っちゃうけど別に良いよね。

俺は、本当に京の事を…珠洲の事が好きだから。

まあ結局は、嘘を言って京を泣かせたのは事実だしあんな京の顔を見てしまったのは俺にも責任があるから。

「ううん。仕方、無いよ。悪いのはロバートだし、拳崇が可哀相だって思ったんだよね。俺は、K' が優しいの良く知っているから…。」

「こっとなった京には申し訳ないけど、理性が飛びそうになっているのは俺だけだろうか。」

「だから、俺…ちょっと嫉妬しちゃってたんだと思う。『俺なんかより、拳崇の方が良いんじゃないのかなあ』とか思ったら段々と不安になって来ちゃって八つ当たりしちゃったのは本当にごめんね。」「京がちよっとブルーになってるのを見て、俺が京の頭をなでようとした時拳崇とパオが俺の部屋のドア越しにこっちを見てにやりしている。」

予想していたから別に凹みはしなかったけど、京から見たらまともに見えたから耳まで真っ赤になっちゃった。

「あんなに真っ赤になっている草薙さんも、何か可愛いなあって思っちゃいました。」

敬語だったけど拳崇にからかわれ、余計に真っ赤になってしまった京に俺はただ黙って見ているしかなくて…。

「からかうならドア越しで、からかうの止めてくれる？K」の方から、まともに見れないから良いけど俺が真っ赤になっている顔を見ちゃっているんだから。」

本当は理性が崩壊しそうになっっているけど、そうも言ってられないって思ったし京だって俺がここで拳崇やパオにキレかかっているのを見るのが嫌だから我慢しているのが分かっていたし…。

第一俺がキレるのは、拳崇やパオじゃないって言うのも知っていて本当は俺だってキレたいけどその前に拳崇がキレると思うと黙って見ているしか出来ない。

あそこでキレかかっていたら大人げないって思っているし、京だってもしかしたら泣き出すと思ったから。

「ほら、見る。京が今にも、泣きそうじゃねえか。京が泣いたらなかなか止まらないって拳崇だって、知っているだろうが。」

俺が少し呆れながら、京の頭をナデナデしていると京が更に照れて俺の顔を見ている。

「そりゃ、言っていたのは知っているけど…。でもさ、皆がいるのにイチャついていたら説得も何もないやんか。」

だからって、こう言う状況だって分かってくれたって良いじゃねえか。

拳崇だって辛い思いをしたのは知っているし、ある程度決着しているから良いけどパオだってまだ自分の心で解決できてない所だってあるんだしデュオロンさんに言えないのも知っていたから。

確かに照れてたのは事実だと思っただし、理性が飛びそうになったのは嘘じゃないし。

それに、マキさんやビリーさん…ラッキーさんの事だってまだ解決していないから誰が犯人かまだ分からないし何で殺害しされなくち

やならなかったのかなんて言う事だつて分かっていないんだから。

「そんなの、^{おまえ}拳崇には関係ないだろうが。京が、凄く可愛いからさ。」

「俺がそう言つと、京が頬を膨らませながらスネ始めた。」

「K'は俺といちゃつきたいために、俺に抱きついたので?」

ほら、見る。

また京が、思いつきり疑つたじゃん。

「そんなんじゃないよ。京を不安にさせたのは、俺の方だただ京に抱きつきたいためにやつた訳じゃねえよ。」

俺がもう一度京の髪の毛を軽くなでようとした時、京の体が震えて俺の体を引き離れた。

「嘘ばかり!本当はこのまま、俺とここでHしようとしたくせに。」

京が声を荒げて怒り出したのは初めてだったから、俺も一瞬驚きながら軽く口喧嘩みたいになった。

「嘘じゃねえよ。俺は京を…珠洲を大事にしたいって思っているのに、疑つてどうするんだよ。第一、京だつて言つてたじゃんか…」
「考え事とかイラついている時にHしないで」
「って。俺だつて、そんな事したら最低だつて分かっているからさ。」

「だつたら何で、すぐにデュオロンさんに電話しなかったのさ。パオが話せないって言うのは分かっているし、話したくないって思っているけどいざすればバレるんだよ。」

京だつて、知ってるじゃん。

デュオロンさんに話した所で、もしかしたら別れる事になつちゃうんじゃないかってパオが一番不安になっている事なんだから。

まあ、デュオロンさんの事だからそんな事はまずないって思うのは俺だけじゃないはず。

デュオロンさん自体は自分からパオに告白して来たんだし、事務所にいた俺だつて『^{ピュア}純粹』だなぁって思ったのは事実で。

肝心のパオにしてみても、初恋に近いから多分ショックが大きいのは事実だけど…。

「だからって、いつまでも言わないと今度はパオだって凄く辛い事になっちゃうんだよ？」

近くにパオがいたから、俺じゃなくてパオに話していたつもりでも俺には人事に思えなくて。

京も拳崇も色々あったんだし、決着ついているついてないかは別として何度か修羅場になったのは事実だから。

俺自身も別に意地っ張りじゃないけど、京がわがままを言うてくるのが初めてだったし結局は軽く口喧嘩する羽目になっちゃったし…。

それでも俺が悪いのは的確で、京がこんなにも怒るなんて思わなかったから。

「もう、良いよ！俺、一人でデュオロンさんの所へ行つて来る！」

そう京が立ち上がって外へ行こうとした時、パオが京の腕を掴んだ。

「それは、止めてっ！！」

泣きながら京の顔を見ているパオに、京はちよつとてんばりながらも話を続けた。

「何でっ！？今話さないと、もつとパオが辛くなるんだよ？デュオロンさんがパオにとつて大事な人だつて言うのも知っているし、デュオロンさんだつてパオの事を大事にしたいつて思っているんだから。俺だつて、両思いになれたのに別れるなんて寂しすぎるしはっきり言つて嫌だよ。だつたらさ、余計なお世話だとは思っけど話してよ。無理に、全部話せつて言う訳じゃないんだからさ。」

京自身にも思い当たる事があるみたいで、たまに仕事でデュオロンさんと一緒になった時に話してみたらしい。

京の事務所の先輩だから、話しやすいつて言っちゃえばそうなんだけど結局パオとデュオロンさんの恋路は心配だつたらしい。

「だって、俺がヘビィさんやブライアンさんに強姦されたつて知つたらデュオロンさんだつて哀しむと思っつ無理をするのは俺だけで

充分だもん。」

「だからって、一人で何でも抱え込むなって。K'や拳崇にも言っただけど、一人で背負い込んだって自傷に走ったら俺だって何か変な気分になるし余計にグチャグチャになっちゃうんだよ。どうせグチャグチャになるんだったら、最初から話した方がスッキリするよ。何か、K'の押し売りみたいになっちゃうたけど……。」

京がそう言くと、またパオの目からは大粒の涙が……。

「でもやっぱり、言えないよっ!!」

号泣しているパオに京は少し困りながらも、パオの肩を抱き締めた。さっきまで俺の事を散々、疑ってばかりだったくせに。

嫉妬したって何にもならないって分かっているけど、何でムシヤクシヤしちゃうんだろう。

パオの事情も知っていて、ブライアンさんとヘビィさんを説教するって決めたのに何でパオに嫉妬しなくちゃならないんだよ。

俺だって、色々大変なんだよ!?

京の父親：紫舟さんの事だって、マキさんやビリーさんの事やラッキーさんの事だってまだ解決していないんだから。

しかも紫舟さんは、京の事を可愛がる事ってなかったし京自身も『自分は本当の子供じゃない』って言い始めるし……。

紫舟さんも京も頑固な所があって、会えば必ず口喧嘩になっていたしこれからだって大喧嘩にならないとは限らないんだから。

俺だって不安と苛立ちでごっちゃんになっちゃうって、頭の中がパニック寸前だよ。

京を守りたいって思っているのに、頭がパニックしていたら京を守るなんて出来ないよ。

自分で決めた事だから、やり遂げたいって思っているのにこれじゃ話が違ってくる。

パオの事だってまだ解決していないし、バレるバレないは別として

修羅場か悲しい思いになるのは事実だから。

「うっ。」

「K、!？」

気付いた時には、俺は京に寄り添いながら倒れ込んでいた。

最近無理ばかりして、仕事ばかりだったから疲れたのかなあ。

しばらくして、目を覚ました俺は目を潤ませている京の顔を見てしまう事に。

「ごめん…無理出来ないって知っていたのに、俺…何てバカな事をしてしまっただろう。K’に守られているのも分かっていたのに、俺はK’に無茶振りとか無理な事ばかりさせようとしているし…。マジで、最低だ…。」

京がスマイルになると、涙が少し流れて俺の手に落ちた。

京自身も色々大変なのは分かっていたし、未だに前世の記憶が覚醒していないって言うか自分で覚醒するのを拒んでいる状況なのも分かっていたから。

しかも俺の病気の事を知っているから、なおの事だっと思うし京だってグチャグチャしてるんだあって思っただらくじけてばかりもいられない。

俺は京の…彼女で、珠洲の彼氏なんだから…。

俺が弱気だったら、京だって困ると思うしいつまでもくじけてられない。

「俺はK’が今どういう状態で、どこまで病状が進行しているか分からないけど辛いのは分かっていたし無理をさせたくないって言うのも思っているのは本当だよ。だけど、俺だってK’の事…ユキを守りたいって思っているのは事実だよ。」

京の言いたい事は、俺にも分かっているよ。

だけどさ、俺だって一応は男だし何だか複雑なんだよね。

守られるのは仕方ない事だって分かっているけど、男として『なよ

っている』って思われるんじゃないかなあって考えたら嫌でもしっ
かりしなくちゃなあって思っている。

京にしてみたら、自分は大事な人を守っているだけだから何とも思
ってないよって言うかも知れないけど事情を知らない人が見たら何
だと思うだろう。

ただいちゃこいでいるだけだったらずしは凹みはしないけど、から
かわれるのはマジで勘弁。

だって京だって、少しぐらいはダメージが来るだろうし俺も結構な
ヘタレだから。

「K」の方が俺より少しだけ年下なのに、年上の俺がしっかりしな
くちゃって思ったらさ。」

京と俺はそんなに年が離れてないし、1つしか離れてないのに何で
京がそんな事言うんだろう。

泣きながら俺の手を軽く握った、京の髪の毛をゆっくり触った。

「俺…自分が『姫』だって言う事…全部、思い出したかも…。」
京の目の色が、拳崇やパオが『姫』へチェンジする時と同じ目の色
が一瞬だけ変わった。

本当に前世の記憶を覚醒しちゃったんだと思うと、あたふたすると
思っていた俺が落ち着いているんだから少しぐらいは変わったのか
なあ。

「K」の事が好きでたまらないのは、前世の頃から何一つ変わら
ないよ。前世の時、俺は一番先に封印を解かれてK」の腕の中で死
ぬ時…言えなかった事があったんだ。俺…知っていたんだよね。本
当はK」も『姫の一人』なのに何で俺は、恋しちゃったんだろうっ
て思ったし俺は『帝』で『姫』なんだからって思ったらさ自分がち
よっと後ろに下がったって言うか失恋したんだって勝手に思い込ん
でいたから。」

京の言葉に、少しだけきょとんとなっている俺の顔を見て京は更
に話を続けた。

京も俺の前世の姿の状態で言えなかったんだと思ったら、ちゃんと話せば良かったなあって。

俺だって、前世の時から京の事…大好きだよ。

「俺ね、K'の事…ずっとずっと大好きだよ。」

理性が落ちそうになっているのを我慢して、俺は京の顔を見た。

「K'はさ、自分が『姫』だって知った時にどう思った？」

正直驚いてはいたけど、京の事も考えたら贅沢ぜいたくも言えなかったんだ。

「お…俺?!俺の時は『由緒ある家系』だって、親父とかに言われ続けていたからだと思っ。」

「そっか。」

京みたいって言ったら何か言い方が悪いけど、親子の仲は悪くないし俺は本当の事を言っただけで都会に行っただけの可能性をもっと引き出したって思っただけで俺だって『姫』の一人だって知った時は『夢を諦めなくちゃ』って思っただけだから。

でも、京と知り合っただけで付き合うようになってからはこっちでも芸能活動ぐらいは出来ると知っただけで別にここから出なくても良いやっと思えるようになったんだから。

京と一緒にいると自分が変わってきたみたいだし、俺だって京に何度も救われているんだから。

京と紫舟さんの事を気になったのは事実だし、正直京にも寂しい事や父親らしい事なんて一つもしてこなかったんだから。

京だって小さい頃は、一緒にキャッチボールとかしてもらっていたって前に聞いた事があったって本当に仕事一筋だったんだなあって思っただけで何にも言えないけど奥さんである静さんだって本当は辛かったんだと思っ。」

俺とちよつとは待遇とかが違うけど、あんな京を見たのは久々だったし京の家庭に行った時にちよつと暗かったって言うか空気が重かったから気になっていたんだ。

京は一人っ子だし、本当に寂しかったんだろっなあって思ったたら何か心が苦しくなっちゃったんだよね。

「俺はてつきりK'が俺の事で、心配になっっているんだと思ってた。」
「ありがち嘘じゃないけど、京の事じゃないって言っちゃったらそれこそ嘘になっちゃっう。」

俺は京を泣かさないうって散々言ってきたのに泣かしたから、全然説得力だってない。

だから、俺には責任があるって思ったんだ。

俺も京には…珠洲には迷惑ばかりかけちゃって、何にも出来ないけど俺が京を…珠洲を守りたいのは嘘じゃないから。

「でも、俺はさK'が優しいのを知っているし大好きだからね。」
だからそんな目で、こっちを見ないでくれ。

理性が飛びそうになるし、さっきじゃないけどHしそうになるんだから。

「確かに、草薙さんがK'の事優しいって言うのはちょっと惚気ノロケみたいに聞こえるけど前世の事も考えたら本当に幸せになりたいんだろっ？」

ロックさんが俺が前世の時から、京の事を好きだっけ言うのに気づいているみたいで…。

だからこそ京と俺が、ロックさんは幸せになる事を最初から祈っていたらしい。

「それは、俺だっけ思っているよ。確かに前世の時はお互いに『姫』だっけ事は知っていたけど、でも好きだっけ言う気持ちは今も前世の時も変わらないよ。」

本当は京の顔を見て話せば良かったんだけど、理性が飛びそうになっている状況で話したら京に泣かれるはロックさん達に怒られるは散々な事になっっちゃっうから。

まあ、ほとんど『にやり』されるのが的確で京が凹み出すのも分かってるしせつかく機嫌が悪くなったのにまた機嫌が悪くなったら取り返しが効かないから。

それにさっきまで俺はHしようとなったのも事実だし、俺がその気でも肝心な京が嫌だつて言っちゃったら出来ないんだから。

「京は：珠洲は俺の事、どう思ってたの？やっぱ前世の時から、好きだったの？」

俺が京の顔を見て、聞いてみたけど京は一瞬きよんとした顔で俺を見てきた。

「俺もK'の事、好きだよ。嫌だったら、あんな大きな声で『大好き』って言えないよ。(真っ赤)」

本当に俺の事が大好きなんだなあって思ったら、こっちだつて真っ赤になってきた。

ロックさんはやにやして来ているし、拳崇だつてこっちを見て何だかほっとしている。

「ロックもそこでもやにやしてないで、こっち来いって。」

京自身ずつとロックさんがやにやしているから気になっちゃって呼び出したらしい。

「いやあ、草薙さんも本当に可愛いなあって。」

何か京に気があるんじゃないかなあって思ったら、さっきの京じゃないけどちよつと嫉妬してきたなあ。

「おつとこの先の事したら、俺がK'に怒られるなあ。」

イライライラ…。

いつまで京に、抱きついてるんだよっ！！

「K'だつて、怒らないでね。ロックだつて、構って欲しいって思っているんだから。」

それは俺だつて、思っているよ。

だけど、何かべたべたするのが非常に多くないか？

京も、京だよ。

ロックさんに抱きついたままで、全然抵抗なんてしないじゃん。

「いい加減、京から離れてもらえますか？」

ムスつとなりながらロックさんを睨んでしまったけど、京も少しだけ慌てだした。

「別に、良いだろうが。K' だって草薙さんにいつも抱きついてい
るだろうが。」

確かにそうだけど、何も怒り口調で言わなくたって良いじゃないで
すか。

「（ムスつ）いくら社さんに構ってもらえなかったぐらいで、何も
京に抱きつく事もないんじゃないですか？」

売り言葉に、買い言葉…。

「何で、社の事をここで言うの？そりゃ、社は最近忙しくて全然構
つてくれないけど…。」

「社さんは、絶対浮気してる。」

根拠がないけど、むかついちゃったから思わず言っちゃったけど自
分でも取り返しがつかないなあって思っちゃった。

だって、こうでもしなかったらロックさんが京から…珠洲から離れ
ないって思ったし嫉妬しちゃったのは事実だったから。

当然の事だけど、ロックさんがブチギレた。

「何で浮気してないって俺は思っているのに、K' はそんな事言
うの？一旦、浮気しちゃっているって思っちゃったら俺だって辛い
の分かっているのに訳が分からなくなっちゃって胸が苦しくなっ
ちやうよ。」

社さんが最初から浮気性だって言うのを知っていてもロックさん
にとって本当に不安になっている事だし、俺だって実際不安になった
事だってあるよ。でもさ、何もそこまで言わなくたって良いじゃん。
「社さんは俺にとって好きな人だけど、社さんは俺の事どう思っ
ているんだろう？ただの遊び相手だったらマジで最低だし、俺シヨッ
クで泣いちゃうよ…。」

涙が溜められて目が潤んでいる今の状況で、俺がトドメをさしたら近くにいた京も反動でキレちゃう。

今は少しホヨンとして、俺とロツクさんが軽い口喧嘩をしているのは知らない。パオや拳崇だって、実際には見ていないから何があったんだろうとぐらいいしか思っていない。

でも、殺人事件の件はひとまず置いておくとして今は社さんの事をどうするか考えなくちゃ。

浮気をしていないとしても、何でロツクさんに構ってくれないんだろう。

「仕事柄だとしたら、お互い気を使っていると解釈も出来るけどもし仮に浮気していたとしたら俺が一発喝を入れてやるけど。」

「それだったら俺だって許してやるけど、俺は社さんの事を信じているもん。」

先輩後輩とか関係なく、一人の人間としてロツクさんを見てあげないと京と付き合い始めた頃の俺と何にも変わらないから。

もしかしたら俺以上に、酷くなってしまいう事だってあるかも知れない。

そうなってしまったら彼氏の社さんだって、気が気じゃないかも知れない。

社さんが自分で告白してきたのも事実だし、状況はほとんど一緒だし修羅場になる所を除けばラブラブなのは越した事にはないんだから。

絶対に浮気なんてしてないって社さん本人が言っちゃえば、少しぐらいはロツクさんだって落ち着くと思うしこんなに修羅場ギリギリにならなくなつて良いと思うし確信が取れないから何とも言えないんだよね。

不安が原因で俺にキレたのは分かっていたし、社さんが仕事が忙しくなつたのも喜んで良いんだと思ったけどロツクさんにとっては複

雑だったんだと思う。

京だって本当は、社さんに会いたくないって言う事情だって知ってるしロックさんだってこの事を知っているからその事だって社さんに聞きたいって思っていたんだと思う。

俺だって京に：珠洲に告白する時だってそうだったから社さんだって本当の所そうだったんじゃないかなあって思うと少しだって安心した。

仮に俺がこう言う状況だったら、京だってバンクしそうになっちゃうし2人してあたふたするかも知れない。

こんな事、お姉ちゃんやシエルミーさんに言えないし絶対に『にやり』されるのが分かっているから返って逆効果になっちゃうのだから考えなくちゃ。

馴れっこって言うか『またか』なんて言われたら、何かシャクに触るけど京も何度が真っ赤になったのは事実だから。

ロックさんのマネージャーさんは、恋愛沙汰に一番うるさい方だっ
て知っているしマスコミの人達が一気に来ると困ると思っただ
う。

だから、社さんとの交際がばれた時だって最後まで反対していたんだと思うしロックさんもマネージャーさんに何としてでも認めてもらいたかったと思う。

俺だってお姉ちゃんが認めてくれなかったらどうしようって考えてただけ
だけど、実際の所はすぐに認めてくれたって言うのは事実だったから。

はつきり言ったら、『腐女子的考え』だったかも知れないけど京が：珠洲があんなに涙目になってしまうのなんてあんまり無かったからちよつとビックリしたし俺だっ
てロックさんだっ
てびっくりし
ちゃって
たんだ。

俺だっ
て、マスコミの人に京との交際だっ
てばれたくないし同棲ま

でしちゃっているから隠し通せるかなんて分からない。
もしかしたら、これがばれてファンの子達が一気に野次馬になっ
ちやうのかと思ったら返って背筋が凍ってきた。

..... 浮雲のクリスマス く a drifting cloud of t

やっとの事で、京が覚醒しました。＼(^O^)/

正直、ちよつと作者わたし自身がちよつと戸惑ってましてどうしようかなあつて思つてた時期なんですよ。 (- | - ;)

でもこれで、ちゃんと本編の軌道に乗れたんだろつなあつて思つてます。 (^ ^)

しかも、K' はロツクに嫉妬しちゃっている場面だし... (3 :

.....
.....
.....

次回予告 じかい よやく

K' 「京の事を…珠洲の事を…絶対に離れたくないから…」

珠洲「何か…恥ずかしいよ…。 (真つ赤)」

作者「ラブラブだにや」。可愛いぞ、このカップル。純粹、過ぎる

ぞつ。 (にやにや)」

K'・珠洲「(真つ赤)」

次回、流星の輝き く meteor of brightness .
)。

ざっくりとしたストーリー

主人公・ヒロインについては、固定って言うか決定で。拳崇とKが事件の謎や修羅場に立ち向かう。

パオとの事で、ロックさんと軽く口喧嘩しちゃってちょっと後悔をしているんだ。

だって、京を泣かせてしまったしパオ本人にだって思いつきり説教されたから。

俺が悪いのだって、一番分かっているから説教されたって仕方ないんだけど。

だけど、社さんやヘビィさん達はいったい何を考えているんだか。傷つくのは、パオやロックさんだって気付いているのかなあ。

ロックさんと口喧嘩をしてから、数時間後。

俺が結局の所心が折れたって言うか、京に促されて俺の方から謝った。

まあ、京が涙目になってしまったって言うのもあったしパオ本人から説教をされたせいもあるんだけどね。

「京が止めてくれなかったら、口喧嘩だけじゃ納まらなかったしさ。」

俺が自分で冷蔵庫から出したジュースを飲みながら、ロックさんに視線を送ったらやや涙目のロックさんを見る事になる。

「K'のせいで、俺：不安になっちゃったじゃん。どうしてくれるんだよお……。」

せっかく口喧嘩が終わったのに、ロックさんが泣いてしまったら間違ひなく怒られるのは俺の方だし根に持ってしまったらそれこそ泥沼どころじゃ納まらなくなる事だって考えられる。

「最近、社さんが俺とHする時：無理矢理壊される寸前までされてさ……。しかも、声だつて出させない状態でもしてくるし……。しまいには、仕事に響いちゃって如月にも何度も【にやり】されてさ。こないだの番組の収録の時なんか、俺が腰が痛くて痛くておさえてた時に『ヤったのか？』って言われてさ。」

確か：如月さんって、ロックさんの相方だよな。

俺より2人共先輩だつて言うのも知っているけど、如月お月さんは最近
は自分で映画を作ったりピンの仕事も増えたりしているのも知っていたから。

何度も「映画に出てくれないか。」って、言われた事があったけどその時に限っているんな事が起こっていたから出る機会だつてなくなつてしまった。

しかも、俺以上に家電にも詳しくて良く家電の事とか聞く時がたまにある。

楽器の事だって詳しいから、良く好きなバンドのコンサートとかにも一緒に行く事が多いけど。

俺が、趣味で買ったエレキギターだって如月さんが薦めてくれたもの。

まあ、その見返りにって言ったら悪いけど家電話を車の中で散々聞かされた。

このメーカーさんのこれは良いとか、スピーカーはこうゆう風になくとか…。

俺にとつて…って言うかパオ達に対してもそうだけど、話しやすい先輩で尊敬して先輩の一人だから。

「それで？（顔傾げ）」

「それで？つて…。（呆れ）『ふーん。お前、最近…社さんと付き合い始めたんだ。』って言われちゃつてさ…。」

その時は多分つて言うか、凶星だったからロックさんは言葉に出なかつたんだろう。

どっちにしてもさあ、ロックさんも社さんもラブラブだつて事なんだろうけど。

意外と、ロックさんだつて素直なんだなあつて少しぐらいは思ったよ。

人の事も言えないけどでも俺自身思わず、にやりしたかつたけどさつきの事でまた泣いちゃうのが嫌だつたし拳崇だつてヘビィさん達の事でイライラが来ちゃつているのを何とかしないと。

社さんもロックさんも、2人共照れ屋だつて言う事を知っているからマジで真つ赤になつたんだし。

「何か、いきなりにやりされたからちよつとだけム力ついたんだよね。あいつ、人をからかうのが好きだから俺がそう言う状態だと知つた時に『これか。』つて思つたんじゃないかなあ。自分がそう言

う立場だったらキレるのに何か理不尽なんだよな。しかも、「弄もてあそばれてるじゃないのか？」って言われてさ……。」
それ程コンビ仲は悪くないのに、たまに楽屋で大喧嘩ドンパチしている時を見た事がある。

そのたびに、パオがキレて説教が聞こえるのも事実なんだけど……。ネタを書いているのがほとんど如月さんだからって言うのもあったみたいで、楽屋の外では凄い音をしていたから俺を入れて他の出演者の人が楽屋の前でたまっていたんだっけ。

だけど、理不尽すぎな所は確かに如月さんに直して欲しいけど結構優しいのは俺だって知っているんだよ。

キレた時は、俺でも近寄れなくなっただのは事実だけどちょっと怖くて……。

ロックさんにしても、俺と同じ事を考えていると思うし2人共俺にとって尊敬できる先輩だから。

「でもそれがあいつの良い所だって知っているし、嫌だったらコンビだって組んでいないから……。一度もネタを書かないでちよっかいをかけた俺が一番悪いんだし、俺だって一度キレたら自分で制御できないから。だけど、一度も怪我なんてさせてないよ。そんな事したら、楽屋でパオに説教されるのが目に見えているし……。」

パオはどっちかと言ったら、【説教マシン】で先輩・後輩関係なく説教するから後輩からは【ポリスマン】とまで言われる始末。

まあ、ほとんどがバレる嘘をつくのが多いつて言うのもあるんだけど……。

「だってあんなだけ、大きな声で喧嘩するからじゃないですか？」
パオが苦笑しながら、近くにあるソファに腰掛けてる。

涙が出ていないから、ちよっとほっとしたけどパオにもちゃんとした理由があつたんだなあ。

ただ、説教したいからとか八つ当たりしたいからじゃないんだって

思ったんだけどパオのキレている姿を漫才の舞台袖で見た事がある
って京から聞いた事があつたからびびっていたんだ。

「うっ。」

肝心なロツクさんだつて、凶星だったから言葉に出なくなっている。
まあ、パオの説教は正当性があるから別に言っている事は間違つて
いないし誰だつて楽屋であんな大きな声を出されたらビックリする
のは当然だ。

ネタを書いているのは、拳崇だからパオだつて人事じゃないって思
つたんだろう。

「まつたく……。仲が良いんだか悪いんだか分からないけど、それも
ひっくり返してロツクさん達つて言っちゃえばそれまでですけど。」

「巻き込まれるのだけは、凄く嫌なんですけど。」

パオと俺が軽くにやりとすると、ロツクさんが苦笑しだした。

「K」。お前、完全に仕返しだろうが。」

苦笑したままのロツクさんが、パオじゃなくて俺の顔を見てきた。
ある程度予測していた事だったし、さっきまで軽い口喧嘩をしてい
たから。

俺だつて当然の事だけど、ロツクさんに仕返しする訳じゃないし先
輩だからつて言うのだつてあるけど返つてこれが原因で仲だつて悪
くなりたくないつて思ったのも事実だから。

ただ、意外だつたのはロツクさんが真つ赤になつて苦笑して来たか
らだ。

ほとんど、凶星だつたんだなあつて思っていたしまさか如月さんが
社さんとロツクさんの交際を知っていたのにはびっくりした。

それよりも、耳まで真つ赤になつて言っている時点でちよつと怒つ
たつて説得力なんて無いし本当に【純粹】^{ピュア}なんだなあつて。

いつもからかわれているから、こつ言つ時じゃないとからかえない
つて思つたけど京だつてびっくりして俺の方を見ている。

「俺だつて見ていたんですけど、パオが説教したのつて正当性があ

るって思いましたし誰だつてあんな大声で口喧嘩してたら嫌でも聞こえますよ。びっくりしてた人だつて多かつたんですし、第一返しで言つてたらしやれになりませんって。」

自分でも軽^{チャラ}いつて少しは思つたけど、事実だしいつもからかわれているこつちの身にもなつてみるつてんだ。

先輩だから、表立つて言えないけど本当にからかわれているつて思つちゃえばちよつと悪いけど俺だつてロツクさんと社さんがカップルになつて本当は喜んでるんだよ。

デュークさんとあんな別れ方をしたロツクさんにしてみれば社さんが告白したのは正直ビックリしたけど、社さんだつて覚悟を決めたんじゃないかなあ。

社さんに聞いてみなくちゃ、絶対に判らない事だけだ。

ロツクさんだつてビックリするほど、耳まで真つ赤になるなんて思わなかつたし予想外の出来事だつたから俺だつててんばる事しか出来なくて。

「確かにそうだけど、まさか如月に社の事を言われるなんて思わなかつたから。俺、嫉妬していたのかも知れないけど何か間違つていたかも…。」

ロツクさんにとって自分と全然違う仕事をしている社さんの仕事を完璧に知らなかつたと思つたから、ちよつと他の女性スタッフとかと話しているだけでイラついていたんだ。

しかも俺や京と一緒に、交際発表だなんて出来ないのは知つていたし街とか歩いていても変装をしなくちゃならないのも面倒だから…。

「社は浮気性だつて言うのは知つてはいるけど、本当に俺の事を飽きたんだつて思つたら悪い事ばかり思つちゃつて…。最近だつて、俺と全然話なんかしてくれなかつたからどうしたんだろつて思つちやつて…。」

またブルーになつたロツクさんに、さっきまで黙つていた京が口を

開いた。

「七枷さんは、ロツクの事を思つて気を使ったんじゃないかなあ。」
社さんの方が年上で、ロツクさんに気を使ったとしたら当然ロツクさんだつてブルーになつちゃうはず。

だから京は、社さんの気持ちも考えて話したんだろう。

「気を使う事なんて無いのに、何で気を使う事なんてあるんだよ。
俺だつて気を使うのは大嫌いなのに、社が気を使つちゃうと俺も何
だか気を使つちゃうよ。」

泣きそうなロツクさんを見て、黙つてしまふ俺と京。

「俺の方が年下なのに、お互い気を使つてばかりだつたらどつち
かが倒れちゃうと思うし社だつてやっぱり辛かつたんだと思う。ふ
がないいって自分でも思つていたと思うし、俺自身があんまりベタ
ベタする方じゃないから不服だつたんじやないかなあつて。」

「だけど、本当は好きなんだろ？だつたらちよつとは気を使うのか
も知れないけど、お互いにちゃんと話せよ。」

さつきまで一言も話していなくて黙つて見ていたパオが、口を開い
た。

「…つて言つても、俺も人の事言えないんだけど。」

「パオ…。」

涙が目に溜められているのを見て、少しだけう…つとなつたパオだ
つたけど何とかなつたらしい。

「…と、とにかくさ。一回だけでも、社さんと話してみるよ。まあ、
その前に俺がデュオロンさんと話さなきゃならないんだけど…。」

そう言えば、パオの事もまだ何も解決してなかつたんだつて。

「うん…。デュオロンさんと、話してみる…。話さないと、ダメだ
つて分かつているから。」

パオ自身、本当はデュオロンさんに話すのも辛いと思つたしそれだ
けパオが受けた心の傷は深いんだから…。

「拳崇：あのさ、俺ちゃんとデュオロンさんに会って話すから…。だから、ヘビイさんを殴るのはそれからにして。拳崇がヘビイさんを殴りたいのは分かっているけど話す前に殴っちゃったら話がこっちやになるし、俺だってデュオロンさんに対して自分の思っている事に素直になりたいって思っているんだから。」

俺だって、拳崇が前に俺がロバートさんを殴っちゃった時みたいにキれるのは分かっていたけど今回の事は自分の相方だから当然だって思っているし拳崇は京やリョウさん以上にコンビ愛が強いから殴るぐらいじゃ収まらないんだろうなあ。

パオも、自分でデュオロンさんに話そうと思ったのだって嘘じゃないんだし…。

それじゃなかったら、こんなにも真剣な顔で話なんてしないんだし拳崇だって仕事以外こんな顔のしたパオを見る事なんかないんだから。

びっくりしているって言った方が、拳崇にとっては正解かも。

「それに拳崇にはいろいろ迷惑かけてばかりだし、大事な賞の時のネタのつっこみが飛びそうになった時に拳崇がフォローをしてくれたから今があるんだって思った。賞だって取れたし、俺は本当に感謝しているよ。今でもネタが飛びそうになった時だって、あの時の事を思い出しているんだから。」

パオにとつて、拳崇って本当に【おにいちゃん】として【相方】として見ているんだなあ。

お姉ちゃんじゃないけど、本当にたまらんなあって思ったんだけどここで自分が後輩に変な事したらヘビイさん達と同じ事になっちゃうし京だって泣いちゃったらそれこそ修羅場どころかひっちゃかめっちゃかになっちゃうから嫌なんだよね。

……しよとは、思わないけど。

あんなに真剣な口調でも、嬉しそうに話すのはやっぱり信頼しているからだと思うと少しだけホッとなった。

拳崇自身も何だか照れくさくなって、怒るのを止めたらしい。

「何で今になつて、そんな事言っくん？感謝なんて、何か照れくさいやんか。」

パオが照れている拳崇の顔を見て、更に口を開く。

「でも、感謝しているのは嘘じゃないよ。俺、ロバートさんが拳崇の事を【愛人】^{パトロン}だなんて言っていたのも知らなかったし関係を持ち続けているのだから。放置していたのは俺の方だし、自分が拳崇と同じ状況になってやっと拳崇が本当に辛い思いをしたんだなあって思えるようになって…。何か俺が、一番悪いみたいと思っちゃったんだよね。」

はにかんだ顔をしたパオの顔を見たら、何だか理性が飛びそうになった。

マジでここで飛んだら最低だっと思っていて、京だっけ泣き出すと思っただから嫌だっけ思っただ。

「俺…自分が『姫』^{ひめ}だっけ気付いたのは、拳崇が前に如月さんと喧嘩した時なんだよね。それにその時に背中に怪我しちゃって、そんなたいした怪我じゃなかったのに俺だっけちよっとは安心したけど俺のせいでこんな事になっけちよっただっけ思っけちよっただっけ悲しくなっけちよっただ。」

パオが泣きながら、話すのを黙って聞いている俺と京。もちろん拳崇も何の事だか分かったのか何か複雑な気持ちになっている。

俺自身、拳崇の手首の傷は気付いていたけどまさか拳崇の過去について言っけか如月さんとの関係にそんな出来事があったなんて知らなかったから正直驚いているんだ。

「俺…目の前で拳崇が、気を失ってショックって言うけか驚いたんだよね。俺さ…目の前で、人の血を見るのも人が倒れるのも凄く嫌で拳崇がそうになった時は俺は何をしているんだろっけ思っけたら何か不甲斐なくてさ…。」

パオが少し落ち込んでいるのを見て、拳崇が口を開く。

「パオが俺の事をそんな風に思っていたのは知っていたから、驚いているのは事実やし一人で抱え込んでいたのも知っていたか…。俺はお前の相方やから、話したい時はちゃんと話せや。俺みたいに自分ばかり責めたって何にもならへんし、同じ風にパオにも傷つけてほしくないからさ…。」

それは、『リストカット（自傷行為）常習者』としてじゃないよね？別に馬鹿にしていなくても、俺だって心配しているのは事実だよ。

「俺：パオが守っている『封印』は、絶対に守りたいって思ってるんよ。俺やアテナみたいに『封印解除』ギリギリとは違ってパオの守っている『封印』は、コロニー全体の事やから。」

拳崇にしてみれば、パオは『相方』として大事な友人だから当然の事を話したんだしパオと何年もコンビを組んでいるんや？って言う事になるみたいで…。

「拳崇…。」

パオがそう言うのと、拳崇の頭をなでなでしている。

拳崇があんまり自分の頭をなでなでされるのはあまり好きじゃないって言うのは知っているけど、くすぐったいって言うのも多分そうだろうなあ。

まあ、自分の方が年上だから照れくさい事も少しはあるんだろうけど。

「なんかさ、あの2人を見てみると軽いデジャブになっちゃうのは気のせい？」

何気だけど、俺らのいちやつきをはたから自分が客観的に見ているみたいで近くにいた京に話し掛けた。

京自身も急な事だったし、ちよつとほけつとした顔で俺の方を見ている。

「気のせいじゃない？拳崇とパオの今の状態だけで、デジャブになっただけだよ。」

そんなの、分かっているよ。

俺がお姉ちゃんと考え方が、一緒だって事ぐらい。

だって姉弟だし、ちょっとは性格が違っただけと考え事とか似ているって言われるだけでちよっとはショックなんだよ。

「京も、言う事…言うよね。」

でも何で今になって、そんな事言う事ないじゃんっ！

「キツイ事、言うてごめんね…。まさか本当に怒るなんて思わなかったから、俺だって言い過ぎたって自分で思っているんだから…。」

さっきまで泣いていたパオに続いて、京も泣き出した。パオの場合はほとんどショックで泣き出したっていうのは分かっているけど、京の場合はマジで自滅行為じゃん。

だけど、こんな光景をリヨウさんやお姉ちゃん達に見られたら何て言われるか。

俺も何かてんばってあたふたしちゃったけど、このまま京を…珠洲を泣かせたままだったら余計に説教をされるのが分かっているから俺だって嫌なんだよね。

俺がキレる寸前になったのは、ちよっと悪いと思ったし前に俺が大激怒した時に京も大号泣した事があって…。

俺だって本当は珠洲に…京に構ってほしいのに、こんなんじゃ俺が寂しい思いをしているなんて京には分からないって思っちゃうよ。

意地を張ったって何にもならないけど、ロツクさんの言っている事は俺にも分かっているから。

分かっているからこそ、こんなワガママだって言っちゃったんだしロツクさんのせいにはしたくないけど俺だって本当は凄く複雑だよ。まあこの複雑の思いのまま京をメチャクチャにする事もあったんだろっけど、京は泣き出すは俺がロツクさんやパオに説教されるのが分かっているからやるうなんて思わなかったし京の体の事もあるから無理は出来ないんだよね。

リヨウさんから京の病気の事を聞かされてから、仕事の量だってま

すます増えているのも事実だしそのたびに京が無理をするから体が辛くなつて倒れるのも事実だったから…。

「京が泣いたりしたら俺がお姉ちゃんやシエルミーさんに説教されるし、俺だつて自分で言っていたのに何だか複雑になつちゃうよ。」
複雑になつているのは、本当。

説教されるだけじゃなくて京が泣き出すのも嫌だったから、泣かせたりしたら最低だつて思ったし本当は泣かせたいつて思っていたけどこんな事も言つてられなくて…。

「それに俺、京を泣かせたくないつて決めていたのに…。」

俺がありつただけの笑顔で、京の顔を黙つて見ていた。

京も真つ赤になつてはいるけど、俺の顔を黙つて見直しているし…。その顔も淒く可愛いくて、いつまでも見ていたいつて思った。

軽い喧嘩になつたのは俺が一番悪いと思つているし、この件でも説教されるんじゃないかなあ。

「結局は、俺が京を…珠洲を泣かせちゃつたし…俺つて最低だよね。」

自分で喧嘩を吹っかけたのに、自分が負けてどうするんだよ。

「ごめんね。」

本当に俺が意地つ張りだつて事は、自分でも自覚しているけどまさか京がこんなにも頑固だつて思わなかつたから正直ビックリしているんだ。

気付いた時には、京の顔に近づいてキスしそうになった。

当然ロックさんには、ピコハン（ピコピコハンマー）で軽く叩かれて俺は頭を抑えた。

「いてえ。」

自業自得だつて言うのは自覚していたけど、別にいちやついたつて良いじゃん。

しかも京が可愛いのは、ロックさんだつて分かつてはずよ。

だてに京だって、『芸人・イケメンランキング』で上位になっている訳じゃないもん。まあ、パオみたいに常連じゃないって言ったら京に悪いけどかつこ良いし可愛いもん。

「何、すんだよ。」

「いちやついてるんじゃないよ。惚^{シロケ}気るのも分かるけど、目の前でいちやついていたら誰だってイラつくよ。フアンの子達は、K」と草薙さんがこんなにラブラブなのは知らないんだろなあ。」

だからってピコハン持って、にやつくなつて。

京だって、びっくりしてキョトンしちゃってるじゃん。

むすつと俺がしていると、ロツクさんが更に口を開いた。

「でも全部事実だし、あんな照れた草薙さんを見れるのは俺らだけだしさ。」

そう言つてまた京の方を見たら、きよとんとしてる。

一瞬だったけど、理性が飛びそうになつちやつて京の上着を破いちゃった。

破られた京もビックリして、すぐに真っ赤になった。

「な…何、してるんだよ。」

京が急な出来事が苦手だつて言うのも知っているし、知っているからこそ俺自身が急な出来事をしたくなるんだよね。

まあ、そのたびに京が真っ赤になつてくれるから彼氏としては嬉しい事なのかなあ。

「京の照れている顔を見ているとき、何だか癒されるんだよね。可愛いくてさ、束縛じゃないけど…」

だからこそ俺は、いつまでも京の笑顔を守りたいって思ったんだ。もう一発ピコハンされたつてこの思いだけは、絶対に変わらない。

「もつっ！！さつきロツクに、ピコハンされたの忘れてないよね。

(ぶくう)「

忘れる訳…ないじゃん。

でもこんな可愛い顔で、キョトンされたら誰だつて理性が飛ぶの当

たり前じゃん。

「でも…嫌じゃないよ。」

あーもう、可愛い過ぎる。

「あーあ。服：新しいの、買わなくちゃ…。」

京がちよつとだけ凹みながら、照れている顔で俺の顔を見ると本当に理性が飛びそうになる。

このまま…ここで、Hしちゃうかなあ。(にやり)

でもせつかく理性が爆発しそうになっているのに、ロックさん達がいるからHも出来ないんだよね。

本当は今にでも、京をめちゃくちゃにしたいって思っているのに…。

「何、理性崩壊させようとしてるんだよ。どっちにしても、草薙さんを壊すまでHしようだなんて思っているんじゃないやねえよな。」

凶星だったから、言葉に出来ないけど別にいちゃついてたって良いじゃん。

実際にHなんてしたらロックやパオに説教されるのだって分かっているんだし、京だって身体が持たないと思う。

「ギクッ。」

「やっぱりな。そんな事したら、草薙さんが辛くなるって事ぐらいお前だって分かっているだろうが。」

京の病気の事は、俺だって知っているよ。もちろん京が、病人だからって抱く訳じゃないし俺だって自分がいつ病魔に襲われるか分からないんだから。

だけど、その前にパオの事や事件の事も解決しなくちゃならないしこれ以上誰も犠牲になってほしくないから…。

「思っているみたいだな。草薙さんも、草薙さんですよ。体格が違いすぎているから、もちろん抵抗なんて出来ないって思っているんじゃないでしょうねえ。」

ロックさんに言われて、ドキっとなった京。どうやら京自身も凶星

だったみたいで、あうあうってなった。

京のあうあうとなった姿は、本当に可愛い過ぎて理性が落ちそうになる。

まあ、惚気ノロケだって言っちゃえばそれまでだけ。

「草薙さんのあんな顔を見れるって、思っているんじゃないのか。
変態スケベ。」

そりゃ思っているけど、変態って言われる筋合いねえよ。

「マキシマと、一緒にしないでください。」

ちよっとむかついて、ロツクさんを軽くにらんだ。

「何、草薙さんの前でキレようとしてるんじゃないやねえよ。全部、K'が悪いじゃん。押し倒して、何するか分からないけど…。(にやり)」

にやりされるのは分かっていたけど、耳まで真っ赤になっちゃった。

「ロツク…からかつちゃダメだって。あまりからかつたりしたら、逆の立場になった時ロツクだって照れるんだろう？ だったらさ、かわらない方が良いでしょう。草薙さんだって、今にも憤死しそうになっているんだし…。まあ、K'がどんな事を思っていたのかは俺だって分かるけどさ。K'の場合は俺とか拳崇みたいに、すぐには顔に出ないけど結構分かりやすい性格してるんだから。」

凶星だったから、当然言葉に出来なかつたけどそんなに分かりやすい性格してるのかなあ。

「草薙さん達がここでHするんだったら止めないし、返って邪魔になっちゃうから。」

相手が相手だって分かっているけど、何だかムスツとなってしまった。

パオは気を使つたみたいだったけど、俺だつて言いたい事ぐらいあるんだから。

返って俺がパオに対して、キれるのはお門かど違いだつて思っているし

拳崇にまで聞かれたら説教されるのが分かっていたから。

その前に、パオから説教つて言うか注意を食らうのが目に見えてい
るけど。

「からかったからだろうが。」

何で…俺も、素直じゃないかなあ。

ロックはオドオドしだすと思ったし、俺だってパオと喧嘩なんか嫌
だから。

素直の方が、本当は一番良いって思っているのに意地ばかり張っ
ちやつて…。

からかったら、俺だって悪いって思ってますよ。だけど、草薙さん
達が見える所でいちゃついたら誰だつてそうなりますって。」

パオにズバリ言われ、う…となった俺は京の顔を黙って見ていた。
京は更に俺の顔を見て、きょとんとしていてマジで可愛い。

パウの言っている事は確かに間違っていないし嘘じゃないって言う
のも知っているけど、俺だつていちゃつきたい時ぐらいあるもん。

京は…珠洲は、俺がこうなっている状況だつて事知っているのかな
あ。

「俺…K’の事信じているし、大好きだよ。」

新しい服に着替えてきた京が照れながら俺の顔を見てきた。

「K’が好きだから、俺はプロポーズを受けたんだし嫌いだったら
こんなにも素直じゃなかったかも知れなかったんだしさ。」

京がそう言つと、俺にキスした。

「それよりも…さつきから、K’の当たっているんだけど…。」

テレながら、京が俺に苦笑した。

「だけど俺…K’とHするの、嫌じゃないよ。嫌だつたら、今頃K’
& と付き合つてないよ。でもさ、ここに拳崇やパオ達だつているの
にHなんてしたら何か恥ずかしいし返つて『にやり』されるのが目
に見えてるよ。」

京の言いたい事は、俺だつて分かるよ。

分かるけど、もう限界近いよ。

男として大好きの奴とずっといたって思っているのは事実なのに、体は素直って言うか勝手に動いちゃう。

「K'は、今にでも俺とHしたいの？」
ちゅど〜ん。

肝心の京自身は無自覚だけど、俺自身は危なくここで京とHする所だった。

俺は京の事を、大事にしたってそう思っているのに…。

京を泣かせないって、自分であれ程誓ったのに…。

「俺…K'だったら、酷くされたって良いよ。だって、俺にとってK'は大好きな人だしずっと一緒にいたいから…。」

京の目には、大粒の涙が流れていて俺はその光景を見てちょっと冷や汗をかいた。

「だから、俺よりも先に逝かないでね。一人になったら、俺…寂しいよ。」

大丈夫だよ。

京より先に死ぬなんてないだろうし、京を守り抜きたいって思っているから…。

それは、彼氏として当然の事だし俺だって京と同じ立場だから京がこう思っていたなんてちょっとビックリした。

シヨックで泣き出してしまったのは、俺にも一理あるから何とも言えないし京がそのまま泣いてしまったら仕事まで支障が出てしまうからどつちにしてもシエルミーさんに怒られるのは決定的になっちゃう。

京は最近、芸人もしているけど歌だって歌っているってリョウさんから聞いた事がある。

しかもその歌唱力は凄くて、実際に歌だって上手い。

だけど普段はこんなにも可愛いくて、大事にしたって思った。

「大丈夫だよ。俺は京の事を離したりなんか、しないから。俺だつて思っている事は、一緒だよ。」

嘘じゃないし、俺だつて京が先に死んだら同じ事だと思う。

芸能活動だつて、寂しさが来ちゃって上手く活動できるか分からないと思う。

でも大事にしたいって思っているのは、嘘じゃないよ。

俺がそう言ったら、京が少しほっとした顔になっちゃっている。

「良かった…。K'がそう言ってくれなかったら、俺ずっとどうしようかって心の中でもやもやしてたんだよ。俺もK'も『姫』の一人だし、いつ犯人に狙われるか分からないしまったばらばらに別れるのは嫌だよ。」

京だつて、俺が『姫』だつて言うのを知っていたんだ。

『姫』として覚醒したのは、俺の方が早かったし拳崇やアテナちゃんのことだつてちょっとは気になっていたんだよね。

「そうだったら、本当は嫌だけど俺はK'を守りたいって思っているよ。K'は俺の事を守りたいって思っているみたいだつてリヨウから聞いてたけど同じ気持ちだつたんだなあ。」

京が照れながら、俺の顔を見ている。

その光景を見たロックさんが、パオの目を隠してこつちをにらんでいる。

「ここにパオがいるんだから、少しは気を使えよ？ いちゃついてくれるのは別に良いけど、自分の部屋だし自由なんだろうけどここでHすんなよ。防音じゃないから、もろに丸聞こえだからな。」

そんなの俺だつて、分かっているよ。

俺が呼んだのに、そっちのけでいちゃついていたらダメだつて事ぐらい。

だけど、改めてそんなの言わなくて良いじゃん。

「（ぶくう）パオの事ぐらい、俺だつて分かっていますよ？ パオの事で拳崇がキレかかっている事ぐらい、俺が知らなくちゃマジで最低

だっと思ってているし…。」

少し俺が頬を膨らませていると、今度はパオが口を開いた。

「俺：デュオロンさんとまだHしていなかったのに、あの時の事を思い出しちゃったから辛くなってるのは自分でも分かっているよ。だけどK'は草薙さんと付き合っているしお互いに【姫】だっけ知っちゃったし、ここはK'と草薙さんの部屋なんだから別にいちやっついてたって良いって俺は思うんだけどね。」

パオにして見れば、いつも俺と京と一緒にいるから全然不自然じゃないって思っているみたいでHもそれについてくると思ったらしい。「カップルなんだから、HだっけするんだしK'だっけ草薙さんといつまでも一緒にいたいって思っているんだらうしね。」

正直に羨ましいって、そう言っちゃえば良いのにさ。事情が事情だし俺だっけ、知っているし何にも言えないけど本当はパオだっけデュオロンさんとHをしたいって思っただっけ思うと俺はちょっと胸が痛くなる。

多分パオがこんなに苦しんでいるのもデュオロンさんも知っているから、拳崇と一緒に殴りたいって思っているに違いないって直接デュオロンさんから聞いている。

あんな温厚のデュオロンさんが、キレるのはちょっとビックリしたし当然だっけ思っているから。

へビイさんだっけ、こんな状況になっっているなんて知らないって思っているし一番辛い思いをしているのはパオなんだからさ。

俺がキレたっけ何にもならない事ぐらい、分かっているんだけど…。

「パオ：へんな風に言っつなよ。何か、真っ赤になっっちゃったじゃん。」

パオが辛いのを我慢しているのは分かっていたし、シェンさんに関係を知られるのだっけちょっとは戸惑っているはず。

リヨウさんみたいにすぐに理解して、了解を取ってくれたから何と

かなったんだけどまだパオの場合は言っていないって言うのもあるみたいで…。

京だって、耳まで真っ赤になっているしパオの顔を見て頬をふくらませている。

その京の姿を見ると、俺はまた理性が飛びそうになった。

それだけ可愛いのに、肝心の京は無自覚だもんな。

「もっつ！K'も一緒になって照れなくなたって良いから、何とか言つてよ。」

目を潤ませながら、京が俺の方を見てまた照れている。

「拳崇だって、からかいたって思つてこっちに來たんだろ？さっきまで、パオと一緒にの所にいたんだし…。」

確かにそうだけど、拳崇は拳崇なりに何か考えているんだろうな。

「にやりするかしないかは、とりあはず置いといてヘビィさんを捕まえて説教するんだろうつて思うんだけど何だかデジャブなんだよね。」

それは拳崇が、ロバートさんと別れるか別れないかでもめた時の事。本当はロバートさんを殴るなんて思わなかったんだけど、ロバートさんが拳崇の事を『体目的』で付き合つて聞いた時には殴っちゃつていた。

京にも拳崇にもその光景を見せてしまったのは少し驚いたけど、当然だつて思つたから別に後悔はしていないよ。

悪いのは、ロバートさんなんだから。

しかも拳崇は、ロバートさんとの子供を妊娠しちゃっているから赤ちゃんには何も罪はないし俺には『おろせ』だなんて言える義理だつてないから…。

「この子はロバートさんとの子だし、あんなに壊されて初めてを奪われたから…。あれ以来、俺は…女の子の身体のまま元に戻れなくなつちゃつて…。パオにこの事を言つたら、すぐに殴りかかりそう

だったから慌てて止めたんだよね。パオがキレたら、俺以上に怖いから。」
それよりも一番シヨックだったのは、それが元でアテナちゃんと別れた事。

相当シヨックだったし、当時の拳崇の元気が無くて凹んでいたからでも、パオがあんなにキレやすいとは思えなかったし多分考え方は拳崇と一緒にあったのかなあ。

もしかしたらパオも自分が、デュオロンさんと別れる事になったらどうしようって思ったに違いなかったから。

だけど、大丈夫だよ。

デュオロンさん自身パオと別れる事なんか考えていないみたいだし、俺や拳崇みたいに『隠の姫君』じゃないから…。

本当は、コロニーから出られないって言うのはパオ自身気付いていたみたいで最初はシヨックが大きかったんだと思う。

パオの夢は、別の場所でも拳崇とコンビを組んで色んな番組に出て見たいって言うのを知っていたから…。

俺だって、同じ事を思っていたよ。

自分が『姫』でパオ達と同じ立場になったのは正直びっくりって言うかシヨックだったし、何度も泣いてた。

それよりも一番驚いたのは、京が…珠洲が俺らと同じ『姫』だって知った時。

京はそもそも『次期帝』で、いずれはこのコロニーを取り仕切る立場だったのに俺を守る為に自分が『姫』として覚醒しちゃったものだから守られる立場になってしまった。

俺は元々京を守るつもりだったし、それは『姫』である珠洲の姿になった今の状態でも同じ事だったから。

ましては京は敵に『姫』だって事は気付かれていないから、バレた時はかなりって言うかメチャクチャバイ事になるし京の命だって危ない。

それは、『姫』として覚醒したばかりのパオだつて同じ事。

「K、?どうしたの?ポーとしちゃって…俺の顔に何かついてるの?」

パオが、俺の顔を見た。

本当は見上げたつて言つちやつた方が良い程なんだけど、パオに身長の事なんて言えないよ。

気にしている事を知っているから、『華奢かや』とか『チビ』とかあまり言えないんだよね。

俺と数十cmも違うから、禁句を言つたらあまり良い思いをしないらしい。当たり前だつて思つてるし俺が逆の立場になったら、俺だつて良い思いもしない。

まあ、最初にそれを言つた時は本当に悪い思いをさせたつて言うか罪悪感が来ちゃつてすぐに謝りたくて急いで楽屋に向かつたつて。

まあ、パオはその時の事をあんまり覚えていないみたいだつたけど。

「んー?何でも、ねえよ。」

何で、俺も素直じゃないのかなあ。

正直最初から、『考え事してた。』つて言えば良いのに。

京だつたら思いつきり頬を膨らませて、『ちゃんと話して。』つて言うのに…。

それは、パオの事情も知っているからこそだと思つ。

本当だつたら、パオも黙っていないと思つているけど心の傷の方が強いから黙るしかないつて思つたらしい。

「俺の事、気にしてる?」

そりゃ、気にしているに決まつてるじゃん。

デュオロンさんにパオが浮気したつて言うか、ヘビィさん達に犯されたなんて言えないし俺が疑われるから言えないんだよね。

『お前がいるのに、何で守らないんだよ。』とか、逆に拳崇が説教されると思つ。

デュオロンさんは、拳崇とパオの直接的な先輩だし付き合い前から可愛がってたからほとんど自然な付き合いだったみたいだったけどデュオロンさんからしてみたら男としてちゃんと告白したいと思っ
て事務所で告白したんだろう。

もちろん、俺にとっても直接の先輩だし説教される率だって高くな
ってくるし…。

「俺一人で、デュオロンさんに話してくるって思ったら凄く緊張し
てきて…。心臓が、バクバクするよ。」

やっぱり自分がデュオロンさんの彼女で『真祖』なのに、浮気して
しまったのをパオ自身が気にしているって知っていたし京の時だっ
てまったく一緒だったから。

京自身もいろんな事があってロバートさんを殴ってしまった時だっ
てあったしソワレさんの所に行つて説教だってした事だってある。

京は俺と違つてすぐに顔に出さないからちょっと分からないけど、
どっちとも辛くて嫌な事だつて思ってしまったんだろう。

デュオロンさんにしてもパオが京みたいになつてしまう事を考えて
はいるんだろうけど、本当は違つてパオだつて思つちゃっている
んだろうなあ。

「もし俺の方から話して、デュオロンさんの方から『別れよう』っ
て言われたら…立ち直れないし辛いよあ…。俺にとってデュオロン
さんは、初恋の相手で大好きな人なの…。」

確かに、デュオロンさんの方から告白を受けて付き合い合うようになつ
てからそんなに時間が経っていない状況でこれだもん。当然辛くな
るのも、泣きたい時だつてあるんだろうしもっとデュオロンさんと
一緒にいたいって思っているはず。

やっぱり、パオだつて安心したい時だつてあるに違いないって思っ
たし拳崇の事があつたから余計に辛いのは知っているから…。

俺みたいに、ロバートさんを殴ってしまった時みたいになりにくくな
いって言うかささげたくないって言うのもパオにはあるみたいで…。

デュオロンさんは、怒る事が無くて俺だつてキレた所を見た事が無い。
実際にキレたりしたら、どうなってしまふかなんて考えたら背筋が凍ってくる。

俺だつて、正直見てみたいって思ったけど京には分かったみたいで横目で見られている。

自業自得だつて思ったし何だか、パオの顔を見てるとにやにやしてきちゃう。

「パオだつて辛いのに、何にやにやしているんだよ。」

パオの凹んだ所は見た事が無かったから、何だか理性って言うかほっとけないって思ったんだ。

まあ、理性が爆発する前に放置禁止だつて言う感情が先に来ちゃったんだけど。

「ごめん。だけど、何か可愛いじゃん。」

嫉妬覚悟で、話してみたのは良いんだけどそれでもまだ京の機嫌は直らないみたい。

「本当最近、ますます七枷ななかせさんに似てきたよね。」
京の言っている事は、俺だつて分かるよ。

社さんは、エンジニアだからPCの事は詳しいし俺と紫苑さんが同じマザーシステムのフロツピーだつて事も知っている。

しかも俺が、吸血鬼の『真祖』として覚醒してなおかつ『姫』としても覚醒しちゃっている今の状態だつて社さんは凄く驚いていた。

京の…珠洲の体を見て、『にやり』していたのにはちよつと腹が立つたけど…。

でも、社さんと一緒にされたら何か心外だよ。

俺は京の事を大事にしているし、パオだつて芸歴では確かに先輩だけど年下なんだから。

ちよつとロツクさんには悪いけど、社さんの場合は浮気心丸出しで見ているんだから。

.....流星の輝き } meteor of brightness }

ちよつとK'視点で、ロツクの事を語ってます。

どっちにしてもK'にとつて如月・ロツクのお笑いコンビは、尊敬
しているって言うのを通じればこつちも本望なのかなあ。 ^ | ^ ;
本望って言ったたら、何か建前みたいで後味悪いけど...。(< | >)

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次回予告 じかいよやく

K'「社さんに、ちゃんと話しなくちゃ...。ちよつとパオの事は置
いておくけど、それからでも良いか？」

パオ「別に、後でも良いよ。俺だって、まだ心の準備だつて出来て
ないんだから。」

珠洲「不安だつたら、俺とかに話せよ。」

パオ「珠洲ちゃん...。」

次回、流れ桜花おしづかの河 } a stream cher
ry blossoms }

パオや拳崇にからかわれてから、ちよつと時間が経った。

京と2人きりになって、俺なりに理性がやばくなった。

だって、京のあんな姿を見たら誰だって理性がやばくなるし現に俺だって京とHしたいって思ってしまった。

京自身は乗り気じゃないって言うのは分かっていたし、無理矢理にしたら京だって傷つくと思ったし嫌がるのが分かっていたから一旦は俺も落ち着いた。

現にパオがデュオロンさんに言えない状況で、ヘビイさん達にあんな事をされたのは正直ビックリしたし俺だって腹が立っているんだから。

拳崇ほどじゃないけど、俺がロバートさんを殴ってしまった状況に拳崇もさせたくない。

まあ、拳崇は自分より1つ年下で相方がこう言う状況だからキレるのは当然だって思ったしヘビイさんが悪いのは自業自得なんだからまあさ、その拳崇よりも2つ下のパオの方がしっかりしているって言われたら流石に年上の貫禄なんてスタボロだろうけど。それに、パオの方が芸歴的には先輩だし拳崇と組む前にちよつとだけピンだった経験を持っているから。

あれでもしも、パオが俺と京がHしているのを見てトラウマが全開になってしまふのが分かっていたし泣き出されたらそれこそロツクコウカインシヨケイさんに速攻説教されるのが分かっていたから。

普段のパオは、説教マンって言うかどつちかと言ったら悪徳系の弁護士なのに自分の事になったらこんなにも凹んでしまふんだなあって思ったらちよつと【可愛いなあ】って思っちゃった。

「何、パオの方を見て……にやにやしてるんだよ。」
京が、頬をふくらませて俺の顔を見ている。

だから、そんな顔…すんなって。

京自身が本当に無自覚だから、見ているこっちはちょっと困るんだよね。理性、爆発しそうになるし。

「K'は、俺とHしたかったの？（首傾げ）」
どつきゅーーんっ！！

凶星だったし、俺が思っている事をそのまま言っちゃったから言葉に困っちゃった。

本当は、今にでも京とHしたいって言う感情だってある。

京の事を傷つけたいって思ってはいるけど、後で仕事に差し支えるんじゃないかなあって…。

今日は、リヨウさんと一緒に【お笑い関係の雑誌】の取材だっけって聞いたからそんなに時間が無いって言うのも分かっていたけどパオがこう言う状況になってしまったからって言うのをさっき電話でリヨウさんに話していたらしい。遅刻してきたら、リヨウさんにもシエルミールさんにも迷惑がかけてしまう。

でも京を傷つけてしまった時点で、ヘビィさんとブライアンさんみたいになってしまうと考えるとたら背筋が凍ってくる。本人達に会っていないからなんだけど、間違いなく修羅場だよ。

どっちにしても、シエルミールさん【にやり】されるか怒られるかどっちかだっけ思っているし自業自得だっけ思っているから。

【何で仕事だっけ言うのに、京を…珠洲ちゃんを傷つけたの？】って言われるのが分かっているし、京が身体をだるくなってしまうのも分かっていたから。リヨウさんにも、説教されるのだっけ事実だし。

「京が嫌だっけ言ったら、止めるよ？でも、拳崇やパオ達がいるからなかなか出来ないって言うのだったあるんだけど…。」
俺は笑顔になって、京に話した。

しかも、すでに押し倒している状態だから京だっけ抵抗出来ないらしい。

「嫌じゃ…ないよ。K'の事、大好きだしHしたいって思っているよ。でもさ、後でK'がロックに怒られるんだから。」

【時と場所を考えろ】って言われると思っ、京もちょっと困ってしまった。

「ただ、もう…限界だよ。」

発作のせいにしたら本当に最低すぎるけど、俺自身はマジで辛くてHで誤魔化さないとちょっと苦しい。

「京…大好き…」

そう言っ、京とHしてしまった。

京をめちゃくちゃにってしまったし、泣き出してしまったから。

ロックさんが見ていなかったからちょっとホッとしたけど、見ていたら間違いなく説教だろうなあ。

正直俺が悪いのは、分かっているんだけど…。

『嘗み』すんなって、言われそうで…。しかも、パオがこう言う状況だから余計なのかも知れない。

「凄く体がだるいけど、K'の事信じているし…大好きだよ。」

俺に抱きついたまま、話す京の姿を見ると一気に罪悪感が来てしまう。

あんなに感じてしまっている京の顔を見るのは、久しぶりだし傷つけてしまったんだなあ。

俺のを必死で受け止めてくれて、俺がイッた時に一緒に京もイッた。

京のイキ顔も感じている顔も可愛いし大好きだけど、普段の顔も大好きだ。

京本人には言えないけど、京の感じている声が後もう少しほんの少しだけで良いから大きかったらもうちょっと京を傷つけたかったんだよね。

でも京が泣き出すの分かっているし、ロックさんにバレて説教されるのは分かっている事だけだ。

「だって…K'ったら、中に出したまま攻めるんだもん。俺…気が

狂いそうになつて、腰が痛くなつたんだもん…。」

そう言っている京の顔が、真つ赤になつた。京は元々、腰痛持ちじゃないのに俺と関係を持つてからは腰をおさえる事が多くなつて来てしまつて…。

「やっぱりな。道理で、草薙さんがこつちに来るのが遅かつたからパオと拳崇と3人で心配してたんだ。だつてせつかく買つてきたものを冷蔵庫から出したっていうのに、草薙さんはK」と最後までしちやつてるしさあ。」

ロツクさんが、ドアの所で苦笑してしまっている。

「ラブラブなのは良い事だつて思っているし、草薙さんの部屋だから何にも言えないけど。俺や拳崇だつているし、パオがこつ言う状況だからつて言うのも分かつているんですよ？だつたら、時間帯を考えてくださいね。」

ロツクさんがそう言つと、京が更に耳まで真つ赤になつちやつた。

「京が、凄く…可愛いんだもん。俺が理性落ちそうになるのなんて当然の事じゃん。」

本当の事だし、言い訳じゃないつて自分でも思っているから。

それなのに、ロツクさんは左手にピコハンを持って俺の頭を軽くはたいた。

「(すぱん) そんなの完全に、言い訳じゃねえか。だからつて、草薙さんを壊すまでさせる事ないじゃんかよ。今だつて俺が止めたから、ちよつとは気分的にほつとしてるけど止めなかつたら完全に腹上死する所だつたんだからな。(すぱん) それに第一、中に出しちゃっているじゃねえか。(すぱん)」

3回もピコハンで叩かれて、頭を抑える俺。

まあ、自業自得だつたし何にも言えなかつたから黙つて睨んでいるしか出来なくて…。

実際に京の中に出しちゃつたのは、俺だから少しくらいは言い訳ぐらいさせてよ。

本当は、言い訳なんて絶対しちゃいけないんだろうけど。

「痛てえ。何、するんだよ。」

少し誤魔化したけど、事実的にそうだったから冷や汗をかく事に。

「草薙さんが：珠洲ちゃんが、妊娠したら責任取れるのか？そのまま放置なんかしてみろ、俺が殴つてやるから。それに草薙さん…じやなかつた珠洲ちゃんだつて、可哀相じゃねえか。」

「そんなの、分かっているよ。ロツクさんに言われなくたって、ちゃんと大事にするのは当然ですから。」

ちよつと頬をふくらませてしまったけど、放置なんかしたら男として最悪だつて思っているし京だつて悲しむと思つたら出来る訳ないじゃん。

京が妊娠をしたら、認知はするし父親の責任だつてある。

子供にも罪が無いから、『おろせ』だなんて言いたくも無い。

確かにシエルミーさんやお姉ちゃんみたいに『にやり』されるかも知れないけど、俺は京の事を大事にしたいし当然だつて思っているんだから。

「自覚してんのと分かっているんだつたら、何でお前は草薙さんと最後までした。」

ロツクさんが、ちよつと怒りモードで俺を睨んできたからちよつとどころかかなり怖い。

でもあんなに感じている京の姿は凄く可愛いくて、やっぱり俺ので感じてくれているんだつて思つたら京の事をもつと乱れさせたいつて思つてしまう。

ロツクさんには説教されるかも知れないけど、理性が吹っ飛ぶぐらいの仕事を京は無自覚でしているんだから。

「俺が：何度も『痛い』つて言っているのに、K' ったら凄く攻めるんだもん。K' みたいに俺は体格が良くないから、受け止めるのに大変だったんだから。しかも、中に出すしさ…。」

傷だらけの京の体を見て、ロツクさんがマジでブチ切れた。

「だから、傷つけるなって言っただろうがっ！！見ろ！草薙さんの腕なんか手の形に赤くなってるじゃねえかっ！しかも、俺らがいるのに『営み』すんなって言うているだろうがっ！（すぱんっ）」

ただでさえ、パオとそんなに変わらない体格なのは知っていたけどそんな中で京の腕を思いつきりキツく握ってしまった。

しかもロックさんが持っているハリセンは、フルスイングされた状態だったからその形のままだったし。

やっぱり、『営み』するなって言われるのが分かっていたから凹みはしなかったけど傷つけてしまったのは俺だから謝らなくちゃならない訳で。

「（あうあう）でも、でもね。俺、K」とHするの…嫌じゃないよ。」

京が慌てて、ロックさんに話し掛けた。

「そうやって…いつも草薙さんが甘やかすから、こいつがこうなんだよ。」

そんなの、ロックさんに関係ないじゃないですか。

それが京の…珠洲の優しさだって言うのに、思いつきり否定とする事ないじゃん。

「（ぶくう）ロックさんの…意地悪。」

本当は京に甘えちゃダメだと思っていているけど、男だからしっかりしなくちゃって思ったりしてる。

だけど、俺だって浮気だなんてしないししようだなんて思ってもいないから。

「ただ…京が今もそうだけど、Hの時も凄く可愛いくてイッた時も凄く可愛いんだから。」

俺が、Hの内容を細かく話すとロックさんが頭を抱えて呆れている。

「だから、俺が今言ってるのは時間を考えろって事。しかも、Hの内容…全部言うなって。」

ピコハンで叩かれそうになったけど、呆れたのが多かつたみたい。

「それにお前で、自分でパオを呼んだんだろ？草薙さんとHするのは、夜になってからでも良いだろうがっ！！どっちにしたって、草薙さんの行為は嫌になる程聞くけどさ。」

部屋が隣り同士だからって事もあるだろうけど、ロツクさんだつてある意味【生殺し】なんだろうなあ。

「それに今、俺だつて社と連絡がつかないから取りたいって思っているのに全然ダメなんだもん。」

突然ブルーになったロツクさんの気持ちは俺だつて、分かっているんだけど京が全然連絡くれなかつたら心配すると思う。

でも社さんは、本当に『トラブルメーカー』だから俺らはビクリしないけど彼女であるロツクさんにしてみれば気が気じゃないらしい。

心配性じゃないって自分では否定しているみたいだけど、社さんだつて一度ぐらいはロツクさんに連絡取れば良いじゃん。

その方がロツクさんだつて、少しぐらいは安心するだろうし…。

「俺の事…嫌いになったのかなあ…。」

またロツクさんが、自分の感情がネガティブになった。

「俺…社に…社に、会いたいよお！！」

部屋中に、ロツクさんの叫び声が響いた。

それと同時にロツクさんの周りには、光が輝きだした。

「わぷっ！」

京を守つたつて言うか、抱きついたらままでロツクさんの姿を見るとさっきまでいたロツクさんの姿がない。

その姿を見た拳崇も、パオも驚いている。

「ロツクさんの姿が…消えた…。」

急な出来事の中でこんな事を言うのは何だけど、俺と京がHしている事がバレなくて良かった。

「ねえ、あれ…見て?!」

パオが指を差した空には、封印を解かれたと思われる2つの模様シルシが輝いている。

一つはロツクさんの物だっけすぐに思ったけど、もう一つは誰のだろう…。

俺が考えていると、拳崇が何かに気付いた。

「あれって、アテナの『シルシ』とちゃうか？」

拳崇と俺が空に『シルシ』が現れているを見て、すぐに『姫』の封印が解けたって感じた。

アテナちゃんが守っている所は、俺達：能力者の力の存在が他の人達にも分かっけしてしまうのを防ぐ封印だっけ言う事をアテナちゃん本人から聞いた事がある。

しかも、フアンの人達に犯された事が原因で封印の力は弱まっけしまっけしている状況だっけから正直俺だっけビックリしちゃうっけしている。

拳崇もどういふ事なのか分かったのか、恐怖に身体を振るわせた。拳崇の『シルシ』の封印の力も弱まっけしている状況だから、今度は自分の番だっけ思っけしてしまうのも分かっていたしめっけちゃう怖い思っけしているんじゃないかなあっけ思っけ。

しかも、拳崇と別れる前にアテナちゃんは楽屋でフアンの人達に散々犯されて中出しまでされてしまっけたっけ言うのを知っけていたし強姦した男性の事だっけまだ分かっていない。

マネージャーの人がアテナちゃんを発見した時、全裸で白目になっけしている状態だっけたらしい。

「多分：じゃない絶対そうだけど、『異性の好きな人』以外に強姦されたせいやと思っけ。俺ら『姫』は…『真祖』もそうやけど『面識のない人』に強姦されたら、『シルシ』が消えてしまっけんや…。」
それが、直接『姫』の…『真祖』の死に直面する訳で…。

記憶が消えないから、別に良いっけ思っけただけどやっけばシヨツクだよ。人が死ぬのは、本当に嫌だし正直気分だっけ良いもんじゃない。

周りの目が俺らの方を見て、驚いている。

アテナちゃんの持つ『姫』の『シルシ』が封印解除になった今、アテナちゃんの身体が消えるのは事実で今だってほとんど見えなくなっってしまったている。

それもシヨックなのか、パオが叫びだした。

「嫌だ…嫌…っ！嘘だって、言つてよ…。俺に…言つたじゃん。」
近くににいるから、大丈夫だよ。」って。

大号泣に近い状況で、泣き出したのはパオとアテナちゃんが仲が良かった事。

だから余計に、シヨックが大きくてこうなってしまったらしい。

「嘘をつかれるのが、嫌いだって分かっているのにこんなんじゃない俺だって怖いよ…。」

「パオ…。」

俺がパオの様子を見ながら、京に抱きついた。

「ん？どうした？」

本当に京だって事情を知っているはずなのに、京がちょっとだけ冷静になっていてのを見てスッキリしたって言うか軽く冷や汗をかいているだけ。

俺自身はヘビィさんの事もそうだけど、怒りに近かったから。

「K…ちよっと、苦しいって…。」

ぎゅっと抱きしめているから、苦しがつているのは分かってしまったけど京が今の光景を見てもっと辛くなるのは分かっていたしそれが元でフラッシュバックになってしまったら本当に大変な事だから俺にしても京にしても、犯人側には『姫』だって言う事を知らないから。

もし知られたりしたら、俺の命も京の命も本当に危ないしパオだっていつ狙われるかなんて分からないから。

「ごめん…。だけど、もう少しだけこのままでいさせて。」
京を守りたいって、本当に俺はそう思っているから…。」

けど何で、ロツクさんの姿が消えたんだろう？

突然ロツクさんの周りが光り輝いた所までは憶えているけど、それからの事はまったく何一つ覚えていない。

本当に一瞬の事だったから、ビツクリする暇も無かったんだよね。

社さんだって、まだ行方不明の状態が続いていて…。

これ以上ロツクさんまで行方不明になったら、ますます頭がパニックになっちゃう。

だって、社さんはロツクさんの『亜種』なんだから。

それに、社さんに会ってロツクさんの事をどう思っているか知りた
いし…。

別れるかどうかなんてまずは無いにしても、本当にどう思っている
か聞かないと俺にしてもロツクさんにしても落ちつかないと思う。

「もしロツクさんに何かあったとしたら、社さんにも少なからずダ
メージが来るんじゃないかなあ？」

パオがロツクさんの事を考えて、ちよつと冷や汗をかいている。

パオ自身も自分が、『真祖』だって事に気付いているらしく…。

「そうだったら、俺だって人の事言えないや。デュオロンさんに迷
惑ばかりかけてばかりだ…。俺にとってデュオロンさんは大好
きな人で、『亜種』だから…」

自分が『姫』として、『真祖』として覚醒して間もないパオからし
てみれば凄く辛くて何で覚醒してしまったんだろうって思ったに違
いない。

覚醒してしまった原因を作ったのは、ヘビィさんとブライアンさん
だから責任だってある。

俺だってそうだけど、デュオロンさんだって多分殴りたいって思っ
ているに違いないと思っっている。

デュオロンさんは、自分で告白してパオと付き合う事になったんだ
から…。

「だけど、デュオロンさんに言ったら『別れよう』って言われそう
で何か怖いし今は俺よりもロツクさんの方が先じゃないのかなあ
って思っているんだよね。」
笑顔になっっているけど、胸の中では凄く辛くて泣き出しそうになっ
ているパオを見るとこっちまで辛くなる。

ロツクさんがこうなってしまった以上、社さんだって何も無いとは
限らない。

もしかしたら、既にこの世にはいないと思ったたら嫌な感じだし最悪
な事だつて考えなくちゃならない。

社さんだつてロツクさんと話したかっただろうけど、こうなつてし
まったから話すなんて出来なくなつてしまったんだと思う。

携帯の着メロを聞いて慌てて、携帯を取り出した。

気付いていないって言う訳じゃないけど、驚いたのは事実だし…。

「ん？」

電話の主はシエルミーさんからで、さっきまで京の仕事の事で社さ
んと一緒にいたらしい。

「すみません。さっき電話したのに、俺の方から出なくて…。」

俺よりも年上だから、ちゃんと敬語を使わなくちゃって思っている
けど電話に出なかったのは俺が悪いから…。

『社が…目の前から、いなくなった。』

え？となつたけど、すぐに何の事だか分かってしまった。

「嫌…嫌だつ…っ！…！嫌だよお…。」

パオはショツクで泣き出しちゃったし、京だつて何だか気分がブル
ーになつちゃってる。

そんなの、俺だつて同じだよ…。

まさか、ロツクさんがアテナちゃん側の『騎士』だつたなんて…。

いくら京と関係を持った事があつて、社さん自身罪悪感があつたと
しても俺にとつては尊敬する人だったから。

ロツクさんの『亜種』で、影響が無いつて言ったら間違いなくあり

えないんだから。

ロックさんの『シルシ』が現れて解かれた時点で、社さんは死んでしまったと同じになってしまった。

二重の悲しみが、俺を襲ったのを見た京が後ろから抱きしめた。

「パオも、K'も…俺が守るから。本当は俺も守られる立場だけど、そうも言ってもらえないから…。」

京が俺の顔を見て、笑顔になったけど京だって本当は辛いはず。

「デュオロンさんから、頼まれたんだよね。『バオに何かがあった時は、頼むな。』って。」

自分が本当にパオの『亜種』だって知った時は、正直驚いたんだろ
う。

パオ中心になっているのだって事務所に行って、行動を見ていたら誰だって分かっていた事だったし多分パオが死んでしまったら自分で命を散らせるつもりだったらしい。

『パオのためだったら俺は死ぬる』と、デュオロンさんが前に言った事がある。

俺もその時はビックリして、ちょっと首をかしげた事があるけど京に対しては俺だって同じ事を思っているよ。だけどさ、俺がそう言ったら京は泣き出すと思うし俺だってちょっとぐらいは気分が落ち込むと思うんだ。

「京…あのさ、俺が死んだら…悲しんでくれる？」

京に抱きついたまま、俺がちょっと低音で話した。

「そんなの…当たり前じゃん。今更…何…言ってるの？」
涙を流しながら、京は俺に話した。

「社さんが…七枷さんが…死んじゃったら、どうロックと話せるのさ…。俺だってまだ、七枷さんには…説明してほしかったのに…。」

パオと一緒に泣き出してしまった京を俺は、拳崇と一緒に慰めた。
あのままだったら俺だって悲しむし、正直俺だって辛いんだよ。

確かに社さんが京を犯した時は、殴りたいって思ったしあれが原因

で京にもフラッシュバックって言うかトラウマが来てしまった事。

俺だって、京に納得できるように説明してもらいたかったなあって思っていたし事務所の先輩だから仲が悪くなってしまうのが嫌だったから話ぐらいは聞きたいって思っていたから。

「俺…俺… ロックさんをもうちょっと、引き止めていれば良かったって思ったら凄く後悔してるよ。」

パオが号泣しながら部屋に帰ってきてても、いまだに泣いてしまっている。

「パオのせい、じゃないよ。誰かが、アテナちゃんとロックさんの『シルシ』の封印を解いたんだから…。」

まだ、封印を解いた人物が誰だか分からない状態でこう言う事になっってしまったから驚いてしまっているのも分かっているしショックなのも分かっているから。

「でも…でも…俺がもうちょっとだけ『姫』として自覚があったら、こんな事にならなかつたのに…。」

大号泣で俺に寄り添っているパオと京を見て、ちょっと役得なのかなあって思った俺はド変態なのかなあ？

「ロックさんが…死んだの…信じたくないよ…。悲しすぎるし…辛いよお…。」

お姉ちゃんやシエルミーさん達に『役得』だなんて言ったら、ド変態どころの問題じゃなくなるのは俺が一番良く分かっている。

分かっているからこそ、こんな状況だから場違いな事なんて絶対言えない。

「俺にとつて、ロックさんは尊敬できて一番身近な先輩だったのに…。」

泣きながら、俺の方に寄って来たパオの顔を見ながら俺も同じ事を思っていた。

パオみたいに事務所が一緒にロックさんと先輩後輩って言う直接な

関係じゃないけど、俺の場合は家が近所だから余計にショックが大きくて…。

京だって、また自分の親父さんである紫舟さんと会わなくちゃならないとなると辛いんだと思う。

しかもロツクさんと京は、ほとんど同期だし番組も一緒にやっていたからもろにショックが来るんだろう。

でも、あんなにパオが泣き出すなんて思わなかったしショックなのは俺だって一緒だよ。

パオの可愛い顔って言ったら、また京に嫉妬されるかも知れないし拳崇に説教されるのかも知れないけどパオの目がウルウルしている状況でデュオロンさんが見たら間違いなく俺が泣かせたんだろうと思ってしまうんだろうなあ。

俺だって後味が悪いのは分かっているし、それが原因で余計にパオを悲しませてしまうかも知れない。

どっちにしても、今何とかしないとドンドン最悪な状況になってしまうのは事実だったから。

「こんな事言ったら、ちよつとどころかかなり場違いかも知れないけどロツクと七枷さん…あつちで幸せになっていれば良いな。七枷さんが、自分で告白するきっかけを作ったのは俺の方だから。」

京にとって社さんは大事な先輩だったし尊敬する人だったみたいだったけど、社さんが自分であんな事を京にしなかつたら仲だって悪くならないで済んだのに…。

ロツクさんだって、社さんと京が関係を持っているだなんて知らないしもし関係を知ってしまったら修羅場になるのなんて必然だったから。

でもそれもバレル前に、こう言う状況になってしまったから、何にも言えなくなってしまうって…。

関係を持ってしまった所を、ロツクさんはまともに見ていないみたいだったけど何かそれだけでも後味が悪いし嫌な思いをするのは俺

だけじゃなかったはず。

もし見てしまったら間違はなく京の方が社さんを犯していると勘違いしちゃうと思っただし、体格的には社さんの方が良い体つきだから京の方が押し倒されるって事になるんだらうけど。

「そだな。」

俺が京にそう言つとパオが、泣きながら俺の顔を見ている。

デュオロンさんにしたらちよつと思いけど、本当に理性が飛びそうになったのは事実で京の目の前で理性が飛びそうになるのは避けなきゃ。

拳崇に説教されるのは本当に嫌だし、パオだつて普段の状況だったから説教されている対象だったから。

「大丈夫。大丈夫だから、落ち着いて……。」

俺が何とかパオを落ち着かせようと思っただけど、今度はパオが大声で泣き始めた。

「嫌だあ……！嫌あ……！」

パオが、叫びだしたのを止めようとした拳崇と俺そして京が落ち着かせようとした時パオがそれを拒否した。

ビックリしたのは事実だったし、俺だつて正直言つたらショックだよ。

パオは、死相つて言うか人の寿命が見えちゃう体質だから余計なのかも知れないけどいざ自分がかこう言う事になるかも知れないって思つたら気が気じゃないと思う。

「俺……死ぬの……嫌だよ。」

拳崇が、パオの様子がちよつと変なのを見て何かに気付いたらしい。「やばっ……。パオの奴……過呼吸になつてる。」

パオが自分の息が吸えなくなっている状況で、苦しがつているのを見て俺もちよつとオドオドしてしまっただけどパオがこんな苦しがつている姿を初めて見て本当にロツクさんと社さんの死はショックだったんだらうなあ。

そう思ったら、俺も犯人に対してちよつとどころかかなりイラつきを憶えているのは事実で本当は京とかに当たるなんて場違いだっと思っっているんだけど…。

「ぜえ…はあ…。」

声が出にくくなっているのは、パオの状態を見ていれば誰だって分かる。

このまま本当にパオの声が出なくなったら、拳崇だって困るはず。

パオは、拳崇の相方でパオにとって自分は理解者だっと思っっているから。

「大丈夫…。大丈夫だから、ゆっくり、ゆっくり息吸えばええから…。」

パオの背中を擦りながら、苦笑している拳崇の姿を俺は黙って見ていた。

「パオが死んだら、俺がデュオロンさんに何て言い訳したらええの？それに、パオは俺にとって大事な相方やから…。」

拳崇がパオの苦しがつている顔を見て、自分も泣きそうになっている。

「言い訳なんて…思い浮かばへんよ。俺が、パオに対して一度だって嘘なんてついてへんよ。第一、恋の事だっパオにも相談した事あったじゃん。ロバートさんの事だっ…アテナと別れた時だっ…。パオが書いてきたネタだっ、一度だっ「嫌だ。」なんて言ってないよ。俺だっ、草薙さんだっ…K'だっっているんだから…。だから、パオは1人じゃないよ。」

拳崇がそう言うと、パオの息が段々とゆっくりになってきた。

だいぶ落ち着いたって、思ったけどパオだっ正直辛すぎてこう言う事になっちやっただらうなあ。

「だから…今は、ゆっくり休みい…。」

安心したのか、一瞬笑顔になってパオは寝てしまった。

俺もちょっと安心しちゃったけど、京の事だって自分の事だつてまだたくさん問題はあある。

このまま京と付き合っていて良いのかとか、悪い方向にばっかり思ってしまったって気付いた時には京よりも俺の方がてんばってしまったって
いる状況にだってなった事がある。

自分がヘタレだって言っちゃえば、本当にぶっちゃけだけどロツクさんが本当に【優しくてカッコ良くて大好きなお姉ちゃん】だったから…。

「パオは本当に、恵まれているなあ…。何か、羨ましくなっちゃったよ。」

パオと拳崇の姿を見て、京が俺の顔を見て溜め息をしちゃっている。「何で？」

俺もなんでこんな状況で、トボけなくちゃならないって思ったけどこうしなくちゃ京だって落ち着かないって思ったから。

さっきみたいに、パオと京が泣き出してしまふのを黙って見てられないし俺だって嫌だよ。

俺の病状は今はある程度落ち着いているけど、いつ悪くなるかなんて分からないしもしかしたら京より早く死んじゃう事だってありえるんだから。

「俺も、K' といて楽しいって思っているし幸せだなあって思っているよ。でもさ、場の状態だったらしょうがないけどK' はいつも俺に構ってくれないじゃん。正直寂しい思いもしているし、リヨウに何か言われるって言うのだって分かっていたから。番組中だし俺だつて分かってはいるけど…だけど、俺だって本当はK' と話したいし場を盛り上げたいって思ってるよ。芸人としてじゃなくて、1人の人間として仲良くやりたいって思っているのにこんな事になっちゃったからどうしようもなくなっちゃったんだよね。」

一瞬俺もてんばってしまったけど、京の言いたい事は分かっていたし俺だって同じ事を思っていたよ。

でもさ、京と俺が番組中にイチャついていたらお姉ちゃんやシエル

ミーさんに何を言われるか分からないしからかわれたり【にやり】されるのが分かっているから…。

それに、客席のお客さんやファンの子達に【きゃーきゃー】って言われるのだからある程度予想しとかないと。

「K'は、Hの時だけ激しく求めてくるから体だつてだるいしHのたびに中に出してくるから…。だけど俺…K'の事、嫌いになんてなれないよ。」

泣き出してしまった京と更に泣き出してしまったパオを見て、拳崇が俺に話し掛けてきた。

拳崇だつて、パオがこうなつてしまったから慰めているつもりだけど正直拳崇だつて辛いはず。

「俺だつて守られる立場やけど、草薙さんもパオも守るから…。お前だつて、そのつもりやろうし俺だつて同じ事を思っているから…。」

拳崇も俺と同じ事を思っていたみたいで、どう考えたつて自分は『姫』だからって少しは諦めていた俺にしたら拳崇の方がまだまだ大人だつたらしい。

「それに、草薙さんだつてお前の事を大好きらしいし絶対にどんな事があつても草薙さんを離すんやないよ。」

そんな事、拳崇に言われなくなつて分かっているよ。

俺だつて京から離れたくないって思っているし、こんな状況で珠洲と別れるなんて考えられないから。

京は俺の事、どう思っているんだろうだなんて改めて聞かなくなつて分かっているからわざと聞いても何だかノロケとしか思われなないだろう。

だつて、俺が京の事を大好きなのはほとんどの関係者は全員知っているから。

ファンの子達の前でなんてお互い照れるから聞きたく無いし、まし

ては生放送で言ったりしたら取り返しの無い事になるかも知れないから…。

それに、京と俺は曜日が違うから会う事なんて無いだろうし京は八神さんと一緒に曜日だから余計に言えないだろう。

まあ、八神さんは芸人だし【ガヤ】だから【わーわー】させたいって言うのも考えているんだろうけど正直言われた方はマジで勘弁だ。当然自分の所にも、飛び火するだろうし…。

その時は、まだパオ自身が『姫』だなんて知らなかったし俺だって自分が『姫』の力だけで本当は『姫』じゃないって思っていたから。だけど、実際は俺自身も『姫』だったし力の方が強く来てしまったから記憶の方が追いつかなかったのもあったし…周りの人に迷惑ばかりかけてしまったから罪悪感さえある。

京にだって何度も八つ当たりをして、泣かせてしまった事だってあったし…。

「俺…自分の運命は、自分で生きたいんだ。」

本当はこれ、クリスが言っていたんだよね。

俺がクリスから聞いた時は、本当にそうだなあって思った。

クリスや社さん、シエルミーさんはオロチの血を引いているから。

社さんやシエルミーさんは、『主に表舞台に出ない』人だから自分が『オロチの血』を引いているのを自覚していたのかも知れないけどクリスの場合は自分が『オロチの媒体』でなおかつ『オロチの血』を引いている事を知らなかったから流石にシヨックだったんじゃないかなあ。

差別を受けられたりパオみたいに性奴隷にされたって聞いた時は、クリス以上に怒った時があったっけ。

まあ、今のパオに『性奴隷にされたんじゃないの？』だなんて言ったら絶対に泣くと思うし…。

しかも、『オロチの血』が目覚めないように自分で制御できるから大丈夫だって言うのも聞いた事もあるし…。

ただどクリスの場合は自分が『姫』と同じ立場だつて知つた時は、シヨックに泣き出したのだから知つてゐるから絶対に言えないんだよね。

俺も守られる立場だし人の事は言えないんだけど、辛いのは一緒だよ。

何せ自分の元彼でプロデューサーの社さんが、目の前で消えてしまったのをシエルミーさんと一緒に見てしまった事でシヨックの方は大きいと思う。

クリスは俺と同じ何でも背負い込むタイプだから、それはそれなりに苦労がハンパ無いのかも知れない。

しかもクリスの場合はオロチの『憑代』よりしろだから、社さんとシエルミーさんそして牧師さん達以外のオロチ一族の奴らにバレて無理矢理オロチに憑依ひょういされる可能性だつてある。

考えたくは無いけど、そうなつたら『姫』の封印解除以上に世界が一瞬で終わってしまうから。

「それは、あるかもね。Kの言う通りだと思うけど、それってクリスが言っていた事だよな？」

京には：珠洲ちゃんには俺が考えていた事が分かっていたみたいで、俺はちよつと言葉に詰まってしまった。

だつて、そのまま言われる事なんて無かつたし京だつて近くにいたから知っているのは当然だつて思ったし京の目がちよつとうるうるしているのが分かつたからあたふたしてしまつたのも事実で。

「京：鋭いよ。それに第一、そんな可愛い顔をして上目使いしないでくれ。」

俺が京の顔を見て、理性が爆発しそうになつたから慌てて京の体を引き離れた。

正直のまま京の顔を見ていたら、マジでヤバイって思ったし当然京が俺が何の事を言っているのかを理解するまでちよつと時間が経つ

てしまったけど。

「何で？俺相手だったら何度も理性を壊しちゃっても良いのに、気を使わないでよ。確かに今は、Hが出来る状況じゃないし俺だって分かっているから…。俺はK'の彼女で彼氏なんだから、信じなくてどうするんだよ。」

はにかんでいる京の顔を見ると、理性がヤバイって思ったけどそうも言つてられないのは京だつて分かっているはず。

ロックさんが死んでしまった時点で、ロックさんの相方であるデュオロンさんだつて気が気じゃないって思っているのも事実で。

ここで理性を爆発させたつて何にもならないって思っているから、どっちにしても京を泣かす結果になるかも知れない。

「K'は、俺の事…信じてないの？」

涙目で俺の顔を見てきたものだからちよつとう…つとなりながらも、京の顔を見直した。

「信じているよ？俺も京の事、大好きだもん。」

ここに社さんやロックさんがいたら、間違いなく『惚気だ』とか『幸福乙』とか言われそうだけど俺が思っている事は本当だから。

ロックさんの仇を取るつて決めた俺に、拳崇や京達も嫌とは言えないだろう。

まあ、必然的に京が涙目になるのは事実だけ…。

「良かった…。俺ね、K'があの時みたいに無理してるんじゃないかなあつて思つちやつたんだよね。前だつて俺の事で、結局は無理して倒れちゃつたじゃん。」

やっぱり涙目になってしまった京を俺は、ゆつくりと抱きしめた。

「だから俺、K'には無理させたくないんだよね。お互いの病気の事だつてあるし、俺はK'が死んだら生きていけないよ。」

涙目で笑顔になっている京にはちよつと悪いけど、理性が壊れそうになつてしまつているのは事実で…。

肝心の京は、俺の体の変化に全然気付かない。

多分ここにお姉ちゃんがいたら、間違いなく大騒ぎするんだろっなあ…。

腐女子だしB L好きだから、当然【ガヤ】るのは事実なんだけど。

「K、…、ちよつと…当たってるって…。」

涙目になったまま照れ出した京を見て、俺はハツとなる。

拳崇には思いつきり横目で睨まれたし、悲しい思いをしている状況のパオに余計な気を使わせる訳にはいかないから。

「マジでここでHなんかしたら、かなりの場違いにも程があるで。」

そんなの、分かってるよ。

確かに京が感付いてしまったのもあったし、さっきみたいに京を傷つけさせるのも嫌だから。

そんな事しちゃったら、彼氏としてマジで最低だから。

理性はちよつとやばかったけど、そんなに爆発させる訳じゃないし社さんと違って手当たり次第って訳じゃないから。

なんだかちよつとだけだけど、社さんの事を思い出したらむかつきよりも悲しいのが先に来てしまったんだけど…。

「そんな事…言わなくなつて…良いじゃん…。俺だって、そんな場違いな事したくないのに…。」

ちよつとへたしてしまったのもあったし、拳崇の言葉を聞いたら口ツクさんがいたのを思い出して俺が号泣してしまつたから拳崇も抱きついたままの京も驚いてしまつた。

一応タイトルだけは、春模様にしたいなあって思って名づけました。桜の花と書いて、おつかと言います。ちなみに、流れ桜花の河と言うのは桜の花がハラハラと落ちる様子の事を言います。

.....

次回予告

作者「シリアスだなあ〜。」

京「何、しみじみしてるんだよ。」

作者「いやあさ、自分でもこんなシリアスになるなんて思わなかったからさあ。」

京「自虐して、どうするんだよ。」

次回、ちょっとスピノフで。番外編 - 2 です。

ロックさんと社さんが、目の前から消えてしまうちょっと前。

俺と京はパオと拳崇と一緒に、買い物へ来ていた。

まさか、その何時間後にあんな悲しい出来事が起こってしまっなんて…。

俺達は、まだその事に気付きもしなかった。

パオのために、俺らは車に乗り込んでドライブという名目で買い物に出かけた。

もちろん、パオの相方である拳崇やロックさんも一緒だ。

あんな事があつたせいとかパオの元気は無くなりかけていて、相方である拳崇もちよつと心配だつたらしい。

俺も、京とはしばらくデートつて言うものをしてなかつたから京だつて退屈だつたらしいし…。

「すいません…。俺なんかのために、こんな時間まで作ってもらつて…。本当だつたら、草薙さんと2人きりだつたはずなのに…。」
正直、京と2人きりだつたら絶対にマスコミに狙われるし後の事も考えたら京だつて嫌なはず。

それに、パオがヘビイさん達に犯されてからそんなに時間が経つていないしあのままだつたらパオが辛いのも分かっているから。

「良いんだよ。俺だつて、人数が多い方が良いって思ったしさ。それに、パオだつてあのままあそこに居るのも辛かつたんだろ？」

パオがヘビイさん達に犯された場所は、俺らが居た楽屋からそんなに離れていないから騒ぎが起こつた時はすぐに駆けつけた。

だけど、その事を知らないデュオロンさんに「別な人と関係を持つた」つて言うのをばれたらつて事も考えたらパオだつて気が気じゃない。

バオとデュオロンさんは、付き合つてそんなに経っていないしデュオロンさんの方から「好きだ。付き合つてほしい」つて言ったのは事実だから。

周りからしてみたら、『美男美女カップル』つて思われているらしくてパオもその話になるとちよつと不機嫌になるらしい。

まあ、京のマナージャーであるシエルミーさんやお姉ちゃんに『腐

女子のかっこうの目の保養』って言われているみたいだけど…。

「だからさ、今日ぐらい気使わなくなつて良いんだから欲しい物何でも言えよ。俺らだつて、パオがそんなにブルーになつて居るのを黙つて放つて置けないつて思つて居るんだから。」

これは、本当。

先輩としてじゃなくて、友人として心配しているのは事実だし京だつて俺が車を運転している時にボソつと俺に言つていた言葉だから。

まあ、あんな近い距離で京の可愛い顔を見れたから理性が落ちそうになつたのは俺の勝手だけと思つていた事は同じ事だつたから安心はしていただよな。

拳崇が、『買物にいかへん？』って言つてくれなければパオだつてこんなに元気にならなかつたと思つたしまだパオ自身も気を使つている状態だつたからつて言うのもあるんだよな。

「こいつの言う通りやで。今日ぐらい、弾けなくてどうするん？いつもやつたら、俺が暴走しそうになつて居る時に『ストップパー』として止めてくれるのに。」

「俺だつて、最初はビックリしたよ。ヘビィさんは、俺の先輩だしパオにとつても尊敬する先輩だつたから。」

京が俺に寄り添つて、パオの方を見ている。

それだけでも理性がやばそうになつて居るのに、パオも目がウルウルしているから【あーもうっ】つて言う状態になつてしまふ。

「K、…。正直、【たまらんなあ〜】つて思つて居るんじゃないよな。」

ロツクさんに言われて、ちょっとドキつとしてしまつたけど事情が事情だから仕方ないじゃん。

「やっぱりな。お前は分かりやすいから、すぐに顔に出やすいんだよ。」

「本当に、K、つて変態やなあ〜。」

「う〜わ〜。」

ロツクさんのせいで、思いつきり寒くなつたじゃん。
第一、社さんや八神さんと一緒にしないで下さい。

「何、サカろうとしてるんですか？相手が違うし、俺は嫌だから…。
それに、まだあの時の事を思い出したら辛いつて言うのに…。」
ほら。

パオにも、変な目で見られたじゃんか。

「だけど、K'さんはそんな事しないつて思っているし後輩まで犯
されたら俺の感情なんてボロボロだからな。」

パオが、そんな風に俺の事を思ってくれているなんて本当に知らな
かった。

「この場所で、【公開営み】なんてしたら最悪ですもんね。」
多分、俺と京がここでするつて思っているらしくて京も何かに気づ
いてしまつて真つ赤になつてしまった。

「本当に、K'が理性爆発させたらどこでもする気にいるから困
るんだよね。俺は、恥かしいから嫌だつて言っているのに。」

京の気持ちも、ある程度分かるよ。

「だけど、あんな顔をされたら誰だつて理性爆発ぐらいさせるよ。」

「それより、今日俺、肉料理食べたいんで肉系統買つて下さいね。」

笑顔で、こつち見ないでくれ。

京と一緒に、理性が爆発しそうなるから。

「パオの機嫌がちょっとぐらいだけど直つて良かった。」

機嫌が直らなかつたら、どうしようかなあつて思っていたところだ
し拳崇にも説教されるのが嫌だから。

「K'。草薙さん。何してるんですか？」

あーもう。

あーもう。

何で、可愛いですか？

思わず、へビイさんと同じ事になったらどうしようって思ったけど京が居るし京には嫉妬させたくないしここで大喧嘩したって何にもならないから。

「パオ…お前、可愛すぎるで。」

拳崇も、理性がヤバイ事になっているらしい。

「可愛いって、言うなっちゅーのっ！」

拳崇と俺、パオのやり取りを見てロックさんが呆れた顔で京と話してる。

「本当に、あいかわらずだよな…あいつらは。」

「仲が良いって事だから、良いんじゃないの？俺だって、何か幸せだなあって思っているし。」

京の言葉を聞いて、ロックさんも溜め息をついている。

「お前ら。あまり、【ガヤ】るんじゃないよ。」

「分かってるよ。」

本当、いつまでもこのままが良いって思ってた。

ずーっと、ずーっと平和が続けば良いって思っていた。

犯人は、まだ捕まらないけど。

だけど…確実にロックさんとの別れが近づいていたんだ…。

32話のスピノフでございます。
ちよつと、クッションをおかないとドシリアスなんでダメみたいで
す。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

次回予告

作者「いんやあゝ。言い訳じゃないけどさ、シリアスをいつぺんし
てみるとさあゝ。本当自分も、まだまだだにあゝって思うわけよ。
しかも、恋愛絡みだから余計だし…。」

K「自業自得じゃねえかよ。作者が、問題発言してんじゃねえよ。」

拳崇「そやで。」

作者「別に、問題発言じゃないけどさ。本当に、そう思っているわ
けよ。どつちかと言ったら、自虐発言って言うか死亡フラグ立ちま
くりだけど。」

K「拳崇」……。」

次回、第34話。 天空の王国 } t h e s k y a k i n g d
o m }

..... 天空の王国 } the sky a kingdom }

拳崇がシヨックで倒れてからは、俺も京もちよつとはてんばった。

だって、いきなりの出来事だったし俺だって正直言ったらシヨック
だったから。

だけど、京を守りたいって思ったのは事実だし俺が守らなかつたら
最低だって思ったから。

俺は、京の事が好きだし…珠洲の事を守りたいって思ったから…。

俺が、あの場所で泣いてしまっただけから10分以上経って俺とパオ…
そして京の3人だけになった。

あの後俺の部屋に戻ってからすぐに拳崇の携帯にマネージャーさん
から電話があつて、ピンの仕事を入れてしまつたつて言つたからパ
オを置いて出かけてしまつた。

パオだつてそう言う状況じゃないのだつて、拳崇には良く分かつて
いた事だつたしマネージャーの人にもちゃんと説明していたから。
パオがヘビィさん達に犯されてショックを受けているのに、更に追
い討ちをかけるように目の前でロックさんと社さんが死んでしまつ
た事。

ダブルのショックな事があつたから、当然のようにパオだつてショ
ックで倒れる寸前まで行つてしまつたんだから。

今だつて、俺や京のどっちかがボケないとパオだつてつつこめるつ
て言うか元氣にならないと思つたしあんなに凹んでいるパオを見る
のはいい加減嫌だつたから。

それに俺だつて、氣になつている事があつたから…。
拳崇がパオを置いて仕事へ行つた時だつて、パオの奴…今にも泣き
そうだつたから。

それは、パオがデュオロンさんとキスしたのやつて事。

正直、からかう事になつちゃうんだけど俺だつて本当に氣になつて
しまつているから。

だつて、事務所の中で俺の目の前で告白をしてしまつたし女性芸人
のメンバーはその光景を見て【キヤーキヤー】って騒ぎ出していた
から。

まあほとんどが【腐女子軍団】だつたから、からかわれるのが事実
だし…。

「あのさ…。パオはデュオロンさんと、キスした事あるの？」
京がボケて、パオの顔を見ている。

俺も理性が少しだけ落ちそうになって、黙って見ているだけになっ
てしまった。

「普通だったら怒っても良いんだけど、草薙さんの方が先輩だし泣
かしたらやばいって思っているから言えないんですけど…。」

京の号泣した所を見てしまったのもあつたし、肝心の京の顔がおと
ボケているから言えないらしい。

それに、俺自身もパオもさっきまで泣いていたから余計に言えない
のだったであつたんだろうし。

「『怒っても良い』って自分で言っときながら、真っ赤になってい
る時点でパオだって説得もあつたもんじゃ無いけどね。」

俺がニヤニヤしながら、からかったもんだから更にパオの顔は真っ
赤になって怒り出した。

ちよつと京の時と立場が違うんじゃないかね？って思ったけど、仕方な
い事か。

元々俺が、パオをからかう為に言いたかつた事だったから。
気になったのも、事実だしね。

「何だよ、ニヤニヤしながらからかうんじゃないやねえよ。」
真っ赤になっているパオも正直可愛いなあって思ったけど、機嫌が
悪くなっているからまともに言ったらマジでキレられる。

説教魔だから、長々と説教されるのは事実だし自業自得だから何に
も言えないけど俺だって悪いもん。

「だって、事実だろ？俺が、嘘が言えないの知っているだろうし嫌
だったら何で事務所で告白された時『もうちよつと考えさせて？』
って言えなかつたんだよ。」

凶星だったから、パオだって言えなくなってしまうたし京だってち
よつとどころかかなりオロオロしてしまつたから。

それに、このままからからつていたら京だって結局の所は泣き出し

ちやうつて思ったから核心の言葉は言えなかったんだ。

パオだつていつまた機嫌が悪くなったり、泣いてしまったら最悪だつて思ったし泣いている所をデュオロンさんに見られたりでもしたらパオのかわりに説教されちやうから。

しかも、パオとは違つてめっちゃ怖いって噂が一時期出ていたのも知っていたし…。

「ロツクだつて、社さんと『幸せになりたい』とか『一緒に居たい』とか言っていたのにあんな事になっちゃって俺だつてシヨツクだよ。確かに年は違うけど、俺の方が先輩だししっかりしなくちゃならないつて思っていたけどロツクと出会つて自分だつて変わつてこれなんだ。ロツクが社さんと付き合うつて時に最初は『ダメだ』つて言つてたけど、結局はロツクが『自分で惚れた相手』が社さんだつたつて知つたから仕方ないつて思つたんだ。俺だつて社さんが『トラブルメーカー』で『大の浮気性』だつて言う事は知っていたし、社さんが前にクリスと付き合つていた時だつて何度もクリスが泣いてしまった所を見ていたからさ。だけど、社さんだつてロツクと付き合うようになつてからは浮気したなんて言う話聞いてないしその点では幸せだつたのかなあつて思つたんだよね。」

そう言つと、近くにあつた椅子に腰掛けるパオ。
…ちよつとは、落ち着いたのかなあ？

「確かに、俺だつてシヨツクの方が大きいけど犯人だつてまだ分かつていないし奴らの目的だつてまだ鮮明じゃないんだから安心は出来ないよ。しかも事務所の会議室で、無理矢理関係結んだくせに。」

何で、俺もそこでチャチャ入れるかなあ。
本当はそんな事触れたくはなかったのに、自分が『空気読めない』のは分かつていたから自然と言つてしまつたらしい。

自分が【ガヤ】だつて事も分かつていたし、現に行動がそうだから怒られたつて当たり前だろうなあ。

せつかく落ち着いたのに、またぶり返したら最低だって思うし京にだって横目で見られるのが分かっていたから。

第一、パオとデュオロンさんが事務所の一室でHしたって俺には関係無い事じゃん。

「お前の言う事にも一理はあるかも知れないけど、何でお前がそんな事知っているんだよ。」

真っ赤になって怒り始めたパオの顔を見て、少し理性が落ちそうになったけど何の事だか分かったのか更に真っ赤になってしまった。

「お前：もしかして、聞こえてたのか？」

聞こえていたって言うか、思いつきり響いていたからあそこにいた芸人は全員知っているんだろうなあ。

「あの会議室だけ、防音じゃなかったし声も色っぽかったし…。うちのお姉ちゃんなんか、見ててにやにやしていたんだからな。」

これは事実だったし、マジでパオの声が色っぽかったから…。

「だって、パオのイキ顔は可愛かったし声だってエロかったしさ。

それにパオって舞ちゃん程じゃないけど結構胸大きいんだなあって思ってたさ。」

今の俺の姿だったらマジで【セクハラ】だけど、今は仕方ないよね。「本当、お前：訴えるぞ。」

青筋を立てながら、怒り出したパオを見て本当にキレさせちゃったなあって思ったけど俺だって気になっていた事だったから。

「セクハラにも、程があるぞ。第一、見ていたんだったら何で…邪魔しない。」

邪魔したい気持ちはあったんだけど、俺が事務所に行った時にはすでにデュオロンさんとパオはHしていたんだし本当だったらパオだって邪魔してほしくなかったはずだと思って黙っていたんだ。

それに、パオは自分の腕を上上げた状態で何度もイッたのは事実だしデュオロンさんに散々中出しされたのだって嘘じゃない。

「だって、面白いじゃん。芸人的に、【おいしい】と思ったしさ。」

本当にからかう気でいたから、別に良いんだけど本気でさっきキレていたからそんなにからかえないのも分かっていたから。自分の事だったし見ていたと知っちゃったから、怒れるにも怒れなくなってしまうたらしい。

「『面白い』って、お前も……。お前がからかうのは、分かっていたよ？ だけど草薙さんだって頬を膨らませて、こっちを見ちゃっているんだぞ。」

パオに言われて京の方を振り向いたら、そこにはほほをぶくつと膨らませて涙目になっている京の姿を見えた。

それだけでも理性が飛びそうになっているのに、京は俺に抱きついた。

「もうっ！ あれ程、パオをからかっちゃダメだって言ったよね？」
それはパオにとって俺が事務所の後輩だからって、怒っているんだよね。

「俺らだって、防音の会議室でいつもK'の方からHしてくるじゃん。いつ、誰かに見られるかドキドキしてるんだね。しかもその時に限って、奥で中出ししてくるから俺：体もたないよ。」
顔を真っ赤にさせた京も、何だか可愛いなあ。

俺と京の体格の違いは、誰から見たって京の方が細い。
しかも俺は、陸上をしていた元体育会系だったから体力の違いだって大きな違いがある。

体力の違いだけだったら、デュオロンさんだって同じ事が言えるんだけど……。

パオも体育会系だったし野球をしていたらしいんだけど、やっぱり柔道をしていたデュオロンさんには体力的に負けるって自覚していたらしい。

「うづくつ。」

言葉に詰まってしまった俺に、さっきまでからかわれていたパオが

にやりした。

「ざまあみる。K'…お前だって、人の事言えないじゃんか。でもさ、草薙さんの言葉を言葉を借りるならさ…デュオロンさんだって見かけに寄らず激しいんだよね。俺…デュオロンさんと付き合い始めてから、ずっとHでまともにイカせてくれる事なんて無いんだよね。いつも、Hの時中に出してくるし…。何か愚痴みたくなっちゃったけど、デュオロンさんの事信じているし大好きだよ。K'…だって、草薙さんの事…珠洲ちゃんの事大好きなんだろ？」

そんなの、決まってるじゃんか。

「うん…。俺…京の事、大好きだよ。」

何で俺もそこで、『おバカモード全開』になっっているんだよ。

本当は『大事にしたい』とか『守りたい』って、素直に言っちゃえば良いのに誤魔化してどうするんだよ。

パオに、『京の事…俺が死んだら、頼むな。』なんて言える訳無いよ。

パオにしても京にしても俺の病気の事を知っているけど、まさかここまで病状が進んでいるなんて思わなかったんだろうし知らなかったらパオにマジで説教されるのは必然だったから。

それにパオは、嘘が嫌いだって言うのも知っているから余計なんだよね。

京だってショックで倒れてしまっと思って思ったし、あまり無理出来な
い思ったから。

「何…おとぼけて言ってるの？まあ、そう言う所もK'…っぽくて大
好きだよ。」

はにかんだ京の顔を見て、俺は一気に真っ赤になった。

「はいはい。幸福乙。」

あれ？からからわれた？

「そっくりそのまんま、パオに返すよ。」

俺がそう言つと、赤面しながらパオが軽く睨んできた。

分かりきっていた事だったし、自分だってからかわれたんだから当然と言っちゃ当然だけど。

京もはにかんだまま、俺の方を見て照れてる。

その顔を見ていると、マジで救われる気がして守りたいって思う。

京に悲しい思いをさせる事になってしまっても、少しぐらい京の側にいたいって思えるから。

俺の残り少ない命を京と一緒にいたいって思えたから。

まあ、パオの照れている顔を見たら自分なりに認めたって事になるんだろっけど。

「だって、デュオロンさんの『大き(デカ)さ』を考えて俺の体型見たらさ…絶対に…無理だろ?デュオロンさんに貫かれていると、頭の中が真っ白になって何か体中が熱くなってる…さ。しかも、Hの度に出されて…。俺:クリスみたいに妊娠するの…怖いよ…。』って言うっててもゴム無しでして来るから…。」

あの時にドア越しに見たパオの顔は、何かエロくて可愛いかった。

「そう言っている割に、あの時だってパオ…めっちゃ感じてたじゃん。」

俺がからかうと、更に真っ赤になったパオ。

「感じてたんじゃなくて、苦しかったんだよ。」

ちよっと涙目になってしまったパオを見て、理性が壊れそうになっただけど何とか落ち着かせて俺は更にからかう。

「どっちにしても、パオの顔だって声だってすごくエロかったよ?」

エロかったのは、本当の事。

女の子以上に可愛い顔してて、あー言う場面を見てしまったから余計にそう思っただけ。

「俺…初めてで…いきなりあんな事されたから、自分の気持ちが悪くちやぐちやになっちゃって…。多分、デュオロンさんも俺も…途中で訳が分かんなくなってたんだと思う。」

デュオロンさんはともかく、受け止めるパオ側からしたらキツイんじゃないかったのかなあ？

パオにとって、相方の拳崇に『営み』を見られるのはかなり抵抗あったみたいんだけど当然仕事の合間で事務所に来ていたからパオにしても理性を失う事になったんだと思うし。

まあ、それ以上にデュオロンさんが激しく攻めていたって言うのもあったみたいだけど。

「拳崇に見られて恥かしかつたのもあったし、もしかして後でロケバスでからかわれるんじゃないかと思っちゃったんだよね。それに、俺の声が出なくなるまでデュオロンさんは攻めてきたから思いっきり壊れちゃったし。」

何か照れくさくなつた拳崇は、パオがデュオロンさんの後に出てきた時に謝っていたみたいなんだけど…。

パオは、それどころじゃなくて体をガクガクさせていたっけ。

「でも、拳崇の事は信じてるよ。あいつを【お笑いの道】に引きずり込んだのは俺の方だし、相方はあいつしか考えられなかったから。」

自分より年上で本当は年下の自分がただ騒ぎたかつただけだって、思われたらパオは自己嫌悪になつてるみたい…。だけど、誰もそんな事思つてないよ。

「拳崇はからかう奴じゃないって言うのは分かっているけど、でもやっぱり複雑だよ。拳崇とアテナちゃんが前に付き合っていて別れるって言う時に、俺は何もしてあげなかったし酷い事したなあって言う思いだつてあるんだから。」

パオの言いたい事は、俺にも分かる。分かつただけで、本当に自己嫌悪に陥っているなあ。

まあ、責任を感じているのも普段から見れば良く分かっている事。

「でもあいつはそう言うのには気にしないって言うか楽道家だから、

気にしないんだけど俺だってコンビ組んで長いからさ良く分かって
いるつもりだけど…。だけど、その『楽天家』だって言うのが少し
俺にとつて胸が痛いんだよね。本当はあいつ自身無理してるんじや
ないのかなあとか思っちゃって、あいつに限ってそんな事はいえ
ないのに。」
ちよつとブルーになりかかっているパオを見て、俺も少しブルーに
なってしまう。

パオは俺にとつても京にとつても、大事な後輩だし後輩が困ってい
るのを黙って見ていられないよ。

それは年上で、相方の拳崇だって同じ事だと思う。

「俺、拳崇にとつて必要なのかなあ…。」

完全にブルーになっていているパオの顔を見て、俺が少し声を荒げる。

当然近くにいる京もビツクリして、俺の顔を見ている。

「何、言っているんだよつ！お前が拳崇の事、必要だと思わなく
てどうするんだよ。相方でも、お兄ちゃん代わりだって思っている
のはお前自身じゃないのかよつ！！」

もちろん、拳崇が芸人をしていなかったら俺らと出会う事なんて無
かつたんだろうし俺だって拳崇とこんな話せなかつたんだと思う。
もちろん、パオだって京だって俺と同じ事を思っているはず。

「K'も、言い方キツイよ？もう少し、優しい口調で言つてよ。俺
だってパオだっていきなりK'が声荒げるからビツクリしちゃった
じゃん。」

京に対して俺は全然怒んないのもあつてか、京にしたらちよつと俺
が怒るつて言うか声を荒げるとビツクリしてしまうのは当然の事で
「ごめん。だけど…あまりにもパオが優柔不断だったから、ちよつ
と腹が立っただよね。」

「だからってそんなに怒る事、無いんじゃないの？パオだって、ト
ラウマ抱えてるんだから本当はキツイと思うしK'が頭ごなしに怒

「つたと言えるにも言えないよ。それに、泣き出したらどうするんだよ。」

京の言う通りだって思ったけど、泣かせるまでいくつもりなんて無かったし肝心のパオが泣くどころかビックリした顔だったからこれはこれでほっとしたのかなあ。

俺はもともパオをからかうためだったのに、結局は俺自身が軽くイラついてキレてしまった。

キレるのなんて本当は、理不尽過ぎるし場違いだけどイライラが止まらなかつたのも事実だったし京にも迷惑かけちゃった。

「ごめん。俺も、ちよつと八つ当たりしちゃった。だけど、パオのビックリした顔も可愛いなあ。」

俺がそう言うと、近くにいた京が頬をふくらませてしまう。

「K'：ナンパする気だったら、止めた方が良くぞ。草薙さんがさつきから思いつきりスネてんぞつ。」

「ふんだつ。パオにナンパするんだつたら、俺：K' と別れるもんつ。」

パオも可愛いけど、頬をふくらませた京も可愛いんだよね。

「ごめん。だけど2人共、俺は可愛いよ。」

「『可愛い』言うな。この年齢としで、言われたつて嬉しくもねえよ。」
あれ？もしかして、喧嘩売られた？

「さすが、抱かれない芸人・1位』なだけあるなあって可愛いしカツコいいし。」

俺がそう言うと京がまた、頬をふくらませている。

「ふーん。K' っつて、パオの事そう思ってたんだあ。考えている事は、七枷さんとか八神と一緒になんだあ。」

ちよつと嫉妬しているのは俺にも分かつたし、このまま京をスレさせたままにいるのも何か後味が悪い。

可愛いのは事実だし、京だって仕事以外で俺にしか見せていない仕事草をしてくれるから可愛いくしょうがない。

「パオは、後輩として可愛いつて思っているんだよ？それに俺が本当に大好きで大切なのは、京だけだよ。」

にこつとしている俺を見て、京の機嫌も直ったらしい。

「本当に、そう思ってるの？」

京が首をかしげた状態になったけど、いじけられるよりかはマシだつて思ったから。

「うん。嘘なんて、一度だつて京についた事無いだろ？」

俺が低音ボイスで軽く言つたもんだから、京の耳が真っ赤に。

「ついた事なんて…無いけどさあ…。(ゴニヨゴニヨ)」

真っ赤になりながらゴニヨゴニヨと話す時の京も、何か可愛いくて理性がヤバそうになるけどそんな事も一てられないしパオにも説教されるのがオチとして残っているから。

「何か、こつちの方で嫉妬しそうになるんだけど。」

ひやかしなのか苦笑なのか分からない状況で、話されても俺は困る。「羨ましくなつた？」

正直、パオの事を俺はからかいたかつたのに逆にからかわれてどうするんだよ。

京といちゃつくのはいつもの事だし、パオだつて何回も見ているんだと思う。

だけど、からかわれるのなんて…何か照れるなあ。

でも、パオに俺が照れているのを隠すためにはちよつとぐらい誤魔化したつて良いよね。

すぐにバレちゃうのは、当たり前だけど…。

「別にただ、K…お前程じゃないけど草薙さんも相当喜怒哀楽が激しいんですね。」

でも、反応的にパオが耳まで真っ赤になるなんて想像出来なかったからちよつとは驚いてる。

デュオロンさんもサプライズ好きで、タイプが俺とほとんど一緒だ

からって言うのは知っているけどパオにとっては不意打ちだと思っ
たらしい。

タイプが一緒だってデュオロンさん本人に言ったら、ちよつと怒ら
れそうになるけど仕方ないよね。

パオも俺も、不意打ちには弱いんだから。

「喜怒哀楽が激しいって、どういう事だよお。(ぶくう)」
うわっ。

すごく、可愛い…。

京が喜怒哀楽がほとんどなかったら、俺だって嫌だし何かすごく悲
しい。

可愛い京がいるから、俺だって救われた事だってあるんだよ？

大好きな人といられるって、こんなにも楽しい事なんだなあって思
ったのは京がはじめてだから。

パオだって、デュオロンさんと付き合ってから性格だって丸くなっ
たと思っっているし前って言うかヘビィさん達に犯された時なんか前
みたいに凹みやすくなってしまったから。

相手が後輩だったら、キレるって言うか説教をするのが当たり前だ
けど先輩だからそんな事も言ってられないのもあると思うし。

まあ、パオが京をからかうのだって俺がパオをからかったから逆襲
って形になっちゃったし京の可愛い顔を見ただけでも少しは感謝
しないとな。

..... 天空の王国 } the sky a kingdom }

はい、特に意味がないです。(^ O ^)

もともと空の風景が好きで、ここの言つのがあつたら良いなつてちよつと想像してつけたタイトルでございます。

ちなみに、想像してにやりモードになっている時知人から思いつきり横目で引かれました。 : orz

次回予告 しがいよ

パオ：何で、俺がからかわれなくちゃならない訳？

K'：仕方ないじゃん。俺だって、パオがデュオロンさんと付き合っているの知つててどこまで進んでいるか知りたかつたし。

珠洲すず：K' がからかつたから、俺までからかわれたんだからね。(

真っ赤)

作者せみせ：本当、どっち見ても幸福しあわせ乙おだなあ...。 orz

次回、銀色の空が輝く } silver shine of sky
y . }

.....銀色の空が輝く　　silver shine of sky　　

デュオロンさんの事をからかったら、逆に京がからかわれた。

まあ、俺だっけからかったんだしこうなる事は分かっていたし俺だっけちよつとした不意打ちだったからお互いにビックリしたんだ。

だけど、いつまでもこの平和な日々が続けば良いなあって思ったけど…。

社さんとロツクさんがあんな事になって、俺だっけショックだったしまだ犯人の事だっけ目的だっけ分かっていないから…。

パオにからかわれた京が、真っ赤になって俺に寄り添った。

ちよつと感謝はするけどからかわれるのは、慣れてないけど俺だつてからかったから人の事言えないのは分かっていたしデュオロンさんにちよつと睨まれるのだって事実だったから俺も苦笑してしまつた。

「京？もしかして、パオがからかった事：照れてる？」

俺が、京の顔を見るのをちよつと必死になって見ていると京自身が俺の顔を見てきた。

「ちよつとね。K' がパオの事からかうからこう言う事になったんだし、ちゃんとパオに謝つてよ。」

可愛いなあ…本当に。

俺が京を抱きしめたつて言う状況になったら、さっきのパオみたいにかかわれるのが分かっているしまた京が真っ赤になるのが分かっているから黙っていた。

つて言うか、いちやつきを見てしまったパオにして見ればこうしている時点でも『幸福乙』^{あいわせ}なんだろうけど。

「パオ…ごめん。」

俺がもう一度謝ると、今度はパオの方が照れだした。

「だから、謝つてもらわなくて良いよ。俺にとってK' は芸歴では先輩だし、ほとんど年かわらないんだから。」

「そっか？」

「第一、俺が辛かった時に一番に相談してもらったのはK' だから感謝しているのはこっちの方だよ。拳崇だつて、俺がこう言う状況になった時あたふたするしか無かったから。」

あたふたつて言うよりも、てんばつていたつて言った方が正しいと思えんだけど。

拳崇にしても、バオや俺にしても不意打ちには弱くててんばっていったって言うかあたふたって言った方が正しいし…。

「そう言う…バオお前だって、不意打ちに弱いくせに。」
俺がちよつと自虐気味にすねても、バオには逆効果で。

「お前、草薙さんだったら話は分かるぞ。でもお前みたいのがすねても、返って痛々しいだけなんだよ。」

バオに言われて、逆に俺がちよつと凹む事に。

「なんだよ。それ?!」

俺が頬を膨らませてしまったものだから、近くで真っ赤になっている京もびっくりしたみたいで。

「自業自得だよ。最初K'がバオをからかったんだから、思いつきりつつこまれても仕方ないんだよお。」

そんなのは、俺だって自覚していたよ。

自覚していたから自分で、あんな自虐発言したんだから。ある意味、死亡フラッグ立ちまくりだけど。

京の言っている事は事実だし、自分でも悪いって思っているんだから。

「やっぱお前より、草薙さんの方がしつかりしてるや。」

自分でもしつかりしていないって言う自覚はあるけど、改めてそれを言われると凹むって言うか気分が悪いんだけど。

確かに、京の方が年上だし芸歴だって俺よりも上だ。

だけどさ、俺だって京の彼女で珠洲の彼氏なんだよ？

「(むづ)」

ただ今は、京に対してもバオに対してもさっきみたいにキレル訳にはいかないって言うのも自分でも分かっている。

だからこそ、すねる訳じゃないけど大騒動になるのだけはマジで勘弁だから。

「バオだって、何K'をからかっているのさ。K'の方が確かに最初からかったから、からかったって良いんだけど凹んじゃったよお。」

「京のはにかんだ顔を見ると、理性が落ちそうになる。自分の自制が何とか効いているから、落ちる事はないんだけど…。」

ここで、自分の理性が落ちたりしたらヘビィさんとやっている事は一緒にデュオロンさんにもパオの相方の拳崇にも説教をされるのが分かっているから。

さっきまでハラハラしていた京だって、安心して俺の顔を見ているハラハラしている京の顔も、安心して京の顔もすごく可愛いくて大好き。

京の安心している顔を見ていると、俺だって安心するんだよね。

…って、惚気ノロケかなあ。

「俺だって、悪かったって思うよ。お前だって自分が不意打ちに弱いって言うのを知っているのに、からかったのも事実だしさ。」

「だからって、俺の前で惚気ノロケしないでくれ。羨ましいって思うし、草薙さんのあんな可愛い顔を見たらお前と同じくこっちだって理性がやばいんだよ。」

そんなの、関係ないじゃん。

…って、言っただって俺もパオをからかったから何の説得力もないんだけど。

俺は、京の彼女だし彼氏だからって言ったら惚気ノロケどころか束縛みたいに思われちゃってちよつと重いなあって自分でも思っちゃうけどパオの場合案外うちのお姉ちゃんと一緒に【腐女子】なんじゃないかなあ。

今のパオに言ったら、マジで説教だしもしかして泣き出したりでもしたら最悪だって自分でも自覚してる。

自覚しているから、まともになんて言えないんだよ。

「もしかしてお前…俺の事、ウィップさん達と同じ【腐女子】だって思っている訳じゃないよなあ？」

パオが、俺の顔を軽く睨んできた。

凶星だっと思って思ったのも事実だったし、説教されるのも覚悟していたんだ。

「やっぱりな。拳崇から聞いてたけど、考えてる事分かりすぎるんだよ。」

「だって、『理性が飛びそうになる』って言ってたじゃん。」
俺も少しだけ、すねるって言うか涙目になっちゃったけど拳崇から言われたんだっいたら何にも言えないや。

「確かにそうだけど、あそこまで腐り切っていないからな。」
お姉ちゃんが聞いてたらって思ったら、ちよつとゾつとしちゃったけど自業自得だから仕方ないんだよね。

・ ・ ・ ・ ・ 銀色の空が輝く (silver shine of sky .)

銀色も空が輝いているのも、大好きな作者です。

どっちかと言ったら、32話ぐらいのシリアスを目指したい(?)

んだけど元々がギャグ気質だからふざける所はふざけてシリアスになっただけにシリアスにしようかなあって思っています。(気まぐれだっけ言っちゃえば、そのまんまだけど...)。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9024/>

夢見頃に星を眺めながら ~ had a dream a star look at. ~

2011年11月15日21時32分発行